

クラップスタナーは2度鳴る。

パラプリュイ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

自殺した渚は思いがけず2度目の人生を手に入れた。暗殺の才能を生かせなかったことを後悔した渚は全てを変えるために殺し屋になることを決意する。

これは潮田渚の2周目を生きる少女の話である。

# 目次

原作前

2 周目のはなし。 | 1

優等生のはなし。 | 5

頼みごとのはなし。 | 15

五英傑のはなし。 | 29

勉強会のはなし。 | 40

変化のはなし。 | 52

無関心のはなし。 | 66

潜入のはなし。 | 73

絶望のはなし。 | 84

堕天使のはなし。 | 97

E組1学期

始まりのはなし。 | 112

暗殺のはなし。 | 123

猫のはなし。 | 131

カルマ君のはなし。 | 143

大人のはなし。 | 161

集会のはなし。 | 175

中間テストのはなし。 | 189

修学旅行のはなし。 1時間目 | 204

修学旅行のはなし。 2時間目 | 217

好奇心のはなし。 1時間目 | 231

好奇心のはなし。 2時間目 | 239

律のはなし。 | 251

日常のはなし。

262

異質のはなし。

277

触手のはなし。

290

球技大会のはなし。

299

お出かけのはなし。

314

訓練のはなし。

325

父ちゃんのはなし。

336

プールのはなし。

349

計画のはなし。

367

実行のはなし。

376

期末テストのはなし。

1時間目

392

期末テストのはなし。

2時間目

409

【番外編】イトナの気持ち。

421

期末テストのはなし。

3時間目

436

## 夏休み

準備のはなし。

449

集団暗殺のはなし。

460

主人公のはなし。

472

毒の盛り方のはなし。

486

探り合いのはなし。

496

女装のはなし。

508

銃のはなし。

520

黒幕のはなし。

530

演技のはなし。

541

肝だめしのはなし。

557

夏の終わりのはなし。

572

A組2学期

差別のはなし。



585

優遇のはなし。



595

FRのはなし。



604

捕まるのはなし。



616

疑いのはなし。



629

狭間綺羅々のはなし。



643

天使のはなし。



660

大石渚のはなし。



676

女のはなし。



685

## 原作前

### 2周目のはなし。

最近のゲームには2周目がある。ラスボスを倒すのに必要なスキルを既に備えており、1周目の時の知識を存分に発揮できる2周目、それはまさに「強くてニューゲーム」である。

例えるならば潮田渚の2周目だ。

字を読み、言葉が話せるようになったころ、自分には1周目の記憶があることに気づいた。どうやって死んだのかは分からないが、そういう記憶があることは誰にとっても当然のことなのだと思うっていた。人生はやり直しが利かないというけれども、実は何度もしリセットしている人がいて、みんな気づかないふりをしているだけなんじゃないか。「本当はみんな2周目なんだろう」ってどこかで信じていた。

今のところ大したこともしておらず、ぼくの小学校の成績が1周目と比べて異常に好成绩だというぐらい。小学4年生にもなったが今まで1度もテストでミスをしたことがない。本当にそれだけだ。

なのに……

「なのになんでお父さんがまだ家にいるの?」

居間のソファアールでテレビを見る父親に対し、子供がこんな発言をするのはいかなものだろうか。

しかし1周目の時は小学3年生あたりで別居したはずだ。しかし、別居は全く起こらず、お父さんはちやっかりと家に居座っている。いや、彼がいること自体は何も問題ないのだが。

「……渚、お父さんが家にいちやいけくないか?」

「うれしいけど、でも……」

眉を項垂れて聞き返すお父さんにぼくはなんと云ったらいいのかわからなくなり口の中で声が消えかける。

「1周目と違うよね?」

「1周目? 何言ってるんだ?」

ここで初めて2周目に戻ったのはぼくだけなんだと悟った。

ひとりぼっちになった。

勝手に自分と同じであることを周りに求めていた。ぼくは暫く茫然自失した。自分以外の全てが知り合いの皮を被った未知の生物に見えた。

ぼくだけが2周目なんておかしいじゃないか。そう心の中で呟き、ある意味至極当然な結論を導き出す。異分子なのは自分の方じゃないか、と。

自分自身が1周目の時と大きく異なっていることはよく知っていた。成績優秀で、暗殺で培った経験からの洞察眼で運動神経も悪くない。最も、ぼくの性別について考えてしまえばこれが最大の変化だと言えるだろう。

ぼくの身体はお母さんお望みの女の子になっていた。髪は胸にかかるぐらいまで伸ばしていて、顔は前とほぼ変わらないはずなのに立派な女子になってしまっているんだから仰天だ。おかげでお母さんのヒステリックが減ったこともあり、お父さんがここにいる大きな理由となつている。それが理由でぼくの苗字は潮田ではなく大石となつていたりするがこれは余談だ。

引つかかるのはぼくは何のためにこの2周目にいるかってことだった。

「相変わらずこの子すごいよな、磨瀬榛名」

目に付いたドラマのワンシーンに釘付けになる。テレビに映る親しみのあるあの子がドラマの中にはいた。父親から虐待を受け、父親が母親に包丁を突きつけた時に彼女がそれを庇って犠牲になる場面だ。泣きそうな少女は母親を助けるために身を以て前に出た。それによって刺さる包丁と傷口から零れ落ちる血に少女は怯えることもなく、ただただ母親のことを呼び続ける。最後には力尽きて動かなくなった。

1人の少女がドラマの中で死んだ。このドラマの主人公は彼女ではない。ただしこの後この子が出てくるシーンはほぼないだろうが、視聴者の目には焼きついて離れなくなるだろう。同い年とは思えない演技力である。しかしどういうわけか、ぼくは彼女が死ぬのを

前にも見たことがあるという馬鹿げたことが脳裏によぎったのだ。そしてそれが自分が死ぬ原因でもあったことを。

ぼくが死んだ？ 何馬鹿なこと言ってるんだ。だってぼくは生きてるじゃないか。1周目からただリセットをして2周目に突入しただけだ。ぼくが死んだならここにいるぼくは一体誰だっというんだ。でもぼくは知っている。彼女はぼくの目の前で殺されたのだ。

そして潮田渚は死んだ。

口の中から乾いた笑みが漏れる。ゲームで2周目を選択する時、それはラスボスを倒す時だ。

ぼくが2周目にいる理由。それは茅野カエデが死ぬのを防ぐためなんだ。あの日、茅野は触手で心臓を突かれた。唯一蘇生が可能かと思われた殺せんせーは命絶え、無残に殺された茅野を救うことができず、ぼくは恩師の死と大切な女の子の死による衝撃で自殺をしたのだ。

何でぼくはあんなにも無力なんだろう。

「渚ー？ お母さんね、今日担任の先生に会ったんだけどやっぱり渚は中学受験した方がいいと思うのよ。見て、この桐ヶ丘中学校。中高一貫校の方がお母さんも安心だし、ここの高校、蛭雪大学の進学率がかなり良いの」

食卓に料理を運ぶお母さんを見て、失礼にも若返ったなんて思ってしまった。彼女は相変わらずぼくを自分の2周目としか見ていない。人がシリアスなことを考えてるっていうのに呑気なもんだ。中学受験なんてE組の頃の試験戦争に比べたら楽だろう。

しかし、桐ヶ丘中学校には凄い人たちが何人かいる。ぼくがもっと暗殺のための刃を持っていれば、2人も救えたのかもしれない。

「そうだね、お母さん」

ぼくはお母さんに反抗しないことにした。でもそれは1周目の時とは意味が違う。時が来るまではお母さんのルールには沿って、表向きは優等生を演じてあげよう。ぼくは母さんの人形には決してならないけれども。殺せんせーの最期に絶望したぼくは1周目であんな



にも望んだ教師には決してならないだろう。

あの時ぼくは茅野を助けられなかった。さらには殺せんせーを自分たちの手で殺すことさえできなかった。ぼくが殺すところか心の奥で信じていた。暗殺の才能がある、ぼくが殺せんせーを殺すのだと！

殺せなかった理由は今となっては簡単だ。

才能はあるだけじゃ意味がない。

ぼくは暗殺の才能があったのにそれを極める努力を怠っていた。だから才能に見放されたのだ。弱さから大切な人の死を救うことさえできなかったのだ。

死を覆す絶対的な存在。そんなものが居るのだとすればそれはひとつ。

気がついたらぼくは殺し屋になることを強く切望していた。

## 優等生のはなし。

櫛ヶ丘中学校受験日。ぼくは少しの緊張も持ち合わせていなかった。

近所だからという理由で入った寂れた塾でぼくは救世主のように思われていた。お金は払うという理由で櫛ヶ丘中学校以外の難関中学校も受けさせられることになり、周りが勝手にぼくを持ち上げる。

そりやあ中学受験の試験なんて中学の時に比べたらライオンとゴジラを比べているようなものだ。だからと言ってぼくは所詮中学3年生までの記憶しか持っていないし、カルマ君や浅野君のような天才と比べられたらただの凡人である。いや、でも確かに今の学力なら彼らと余裕で戦えるかもしれない。そんな淡い期待を持ちながら配られた試験用紙の裏を凝視していた。今か今かと試験開始の合図を待つと、試験監督の人が「では始めてください」と唐突に言って試験がスタートする。

解答用紙に受験番号と名前の欄に潮田渚と書き、早速国語の文章題を読み進める。

胸までつく長い髪が視界を邪魔し、ぼくはいつものように髪を結んでくれば良かったと思った。今日は少し寝坊して髪を結ぶ時間がなかったので無理もない。

文章題が終わり、漢字の分かりきった答案をスラスラ解いていると、漢字を間違えてしまいぼくは小さくあつと呟いた。まあこんなこともあるだろう。テストにはミスが付き物だ。

そういえば殺せんせーに英語のスペルミスが多いって言われたっけ。ぼくのテストでの弱点はケアレスミスが多いことだ。

落ち着いて消しゴムを使おうとすると、その消しゴムが無かった。ペンケースから取り出し忘れていたことに気がつきハツとする。

あれ？消しゴムない時に二重線で消していいとかあったっけ。ないよね。どうするんだ、これ。この後まだ算数もあるのに。

ぼくが困っていると、後ろの席から無言で消しゴムが投げられ目をぱちくりとする。こんな時に前の席の受験者が消しゴムを忘れたこ

とに気づける相手なんてそうそういない。カンニングしていたって可能性はくはないけど、消しゴムを貸してくれるということは2個以上持つてることじゃないか。それは用意周到すぎるだろう。

しかしそんなことより、今自分は試験中なのだということを思い出して答案に集中する。消しゴムを手に入れた後の試験は絶好調で、答案は満点なんじゃないかと思うほどだった。

試験が無事に終わり、試験監督の人が終了を告げるとぼくは後ろの席を初めて見た。なんとなく受験中に余裕がありそうな人と考えてカルマ君が真っ先に浮かんだけど、違った。でもぼくが前から接触してみたいと思っていた人物だ。

「消しゴムありがとう」

「困っているみたいだったからね。君、名前は？」

「あ、わたし大石渚。あなたは？」

ぼくもだいぶ女の子に化けるようになったなとちよつぱり自嘲する。浅野君と入学前に会うことになるとは全く考えてもみなかった。浅野君の小学生時代の姿は想像より遙かに若く、中学3年生時点の彼を知るぼくには新鮮に感じられた。

「僕は浅野学秀だ。もし君が入学したらよろしく」

「入学しなかったら用がないかな？」

少し意地悪をしたくなり、彼の言葉を捻って受け取る。浅野君のことだから、消しゴムを貸したのは入学前から手下は増やした方がいいと思つての行動で、それは入学しなければ関係ないような気がしたのだ。

「そういうことじゃないよ。でも、あんなにスラスラ書いてたんだから受かるさ。それに僕は絶対に落ちない」

「すごい自信家なんだね。そういえば、消しゴム2つ持つてきてたの？試験に向けて用意周到だなんて感心したんだ」

浅野君は少しきよんとした顔でぼくを見つめ、数秒後に「ああ」と馬鹿にしたように嗤った。

「消しゴムは1つしか持つてこなかったよ」

「……え」

今、彼は何と言った？

「浅野君、探したよ！」

彼は友達らしい知らない男子に呼ばれ、いつもの優等生の微笑みを相手に向けた。そこには柗ヶ丘で見たいつもものぼくから遠い存在の浅野君がいて、距離が遠いと思ってしまう。

「それじゃあ大石さん、次はこの学校の生徒として会えるといいね」彼の言葉はぼくには届いていなかった。学校から出る間もずっとさつきまでのやり取りを考える。このあと他の受験があることなど御構い無しだった。ぼくの頭の中では浅野君の言葉がひたすら響いていた。

さつきまでの考えは全て馬鹿馬鹿しく、ぼくはあまりに浅野学秀という人物を見くびっていたのだと悟る。

誰が、今の彼らなら余裕で戦えるだ。あんな余裕そうに笑う小学生初めて見たよ。

柗ヶ丘中学校の校舎を背に次来るときは桜が咲いているのを想像した。

\*

中1の春はほとんどの生徒の期待通り満開の桜が咲いた。

「新入生代表、浅野学秀」

「はい」

ぼくは浅野君が壇上に上がる姿を他の生徒と同じように尊敬の眼差しで眺めていた。

あの時彼は消しゴムを試験で使わなかったというのに、受験者の中で1番だったようだ。世の中には完璧な人というのがいるのだなどしみじみ感じさせられる。ぼくのように狡い手を使わなくても彼は

ずっとぼくの遠いところにいる。E組に何度も負けたのだって、殺せんせーが裏に居たからというのが大きい。

クラス分けが何故かA組になっており、ぼくは試験の成績と苗字によって変動したんだなと納得した。教室に入つてすぐ、早くも皆に囲まれていた浅野君を一瞥し、黒板に貼られている通りの自分の席に向かった。その時お母さんに制服のスカートは皺が付きやすいから、座る時に気をつけるように言われたことを思い出し、後ろのスカートを軽く押さえ椅子に腰を掛けた。お母さんの影響でスカートを履くのに慣れてしまった。だから未だに膝のあたりが寒いなどは思うもの、もう羞恥心はない。

さて、漫画や雑誌を読みたいところだけど小説でも読むか。2周目は優等生で通したいし。英語の本を原文で読んでいたりするわけだが本のカバーで隠してしまえば誰もなんとも思わないだろう。もしも紙の素材などに目を配る鋭い生徒が居たら別だが。

「英語で読むの好きなの？ かつこいいね！」

ギョツとしてふと斜め上を見上げると、ボブ頭の女の子が目に入った。話したことないので誰か分からないが、悪い子では無さそうだしまさか読んで早々に声をかけられるとは思ってなかった。

「最近ハマってるんだ。あ、わたし大石渚。よろしく」

「私は伊藤姫希！ 渚ちゃんって呼んでもいいかな？」

「いいよ。なんかあそこすごいね」

後方の席の周りにできている人ばかりを指さすと姫希さんは少し苦笑気味だった。それはぼくの「すごいね」に対して否定しているわけではなく、自分は慣れているとでもいうような笑みだ。

「浅野君いつもあんなんだから。その内この学校支配してるよ。あ、同小なんだよね」

「へえー！ 同じ小学校の人がいるっていいなー」

自分と同じ小学校からも1人か2人桐ヶ丘中学校への志願者がいたが、不合格か他に受かったところがあつたのか、別の中学校に行ってしまった。それ以来全く交流がない。

「もう1人いるよ。伊織、ちよつと来て来て」

「わざわざ呼ぶなよ。なんなの?」

浅野君と話していた男子が姫希さんの声でぼくたちに近づいてきた。浅野君は不思議そうにこちらを見たが、すぐに取り巻きたちの話に耳を傾けてまた教室内の雰囲気盛り上がる。

「このむつつりそうなのが隣の家に住んでる毛利伊織。いわゆる幼なじみ」

「自己紹介でむつつりとか言うな!」

顔を真っ赤にさせて毛利君が怒鳴る。しかし姫希さんには全く効いていないようでクスクス笑いをしていた。

「せっかく人見知りな幼なじみに女子の知り合いを増やしてあげようとしてののに、その態度はないんじゃないの?」

「俺は頼んでないってば」

「こんなかわいい子小学校にはいなかったよ?ほら、渚ちゃんだって」  
「あー、こんなやつだけど根はいいんだ。面倒みてやってくれ。俺はもう疲れた」

毛利君は頭を掻き、小さい声で「よろしくな」と言うところを見るとシャイな気質のようだ。それを分かっていて姫希さんは毛利君を弄るのを楽しんでいる。

「2人とも仲良いんだね」

ぼくは久しぶりに微笑ましい気持ちになった。こういう関係は羨ましいな。茅野とは喧嘩するほど争いごともなかったし。

「どこが」

「そうやってハモるところ?」

ギイという音は意外にも大きく教室に轟いた。浅野君が椅子を引いただけなのに、急に教室が静かになる。それだけ浅野君がみんなの注目の的だということだ。彼はぼくたちのところまでやってくると足を止めた。

「伊藤さん、毛利君、また同じ学校になれて良かったよ」

「律儀だね。もう既に支配体制は整ったから私たちの様子を見に来たの?渚ちゃん、浅野君は紹介しなくてももう知ってるでしょ。新入生代表で見たよね?」

「うん。でもその前に入試の時に……」

「ああ、消しゴムの？大石さん、だったよね」

背中を撫ぜられるような嫌な気分はどこから来たのだろうか。ああ、そうか。彼の呼び方だ。

潮田渚で慣れていたぼくは「大石さん」と呼ばれることに抵抗があった。まるで他人のことを呼ばれているかのようで、渚と呼んではしいと思っていた。

だってぼくは大石さんじゃない。大石渚であって、潮田渚なんだ。

「その節はどうも」

かちこちに畏まったお礼の仕方に疑問を抱く人はいなかった。ぼくは目の前の支配者が片眉をぴくりと上げたのに気づき、視線を斜め下へと移動させた。

「そう気にすることはないよ。まさか同じクラスになるとはね。これからよろしく」

「何だ、2人とも知り合いか」

何の前触れも無く教室のドアが開けられ、一見強面な風貌の男が教室の中に入らずか入ってきた。彼の登場でクラスメイトたちはまだ慣れない新しい席へと移動する。隣の席に着席した姫希さんの目は心配気に遠い席になった毛利君へと向けられていて、ぼくは浅野君の席が姫希さんの前であることによく気がついた。つまりぼくの斜め前の席だ。さつきまで座っていた席は毛利君のだったらしい。

担任が気味の悪い咳払いをし、生徒全員の注目が彼へと集まる。そんな中、彼は自己紹介を始めた。

「A組の担任、穴戸和彦だ。毎年A組の担任で、これから3年間はずっとお前らの学年のA組担任を受け持つだろう。初めに言っておくが俺は3年になった時、このクラスのメンバーがほとんど変わらないことを目標にしている」

「何故ですか？」

後ろの方の席から眼鏡をかけた女子生徒が声を上げる。

「A組は毎年成績上位層から素行の良さも含めて選ばれている。最初に言っておくが、このクラスに成績上位全員を集めたわけじゃない。

入試の各分野に置いての高得点者、総合点の上位数名生徒だけだ。それ以外はまるつきり普通の生徒ってわけだ。生徒には言うなと言われているからここだけの話にしてくれ。浅野、お前もだぞ」

「僕が父に言うんでも？」

心外だと肩を竦める浅野君に対し先生はフンと鼻を鳴らした。

「悪いが親に何でも話す生徒ってのはよく見かけるんでね。序でに言うのと、2年の時のクラス分けでも同じようなことが行われるだろう。1年間の成績で各分野の上位者、そして総合点で高得点を記録した者から何人か。だが、3―Aは違う。2年の時の成績で上から順に、成績上位の生徒が入る。俺が何を言いたいのか分かった奴がいたら当ててくれ」

「成績を上げろとおっしゃりたいんですか？」

姫希さんが目を細めた。今の話で理解した生徒は多くないだろう。

「そうだ」

「先生は自分のクラスが3年でまたA組になってほしい、つまりは自分の受け持った生徒が2年の時点で全員成績上位になるのを望むわけですか。難しいと思いますが」

浅野君が宍戸先生の言葉を要約し、漸く話の筋を掴んだ生徒たちがざわめき出した。不可能に近いことを言っていると理解したのだ。

「断言するまでもなく、お前はここに残るだろうな浅野。そして他のやつに告ぐ。残りなければそれ相応の努力をしろ。よし、いきなりだが学級委員を任命する。浅野、お前委員長やれ」

「任命？ 立候補か推薦じゃないの？」

「まだ新入生なのに立候補もないだろうが。みんな異論はないな？」

誰かが文句をぼやいたが、先生が生徒たちを見渡すと全員口をびつたりと閉ざし、無言を貫いた。新入生代表だった彼に敵う候補はいなかった。教室に入るなり誰とでも感じ良く話した浅野君は学級委員長にぴったりの生徒だ。

「もう1人、大石渚」

「え、ぼ……わたしが？」

「名前を間違えて減点されたうっかり者。だが、委員ぐらいできるだ



ろう」

……ういえば潮田渚って書いていたかもしれない。減点で済んで良かった。

先生の言葉に何人か笑う生徒が居た。彼らを宍戸先生は嘲笑まじりに注意する。

「入試2番に対して随分と偉そうじゃないか。言っとくが、次のテストが来るまで彼女を笑えるのは浅野1人だ」

罰が悪そうに黙り込む彼らに先生は満足気にニヤリと笑うと、ぼくたち2人に目を移した。先生が入試の成績を気にしているのかは知らないが、少なくとも頭の良い生徒としてぼくたちは一目置かれていようだ。

……っていうか入試2番だったんだ。これ喜んだ方がいいんだよね？

「2人とも前に来い。挨拶がてら自己紹介でもしてもらおう」

「浅野学秀だ。せっかく学級委員長になったからにはこのクラスを学年で1番良いクラスにしたい」

「大石渚です。こんな大役を任されるのは初めてですが、浅野君のサポート頑張りたいと思います」

「僕から提案がある。せっかく同じクラスになったんだ。みんな自己紹介しないか？」

「勝手にやってろ。終礼は終わりだ」

宍戸先生は面倒くさそうに浅野君を見据え、教室を去っていった。「僕から番号順にしようか。名前はみんな知っての通りだ。得意科目は数学。苦手科目は特にならない。部活はまだ考えていないが、運動部に入ろうと思ってる。あだ名で呼ばれるのは好きじゃない。下の名前で馴れ馴れしく呼ばれるのもだ。だから僕を呼ぶ時は名字にしてくれ。これからよろしく」

「伊藤姫希。得意科目は国語で苦手科目は社会。浅野君と同小だけど全く恋愛方面で考えたことないから、浅野君狙いの人は安心して！むしろ相談に乗る！バスケ部に入ろうと思ってる人も気軽に声かけて

ね。名前はなんて呼んでもいいよ〜」

姫希さんも堂々としてるなあ。バスケットに入るつもりなのか。

ぼくの前の出席番号の人たちが数人当たり障りのない自己紹介をし、ぼくの番がやって来た。

「さっき言ったから名前は分かるよね。得意科目は英語で苦手科目は理科……？学級委員なので気軽に声かけてくれると嬉しいな。部活はまだ決めてないけどたぶん運動部になると思う。名前はできれば下の名前で呼んでほしい、かな」

姫希さんが「バスケット行こうよ！」ととても好意的なことを言うてくれて、ぼくは彼女について行きたくなった。でも部活でどこに入るかによって今後の中学生生活が左右されるから、仲良くなった子が入ったからという安易な考えで部活選びはしたくない。

ぼくには一つやりたいことがあった。それは学年一の優等生に頼み事をするというものだ。浅野君が同じクラスにいて、委員が同じだったら話しかけるのも容易いだろう。

「渚ちゃん、頭良いんだね〜」

自己紹介が終わり、ぼくは新品のスクールバッグに貰った教科書を詰めているところに姫希さんが話しかけてきた。

「たまたまだよ。でも学級委員かあ……できるかな」

「心配しなくてもみんなをまとめるのは僕が引き受けよう。大石さんには僕と一緒にクラスの秩序を守るために協力してほしい。先生の言うように全員A組に残ることは実のところ僕も望んでいるんだ。そのためにはまず僕ら学級委員が友達になるのがいいと思わない？」

口先では綺麗事を並び立てる彼の支配意欲をぼくは当の昔から知っていた。彼は自分がA組に残ることを確信しているし、見たところだとぼくにもそれができると分かっている。だから彼はぼくとは長い付き合いになると思っているのだろう。どうにも作り笑いを隠しきれていない彼からクラスメイト全員がA組のまま進級してほしいと望んでいるようには思えなかったが。さらに友達にならないかと聞いている時にも意識の波長が多少乱れた。あれは嘘をついている時のものだ。

「Tu<sup>う</sup> es<sup>そ</sup> un<sup>っ</sup> ment<sup>き</sup>eur」

視界に彼の表情が変化する様を捉え、波長の波が乱調を来したのを感じた。受験勉強の片手間で語学の勉強に取り組んでいた。ビッチ先生が片岡さんに教えている様子を見ていたため、フランス語は上達及早くすぐに習得してしまった。でもぼくがフランス語を話すことよりも彼にとって屈辱的だったのは自分の嘘を嘘と見破られてしまったことだろう。

「頼りにしてるよ、浅野君」

表向きにはそう返事をする。頼りにしてる、学級委員長としては。でも彼の発言は信頼性に欠けた。周りのことを全員自分の手下だと思っているのが透けて見え、本心の支配欲が隠しきれていない。

浅野君、君はぼくを支配下には置けない。君の負ける姿をこの世界で唯一見ているぼくだから、君に支配される気にはならないんだよ。「今日一緒に帰ってもいいかな？ 学級委員のこととちよつと話したいことがあるんだ」

静かに首を縦に振る浅野君の波長はまだわずかだが揺れていた。

頼みごとのはなし。

帰り道、結局浅野君と方向が同じだという姫希さんと毛利君も一緒に帰ることになった。2人が前で痴話喧嘩のようなものを繰り広げる中、ぼくらはひたすら自己紹介の延長を続けていた。「最寄駅はどこ？」だとか、「兄弟はいるの？」そういった類の話だ。姫希さんたちがぼくらから少し遠ざかると、浅野君は顔にわざとらしく作り笑いを貼り付ける。彼の顔が薄暗いな、なんて思ったのは彼があまり心地の良い気分ではないからだろうか。今から何か始まる。そんな予感があった。

「勘違いしないでほしいが、あれぐらいの芸当をやったのは君だけじゃない。僕を最初から嘘つきだと決めつけたやつなんてごまんといた。だが、彼らと違うのは君だけは最初から僕を知っているような素振りを取るくらいだ」

「そんな警戒しなくてもいいよ。ぼくは浅野君に頼みがあるだけなんだから」

「ぼく？」

「ごめんごめん。癖だから気にしないで」

しまった。思わず考える時のノリで話してしまった。

「大石さんに対して警戒なんてしていないよ。というより、警戒できないんだ。急にあんなことを言われたのに、君は普通の女の子にしか見えない」

ぼくは心の底から笑みを浮かべ拍手したかった。この言葉はぼくたちE組が2代目死神を見た時に思った感想で、ぼくのような殺し屋を目指す者にとってそれは最高の褒め言葉だ。

しかし、浅野君は褒め言葉と思ってそれを言っているわけではないだろう。だからぼくははにかんでお礼だけ言うことにした。

「ありがとう。ねえ、浅野君はスペイン語を使えた？」

前の2人が大きめの声で話すのを見て油断するつもりはない。英語なら多少上手い人なら分かってしまう可能性があるが、彼らのどちらかがスペイン語を習っている可能性は限りなくゼロに等しい。逆

に多才な浅野君ならスペイン語を話せる確証があった。

「そうだね、嗜む程度だ」

彼のお前はスペイン語も話すのかという懐疑的な視線をさらりと受け流す。この際ぼくが異次元な存在なのは放っておく。まさか小4から3年間の間に受験勉強をやりながら英語を除く3つの言語を習得してしまったと言っても信じてもらえそうにないし。実際ぼく自身が一番驚いてるぐらいだ。身体だけじゃなくて脳みそも変換されたのか、それは驚いた。

『体術を教えてほしい』

『構わないけど。何故僕なんだ？』

面食らったようだが、浅野君はすぐに完璧な発音のスペイン語で返事をした。前の2人は部活のことについて話している。

『うち、親が厳しくて小さい頃から女の子らしいものしかさせられてこなかったんだ。ヴァイオリンとか茶道とかはできるけど、本当は格闘技のように相手を倒せることをしたい。スポーツなら学校でもできるよね？でも、本格的な体術を習いたければ親の援助がなきゃ難しいと思うんだ。親の援助なしに習うことを考えていたら君のことが思い浮かんだわけ』

これだけの言葉をスペイン語でまくし立てると、浅野君は納得したような少し引つかかる点があるような微妙な顔をしていた。

『僕が体術に秀でてることを誰から聞いた？父に習っていたから知る人はいないと思っただけ』

『そこは人から聞きかじっただけ。引き受けてくれる？もちろんお金は出すよ』

お年玉を小さい頃から貯めていたのでかなりの金額を持っている。足りるかは分からないが暗殺で培った洞察眼があれば3ヶ月も要らないだろう。

『いや、その必要はない』

『……いいの？』

『実は今ある名案が浮かんだんだ。表には出していないが僕は多少女子が苦手だね。女子避けとして男子校を選ぼうかとも思ったんだが、

父親のいる桐ヶ丘を選びたかったんで止めたんだ。入学して早々新生代表、入試トップ、理事長の息子という餌に釣られる女子がどうも多い。伊藤さんとは付き合いが長いこともあって、彼女から紹介される女子は断らないことにしているけど、それ以外は接触を断ちたいぐらいだ。大石さんはどうも僕をそういう目では見ていないようだし、頭も良いようだからね』

ぼくは彼の上手すぎるスペイン語に呑み込まれていたが、何とか意味を理解した。彼は人に頼み事をすることがない。それは彼の高慢からであり、やつてくれないか？などと頼むことはゼロに等しい。今のは要約すると……

『つまり、恋人のふり？』

『そんな大袈裟なこととはしなくてもいいよ。ただ、周りから見れば僕らがお似合いに見えれば噂が立つ。もちろん、大石さんに好きな人がいるならこの話はなかったことにしよう』

好きな人、と言われて咄嗟に茅野のことが思い浮かぶ。ぼくは茅野のことが好きだったんだろうか。バレンタインでチョコを貰うまえからずっと茅野は大切な女の子だった。それは世間一般で言う「好き」なんだろう。

『わたしは全然構わないよ。この先恋人ができるとは思えないし。そういうことには慣れてないから難しいと思うけどね』

ぼくの発言に浅野君は意外そうにしていた。何だか莫迦にされた気がしたので、むっとして浅野君にぼくのことを男を手玉に取るような女子だとも思ったのか、と指摘すると笑いながらそれを否定する。

『随分と好かれそうな容姿をしていると思ったが？』

肯定的な意味だったようで良かった。しかし、この発言を否定するのは少し難しい。何故ならばくにも多少なりとも自覚症状があり、思い当たる節もあつたからだ。小学生の時には男子に好意的に接され、男子に色目を使っているという理由でハブられたこともあつた。悪意のない男子たちのかわいい女子ランキングでは堂々の1位。むしろここまでヒントだらけでモテることに気づかない方がおかしい。

ぼくはかわいい。はつきり認めてやる。でもそういう話ではないんだ。いくらぼくがかわいくてモテても男子とそーいうことやあーいうことはしたくない。

『問題はぼくの中身なんだ。他の人に言わないでほしいんだけど、ぼくの中身は完全男だよ?』

ぼくは浅野君の反応を待った。意外にも意識の波長は乱れず、浅野君は少しぼくを見つめるだけだった。驚いた様子もない。

『……それは性同一性障害とか、そういうこと?』

『まあ近いかな。小学校の頃、男子と仲良くしていたら女子からハブられたことあるんだよね。でもぼくは恋愛的な意味で男子を見れないし、これからもない。好きな子はいるけど、自分が変だって周りに勘違いされたくないから付き合いたいとは思わない……もつともその子が柵ヶ丘に来るのはまだ2年も先の話なんだけどね』

『大石さんって変わっているとは思っていたが……そうか。何でか分かった気がするよ』

神妙な趣でぼくを見る浅野君はいまのぼくの発言に対して不快感を持っていて様子はなかった。外国人の友達が多いから、案外ぼくみたいな人を友人に持っているのかもしれない。

そういえば友達になるのだとしたら、言っておかなくてはならないことがある。

「二ついいかな?」

足元の小石を蹴り、ぼくは日本語で話を切り出した。

「何だ?」

頼みごとの用件も済んだので日本語に切り替えたところ、彼は「ようやくだな」と小さく呟いた。ぼくもだけど、浅野君もずっとスペイン語で話すのはさすがに疲れるようだ。

「苗字で呼ばれるの、嫌いなんだ。良ければ下の名前で呼んでもらってもいいかな?」

「それぐらいかまわないよ。君に下心がないのは今の話で分かったし。何か理由でもあるのか?」

「いつ苗字が変わるか分からないっていうのもあるし、ぼくは自分が

大石渚であることに慣れてない。何でかはぼくにしか分からないだろうけどね」

1度起こることは2度起こる。お母さんのヒステリックにいつお父さんが嫌気が差すのかはわからないけど時間の問題かもしれない。そうなたらばくはまた我慢を強いられるだろうけど、潮田渚の方がぼくらしい。

「それじゃあ渚、君は来年もA組だね？」

同意を求めるといふよりもこれは「来年もA組にいろ」という命令にしか聞こえない。相変わらず理事長臭漂ってるなあ、こんな言い方するなんて。

頭の中で一番正しい答え方を瞬時にシミュレーションし、答えを出す。

「わたしは浅野君ほど頭は良くないけど、A組に入るのには簡単だと思うよ」

「あんなに答案用紙に記入するスピードが速いやつなんて早々いないだろうね」

「あの時もう受かるって思っていたの？」

「そうだな、受かるとは思っていたが柗ヶ丘はそこまで高偏差値じゃない。第二希望か第三希望の滑り止めかと思っていたよ。それに万が一入ってきたとしても成績上位がA組にまとめられるなんてこと知らなかったからね」

的を射ている。ぼくは柗ヶ丘が第一希望ではあるが、塾の都合で柗ヶ丘より高難易度の学校も受けさせられた。それらは全部無事に受かったし、塾からお礼の図書カードを貰いお母さんのやつぱりこっちの学校に行かないかという誘いは却下した。ヒステリックが起こると少し気になったが、柗ヶ丘だって高校の偏差値はかなり良いし、家から一番近いんだからという文句が効いたようだ。

「お、なんか2人とも思ったより話し込んでるじゃん。っていうか、さっきなんか変な言葉で話してなかった?! あれ何語?!」

駅前の踏み切りが閉まったことで後ろを振り返った姫希さんはぼくらの話が予想外に盛り上がっていることに興味深々だった。



「スペイン語。2人とも話せるってことでちよつと話していたんだ。ところで渚は全部でいくつの言語が使えるんだ？」

浅野君の口ぶりはまるで使える言語が多いこと前提だったため、ぼくは気恥ずかしい思いをしていた。そういえば浅野君はいくつ話せるんだろうか。外国人留学生と話しているのを見たことがあったが、聞いたことがなかったのでふと疑問に思った。

「4つだよ。英語、フランス語、スペイン語、それから中国語のマンダリンかな。会話と聞くのは問題ないけど英語以外は読んだり書くのが苦手なんだ。最近頑張つて原書の本を読んでいるんだけどもともと語学習得が得意なわけじゃないから……」

本当はドイツ語なんかも話してみたいけど習得する言語の数を増やすと厄介だからなあ。

「いやいや、4つ話せたらもう天才だよ?! 私なんか小学校で少しやった英語が何とかできる程度だし。授業どうしよう!」

「本当にすごいね。僕も語学は秀でてる方だけど同い年に僕と同じぐらいの子がいるなんて思わなかったよ」

そう口では褒めているが、自分には及んでいないなと思っているのがバレバレだよ浅野君。君の意識の波長随分緩やかじゃないか。顔色は少し暗めだけど。

「秀でてる方って言ってもこいつの秀でてるの基準はおかしいからな。親が凄すぎて基準を間違えてると思うぞ」

「毛利、お前英語上手いじゃないか」

「お前と友達やってたらそりゃあな。それでもお前や渚ちゃんと比べたら初心者だろ」

毛利君は褒められて少し照れ臭そうだ。ただ、謙虚なようで自虐に走っている。

「渚のスペイン語、あれだけ上手いってことは英語も只者じゃないんだらうね」

彼はSNSのメッセージでも来たのかスマホを取り出し、何やら文字を打ち始めた。そんな彼に姫希さんが訝しげに尋ねる。

「ねえ、なんかナチュラルすぎて気づかなかったけど浅野君渚ちゃん

のこと——」

電車が通りかかり上手いこと姫希さんの声をかき消した。浅野君がぼくに自分のスマホを見せる。

7:30

体育館の裏

それはぼくが申し出た体術を明日から教えてくれるということだろうか。

電車が通り過ぎると姫希さんが興奮していた。

「ねえ、なんで〜？浅野君珍しくない?！」

「え?ごめん、電車の音で聞こえなかった。なんて——」

ぼくが言いかけた言葉を浅野君はにっこりと引き留める。自分が行きたいホームの改札口が目の前にあるのを見て、ぼくは浅野君に帰れと言われている気がして怖くなった。

「あ、ぼく改札ここだから! みんなまたね!」

「渚は改札ここなんだね。伊藤さん、僕たちはこっちの改札だよ」

浅野君がぼくたちにキラキラした目を向ける姫希さんを引っ張ってぼくが行く方向とは違う改札口へと向かった。

「また明日学校で」

「うん」

\*

E組に居て本校舎の構図は頭から抜け落ちたはずだった。だが、2週目になってから違和感でしかないがぼくの頭は意外と物覚えが良いらしい。

「体育館裏つてここだよね」

告白やいじめの呼び出しに縁のある場所で有名だが、さすがに新学期早々そんなことをする輩がいるはずもなく、そこはただ桜の木が一本あるだけの静かな場所と化していた。

時刻は7時20分。5分前行動と言うが10分も早く着いてしまった。

さすがにあの浅野学秀がこんな早く来るはずもなく、5分経った後に彼は現れた。

「あ、おはよう浅野君……うぐつ?!」

突然シャツを掴んで首を絞めようとする彼にぼくは困惑以上に命の危機を感じた。烏間先生直伝の三角締めを上手いこと決めるもそれを軽々と退かされてしまう。

「意外とやるじゃないか。今から僕の攻撃にやり返せ」

なるほど、そういうことか。ぼくの力量を試したいわけだ。

その発言からの突然の蹴りにぼくはさつと身を引いた……が2撃目では右拳が振りかざされる。それも避け、ぼくは相手の意識の波長に集中した。全く乱れていない。そして余裕にしている様子もない。「どうした? 避けるしかできないのか?」

彼は挑発してきたが、油断も隙もないのが意識の波長で分かる。こんなか弱そうな女子相手にこうも警戒を解かないのは彼はいつだって誰にだって負けるつもりがない姿勢の証左である。油断のない天才。ある意味カルマ君より怖い。ぼくは強敵と戦えることが嬉しくなり微かに笑みを浮かべた。

自分の中でスイッチを切り替える。最初だから使える、鷹岡先生の時の戦術にしようか。

ぼくはまるで浅野君が通学路でばったり会った親友かのように目を合わせて微笑んだ。少しずつ歩く間に彼は違和感に吞まれ、ぼくの

ペースが緩やかなことに多少の油断をしてしまう。その数秒の意識をつき、ぼくはクラップスタナーを相手に食らわせた。

浅野君はようやく自分が殺られそうなことに気づいたようで、クラップスタナーが鳴った瞬間、前にカルマ君がして見せたような予防策に近いものとして腕を強く噛んだ。それによってギリギリ気絶を免れたらしい。

しかし効果が消えるわけではない。意識を失いかけてふらりと動きが怪しくなった彼をぼくは地面に座らせた。その横に座り彼の肩を少し揺する。

「ごめん、腕痛かったよね。もうちょつと衝撃を弱めにしとけばよかった」

「渚、一回体術やったことあるだろう。それもプロに教わっている」

早々に見破られたことに驚きはしなかった。あの襲撃で三角締めを綺麗に決め、さらに攻撃を全て避けた。浅野君は油断はしていなかったが本気ではなかった。でも気絶寸前まで行くとは思ってもみなかったはずだ。

「あ、やっぱり分かる？ 実は昔自衛隊で精鋭部隊だった人に護身術を教わる機会があつてさ——「いつそんな機会に出くわすんだ」」

それが普通の反応だよ。まさかそんな人が体育教師してしましたとか信じてくれないよね。

「護身か。通りであんなに簡単に避けるのに攻撃は殆どないわけだ。でも最後のアレは君個人の技だね。あんなもの見たことも聞いたこともない」

「クラップスタナー。原理としては相撲で使う猫騙しと同じだよ。でも、あれを少し改良して気絶させる技にしたってわけ」

「あと、目が速さに慣れてる。あれは何でだ？」

「ははは……実は高速マツハなタコちゃん先生を暗殺する訓練を受けていたんだ」

「なんの話だ」

そんな反応が来るのも何となく分かっていた気がする。今日はエイプリルフルじゃないんだよね。だから嘘じゃないんだけど。

「本当に体術を習うの僕からでいいのか？あんな凄い技が使えて、護身ができるなら必要がない気もするが」

「んー、クラップスタナーじゃ殺せないからね」

「殺すって、は？」

「まずいまずい。E組にいた時のテンションで殺す発言してたよ。」

「物の例えだから気にしないで。あれは切り札にはなるだろうけどさ。ほら、クラップスタナーは1度しか鳴らせないんだよ。それに大勢に対して行うのは極めて困難なんだ。その一撃でさえ、さっきの君みたいに効かない時だってある」

「今まではクラップスタナーを知らない相手に対して行ってきたから良かった。でも、2代目死神みたいに知っている相手なら攻撃にすらならない。」

「あれで効いてなかった？」

「本当に効いてる相手は気絶するよ」

「ふーん……切り札って他にもある？先に教えてくれると嬉しいんだけど」

「前に1度使ったのが、ディープキスで相手を気絶させるやつ」

「……渚っていつもそんなことしてたんだ」

「明らかに引いた顔で浅野君が苦笑いをする。あらぬ誤解をたてられているような、でも決して誤解ではないような。2周目のこの身体はキスなんてしたことない。でも正直1周目の時ぼくはキスで人を気絶に追い込めるぐらいには上手かった。」

「なっ、仕方ないよ！その時は命の危機だったんだから！」

「結局ぼくは否定しなかった。いつもディープキスで気絶させたりはしないにしろ、そういう術はできたんだから。浅野君はぼくの命の危機と勘違いしたようだったが、実際は茅野を助けるためにした行動だ。思い出すと顔が真っ赤になって恥ずかしい。」

「ちよっとやってみてくれないか？」

「ダレトダレガデスカ」

「僕以外誰がいるんだ」

「頭の中で浅野君とぼくがキスしている想像をする。女子と男子で」

見かけ上は全く問題なく絵になるが、ぼくの精神面に衝撃波を与える。

「ごめん、男とキスとか想像しただけで吐き気。ファーストキスはチエンジでお願いします」

「何気に傷つくな。僕はこれでもモテる方だと思っていたよ。っていうかファーストキスではないだろう」

何度も言うが1周目と2周目の身体は別だ。いくら脳内でキスを知っていようが、2周目に初めてするならそれはファーストキスになるはず。

「浅野君はぼくから見てもかっこいいよ。でも言ったよね。ぼ……わたし恋愛対象がちよっと違うって」

「ぼくでいいよ。本当はそっちなんだろ」

「うん。ぼくの脳内だと、もしぼくらがキスしたらホモってことになるんだ」

「じゃあ伊藤さんでいいや。とにかくどんな術が見たいだけだから。キスで気絶するなんて信じられないしね」

「そういう問題じゃないんだけど?!」

結論としてぼくはディープキスで気絶はさせられないという話に同意せざるを得なかった。身の危険を感じたからというのには彼には言わないでよかった。

\*

1ヶ月ほど経ってA組での生活に慣れてきた頃、ぼくと浅野君の関

係は悪目立ちすることもなく、ただ実現したらすごい優等生カップルだな、まあ無いだろうけどという扱いだった。それはぼくらは2人でよく話したが様々な言語を取っ替え引っ替えして話すぼくらはまるで知的な論議をしているように見えたから、というのと実際のところ浅野君は姫希さんが紹介した女子にはぼくよりずっと優しく接することでも有名だったからだ。入試2番という噂が広まった所為か、それとも交友関係の広そうな姫希さんが友達だからなのか嫌がらせも全くなかった。

全てが順風満帆だと思っていたとき、ぼくの目の前に姫希さんとはまた違った意味でお世話になる女の子が現れるのだった。

それは昼休み。購買に午前ティーシリーズのミルクティーを買いに行つた帰り、ぼくの席には知らない女の子がお弁当を広げているのを見て目を白黒させる。

「渚ちゃん！ ちようど良かった、この子が大石渚ちゃん」

「はじめまして、C組の長沢珠理亜。じゅりあって呼んでねえ？」  
「えっと、よろしく？」

ぼくがきよんとしていると両手をがしりと掴まれ、キラキラした目で見つめられる。両手からベリー系の香りが漂ってきて、中学生なのに香水でも付けているのかとじろじろ見てしまう。その時初めて顔を見た。髪にパーマを当ててあり、好みではないキツイ顔立ちだけどうちの学校ならかわいい方ではある。もちろんE組の女子たちには劣るが。

「じゅりあこんな可愛い子初めて見たあ〜！ じゃあ姫ちゃん、放課後一緒に帰ろうねえ〜」

彼女は食べ終わったお弁当を片付けると姫希さんに和かに手を振って教室を出て行った。

「なにかな……いまの強烈な女の子」

「友達と同じ塾だったじゅりあちゃん。家がすっごいお金持ちのお嬢様だからコネ入学って思われがちけど、あの子頭良いらしいんだよね〜ほんとは。来年にはA組に来てるかな」

……姫希さんはたまに恐ろしいぐらい何を考えているのか分からない濁った目をする時がある。入学して早々浅野君の幼なじみという地位を確立していて、浅野君に対する恋愛相談に応えているからなのか人望も厚い。表向きには良い子だけど、ぼくは彼女から浅野君と似た支配欲を感じる。彼と違うのは穏やかな口調で言ってるのに意識の波長が激しく波打つことだ。

姫希さんはこの学年の女子でリーダー格となっている。浅野君とは別の方向で女子のみを支配した絶対的な存在。しかしこの学校は成績で全ての優劣を決めてしまうため、その彼女が敵となるのはもちろん成績が自分より上の女子だろう。初めての試験が1週間後に控えたこの時期だからこそ、成績が自分より上回りそうな女子と接触し、こうして仲良くなっているのだ。

敵に回したくないな。

素直に思ったのはこんなことだった。いくら脳内が男子とは言えど、学校で女子として生きるからには女子のルールを守らなければいけない。

ぼくは成績が彼女より上になるだろうが、最近では親友というポジションを確立しているので害はない。彼女たちの格付け競争では伊藤姫希のNo. 2という扱いである。

「渚ちゃんお弁当おいしそうだね〜」

「実は手作りなんだ。姫希さんの卵焼き、ハート型？かわいいね」

「渚ちゃんの手作りすっごい食べたい！この卵焼きあげるからタコさんウインナーちょうだい？」

こうしていればただの元気な女の子なんだけどなあ。

「うん、いいよ」

ぼくは姫希さんのお弁当にウインナーをのせ、卵焼きをもらった。姫希さんの家の卵焼きは甘めだった。ぼくには少し甘すぎたぐらいだ。

「伊織またパンだけ？私のお弁当ちょっとだけなら食べさせてあげてもいいよ」

「言い方が紛らわしいんだよお前は」



2人の喧嘩を慣れた風景のように見る生徒もいるが、大半のA組の生徒たちはもうすでに昼食を食べ終えて勉強に取り組んでいた。

もうすぐ中学初の試験か。浅野君を越す点数を取るぐらいの気持ちじゃないと。

まだ来ぬ試験を前に気の緩んでいた自分が恥ずかしく思えた。柵ヶ丘はただでさえ勉強が全ての学校なのだから。2周目も気を抜かないようにしなくては。

## 五英傑のはなし。

中学で初めての試験。それは誰にとってもそうだが、柵ヶ丘中学校の生徒にとっては特に緊張感に包まれたものとなった。

が、一部の生徒に取ってはさほど面白みのない試験であったりもする。

中学1年生の試験はまだ問スターとは言えない、せいぜい大きな爆弾の仕掛けであることが多い。英語のリスニングなんか特にそうで、初歩の初歩しか出てこない最初の爆弾もんだいは解除機能のための選択肢が4つ。

「うわー、リスニングの4択問題とか久しぶりに見たんだけど」

爆弾には4本の色とアルファベットのついた導火線があり、どれか1本を切ると爆発しないらしい。中3の最後の方に受けたえげつないボキヤブラリーのリスニングを思い出し、ぼくは比べるまでもないなどナイフで迷わず導火線を切りはじめた。

爆弾のタイマーを全て解除し終わると、ぼくは息ひとつ切れていなくなまま次の問題へと進んだ。

ナイフは槍へと変わっており、小型の猪もどきな問スターたちが突進してくる。

単語の問題、発音記号などが中心であるこの問スターたちは倒し方が簡単で、つまり槍で仕留めればいいだけの話なのだ。引っかけ問題もない。

「誰がこんな問題間違えるんだよ！」

超高スピードで槍を振り回し問スターを蹴散らす瀬尾君の姿が目に入り、ぼくは油断せずに落ち着いて槍を正確に敵に突いた。辺りに猪もどきがいなくなると今度は槍が鉄砲に変わる。単語を並び替えて文を作る問題。空にはいくつかの風船がつながる糸を啜る鳥のような問スターが舞っており、どうやら風船を順番通りに打てばいいようだ。あっさり過ぎる問題の数々にぼくは退屈しながらも全問正解を目指した。

このように中3の時の超難解な問スターを経験したことがあるほかからしたら随分と雑魚い。問題は簡単すぎて集中力が続くか、つていうのとケアレミスミスかな。

斜め前から浅野君がシャープペンシルを走らせる音が聞こえてくる。ここからでも意識の波長を感じる事ができるがあれは随分な化け物だ。集中力の塊である。

試験が終わると姫希さんが「だめだったかも！」と頭を抱え、ぼくは浅野君に目配せをした。

『どうした?』

中国語で尋ねる浅野君にぼくは目を輝かせていた。やっぱり浅野君はすごい。あの集中力は真似できないや。

『集中力の高め方教えてほしい……!』

『テスト中に他の生徒を見る余裕がある君に言われたくない』

『テスト週間だから我慢してたけどこれでようやく体術また教えてもらえるよね?』

テスト1週間前はさすがに勉強に集中するべきという浅野君の意見を尊重し、ぼくらはテストが終わるまで体術の練習は止めにしたのだ。

『渚は上達早いから、焦らなくていいと思うよ』

『できることは全部やりたいんだ。あ、本読み終わったんだけど次読むとしたら何の本かな? フランス語上達のためにフランス語の本で!』

『ああ、今度仏検2級受けるんだっけ。「赤と黒」はもう読んだ?』

自分の言語のレベルを知るために検定に挑戦するのはどうかという浅野君の勧めにより、ぼくは検定取得にチャレンジしていた。英語の方は準1級まで取得済みである。

『読んでないよ。面白いの?』

『渚には少し難しいかもしれないな』

うぐつと言葉を詰まらせる。ぼくの語彙力だと確かに難しい話は無理だけど、こつも明らかな発言で示されると読んでみたくなるのが人の常だ。

『読みたい。浅野君持ってたら貸し——』

「お前らは中国人か！ 担任の話ぐらい聞いとけ」

穴戸先生に声を遮られて、ホームルーム中であることに気がつく。中国語で話すぼくたちにみんな注意しにくかったようだ。

「ごめんなさい。えっと、何の話ですか？」

「うちのクラスはテストの総合順位に席替えを行う」

「そんなあ！ 誰が成績悪いかすぐ分かるじゃないですか！」

「もちろん、それを狙ってのことだ」

穴戸先生はふつと鼻で笑い堂々とした立ち振る舞いだった。それをこの教師むかつくなと思ったのはほぼクラス全員一致である。

「じゃあ渚は今度からは隣の席か。よろしく」

「うん。テスト上位順だと浅野君あまり席変わらないかもね」

（こいつら自分たちが1位と2位になること前提で話進めてやがる?!）

全員の羨望の眼差しにぼくは気づかないふりをした。今回のテストは随分とハードルが低かったし、致命的なミスをしなければ満点を取る自信がある。浅野君なら自分を上回る確信もあった。それは浅野君も分かっており、A組にはテスト上位になり得る秀才が多い中でも確証を持つてのあの発言である。

「姫希さん、飲み物買いに行かない？」

「渚ちゃんまた午前ティー？ 好きだね〜」

「んー、今日はちよつといちご煮オレ飲みたくって」

午前の紅茶ミルクティーに目覚めてしばらく飲んでいなかったけど、ぼくは実際煮オレシリーズも好きだ。そういえばカルマ君がよく飲んでいたな。

自動販売機でいちご煮オレのボタンを押す。

「渚ちゃんって、浅野君のことどう思ってるの？」

「浅野君は……頭良いよね。何でもできる完璧人間って感じかな」

「好き？ その……男として」

「ただの友達だよ。向こうだってぼくが少し言語を話せるから一緒にいるだけだと思うけど……姫希さん？」

疑問に思つて姫希さんの顔を見れば酷く沈んだ暗い顔だ。意識の波長だつて今までにないぐらい乱れてる。

「なにー？」

「どうしたの、とつぜん」

「じゅりあちゃんが……」

「うん」

ぼくはいちご煮オレを取り出し口から出した。最後の1個だったらしく、売り切れの赤いランプが点灯している。

「渚ちゃんは、あさ——」

「え、いちご煮オレ売り切れ？　せっかく来たのに」

ぼくはその声に振り返った。聞き覚えのある悪巧みが好きそうな声はぼくの記憶を思い出させるには十分で、E組で笑つたり泣いたりしたあの思い出を分かち合った赤羽業の姿がそこにはあつた。

「カルマ、君……」

大げんかのあと、ぼくは彼のことを君付けで呼ぶのを止めたつけどもカルマ君はやっぱりカルマ君だ。

「俺のこと知ってんの？」

だがこの世界でカルマ君に会うのはこの日が初めてで、彼からしたら知らない人から呼ばれるようなものだったらしい。あからさまに眉を顰めていた。

「渚ちゃんが知ってるのも無理ないでしょ。知らない人なんていないと思うよ、赤羽君。君、この前入学して早々に暴力事件を起こしたことで有名だから」

「ちつ、伊藤さんが通報しなかったら目撃者ゼロだったんだけどね。いちご煮オレは買いそびれるし、もう帰ろつと」

「いちご煮オレいる？」

「え、いいの？　ありがと！　えつと、渚ちゃんだよね」

「ほんとお人好しなんだから。それが渚ちゃんのいいところでもあるけどー」

「代わりに俺なんか買うよ。何がほしい？」

カルマ君は自動販売機にお金を投入し、ぼくの返事を待った。

「それじゃあ、ばなな煮オレ」

「お、分かってるね。はい。じゃね」

自動販売機で即購入したばなな煮オレを投げてよこすと彼は手を振ってその場を立ち去る。

「成績だけはいいいんだけどね。どうも素行不良が目立つから教師ウケ悪い」

「だよ。それで、何の話だったっけ？」

わ、姫希さんが凄い動揺した。

ひどく乱れた意識の波長を感じたぼくは冷や汗をかく。じゅりあちゃんが一体どうしたんだろう。浅野君の名前を言いかけたからぼくらの関係でも疑っているのだろうか。

「じゅりあちゃんが『渚ちゃんは浅野君と付き合ってるの？』って」

予想は外れてはいなかった。ぼくは間髪入れずに返事をする。

「付き合ってるよ。なんで？」

「なんでって……じゅりあちゃんが浅野君のこと好きだからでしょ」

「そっか。でもじゅりあちゃんって正直——」

「うん、浅野君が1番嫌いそうなタイプ。浅野君がOKしないことぐらい分かっているよ」

あの甘ったるい声はどうしても好きになれない。あの後にも何回か顔を合わせたことがあるけど、自分のことを名前呼びする子ってろくな子がいないと思った。

「それで、姫希さんはどうするの？ 手伝う？」

姫希さんは首を横に振った。

「まさか。渚ちゃんが浅野君と付き合ってるって言ったら手伝わなくて済むなって思ったただだよ。じゅりあちゃんがそれで反抗しなければいいけどね」

それにじゅりあちゃんが姫希さんよりテストの順位が下だといひけどね。

ぼくは心の中でこっそりと付け加える。

「その時はその時かな」

「……うん」

ふと彼女の意識の波長から憎悪が垣間見え、ぼくはぞくりとした。失敗した？でも他になんて言ったらいいの。

「あ、ずっと気になっていたんだけどね？」

「どーしたの、渚ちゃん」

「姫希さんは誰が好きなのかなあって」

最近女子の会話で断然盛り上がるネタを持ち出すと、姫希さんの顔が火照った。

「え！ あー……」

「気になる。教えて？」

「……おり」

「だれ？」

「伊織だよ……っ」

恥ずかしがる姫希さんはやっぱりかわいい。彼女は眼鏡をかけ直して真っ赤な顔を隠したりと女の子らしい反応を見せる。

「やっぱりね。今の質問、毛利君にもしたことあるんだ」

「うそー！」

「なんてね」

舌を出して言うと言姫希さんは「もう」と怒ったふりをして来た。

「でも、柵ヶ丘は思ったより勉強勉強って感じだからさ、恋愛なんて」「無理だよね」

ハモったことに2人で顔を見合わせて笑いあう。ぼくはこんな風に過ごしていたいだけなのになと女子たちが格付けするのに嫌気がさしていた。姫希さんはただの幼なじみが好きな女の子なのに、何で女子の格付けにこだわるんだろう。

その理由は暫くして判明することになるのだがそれはまた別の話である。

\*

試験の順位が貼り出され、クラスのはぼ全員が順位を見るために教室を離れている時、ぼくは教室で浅野君と全く違うことについて話していた。

『この前教えてくれた「赤と黒」の主人公って浅野君っぽいよね』

フランス語で尋ねると、浅野君は目をぱちくりしていた。

『アレは頭良いけど、最後捕まるじゃないか。負け犬だ。僕は負けたくない』

1周目で負けた浅野君を見たことがあるので何とも言えないなとぼくは判断した。どちらにせよ、彼は単に小説の中とはいえ人と比べられるのが嫌いなのだろう。

『でも人に笑顔で接していて本当は腹黒いっていうのが似てる。浅野君ゼットたい昔ナポレオンとかにハマってそうだし』

『それでもないな。渚はアレに似てる』

『あれって?』

首を傾げると何故か浅野君は吹き出していた。

『ハムスター』

『ひどいなあ』

ふふふと少し笑ってしまう。まさか小動物に似てると言われるとは思ってもみなかった。

『小さいし体術の練習でもちよろちよろ動き回ってるし。自分は僕と対等だと思ってるだろう?』

『浅野君がぼくのことを手下とか思ってるなら別に構わないけどね。ぼくだって自分が強くなるために体術の練習とか付き合わせて、利用しているみたいで申し訳ないし』

『そうか』

手を顎に当てた浅野君にも思うところはあるようだ。ぼくからし



たらギブアンドテイクの関係だと思っていたが、彼はただの手下としてか思っていないかったような気がする。それはそれで憂鬱だ。

「おー、浅野。お前満点で1位だったぞ」

「……ぼくもほぼ満点だったと思うんだけどなあ」

ぼくはぼそりと呟いた。テストは前日にまとめて返された。数学でしたしようなないミスでの99点以外は全て満点だったので順位表を見なくても結果は目に見えてると思ってるの行動だ。

「君も2位。2人とも流石だよ」

教室に入ってきた生徒4人が目に入り違和感に苛まれる。

あれ？ この面子見覚えが。

順位表を見に行っていない、教室に残っているのはぼくと浅野君、それから4人。

まだ全員ぼくが知っているのより少し若い、この顔ぶれは無性に腹が立つので覚えていた。

「だが、教科の各分野で君らもそれぞれ満点で1位を取っているじゃないか。榊原、荒木、小山、瀬尾」

やっぱり?!このメンバーって五英傑だ!

「当然の結果さ、浅野君。そしてここには上位全員が揃っている。それは渚ちゃん、君も含めてね」

自然にウインクをされて鳥肌がたつ。前原君よりひどい女たらし、榊原蓮。これで作文コンクールや短歌のコンテストなんかで賞ばかり取っているのだから、彼の言葉が気品に満ちていることは認めざるを得ない。女子からの人気もあり、女たらしなのに何故か嫌われない。

「浅野君と君ができてるって噂は放送部でも有名だよ。この学校の大スクープだからね」

荒木鉄平。親の影響でニュースの裏情報や、社会の変化に敏感なマスコミ志望。放送では滑舌の良さと話題性の豊富から火曜の昼休みの放送は生徒の楽しみの一つだったりする。

「僕なんか呼ばれてよかったのかな……?僕はただ暗記に優れているだけで他に凄い才能もないし。みんなとは違ってC組だ。実はク

ラスメイトにも虐められている……」

ネガティブな発言をする小山夏彦にぼくは中学1年のころはこんなキャラだったのかと苦笑する。

「暗記は大事なことだよ、小山君。今回君はそれで理科の1位を手にした。強者が強者ぶらなければ弱者は見くびる。だから君は堂々としていればいいと思うが」

言っていることは間違っていない。でも小山君は浅野君の発言で中学3年生の時にあんなよく分からないキャラになってしまったんだなと思うと何増長させてるんだと呆れなくなった。

「おい、大石渚。今から言うことをよく聞いておけ」

帰国子女の瀬尾智也は先ほどからずっとぼくに挑戦的な視線を送りつけてきていた。

「えっと、どうかしたの？」

『LAに1年。英語で負けるつもりはないです。せやからお前には負けへん！』

何だろう。これは言ってもいいのかな。

『……君訛り大丈夫？』

しれっと英語で尋ねると相手は「訛りなんてないぞ！」と憤慨した。

『ロサンゼルスって訛り多少あるから、気にすることはないよ。渚はどうやらイギリス英語を話すようだしね』

浅野君はぼくに『仲良くしてくれ』と小声のスペイン語で注意し、弁明を始めた。瀬尾君はまだ納得していないようだったが渋々頷く。

ちなみにビッチ先生曰く、女子は特にイギリス英語を話していた方が上品で洗練されて聞こえるらしい。ビッチ先生は国籍を誤魔化したりするためにアメリカ英語も使えるらしいが、色仕掛けで使う機会はあまりなかったという。

色仕掛けがしたいわけじゃないけどね。

「英語の発音が上手で感心するよ。美しい。浅野君のお手つきじゃないければ今すぐデートの誘いをしたのに。ああ、やっぱり今日の放課後カフェでもどう？」

くっ……ここで浅野君とは何ともないと言ったら絶対離れなくな

る！ このプレイボーイめ。

「さて、雑談はこれぐらいにしよう」

「そういえば何で君たちはここに？」

今更のようにぼくは彼らに訊く。

「僕が呼んだんだ。昨日、試験が返却された時に学年の各教科で一番を取っている生徒を先生に尋ねた。理由はみんなの光になるためだ」

「「「……………」」」

「浅野、お前何言ってるんだ？」

まあいきなりこんなこと言われたらそうなるよね。ぼくだって浅野君が何言ってるのかさっぱり分からないし。

中学1年生のカリスマ性溢れる浅野君でもこれだけで支配できるほどの力量はまだないらしい。

「僕はみんなをまとめるのには君たちのように各分野で優れた人材が欲しいということさ。小山、お前は確かC組だったな？ だが来年にはきつとA組になる。僕が断言しよう」

「僕たちが優れていると言ってくれて嬉しいよ、浅野君。でも僕たちで一体どうやってみんなをまとめるって言うんだい？」

髪をかきあげながら榊原君が言った。

「簡単な話、僕と君たちで『五英傑』になってもらう」

ぼくは息を呑んだ。五英傑は浅野君が仕組んだ名称だったんだ！

てつきりみんなが呼んでいくうちにそういう名前が付いたのだと解釈していたため、浅野君の戦略には驚かされる。

確かにあだ名ならよく考えたらこの5人で五英傑の必要はないしな。カルマ君だって今回6位辺りにいて、数学ではぼくらと並んでトップだったのに浅野君は素行不良の生徒には用がなかったわけだ。五英傑は本当に誰が言い出したのか分からないけど、いつの間にか広まっていた。そんな名称だった。

「知り合いに情報操作に長けた子がいてね」

彼は薄く笑って目を細めた。その子は姫希さんなのだ。ぼくは瞬時に確信する。

「僕だって情報操作は得意だけど？」

荒木君が不満そうに漏らした。だが、それを浅野君は「それは止め  
ておこう」と跳ね返す。

「本人がやるより赤の他人が流した方が噂は広まるからね。僕らのあ  
だ名を定着させ、別格視させるんだ。そうしたらすぐに学年……いや、  
学校中の生徒から特別扱いを受けることになるだろう。みんなを  
まとめるには十分すぎるぐらいね」

急に恐怖心に襲われた。珍しく意識の波長が穏やかでない彼から  
は興奮が伝わってきた。征服欲が声色から聞こえてくるようだ。

「悪い話じゃないな」

「むしろプラスしかない」

「しかし、何で今この話を持ちかけるんだ？」

全員話に乗る気ではあるが、疑い深く、浅野君の意図がよく分から  
ないようだった。彼は裏の顔を見せず、表の爽やかな顔のまま全員を  
見渡す。

「成績が良いものがつるむのは当然だろう？ この機会に良い友人に  
なれたら嬉しい」

「でも、『五英傑』ということは渚ちゃんが入っていないのかい？」

「渚は女子だからまた別だ。そうだね、そこは適当に考えとくよ」

男子だったら五英傑の仲間入りしていたのかもしれないのか。何  
だか感慨深いなあ。

それからしばらくして五英傑は全校中の知るものとなった。ぼく  
が何故か「学問の天使」呼ばわりされるようになったのには驚いた。  
もう少し凝ったのはなかったのかな。英傑よりあだ名のランクが上  
のような気もするんだけど。廊下で「あ、天使」って言われると天使  
は止めてほしいと切実に願った。陰で隠れ信者が出来た瞬間、ぼくは  
もういいかと諦めることにしたのだった。

## 勉強会のはなし。

4月からすでに半年が過ぎ、またテスト前を控えた10月のある日曜日の朝7時半。いつもは9時まで鳴らない目覚まし時計が鳴った。ベッドから飛び起き、お母さんに選んでもらった赤チエックのワンピースを見て思い出す。

そうだった。今日は勉強会の日だったんだ。

同じくお母さんに買ってもらったふわふわのパジャマからワンピースと黒タイツにはき替える。髪の毛はサイドポニーにしてみた。この前姫希さんに似合うと絶賛された髪型だ。

「渚？ 今日随分と早いなあ」

ぼくが朝ごはんの準備をしていると、いつもぼくが目覚まし時計で器用に起きてくるお父さんが眠たそうに目を擦りながら居間へとやって来た。

「友達と勉強会の約束してるんだ」

「こんな朝早くからか？」

「まあね」

実は浅野君の家で開かれる勉強会は10時からなのだが、浅野君にみんなが来る前に体術の練習をしようかという誘いを受けたので有難く了承したのだ。そういうわけで8時半に浅野君の家で待ち合わせをしているわけである。

「ベーコンエッグとごはん、お味噌汁でいいかな？」

出来立てのものをお皿によそってお父さんの目の前に置く。いつもの日曜日に比べたら少し手抜きな感じだが、朝食に手の込んだ和食が出てくる家はあまり多くないだろう。

「充分だよ。渚は偉いなあ。この前上司にお前の話をしたら感心されたよ。成績も優秀で家事を手伝ってくれるなんて良い娘さんだって」  
「うちは共働きだから2人に無理させたくないんだ。わたしが櫛ヶ丘に行けるのは2人のおかげだしね」

2人のおかげとは言いつつ、実のところ助かっているのはお母さんだ。ぼくは2人の中を取り持つためになるだけお母さんの負担を減

らす努力を日々行ってきた。家の家事はできるだけぼくの分担にして、彼女がぼくを着せ替え人形のように扱う時は与えられた服を着る。幸いお母さんの趣味は悪くないし、友達と出かける時に必要な分だけの服をくれるのは服にダブリが出ないので助かっていた。

「そういうばお父さん、お母さんまだ起きない？」

「何だか体調が悪いみたいだ。今日は当分起きそうにないね」

「それじゃあ味噌汁とごはん後で温めてお母さんが起きたら用意してあげて。もうそろそろ行かなきゃ」

小さなドットが刺繍された薄ピンクのリユックにテストのまとめノート、先生に配られた復習プリントとペンケースが入っていることを確認する。

時計をちらりと見やるともう8時を過ぎていた。浅野君の家が幸い自転車で20分ほどなので全く問題ないペースだ。

「行ってきます」

「行ってらっしゃい」

ぼくはお父さんの声を背中に玄関を開けた。

\*

「遅い。何故10分も遅れたんだ」

「ごめん……」

浅野君の家に着くなりぼくは玄関で一喝された。自転車で行けば大丈夫だと思っていたが、何故か踏み切りがなかなか開いてくれない、さらにはいつもは学校帰りに寄る程度なので道をあまり覚えていなかったことが災いして迷ってしまったのだ。結局スマホの地図の力

を借りて来てはみたものの、着いた時には8時40分。完全に浅野君の怒りを買う羽目となった。

「まあいい。荷物は奥の書斎に置いておいてくれ。今日はそこで勉強会をするから。着替えだけ持って——「着替え？」持ってきてないのか」

「そんなこと君言つてた？」

「まさか渚がそんな格好でくるとは思つてなかったからな。体術の練習をする約束だったからてつきりズボンで来ると思つていたよ」

「あーそうだよ。ぼく私服ズボン持つてないからどつちにしても意味ないけど」

お母さんが女子のかわいい格好が好きなので家にズボンはない。本当は買つてほしいと頼みたいところだが、1度話を持ちかけた時に「いつどこで履くの」という言葉に何も言い返せず買ってもらえなかった。

「困つたな。僕の服じゃあ大きすぎるだろう」

身長の違いが大きいぼくたちは服の貸し借りが難しい。それが雨に濡れたなんて時ならいいんだろうが、今からするのは体術である。今更ながらに体操着を持つて来るべきだったと後悔していた。

「仕方ない。染井さん！」

浅野君が声を上げると、奥の部屋から50代ぐらいの優しい女の人が出てきた。前来た時にも見たことがある。浅野家のお手伝いさんだ。

「何でございますか、お坊っちゃま」

「この子が着れるサイズで、僕の古い服上下持つてきてくれ。できれば動きやすいもので頼む」

「かしこまりました」

「自転車で来たんなら喉が渴いただろう。キッチンでお茶でも出すよ」

「うん、ありがとう」

広めのキッチンは居間と繋がっていて、テーブルは思ったより小さく、2つだけ椅子が置かれていた。浅野君と理事長の椅子だろう。そ

してテーブルの上にはまだグラスが2つ乗っていて、つい先ほどまで2人が朝食を共にしていたことが分かる。

「浅野君、今日理事長は……?」

「僕たちが今日使う書齋とは別の書齋で仕事だ。いつも籠っているがたまに顔を出すはずさ。基本僕には無関心だが、勉強に関してはまた別だからね」

麦茶を注ぐ浅野君はぼくの発言に対して何も思っていないようにほっと胸を撫で下ろした。てっきり家族の話に首を突っ込むなど怒られると思ったのだ。

「他のことはノータッチなんだね。寂しくないの?」

「……まさか。僕はこれが普通だと思っっているよ。それにしても」

「どうしたの?」

ぼくにお茶を渡し、彼は話題を逸らした。彼が何となく家庭内の話をしたくないんだらうなあと思えばくも返事をする。ふと顔を上げるどくつくつと笑いを堪えていた。

「日本語で話すことが少ないから今日は新鮮だと思っただね。聞こうとしなくても会話が耳に入ってくるのが不思議な気分だ。これでも違う言語で渚と話すのは結構楽しんでるんだけどね」

「今も日本語じゃない方がよかつたかな?」

「それは勘弁だな。これから運動も勉強会もするのに別のことにまで頭を働かせていたらエネルギーが切れる」

「お坊っちゃま、服の用意ができました」

丁寧に畳まれた男物の服上下を持って染井さんが現れる。浅野君はそれを受け取ると尊大な眼差しで相手を見据えた。

「ご苦労。もう下がっていい」

「失礼します」

お手伝いさんっている家にはいるんだなとぼくが彼女がキツチンを出るまで凝視していると、浅野君が服を投げて寄越した。鍛えられた反射神経でそれをぼくは掴む。

「……………」

3秒ほど間が続いた。浅野君が痺れを切らし、ため息を吐く。多少



の苛立ちがその態度から分かった。ぼくがのろのろしているからだ。

「おい、トイレで着替えてこい」

「だよね。キッチンで着替えるのも変だし」

「そうじゃなくて……渚、男相手にストリップショーでもするつもりか？」

「え？ ……ああ！ そうなっちゃうのか」

そういえばぼく女子だった。

すぐくナチュラルに浅野君のことを同性の友達のような気分で接していたため、すっかり忘れていた。同性の友達なら「ちよつと後ろ向いてて」と一言言っただけで着替えればいいが、異性の友達はもちろん別である。着替える方も待ってる方も互いに気を使うため面倒だ。

「やっぱり分かっていなかったな。少しは自覚を持て。いつか襲われるぞ」

「気をつけるよ。トイレどこ？」

「こっちだ」

彼は廊下の向かって左を指差した。着替えを持ってぼくが知っている家庭用トイレより若干広めの空間で服を着替えた。サイズがぴったりで、お手伝いさんに心の中で「グツジョブ」と賛辞の言葉を送った。

あ、思い切り声に出た。

トイレから出ると浅野君の呼び出しで神出鬼没の妖怪の如く現れた染井さんに服を預け、ようやくぼくらは畳の広い部屋で練習を始めることとなった。

「いつもの通り言っておくが、クラブスタナーは禁止。デーパーキスは論外。後は好きにやれ」

「……了解」

好きにやれ。これは浅野君がぼくと合わせ稽古をしてくれる時に必ず言う言葉だ。これをぼく流に解釈すると——殺す気で殺れということ。

ぼくの目には殺意が宿っていた。今の標的ターゲットは殺せんせーじゃない。浅野学秀だ。

浅野君に向かって拳を丸めたまま走り込んだ。彼はそれをすりと避け、ぼくは2撃目として違う角度から殴りにかかる。彼は攻撃を綺麗に捌き、ぼくの脇腹を蹴った。

「これで1回」

ぼくは浅野君を睨みつける。ずるいと分かっている彼の足を引っかけ、後ろから羽交い締めにする。

「こつちも1回——痛っ」

腕を捻られ、痛がっている隙に体制を逆転された。浅野君がぼくの上からTシャツを掴み、右手を大きくかざして顔に寸止めのパンチをよこした。殴らなかつたのは女子であるぼくの顔に傷を付けないための配慮だ。

そこからぼくは両足を浅野君の胴に回して締めつける。主に胴締めと呼ばれる技である。彼は舌打ちをして「そこまで」と言った。

「僕の負けだ」

「でも浅野君手加減してくれてたもんね」

「練習とはいえ女子に負けるとはどういうことかね？」

「理事長……!」

背後の低い声にぼくは驚いて声を出す。

「大石渚さん、だったね？」

「は、はい」

「随分と多くの才能を持っているようだね。学問の天使とはよく言ったものだ」

「……お言葉ですが、才能なんて持ってないですよ。努力して多くの才能を持った天才のふりをしているだけです」

「つまり、自分は凡人であるか？」

「そう思っています」

「私の愚息とはどういう関係なんだい？」

「とても大切な友達です。もっとも相手にそう思われているかは分かりませんけどね」

秒コンマも置かずに理事長の想像とは違う答えを返した。浅野君

に視線を送ると照れ隠しのように目を逸らす。

「浅野君、君は彼女のことをどう思ってる?」

「渚は友達ですよ、手下とは違った」

ぼくは意外な発言に照れ頬を赤くした。あの浅野君が友達だと思ってくれているなんて!

「結構。君に友達がいるか分からないが、とりあえず認めるとしましよう。彼女の優秀さに免じて」

「あの……」

「何か聞きたいことでもあるのかい?」

「1度手合わせお願いしてもいいですか?」

「おい、渚——」 「浅野君は黙っていて」

ぼくだって理事長が強いことなんて10も承知だ。それでも強い相手に挑む時ほどわくわくし、緊張感に包まることはない。

「……私は手加減をしないが」

「むしろ本気を見せてください。強者の一撃というものに興味があるので」

浅野君は確かに強い。でも、ぼくは密かに物足りなさを感じていた。何かが違う。2代目死神と戦う時、烏間先生と戦う時。そもそもぼくが手加減されているというのもあるが、そんなの浅野君の時だっただけだ。烏間先生のように途轍もなく強い人に教わってもぼくじゃあ習得できそうにないからと同年代を選んだのが間違いだったか。それとも……

ぼくは体格の大きな理事長を見上げ、横蹴りから争いをスタートさせた。理事長はそれをわざと片手で受け、ぼくを突き飛ばした。浅野君は恐る恐るといった様子でぼくらが対戦する様子を見ている。そういうえばとぼくを見て思いついたかのように言った。

「渚、禁止は取り消しだ!」

ぼくはハッと気がついた。浅野理事長はクラブスタナーの存在を知らない。これはぼくにとって唯一、彼より優位に立っている点ではないか。

ぼくは浅野理事長にニツコリと微笑みかけた。ぼくの笑顔は相手

の際を突くのに1番良い。戦闘をしながら相手に笑いかけることに動揺しない人がどこにいるんだろう。

意識の波長の中で、笑顔に気を取られたほんの0.1秒。ぼくは両手を鋭く合わせた。

理事長の表情が固まる。殺ったかと期待の目を寄せるぼくに、理事長は口を開いた。

「へえ、君は面白い手を使うね」

気絶していかない?! しかも、全く効いてもいない。

「でも私にはその衝撃では足りない」

理事長は口端だけに笑みを残し、あんどりと口を開けるぼくに同じようにクラップスタナーを食らわせた。

ぼくより強い大人の手で打たれた、何倍も威力のある衝撃波がぼくの全身を襲う。意識が消えそうだ。自分の技なのに何の予防策も取っていないかった!

「なるほど。これは使える。問題点はそうだね、君の衝撃波は詰めが甘い。笑顔は不意を突くには良いように思える。でもね

「笑顔ほど相手を警戒させるものもないんだよ」

意識が薄れる中、浅野理事長の言葉がぼくに響いていた。カルマ君のように舌を噛むという案は思いつかなかった。そのままぼくは自分の1番得意な技で気絶をした。

\*

「渚……渚ちゃん！」

ぼくが目を開けるとそこはベッドの上だった。目の前に姫希さんがいて、ぼくの手を優しく握っている。

「びっくりしたよ。来るなり渚ちゃんが気絶してるなんて言われるんだから。貧血、だったっけ？」

辺りにキョロキョロと目を動かすと、勉強机の上に置かれたシンブルな時計が11時20分を示していた。

「他のみんなは？」

「今部屋で勉強している。本当は浅野君が心配して一緒に居るって言ってたけど、五英傑のみんなを待たせるわけにもいかないから私」

浅野君ぼくが気絶するとは思わなかっただろうしね。理事長はほんと手加減つてものを知らなさすぎる。

「姫希さんありがとう」

「ううん。もう大丈夫なの？今日は家に帰る？」

「大丈夫だよ。せつかくだから勉強していく」

ぼくが起き上がると、自分の服が預けておいた服に戻っていることに気がついた。奥からやってきた染井さんに会釈を受け、彼女がやってくれたんだなと感心する。

書齋に移動すると既に大きなテーブルの上で教科書やノートなどを広げる五英傑プラス毛利君の姿が目に入った。そういえば毛利君はどの教科も成績が良く、五英傑とカルマ君の次に頭の良い生徒だけど、幸か不幸か突出した教科がないため浅野君の五英傑選びから除外されてしまった。器用貧乏というかなんというか。つくづく運のな

い男子だ。

『渚！もう気絶は大丈夫か？』

『大丈夫……っていうかわざわざスペイン語で言う必要ないって』

「少し動揺したからね。朝食抜きで来るのは良くないと思うよ」

ああ……そういう設定なんだ。

ぼくは朝食をかなりしつかりと食べてきたが、そういうことにして薄く微笑んで頷いておいた。

「今回の古典の範囲随分とイージーすぎやしないかい？ 範囲が広いというのもあるけれど」

榊原君は困ったものだねと伏し目がちに言った。それに対してこの人は男の前でもこんなキャラなんだから全部素でやってるんだろうな、と遠い目をしたのは内緒である。最近になってようやく榊原君は女たらしだけど悪いやつではないことに気がついた。女の人はころころ変わるけど二股はしていないところとか。

「そうか？ お前にとってはってだけだと思うけどね。僕は今回の社会で何のニュースが出るかって気になっているところだ」

と荒木君がドヤ顔で言った。自分はもう分かっているような口ぶりだ。

「ふん。英語の簡単さは初めから過ぎて何とも言えないな」

「理科は暗記だ。暗記さえできれば何も要らない」

全員が自分の得意教科について主張を始める。よくテーブルの上に広げられているノートの教科を見ると、全員が自分の1番の得意教科をやっていた。

「……お前ら少しは自分の得意教科以外もやってくれないか？」

浅野君は呆れていた。彼は満遍なく全ての教科を勉強するため、得意教科がある彼らの気持ちは分らないのだろう。

「なら社会からだ」

「いいや、国語だね」

「理科に決まっている」

「English!」

「あーもううるさいな！ 数学からにすれば解決だろ?!」

毛利君が教科書を閉じて叫んだ。全員の動きがさっと止まり、毛利君へと視線が注がれる。

「それもそうだな」

「伊織君、君たまには良いこと言うね」

髪をなびかせ榊原君が褒めた。「たまには」という言葉のせいで嫌味に聞こえる。本人にその気はないのだろうが。

「どうせ俺は五英傑から外された除外品だよ！くっそ……2週間後の

試験でお前ら全員抜かしてやる！」

何だか毛利君って報われないなあ。姫希さんへの態度も明らかに好きな子に対するものなのに姫希さんには気付かれていないし。テストで良い点取ってるのにみんなは5英傑ばかり褒めるし。

「渚、伊藤さん。こっちの席が空いてるからそこについてくれ」

ぼくらは空いている浅野君の横の席に座ると、ノートを出し始めた。

「とは言っても、何勉強すればいいか決まりそうにないや。苦手科目からだったら理科かな？」

「じゃあ私も理科一緒にやるよ。実は分からない範囲があつて聞こうと思つていたんだ。この実験なんだけど……」

2人で理科の範囲をやっていると1時間ほど過ぎ、時刻が12時半を回ったところになった。

「このまま勉強するならファミレスでも行く？」

「いや、何事もメリハリが大事だからね。出前でもとろうか」

姫希さんの提案を却下し、浅野君は電話を取り出した。何の選択肢があるのかという毛利君の質問に対し指を折る。

「そうだね、そばとかピザ、寿司とかかな」

「お寿司……」

じゅるり。ごくりと唾を呑み込むと、全員が振り返った。実はこの中にいるほぼ全員がお金に余裕がある富裕層であつたりする。回転寿司には行ったことがなく、寿司といえば高級寿司を指すのが彼らの特徴だ。もちろん行き慣れており、珍しいものでもない。

だから寿司によだれを垂らしそうなぼくの表情に驚いたのだろう。慌てて誤魔化そうとしたが既に遅かった。

「誰かこの天使に寿司を恵んでやってくれ！」

「寿司だ寿司！」

「え、俺。ピザちよつと食べたいんだけど……」

毛利君の言葉で空気が凍る。全員の見解が一致していた。

「毛利君、レディーファーストという言葉を知っているかい？」

呆れ顔の榊原君に毛利君は怯んだ。しかし中学1年生の男子は育

ち盛り。食べたいものは食べたいのである。そんな様子を見かねて姫希さんが駄々をこねる。

「私もお寿司食べたいんだけどな、伊織」

「うっ、分かったよ」

驚くべき意見の一致率にふうんと浅野君は思うところがあったよう。ぼくの顔を見てにこりと微笑む。

「渚、みんなの意見を一致させるのにその手はうってつけだね。今度からそれをお願いするよ」

「わざとじゃないよ?!」

出前でとったお寿司はめちやくちや美味しかった。みんないつもあんなものを食べてるなんて羨ましい。

勉強会は昼食の後も行われ、結局あの後理事長とは会わなかったけど、ぼくの中で受けたショックと理事長への尊敬の念はしばらく消えることはないだろう。

『笑顔は相手を警戒させるものでもあるんだよ』

そうだよ。浅野君の時クラップスタナーが初見にも関わらず見破られたのはぼく的笑顔に彼が警戒もしたからだ。不意をつくという点で戦闘とかけ離れた表情は相手によつては何か起こると思わせることと同じ。

あとはクラップスタナーの衝撃が弱かった？

まずいなあ。あの技のアプローチ方法を少し考えなくては。

みんなが試験勉強をする中、ぼくはひたすら技について考えていた。



変化のはなし。

また春がやって来た。

中学2年生のクラス分けは廊下に貼り出されていて、当然のようにぼくはA組に入っていた。

「なーぎさちゃん!」

目隠しをされ、ぼくは視界が遮られたことにちよつとびつくりした。とうか僕の後ろを取れる人なんていたんだ。これでも環境変化には敏感な方だと思っていたんだけど。

「だあーれだ?」

キツめの香水の香りが漂い、これはあの子しかいないなど確信した。

「じゅりあちゃん、かな?」

「うん! 同じクラスなんだあ、よろしくねえ?」

そういえば姫希さんはじゅりあちゃんに成績で勝っていたらしい。姫希さんが優位に立てることで、じゅりあちゃんが浅野君に近づく機会が少なくなったことから浅野君も姫希さんもほつとしてるとか。

「そうだね。あれ、姫希さんは……?」

「わかんない! ねえ、渚ちゃんちよつとトイレ行かない?」

「うん? いいよ」

妙に暗い顔をしているけど大丈夫かな? 気のせい意識の波長が怖い……?」

違和感に首を傾げるが、女子のトイレ行こうという誘いは珍しくないため了承する。

女子トイレに入ったにも関わらず個室に入ろうとしないじゅりあちゃんに、ぼくはようやく違和感の理由が分かった。周りには彼女の取り巻きが4人はおり、全員が憤怒の形相でぼくを見下ろしていたからだ。ぼくの後ろからやって来た女子に押されぼくは床に打ち付けられた。上からバケツで水をかけられる。

「あんたさあ、浅野君の何なの?」

「え……なに、じゅりあちゃんナンカ色々チガウ」

声とか話し方とか表情とか！

そうか、猫かぶり系女子なんだ、この子。

そうやって考えると、さっきの意識の波長で察して断ればよかった  
と思い直す。既にびしょ濡れのこの状態ではどうすることもできない  
けれど。

「ちよつと成績良いからって浅野君にべつたりくっ付きすぎ。天使と  
か呼ばれて調子に乗ってるんでしょ」

「そうよ。あの5英傑と勉強会を何度かしてるって話も聞いたわ。榊  
原君にも何度もアプローチしてるって！」

「いや、アプローチされてるのはわたしの方なんだけどなあ」

事実とは違う捻られた噂に変な汗をかく。さすが5英傑、ファンが  
多い。

「浅野君困ってるのわかんないの？このビッチが」

「自分が何ヶ国語も話せるアピールとか、かわいい子ぶってマジむか  
つくなって思ってたんだよね」

「とにかく！浅野君たちに近づかないで！」

「今度近づいたら虐めてあげるから。覚悟しといてよね」

「ねーねー、この髪邪魔だから今切っちゃおうよ！」

じゅりあちゃんがポケットからハサミを取り出し、ぼくの髪に当て  
ようとした。さすがに無抵抗だったぼくもそんなことされたらお母  
さんになんて言われるか分からないので切られないように抵抗しよ  
うとする。そこに突然、トイレのドアが開くキィーという不愉快な音  
がしてぼくはそれが助けに思えた。

「そこまでだよ、じゅりあちゃん」

静かに告げたのは姫希さんだった。トイレのドアの前で仁王立ち  
して立っているのが様になっている。学年の女子を仕切る女王の登  
場に女子たちは口をぱくぱく魚のように開け黙り込んだ。じゅりあ  
ちゃんが思わぬ登場に顔を大きく歪めている。

「ひ、姫ちゃん！なんでここに……」

「伊織から渚ちゃんが女に連れ去られたって言うから、誰かと思った  
らやっぱりあなただったんだ」

「え、これは何かの間違いだよお……渚ちゃんに脅されてえ！」

白々しいことをいうじゅりあちゃんにぼくは声を出そうとしたが取り巻きに口を押さえられた。姫希さんは「ふうん」と悪戯っぽく笑い、スマホを弄り始める。

『あんたさあ、浅野君の何なの?』

姫希さんの持つスマホから聞こえてきた音声に女子全員が青ざめた。ぼくはびしょ濡れのままぼちくりと目を瞬かせる。

姫希さん、一体何考えてるんだろう。

「残念だったね、私があなたたちが思ってたよりずっと早く来て。あ、こういう音声を放送部に届けるってどうかな?分かる人には分かっちゃやうと思うよ、誰が何を言ったのか。浅野君どう思うかな」

全員分かつていた。姫希さんならやりかねないことぐらい。姫希さんには校内に多大なコネがあり、今の放送部部长も姫希さんと仲が良い。じゅりあちゃんはお金持ちのお嬢様で、マスコミのコネだって持っているだろう。でもこれは学校内の問題。出どころを知られないように噂を流すのだから、彼女にかかってしまえば荒木君の情報操作がしよぼく見えてしまうほどだ。

「ごめんなさい!悪気はなかったんです。だから止めて!」

「お願い!そんなことしないで!うちら友達でしょ?」

「ふふっ、悪気はなかった?友達でしょ?ふざけんな。どの口がそんなこと言ってるわけ」

姫希さんは笑っていたのに、怒っていることがすぐに見て取れた。その様子に恐れる女子もいる。

「ひいっ!」

「ねえ、一つ良いこと教えてあげるからよく聞いて?……今度渚ちゃんにちよっつかい出したらあんたらの悪事を浅野君だけじゃなくて校内中に広めてあげる。っていうか、渚ちゃんより成績の低いあんたらが集団リンチなんて寒いことどうしてしようと思ったのかほんと疑問。そんなことしてる暇あったら勉強しようね?」

この中の全員、今年はA組に入ることを果たしたものの、姫希さんの成績は圧倒的であり、女子の中ではぼくの次に優秀なのが彼女だ。

そして女子社会の裏ボスをしているような怖い人物なため、必然的に誰も彼女には逆らえないのだ。だからこの集団リンチは姫希さんがいない時を狙ったものと思われる……が。果たして本当にそうなのだろうか。ぼくには一つ大きな疑問があった。

「「「ごめんなさいっ！」「」」」

「謝るなら、渚に謝って」

「ごめんなさい。じゅりあに言われて仕方なくやったの！」

取り巻きの1人が濡れたぼくに何度も頭を下げる。他のみんなも同じく頭を垂れていた。

「じゅりあのせいにしてよお！みんなだつて渚ちゃんむかつくつて言つてたじゃん！」

「はあ……もう出て行つてくれない？おつむが弱い子たちの仲間割れとか心底どうでもいい」

「放送部には届けないでくださいね？絶対ですよ！」

彼女たちはぷりぷりしながらトイレを出て行つた。彼女たちが出て行ったことでしゃがみ込んでいるぼくの姿がようやく姫希さんに露見され、彼女はあちやーという顔でわたわたしていた。

「わあ……派手に水ぶちまけられたね。今日体操着持つてきてる？」

「さすがに始業式だから持つてきてないや」

「女子バスケット部は今日活動ないからね、私も持つてないんだ。運動部の男子に聞くしかないか」

実はぼくは結局姫希さんと一緒に部活に入りたくて女子バスケット部に所属していた。とはいえ小柄なのもあり、2年生になってレギュラー入りした姫希さんとは違って2軍だ。それでいてすばしっこさだけは1番と言わしめるほどだったり、身長が伸びたらかなり使えるんだけどなと姫希さんに言われるけど、ぼくはバスケの選手を目指しているわけじゃないのでそれは放っておく。身長は伸びてほしいけどね。

「始業式どうしよう……」

「先生に言つとくから保健室で休んで。後のことは私に任せてよ」

「姫希さん、頼りになるね」

「大したことじゃないって」

謙遜する彼女にぼくは感謝の笑みを顔に貼り付けたまま、彼女の嘘を見破った。

「でもね、姫希さん」

「なあに？」

「来るのが早すぎるんだよ」

録音されていたのは、リンチの内容全てだった。でもそれはおかしい。それに姫希さんが彼女たちを止めたのはじゅりあちゃんがぼくに危害を加えようとした瞬間。あの時あのタイミングで姫希さんが出てくる。その時点でぼくはある可能性を考えた。全て彼女の手の上だったんじゃないかって。

「……さすが渚ちゃんだね。何で分かったの？」

「毛利君から聞いて来たんなら、あんな最初の会話から録音されてるなんておかしい。だから姫希さんは……」

最初から録音して弱みを握るためにわざとぼくから離れて集団リンチを狙ったんだよね。

そこまで姫希さんは言わせてくれなかった。ぼくの口を塞ぎ、艶やかに笑ってスマホを仕舞う。

「利用されて嫌だった？」

「そりゃあね。でも、姫希さんの考えたシナリオはすごいよ。来るタイミングもばっちりだったし！」

だから怒ってはいない。これで彼女たちが逆らえなくなるのなら願ったり叶ったりだ。

「変なの。ほんとは渚ちゃんが「わたしに逆らったら浅野君に言うよ？」って脅すぐらいがいいんだけどね」

姫希さんが2年A組の教室のドアを開ける。姫希さんはぼくを庇うようにして立った。何人かがこちらを振り返るのに合わせ、彼女は声を張り上げた。

「誰か、体操着持ってきてる人いない？」

始業式早々に活動を行う部活が少数であるため、領く人はほとんど

いなかった。ドアの手前側にいた浅野君がこちらへやってきて体操着袋を掲げる。

「僕は持っているが何のために……渚、どうしたんだその格好は」

ぼくの姿を発見した浅野君が戸惑ったように呟いた。

「トイレでバケツの水かけられたんだよ。くしゅつ……だめだ寒い」  
「なるほどな。体操着だ。ついでにタオルも持っていけ。予備ならある」

「ありがと、浅野君」

「伊藤さん、誰かな。この酷く程度の低いいじめをしたのは」

彼がA組の教室内を見渡すと、じゅりあちゃんたち女子グループの肩がぴくりと上がる。その反応で丸わかりだ。浅野君は珍しく怒っていた。いつもは穏やかな意識の波長が少し揺れる。

「さあね。浅野君がそんなことされるの嫌いつて分かってるのに何でやるんだろうね。みんなMなのかな?」

空気が徐々に圧力で凍ってくる。ぼくはどうして良いか分からず戸惑ってしまった。というか浅野君はE組いじめはするのにクラスメイトが虐められた時は怒るんだね。反応が違いすぎて色んな意味でショックだ。

「2人とも、くしゅつ、べつに大丈夫だから!」

「渚ちゃん、はやく保健室行かなきゃね。あ、伊織。先生に私が始業式少し遅れるって伝えといて。渚ちゃんは保健室」

「おう、分かった」

放送がかかり、荒木君の落ち着いた声が生徒全員を体育館へと向かわせる。ぼくと姫希さんはその反対に行くようにして歩いた。

去年は見なかった懐かしい黒髪の女の人が通りかかり、ぼくはあつと声を漏らし立ち止まってしまう。

「どうかしたの?」

「ううん、何でも」

口ではそう言いながらも内心は穏やかではなかった。

そうだった。彼女が来るのは今年だったんだ。

保健室に着いたとき、先生は中に居なかった。始業式なので保健室

の先生も他の先生たちと同じく体育館にいるのだろう。姫希さんはよくに体操着を渡してあとは自分でやるように言うと言うと駆け足で始業式に向かった。優等生は大変である。

貸してもらったタオルで髪と身体に付いた水滴を取った。何故かあったドライヤーで髪を乾かし、それが済むとそそくさと制服から体操着に着替えてしまう。下着も濡れているがそれはまあ何とかなるだろう。

そんなことよりも、問題はさっき見た新任の先生。きつとE組の担任になるだろう、雪村めぐり先生が今年来ることにぼくは気づかなかった。そうだ、彼女はぼくたちの前の世代のE組担任も受け持っていて、この時期にとある研究施設で殺せんせーと会っている。彼女が死ぬことがなければ、全ては始まらなかった。

ぼくが今考えたことは大きな自惚れだ。ひよつとしたら雪村先生も助けることができるかもしれない、なんて。

「あれ？この時間なら絶対誰も居ないと思ったのに」

「久しぶりだね、カルマ君」

「あー天使ちゃんか」

何だか分からないけどカルマ君にこの呼び方をされるとイラツとする。

「……普通に渚って呼んでくれない？」

「あーごめん。渚ちゃんも始業式ふけたの？」

「色々あって

くしゅっ、保健室で休んでるように言わ

れてるんだ」

「ふうん……何で体操着？」

「トイレでバケツに入った水かけられて制服が今びしょ濡れだから。制服、ドライヤーで乾くといいんだけど」

明確な虐められてます発言はしなかったものの、カルマ君は多少察したようだった。ベッドの上で寝ようとするカルマ君だったが、ふと気付いたように起き上がる。

「保健室って確か制服の予備あったよ」

「そうなの？」

「うん。この引き出し……ほら。借りパクしちゃいなよ」

カルマ君が開けた引き出しの中には制服が男女両方入っていた。っていうか何故こんなことをカルマ君が知ってるんだろう。保健室の常連生徒だから？もしかしたら喧嘩でよく制服借りてたりするのかもしれない。

「借りていくけどもちろん後で返すからね？」

ぼくはカルマ君の借りパク発言を訂正し、貸し出し名簿のところにしっかりと名前を記入する。返す予定の欄には明日の日にちを書いており、もちろん明日には返す予定だ。

「さすが優等生」

「くしゅっ……優等生じゃなくてもみんなそうするよ。優等生嫌いで顔だね」

「だってさあ、勉強ばっかして授業も真面目に受けて先生に気に入られているって生徒、テストで点数が良くてもぶっちゃけ当たり前だね」

ぼくが着替え始めたのでカルマ君はベッドに突っ伏した。Tシャツを脱いでシャツを着、上からスカートを先にはいてしまう。カルマ君は尚も話し続けた。

「通常運転でさらりと勝ってこそその完全勝利。これが本当の勝ち方だよ」

「そんなんじゃ永遠に勝てないよ」

ぼくは完全に着替え終わると静かに告げる。サイズが少し大きいのが、ぼくはまだ中学2年生で小柄なので仕方ない。女子だから分からないけど、1周目の時より身長が伸びていない気がする。

「は？俺のこと何にも知らないくせに口出ししないでくんないかな」

「じゃあ一つ予言をしてあげる。カルマ君は来年E組に落ちるよ」

「そんなの素行不良だから落ちるって思っただけじゃん」

カルマ君をビビらせるために言った未来予言は大して効果が無かった。カルマ君もそうなる可能性があることは承知だからだ。

「じゃあ二つ目。君が停学中に月が破壊される」

「……それはSFの見過ぎじゃない？」



気が抜けたような顔をするカルマ君を見て、ぼくが冗談を言ってるのだと考えてることが手に取るように分かった。

「何なら賭けよっか？」

「そこまでしなくていいよ、くだらね」

イヤホンを装着して眠りにつく。これはぼくとは話したくないっていう意思表示みたいだ。

保健室のドアが開けられ、おばちゃん先生が顔を出す。ぼくが居たことに少し面食らったようだが、営業スマイルで保健室に來た生徒リストに名前を書き込んでいく。手慣れた様子だ。

「あら、渚さんが来てたなんて思わなかったわ。また怪我？」

「いえ、今回は制服濡れちゃって。制服借りてます」

制服を借りることを伝えて先生と軽く雑談をした後教室へと戻った。そういえば先生はぼくの名前を覚えていた。確かにあれだけ体術の練習でかすり傷を作って怪我をしていたら忘れるはずもないか。びしょ濡れだったこと勘違いしていないといいけど。

教室に戻ると姫希さんは去年違うクラスだった女子たちと会話をしている、ぼくに気がつくくと手招きした。

「渚ちゃん大丈夫だった？」

「うん、平気。制服も借りれたし。浅野君、タオルと体操着ありがとう」

タオルはドライヤーで乾かしたけど大丈夫だろうか。浅野君なら理不尽に怒ったりしないか少し心配になって俯く。しかし、彼は別に怒るわけでもなく無言でそれを受け取った。

「えっと、席は何順なの？」

「学年末テストの順位順」

ぼくは苦笑いをした。A組担任はまた穴戸先生みたいだ。

「うわあ、穴戸先生好きだね」

「ほんっと、性格悪いよ。しかも渚ちゃんがいなかったから今年は私が学級委員になっただけ」

落ち込んでいるのか喜んでいいのか分からない微妙な表情で姫希さんが言った。いや、これは微かに喜んでるな。意識の波長は嘘を吐

かない。姫希さんはお母さんの次に分かりやすいこともあって、彼女の顔を伺うのは造作もないことだった。

「でも浅野君が推薦するとは思わなかった。いきなりびつくりするか止めてよね」

「……ああ、悪かったな」

浅野君はぶつきらぼうにそう言った。いつもの爽やか優等生とは違う。少し冷たい。

『渚、今度から絶対伊藤さんから離れるな。伊藤さんがいない時は5英傑の4人、もしくは毛利か僕と居ろ。それ以外は誰も信用するな』フランス語で話す浅野君に慣れたような視線を向ける元A組のメンバーと、これが噂の外国語会話かと好奇心の表情を見せる新A組のメンバー。だが、ぼくには言っている言語は理解できても内容を完璧に把握することができなかった。

今の話からするにぼくの行動を縛るってことだ。それはつまり、危険だから？

『浅野君、一体どういうこと？』

『少し僕の思慮が足りなかったということさ』

『女子トイレのことなら気にしないで？あれは姫希さんが』

「ちよつと渚ちゃん、それ以上は言わないで」

自分のことだと勘で判断した姫希さんがぼくに口止めをする。と  
いうかよく自分の名前だつて分かるなあ。フランス語だと発音おかしくなるのに。

『姫希さんが守ってくれたから』

敢えて彼女がわざとそれを起こしたことは言わないでおいた。姫希さんは不安気に浅野君の顔を伺っている。

『だからこそ、これで分かっただろう。伊藤さんがいない時を狙っているんだ。迂闊に1人で行動したらいつ同じことが起きるか』

『……浅野君、ひよつとして心配してくれてるの？』

まさかあの浅野君に限ってそんなことはないだろうけど。

でも少し期待して見るぼくの目から浅野君はさつと目を逸らした。

『まさか』

うん、そうだよ。生徒会長候補の浅野学秀はそう簡単に人のこと心配する余裕ないだろうし。

「渚ちゃん、もう帰る？ 今日浅野君部活だよ」

終礼はもう終わっているようで支度を済ませた姫希さんがフランス語で会話するぼくらにひよいと顔を出した。ぼくらの会話を邪魔することをやってのけるのは彼女ぐらいだ。

「ああ。でもこんな状況だし休むべきか迷ってる」

「姫希さん、ごめん。今日ちよつと先生に用事があつて一緒に帰れない」

姫希さんは「そうなの？」と少し残念そうにしゅんと項垂れていた。それに対して「俺のこと忘れるなよ」という毛利君。たしか彼は書道部に入っているようで始業式から部活はないのだ。姫希さんは一緒に帰ることを快く賛同し、2人はぼくらを置いて教室から出て行った。

教室にはもう数える程しか人がおらず、浅野君は部活のバッグをロッカーから引つ張り出しているところである。

『おい、今散々言ったのに1人で帰る気か？』

ぼくが一人で帰ると思つたのか、今度は中国語で浅野君は焦つたような口調で声をかけてくる。ぼくは少しため息混じりに「ちがうよ」と返事をした。今日の浅野君は少々過保護が過ぎるようだ。

『浅野君が部活終わるの待つよ。ちよつと相談したいこともあつたんだ。女子トイレとはまた別の話で』

『分かった。終わつたら連絡する』

ぼくと浅野君は教室で別れ、ぼくは職員室……には行かず、旧校舎のあるE組へと向かった。

懐かしい山への道程がぼくの色々な思い出を蘇らせる。鳥間先生と殺せんせーが組んだドロケイ。超体育着で山を駆け回ったこと。文化祭では山の山菜をメインに料理を作ったこと。3月の最後に対殺せんせーのバリアが張られたこと……

そこでぼくは考えるのを止めた。この後何が頭に思い浮かぶのか

は分かっている。思考を停止したかった。いつも考えるのはあの時  
どう行動していたら茅野が死ななかつたかということだ。でもあの  
時ぼくが行動したとしても何も変化は生まれないわけで。殺せん  
せーが死んで仕舞えば茅野を救うことは絶対にできなくなる。

だけど、中学2年生のぼくは思う。

もしも、殺せんせーが研究施設にいる間に行動を移すことができる  
のだとしたら？

運が良ければ雪村先生を助けられる可能性だってあるのだ。

旧校舎の中にはまだ生徒たちがいた。ぼくらの前の世代のE組だ。  
彼らは顔を俯けており、それは理事長がE組に求める敗者の顔だっ  
た。

「それじゃあ、みんな今日の授業はここまでです！日直さん、号令お願  
いしますね」

「起立・礼」

わわっ。

ぼくは銃の音が聞こえてくるんじゃないかと少し動揺してしまっ  
た。彼らはぼくらじゃないのに。標的ターゲットはまだ現れていないのに。

窓からそつと先生のことを探す。教壇に立つ先生は紛れもなく雪  
村先生だった。

まだ生きてる。当たり前だけど雪村先生が生きてる！

なんだか嬉しくなって微笑んでしまう。

「あれ……？天使ちゃん」

ぎくり。ぼくは窓際の生徒に気づかれていた。彼女が誰なのか全  
く覚えがないが、どうやら相手はぼくのことを知っているようだ。呼  
び方が天使ちゃんってところを見ると好かれてる？先輩だからここ  
は敬語かな。

「えっと……雪村先生呼んでもらってもいいですか？」

「先生！天使ちゃんが呼んでます」

何で大声で言うかな……

一斉に生徒が声の主を振り返り、ざわめき立つ。5英傑の噂もそう  
だが、ぼくの噂は今や学校中に広まっており、

「天使ちゃんって学問の天使？」

「うそっ！何でE組に来てるの？」

「あの話本当なのかな?!天使と苦手な教科について話すと次の成績上がるってやつ！」

「ばか、俺は天使の笑顔を見るとって聞いたぞ」

だれがそんな噂流したの！

「デマかもしれないじゃん。どこ情報？」

そうそう。ぼくと話したら成績が上がるっていうんならみんなやってるって……確かに最近よく話しかけられるなあ。

「放送部が昼に流してた奴だから間違いないよ」

荒木君か!!

脳内にウイंकしてテヘペロのポーズをする荒木鉄平の姿が出てきた。昼の放送には毎日面白いトークがあり、荒木君もそれを担当する1人だ。

ぼくは昼休みは部活の練習に参加しているので知らないが、クラスメイトの女子がいつもその話をしていたっけ。でもまさかそこにぼくの話があるなんて。

「あの、どちら様ですか？」

雪村先生はぼくを知らないのでは？と首を傾げていた。生徒たちは新任の先生が知っているわけないかと苦笑気味だ。櫛ヶ丘はかなり出回っている話なのだが、新任の先生にまで届く情報ではない。

「はじめまして。大石渚です。あの、この後話せませんか？ここじゃあ何なので、校舎裏とかで」

「わかったー!みんなー、早く下校下校！」

雪村先生が急かして生徒たちを帰した。ぶつぶつ文句を言う生徒も何人かいたが、やることもないので生徒たちは山を下っていった。最後の1人が帰ったところ、雪村先生はぼくを教室の中に招き入れる。

「大石さん?わたしに何か用があるのかな？」

「渚の方で呼んでください。用っていうか、お願いなんですけど」

「渚さんかー。わたしにできることだったら何でもするよ！」

ぼくは柔らかく笑みを浮かべた。ぼくが何を言うのか彼女には想像がつかないだろう。殺せんせーみたいに生徒が好きで、生徒のためならどんなことでもしようと思える精神の持ち主で、E組の生徒を元気にしたいと本気で考えている。だからぼくは救いたい。雪村先生を。殺せんせーと同じくらい良い先生だから。

「雪村先生、死神に会わせてください」

この日を境に2周目の運命が大きく変わることばくはまだ知らなかった。

「くしゅっ」

やっぱり風邪引いたかもしれない。

無関心のはなし。

「死神に会わせてください」

死神に会いたいと思ったのは雪村先生が死なないように忠告できると思ったのも一つだけど、それ以上に殺せんせーになる前の最強の殺し屋から教えを請いたいと考えたからだ。今のぼくはあまりにも稚拙な技しか持つておらず、本当に殺し屋になるとしたら元殺し屋に教わった方がいいと思ったのだ。

雪村先生は目を見開き、そしてすまなそうに顔を俯けた。失敗した。彼女が発言をする前に察する。

「ごめんなさい。それはできない」

そう断られる可能性が高いことは理解してた。ぼくはめげずに続ける。まだ交渉の余地はあると思ったからだ。

「今じゃなくてもいいんです。来年までに1度会えたらそれで満足ですから」

彼女はさらに困った顔をして、理由を話し始めた。

「婚約者との約束だから、本当は誰にも言えないことになってるの。それに警備が固いから手引きすることもできないと思う」

「そう、ですよ。無理言っつてすみませんでした」

そうだ。雪村先生は婚約者とはいえ、あの研究では下っ端もいいところ。彼女が手引きすることは不可能に近い。そうなるとプランBか。こちらの方が随分と現実的だな。

ぼくは頭の中に作戦を思い浮かべる。雪村先生は不思議そうにぼくの表情を眺めていた。きよとんと首を傾げると彼女は気まずそうに視線を外す。

「渚さん、こんなこと聞くのもなんだけど死神さんとどういう関係なの?」

やっぱりそこ気になるよね。でも雪村先生には分からないよ。誰にも分からなくていい。ぼくだけが知っていればいいんだから。

だからぼくは人差し指を口に当てて微笑する。

「内緒です」

ぼくはくるりと後ろを向き、本校舎へと帰ることにした。

本校舎に戻る途中に見えた校庭のテニスコートで活躍する浅野君の姿に、彼は何でも完璧にこなすなど感心した。この前大会に出て優勝したらしい。本当に浅野君はすごいよ。

あ、今すごいかわつこいいサーブ打った。

「あれ、見学？」

後ろから声をかけられて驚き固まってしまった。よく考えたら部活を覗き見するのって変な人だ。ぼくはいいわけをしようと相手の顔を見て、それが磯貝君だったことに面食らう。

体操着にどう見てもお下がりか中古のラケット。でも相変わらずイケメンだ。

ずっとテニスをやるのがかつこいいと思っていたけど、かつこいいひとがテニスをやるから様になるんだなと思ひ直す。それは例えば磯貝君や浅野君みたいな。

「ああ！君、A組の」

磯貝君はぼくの顔を見てすぐに誰だか分かったようだ。知名度が高いのはこういう時使える。ぱつと笑顔になって試合中の浅野君を呼ぶ。

「おーい、浅野！お前の客」

「ファンなら……なんだ、渚か」

気になつてはいたんだ。浅野君と磯貝君つて話し方に多少の親しみがあつたなつて。そうか。2人は元々同じテニス部だったんだ。

「今日部活なのに来てる人が少ないんだ。良かったらベンチで見学していつてよ。浅野もその方が喜ぶし」

そういえば人があまりいない。今日部活があるのが男子テニス部だけで女子がないのも大きい。

浅野君は上級生らしき人と対戦していた。しかし、浅野君が圧倒しているのはテニスに詳しくないぼくにでも分かる。試合が終わるとその上級生は落ち込んだように水を飲みに行った。

浅野君がベンチに座るぼくを見据え、スポーツドリンクを飲んでい



る。汗をあまりかいておらず、そこまでキツイ試合ではなかったんだ  
など予想がついた。

「先生の用事はもう終わったのか？」

「すぐ断られちゃったんだ。もうちよつと粘ればよかったかもなあ」

「磯貝、帰る」

マイラケットをしまいながら浅野君は尊大な態度で言った。テニス  
スコートではまだ少数だが試合と練習を行う生徒がいた。彼らをか  
なり興味なさげに一蹴するあたり浅野君らしい。

「ええ?!帰るってそんないきなり……」

「今日は来れる人のみ参加だろう。何も問題ないじゃないか」

「そりゃあそうだけど。まあ、止めて言うこと聞くお前じゃないよな。

俺も、もうそろそろ帰んなきやバイト……じゃなくて門限が!」

磯貝君は時計を見て慌てている。浅野君は聞いていなかったよう  
だけど、磯貝君は中学2年生でもバイトで忙しいみたいだ。同い年で  
もうバイトなんて何だか尊敬するなあ。

「渚、教室に戻って帰る準備をしてこい」

磯貝君をじつと見ていたら、浅野君が呼びかけてきた。ぼくはまた  
校舎に戻ると思っていたのでスクールバッグは教室に置いたままだ。  
「う、うん」

ぼくは校舎に入り、間違えて1年の教室に入りそうになったがそれ  
が誰にも見られていないことにほっとして2年A組の教室に辿り着  
いた。教室には誰も居らず、荷物もぼくのものしか置いていなかった。  
た。

広げて乾かしていた制服を畳んでスクールバッグにしまい、フアス  
ナーを閉めたあたりで浅野君が教室の前にやって来た。もう制服に  
着替え終わったみたいだ。

「帰るぞ」

ドアの前で浅野君が唐突に言う。ぼくは彼の支度が想像よりずつ  
と早かったことに驚きを感じつつも、スクールバッグを持ちすぐに教  
室を出た。

「相談があると言ったな?」

「言った」

下駄箱で靴を履き替えている時、彼は唐突に話を切り出す。

もしかしてこれが気になっていたから早く帰ろうって言ったのかも。ぼくはそう予想しながら返事をした。

「言ってみろ」

「浅野君はE組行ったら差別する?」

これは今日、浅野君がぼくのいじめに激怒した時に思ったことだった。E組のいじめには何も言わないのにクラスメイトのいじめには口を挟む。それはE組には無関心だということだ。この前の彼は理事長に対してぼくのことを友達宣言してくれた。でもぼくがE組に行ったらその時の彼は、ぼくを友達と思わなくなってしまふのだろうか。

「……はつきり言うと、ぼくはE組に行きそうな奴には最初から関わらない。手下にするなら優秀な奴がほしいし、E組に行った時に感情移入なんて絶対したくないからだ」

確かに彼は人脈こそ広いものの、E組の生徒にそこまで仲の良い生徒がいない。女子たちでさえ本校舎にいた頃は浅野君のファンではなかったものがほとんどだ。浅野君は人を見下す傾向があるが、成績に関してはそれがさらに顕著なものとして現れる。

「磯貝君とかも?」

「磯貝の成績は問題ないじゃないか。友達と言えるほどの仲じゃないから気にもしないだろうが」

磯貝君のE組に落ちた原因は校則違反だった。浅野君も校則違反をする生徒までは選別できないようで、それが磯貝君と先ほど普通に接していたことに繋がる。

「じゃあ、ぼくは?」

「渚のどごにE組に行く要素がある?」

「もしもの話だつて」

「何が何でも阻止する」

これまたぼくが考えていた浅野学秀の答えとは違う。

そもそも阻止するの?!行ったら差別するかって話なのに阻止し

ちやうの?!

「……浅野君って意外とぼくのこと好きだよね」

「だいたい渚がE組なんて、望まない限り絶対起きないだろう。素行不良ができるような性格じゃないし」

「ぼくは望んでいるんだけどね」

「冗談だろう?」

「来年三日月がずっと続くってことぐらい確かだよ」

浅野君は冗談だと確信しているようだった。全く動揺はしていなかったし、彼からしたらぼくがE組に行く理由がない。

「ところでさ、今から話すのが本当の相談なんだけど。少し物騒な話だからスペイン語で言うね」

深呼吸してぼくは本題に突入する。E組についてどう思うかは気になってはいたけど、ぼくが話したかったのはあくまで別のことだ。

E組のみんななら

律とかなら普通にできるだ

ろうけど今はまだみんな未熟。となると必然的に相談できる相手が限られてくる。学校屈指の秀才、何でも万能な浅野君ぐらいにしかできな

『そうか。どうしたんだ?』

『とある研究施設に潜入するのを手伝ってほしいんだ』

『……………え?』

\*

「ただいまー」

ってまだ帰ってきてないか。

「渚おかえり」

両親の寝室から声がして、ぼくはお母さんがいたことに少しびっくりしていた。

「…………お母さん。今日仕事は？」

「しばらく休むことにしたわ。お腹の子供に悪影響だし」

お腹をさすお母さんは幸せそうだった。1周目の彼女とは別人みたいだ。

「……………」

ぼくは密かに恐れていることがあった。それはお母さんが妊娠したこと。

確かにお父さんが出て行かなければそんな可能性もあったはずだ。でも、この時期このタイミングで？

ぼくはお母さんのお腹に手を当てた。意識の波長…………なんて胎内の子から感じるはずもなく、それが更にぼくの警戒心を煽った。

得体が知れない。ぼくが分からないことなんて。

「でも何でトランク？旅行でも行くの？」

彼女の周りには洋服などが散らばっており、部屋のだ真ん中に置かれたトランクは4月のこの時期には異様な存在感を放っていた。

「渚、お母さんしばらく田舎に行くことにしたの」

「…………え？」

「お父さんはこっちに残るから、それまで家事全般よろしくね」

今もほぼ全部ぼくがやってるんだけどなあ。

何となく納得できない言い方にぼくは曖昧に頷いた。次に産まれるのが女の子だったら2周目の役目も終わりかな、なんて考えながら、帰りに浅野君としたやり取りを思い出す。

彼はぼくの頼みを二つ返事で引き受けてくれた。でもハッキングはしたことないからもう半年ほど待つてほしいそうだ。半年ぐらい問題ない。時間はまだ充分あるし。

お父さんが帰ってくるのはいつもより遅かった。普段はお母さんがヒステリックになるからあまり飲まないお酒の匂いと、女物の香水

の匂いにぼくはげんなりする。

1 周目にお父さんと会う時はいつもお寿司を食べて、学校の話をしたり、友達の事を話したりして、お母さんの束縛から解放される一時だと感謝していた。

2 周目で、ぼくが気遣えば気遣うほど2人はぼくのことを見てくれない。お母さんの理想の娘に近づいたのに、近づいたからこそ、ぼくが消えていく。

学校みんなが見ているのもぼくじゃない。学問の天使ではなく、ぼく個人を見てくれる人はどれだけいるんだろう。

それならそれでいいんじゃない？

そう、ぼくに誰かが語りかけてきた気がした。ぼくのことが見えないなら、いつそ相手に悟られぬまま殺してしまえばいい。

暗殺者としては最高の才能だ。

潜入のはなし。

机の上にスタンガンを置いた。

クラブスタナーだけなら楽なんだろうけど、1度破られてしまった技だ。それにクラブスタナーは意識の波長が見れなくては使えない。通路の角で誰かと遭遇した時には対処するのが困難なのだ。

スマホの通知音が鳴り、スクリーンにメッセージが表示される。

浅野学秀：準備は全て完了した。

ぼくはスマホをポケットにしまった。そろそろ行こうか。

時刻は深夜の2時半を過ぎたところ。決行の3時までにはまだ時間がある。本当ならとても眠い時間だが、がんばってカフェインを摂取して眠気を覚ましている状態だ。

今日はお出張中でお父さんがおらず、お母さんは出産したのにまだ田舎にいたので決行に移すには1番、最適な日だ。そして深夜3時という曖昧で1番ぼくらのような学生が行動しにくい時間にしたのは訳があった。

雪村先生の監視時間が夜の8時から深夜2時であるのが最大の要因だ。雪村先生とは既に接触していて、更に彼女が居てはスムーズに死神と会話が出来ないことを考えると雪村先生の監視がない時間帯を選ぶのが最適だ。

そして、柳沢という厄介極まりない存在が睡眠のために帰宅をし、研究施設には警備のみが残される唯一の時間帯でもある。最初研究に熱心な科学者は徹夜をするんじゃないかと思っていたが、柳沢はどうやら睡眠を優先するタイプらしい。深夜に研究施設が襲われるとは考えないのだろうか。まさにぼくらがしていることみたいだ。

ぼくの格好はかなりラフだ。普段着と言っても過言じゃない。超体育着があればそれを着ただろうが、生憎あれを着れるようになるにはあと1年は待たなくてはいけない。建物と建物の間を飛び越えるフリーランニングの練習は浅野君がハッキングを覚える6ヶ月の内

に行っており、3年E組の時のあの冴え渡る感覚を取り戻した。ひよつとしたらそれ以上の力を持つているはずだ。その結果、決行の日は浅野君とぼくが確実に動ける1月に決まってしまったが。1月なのにまだ帰ってこない母親ってどうなんだろう。

ぼくはベランダの窓を開けた。1月の風は寒く、凍ってしまったのかと不安になった。運動すればすぐ体が温まるだろうから心配は無用だ。しかし、長袖長ズボンにしたのは何も防寒に拘っているわけじゃない。体に傷がつかないようにしているのだ。

ベランダの柵の上に乗る、隣の建物へと移る。ここから研究施設へのルートは確認済み。その途中にある浅野家の屋根裏部屋で浅野君と合流することになっていた。

ルートに従って来た浅野君の家の屋根に飛び乗ると、そのまま窓の開いている屋根裏部屋へとお邪魔した。

「浅野君、ごめん、待った？」

「逆」に早すぎてびっくりしたよ、渚。どうやってここに来たんだ？」

「フリーランニングで」

ぼくがさらりと答えると、パソコンからこちらに、目を向けていた浅野君は視線をパソコンに戻して苦笑した。

「……君はほんと僕の予想をいつも上回るね」

「準備の手筈は？」

「研究施設のシステムは僕が支配した。暗証番号のロックやモニター室の攪乱は僕に任せる。だが、幽閉されてる恩人を救いたいってことだけど施設内図を見た限りではあそこに入るのは至難の技だ。それに脱出口が一つしかない」

浅野君はパソコンの施設内図をぼくに見せ、明らかに過剰な厚みの壁がある一点を指差した。そこがまさしく死神がいるところだろう。こんな過剰警備なら最強の殺し屋が脱出できなかつたのも頷ける。でも脱出と進入はまた別の話だ。

「大丈夫。ぼくは話ができればいいだけだからモニター室までの経路を調べてくれないかな？」

「分かった。まずは研究施設までの行きと帰りに発見されないよう気をつける。本当に1人で大丈夫か？僕が行かないほうがいいと言うのには、納得がいかないんだが」

浅野君は計画の実行が決まってからぶつぶつとぼく1人が行くことに対して文句を行っていた。浅野君は、ぼくの恩師を救うために協力していると言っているが、実のところは彼も学校の中ではできないようなスリル満点な冒険をしたいのだろう。こんな犯罪染みたことを引き受けるのはハッキングという新しく身につけた武器を大いに活用してみたいという思いもあるのだろし。それに、彼はこれでもまだ中学生。やっではいけないと決まってもやりたくなることだっていくらでもあるのだ。

浅野君を誘う時は完全に「恩師が研究の実験台にされて……」と泣き落とし戦術にかかったが。ビッチ先生の交渉術ってこういうことを言うんだなあ。普段は動じない浅野君が「何とかする」と息巻いてハッキングを覚えてくれた時は頭の中に浅野君は泣き落としに弱いという構図ができあがった。

「浅野君、存在感あるから。潜入とかは1番向いていなさそうだよね」「たしかにそうなんだがな。それで、必要になりそうな物は何を持ってきた？」

ぼくはポケットの中の物を全部出した。とは言っても出てきたのはたったの4つだけだが。なるべく軽装備にしようと思ったらこの4つだけ残ったのだ。

「スタンガン、ボイスレコーダー、スマホ、それと香水。これだけだよ」「ばれにくくするために白衣を着とけ。ところで香水って何に使うんだ？」

潜入なのに匂いつけてどうするんだという浅野君の顔をしたり顔で見る。前の時はあまり気絶させたあとのことを考えていなかったけど、今日は違う。研究施設の中で気絶する者が続出すれば、それは誰だって怪しむだろう。

しかし今日はサッカーで日本が優勝したらしく、どこもかしこもお祭り騒ぎ。ちよつとぐらい羽目を外す研究員がいてもおかしくない



はず。

「それは使ってみるまで秘密。この白衣、少し大きいんだけど……だれの?」

「穴戸先生のを借りてきた。明日の朝一番に帰せば問題ない」

穴戸先生……汚さないように気をつけます。

穴戸先生が朝学校に着いてぼろぼろの白衣を見たらなんと思うかを想像し、ぼくは内心で冷や汗をかきつつも心に誓った。

「浅野君、行ってくるよ」

「恩師にはよろしく伝えておいてくれ」

ぼくは屋根裏部屋から出て浅野家の屋根に乗り移ると、他の家の屋根に飛び移った。後ろを振り返ると浅野君があんぐりと口を開けていて、彼らしくもない表情をしていた。

早々と目的地に着いた時、辺りには誰もいなかった。しかし研究施設にはやっぱり警備員が大勢いる。

陰に隠れてどうやってあの警備を抜いたものかと考えていると、ボイスレコーダーで何を録音してたのか思い出して笑みが浮かぶ。あとは動く圏がほしいところだが……

「にゃー」

暗いのでよく見えないが、猫がぼくにすりよってきていた。

「すごいいいタイミングで来たね、君」

何故か妙に懐く猫を撫でていると、ぼくの頭の中にあるアイデアが閃いた。猫と戯れながらボイスレコーダーを猫に啜えさせ、

ボイスレコーダーのスイッチをオンにして猫がいるのとは逆方向へと移動する。

「うるせーなんだよ!! てめえ、しにてえのか?！」

大音量で流れた声に警備員たちは「なんだなんだ」と音のする方向を見た。1番端の警備員が少し動き、視線を警備範囲から外した一瞬の隙に入り口の警備を突破する。

「汚ねえヤクザだな、この野郎! てめえは手汚さないで若い衆に殺らせて、しらばっくれんのか!? ふざけんなよこの野郎!」

「てめえ、破門しといて遊びにくんのか、この野郎。ぶち殺すぞ! コラ

ア！」

「お、おい、ヤクザだ！確認してこい！」

1人がいい、警備の3分の1が慌てて駆け出した。

もう遅い。確認した時にはヤクザは逃げているという設定だ。

観てて良かった、あのクリスマスに家で子供が留守番する映画。その映画の影響でこの手は使えるなと思い、暴力映画で使えそうな罵倒シーンを単体で録音しておいたのだ。さらにボイスレコーダーは猫に啜えさせておいた。普通、警備が何人も恐ろしい形相でやって来たら猫は逃げ出すだろう。さらに警備が来た頃には録音再生は大量に録っておいた銃声の音で締めくくられ、無闇に近づかないようになっている。

SNSの画面を開き、最初のドアの解除をお願いします、というメッセージを送信する。すぐに既読が付き、研究員の持つIDが無ければ入れないドアのロックが独りでに開いた。さすが浅野君、仕事が早い。

ぼくは音を立てないように両手を足の動きに合わせて出し、ドアを開けて潜りこむようにして入った。

まさか堂々と正面突破されてるとは警備員が気づくわけもなく、他の警備員が再度持ち場につく頃には中への進入が完了していた。

「にゃー」

「って付いてきたの?!」

まさかあの猫がやって来たとは思わずぼくは小さなうめき声を上げる。ボイスレコーダーを放置したままぼくに付いてきたらしい。さつきは暗闇でよく見えなかったが綺麗な青い目をした灰色の猫である……それにしても随分と動きが早いな。あの距離でここまでやって来るなんて猫恐るべし。

「仕方ない。さつきはあちこち動き回って手伝ってくれたし、一緒に行こっか」

猫を胸に抱き上げて背中を撫でる。人懐っこいし、大人しい。

中に入ると長い廊下といくつもある部屋が続く。その1つである研究室にはまだ数名だが起きている研究員がおり、彼らは眠気なんて

全くないような顔で細胞がどうのと難しい話をしていた。

この部屋にはもちろん用はない。こうも人が多いとできることは限られるからだ。目指すはモニター室のある二階。浅野君の管理によってモニター室に流される動画は研究室を除き、一部は静止画となっていた。だからぼくのような中学生が歩いていてもモニター上ではなんの問題もない。元々人の少ないこの時間帯だし、廊下を歩く人が居なくてもおかしくはないのだ。

浅野学秀：モニター室の映像を見たところ、そこまでのルートで警備員は10人はいる。

渚：どうなの？強そう？

浅野学秀：雑魚だな。

渚：へ？

大の大人にそれはないよ?!

浅野君の思わぬ発言にぼくは居もしない彼にツツコミをいれる。彼らは警備員なのだ。もちろん弱いはずなどない。浅野君が強すぎるだけだ。ぼくは階段を上りながら苦笑した。と、その途中で上から人が降りてくる音がする。足音からするに2人。

「つたく、誰だよ。この前で喧嘩なんてするやつ」

「しかも銃声がしたらしいぞ？日本も物騒になってきた

2人の間を当然のように通り抜け、スタンガンで交互に気絶させた。ぼくは身長が低いので2人の視線の丁度死角に入り、顔は見られていない。倒れこむ前に2人に近距離で香水を3プッシュぐらい吹きかけてそのまま上の階へと上がる。完璧な隠蔽工作だ。階段の上では灰色の猫が肉球を撫でながら今の様子を呑気に見ていた。

「おい大丈夫か?!ってこいつらアルコールくさつ……」

ご愁傷様です。アルコール臭のする香水のスプレー部分に蓋を被せる。香水を持ってきたのは気絶させた相手を酔っ払いに見せかけるためだ。ぼくは2人が警備員をクビになるだろうなと思うと胸が痛む。でも戦闘でボコボコにしなかったのは褒めてほしい。浅野君が言った通り、見た限り大して強くなさそうだったし。研究施設だか

ら、かなり凄い資料もあるんだろうからもう少し警戒していてもいいと思うけど。まあ警備員なんてこんなものなのかな。

二階の廊下に続く場所は扉に案の定セキュリティロックがかかっており、これもまた関係者のIDが無ければ入れないようになっていた。浅野君に関係者のIDを作っちゃえばいいと言ったのだが、いつ誰がどの扉を通ったかは記録されているようで、進入がすぐバレてしまうのでロック解除は一時的にぼくが通る時だけ、浅野君が全て解除することになった。もちろんその際に足がつかないように工作するらしい。

渚：二階の階段部分のロック解除お願いします

浅野学秀：了解

ドアを躊躇いもなく開け、廊下に誰が居るのか瞬時に把握する。

この広いモニター室まで続く廊下に2人。さて、この2人をどうやって片付けたものか。その時ドアの隙間を猫がすり抜けた。

「じゃー」

優雅に廊下のご真ん中を歩いてくる猫に警備員は目を白黒させていた。

空気を読んでよ、猫！

「猫、だよな……」

「はつくしゅっ!!何でここに猫が?!俺は猫アレルギーなんだよ!!」

茫然と何が起こったのかよく分かっていない1人と、どうやらアレルギーらしいもう1人。どちらも視線は猫に注がれており、彼らの意識しない場所を動くように心掛けてその廊下を通り抜けた。猫を捕まえようにも重装備なため、小さな猫は素早くてすぐ逃げられてしまう。

よく分かんないけど猫ナイス。

廊下の角を曲がった先にはお目当てのモニター室があった。さすがにここは警備が厳重になっており、7人程がドアの前をガチガチに固めている。

だが、全員の意識の波長は案外油断していた。雑談する余裕さえある。

「今日サッカー勝ったらしいぜ。街は大騒ぎなのに俺は朝方までこの警備ときた」

「ここの警備の人員やけに多いよなあ。全部で30人はいるらしい。なんの研究してるか知らねーが多すぎだろ」

「こんなに警備員、必要ないですよね」

とぼくは同意するように言った。モニター室のロックを解除し、何故かまた付いてくる猫と一緒に中へと入る。

「おお、だよな。でも柳沢さん、キレると怖いし……」

「え、お前、誰と話してるんだ」

「あれ、何だ今の。空耳か？」

モニター室の外で首を傾げる警備員を横目に、ぼくはモニター室で何も起こらない画面を監視する男の首にスタンガンを当てた。あれだけの重警備なのに中は1人しかいないとは期待外れもいいところだ。

モニター室には本を読む死神の姿が映っていた。ぼくはスマホの声を変えるアプリで死神がいる部屋のみが届くマイクのスイッチをオンにする。

『こんばんは、聞こえますか？』

話したのはスペイン語だった。それは身元を不明にするための工作で、今のぼくはスペイン人から聞いても普通の話し方をしているほど流暢に言語を話せるため、日本語訛りもなく、ひよっとしたら外国人だと思ってもらえるかもしれない。性別も分からないようにひたすら敬語で話すとしよう。

『柳沢……ではないようだ。彼にスペイン語が話せるとは思えない』  
「にやー」

『その声……メルダリン！』

メルダリン……つてこの猫、死神の知り合いなの?!通りで頭が良さぎると思った。それ以前に声だけで自分の猫を判別できる死神も凄いい。

そうか、死神の飼い猫……

『私はこの猫に誘われてこの施設に来ました。あなたを救うために』

つてことにしとこう。ぼくはアドリブで話をでっち上げると、死神は少し考え込むように呟いた。

『随分と若いですね』

『……声を変えてるのに分かるんですか？』

『仕事上そういう機械はよく使ったんでね。20代……いや、ひよつとして10代？』

思いつきりばれてるし。世界最強の殺し屋は声で相手を判別するのに長けているらしい。その内性別まで判断されそう。案外もう分かっていたりするのかな。

ぼくは動揺を隠すように返事をした。誤魔化すと余計にばれそう。だ。

『想像にお任せします。助けるための手筈ですが、今からその部屋のセキュリティロックを全て解除し——『逃げるつもりはないです』』

死神はぼくの話を通り、あまりにあっさり逃げないと宣言をした。彼は自分が何を言っているのか分かっているのだろうか。

『どういうことですか？』

『今、逃げるに困る人がいますから。だから私は逃げません。せつかくですが、今日は帰ってください』

『……そうですか。残念です』

まさか本人に断られるとは。失敗する可能性は考えていたが、そんなことが起こるとは想定外過ぎてぼくは呆然としていた。

困る人というのは雪村先生のことだろうか。さすがに1月ともなるともう2人は打ち解けているんだろうな。

『ところでメルダリン、その猫についてですが、彼女は君に懐いていますか？』

『かなり』

『不思議ですね。私にしか懐かない猫だったんですが……まあ良いでしょう。彼女の面倒を見てください。あなたは殺し屋を目指しているでしょう？』

『分かるんですか』

そんなことまで分かるとは思ってもみなかった。全てを見透かされてそれで苦々しい思いを味わう。

『彼女が懐くとしたら暗殺の才能を持った人だけですから』  
スマホの通知が鳴り、ぼくはスクリーン画面を確認する。浅野君からだ。

浅野学秀：モニター室に向かっている奴がいる。大事になる前に立ち去れ。

時刻はもう4時を過ぎたところ。柳沢ではないにしろ、モニター室の交代要員の可能性がある。

『先生、このことは誰にも言わないでください。お願いします』  
『?……分かりました』

『それから、あなたの大切な人をちゃんと見ていてください』

猫を抱き抱え、モニター室にいた唯一の男にアルコール臭の香水をまた3プッシュした。

「嘘じゃないんだよ！さっきその廊下に猫が……」

廊下で警備をしていた猫アレルギーの男が必死で訴えかける。モニター室に近づいている奴というのはこいつか。彼をモニター室の前にいる男たちは嘲笑った。

「お前バレバレの嘘吐くなよ」

「猫なんているわけない」

とぼくは耳もと言った。そのまま彼らに一切の違和感を生じさせないまま階段のロック解除を浅野君に要請した。

「そうそう……ってあれ、今のお前か？」

横の警備員はそれを否定し、猫アレルギーの男が大きなくしゃみをしたことでその話がうやむやになる。

「へっくしゅっ!!!また猫か?！」

「お前のそれ花粉なんじゃないのか？」

よし、何とか無事にやり過ごせた。階段を1階まで駆け下りると、浅野君から階段下の近くに非常口があることを知らされた。どうやらその非常口は外から入る事はできないが火災や地震用に中からなら出られるようになってるらしい。

無事、外に出られてほつと胸を撫で下ろす。死神に殺し屋について質問しようかとも思っていたけどそれどころじゃなかったなあ。脱出の話は断られたし。ちゃんと雪村先生のごことは忠告できたからそれでいいけど。

猫のメルダリンを連れ、フリーランニングで浅野君の家の屋根裏部屋に戻ったところにはもう4時半になったところだった。何故か連れてきた猫を見て、ものすごく呆れた顔をされた。



絶望のはなし。

死神と会って数週間後、お母さんが家に帰ってきた。小さな女の赤ん坊を連れて。

「お姉ちゃんよ、海咲」

お姉ちゃん。そうか、ぼくは姉になったんだ。お母さんが抱く海咲の小さな手に触れる。彼女の生温かさが指先から伝わった。ぼくの指を握るこの子はそれが例え偶然が重なって生まれた生命でもちゃんと生きているんだ。

得体の知れないと思っていた子供が普通であることにほっとしている自分をお母さんは堅い表情で見つめていた。ぼくは動揺してお母さんを見上げる。お母さんの顔色には影が差していたのだ。

「渚、一人暮らししなさい」

今、なんて言ったの？

ぼくは言葉が出なかった。喉が渴いて苦しい。でもこの渴きは何だろう。水不足とか、そういうものじゃない。ぼくの中で前まであった感情が音を立てて崩れていく。

「小さい子供が家に居たんじゃ勉強も捗らないでしょうし。渚の部屋はこの子が使うから問題ないわ。学校の近くに良いアパートがあってね、そこなら落ち着いて勉強が出来ると思うのよ」

全ての言葉は後付けだった。ぼくを追い出すためにお母さんが用意した言い訳だ。

「おい待てよ！何で渚を追い出すような真似———」  
「あ

あなたは黙ってちようだい！渚のことは私が一番分かっているのよ!!」  
お母さんが投げたグラスが壁にぶちあたりパリンと音を立てて割れた。お父さんはやってられないと言った様子でお母さんを蔑みの目で眺めた。それでも手を出さないのは彼女のヒステリックを起こしたくないからだ。

ぼくは震える声でお母さんと呼ぶ。

「ねえ、何がだめだったの？新しい子が生まれたから？お母さんが望むような娘になれるようあれほどがんばったのに……!」

「私が望む娘？わたしが欲しかったのはね、普通の女の子よ。天才でも神童でもないわ。あなたはまともじゃない！まるで何もかも分かっているようにわたしの顔色伺って……完璧すぎて気味が悪い」

膝から崩れこむようにしてぼくはしゃがんだ。涙は出てこないけど、無性に悔しかった。ぼくがこの14年でやって来た全てを否定されたのだ。よりにもよって1番尽くしてきたお母さんに。

「1週間後には支度を整えてちようだい。それまではあの部屋を使っているわ。もうアパートは借りてあるから――」

残りの言葉は耳に入らなかった。お父さんの顔が同情に染まるのを見て、ぼくは彼にも失望した。前の時は逃げ出して、今度は自分の意見を押し通せない臆病者<sup>チキン</sup>。もう何も期待しない。2人の顔色ばかり伺っていた自分が馬鹿みたいじゃないか。

「もういいよ。最後だからいうけど、

――この14年、ぼくが2人を尊敬したことは1度もなかった」

子供に尊敬されない親って何なんだろうね。親が子供を追い出すって何なんだろうね。

カルマ君が昔言ってた。相手に絶望したら自分の中で死んだも同然だって。

この14年間、ぼくは2人をいつでも殺せた。絶望する寸前までいかなかったただけだ。

\*

学校の昼食の時に一人暮らしをする話を打ち明けた。姫希さんはやはり相談相手に向いていて、適切な箇所で相槌を打っていた。姫希さん以外にも仲の良い子はあるが、みんなぼくが「学問の天使」だからその栄光にあやかろうとしているだけ。要するに上辺だけの関係じゃないのは女子の中では姫希さんしかいないのだ。

「妹がいると勉強の邪魔になっちゃうから……」

親子喧嘩の流れはぼかし、一人暮らしをする経緯はお母さんが言っていた理由を借りる。声が小さくなってないか心配していたが杞憂だった。姫希さんの返事が結構好意的だったからだ。

「へえ、渚ちゃん大人！」

「学校から近くなって便利だけど不安だなあ。よく言うよね、近くなると油断するから遅刻するって」

「分かる分かる。逆に遠い家の子ほど遅刻少ないんだよ」

「ひーめちゃん！」

甘えるような声に姫希さんは顔を歪めた。姫希さんは態度が分かりやすく、あの一件があつてからはじゅりあちゃんたちとは距離を取ってた。

「何か用？」

「ねえねえまだ掲示板見てないのお？じゅりあ、姫ちゃんより3つも順位上の10位だったんだけどなあ」

「……うぎっ」

「姫希さん、声漏れてるよ」

ぼくが小声でそう指摘するも姫希さんはしらばっくれて全く直す気はなさそうだ。順位はじゅりあちゃんが上とはいえ、姫希さんはじゅりあちゃんの弱味を握っている。

「あれえ？姫ちゃんスマホケース変えたのお？ちよつとじゅりあにも見せてよお」

さつとスマホを奪いとり、じゅりあちゃんはそこに持っていたペットボトルのジューズをかけた。

「あ、ごっつめーん！手が滑っちゃったあ！じゅりあドジっ子だからさあ」

「あんた……何するの?!これ壊れたんだけど!」

「ごめんごめん。ちゃんんと弁償してあげるってば。それより姫ちゃん。あのデータ移した?」

ぼくはその言葉ではっとする。まさかこの子、データを消すためにスマホにジューズかけたっていうのか?それだけのためにこんな荒技を?

「っ……………」

「その顔は移してないんだねえ。ちよつと一緒にトイレ行かなあい?」

「……………分かった」

姫希さんは悔しそうに唇を強く噛んでいた。じゅりあちゃんに連れられて姫希さんが教室を出て行く様子を目にかける人はいない。

「伊藤さん、今週の放送についてなんだけど……あれ、伊藤さんは?」

荒木君が放送部の企画案を持ってやって来た。情報通の姫希さんなら何か分かると思うたのだろう。

「トイレに連行されてた」

「美しくない行為をする者もいるのだね。綺麗な薔薇には棘があると  
いうけれど、互いの棘に触れないようにするのも大変のようだ。とこ  
ろで渚ちゃん、今日のデイナーに渚ちゃんの好きなお寿司でも

「お寿司は行きたいけど榊原君とはやめとくね」

ぼくはにっこりと微笑んで丁重に榊原君の誘いを断った。

「また揉め事か?伊藤さんが渚と居ないなんて珍しい。あれほど言っ  
てるから絶対に離れるはずなんてないんだが」

浅野君は缶コーヒーを片手に現れた。どうやら自動販売機で飲み  
物を買ってきたらしい。

「浅野君、伊藤さんに何を言ったの?」

「……………気にするな。それより」

浅野君は言葉を切り、言語をフランス語に切り替えた。

『渚は何があったんだ?』

ぼくは浅野君がぼくを「見ていた」ことに呆気にとられ、気がつい  
たら一人暮らしをするまでの経緯を全部洗いざらい話していた。も

ともとお母さんはぼくを自分の2周目としか見ていなかったこと。彼女の言いなりに何でもやってきたこと。妹ができたことでぼくが要らなくなったこと。完璧すぎて気味が悪いと言われたこと。お父さんが全く頼りにならないこと。

浅野君は最後まで聞くと言顔でぼくを見つめていた。こんな話をしたら可哀想だと要らない同情をされるかと思った。しかし、彼の表情から感じ取れるのは怒りと呆れだった。

『そんな酷い話聞いたこともない。今すぐ裁判で訴えるべきだ。言葉とはいえ、家庭内暴力には変わりない』

とても浅野君らしい意見をぶつけられ、そういう考えもあるのかと納得したが訴えて解決する問題でもない。聞いたところだとお金の仕送りもしてくれるそうだし、学費も家賃も払ってくれる（お父さん持ち）とのことなので金銭面では苦労しなそうだし、2人には失望したところなのでもう金銭面の援助をしてくれるなら何も要らない。

『もういいんだ。終わったことだから』

『渚は諦めるのか？そんなことをしていたら、君の妹が挫折した時また渚を頼りに現れると思うが』

『その時はもちろんきっぱり断るよ。ぼくはお母さんの道具じゃないって』

『それが一番だな。しかし子供に過剰な期待をする親はよく聞くが、完璧過ぎることの何が悪いのかはよく分からない』

『……まあ、浅野君のお父さんは浅野君以上に完璧だよな』

あの理事長は自分の息子が完璧過ぎると思うことは決してないだろう。彼自身が完璧主義の塊なのだから。

『ごめん、長話されちゃって』

姫希さんが浮かぬ顔で帰ってきた。濡れている様子はない。となると一体何をされたんだろう。

「何をされたのって顔だね、渚ちゃん。大丈夫だよ、私は無傷！」

姫希さんが自信満々に胸を張る。この様子だとそれは本当なのだろう。意識の波長を見た限り、その言葉に嘘はない。

「よかった。トイレで何してたの？」

「そうだね、女子トーク？」

これも本当だ。ぼくは姫希さんが無事に帰ってきたことにこのころの底から安心した。

「でも意外だなあ。あのじゅりあちゃんが何もしないなんて」

「順位の差が少ないからかな。じゅりあちゃん、イジメとかやってるけどいつも成績悪い子にしかしてないし」

「イジメしてるんだ……」

「されてる子、我慢できなくて転校しちやたらしいよ。E組に行ったら何されるか怖かったんだろね」

ぼくはたまたま姫希さんを味方に付けて難を逃れた。でも、姫希さんがぼくの味方についたのはぼくの成績がいいからだ。損をしたくない彼女は成績の悪い子を庇うような正義感はないし、そういう子たちは諦めるしかない。つまり、逃げるという選択肢しか残されていないのだ。

ぼくらのE組は落ちこぼればかり集められたクラスだったけど、いじめられっ子がいなかったのはそういう事情があったからなのだろう。

「今度の学年末でE組行く人が決まるから、さ。既に何人か確定している人もいるけど。赤羽君とかテニス部エースの磯貝君とかだね」

「校則違反？」

「そう、校則違反組。赤羽君は暴力沙汰起こし過ぎだから2ヶ月も停学になったって。逆に磯貝君は模範生だったから停学は無しだったらしいよ。周りの目が痛いけどね」

姫希さんはすつと笑みを消し、ぼくのことをじつと見た。

「渚ちゃんには関係ないことだったね」

言い返し方が分からなくて黙り込む。実はぼくはE組に行くことを迷っていた。A組のままの生活は楽しい。浅野君と語学トークでちよつと難しい話をして、体術を教わったり、研究施設に潜入。たまにする勉強会で5英傑と盛り上がりたり。女子で1番仲良しの姫希さんと馬鹿みたいにくだらな話で夜中にメッセージをやり取りしたこともある。

どれもこれもぼくが1周目では経験しなかった2周目のぼくだけが持つ思い出だ。

もしも雪村先生が死ななかつたら、殺せんせーが誕生することもない。そうしたらぼくはA組のままみんなと過ごせるんじゃないか？

ぼくは悩んだが、学年末テストの後に考えることに決め、その後はひたすら復習に精を出すことに決めた。

\*

荷物を下ろし、自分がこれから住むことになるアパートの一室を見渡した。家賃4万と聞くと高いのか安いのかまだ子供のぼくじや分からない。でもワンルームにキッチン、バスタブがあつたら何だか十分かななんて思えてしまった。ぼくの部屋にあつた勉強机と、衣類を収納する小さめの箆笥、ベッドを置いたらそれだけでもうスペースがほぼなくなつたけど、もともとの自分の部屋ぐらゐのスペースはあつた。

学校にはそこそこ近いが、駅からは遠いところにある。それから面白いことに本校舎より旧校舎が近かつたりする。つまり山を挟んだ反対側にあるのだ。

これはとても興味深い。毎日フリーランニングで学校に通えば早く着くし、あの裏山でトレーニングをした時はすぐできることができるといふことだ。

それから学園祭の時のお店みたいに自給自足も期待できる。山のものを手に入れていいか分からないけどちよつとぐらゐはいいと

思う。

仕送りが5万か。これ大体が食費に当てる感じのかな？家賃、光熱費なんかは全部払ってくれるってことだし。

料理は自分で作るんだろうけど、ぼくは実際最近はお母さんより料理している。2周目ってこともあって料理は完全に慣れたし。

「にゃー」

「あ、メルもいたんだっけ」

ぼくがすっかり存在を忘れていた灰色猫が、ぼくの足に自分の体を擦り付けて存在をアピールしてきた。メルダリンって長い名前が面倒なので最近ではメルと呼んでいる。幸運なことにこのアパートは大家さんが動物好きなこともあってペットOKだった。

この様子だとどうやらお腹が空いているみたいだ。

ぼくも引越し屋さんから自分の部屋の持ち物が届いてからどつと食欲が湧いてきた。

財布の中には5万がそっくり入ってる。もつともこれで1ヶ月分なのだが。

「とりあえず何か買おっかな」

自転車で15分のところにスーパーがあったはず。ぼくは自転車のカゴの上にメルを乗せ、スーパーまで行った。メルをスーパーの外で待たせ、陳列棚の食品を見ていく。実はよくお母さんにお使いを頼まれていたので慣れていた。安めで壊れなさそうな食器類と箸など、メル用の皿もかごに入れ、大体のものが揃った。

問題は、とペットフードが置いてある棚を見て唸る。キャットフードを買えばいいんだろうけど、何がいいのか全然分かんない。

「何探してるのー?」

「キャットフードだけど……なんだ、倉橋さんか」

誰かと振り返るとそこには買い物かごを持つ倉橋さんが立っていた。

「わたしの名前知ってたんだ。A組の天使ちゃんだよねっ！キャットフードだったらこれがおすすめだよ」

「そうなんだ。教えてくれてありがとう」



「いえいえー！」

さすが倉橋さん。動物に関しての知識は完全網羅している。よくキャットフード野良猫にあげていたりするのかな。

かごにキャットフードを入れ、ぼくはレジに並ぶ。倉橋さんは同じ列に並び、ぼくのかごの内容が食品に偏ってるのを見てもしかしてと思っただようだ。

「天使ちゃんもお使い?」

「そんなとこ。一人暮らし始めたとこなんだ」

「すごいねっ!キャットフード買うつてことは猫飼ってるんだね。今度遊びに行つてもいいかな?」

目を輝かせて言うところを見ると倉橋さんは本当に猫が好きらしい。昆虫にも詳しいけど動物はみんな好きって性格だしね。ぼくは納得して倉橋さんのお願いに頷いておく。

「いいよ。倉橋さん猫詳しくそうだし」

レジの会計が終わって、2人で袋に品物を詰めていると倉橋さんが閃いたような顔をしてある提案をしてきた。

「あ、そーだ。天使ちゃんアイス好き?今からお使いの帰りに近くのアイス屋さん寄ろうと思っただんだ!良かったら一緒にどうかな?今日月末だから割引きしてるよ」

「せっかくだからわたしも買おつかな」

ぼくは完全にアイスに釣られた。しかも割引きなんて言われたらアイス買わなきゃって気になってしまう。

「わかった!」

ぼくは自転車を駐めていたことを思い出し、ビニール袋をかごに乗せた。ふと、足元を見るとメルがぼくのことを見上げている。

スーパーの外に待たせてたの完全に忘れてたなあ。

「にゃー」

「この子が天使ちゃんの猫?すつごーくかわいいつ!名前は何?」

「メルダリン。長いからメルでいいよ」

「メルちゃんかあ。毛並み綺麗だね」

倉橋さんに背中を撫でられびくりとメルが毛を逆立てた。倉橋さ

んには動物がよく懐くけど、メルの場合は極度の人見知りで今のところぼく以外懐いた相手がいないので無理もない。死神の話だと死神にしか懐いていなかったらしいし。

「メル、仲良くしてね」

ぼくがメルに声をかけると仕方なく撫でられていた。目を細めているので撫で方は気に入っているらしい。

「ごめんね、倉橋さん。この子かなりの人見知りなんだ」

「そういう子多いよね」

倉橋さんは気にしていないようだ。ぼくは自転車を引つ張り、目的地のアイス屋さんにとどり着いた。割引きしているということもありそこそこ混雑している。

自転車を駐め、メルをまた外で待たせる。聞き分けがいいのはまるで犬みたいだなと思ったが、何となく猫が嫌いそうな喩えなので口には出さなかった。

中に入ると早速別の知り合いと遭遇する。

「陽菜乃、来てんだ」

「あ、凜香ちゃん見て見て、天使ちゃんも一緒だよっ！」

「よろしく」

「うん、よろしくね」

「2人とも反応薄くない？」

ぼくらはそれぞれ速水さんがコーヒー色、倉橋さんがストロベリー色、ぼくがミント色で自分で言うのもなんだけどみんな結構イメージに合っていた。

少し甘いものについて語り、倉橋さんがメルの話題を出した時にはさりげなく食いついてくる速水さんを2人でいじり、アイス屋さんから出た時にはメルは寝ていた。それを速水さんが普段は変えないポーカーフェイスを緩めて見ている。

「2人ともまたね！学校で会ったらよろしく」

「うん、またね〜」

「またね」

2人と別れ、ぼくがメルを自転車のかごにがんばって乗せ（食料品

とメルでかごはいっぱいになった)アパートに帰った頃には7時になっていた。

お母さんに新しいの買うからともらった炊飯器でご飯を1人分炊き、何となく食べたくなつたという理由で親子丼を作った。横でメルがキャットフードにがつついて食べているのを見て、あそこで倉橋さんに会えたのは幸運だったなと思う。

殺し屋の飼い猫がそんな不味いもの食べてるとも思えないし。

食後に宿題を手早く片付け、その日のノートまとめを終わらせる。夜はベッドでメルも一緒に寝た。何だか1日目なのに一人暮らしに馴染んでいる自分がいて少し怖くなった。

\*

中学2年生の学年末テスト。これはE組選定をするための墮とす生徒を決めるための試験である。よって中学1年生の基礎問題から2年生最後の応用問題まで範囲が広く、どこかで躓いてしまったらそこで負けだ。

最初の試験から順に国語、英語、数学、社会、そして理科で試験が行われ、他の家庭科などの試験を行わないのが特徴だ。

社会のテストまで終わり、残るところは理科のテストのみとなっていた。トイレ休憩のために与えられる10分だが、みんなノートまとめや教科書を見るのに必死だった。

「渚ちゃん、シャーペンの芯持つてない? 芯使い切っちゃって」

姫希さんが焦り顔で言った。ぼくはスクールバッグのペンケースを引っ張り出し、シャーペンの芯が入った入れ物ごと姫希さんに貸す。

「ありがとね、ほんと」

緊張しているのか青ざめた顔で姫希さんはお礼を言った。ぼくはノートまともに目を通す。

「おいお前ら席に着け」

「ええ〜！最後の試験官穴戸先生なのお?!」

じゅりあちゃんがわざとらしい大きな声で抗議する。先生は舌打ちをして返事を返した。

「嫌ならE組行くか?」

「やめときま〜す」

じゅりあちゃんの方角を見ていたぼくは途中で彼女と目が合った。満面の笑みを返される。そう笑みを浮かべられると嫌な予感しかない。ぼくは内心文句を言っただけの気持ちでいっぱいだった。

試験用紙が配られると、先生が時計の長針をひたすら見つめる。針が目的の時間を示したらテストの始まりだ。

「始めー!」

先生の声を合図にシャーペンの芯が紙に擦り合う音で教室を埋め尽くす。中学2年生最後のテストだ。E組に行くにしろ行かないにしろ、テストは本気で挑まなくちゃ。

理科の問題は1度経験のあるぼくにはとても簡単だ。だから素早く片付けることができる。小山君の言う、理科は暗記というのは分からないでもない。満点回答を覚えていれば間違えることがないわけで、計算をしなきゃいけない数学や、翻訳を必要とする英語とは違う。だが、記述問題では如何に理解しているかが問われるのが理科という教科だ。

でもぼくなら殺れる。どの問題も正確に、ケアレスミスで点数を落とさないように。

その時、予想外の出来事がぼくのテストを遮った。穴戸先生がぼくに立つように命じたのだ。

「大石、席を立て」

ぼくは訳もわからず席を立つ。先生が机の中から小さな紙を取り出し眉をひそめた。あまり信じたくないようだがこれが事実なのだ。と受け取る。それが仕組まれたものだとは思わずもないのだ。

「……お前の成績が良いのはそういうことか、大石。まさかカンニングの紙を仕込んでいたとはな」

ぼくは思わず振り返って姫希さんを見た。彼女は何事もないかのように答案にシャーペンを走らせていて。それでも手首は少し震えていた。

「テストが終わるまで廊下に出てろ！後で詳しい話は聞く」

茫然自失のまま廊下へ向かう途中、じゅりあちゃんがイヤミな笑い声を我慢できずといった様子で洩らした。さっきのじゅりあちゃんの笑顔の訳をようやく理解した。

ぼくは罨に嵌められたのだということ。ぼくの机にカンニングの紙を仕込んだのが姫希さんだということ。

信じていた友達に裏切られた。1度そう思うと徐々に絶望に侵食されていった。裏切られた分だけ相手に失望し、裏切ったのが彼女だということに衝撃を受ける。1度は助けてくれた。でもあれは利用するためだったつけ。

姫希さんはじゅりあちゃんに逆らえなくて……いやそれだけじゃないはずだ。姫希さんだってどこかでぼくのこと妬んでた。たまに見せる意識の波長の乱れは嫉妬だった。

やばい。死ぬ。ぼくの中で姫希さんが死ぬ。

廊下でテスト終了を待つ時、終了のベルが鳴る前にぼくは一つの声を耳にした。

「先生、渚はカンニングをしてないと思います」

それは浅野君だった。

墮天使のはなし。

浅野君の発言に、宍戸先生は大きくため息を吐いた。騒動で一部混乱したとはいえ今は試験中。試験中に席を立つなんて言語道断だ。

ぼくは廊下に立っているのでドアを少し開け、中の様子を見た。突然の騒動だったというのに生徒たちは時間の延長を言われていないためテストに集中しきっていた。浅野君が先生のことを睨みつけるような目で見つめる。

「浅野、座れ」

「おかしいです。カンニングなんてあり得ない。渚が頭良いことなんてみんな知ってるでしょう。カンニングしたぐらいで取れるような点数じゃないってことも」

「お前までカンニング呼ばわりされたいのか！いいから座れ！」

様子は見えないが、浅野君は仕方なく座ったらしい。テスト終了の合図が鳴るまで暫く答案用紙を埋める音だけが続いた。廊下に立たされているぼくはそのまま終わるのを待たなくてはならなかった。

試験終了のベルが鳴り、最後の試験でみんなほっとしているようだ。でも、それと同時に自分たちのクラスで起きたことを全員はつきりと覚えていて、言葉の嵐がぼくを襲った。

「天使がカンニング？あれだけ頭が良かったらカンニングなんてする意味ないだろ」

「浅野だって否定してるんだぜ」

「でも大石さんってほんとはそんな頭良くないんじゃないの？」

じゅりあちゃんグループの取り巻きの1人が大きな声で言った。それに周りが同調して「そうだよね〜」などと声をあげる。じゅりあちゃんのカンニング工作は知らなそうだが、その場の空気が彼女たちに悪口を言わせた。リーダー格のじゅりあちゃんが鼻歌混じりに笑みを浮かべていたからだ。

「浅野君と仲良かったからバチが当たったのよ」

「お前ら天使に嫉妬してるだけだろ」

男子の誰かがぼそりと呟き、それを引き金にして女子たちが一斉に笑い出す。

「やっぱわかる??てか、浅野君にくっ付き過ぎ!天使とかなんなの。意味わかんないしー!」

「うわっ、女子怖っ!」

「関わりたくねー」

「いい気味だよねえ。ねっ、姫ちゃん?」

最後の声だけぼくは認識できた。紛れもなくじゅりあちゃんの言葉だ。姫希さんの声は確認できない。

「大石、職員室行くぞ」

宍戸先生に連れられ、職員室へと向かう。職員室の中には生徒が数名ほどこいて、恐らくその何人かは既にE組行きが決定した生徒たちだろう。ぼくは先生の準備が整うまでドアの近くで待機するように言われた。

偶然にもそこにはもう1人待たされている生徒がいて、彼はぼくのことをちらりと見ると声を発する。

「天使が職員室に呼び出っしたのはきな臭いな」

「菅谷君。君も呼び出し?」

「テスト用紙の裏に落書きしたらこのザマさ。A組の方騒がしかったけど、何かあったのか?」

「……カニンングの濡れ衣掛けられたんだ」

ぼくは手短に1番仲良しの友達が脅されてやったこと。ほとんどの人が自分のことを信じてくれなかったことを説明する。菅谷君は大変だなという顔で聞いていたが、何か芸術的なアイデアを思いついたようだ。

「っつてことは今この天使が」

菅谷君はポケットからメモ帳と鉛筆を出して絵を描いた。出来上がった天使の絵はまるで絵画の模写かのようだ。でも紛れもなく菅谷君の絵である。デッサンとはこういうのを言うんだっけ。

菅谷君は天使の羽を黒く加筆する。真っ黒の羽を持つ天使は悪魔のようにも思えた。

「こうなったってことかな」

羽と服を黒く塗り潰された天使を逆さまにひっくり返し、また新たな絵が完成された。なんだかぼくとは違う気もするけど言いたいことは分かった。逆さまになった天使。墮ちる天使。それはつまり――

「墮天使だ」

菅谷君がメモ帳の端を破りぼくに天使の絵を差し出す。その間に菅谷君の担任教師が顔を見せた。

「菅谷君、私について来なさい」

「あーあ、呼ばれた。それあげるから今度絵のモデルやってくれよ。1度描いてみたかったんだ」

「わかった。ありがと、菅谷君。なんかよく分かんないけど元気出た」  
後ろ姿で手を振る菅谷君にぼくは何故か安心した。ポケットに天使の絵を畳んでしまう。さて、ぼくも行かなくてはいけない。

「大石。お前はこっちだ」

宍戸先生に手招きされ、ぼくは面談室へと通された。ここは親子面談などで使われる、誰にも話を聞かれない部屋だ。

「やれやれ。試験中、長沢に大石がカンニングしてるって言われた時はどんな冗談かと思ったぞ」

「カンニングなんてやってません！」

「とはいえ証拠もあるんだ。今まで前例が少なかっただけに対処法は明確ではないが、俺の目の届く場所でカンニングした奴をA組に置いとくわけには行かない。俺の方からE組に行かせるよう言ったよ」

1周目の時にもらったE組行き連絡用紙をぼくに渡した。

「それから1ヶ月の停学だ。頭を冷やして自分が何をやったのか考えろ」

「……先生は信じてくれないんですか？」

鼻からぼくがカンニングをしたと決めかかる宍戸先生に眉をひそめ、少し反抗的な目で盗み見た。彼は頭を掻いている。

ぼくは気がついた。カンニングをやった生徒がいた時、それが誰かに仕組まれたものだと思える教師がどこにいるんだ。しかし、それにし



たつて穴戸先生が1ヶ月もの停学を言い渡す理由にはならない。停学したら弁解の余地がなくなり、ぼくがE組に堕ちたら彼の評価だつて下がるっていうのに。

どうしてわざわざそんなことをするんだろう。

「とは言ってもな。証拠がある。証言もある。いくらお前が優秀とはいえこうも揃つてるとな」

先生は来年の成績次第だと締めくくった。解せないとは思いつつもぼくはもう反論する言葉もなく、面談室を後にする。

職員室ではあの学年不動の2位、学問の天使がカンニングをしたという事で騒ぎになっており、既に生徒たちにも噂として流れたようだった。穴戸先生にカンニングが理由でE組行きを宣言され、E組に行く理由がほしいと思つていたとはいえさすがに濡れ衣のカンニングでE組には行きたくない。さらに1ヶ月の停学。これでは身の潔白を証明する手段がない。残念だけどじゅりあちゃんの計画は成功した。お手上げである。

教室に戻ると周りが遠巻きにぼくの噂をしているのが分かった。姫希さんはじゅりあちゃんのグループと一緒になつてぼくの話題を出している。この異様な光景に幸運なことに5英傑は加わっていなかった。どうやら浅野君に説得されたものとみられる。ぼくに話しかけこそしないものの、普段通りの会話でぼくのことには一切触れていない。

「渚、どうなったんだ」

唯一浅野君がぼくに声をかけた。

「1ヶ月の停学……あと」

「まさか渚」

「E組に堕とされた」

クラスのざわめきが一層広がった。5英傑と並ぶとまで言われた優等生がE組に行くのは前代未聞のことなのだろう。

「でも浅野君

「もう僕に話しかけないでくれな

いか？」

「成績が良かったから仲良くしてただけだ。E組に行く奴は僕の仲間

じゃない。僕も前に言っただろう」

シヨックだった。浅野君はさつきぼくを庇ってくれた。でもそれはA組のクラスメイトだからであって、E組に墮ちることが決定した今、彼にぼくを庇うメリツトがないのだ。

「そつか……そうだよ。ごめん、もう浅野君には話しかけない」

浅野君の性格なら分かっていたことじゃないか。それでも味方のないこのA組で浅野君までとなるとぼくの落ち込みが一層激しさを増す。

じゅりあちゃんは浅野君との会話を目ざとく観察しており、彼がぼくを拒絶した時は拍手して笑い転げた。

「うわあ〜やっぱ浅野君渚ちゃんと仲良くするの止めるんだあ〜！」

「それが正解よ。カンニングなんかする女、A組には相応しくないわ」

ぼくはじゅりあちゃんたちの女子グループまで歩いて行くと、姫希さんの前で止まる。

「ちよつといいかな、姫希さん」

「なに？」

「話がある。大事なことから来てほしい」

「姫ちゃんおどして何するつもりなのお、渚ちゃん？E組の勧誘でもするのかなあ？」

ぞつとするほど嫌気がさす声でじゅりあちゃんがからかった。周りの女子たちがクスクス笑っている。

「なにそれ超ウケるんですけどー！」

「別にいいよ。行ってあげる」

姫希さんは彼女たちとは対照的に好意的な対応をする。彼女は席を立ち、ぼくと一緒に教室を出た。ぼくは無言で校舎裏まで歩き、その後ろを彼女がついてきた。その間一切会話は無かった。

「姫希さんだよ。机の中にカンニングペーパー仕込んだの」

いきなり本題から入るのは話題が思いつかなかったからだ。ぼくはこれが絶望かと相手の顔を見る。ぼくの前で姫希さんの顔色は真っ黒になって、顔を覆い隠した。人の顔色は見え方にもよるけど、ぼくの場合は相手の敵意が強ければ強いほど暗くなる。でもそれが

顔が見えなくなるぐらい黒いのはぼくが自分の中で姫希さんを殺してしまったからだ。

「そうだよ」

「何でそんなことしたの？」

「渚ちゃんつてさ、ほんと鈍感だよね」

彼女が何を言っているのか分からなかった。いつもの明るさを無くした姫希さんは無表情で何を考えているのか読めない。真つ黒過ぎて顔色が掴めない。

意識の波長に集中しようとしても、ざわざわと混線したように複雑化した感情が見え隠れするだけだった。

「私がどれだけ女子をまとめるために頑張ったか。それをあんなぶりっ子の順位がちよつと上だけで逆転されるなら、カンニング工作の手伝いぐらいするよ」

やっぱりあのトイレの時に誘われたんだろうか。姫希さんが女子の順位に拘る理由をぼくは知らない。でもそれは彼女にとってはぼくなんかよりずっと大切なものなのだろう。

「姫希さんは何でそんなに支配したがるの？そんなことしなくても友達ならいっぱいいるのに」

前から疑問だったことを投げかけてみる。彼女は躊躇したが、結局ぼくに理由を話すことにしたようで口から一気に言葉を吐き出す。

「今だから言うけど、私小学校の時虐められてたんだよね。その時は何にも取り柄がなくて、浅野君に会って変わった。だから浅野君のためなら何でもしようって思ったの。女子を支配することだって、渚ちゃんを守るのだって、情報を支配することだってした」

姫希さんが虐められていた。そんな話は聞いたことがなかったけど、それが女子の頂点を守り抜こうとする彼女の理由なんだ。下には落ちたくない。ただそれだけ。彼女もぼくを見ていない人の1人だっただけの話だ。

そして浅野君のために何でもするという発言。これはまるで彼女が浅野君に対して特別な感情を持つてるように受け取れる。

「姫希さんは毛利君が好きなんだと思ってた……」

「伊織が好きなのはほんと。でも浅野君は浅野君だから」

それが恋だと思った。でも実際には全く違うものだった。ぼくが今まで見たどんな感情とも異なっている、浅野君の洗脳が完璧に実用された状態。

姫希さんは浅野君を神格化していた。妄信的な信者だったのだ。ぼくはそれで全ての姫希さんの行動の意義を理解した。浅野君と姫希さんは一見対等で少し距離を取った関係に見えた。どちらも互いの苗字を呼び合い、敬語なんかも一切使わない。でも実際は浅野君が姫希さんを女子をまとめるため、情報支配のためにただ利用していた主従関係だったのだ。

「……狂ってる」

「あ、学問の天使ってあだ名は私が考えたんだよ。神様にいつもくっ付いてる天使ってね」

「全部、浅野君のためだったの？わたしとずっと一緒にいたのも全部」  
「そうだよ」

あつさりした返事にぼくはもうこれ以上姫希さんの話を聞きたくなくなっていた。

「浅野君はE組に行く奴は仲間じゃないって。わたしちもう話さないよ。これで満足だよね」

話を中断するために言う。姫希さんの表情が少し曇り、彼女は遠い目で呟いた。

「E組に行く奴ね……」

「姫希さん、2年間なんだかんだでありがと。嘘だとしても嬉しかった」

ぼくは頭を下げた。姫希さんがぼくのことを嫌いだったとしても、2年間彼女はぼくと仲良くしてくれた。それだけで充分だ。

「……馬鹿だなく渚ちゃん。浅野君の意図分かってない」

姫希さんがぼくに聞かれないようにそう呟いていたことをその時ぼくは知らなかった。

\*

3週間が過ぎたころ、春休みの真っ只中に理事長から呼び出しがあった。

ぼくは何事かと疑ったが、どうやらE組に関するところらしい。春休みの授業に参加できない分の遅れとか、そういったところかな。

春休みなので学校には誰も居らず、言われた通り理事長室にノックした。

「入りたまえ」

ぼくはドアを開けて理事長室の中に浅野君とじゅりあちゃん、そして姫希さんの姿を発見する。何でこの3人がここに居るんだろう。

「渚ちゃんまで呼び出して、いったいどういうことなの？あ、じゅりあたちの関係をアピるのかあ」

浅野君は一体じゅりあちゃんに何をしたのか。じゅりあちゃんはやけに浅野君にベタベタくっ付いていた。ぼくに見せつけているようだ。

「僕が呼んだのはもっと別の話だ。理事長、今から大石渚の無罪を証明します」

ぼくは浅野君を何度も見てしまった。どういうことだろう。浅野君は今から何をするっていうんだ？

じゅりあちゃんも同じように困惑した様子で浅野君の腕に自らの腕をぎゅっと絡めた。何故その動作をしたのか不明だが、怖くなったのだろう。しかし彼女の表情は余裕すら感じる。実行犯が姫希さんだから安心しきっているのか。

一方の姫希さんは全てを分かりきっているような顔で浅野君より少し離れた場所に立っていた。ついこの前話した彼女の妄信的な浅野君に対する思いを思い出す。

「ほう。聞かせてもらおうか」

理事長は浅野君の話に身を乗り出した。どうやら息子が何をするのか少しばかり興味があるらしい。

「まず、渚が書いたというカンニングメモの筆跡ですが、彼女は右利きなのに手が擦れた跡は左側にありました。つまり渚とは別の生徒が仕組んだということですよ」

「へ、へえ、そうなんだあ。でもじゅりあ右利きだもんねえ。左利きなんていつたら姫ちゃんとかかなあ？」

実行したのが姫希さんだからってじゅりあちゃんはぼくに挑発する。何とか怒りを堪えて浅野君の説明に耳を傾けた。何故か姫希さんは眉ひとつ動かしていない。

「2つめに、カンニングメモを確認しましたが、あのレベルなら精々取られて30点分。しかも基礎のみなのと、渚の答案の論述はカンニングメモとは大きく違っていました。そもそも毎回満点レベルの答案を出す渚がわざわざそんなことをするのは考えづらいかと」

「だが、結果は結果だ、浅野君。カンニングの証拠は彼女の机の中から現れ、それは彼女がやったという証明になる。例えば大石さんがいくら成績上位の常連だからと言って、だからどうしたという話だ。それともまだ何かあるのかね？」

理事長は浅野君の話を促した。

「3つめはこれです」

『じゅりあ、君と話せて嬉しいよ。実は言うとお石さんのことは嫌いだったんだ。カンニングしたって聞いた時はざまあみろって思ったよ』

ボイスレコーダーから流れる浅野君の声がいつもとは全く違う言い方でじゅりあちゃんの名を呼んでいた。これは姫希さんの常套手口である録音だ。しかしこの会話から何をしろっていうんだ？

ぼくは続きを聴いて浅野君が何をしたかったのか漸く分かった。

『じゅりあもううれしいなあ〜！そうなの！渚ちゃんが邪魔すぎてぜんっぜん浅野くんと話せなかったんだもん……でもいい気味！あんな簡単に罠にはまっちゃって……あ、ごめくん。今のはじょうだんだ』

よお』

「嘘でしょ！何でこんな録音！」

『気になるから教えて？じゅりあの知ってることは全部知りたいんだ。それに僕も大石さんのことは嫌いだし』

『ほんととお?!うれしい!えつとねえ、カンニングペーパーを作ったのも仕込んだのも姫ちゃんなんだよお』

『伊藤さん?じゅりあは何かしたの?じゅりあのことを知りたいんだ』

『考えたのはじゅりあなんだけどねえ、姫ちゃんは手伝ってくれたんだあ』

そこでブツツと音声が切れる。浅野君は勝ち誇ったように理事長と、じゅりあちゃんを交互に視線を動かした。じゅりあちゃんを自分の腕から引き離す。お前には用が無いという態度にじゅりあちゃんは泣きそうな顔をしていた。

「これが証拠です」

「ごめんなさいっ!私じゅりあちゃんに脅されて逆らえなくて……やらないと虐めるぞって。それで仕方なくやったんです……っ!」

姫希さんが泣きじゃくりながら弁解した。浅野君はそんな彼女を一瞥さし、一言告げた。

「ということなので彼女は見逃してあげてください」

さすが浅野君だ。自分のコマが罰せられるようなことにはならないよう考えている。ぼくは理事長と目が合った。思わず逸らすと彼は小さく笑い、目を閉じて一回頷いた。

「……分かりました。大石渚さんのE組行き、及び停学は取り消しとしましょう」

「ほんとですか!」

ぼくは信じられなくてすつ飛んだ声をあげてしまう。浅野君が口パクでお前は黙ってると呆れた顔で言った。理事長は更に言葉を続けた。

「長沢珠理亜さん。あなたをE組行きとします」

じゅりあちゃんが、E組行き?..

「なんなの?! みんな揃ってじゅりあのこと嵌めてそんなに楽しい? 理事長だってじゅりあがE組に行ったらこの学校の寄付金を減らされて嫌でしょ?!」

さすがのじゅりあちゃんも危機だからなのか声はかわいい子ぶっておらず、言葉遣いも180度違うものだった。

「長沢さん。あなたは何か勘違いをしていますよ。あなたの両親からの寄付金が減る? 減ったところでそんなはした金を私が稼げないんです?」

すごい。今理事長の顔がバケモノみたいに歪んだ気がした。それだけの恐怖が一瞬よぎった。

じゅりあちゃんは顔面蒼白で3秒ほど声が出なくなるぐらい固まる。

「っ、もういい! お父様に訴えてやるんだから!!」

勢いよく理事長室を出て行ったじゅりあちゃんをぼくらは呆然と眺める。勝ったのだ。浅野君は彼女を追い込むことに成功した。

でも、ぼくの中でじゅりあちゃんがE組に堕ちて納得するのかという、E組は地獄じゃないだろうって本心がそれを邪魔する。

「浅野君はまだ友達ごっこを続けるということですか。いえ、何も口出しするつもりはないです」

理事長は傍目からも分かるほどわざとらしい作り笑いで浅野君に言った。浅野君は友達ごっこという言い方に反応して眉間をぴくりと動かした。何とか堪えて怒らないようにしているらしい。

「……そうですか。僕たちも失礼します。E組行き取り消しの件ありがとうございました」

浅野君に引っ張られてぼくは理事長室から廊下に出た。緊張が解け息を吐くも理事長室に居る間聞きたいことが沢山あったことを思い出す。

「ねえどういふことなの?! 浅野君、E組に行く奴とは仲間になれないって」

「その後の前に言っただろうと付け加えたから分かると思っていたが。甘かったな。伊藤さん、君は先に帰ってくれ。ぼくはまだ渚に話



したいことがある。それから今日の内にカンニングの無罪が証明された噂を流せ」

浅野君は命令口調で姫希さんに言い放つ。姫希さんの表情は絶えず変わらなかつた。

「わかつた。またね」

姫希さんはひと足早く下駄箱へ向かい、ぼくたち2人はA組の空っぽな教室に行く。

「前に言ったね。何が何でも阻止するって」

ぼくはE組の人を差別するかという話題を思い出した。確かに浅野君はそんなことを言っていた。でも「前に言っただろう」の一言でぼくがそれに気づくほど記憶力が良いとでも思ったのかな。さり気なさすぎたあの時は本当に泣くかと思つたんだけど。

そう言つてやりたい気持ちがあつたが、何とか抑える。浅野君は言つた通り阻止した。ぼくのことを助けてくれたのだ。

「そうだった。すっかり忘れてたよ」

「伊藤さんを使われるとは思わなかつたから少し時間がかかつたよ。伊藤さんに事情を教えてもらわなかつたら危うく彼女を社会的に抹殺するところだったしね。長沢さんがE組落ちで済んだのもそうだ」

姫希さん、ぼくの無実を証明するのに手を貸したんだ。そっか、浅野君の言うことは何でもするんだつたね。

この前の姫希さんの話を思い出し苦笑した。まさか彼女が浅野君とそういう繋がりだったとは思ひもせず、見えているものだけ信じるのは良くないなと反省する。

「……姫希さんから聞いたんだけど、浅野君と姫希さんは主従関係なの?」

「伊藤さんは僕の言うことには逆らわない。それを主従関係と言うのならそうなんだろう。コマとして1番使えるのも彼女だ。だから今回のことも見逃した」

浅野君がぼくを守るように姫希さんに命令したのかということは何かないでおいた。そんなこと聞いても虚しいだけだ。

「ありがとう。浅野君にも裏切られたと思つてたから、ちよつと驚い

たよ」

「それはもういい。これで来年またA組だな」

「そうだね」

T u e s d a y

前に浅野君に言った言葉を自分に投げかける。それはぼくの気持ち  
ちが決定したことを表していた。

\*

翌日のうちに職員室でA組復帰の書類提出を行った。担任教師の  
宍戸先生は仕事が増えたと言わんばかりに不機嫌そう。もつとも  
彼の不機嫌の理由がそれだけならいいのだが。

「宍戸先生、じゅりあちゃんにお金積まれたでしょ」

宍戸先生の動きがぴたりと止まり、目の奥でぼくを捉える。言い逃  
れができなさそうだと思ったのか、彼はあっさり認めた。

「……お前、よく分かったな」

「カンニングの紙、あんな机の奥にあつたら気づく方がおかしいよね。  
今考えたらカンニングで1ヶ月の停学にしたのは言い逃れをされる  
前に学校から追い出すためだ」

「それでお前は どうするんだ？俺を退職処分にするよう彼氏に頼むつ  
てわけか？」

「そうならないように先生にすることは1つだよ」

A組復帰のために書いた用紙を真つ二つに引き裂く。これでぼく  
が3年でA組に戻ることはない。

「簡単な話、またわたしをE組に墮とせばいい」

「ふつ、今まで俺に頼みごとをしに来た奴は何人もいたが、E組行きを要求されたのはこれが初めてだな」

穴戸先生は可笑しそうに大声で笑う。これは傑作だと言わんばかりに。

何にも可笑しくないし、ぼくは至って真面目なだけだな。

「代わりに長沢珠理亜のE組行きを取り消してほしいんだ。本人には内密に。担任教師ならそれぐらいできるよね」

「そのぐらいやってやろう。だが大石、お前何を企んでる。そいつの所為で危うくカンニング犯扱いされたのに」

不思議そうな顔をする先生に「分かってないなあ」と呟き淡々と説明する。

「カンニング工作をした生徒として、じゅりあちゃんは初めていじめられる側になるだろうね。逆にE組に行けることにほっとするぐらい。だから彼女がE組に逃げるなんて絶対に許さない。ちよつとは痛みが分かる人間になれって話だよ」

E組落ちせずに自主退学したいじめられっ子のためにも、ぼくの気持ちに蹴りを付けるためにも、じゅりあちゃんは1度痛い目を見た方がいい。強い立場しか知らない人間は弱さを知らない。だからいじめをしようなんて思うんだ。

「お前意外といい性格してんのな。でもお前がE組に行こうとする理由は何なんだ？お前ならA組で来年も楽しく過ごせるだろう。勉強に苦しむこともない。なのに何故だ？」

「この2年間確かに楽しかった。でも全部嘘だったんだ。友情も楽しさも教師もみーんな」

「だから先生、ぼくはE組に行くよ」

ぼくは破れた紙を先生に押し付けて職員室を後にした。

「逃げるんだ？」

姫希さんがぼくの行く先に立ち塞がっていた。

「そうだね」

「せっかく浅野君が助けてくれたのに」

「姫希さん。浅野君のことよろしくね。でもまだこの事は言わない

で」

浅野君に言ったら今度もまた阻止しようとするかもしれない。

「……………その浅野君に言われて来たんだけどな」

「姫希さんの言葉を聞き逃す。ぼくは首を捻った。」

「今何か言った？」

「ううん、何も。渚ちゃん、E組行つてからも頑張つてね。あと…………悪かったと思つてるよ、その、カンニングのこと。ごめんね」

何だか彼女の言葉は前々から用意されている感があった。ぼくはふと姫希さんが春休みのぼくが登校してくる日にここに来た理由を思いつく。

「もしかしてぼくにそれを言うために春休みなのにわざわざ登校してきたの？」

「…………まさか」

姫希さんが目を逸らすのを微笑ましく思う。姫希さんは1周目では出会わなかった人だ。彼女ともっと別の出会い方をしていれば、その時は本当の友達になれたかもしれない。

ぼくがE組行きを決めたのは春休みの終わりごろ。期せずして月が破壊される3日前となっていた。

## E組1学期

始まりのはなし。

3月のある日、前触れもなく月が爆破された。理由を知る人はほとんど居らず、周りが大騒ぎする中ぼくは空を見上げて呟く。

「やっただ」

やっど始まる

暗殺教室が。

ぼくは学校から帰ってきたばかりで制服を着ていた。でも、そんなこと今は関係ない。死神が脱走しようとするのは月が爆破されてすぐのことだった。だとすればそれは今である。

自転車置き場に行くところから来たのかメルが無言で乗せるように上目づかいをする。メルを自転車のかごに乗せ、自転車を漕ぎ始めた。辺りは真つ暗なのでライトで道の先を照らした。

今頃死神が脱走しているのだろうか。雪村先生はどうしているんだろう。ぼくの忠告が死神に受け取ってもらえているといいのにな。そんなことを考えながらひたすら自転車を漕いだ。

ようやく目的地へと近づき、研究施設沿いの角を曲がる時、あまりに慌てていたのでそのすぐ側を歩く女の子がいたことに気が付かなかった。

「うわっ！」

慌てて急ブレーキをかけるが、彼女はその拍子に転んでしまったらしい。膝を大きく地面に打ち付けてしまっている。

「いった……」

「ごめん！大丈夫、だった……？」

謝ったぼくは彼女の顔を見て声を失う。目の前に居たのは制服姿で真つ黒な長い髪を持つ少女だった。でも髪の色こそ違うにしても彼女は真正銘茅野で。ぼくが救えなかった茅野カエデ本人なのだ。まさかこんなところで会うなんて。でも彼女は雪村先生と今日会う約束をしているはずなので会う可能性は高かった。

彼女はどうかやら膝を擦りむいてしまったようじゃがみ込んでいて、ぼくの言葉に対しておざなり程度に微笑んで大丈夫だと言った。

「大丈夫だよ、大した怪我はしてないし」

「膝血が出てるよ！えっと、絆創膏が確かここに……」

制服のポケットから絆創膏を取り出した。それを彼女は傷口に装着する。茅野は立ち上がって初めてぼくのことを見たようだ。

「あれ、もしかして同じ年ぐらいかな？わたし14なんだ」

「ぼくも」

ぼくの言葉を爆発の音が遮った。建物が崩れ、近くにいたぼくらを爆発で破壊された壁が襲う。瞬時にそれから逃れ、何が起きたのかを把握した。

間に合わなかったのだ。

「お姉ちゃん……あそこにお姉ちゃんがいるの！」

「ぼくも行くよー！」

膝を庇いながら走り出す茅野を追いかけた。途中で彼女を追い抜かして道の先に行く。

爆発が起こって辺りは混乱していた。研究施設だった建物はほぼ全壊しており、瓦礫の中を潜り抜けるのは至難の技だ。でも、これでもぼくは教室で暗殺者をしていた身である。茅野も女優業をやっていたのと小柄なのが幸いし、ぼくの後ろを難なくついて来ていた。さらにどう行けば辿り着けるのかは、研究施設に潜入した時に浅野君に見せてもらった施設内図を鮮明に思い起こし、どうにかして内部までやって来た。

ついでに言ってしまうえば先陣を切っていたのは1番小柄で隙間にすぐ入り込める猫のメルだ。

「メルダリン？君が何故ここに……」

死神の声が遠くからしてどきりと肩を震わす。メルは既に2人を見つけたようだ。

研究室の奥に目をやるとそこには横たわる雪村先生と触手を持つ化け物が彼女の頭の血を弄んでいた。メルはそれを大人しく眺めている。

「つ、雪村先生……」

「お姉ちゃん……!」

後ろで茅野が小さく声をあげた。ぼくはスマホを取り出し救急車を呼ぶ。

ぼくが雪村先生をもう一度見た時にはもうすでに死神はいなくなっていた。彼女の頭の傷の止血をするために包帯とガーゼを探し、それを傷にあてがった。雪村先生の隣には超生物からの直筆のメッセージが置かれていた。

\*

関係者へ

私は逃げるが

柵ヶ丘中学校3年E組の担任なら

引き受けてもいい

後日交渉に伺う

超破壊生物より

\*

ふと茅野を見れば彼女は一心不乱にばら撒かれた容器やケース、パソコンをスクールバッグに入れている。ぼくは思わず尋ねた。

「それ使って何するつもりなの?」

彼女の動きが止まる。鋭く睨みつけ、顔を背けた。彼女の意識の波長は小刻みに揺れていて、姉がどうなったのかという恐怖が見て取れる。

「関係ないでしょ。放っておいてよ」

しばらくして救急車が到着した。親族ということで茅野と一緒に救急車に乗り込んだ。

取り残されたぼくはメルが丸まった紙を啜えていることに気がつく。紙にはスペイン語が書かれていて、死神からぼく宛の手紙だった。

\*

メルの飼い主へ

君の忠告を

しつかり聞いていなかったのを  
後悔している

もし君が

殺し屋になるのなら

私を殺しに来てくれ

相手をしよう

死神より

\*

こんなこと言われたら、先生の最期を知ってるのにどうすればいい  
のか分からなくなるじゃないか。死んで欲しくないと、先生を助けた  
いと思っていたのに混乱する。

1 周目のあの頃思っていたことが蘇った。

殺せんせーを殺したい。殺せんせーが殺し屋に殺されるのも、誰か  
と闘って力尽きて死ぬのも御免だ。

ぼくはぼくの手で殺せんせーを殺したい。ぼくの1番尊敬する存  
在として、ぼくを見てくれた憧れの教師として。

そして目標とする最強の殺し屋として。

瓦礫の山を見渡し、ぼくは茅野が回収しなかった物たちに視線を動  
かした。容器に入っているものの正体に覚えがある。茅野が持って  
いった物の1つで、殺せんせーを殺すのに使われたものだ。

触手の種……？

その時すべての答えが見つかったような気がした。

\*



大病院のとある病室の1つに茅野、いや雪村あかりはいた。ぼくの登場にいささか驚いている様子だ。

あの後必死に調べて、雪村先生が居るといふ病院を突き止めた。彼女が死んでいなかったことに心の底からほっとしたが、こうやって来てみるとどういふ現状なのか分かって喜んでもいられないと思う。

お見舞いの花を彼女に渡し、雪村先生を覗き込む。彼女が死なない未来をぼくは作った。なんの因果かバタフライエフェクトか、雪村先生は研究施設では死なず、植物状態のまま1週間は目が覚めていないのだという。目覚める見込みはないが、死ぬこともないそうだ。

ぼくは雪村先生を救えたのだろうか。これは茅野にとっては救いだと言えるのだろうか。

もしかしたら一生目覚めないかもしれない。それでも少しの希望を抱いて、そうして雪村先生が死んだら。茅野はまた傷つくことになる。

「お姉ちゃんとはどういう関係なの?」

花を花瓶に生け、彼女はぼくに尋ねた。あの時の反応からだいたい分かっているのだろう。それでもぼくは答えた。

「ぼくの担任だったんだ」

「桐ヶ丘中学校3年E組の?」

的を得た質問だ。超破壊生物のメッセージにはそう書かれていて、彼女にとっては不可解にしる雪村先生が働いていたのも同じ場所である。

「……行くつもりなんだね。復讐のために」

「わたしはお姉ちゃんをこんな風にしたあいつを許せない!だからわたしは——」

「触手を使うの?」

意識の波長を突いて相手の脈を抑えた。彼女は落ち着きを取り戻して茫然とする。ぼくには茅野が何をしたいのか分かっていて。

彼女の淀んだ殺気は復讐心から来るものだ。雪村先生が植物状態になったことの報いを思い知らせたい。そんな思いが伝わってくる。「何でそのこと……」

「あれは命に関わるんだよ?!下手したら死んじゃうかもしれない」  
「そんなの関係ないよ。あの怪物を殺す。そうと決めたら一直線なんだから」

だめだ。顔色が暗い時に何を言っても無駄だ。彼女は本気で殺る気になってる。しかも、妙に殺気が強まっているのを見ると既に……  
予想は的中していた。彼女のうなじから触手が現れたのだ。病室に人がいないのをいいことに触手は自由に動き回り、彼女は雪村先生の頬に触手当てた。

「もう取り返しがつかないとこまで来てるんだよ」

涙声混じりの言葉とまだ身体に合っていない触手は酷くアンバランスだった。不安定な意識の波長からは超生物への憎悪と殺意が読み取れる。

「そうみたいだね。ごめん、安心して。ぼくはこのことを誰にも言わないから」

ぼくは茅野を手伝うふりをしようと思った。彼女が壊れないように、最後に殺されないようにぼくは一緒にいなきやいけないんだ。

役者をしているからか、彼女は演技が何たるかを理解している。そのため意識の波長を嘘発見器代わりに使うぼくとは違い、相手の表情で嘘が分かるようになってきているのだろう。彼女から見ればぼくは正直なことを言う姉の教え子だ。あの現場にいたのなら、どちらが悪なのかというのはあの超生物と1年過ごしていない限り分かりきったこと。そしてぼくの特技は警戒されないこともある。

彼女はぼくを観察するのを止め、少し微笑んだ。触手をひっこめるところを見ると警戒心を緩めたようだ。

「名前、何て言うの？」

「大石渚。ぼくのことば渚って呼んで」

「茅野カエデ。この1週間で考えた名前なんだ。柵ヶ丘編入の手続きはもうしたよ。本当に誰にも言わないって約束する？次会う時は初対面のふりをするって」

「約束するよ」

2周目で茅野を初めて見たその日から、ぼくは彼女を助けることを決意したのだ。それは今も変わらなかつた。

\*

4月。新学期が始まってすぐ、学校の生徒は大きな変化に気がついたのでろう。中学3年生のクラス分けを見て、A組に居るべき人物の名前がなく、逆にE組に居るべき人物の名前があつた時、だれかが言つた。

「天使が身を犠牲にしたのだ」と。

E組に来るのは2周目では初めてのことだつた。停学中だつた2週間、みんなはここで雪村先生の授業を受けていたのだらう。ぼくは前と同じ席に座ると教室のドアが静かに開けられた。

「今日から転入なんだ。茅野カエデ。よろしくね!」

「ぼくは大石渚。隣の席みたいだ、よろしくね」

ぼくらはまるで初めて会つたかのように挨拶を交わした。それは続けて他の生徒がやって来たからで、茅野の秘密を守るためのことだ。

「うそだろ……これは夢か?!現実なら誰か俺を殴つてくれ!!」

最初に教室にやって来たのは岡島君だつた。ぼくは全力でスルーに徹する。

「わあ〜!天使ちゃんもE組なんだ。1年間よろしくね!」

ほんわかした雰囲気の中、倉橋さんがやって来て、茅野が自己紹介をす

るとさっそく甘いもの好きという共通点が見つかった。実はぼくも2週目に来てからは嗜好が女子らしく甘いものには目がない。

「じゃあグルチャ作ろっか!」

という茅野の提案により後で加わった女子数名を含むSNSのグループが結成された。何だかE組だとあっさり友達が出来るのが不思議だ。やっぱりA組向いてなかったのかな。女子の格付け争いでギスギスしてたし。

「そういえば何で天使ちゃん?」

ぼくのあだ名を知らない茅野が言う。来たばかりで知らないのも無理はない。

「ずっと次席だから学問の天使って呼び名が広まったんだっただよね。でも長いから天使って呼んでる人多いよ」

矢田さんが丁寧に解説を加える。そんな彼女はぼくのことを渚ちゃんと呼んでくれる数少ない人だ。天使ちゃんと呼ばれるのは嫌いじゃないけど、名前と呼んでくれた方がぼくのことを見ていてくれるような気がして嬉しい。

「ふっふっふっ……カンニング騒動の時は堕天使ってあだ名が広まったんだけどなあ。E組に来たのをキツカケに復活しないかな? E組の堕天使みたいなの!」

不破さんがジャンプを手に興奮したように語る。ぼくはそんな名前を付けられた日には引きこもりになるぐらいショックを受けるなと冷や汗をかいた。

「不破さんは少年漫画的じゃなかつこいい名前が好きなんだね……」

「それにしても雪村先生まだかな? 今日ちよつと来るの遅いね」

片岡さんが磯貝君にそう話すのが聞こえ、雪村先生という単語に反応して茅野のことをちらりと見た。彼女からは動揺の気配すら感じられない。さすが元天才子役だ。茅野カエデになりきってる。

「その内来るはずだよ。あ、今日始業式だから早く教室出よう!」

磯貝君がそう返事をして、忘れてたというように一気にE組全員が教室を駆け出した。新学期早々体力を使い果し、本校舎についた頃には日頃運動しているぼく以外がぐったりしてたのは余談である。

その日の始業式はぼくに注目する生徒が多く、新学期すぐの校長の話を聴く人はいなかった。天使がE組にいるという噂は下の学年にまで広まっているらしく、同じ女子バスケット部の後輩たちがひそひそとぼくの噂話をしているのが聞こえた。

その間校長は天気の話をしているはずだった。入学式が明日なので晴れるといいと言った後のことだ、校長の額に汗が滲んだのは。

彼が居もしない理事長の姿を思い浮かべたことは一目瞭然だった。問題ごとが起こったとき、一番恐ろしいのは理事長だったから。

しかし例外もある。ある担任教師は理事長の決めたE組行きを覆し、A組に行くと決まった生徒をE組に、E組に行くと決まった生徒をA組に替えた。これは普通ならあり得ない話なのだが、E組に行くかどうかの審査は基本担当教師に任されるためお咎めはなかったのだという。当事者のぼくからしてみれば理事長は気まぐれなのではないかと疑うような話だ。A組の穴戸先生は優秀だけど金で動くつていうのに。その中そう上手くは回ってないらしい。

さて、校長の抱える問題ごとが何なのか、それは校長が次に放った言葉で明らかになった。

「昨年度の賞受賞者を呼びますので呼ばれた生徒は前に出てきてください」

ぼくはあつと呟いた。去年は浅野君に対抗して幾つかコンクールやコンテストに手をつけていたはず。

校長は最初にスポーツでの賞を受賞した部活、個人でのものを発表していった。テニス部やバスケット部、野球部などの部活が大会優勝を果たしたことが知らされる。

しかし問題はこの後のスポーツではない、学問分野の特別表彰者だ。

「全国模試1位浅野学秀、8位大石渚、その他に23名の生徒が100位圏内に入りました。高校生読書感想文コンクール最優秀賞浅野学秀、優秀賞榊原蓮、佳作大石渚。中学生英語スピーチコンテスト優勝大石渚、準優勝瀬尾智也。英語検定1級、浅野

学秀、大石渚、2級瀬尾智也。仏語検定1級浅野学秀、準1級大石渚

やっぱり。凄いやっちゃまった感を覚えた。E組に入ったばかりなのに目立って仕方がない。というか理事長のE組が落ちこぼれていう理念に反している気がする。

去年は何も考えずに5英傑と何かを誘われたら即参加していたから無理もない。ぼくにそんな文章力があるなんて思ってたけど、何故か佳作を取ってびびくりだ。英語のスピーチコンテストは浅野君がテニスの大会があつて不参加だったんだっけ。

前に出て、幾つかの賞状を受け取るとA組の誰とも会話せずにE組の列へと戻った。手には賞状ばかりである。

「大石さん……賞凄い取ったね」

「うん、渚でいいよ」

隣の磯貝君が半ば尊敬と呆れの顔をしてみせる。こちら辺の学問分野のコンクールは浅野君と一緒に総なめにしてきた。さらに検定も受けたりと、学校生活以外での活動が案外多い。ただでさえ「学問の天使」なんて大層なあだ名で目立っているのにこれ以上目立ったらどうしようか。E組に来たのに派手にやり過ぎだ。

D組の生徒があいつ超人<sup>チート</sup>過ぎね？と言っているのを耳にしたがそれは浅野君の方であつてぼくじゃないと思いたい。

「それでは今年度の生徒会から挨拶があります」

咄嗟に顔を壇上へと向けた。浅野君は5英傑を後ろに従え、舞台上に立っていた。彼がマイクの前に立ち下を見渡すと目が合ったような錯覚を覚える。まるで彼は下にいる全員の目を見据えているようだった。

「こんにちは。今年度の生徒会長に就任した浅野学秀です。皆さんはパレートの法則を知っていますか？2割の人間が富と権利の8割を手にし、逆に8割の人間は残りの2割の財を占める。断言しましょう、君たちは選ばれた2割の人間であると」

彼のスピーチには校長の挨拶の百倍以上に引き込まれる要素があつたらしく、生徒たちのほとんどが瞳を爛々と輝かせて熱中してい

た。あの理事長にしてこの息子ありか。

1 周目の内容とは少し違うことに気がついて浅野君は何を考えているのだろうかと思問に思う。

「そして今年度の生徒会では努力不足でE組に落ちた生徒たちにもチャンスを与えようと思います」

……ん？

とても嫌な予感がした。前に竹林君がA組に行ってしまった時のスピーチみたいだ。あの時は竹林君が理事長の賞状を壊しただけで済んだが、今回はそれが浅野君ということもあつてか爆弾が飛び出しそうな気配がする。

残念なことにその勘はすぐに当たった。

「僕はE組に監視役として派遣されることになりました」

笑顔でそう言い放つ彼に生徒たちは何が起こったのだと騒ぎ出す。

「「はあ?!」」

当の本人たちであるE組生徒全員の声が重なった。これが後に「E組改革宣言」として放送部に語られることになるのだが、ぼくたちはそんなことを知る由もなかった。

暗殺のはなし。

E組の教室ではみんなが奇怪な表情である1点を見つめていた。ぼくは後ろの席を見て顔を顰める。本来ならカルマ君が座るであろう席に浅野君はいた。1番後ろだと周りが見やすいからとか理由をつけて。

「まじかよ……」

「ほんとに来てる」

不満を漏らす生徒も少なくない。生徒会長直々のE組参加は突然過ぎる出来事だったし、本校舎から解放されると思っていた生徒もいたからだ。

倉橋さんは天然な物腰とその直球さで浅野君に尋ねた。

「ほんとにE組に来るの?」

「言っておくが、僕はE組の生徒になったわけじゃない。監視しに來ただけだ。籍はA組のままだし、行事もテストもA組として参加する。E組にいるのはそうだな、授業中ぐらいだ」

「ほんと何で来たの浅野君……」

ぼくは浅野君の隣の席に座ると机に頭を乗せた。少し頭痛を感じ、その理由の大元は浅野君だという確信がある。

授業中だけ参加するだって?!そんなの思いつきり殺せんせーのことがバレるじゃないか。いや、浅野君にバレたから何だって話だけど。何でもこなす彼が暗殺に参加することになるのは願ったり叶ったりだ。

でも何で監視役?確かにそういうことなら差別も受けないし高校にも進学できるだろうけど。ある意味狡い戦略だ。

『そんなに僕が同じクラスなのが嫌か?』

『予測できないことが嫌いなだけだよ』

フランス語で少し不貞腐れた発言をする彼にぼくはそう返事をした。今や浅野君は海咲の次に侮れない未来を簡単に変えてしまう存在だ。ぼくが深く関わってしまったばかりに彼が何をするのか予



測できなくなるなんておかしな話だとも思うが。

少なくともあのスピーチ。あれは前とは違うのに理事長を彷彿とさせるものだった。確か理事長は殺せんせーに働きアリの法則の話をしていたが、浅野君が言っていたのはそれとまた少し違うものだろう。

「すげーっ！よく分かんない言語で話してる。噂の通りだ」

ぼくらは周りの反応がA組とは違い慣れている様子ではなかったので言語を日本語に戻すことにした。別に聞かれてこまる内容でもない。

「姫希さんに浅野君のことよろしくって頼んだばかりなんだけどなあ」

「伊藤さんにはA組の支配体制を維持させてるよ。僕がいなくても秩序が乱れないようにね」

「E組の監視って何をするつもりなの？」

「本校舎の教師が見てないからって、E組に薬や煙草に手を出す奴が出たら風紀が乱れるだろう。そういう行動面での注意を怠るなどうだけだ。まあ単に渚が心配だったというのもあるが……」

意外な失言にぼくはあれっと思を傾けた。途中まで正論だったのに最後を聞いた限りではそれが全ての理由のような……まさか。浅野君に限ってそんなことはあり得ないからオマケのようなものだろう。

「心配してくれてありがとう」

「勘違いするな。僕はただ同じレベルの話し相手が居なくなると勉強のやる気が損なうと思っただけだ」

「……浅野君は素直じゃないよね」

くすりと笑うと「失礼な」と呆れたように言われた。周りの生徒たちが揃って顔を合わせている。

「なんか……思ったより楽しそうに会話してるんだな」

「いつも難しそうな話してるもんだと思ってたぜ」

「あの2人絵になるな」

と言いながら菅谷君は呑気に絵を描いている。それを三村君が褒

めたりして、2人の中で芸術関係の話題が盛り上がっていった。

「しかしこれで学校生活がだいぶつまらなくなるな。E組の教師なんてたかが知れてるだろうし、A組の授業に比べたらレベルが違う」

「……それはどうかな」

ぼくは髪を耳にかけた。カチューシャを留めているだけの髪は少し鬱陶しいとも思う。茅野みたいツイントールにしたほうがいいのかも知らない。そう思っていた時寺坂君が机を足で蹴り、ぼくらの注目を煽る。

「けつ、監視役とかふざけてんのかよ。どうせ俺らのこと馬鹿にしに来たんだろ、理事長の息子だからって偉そーに」

浅野君は理事長の息子だからという言葉が嫌いだ。親と比べられているような気がするのと、彼自身はほとんど理事長の息子という権限を利用していないからだという。学力もスポーツも地位も全て自分で手に入れてきたのに、それを知らずに理事長の息子だからという一言を使われるのはズルい。さらにそれを言ったのはE組の生徒なのだ。

彼の表情には僅かな怒りが込められていた。

「君、小山を虐めていた寺坂君だよな？ 去年の成績は学年最下位」

嘲るように顔を歪ませ、普通ならしないような挑発をする浅野君はカルマ君みたいだった。

「だったら何だよ！ 文句があるならタイマンで勝負してやろうか?!」

机を叩き寺坂君は浅野君をビビらせようと席を立った。拳を握りしめて殴る姿勢は万端だ。

「へえ、言っただね」

浅野君は薄く笑みを浮かべて静かに席を立つ。

「浅野君！ 喧嘩なんて柄にもないこと……」

『相手の動きを交わすだけだ。心配ない』

スペイン語で彼は宣言した。

寺坂君が浅野君に殴りかかろうとする様子をぼくはハエが止まるような動きだと思った。そんな中、寺坂君の動作は背後の誰かによって静止される。

「とはいえ新学期早々喧嘩とは危ないですねえ」

と黄色いタコが言った。

「二いや、誰だよ?!」

突然出てきた得体の知れない怪物に生徒たちの心がシンクロした。それは浅野君も同じようで、目の前の相手をどうにか分析しようとしているが彼の力では外見による特徴と瞬時に現れた超スピードしか分からず、よって残りの95%は不明となった。

丸いニコちゃんマークを変形させたような顔に、何十もの触手。それをひと言で表すのならみんなこう言っただろう。

タコのような、と。

「……指示があるまで教室に入るなど言ったはずだが？」

後ろから黒いスーツを皺一つ付けずに着こなした身長の高い男が腕を組んで現れた。烏間惟臣。28歳。防衛省特務部から派遣された超生物の監視役である。

「教室の中で喧嘩をしようとする生徒が居たら、教師として見過ごすわけには行かないでしょう」

「教師……ってこの怪物が?!」

「とりあえず、全員席についてくれないか？話はそれからだ」

烏間先生の配慮によって喧嘩寸前だった寺坂君や浅野君を含めた全員が席についた。黄色いタコの超生物、現在では名前がまだ付いていないのでタコ教師とでもしておこうか。タコ教師は教卓の前に立ち、生徒たちを眺めると全く心が読めない顔のまま自己紹介を始めた。

「はじめまして。私が月を破壊した犯人です。来年には地球も爆る予定です。君たちの担任になりましたのでどうぞよろしく」

こうして相手が来ると分かっていると中々シユールな光景だ。

この挨拶もかなり大多数の人が何事だという顔で相手を見ているのだが、ぼくはこんな自己紹介だったなと苦笑いをしていたりする。初対面なのに色々直球過ぎだ。

「……話がよく飲み込めないんだが」

浅野君がぼやき、その他多数が彼に分からないなら自分たちに分か

るはずもないと頷いた。

「申し遅れてすまない。防衛省の鳥間というものだ。ここからの話は国家機密だと分かっていたんだけど。単刀直入に言おう。」

この怪物を殺してほしい！」

生徒たちの目が点になる中、浅野君がまた大きくため息を吐く。

「……あの、場所間違えてませんか？ここ普通の学校なんですけど。特撮映画の撮影なら他所でやってもらえますかね」

こんな辛辣な浅野君は初めて見た。確かにぼくらの担任教師を名乗る超生物は着ぐるみでも被っているようだ……触手が動いていなければ。

「詳しいことは言えないが、こいつが言ってることは全て事実だ」

「そうなるよ、地球を襲撃しに来た宇宙人とか何かすかね？」

「失礼な！生まれも育ちも地球ですよ！」

憤慨してぶんすか起こるタコ教師に生徒たちは嘘だーと疑いの表情をしていた。こんな生物が地球上のどこにいるというんだ。ここにいるが。

そこで鳥間先生、まだ先生ではないので鳥間さんはぼくらに1周目と同じ説明、つまり成功報酬100億円での暗殺を要求したのだった。みんな納得していない様子だったが、暗殺して100億円が手に入るならなんてことない。相手がマツハ20の怪物とはいえ、運良く殺せたら大金を手に入れられるのだ。1人、浅野君だけは手を挙げ鳥間さんに質問をする。

「このこと、理事長は？」

「無論知っている。防衛省からの口止め料で内密にするよう言ってるが、こいつがE組教師をすることには快く賛成したようだ」

「……金か」

浅野君、気持ちは分かるけどその言い方は酷い。あのじゅりあちやんから買収された宍戸先生とは違って、理事長はあれでも教育のことを考えて行動しているのだ。そう信じたい。

「さて、鳥間さんの話が終わったところですし、出欠でも取りましようか」

全員が放心状態なのをいいことにまだ名前のないタコ型生物は名簿を取り出した。

「赤羽君」

「停学中です」

浅野君が間髪入れずに発言をした。この中で唯一この不思議な状況に適応してしまっている。あくまでE組監視役の役目を果たすつもりらしい。

「そうですか……今度家庭訪問に行ってみます」

「いや、先生が来たらちよつとびっくりするんじゃないかな？」

茅野が苦笑いした。ちよつとびっくりどころじゃない。きつとあのカルマ君だつて大騒ぎするはずだ。

その後も順々に名前を呼んでいき、先生は浅野君に目を止めると首をかしげた。

「おかしいですねえ、もう名前は全員呼んだはずなんです」

「僕はA組の浅野学秀です」

「にゅやっ、違うクラスの生徒でしたか！何故ここに？」

「浅野君はE組の監視役なんだ。授業はほとんどE組で受けるんだとよ」

杉野が勘弁してくれよと言わんばかりに肩を竦めた。

「ややこしいですねえ。とりあえず一番下に名前を書いておきましょう。では学級委員についてですが……誰か立候補者はいますか？」

みんなが僅かに浅野君の方向を見ていたが、彼は一応E組生徒ではないということなので結局矢田さんの推薦で磯貝君が学級委員長、その後の片岡さんの立候補で学級委員になった。その他の委員会にはE組が参加出来ないことになっているため、日直を出席番号順でやろうという決定以外には大した取り決めをしていない。

マツハのタコ先生はやるべきことを全て終わらせると満足したように「さて」と切り出す。

「今日のところはこれで終わりにしましょう。先生はちよつとお腹空いたのでタイにカイイアオマーパツガパオゴープ食べに行ってください」

窓を開けて飛び立った先生をクラス全員が疑惑の目で眺めていた。すなわち、これは夢なのではないかと。自分の頬を引つ張つてみたりと各自違う反応をする中、ぼくは先生が口にした呪文みたいな名前の料理に興味が湧く。

「カイヤアオマー……？」

「カイヤアオマー。パツガパオゴープ。タイ料理の1つだ。マツハ20ってことはタイまで13分ほどか」

浅野君は他の生徒と比べるとかなり冷静だった。もともと彼ほど意識の波長が穏やかな人はあまりいないのだが、超生物が教師だとしてあんなに驚かないのは彼ぐらいじゃないだろうか。

「言い忘れていたが……武器は防衛省から支給される。超生物にのみ効くナイフと弾だ」

防衛省の人が何人か現れた。彼らの手によって幾つものスーツケースが開かれる。中にはゴム製のナイフが多数、対先生弾が沢山入った瓶、そして銃が30ほどあった。生徒たちは興味深々にそれらに手を触れていった。ぼくもその一人である。

「どこがつまらないって？浅野君」

銃を物色する浅野君にぼくはにっこりと微笑んだ。さっきの彼の発言を訂正させるためである。

「そうだな、暗殺か。今考えただけでも僕にとってメリットばかりの話だ」

ぼくは浅野君が冷静に見えて実は楽しんでいるのだと気がついた。顔色がかかなり明るかったからだ。

「あれだけの賞金があれば何でもできそうだよね」

しかし、彼は「ああ」と意外そうに返事をしただけで、賞金に対しては心を揺さぶられていないらしい。

「渚もそっちに興味があるのか。確かに君は僕のような性格でもないしね」

「そっちって……それ以外に何のメリットがあるの？」

2周目のぼくが気づかなかった新事実でもあるのだろうか。悔しいが彼は優秀だ。ぼくらE組が1年間知らなかったことを知ってい

てもおかしくない。訝しんで浅野君の話に耳を傾けると、彼は教師のように解説を始めた。

「賞金100億。この言葉に超生物を暗殺しようと思う者も多いだろう。しかし、暗殺成功で得るものは本当に100億だけか？」

「あれ、違うのかな？」

100億以外に？暗殺で培った知識とかのことかな？でもそれは暗殺成功で得るものじゃない。それでは周りの賞賛か？こんなものもらったところで役には立たないはず。

浅野君はくつくつと笑いを堪え切れないようだった。ぼくは彼の思想を聞き戦慄することとなる。

「超破壊生物から地球を救った英雄。あのタコを殺したらその称号を手に入れられるわけだ。それを上手く使えば  
世界だって征服できるかもしれないな」

ぞくりと背筋が凍った。

その昔英雄と呼ばれた男、ナポレオンが皇帝になった。彼が皇帝になった理由は簡単である、英雄だったからだ。

世界征服。

普通の人が言ったら中二病の一言で済まされてしまうだろうが浅野君は違う。何でもこなすあの浅野学秀なら世界を征服するぐらいきつかけさえあれば容易く実行してしまえばいい。

どうやらぼくはとんでもない人をE組に連れてきてしまったのかもしれない。

そうだよ。浅野君はこういう人だった。彼の目には賞金100億円なんてただのお飾りなんだ。今の話が実現すれば、100億円以上のもを手にする。彼が求めているのはその先にあるものだ。

「こんな形で理事長あいつを越すのも悪くない。やって殺ろうじゃないか、暗殺ぐらい」

ナイフを片手で回し、浅野君は狂喜していた。

暗殺によって支配者としての道が開けることに。

猫のはなし。

超生物、後に殺せんせーと呼ばれる教師がE組にやって来てから1週間が過ぎようとしていた。今日は朝早くから来ている生徒が多いようで、クラスの席の3分の2ほどが埋まっていた。その理由は磯貝君の提案したクラス一斉射撃にある。

「さすがの先生も全員いっぺんに攻撃したら当てられると思うんだ」

「そんなこと言うけどよ、磯貝。あいつ速すぎだろ?!」

前原君は銃を机に置いて文句を言った。

彼は昨日先生にナイフを当てようとして失敗し、着崩した制服の「お手入れ」をされてしまった被害者の1人である。その時の前原君は完全にチャラ男というアイデンティティを失いかけていた。

「あ、浅野君おはよ〜」

茅野がフレンドリーに挨拶をした。彼女は去年の浅野君を知らなかったため、他の全員と違って浅野君には好意的に接していた。浅野君はそれに対してサンプルに挨拶を返すと人だかりに向かって尋ねた。

「銃を抱えて何の相談だ?」

「一斉射撃するんだって」

ぼくは大きめの銃を掲げる。1周目の時から銃は得意とまではいなくとも、そこそこできた。それも手に収まる銃より遠くから狙撃する大きな物の方が断然ぼくには向いていたらしく、潜入からの狙撃ならかなり良い線を行っていた記憶がある。

もちろん、2周目ではまだ狙撃訓練は受けていないため今のレベルは分からない。ただ、経験値がプラスの状態でのスタートなので期待はできそうだ。

「へえ……そうとなればカメラを設置すべきだな」

「カメラ……?」

カメラに1番詳しい岡島君が反応する。彼は中2までは写真部に居たため、カメラについてはこの中で1番詳しい。何を撮っていたのかについては誰も聞かないようにしていた。

「いくらマツハの怪物とはいえ行動パターンに癖ぐらいあるだろう。」



最近のカメラにはスローモーション機能があるし、僕たちには見えない動きが見えてくるはずだ」

「確かに！そうしたら私たちも何で当てられなかったのか分かるよね」

「よし……俺の1番のカメラを後ろに設置しとくぜ」

「ああ、頼む。三村、君は確か動画の編集が得意だね？」

「よく知ってるね。分かった、そこは引き受けるよ」

クラスメイトに助言をし、必要とあれば命令のような提案をする。浅野君は暗殺を通してクラスを若干支配しかけているように思えた。クラスメイトの性格や趣味、特技は全部熟知しており、それを上手く活かして暗殺に役立てる。

支配者としてかなり完成された中学生だ。

「はっ、殺せるまでに時間かかんないといいいけどな！」

遅めにやって来た寺坂君グループが一斉射撃の相談をするばかりを嘲った。E組には何人か射撃に参加しないという人たちがいて、彼らはそんな生徒の一部だ。狭間さんなんかはさつきから本をずっと読んでいて、銃なんてそっちのけである。

「お前参加しないのか？せつかくだから、みんなで殺るのが1番だと思う」

磯貝君は寺坂君に交渉するが、彼には自分のことしか見えていないようだった。クラス全員での暗殺は、賞金がかなり減り、1発大きく儲けたい寺坂君としては面白くないのである。それは吉田君と村松君も同じだ。

「誰がするかよ」

きつと寺坂君には1周目と同じように案があるのだろう。

手榴弾を使うというやり方が。

ぼくが初めて先生の暗殺をする時に行った方法だ。自殺行為だと分かっている先生に暗殺しようとする緊張感は未だに忘れていない。

「そういうえば浅野君はまだ暗殺しないの？」

「まだ技術が未熟なのに今やったところで仕方ないだろう」

銃の扱いは1度したことがあるようで、素人風味のある他の生徒た

ちとはだいたい違う。それでも彼は自分が未熟だと思っているのだ。あくまで想像だが、銃を初めて使った時に理事長ほんものの射撃を見てしまったんだろうな。あの理事長なら銃なんて簡単に扱いそうだな。

「珍しいね。そんなこと言うなんて」

自分の力量を発揮するなら早い方がいいとか言いそうだったのに。

「それに殺すんならギリギリに殺す方が注目度も高くなる。英雄なら難易度が高くて誰も殺せなかったところを殺すと思うよ」

……案の定浅野君は浅野君だった。

「ぼくも準備してからかな」

いろいろ、ね。

前は早々に自爆したからもつと慎重にやらなきゃ。

そうなるはまだ今は暗殺の時期には適してない。

「にやー」

「あれ？今猫の鳴き声しなかった？」

茅野が窓を覗き込んだ。ぼくが思わず窓を開けるとメルが顔に飛びついてきてびつくりする。

「大丈夫か、この猫」

浅野君が片手で首の皮を掴む。雑巾みたいな持ち方に浅野君は猫に触れ合う機会が無さそうだなと思った。浅野君はメルを抱きかかえ、ぼくに渡した。

「おかしいな……確かにアパートに置いてきたはずなんだけど」

バルコニーの窓の鍵もかけ、玄関の鍵も閉めたはずだ。でもメルは賢いからドアの鍵ぐらい平気で開けてしまいそうだなあ。

「どうかよくここが分かったな。この猫何者だ」

「メルダリンは少し賢いんだよ」

なんて言ったって元殺し屋、それも世界最高峰の殺し屋だった死神の飼い猫だったわけだ。ちよつとやそつと芸達者でも驚くことはない。

「メルダリン……もしかしてM・r d e r i nの事を言ってるのか？」

「知ってるの？」

発音良く外国語風に言った浅野君だが、ぼくはその単語に聞き覚えは無かった。そうなる英語、スペイン語、フランス語、中国語ではないということになる。知らない単語というだけかもしれないけど、そこまでマイナーな単語だとは思えないため、ぼくが使わない言語なのだろう。

「渚が名前を付けたわけではないんだな……しかし、偶然か？前の飼いは随分恐ろしい名前を付けたようだね」

「恐ろしい……メルダリンが？」

始業の鐘が鳴り、ペタツペタツという触手が教室に近づく音が聞こえてきた。ぼくはメルを抱いたままとりあえず席に座る。

「それではHRを始めましょう。日直の人は号令をお願いします」  
教卓の前で超生物は普通の先生のように言った。

「き、起立！」

菅原君が号令をかけ、クラス全員が銃の用意をする。一足遅れたぼくは慌ててメルを離し、銃を構えた。

「気をつけ!!」

弾の準備をする全員に対し、緑のしましま顔で超生物はぼくらを眺めた。いわゆる余裕の顔というやつだ。

そんな顔されると殺したくなるなあ。

「れーれーれーい!!」

発砲音は全てを誤魔化すために存在する。メルが射撃の間、ナイフを啜って先生に向かって走り出したことにぼくは気づかなかった。

弾丸を全て避けながら出欠を取る先生は全てが見えているはずだった。ただ一匹、先生の視界の枠外を通ってやって来たネコを除いて。先生も完璧ではないのだ。

「停学中のカルマ君以外は全員出席……と。にゅやつつ!!」

メルは机の上を堂々と歩き、銃より下の位置にいて見事に死角を通っていた。教卓の上に飛び乗り、銃撃戦が終わって少し気を許したところを顔に飛びつく。その一部始終を見た生徒たちはあまりに突然の出来事にただ猫を見ることしかできなかった。

強烈な肉球パンチを触手で受け止め、超生物は初めて戸惑っている

ように見えた。

「メルダリン?!」

先生が息切れ混じりにそう言葉を発する。口に咥えたナイフを相手に刺そうとしたが先生は辛うじて避け切った。狼狽を顔から漂わせており、それはメルを二度見するほどだ。

「にゃー」

「タコみたいてって言ってるね〜」

倉橋さんは間のびした声でそんなことを言い始めた。意想外な発言に一瞬反応が遅れてしまう。

「つて倉橋さん猫語分かるの?!」

「動物の言葉なら大体分かるよ?」

倉橋さんは天使ちゃん何言ってるのと頭の上にクエスチョンマークを置いていた。

むしろ君が何を言ってるの。倉橋さんにそんな特技があったとは。動物好きなのは知っていたけど2周目で初めて知ったよ。確かにイルカとか使った暗殺してたな、うん。

「にゃー」

「陽菜乃ちゃん、これは?」

矢田さんが聞いた。何故か倉橋さんの表情は少し曇っていた。

「え……メルちゃん本気なの?」

「何て言ったんだ?」

三村君は質問をぶつけた。倉橋さんは言うべきなのか躊躇し、含みのある短い沈黙の後で口を開けた。

「殺しに来たよ、だって」

メルは一体何を考えているんだろう。先生を殺す理由はメルにはないはず。超生物を殺したところで賞金は猫には意味のないもので、浅野君が欲しい英雄の座も猫にとってしてみれば塵に等しいだろう。そんなものをくれるなら猫缶かかつお節をくれという話である。

「何で猫が殺しに来るんだ……」

「でも、殺しに来たってことはE組の仲間だよね?」

倉橋さんが周りに「ね?」とうるっとした目を向けた。純粹無垢な

表情にうつと言葉を詰まらせる生徒も多い。

メルはかなり愛らしい容姿をしている。犬派の人間でさえ虜にしてしまいそうなくらい。かくいうぼくも元は犬派だったのにいまや猫派になってしまった。

「いいと思う」

猫派代表の速水さんがふにやつと顔を緩めた。その姿にこれがデレか!と赤面する男子もいるようだ。あえて誰とは言わないでおこう。

「にやんにやん……」

岡島君は意味深にキメ顔をした。想像していることがえろいので正直決まってるない。

「先生は認めませんよ?!」

「面白そうだね。こんなに動揺している時点で入れる価値はある」

「浅野君まで?!」

こうしてE組に新たな生徒(非公式)が加わった。ぼくもこんな展開になるとは思わなかったので些か呆気にとられていた。

「倉橋さん倉橋さん」

休憩時間になり、先生が麻婆豆腐を食べに行っている間に倉橋さんと呼んだ。

「なあに?」

「先生にはぼくが飼い主っていうのは内緒にしてもらえるかな?」

「わかった」

いつか気づかれそうだけどね。

冷たい汗が滲み出た。メルが脱出した理由は先生を殺すためなんだろうか。しかし理由を考えようとすると、メルが猫だということだ。思考が行き詰まってしまうのだ。

別のことに意識を戻していくうちにぼくの直感が別のところで発揮された。

そういえば、寺坂君のポケットには既にアレがあったな。

浅野君にはメルを捜しに行くと伝え、ぼくは校舎裏へと向かった。

そこにはやっぱり寺坂君たちがいて、手榴弾をどう使うかの相談をしている。姿を見せるわけにはいかないため、聞き耳を立てて彼らの話に集中していた。

「そこは弱そうなやつに持たせるのが1番だろ？」

「うちのクラスで1番か弱そうなのって天使だよな」

失礼だなあ。ぼくはこれでも体術を習っていたから村松君ぐらいすぐ倒せるのに。か弱そうに見えるのも殺し屋目線なら褒め言葉だから良しとするか。

「止めとけ。バックに浅野が付いてるぞ！」

「そもそもよ、タコに近づく勇氣がある奴なんぞいんのか？」

「……居たな、そーいや」

寺坂君たちの会話はそこで終了した。ぼくが彼らを除くと既に解散した後で、そこを通りかかったメルだけがぼくを見上げていた。話はどう終結したんだろう。声だけじゃなくて覗き見していればよかった。

気が付いたところでもう遅い。どうせ実行されるのは今日だ。寺坂君たちが何を考えてどう暗殺するつもりなのか、2度目の暗殺劇を楽しもうじゃないか。

\*

昼休み後の授業は国語から始まった。ぼくらは古典の俳句についての説明を受け、先生の希望により何故か短歌を作ってみようという

ことになる。

「触手なりけりで終わる良い短歌をお願いしますよ。ポイントはか  
に触手を美しく表現できたか。出来た人は先生のところまで持って  
きてください」

触手なりけり……つてどうやったら美しく表現できるつていうん  
だ！

スラスラと書いている人は神崎さんのように古文が得意な人であ  
り、苦手分野とはいかないにしろあまり好きではないぼくはどうにも  
書けそうになかった。

「せんせー、質問いいかな？」

「……何ですか、茅野さん」

反応が1秒ほど遅れ、先生が返事をする。

「今さらだけど名前何て言うの？他の先生と呼び分ける時言いつらい  
よ」

「名乗るほどの名前はありませんねえ。何ならみなさんで名付けてく  
ださい。とにかく今は課題に集中ですよ」

先生がうとうとするのを見て、そろそろ何かが起こると確信した。  
寺坂君たちが顔色の違いに気づいてるかは置いておいて、手榴弾を使  
うのなら今だろう。

ぼくは先生の顔色が薄ピンクに変わる様子をじっと観察していた。  
先生の膝にはメルが乗っている。

……あれ、いつの間に？

ぼくが異変に気がついた時、全ては進行形で行われている最中だっ  
た。メルが先生の頬にペタッと肉球を押し当て、先生はそれを退け  
る。

「2度目は効きませ、んよ……？」

メルの首にぶら下げられているものに先生がハツとしたが、止める  
間もなく先生を中心に爆発が起きる。後ろを振り返ると寺坂君が起  
爆スイッチを押してニヤリと笑っていた。

成功を確認した寺坂君、吉田君、そして村松君が歓声を上げた。他  
の生徒たちは呆気にとられた顔でそれを見つめている。

「っしやあ！」

「やったぜ！百億いただきイ！」

「まさかこいつも猫に自爆テロかけられるとは思ってもみなかったろ！！」

ぼくはとつさに天井を見上げた。寺坂君のことを暗い顔で見る先生と目が合う。今の話は全て筒抜けだ。

「寺坂君、メルに何持たせたの?!」

「あ？おもちゃの手榴弾だよ。火薬使って対先生弾がすげー勢いで飛び散るようになってるだけで」

「なっ、自分が何してるのか分かってるの?!」

「心配しなくても治療費ぐらい払ってやるよ」

寺坂君はメルがいると思われる場所に近づき、全くもって無事なことに気がついた。周りを薄い皮で覆われているのだ。

「実は先生月に1度ほど脱皮をします。脱いだ皮を爆弾に被せて威力を殺しました」

天井から真っ黒になって怒っている先生がネタを明かした。寺坂君は汗を垂れ流しにして恐怖していた。いつもは基本スマイルフェイスの先生が本気で怒ることなんて、1周目でも数えるほどしかなかったはず。

ぼくでさえど怒りの先生に顔向けはしたくない。

「寺坂、吉田、村松。首謀者は君らだな」

「いつ、いや……あの猫が勝手に！」

どこに自分で手榴弾を仕込む猫がいるんだ。

ぼくは少し呆れて浅野君に同意を求めた。彼は案外冷静に今の状況を観察している。

『そうか、1番成功率の高い暗殺方法だとは思ったんだが。あくまで教師か』

浅野君がそんなことをスペイン語で漏らす間に先生は天井から降りていた。顔には紫でバツテンが描かれていた。

「動物を粗末にするような暗殺は禁止します。もちろん、人が自爆するようなこともです」



「お、俺らがどんな暗殺してきても関係ないだろう?!」

先生の怒りに当てられ半泣きしている寺坂君に対し、先生は「とんでもない」と答えた。この流れは前回と大体同じのようである。

「アイデアは非常に良かったんですが。寺坂君たちはメルダリンを大事にしなかった。暗殺のために命を犠牲にするのは暗殺者失格です」「やっぱり簡単には殺せないね、先生は。茅野?」

「殺せない先生……あ、名前殺せんせーは?」

ぼくの言葉で閃いたようで、茅野は少し大きめの声で言った。

「ヌルフフフ、いい名前ですね。皆さん今度から私のことは殺せんせーと呼んでください!」

ウキウキした様子で楽しそうに触手をうねらせる超生物はその名前に大層喜んでいた。

これでようやく殺せんせーって呼べるようになった。茅野が名付けたこの名前は結構好きだったので浅野君の登場で変わってしまったのか少し不安だった。結論としては何も変わらなかったけど。

「あはは……随分気に入ったみたいだね」

名前といえは。

ぼくは浅野君がメルダリンの名前について言及していたことを思い出した。そういえばメルダリンって死神が付けた名前のはずだけど、どういう意味なんだろう。

『浅野君、メルダリンって何て意味なの?』

フランス語で浅野君に質問を投げかけた。彼はそんなことを話していたなど神妙そうな顔で静かに答えを述べる。

『ドイツ語で暗殺者って意味だ』

道理で分からなかったわけだ。英語とドイツ語は似ていると言うが、響きが似ているのはフランス語と英語。同じ暗殺者でも英語は Assassins で、ドイツ語だと Mordereiner になってしまおうというのだから違いは大きい。どっちかと言うと殺人鬼を表す murderer が近いように思える。

『ドイツ語かあ……浅野君教えてくれない?』

『止めとけ。渚には4ヶ国語で充分だ』

『だめ？』

『だめだ』

むーっと頬つぺたを膨らませる。浅野君は最近ケチだ。体術の練習もそろそろ止めようとか言い出すし、何故か銃の使い方を知っているにも関わらず一緒に練習することは避けようとする。

女子だからって弱いと思つて馬鹿にしてるのかな。

『先生もドイツ語話せますよ。良ければ教えましょうか？』

話を聞きつけた殺せんせーがそう申し出た。ぼくは先生からそういう声掛けがあつたことよりフランス語で話しかけられたことにびっくりする。よくよく考えたら万能な殺せんせーに話せない言語なんてほとんど無さそうだけど。

『いいの？つて先生フランス語も話せるんだね』

殺せんせーはニヤニヤして浅野君を眺めていた。浅野君はイラつとしたようで殺せんせーの元に行こうとするぼくの腕を掴む。

『……渚、やっぱり僕が教える』

『え、殺せんせーが教えてくれるつて

『いいから黙つてろ』

浅野君はむすつとしていた。教えないつて言ったのに結局教えてくれるのか。何だかんだでそういうところ優しいんだよなあ、浅野君。

『ありがと、浅野君』

『……ふん』

浅野君は素っ気なくそう返したが意識の波長が一瞬ズレた。照れてる……のかな。

『ヌルフフフ……青春ですなあ』

殺せんせーはメモ帳に素早く何やら書き込んだ。その様子を見ていた生徒たちは内容を知ることとはできなかつたものの、2人のやり取りに察し始める。

「ね、ねえ、浅野君つてもしかして……」

「もしかなくてもそうだろ、あれ」

「しかも天使は気づいてなさそうだ」

(鈍いなく天使ちゃん)

密かにクラスメイトたちが浅野学秀という人物に理解を深めていたことを、そしてその日の内に数名のメンバー構成による「生徒会長と天使をくっ付けようの会」が結成されたことを、もちろんぼくは想像すらしていなかったのだった。

カルマ君のはなし。

旧校舎には教室以外に幾つかの設備がある。その一つが女子更衣室だ。男子は基本教室で体操着に着替えるのだが、女子は女子更衣室で着替えることが暗黙のルールとなっていた。

女子更衣室ではいつもゴシップネタのような、所謂ガールズトークが練り広げられていた。

「あ、ねえ聞いた？今日から体育烏間さんがやるんだって」

矢田さんが烏間先生の話題を出した。イケメンでスマートな烏間先生は女子の人气が高い。

「じゃあ烏間先生になるんだね〜」

烏間先生のことを気に入ってる倉橋さんは嬉しそうだ。

「殺せんせーの体育酷かったもんなあ……」

ぼくは体力テストを測った時のことを思い出した。

50メートル走ではマッハで走り過ぎてもはや瞬間移動。走るコツは触手をしなやかに動かすことらしい。

反復横跳びでは視覚分身にあやとりを混ぜ始める始末。

ボール投げでボールが返って来なかった瞬間、ぼくらは殺せんせーから体育を教わるのを諦めた。マッハ20の相手に教わる体育ほどキチガイ染みたものはない。

「ねえ、渚も来るよね？」

考え事していると茅野がぼくに訊いた。話の内容が全く分からず首を傾げる。

「えっと……ごめん、どこに？」

「メルが常連の猫カフェだよっ！」

倉橋さんがひよこつと顔を出した。制服と体操着が中途半端に着替えられており、下はまだスカートのままだ。

「……何で猫が猫カフェの常連になってるの。そもそもお金は?!」

「メルちゃんかわいいからね〜。店員さんも無料で入れちゃうんだって」

自分の可愛さを有効に活用してるじゃないか。恐ろしい猫だなあ。

「……どうりでキャットフードの減りが悪いわけだ」

「今なんて？」

茅野がぼくの言葉に反応し、ぼくは強めに首を横に振った。

「ううん、何でもないよ」

ぼくは急いで体操着のトレーナーを羽織った。長話していたらもう体育が始まる時間になっていたのだ。

男子より遅く着いた女子勢は烏間先生が教えることにうきうきしている様子だった。

逆にぼくは久しぶりに暗殺の訓練をするので自分の力量にほんの少し不安があった。女子としての自分が1周目の3月時点に比べて体力が劣るのではないか。運動能力は前と同じなのかどうか。1周目に比べて小柄だとは思うけど、それがマイナスになってしまわないかなどの問題だ。今の段階で1周目の最初の頃と同じレベルだったらその時点で絶望的である。

「今日はナイフの訓練を行う。2人組を作ってくれ」

ぼくは迷わず茅野とペアになった。1番仲の良い女子というものもあるが、少し前に行われた身体測定で何とぼくの身長が145センチ、茅野と1センチしか変わらないことが判明し、それからというもの身長順で並ぶ時によく一緒になるのだ。さらにはクラスで1番小さい女子という不名誉な座を獲得してしまったことも大きい。1周目より身長が伸びないのは性別が変わったからなのだろう。小さい方が弱そうで殺し屋向きではあるけど、大抵の男子が巨人みたいに見えるのは正直敗北感を感じる。

「でも烏間先生、こんなことやって意味あるんですか？しかも暗殺対象ターゲットの前で」

「そうだな……磯貝君、前原君。そのナイフを俺に当ててみる」

「……いいんですか？2人がかりで」

「構わん。そのナイフは人には無害だ。それに擦りさえすれば今日の授業はしなくていいだろう」

烏間先生の思わぬ挑発に2人は馬鹿にされているのかと感じたよ

うだ。2人がかりで擦れないなんて力の差を勘違いされているのではないかと。彼はネクタイを少し緩めただけで、本気で挑むつもりはないのが見てわかる。

その時その場で烏間先生の力量を知るのはただ一人、1周目で見てきたぼくだけだった。

「そんじゃあ行きますよ」

磯貝君が言い、2人はは同時に烏間先生に向かってナイフを刺そうとした。しかしそれは1センチ先のところで交わされてしまう。2撃目も3撃目も。烏間先生には届かない。さらに最後には2人をいっぺんに倒してしまった。

「っ……っ！」

「このように多少の心得があれば素人2人のナイフぐらい交わせる」

……防衛省の元自衛隊が多少の心得を語るんだ。そういえばぼくは1周目の時最後まで一対一の戦闘で烏間先生にナイフを当てたことはなかったっけ。

ぼくは苦笑いで烏間先生を見ていた。他の生徒たちも今の戦闘で烏間先生が強いことが分かっただろう。あの万能な浅野君でさえ、目を見開いて烏間先生を眺めていたのだから。

「俺に当たらないようではマッハ20の奴に当たる確率がどれだけのものか分かるだろう」

格が違う。ぼくたち即席の暗殺者とは違い、彼は現役の自衛隊員として長年やって来た実践経験のあるベテランだ。人を殺す訓練はしていないとはいえ、人類の最強ランキングでは間違いなく上位層に入る。

「奴を見る。この間に奴は砂場でピサの斜塔を作り終え、手には買ったばかりのジェラートを持っている。服装は先ほどまでゴンドラ乗りのバイトをしていたかのようだ」

「「イタリア帰りかよ!!」」

「やっぱりイタリア〜ンのジェラートは美味しいですねえ。寒い成層圏を通った甲斐がありました」

妙に発音良くイタリアンを口にすると、スプーンを口に咥えてチョコ

コレート色のゼラートを食べていた。カルマ君から回避されてるゼラートはとても美味しそうだ。正直ぼくも食べたい。

新しい体育教師の実力が判明して烏間先生への尊敬の眼差しが飛び交う中1人、それに物怖じもせず手を挙げた生徒がいた。浅野君である。

「先生、僕もお手合わせお願いしていいですか？」

「……いいだろう」

どういうつもりだろう。浅野君だって烏間先生の強さは今ので分かっている可哀しくないのに。

もしかして

分かっているわぎと？

「浅野止めとけて。いくらお前でもさっきの見たら分かるだろ？勝ち目ない」

「勝ち目がないのは分かってるさ」

杉野君の言葉に浅野君はあっさり同意する。

「え？」

「勝つつもりなんてない。先生の言う通りにするだけだ」

そう不敵に笑うと浅野君はナイフを素早く的確に烏間先生に突きつけた。その動作は洗練されていて、烏間先生は一瞬顔を強張らせたのに気づく。

ぼくはハッと息を呑んだ。浅野君はナイフを扱うのが初めてのはずだ。初心者と言われる人がナイフの達人になるのには少なくとも3ヶ月はかかるだろうというのがぼくの予測だった。しかし彼の身のこなしは初心者とは思えない。

まさか4月が始まったばかりのこの1週間でここまで成長したつていうのか？

「なるほどな」

浅野君は1度動作を止め、烏間先生を見据えた。その尊大な態度はまるで手下を見極める帝王のようだ。

彼は改めて1撃を与える。それを躲した烏間先生の腕に2撃目が当たった。烏間先生が定めた通り、ほんの掠っただけだが当たったのだ。

「っ……っ……」

「当てるだけならこんなものか」

「浅野君！今のどうやって……」

ぼくは思わず駆け寄った。浅野君はナイフを片手に烏間先生をちらりと見る。

「ああ、そうだな……みんな勘違いするかもしれないから先に言っておくが、烏間先生はかなり強いぞ」

「でも当てたよね?!浅野君はもっと強いのか?」

茅野はどういうこと?と納得いかない顔だ。

「まさか。これが本当の戦闘なら僕が負けていただろう。僕はただ、先生の防御術から対策を練っただけだ。ほんの掠る程度ナイフを当てるためにね」

「今のわざとってこと?」

「浅野の奴、本当は烏間先生に勝てるのに隠してるってことじゃないかよ」

「やっぱ浅野こえ〜」

生徒たちは磯貝君と前原君の2人がかりで当てられなかったナイフを簡単に当ててしまったのだと悟った。しかし、ぼくは彼がやりたかったことはそんなことではなかったのではないかと思う。

ハツタリだ。浅野君はあたかも今の攻撃以上のことができるような言い方をしたが、実際はさっきのが彼の本気の攻撃なのだろう。

しかし、少し見ただけで烏間先生の防御方法を真似するところはまるで

「面白そうなことやってんね〜。俺も混ぜてよ」

いちご煮オレの紙パックを片手に持ち、赤髪の彼は現れた。1周目の時と何ら変わらない悪戯っぽい笑みを浮かべ、ぼくらに近づく。

「カルマ君……!」

「おー渚ちゃん久しぶり〜」

校庭まで下りてくると、カルマ君はぼくに普段通りに挨拶をした。カルマ君とは会う機会が殆ど無かったから友達とは思われてないんじゃないかと心配していたけど、どうやらぼくは知り合いの枠には収まっているらしい。



「カルマ君、だと……？」

浅野君が顔を顰めてカルマ君を睨みつける。そういえばこの2人ってあまり仲良さそうじゃなかったっけ。

「赤羽業君……ですね。今日停学明けとは聞いていましたが。初日から遅刻とは感心しませんねえ」

顔に紫のバツテンを映しだすも、そんなことで動揺するカルマ君ではない。手の中にはナイフが用意されているのだろう。それから握手をする気なのだろう。

全てを理解しているとぼくは自然と冷静でいられた。それで殺せんせーが殺されるなんて全く思ってもいないから。

「生活リズム戻らなくてさ……下の名前で気安く呼んでよ。とりあえずよろしく、先生！」

「こちらこそ。楽しい1年にしていきましょう！」

カルマ君の貼り付けた笑みに騙された殺せんせーは普段なら絶対にしない握手をした。ぐちゃつと嫌な音がして触手の先が破壊される。カルマ君がナイフを出した時には殺せんせーは後退りしていた。「へくほんとに速いしほんとに効くんだねく」

このナイフと右手に刻まれたナイフの種明かしをした。

「でもこんな単純な手に引っかかるとか、しかもそんなところまで逃げるなんてビビりすぎじゃね？殺せないから殺せんせーって聞いてたけどさあ、先生」

ひよつとしてチョロい人？」

ピキツと音を立てて先生のこめかみが動いた。顔色が赤いのは怒っている方の意味だろう。

\*

「あつれ〜そこ俺の席だと思うんだけど？」

席に着く前にカルマ君は1番後ろの席を陣取る浅野君に向かって言った。1番後ろの真ん中。それは監視役としては最も適している席であり、浅野君が拘るのも無理はない。しかし、カルマ君はただちよつかいを出したいだけなのだろう。

「…………この席が1番E組のことを見れてちよつどいい。赤羽が違う席に行けばいいだろう」

結局カルマ君は折れて浅野君の隣の席に着いた。しかしカルマ君の口撃は尚も続く。小テストが配られてからもカルマ君は浅野君に話しかけている。一方の殺せんせーは壁に触手でパンチを繰り返し返していた。柔らかいので壁にダメージがいつてない。

「先生…………さつきからぶにゆんぶにゆんうるさいよ！小テスト中!!」

席が前の方の岡野さんが遂にキレて殺せんせーに怒鳴る。

「こ、これはすみません！」

先生は慌てて謝ったが、触手のパンチを少し弱めただけだった。何の解決にもなっていない。

カルマ君は未だに浅野君に横からちよつかいを出していた。

「そもそもさあ、何で監視役なんかやってるのかな？あ、そっかあ、ほんとには天使ちゃんについてきただけなんだね〜」

『1度殺されたいのかこいつ』

『浅野君…………本音漏れてる』

ぼくは浅野君のスペイン語での呟きにそう返した。残念だが後ろの2人に構ってる余裕はない。1周目とは違う難問がテスト用紙に書き込まれているため、集中しないと解けなかったのだ。殺せんせーは生徒に合わせて小テストの問題を変えているため、ぼくのチートすぎる成績だと難問を出さざるを得ないようだ。

「…………この3人！小テストですよ！」

「先生、自分の触手に言ってください」

浅野君が至って正論で迎え撃つ。何だかいつもより棘があるよう



えたりしないかな？

ぼくはそつと後ろを振り返った。カルマ君がぼくに気がついて首を傾げる。

「渚ちゃん……食べる？」

「いいの?!」

神だ！とばかりに目をキラキラさせるぼくに邪魔が入った。殺せんせーだ。

「カルマ君！渚さんを巻き込もうとするのは止めてください。残りは全部先生がいただきます!!」

机と机の間にある道をずかずかと歩いてカルマ君の席へと突進していく

んせーの触手がまたドロリと溶けた。

「あはっ、また引つかかったね〜」

カルマ君はぼくにエクレアの箱を投げてよこした。銃で攻撃に移るがそれはすぐに交わされてしまう。さすがに2度目まで当たるほどヤワじやないのが殺せんせーだ。

「何度でもこういう手使うよ。授業の邪魔とか関係ないし。それが嫌なら俺でも家族でも殺せばいい」

ぼくはエクレアを頬張って2人の様子を観察していた。箱は3個入りで1つはカルマ君によって完食済みである。

「でもそしたら先生はただの人殺しのモンスターになる

「先生」としてのあんたは死ぬ」

「……………」

カルマ君、相変わらず荒れてるなあ。

「はい、これテスト。そーだ、渚ちゃんも終わってるよね？」

「え、まあ……………」

「ちよつと聞きたいことあったからさあ。一緒に帰ろーよ」

ぼくのテスト用紙を殺せんせーに押し付け、カルマ君はぼくを引っ張っていった。何が起こったかは分からなかったが、視界の端で浅野君が険しい顔をしている。彼はまだテストを終えていないらしい。

「杉野、シャーペンが折れたから貸してくれ」

「うん、いいけど——え、芯じゃなくて?！」

そんなやり取りをぼんやり聞いてると外に出た途端カルマ君は「ねえ」とぼくに声をかけた。

「渚ちゃんって何者?」

「ごめん、急すぎてわけわかんないんだけど。どうしたらそうなるの」  
ぼくは頭を抱えていた。カルマ君がいきなりそんなことを言うとは思わなかったのだ。

ぼくは至って普通なのに。ちよつと成績が人より良くて、色んな影響で4言語話せて、暗殺の才能に恵まれたただの中学生……つてごめん、全然普通じゃなかったよ。いつの間にか超人化<sup>チート</sup>してるじゃないか、ぼく。

「なんか前に保健室で月が破壊されたらつて言ってたじゃん。言われた時は何それって思ってたよ。でもさあ、ほんとにそうだったら何も言えないよね」

月を指差して笑うカルマ君はそんなに深刻そうに受け止めている様子はなかった。

「で、何で知ってたのって聞いてんの」

それでもぼくを疑っていることだけは確かだ。

誰もやって来ない裏山で、後ろには大きな木が立っている。背中にそれが当たった時ぼくは完全に逃げ場を失っていた。

「ぼくは何も——」

「女子だから俺が何もしないとか、そんなこと思ってるんなら大間違いだよ」

低い声でカルマ君は告げた。

「犯されたいわけ?」

それを聞いた瞬間、ふつと笑いが込み上げてきた。あのカルマ君がそんな洒落にもならない脅しをするなんてびっくりだ。

「あはっ……ひどい脅しだなあ」

「何で笑ってんのさ」

カルマ君は脅してる相手の反応に拍子抜けしていた。ぼくはあり得ないとばかりにクスクス笑う。

「カルマ君がほんとにそんなことしたら泣くかなって思ってた。で、ほんとにやるの?」

色んな意味で悲しくなるだろうなあとぼくは考えた。ただの脅しだということはもちろん分かっているけど。

「やんないよ。ちゃんとやってくれたらね」

「……まいったなあ、何で知ってたかかって聞かれても、知ってたから知ってたとしか言えないんだけど」

「理由になってなくね?」

カルマ君は呆れて強張った表情を緩めた。

「むしろどんな理由があるの。ぼくが殺せんせーに「月壊してね」ってお願いしたわけじゃないし。そもそも殺せんせーが

壊したわけじゃないと言いそうになり口を噤んだ。そこまで言うのはあまりにもお喋りすぎるといふものだ。

「何だろうね、勘?」

「そんな理由で説明されても困るんだけど」

「じゃあ未来予知ができる!もうこれでいいと思う」

そこまで言うのとカルマ君はぼくにこれ以上聞くのを諦めた。どう考えても正しい答えは見つからないと思ったのだろうか。

「それこそ大問題だね。じゃあさ、殺せんせーが誰に殺されるのかも分かる?」

殺せんせーが誰に……?」

頭に浮かんだイメージは1周目で殺せんせーが息絶える姿だった。自分たちで殺すこともできず、相討ちで弱った先生が自らも致命傷を負って死んだ、そんな未来。ぼくにとっては過去の話だ。

あの時致命傷を負わせたのは2代目死神だった。でも、殺せんせーが死んだのは……死んだ、のは誰のせい?

渚、お前のせいだろう。

「や、めて……」

「渚ちゃん?」

茅野も救えなかった。茅野を見殺しにしたのはお前だろう。殺せ

んせーに頼りきって茅野を救おうとしなかったのは誰だ。

「やだ……違う。それはぼくじゃない」

潮田渚は

ぼくじゃないのに……っ！」

自分で言つて、ぼくは嗚咽した。

潮田渚はぼくじゃない。こんなことを考えたのは初めてのことであった。

「え、ちよつ……渚ちゃんごめん、俺が悪かったって！だから泣かないで」

カルマ君はぼくを落ち着かせようと慌てていた。ぼくらは裏山の切り株に腰をかけることにした。ぼくの涙が落ち着き、目が元通りになってもカルマ君は心底心配そうにしている。

「にゃー」

「何だ、この猫……？」

「メルダリン。これでもE組の生徒なんだ」

メルを膝の上に乗せると、ふにやりと気持ち良さそうに寝っ転がった。ただ、カルマ君が背中を撫でようとすると手でパシリと跳ね除ける。

「俺嫌われてんじゃね？」

「メルは殺し屋にしか懐かない……あれ？」

ぼくらE組は殺し屋に入るんじゃないだろうか。

この前なんて寺坂君たちの暗殺にメルはある意味協力をしていたわけで。あれは失敗したが、メルは首に手榴弾を付けさせる寺坂君に抵抗をしなかったように思える。

ということは暗殺の才能があるかは別にしろ、誰かを殺そうとしている時はそれなりに懐くわけだ。それが即席の殺し屋だとしても。

でもカルマ君には懐いてない。寺坂君たちが良くてカルマ君は何故ダメなんだろう。

「カルマ君、本気で殺せんせー殺す気ある？」

ぼくは立ち上がって尋ねた。

「殺したいって思ってるに決まってるじゃん。何で？」

「気のせいだとは思うんだけど……カルマ君の殺したいってぼくらが

言う意味とは違うんじゃないかな?」

カルマ君は前の教師を殺せんせーに重ねてるだけなんじゃないのか。殺せんせーに絶望して、自分の中で殺すつもりなんだ。

山を降りて本校舎の近くを通りかかる。本校舎の生徒たちも数名だが帰る生徒がいるようだった。その中に穴戸先生を発見し、ぼくは呟いた。

「心のどこかで殺せんせーを教師として殺そうとしているんだね」

「渚ちゃんに何が分かるわけ?」

「分かるよ。ぼくの先生も死んでいるから……ああ、違った。家族も親友も教師も、みんなみんなぼくが殺しちゃったんだっけ」

両親は代用品を見つけたことで。親友は自分の地位を守るために。教師はお金を積まれて。

どうしてこんなに腐ってるんだろうね、この世界は。

「見てよあれ。E組の堕天使じゃん」

「何であのぶりっ子庇ったんだろね。まっ、おかげでこちらはストレス発散に使えて超便利い?」

「今回は姫希ちゃんからもオツケー出てるしね!」

本校舎の女生徒はぼくのことを見て声を小さくすることもせず、噂話を始めた。

ぼくはその様子を無感情に直視する。ぶりっ子が誰を指すのか、そんなことはすぐに分かる。

「自分が一番不幸だなんて思わないですよ」

その言葉はカルマ君だけにではなく、ぼくに向けたものでもあった。

\*



翌日のカルマ君の暗殺はどれもイマイチで、警戒度MAXの殺せんせーに手入れをされるばかりだった。

教卓にナイフを刺したタコを置く嫌がらせはたこ焼きを食べさせられる結末に終わり（余談だがそのたこ焼きの一部を磯貝君が持って帰っていた）、家庭科ではラブリーナエプロンを付けさせられ、授業中の暗殺はネイルアートの手入れをされる。

「大口叩いてた割には随分手入れをされているが……もしかしてわざとやってるのか？」

浅野君が楽しそうに口にした時は我が目を疑った。カルマ君がキレて喧嘩をふっかけようとした瞬間、間に殺せんせーの用意したカカシ（浅野君似）が現れるという事態が起こったからだ。

「まあまあ、喧嘩ならカカシとでもしてください」

「「「できるか?!」」」

真顔で言う先生にぼくらはツッコんだ。喧嘩の仲裁に瞬時に入るなんて殺せんせーが個人マークしていたのがよく分かる展開だ。

こんな風にしてカルマ君は1日中殺せんせーに弄り回されたのだ。「そんなすぐにあの教師を殺せるわけないだろう。今は様子見たらどうだ?」

校舎裏の崖近くにいるカルマ君に浅野君がそう話しかけるのに目を凝らす。浅野君が人を構うなんて珍しい。

「やだね。誰かに殺されるのも、勝手に死なれるのもムカつく。俺の手で殺すんだ」

「だったら初っ端からあんな挑発するんじゃないかな。かなり警戒されているが……おい、隠れてないで出てこい」

「えー！気づくの早いよ、浅野君」

「何だ、渚も居たのか」

ぼくは後ろを振り返り、ぼくの2倍以上ある殺せんせーがニヤニヤ

しながら立っていることに苦笑する。殺せんせーは動きは速いけど大きいから気配はすぐに察知できるのだ。

「カルマ君、今日君は先生に色々な手入れをされましたねえ」

「何でみんなして俺のこと構うのさ」

カルマ君はぼくらを見回し、顔をしかめた。

「先生ですから」

「これでも監視役だ、E組で1番の問題児はお前だからな」

「友達だからだよ」

ぼくらは個々に理由を述べた。カルマ君は人をあまり信用しない。それでもぼくらが彼を構うのにはぼくらなりの理由があるのだ。

「……ふーん。先生はさ、命賭けて生徒のこと守れる人？」

「もちろん」

「そつか。なら殺せるよ」

カルマ君は崖から後ろ向きで飛び降りた。

「なっ……！」

浅野君があまりの無茶ぶりに崖の下を覗き込む。ぼくは平然とカルマ君が落ちるのを見ていた。この暗殺の結末は知っている。それ実際に、カルマ君はこの暗殺で物理的に殺せるとは思っていない。可能性は半分だと見ているはず。殺せんせーが助けないと少なからず思っているのだ。

殺せんせーの張った蜘蛛の巣のような触手がカルマ君を受け止める。

「お見事です。速く助ければ君はそれに耐えきれなくて死に、逆に遅く助ければその間に先生は殺されてしまうでしょう。そこで先生、今回はネバネバしてみました」

「何でもありかよこの触手！」

「ちなみに、見捨てるという選択肢はないので安心してください」

そうだよ、殺せんせーは。ぼくはほっと胸を撫で下ろした。世の中腐ってて、ぼくらを裏切るような人ばかりだ。それでも殺せんせーはそんなことをしない。そういう自信があった。

カルマ君が崖の上に無事戻ると、浅野君は仁王立ちして怒鳴り始め

た。

「何考えてるんだ！少し間違えてたら死んでいたっていうのに。超生物が担任じゃなかったら死んでいたんだからな?!」

「……何であんたが怒ってんの?」

「僕がそんなに外道に見えるのか?てし……クラスメイトの命を大切に考えるのは当然だ」

今完全に手下って言いかけていたけどね。

ぼくは浅野君の代弁をする。

「浅野君はツンデレだから。カルマ君と仲良くしたいと思ってるんだよ」

「誰がツンデレだ」

ぼくは「違うの?」と微笑んだ。浅野君は否定する。

「あーあ。今のが1番殺れると思ったんだけどなく。また計画の立て直しかな」

「もうネタ切れですか。先生はまだ手入れが足りないぐらいです。君も案外チョロいですねえ」

殺せんせーは緑のシマシマ顔で昨日の仕返しをするように言った。カルマ君はこめかみをピクリと動かす。

「殺すよ、明日にでも」

にっこりと笑って首を切るジェスチャーをする彼にもう歪んだ殺意はなかった。先生として殺そうとも、人として殺そうとも思っていない。

それはE組のみんなに通じることだ。

この先生に絶望する日はきつと来ない。心の中で殺せないのなら、物理で殺すしかないのだ。

「ところで渚。何故赤羽のことは名前呼びなんだ?」

浅野君が突然話を切り出した。ぼくは何でだっけと頭の中に理由を思い浮かべる。

「何でって……カルマ君、下の名前気に入ってるよね?」

「うん、そうだね」

彼の周りでカルマ君を苗字呼びする人はあまりいない。珍しい名

前なのでダブることもなく、呼びやすいということも関係している。もともと本人がその名前を気に入ってるということもあり、彼をよく知る人なら名前呼びが普通だ。

「なら僕は？」

「浅野君最初の自己紹介で下の名前で呼ばれるのが嫌い、みたいな発言していたから」

よね？と確認する。確かに最初の自己紹介の時にそう言っていたはずだ。

「うわっ墓穴掘ってやんの」

「今なら間に合いますよ、浅野君」

カルマ君と殺せんせーはニヤニヤして浅野君を突いた。もしかしてぼくの勘違いだったのかな。本当は名前呼びの方が好きなのかもしれない。

「黙れ」

「あれ、違ったの？」

「まあな」

「下の名前……学秀？」

ぼくはまた名前間違えてないよねと浅野君を振り返った。彼は顔を少しぼくから背けている。

あつてる、よね？

「学秀君学秀君」

カルマ君は冷やかすように連呼した。その彼の頭を躊躇なく浅野

君——学秀が引つ叩いた。

「お前は黙れ、カルマ」

「渚ちゃん、帰りにファミレス寄ろうよ。学秀君は置いてさ」

「その財布先生の！」

「おい、渚を連れ回すな！」

「ごめんごめん。返すよ」

財布を先生に投げ、ぼくのことを浅野君、いや学秀に渡す。殺せんせーは財布の中身を見て飛び上がった。

「にゅやっ！中身抜かれてるんですけど?!」

「はした金だったから募金しちゃった」

「この不良慈善者!!」

「何で〜?募金するのっていいことだよね〜?」

2人のやり取りをぼくらは眺め、ぼくは呆れ顔の彼に声をかけた。

「浅野く……じゃなくて学秀。帰ろつか」

「ああ、そうだな」

学秀はぼくの言葉に頷き、カルマ君を置いて2人で帰ることにしたのだった。

大人のはなし。

中学3年生になってから1ヶ月、5月になるとぼくらはそろそろE組の生活に慣れ始めていた。教室に入って早々、学秀がパソコンとにらめっこしているのが目に入る。

「何やってるの?」

「ああ、渚か。ちょうど良かった。今日新任の英語教師が来るらしくてな」

「えー」

ぼくは思わず声を上げた。

何で知ってるの?!

「そこまで驚くことじゃないよ」

「何で知ってるのかなあって」

ぼくもそろそろかなとは思っていたけどまさか今日来るとは思ってもいなかった。

「暇だったんで烏間先生のパソコンをクラッキングしていたんだ」

暇だったからで教師のパソコンを覗き見する中学生がどこにいます。まあ、学秀がハッキングにハマる原因を作ったのはぼくなんだから。まさかここまでのめり込むとは思わないよね。

「ただ、情報があまりに少な過ぎるな。10ヶ国語程度の言語を操る殺し屋ってことしか分からない」

「……それってフランス語とかスペイン語も入る感じ?」

中国語で口走る。この外国語会話もそろそろ終幕か。

『だろいな』

『待てよ……みんなに気づかれずに悪口言えるね』

『渚はどんな教師を想定してるんだ?』

ぼくが普段からは考えられないような発言をしたので学秀は訝しげだった。

『世界最高レベルのビッチ』

気づけば口からするつと言葉が出てきていた。

イリーナ・イエラビッチ。彼女を殺し屋として尊敬はしているが、ぼくの中で彼女のことを一言で言い表すとしたらそれしかない。誰にでもディープキスをしてしまう軽さとか、ハニートランプが上手いところなどがいい例である。

思い出してみれば1周目の時は何とも思っていないが、2周目になるとさすがに自分が周りにどう見られているか理解してきたなあ。現在145センチのぼくは小学生に見られがちだ。ビッチ先生のように色仕掛けとはいかないにしろ、そういう小さい子（認めたくはないが）特有の暗殺が使えるんじゃないのか。

『泣き落としは学秀に通じたしね』

『何の話だ』

『もしかして、それ殺せんせーに関する情報？さすがだね』

ぼくは話をさっと別のことに取り替えた。パソコンのファイルにまとめられた細やかな情報はぼくが前に書いていたメモ帳とは比べ物にならないものだった。映像や写真付きで詳細に書いてある。

「おはよう。今日2人とも早いね〜」

中村さんが教室に入ってきた。どうやら彼女が今日の日直らしく、黒板に自分の名前を書き込んでいる。

「ところで渚ちゃん、もう告白はされたの？」

「へ、こくはく？」

どういう流れ?!

目を白黒させると彼女は肩を竦め、期待外れだとしても言いたげにため息を吐いた。

「その反応はまだか。浅野君も早くしないと取られちゃうよ〜」

「余計なお世話だ」

2人がひそひそと話す姿をきよとんとぼくは見つめていた。いつの間にあの2人仲良くなつたんだろう。

中村さんに学秀が弄られている間に少しずつ生徒が登校してくる。その中には茅野もいて、隣の席のぼくらは世間話で盛り上がっていた。この間行ったメルの行きつけのカフェについてである。

「今日の帰りまた寄ろうよ！期間限定の桜カフェがすごいおいしそう

なんだ〜」

ありがたい誘いではあったが、ぼくは首を横に振った。

「ごめん、今月はそろそろ金欠なんだ」

ぼくは苦々しい思いで断った。4月も終わり頃になると財政難になるのは1人暮らしでよくあることだ。ぼくは自炊で裏山から勝手に食材を取っていたりもするわけだけど、友達と帰りにカフェに寄るだけで出費は一気に飛んでいく。女子会なんてものをした日には1日で多額な資金が消えていくのだ。

「お、おい菅谷！チャンスだぞ！」

岡島君が菅谷君に囁く。その光景に何かおかしな予感をしつつも気になってしまうのは仕方のないことだ。

菅谷君がぼくに恐る恐る声を掛けた。

「あのさ、ちゃんとギャラは払うから絵のモデルやってくんないかな？」

「モデル……ああ！なんかそんなこと言ってたね。あの時頷いちやつたけど、ぼくでいいの？」

モデルなんてE組で探せばいくらでもいるのに。例えば片岡さんはスラツとしていてスタイルが良いし、速水さん辺りは人形みたいに整った顔をしている。人懐っこい笑みを見せる倉橋さんの絵も少し見てみたいと思うものだ。

1人思いを馳せていると、菅原君は何を言っているのか意味不明だと言わんばかりに瞬きしていた。

「天使を描きたいんだよなあ。ギャラは5千円でどう？頼む！」  
「のった」

ぼくは完全にお金に釣られてその話を受けることにした。横で茅野が絵のモデルかあと感心して呟いている。ぼくは少し彼女をからかいたくなった。

「今日なんか巨乳の先生が来るらしいよ」

「ふあ?!」

普通では絶対出さないような奇声を出し茅野がびっくりした。

思った以上に面白い反応だった。やばい、楽しい。



「って話を学秀から聞いたんだよね」

「びつくりした……渚ひどいよ」

ほんとだけどね。

始業のベルが鳴り、烏間先生が殺せんせーと新しい英語の教師を連れて教室に入ってきた。妙に殺せんせーにくっつく外国人の女の人、その人こそが

「今日から来た新任の英語教師だ」

「イリーナ・イエラヴィツチです！みなさんよろしく♡」

……ものすごいキャラ崩壊を見た。

3月の段階での地味なビッチ先生を知っているぼくからすれば、彼女は双子の誰かなんじやないかというぐらい違和感があった。

「何か殺せんせーにベタベタしてね？」

「巨乳……」

横で茅野が両手をない胸に当て目を炎のように燃やしている。それを見ないふりし、ぼくはぼそりと呟いた。

「何で男子はみんな釘付けになってるんだ」

岡島君やそこら辺の男子は鼻血を出しそうな勢いで谷間に魅入っている。みんなしつかりしてほしい。

もつとも殺せんせーが1番にやけて見ているのだが。殺せんせーの緩みきった顔はえろピンク色をしており、視線は谷間を向いている。ビッチ先生がベタベタくっ付くとさらにデレデレになる。

「どうする学秀君？俺あーゆうのを見るとすごい悪戯仕掛けたくなるんだけど」

珍しく遅刻して来なかったカルマ君が後ろの席で学秀に尋ねていた。

「放っておけ。そのうち殺せなくて出て行くだろう」

その言葉に納得はいくものの、カルマ君は面白くなさそうにしていた。最近2人は最初の頃のような険悪な雰囲気が多和らいだ。もちろん授業中に口論することも少なくないが、互いを良い意味でライバル視しており、同じ思考レベルで考えられる相手という認識もしている。その中には中村さんも入るのだが、彼女はあれでも女子をやっ

ているので除外としよう。悪戯という点で考えて1番くっ付けてはいけないのはカルマ君と中村さんだが、そもそもこの2人はまだそこまで仲良くなっていない。

そのまま何事もなく昼休みに殺せんせーとぼくらが遊んでいると、ビッチ先生が殺せんせーにベトナムコーヒーを買わせに行かせた。ようやく彼女の暗殺が動き出すのだろう。

昼休み終了のベルが鳴り、磯貝君はクラスの代表として彼女に尋ねる。

「イリーナ……先生？授業始まりますけど」

先ほどとは別人の表情をしたイリーナ・イエラビッチがそこにはいた。煙草を吸っただけなのに大人の女性感が全身から現れる。さっきまでの色仕掛けで頬を染める女性はどこかに行ってしまったようだ。

「ああ、テキトーに自習でもしてなさい。それと、気安くファーストネームで呼ばないでくれる？あのタコがないところで先生なんてするつもりないから。私のことはイエラヴィッチお姉様と呼びなさい」

「……」

自分勝手な暗殺者が来たなど思っている周りにビッチ先生は全く気づかないようだ。カルマ君は相手を弄ぶ時のキラキラした笑みを彼女に向ける。

「で、どうすんのビッチ姉さん」

「略すな！」

「クラス総勢で殺せない相手1人で殺せんのか？」

カルマ君は経験者なのでその難しさをよく理解している。しかし、彼にしては優しすぎるその忠告を彼女は切り捨てた。

「ガキね。大人にはね、大人のやり方っていうのがあるのよ」

彼女はピンヒールなのに全く転ぶこともなく草むらを歩き、ぼくがいるところまでやって来た。ぼくはヒヤヒヤして彼女を見上げる。

もしかしてやるのかな、アレ。

「浅野学秀ってあなたよね？」

が、どうやら彼女がぼくの付近に来たのは隣にいた学秀が目的のようだ。

「ああ、そうだが」

彼女は次の瞬間学秀にキスをしていた。彼女の舌が学秀の口の中を貪り、40hitもすると彼はぐったりしていた。

イリーナ・イエラビッチの行動に躊躇はなく、それは彼女がビッチと呼ばれる所以でもあった。しかしぼくはあまりにも彼女を見くびっていたのである。まさかあの浅野学秀を使おうとするなんて想像したこともなかったから。

「後で私のところに来なさい。他にも情報を持つ子は教えなさい。男子にはいいこととするし、女子には男を貸すこともできるわ」

山の下から車でやって来た厳つい3人組から銃を受け取り、彼女は小さい子に言い聞かせるような口調で続ける。

「逆に私の暗殺を邪魔するような真似したら  
殺すわよ」

ぼくはふつと笑みをこぼした。この脅しほどぼくを冷静にさせるものはないからだ。

「殺す？ M・t a m e s i p u e d e s」

ぼくだってキスで人を気絶させるぐらいできる。10ヶ国語も話せないけど母国語含めて5ヶ国語程度なら平気だし、ぶっちゃけてしまうとハニートラップを得意とする運動派ではない暗殺者に戦闘で勝つぐらいの技量はあると思う。

彼女がすごいことはよく理解しているけど、最初の彼女は嫌いだ。自意識過剰というか、暗殺のプロとして甘過ぎる。対先生弾しか効かないって烏間先生から聞かなかったのかとか、ぼくが臭いに敏感って忠告したはずなのに臭いの強めな鉛を選ぶところとか………生徒の中で1番選んじやいけない相手にディープキスするところとか。

「何だか色々ご愁傷様です」

「何で哀れnderの」

片岡さんがぼくの眩きに返す。

「この中で1番学秀と付き合い長いから分かるんだけどさ」

ぼくは周りを見渡して言った。3年間A組だった生徒は疎かA組に居たことある生徒もこの中にはいない。

「本気で怒った学秀は……何ていうか、酷いよ」

ぼくは少し身震いした。いつとは言わないけど彼が激怒した現場に遭遇したことがある。あの時の彼は支配者の風格を漂わせてはいたが、独裁者ヒトラーのようにどこか間違っていた。あんなの浅野学秀じゃない。第二のヒトラーだ。

(そんなにか?!)

全員はぼくの怯えようを見て理解したようだ。

「あ、浅野やつと意識戻ったか。大丈夫なのか？」

学秀を心配して付き添っていた磯貝君はようやく起き上がった彼の顔の前で手を振った。

「そうだな、正常に殺意が芽生える程度に大丈夫だ」

「それ全然大丈夫じゃないから?!」

ぼくは学秀が何をするのかと想像し頭が痛くなった。学秀に対するディープキスの罪状に死をもつて償うという言葉が頭を駆け抜ける。

「カルマ、さつきは止めたがとびきりの悪戯をしろ」

「そんな偉そうに言われてもねえ。まっ、やるけどさあ」

カルマ君はかなり楽しそうに口笛を吹いていた。それは彼を知っているE組の生徒たちにとって黒猫や靴紐が切れるのと同じ感覚。俗に言う不幸の前兆である。

「お、おい……俺すごく嫌な予感がする」

「ちよつと止めてこい天使」

「そうだよ、天使ちゃん君にしか止められない！」

主に学秀(そしてカルマ君も含む)を恐れる男子勢によってぼくは学秀の前に押し出された。女子を犠牲にしようとするなんて腑に落ちないとぼくは抗議しようと思ひ、女子たちに視線で訴える。

彼女たちの答えは一致していた。すなわち、犠牲になってくれと。

「ええ！何でぼくが……」

仕方がないので話し合いをする学秀とカルマ君のところに忍び足で近づく。どうも気づかれていないようなのでぼくは学秀の服の裾を引っ張った。

「渚、どうした？」

「えつと学秀、あんまりやり過ぎないでね……」

声が細々となるのを感じつつ言うと、学秀は3秒ほど黙って答えた。

「心配しなくても殺しはしないよ」

君の中でのやり過ぎは死なの?! 殺害なの?!

その後新任教師による暗殺は呆気なく終わり、手入れをたっぷりされたビッチ先生はレトロな体操着姿になっていた。

\*

ビッチ先生に対する学秀の報復はカルマ君を巻き込んで行われた。彼女が教室に入ると頭上におもちやの蜘蛛が降り、教卓の前に立つと床が抜けた。椅子に座ろうとすれば脚が折れて勢いよく地面に転げてしまう。地味な嫌がらせにビッチは半泣きでキレていた。それはもう拳銃を取り出して脅そうとするぐらいの勢いだ。終いには当たらないギリギリの場所に発砲していた。

「誰よ!!こんなふざけた真似したのは?!」

「誰だろ〜?」

「許せないな」

学秀とカルマ君が互いに言い合う。

(いや、お前らだろ!!)

クラス全員が心の中で突っ込んだ。E組生徒のほとんどがどちら

かと言えば浅野学秀側、そして学秀とカルマ君を若干恐れていることもあり見てないふりをしている。

仕方なく彼女は立ったままタブレットを取り出し弄り始めた。しかし、すぐにイライラしたようだ。

「何でここWi-Fi遅いのよ……あら、3—e free wi-fiってというのがあったのね」

ビッチ先生はタブレットを叩いてて自分の気づかなかったWi-Fiを発見したようで喜んでそれに繋がった。

それが罨だと気付かずに。

彼女のタブレットからはどう考えても女の悲鳴が出されていた。どうやら学秀はタブレットを遠隔操作してホラー画像やグロ画像のフルコースを見せているらしい。

「What the……?!?!」

タブレットを放り投げて彼女は悲鳴を上げた。どう考えてもホラーの動画が勝手に再生されてる。彼女からしたらタブレットの画面が勝手に動き出すようにしか見えなかっただろう。

でもホラー動画だけですんでよかった。もう少し危ないものを予想していたのでぼくは少しホッとしていた。

「泡吹いて倒れてる」

「お……ほっとこうぜ」

「巨乳だからバチが当たったんだよ!」

横でぶんすか怒っている茅野を宥めっているとカルマ君がとても胡散臭い笑顔で近づいてきた。手には写真を持っている。

「渚ちゃん渚ちゃん。学秀君のキス画像いる? 1枚100円で売るよ」

「あはは……遠慮しとく。カルマ君は相変わらずだね」

ぼくはスマホで上手く撮られた画像にカルマ君絶対楽しんでるなと確信した。

ちよつと待てよ。1周目の時はひよつとしてぼくも撮られてたのかな? 影でこんな感じにキスシーンが出回ってたの?!

「何撮ってるんだお前!」

「いや〜……いいもん撮ったなく久々に。思わず30枚刷ったよ」

カルマ君は写真の束を見せた。学秀はそれを取り上げようとするが、瞬時に避けられてしまう。

「おい、全部貸せ。捨てる」

「1枚100円〜」

カルマ君は手を突き出して金を要求した。彼の常套手段だ。

「くっ……買うから貸せ」「あ、データは7千円ね」

「……お前ふざけてるのか？」

「こればかりは商売だからね〜」

「1万やるからデータ消して写真よこせ！」

2人の言い争いを止めにくく途中、ぼくは学秀のパソコンをふと覗いてしまい、そこに殺せんせーに、お手入れ、されるビツチ先生の動画があることに首を傾げた。

「え、何でこんなの持ってるの？」

「岡島が校内のあちこちにカメラを仕込んで殺せんせーの動向を把握しているんだよ。その中の一つであの女の手入れ動画が撮れたわけだ」

面倒だから確認も再生もしないがと学秀は語る。

「……それどうするの？」

「晒すに決まってるだろう」

やっぱりあの浅野学秀の恨みがホラー動画と悪戯程度で終わるわけじゃないよね。そりゃあネットの世界で晒されて屈辱を味わうぐらいじゃなきや腹の虫がおさまるわけないか。

およそ5分に及ぶビツチ先生のお手入れ動画はその日の内にネット上で話題を呼び、殺せんせーは上手くできたCGとして好評だった。ただ、5分の間で殺せんせーが何をしたのかについてはノーコメントとさせていただこう。きつとまだ中学生のぼくたちは見てはいけなものだと確信を持って言えた。

\*

翌日、ぼくらはまた新任教師による英語の授業があることに疲労を感じていた。サボタージュかボイコットしようという案も出ていたが、それは殺せんせーによって止められてしまったのだ。

「どうせまた自習だろじ・しゅ・う！」

寺坂君が大きい声で言った時、それは運悪くも本人がドアを開けたところだった。全員がボイコットのために投げるものを用意している。学秀に至ってはパソコンを取り出してまた何かしようとしている様子だった。ところがその標的はタブレットを持っておらず、手ぶらで黒板の前まで歩いていくとチョークで文字を書き込んだのだ。

「You are incredible in bed!  
Repeat after me！」

ポカンと口を開ける生徒たちは渋々その言葉を口にする。ぼくは意味を知っていたので学秀の方を見てアイコンタクトを取った。ぼくと視線が合わず無表情を見る限り、どうやら考え事をしているらしい。

「ある潜入で標的が私に言った言葉よ。意味はベッドの中の君はスゴイよ♡」

（中学生に何て文読ませるんだよ！）

『なるほど、さすがビッチだな』

学秀がわざとらしく大きめのフランス語で漏らす。彼女は学秀の声に反応したがそれを無視することに決めたらしく、そのまま続ける。

「私の授業では実践的な英会話術を教えるわ。語学を学ぶにはその



国の恋人を作るのが手っ取り早いと言われてるわね。私はその方法で語学を身につけてきたわ」

学秀もかなり話せるけど彼の場合は外国に人脈があるのが大きいだろう。夏休みによく留学していたという話を聞いたことがある。

「私に教えられるのはあくまで実践的な会話術だけ。受験で使う英語はあのタコに教わることね」

『意外とまともなこと言ってるが、あいつは本当に昨日と同じ奴なんだろうな?』

学秀が疑わしげに後ろからスペイン語で声をかけてきた。

『そんなに疑わなくても同じ先生だからね』

ぼくもそれに対して返す。ビッチ先生はそんなぼくらに目をつけたように、『話ぐらい聞きなさいよ!』とスペイン語で言った。

「そのLAN<sup>語</sup>GU<sup>学</sup>AGE<sup>カッ</sup> COU<sup>プ</sup>PLE<sup>ル</sup>、堂々と授業中に会話とはいい度胸ね。ゆくゆくはこの2人みたいに秘密の話ができるぐらいにしてみせるから覚悟なさい!」

ぼくらは自分たちのことを言われていることに気づき、びくりと身体を硬直させる。今のスペイン語の発音はぼくが聞いたどんなものより美しく、何故か色気を含んでいた。学秀も口をつぐんでしまったところを見ると、彼にもあそこまで綺麗な発音はできないんじゃないのかと思われる。

「それであんたたちが私を認めないと判断したら潔くこの教室を去るわ。それで文句ないわよね?……あと、いろいろ悪かったわよ」

しよぼんと顔を俯けてビッチ先生は謝った。素直にごめんなさいと言えないところが彼女らしい。

そんな謝罪にE組が返す答え。それは

「「「あはははははー!」」」

笑い声だった。

「何びびってるのさ」

「この前まで殺すとか言ってたくせに」

「もうビッチ姉さんなんて呼べないね」

「よくよく考えたら酷いあだ名だよなあ」

「ねっ、先生に失礼だったよね〜」

クラスの彼方此方から手の平を返したように新任教師のことを認める声が飛び交った。

「あんたたち……分かってくれたのね」

彼女はじわりと涙を浮かべる。さすがに昨日のあれはかなり効いたらしい。1周目より悪化していたからなあ。気絶するまで追い込んでしまったし

クラスの2人が、だけど。

「じゃー……ビッチ先生で！」

悪意の無いあだ名認定に彼女の涙が引つ込んだ。普通にイリーナ先生と呼ばれるとでも思っていたのだろうか。最初の自己紹介でファーストネームで呼ぶなど言われ、それでもなお呼ぼうなんて誰も思わないだろう。

「……………気安くファーストネームで呼んでくれても構わないのよ？みんなせつかくだからビッチから離れてみない？ねっ？」

自分のあだ名のために必死になるビッチ先生とは対照的に、E組のみんなはもうあだ名は決まったとばかりの対応だった。別にイエラビッチがエロビッチになってもビッチ姉さんでも悪いあだ名ではないけど、先生の方がいいよねと思っっているのが丸わかりである。

「もう定着しちゃったもん〜」

倉橋さんが悪意のない笑みでそう口にする。

「今さらイリーナ先生なんて呼べないよね」

口々にそう言う生徒たちを見てビッチ先生の眉間にしわが寄っていく。生徒の何人かはイリーナ先生と呼ぶ人もいるが、極少数派だ。

「キーーーーッ！やっぱ嫌いよあんたたち!!」

こうしてビッチ先生は無事にE組に迎えられた。ついでに言うところ、ビッチ先生のお手入れ動画は消されることなく、ネット上で殿堂入りしたらしいと後で岡島君に聞いた。

『ねえ、学秀』

ぼくはどうでもいいことを思い出し、ビッチ先生がいることも構わずに後ろに向かってフランス語で言った。

『なんだ？』

『ね、デイトプキスで気絶はできるんだよ？』

学秀の何とも言い難い表情を前にぼくは微笑む。ビッチ先生が早速英会話のちよっぴり刺激の強い授業をするのを聴き流し、倉橋さんと矢田さんがクスクス笑いながら彼女の会話術に飲み込まれてゆく様を見ていた。

会話術を学ぶならこの2人みたいにビッチ先生から学ぶのが1番だろうなあ。殺し屋になるために出来ることだったら何でもやるべきだしね。

新しくやることが出来たことに喜びを感じ、ぼくはその後倉橋さんと矢田さんを誘いビッチ先生の元に行ったのだった。

集会のはなし。

本校舎での集会は通常昼休みの後に行われる。E組のぼくらは昼休みを返上して校舎に向かい、他のクラスより早く着いていなくてはならないという決まりがあつた。

「だから今日は早弁しても許される日なのよ」

原さんがご飯を頬張りながら殺せんせーに解説をする。昼休みを返上、その意味はE組にとっては集会のある日の昼休みにお弁当を食べる時間がゼロに等しいということでもあつた。そのため最初の休み時間でクラスのほぼ全員が早弁を始めるのだ。

「あれ、天使ちゃんはいいの?」

倉橋さんがぼくに訊く。ぼくはクラスでも少ないお弁当を広げていない生徒の一人だったからだ。カルマ君も早弁はしない主義とのことのでいちご煮オレを握りしめてイヤホンを付けていた。

「うん。せっかくだから昼食は自分で狩ろうかと思つてさ」

「自分で狩る……つてどゆこと?!」

茅野がええ?!と驚いて声をあげた。

「集会の日はいつもそうだよね」

磯貝君は驚くこともなく頷く。集会の日は大抵本校舎に行く道の途中で採れたキノコや山菜を帰ってから調理して昼食を食べることにしている。その際磯貝君にお裾分けしていたので彼はその事を知っているわけだ。

「せんせー集会行きたい」

触手を啜え駄々をこねる子供のように殺せんせーは呟いた。一瞬固まったE組勢だったが、すぐに意見し始める。

「国家機密が何言ってるんだよ!」

「身体タコのくせに集会に参加できねーつて」

「この前だつてビッチ先生の手入れ動画の事で烏間先生に怒られてたじゃん」

生徒たちがお弁当を食べながら殺せんせーに対して批難の声を露わにした。それに対抗するのは殺せんせーのみだ。

「先生こう見えて変装スキル高いんですよ?!」

どこがだ。殺せんせーのギリギリ人間な変装を思い出し苦笑いをする。よくあれで3月までバレてなかったものだ。いや、人外なことはバレてそうだ。

ぼくは4時間目が終わると体操着の短パンをスカートの下に履きストレッチをした。フリーランニングをする前は軽い気持ちで行くと事故を起こすからだ。そういうことの心配をしそうな学秀は集会に向けて生徒会の仕事があるとのこととA組にいるらしい。集会の日は色んな意味でフリーランニングの練習にはかなりうってつけの日である。

「渚ちゃん見て見て」

原さんの声にぼくは振り返った。原さんはメルを抱き抱えている。ぼくはメルが柵ヶ丘の制服のような服を着ていることに気づいて少し笑った。頭には三つ編みのカツラを付けさせられていた。着せてる側は楽しいが、着ている側はお地蔵のように無表情で固まっている。でも猫なので嫌とも言えないようだ。

「メルの制服作ったのよ」

「原さんは相変わらず器用だね」

女子たちがメルを囲んで「かわいいー!」と悲鳴に近い声を出していた。写メを撮るところを見ると彼女たちはこういうものに目がないようだ。殺せんせーがお腹を抱えて笑ってる。

「笑わないでよタコのクセに、って言ってるよ」

倉橋さんが親切に通訳した。そんな彼女は真っ先に待ち受けをメルの寝顔から撮ったばかりの制服姿の写真に変えていたりとかかなりメルに毒されている。

「にゅやっ、タコのクセにとは失礼なっ!」

「うん、タコに失礼だよね〜」

カルマ君はいつもの不敵な笑みを浮かべ、若干おこな先生に構わず銃を撃った。

「そうだ、メルも集会連れていこうよ」

「いいね！制服着てるから大丈夫じゃない？」

(いや、だめだろ)

女子に比べて多少冷静な男子たちが一斉にツッコむ。そもそも1周目のE組女子はもう少し冷静沈着だったはずだ。これがこうも変わってしまったのだから猫の威力は恐るべしといったところか。

「先生だけのけ者……ぼっちせんせい」

「最近ぼっちキャラは人気が高いわよね。でもそれは他の作品の独壇場だわ」

「……不破さん？」

ふっふっふつとキメ顔をする彼女にぼくは訊き返した。不破さんはよくわけの分からない話をする。

話を戻すと、結局メルはぼくについてきた。キノコや山菜なんて言ったが、最終的にぼくの目的はフリーランニングの練習であり、メルの食べ過ぎと運動不足を解消するのにはもってこいだ。ぼくはキノコを採取しながら独り言のような感じでメルに愚痴っていた。

「殺せんせい殺すより茅野救う方法考えなきゃなあ……」

「にやー」

タマゴタケを発見し、ぼくは喜んでそれを袋に入れた。これは何度食べても美味しい絶品だ。椎茸や松茸もあるが、個人的にはこれが1番である。

ふと目を凝らすと栗のような物体が見える。ぼくが首を捻っているとメルがその物体を追いかけて撃退した。屍となった物体はよく見ると知っている顔だった。

なんだ、野生のくぬどんか。一瞬大きい栗が歩いているのかと思っただよ。

「それでさ、一つ思い浮かんだけどちよつと悩むんだよね。失敗するかもしれないし」

ぼくは話の続きをする。その間に山菜の幾つかは採取し終え、木を伝い本校舎への近道を辿っていった。

メルはそれに器用についてくる。身のこなしが速いのはさすが元

死神の飼猫だ。

「触手見たとき、それが答えのような気がしたんだ」

メルはぼくの顔をじつと見つめていた。倉橋さんではないので意味は分からないが、この顔は「ほんとに触手を使う気なの？」と言ったところか。諭されているような気がしてバツが悪くなる。ぼくは地面を向いて小石を蹴飛ばした。

「……なんてね。まだ付けてないよ」

「にゃー」

「猫にこんな相談しても分かるわけないよね。んー、今日は天ぷらかな」

ビニール袋に入った採れたキノコと山菜を見てぼくは今日の献立を考えていた。フリーランニングで木から木に移りながら本校舎に行っているとあつという間に辿り着いてしまう。E組のほとんど使われていない下駄箱に袋を突っ込む。E組のみんなは既に整列しており、まだ他の組の生徒は来ていないようだった。

「渚ちゃんギリギリ間に合ったね」

岡野さんがほつとしたように言った。E組の生徒は他の生徒より早く着いていないと文句を言われるからだ。待つこと1、2分。ようやく他のクラスの生徒たちが体育館に入ってきた。

その後すぐ、彼らの関心はすぐにE組に向けられた。特にぼくへの視線が多い。

「あれE組の墮天使じゃね？」

「浅野君誑かしてE組に誘い込んでるらしいよ」

「天使ちゃんマジ天使」

「ビッチだわ。マジやべー」

「顔はかわいいよな」

「えー大したことなくない？」

賞賛と貶し文句の数は半々ぐらいだ。それは主に男女で分かれていて、女子のほぼ全員はぼくの悪口を言っていた。色々あって反感を買ったのが大きい。逆に男子は好意的な声が多く、未だに大量の手紙が下駄箱に入っていると見ると嫌われていないようだ。

「山の上から大変だったでしょ？おつかれ〜天使ちゃん」

わざわざ嫌味を言ってくる女子に向かつてぼくはにっこりと微笑んだ。

「心配してくれてありがと。優しいね」

その女子はその返され方を予測していなかったようだった。彼女はぼくの笑顔に怯んで列に戻っていった。そういえばあの子は誰だろう。見たことないけど。

しばらくすると通常通り校長のいつものつまらない話が始まり、ぼくらは長々と退屈な思いをしなければならなくなった。たまに挟まれるE組いびりの時にみんなが俯く瞬間が耐えられない。

「要するにみなさんは将来この国を背負うエリートになるわけです。が、油断しているとどうしようもない誰かさんたちみたいになっちゃいますよ〜」

「「あははははは！」「」」

E組以外の生徒たちが校長の声に合わせて笑い出す。校長の話で笑えるポイントはどうやらここしかないらしい。悲しいことだ。序でに言ってしまうば「校長も油断していると髪がだんだん無くなっちゃうよ?」と言いたいのを我慢していたりする。3月終わりにもなると確か8割ほど抜け落ちていたはずだ。ドンマイ。

「こら、みんな笑いすぎでしょう！先生も言い過ぎました」

笑いを堪えきれないといった顔をする校長から目を逸らし、A組の列にいる学秀に目をやった。笑っているのかと思ったら、彼もちょうどこちらを向いていたようで目が合う。しかしすぐに逸らされた。彼にとってこの状況で目が合うのは気まずいのだろう。

「続いて、生徒会からのお知らせです。生徒会の生徒は準備をしてください」

放送が流れ、3年A組の生徒数名が舞台上に上がっていった。突然磯貝君が思い出したように学秀の話が始める。

「浅野のやつ、E組監視役の件、生徒会の仕事として正式発表するらしいぞ」

「へえ、学秀も色々考えてるんだね」



実際のところ学秀はE組で暗殺をすることにとても満足していた。その一方で本校舎の生徒たちをまとめる生徒会長も彼の性格上完璧にこなしたいはずだ。A組には彼がいないことに不満を持つ生徒も少なからずいる。しかし、E組監視役という建前がある限り彼らは文句を言えないわけだ。

「ナイフケースデコったの可愛くない？」

「わあ、かわいい〜」

後ろで中村さんと倉橋さんが楽しげにナイフケースを見せ合っている。最近E組女子の間でナイフケースを可愛くデザインするのが流行っている。茅野のケースはスイーツ尽くしな薄ピンク系統のデザインになっていて、ぼくのも茅野と色違いな寒色系のデザインで飾り立てられていた。

とにかく、そのナイフケースを見せ合う行為はE組では日常的な光景なわけだ。しかし集会中に行うのを鳥間先生が見逃すはずもなく、険しい形相で2人を叱りつけている。ふと後ろの方を見るとビッチ先生がモデル歩きで颯爽と登場していた。杉野君によるとさつきまでヘトヘトに疲れていたのだという。全くそうは見えない。

『学秀とタコがいないからちようどいいわ。渚、ちよつといいかしら？』

フランス語で尋ねられ、ぼくはビッチ先生がぼくの隣に来ていたことに気づいた。どうやらぼくに用があったようだ。

『どうしたの？』

『学秀のやつ、私にあのタコの情報全部見せてくれなかったのよ。酷いと思わない？』

むすつとして綺麗な唇を噛み締める。彼女は色仕掛けがあまり効かない男は苦手らしい。それには学秀も含まれており、ついこの間デーパーキスを食らったばかりだから彼のビッチ先生への態度は冷たい。

『学秀にだって隠したいことぐらいあるよ』

そもそも学秀が自分で集めた情報を他の人に見せようとするとは考え難い。ぼくだってデータの半分も見えていないのだ。来てばかり

のビッチ先生には3割も見せていないのだろう。

『だ・か・らあ、渚く？この前教えたハニートラップ使いなさいよ』

ビッチ先生はいやらしく指先でぼくの顎をくいつと上に上げた。ぼくはカアツと耳まで真っ赤になってしまい、首を横に激しく振った。ハニートラップなんて想像するだけで恥ずかし死ぬ。

『な、何でぼくがそんなこと……』

『あんたがやった方が効果あるからに決まってるじゃない。そうだわ、これ今日の宿題ね？』

ビッチ先生とぼくのハニートラップなら先生の方が遥かに優れているはずなんだけどなあ。いや、学秀の好みは年上じゃないのかも。同じ年ぐらいの女子の方が効果があるのも頷ける。

もともとぼくのような女性暗殺者にはこういう手は必要だ。殺し屋になるなら考えた方がいいだろう。

『ビッチ先生がそんなに言うなら……練習になるしやってみよっかな。学秀から殺せんせーのデータを貰えればいいんだよね？』

『ええ。あんたならやれるって信じてるわ！今日の放課後に――』

『おい、イリーナ。何やってる』

ビッチ先生が烏間先生に連れて行かれたのでぼくが舞台に目を戻すと、ちょうど荒井君が生徒会についての説明をするところだった。案の定E組の分のプリントがない。

『あの、E組の分のプリントまだなんですけど』

1番前の磯貝君が手を挙げて言うと、荒井君は意地悪そうに笑った。

『あつれくおかしいなあ。ごめんなさい、3-Eの分忘れてました！すいませんけど、全部記憶して帰ってください』

来たよ、この展開。

生徒たちの笑い声で包まれる中、凄まじいスピードがE組の列を駆け抜けた。マツハ20の怪物、殺せんせーだ。

「問題ありませんねえ、全員分の手書きのコピーがあるので」

下手な変装をした殺せんせーが鉛筆をくるくる回していた。磯貝

君はそれに頷き、顔に明るさを取り戻す。

「E組の分ありますので続けてください」

「え……は、誰だよ笑いどころ潰したやつ

ゴホ

ン。ではまずは今年度生徒会の活動について

その後は殺せんせーがいたおかげでぼくらは堂々と立っていられた。横目で見えた学秀は殺せんせーの変装に対して笑いを堪えているように見えた。

「さて、E組監視役については生徒会長の浅野君が説明してくれます。壇上にどうぞ！」

学秀はA組の最前列から前に進みでるとマイクの前で全体を見下ろした。

「こんにちは。生徒会長兼A組の浅野学秀です。結論から言います。僕は次の中間テストでE組の成績水準レベルを上げる予定です。最終的には今のA組と同じぐらいになるでしょう」

E組を含めた全校生徒が騒めきたった。彼は今、桐ヶ丘学園の暗黙のルールを破ろうとしていたからだ。E組がA組の同等？そんなことこの学校では許されていない。

「ねえ、どういうこと？」

「浅野君言い間違えたのかな？」

「E組がA組と同等って……俺らの立場がなくなるじゃねーかよ」

「おれ成績ギリギリなんだけど」

生徒たちのほとんどが意見を交換し合っていた。学秀は一つ大きな溜め息を吐く。

「黙れ」

学秀の威圧的な一言で教師までもが口を閉ざしてしまふ。ぼくはぞくりとした。彼は一体……

「下剋上をしようとか企む凡人に僕らが勝つためには何をすればいいか。その答えは簡単じゃないか。僕らが更に高みに到達すればいい。E組の成績が上がった？なら僕らの成績だって上がるはずだ。敗者を見下し続けたければ勝者が努力するのが道理というものだ」

彼の言葉を信者のように黙って聞く生徒たちはもはや洗脳された

かのようなだった。ここまで来てぼくは確信する。彼は1周目の浅野学秀じゃないのだと。

頂点に君臨する王者の如くふっと少し微笑み、学秀はまた続けた。「ここにE組の平均より成績の劣った生徒に放課後の補習クラスを義務付けることを嘆願する署名書があります。この補習クラスはE組とまでは行かないものの、次のテストまで本校舎での権利を50%没取します。E組に負ける気のないという生徒は速やかに署名しに来てください」

ほとんど脅しのような話だが、誰1人としてそれを断ろうとする生徒や反抗する生徒はいない。彼らは浅野学秀に丸め込まれたのだ。

「署名しなきゃ」

「署名署名」

「しよめいしよめいしよめい……」

洗脳にかかったようにぶつぶつ呟く生徒たちを見てぼくはしてやられたと思った。E組の成績が上がるであろうことを学秀は察知した。だから先に手を打ったのだ。E組がA組と同等という話を信じるかどうかは分からないが、何しろぼくのような生徒もE組にはいる。E組の平均点より下というのは少々ハードルが高かったりするのだ。これで今回の平均点はかなり上がるだろう。従ってE組の生徒は成績50位以内に入りにくくなるだろうし、期末テストの時のような賭けが成立するかすら疑問だ。

そして、学秀自体も1周目とは違う。殺せんせーというE組の武器を知っていることで、E組だからという油断をすることなくE組の地位をとどめることに専念するつもりのようなのだ。どういうわけか理事長の洗脳技術を習得したのは2周目ならではの変化か。それともぼくが彼を変えてしまったのか。

「やっぱり浅野は浅野か」

そう、E組の1人が呟いた。それは学秀を侮辱しているというよりも、彼という人物を理解した上での一言なのだ。E組にいる間、彼は暗殺者としては心強い味方だ。一方でE組を出れば生徒会長としてE組を差別する代表をしなければならない。

「あいつはあくまで監視役だから仕方ないよ」  
優しい磯貝君が皆に言い聞かせるも、納得している生徒はいなかった。

\*

集会が終わり、E組校舎に向かう茅野に先に行っているように言い  
自動販売機のある購買へと向かった。自動販売機の前でコインを投  
入していると肩を軽く叩かれる。

「久しぶりだね、渚ちゃん？」

少し大人びた雰囲気が変わった姫希さんだった。ぼくはちようど  
飲み物を買おうと思い午前の紅茶ミルクティーのボタンを押したと  
ころだった。彼女はその様子を見て懐かしさを感じたのかふわりと  
優しい微笑みを浮かべる。

「相変わらず好きだね、午前ティーシリーズ」

「……姫希さんもね」

姫希さんの手にある午前の紅茶 無糖を見て呟く。ぼくたちにあ  
る共通点の1つとして、午前ティーファンだということがあった。し  
かし、その好みは正反対であり、甘々なミルクティーを好むぼくと違  
い彼女は麦茶に等しい無糖をよく飲んでいる。

「渚ちゃんがA組に戻って来ればいいのに」

唐突に切り替えられた話にぼくは相手の目を見つめた。意識の波長から読め取れる黒い感情から思いを察する。

「それはぼくに帰ってきてほしいの？それとも学秀のこと？」

凶星を突かれた顔をする姫希さんを一瞥し、ぼくはE組への道を辿ろうとする。しかしそれは腕を掴んだ姫希さんによって防がれた。

「……いつから浅野君のこと名前で呼ぶようになったの」

ぼくは彼女が幼馴染であるにも関わらず浅野君呼びをしているのを知っている。つまりこれは嫉妬だ。

ぼくはペットボトルを強く握りしめ、強気な口調で返す。

「つい最近。姫希さん、じゅりあちゃんのイジメ率先してやってるんだね」

「なんか文句ある？」

白々しい反応に怒りがこみ上げた。じゅりあちゃんが虐められるよう望んだのはぼくだ。そう仕向けたのもぼくだ。でも姫希さんに虐める資格なんてあるんだろうか。彼女は昔虐められていたと言っているのにも関わらず、今度は虐める側になって同じことを繰り返そうとしている。

こんなの間違ってるよ。ぼくはこんな結果を望んでいたわけじゃない。

「おかしいよね。だってじゅりあちゃんは姫希さんに何もしてない。なんで虐められなきゃいけないの」

「因果応報。やられた分が返ってきただけじゃない」

悪いとも思っていない様子で彼女は言った。姫希さんだって悪いことしてるのに、何が因果応報なんだろうとぼくはむしゃくしゃして彼女の思いの核心を突く発言を決意する。

「ねえ、そんなに残念だったの？学秀がE組にばっかり来て」

「……うるさい」

「でもごめんね？返してあげない」

怒ればいい。苛立っても状況は何も変わらないんだから。

姫希さんは怒りに唇を震わせていた。

「渚ちゃん、私に殺されたいの？」

何でみんな揃って同じこと言うんだらうね。

ぼくは少し退屈し、冷めた目で相手を見据える。ぼくの殺気は相手を殺そうとしていたと思う。ぼくは1度見殺しにする意味で人殺しをした。茅野を見殺した。そして自分をも殺した。

「殺したことなんてないくせに」

「……っ！」

その様子を殺せんせーと烏間先生が見ていたことにぼくは気づかなかった。

（あの殺気……：そういうえば渚さんはスペイン語を話せましたねえ。少し様子を見るとしますか）

元殺し屋の教師はようやく理解した。今まで勘違いしていたある事実に。

\*

E組に到着してからぼくの頭の中は一つのことではいっばいだった。心を落ち着けて間違えないようにと頭を働かせる。何しろ初めてだし、どこまで通用するか分からないし……

ビッチ先生がぼくに親指を立てている。それに後押しされてぼくは帰ってきたばかりの彼に声をかけた。

「学秀」

人差し指でつついて振り向かせる。学秀は何の用だろうという顔をしていた。

「ネクタイ捻じれてない？」

「え、そうか？」

「ちよつとじつとして。結ぶね」

ぼくは学秀の正面で彼のネクタイを丁寧に解き、もう一度結び直した。本当は捻じれてなんていない。だが、ビッチ先生曰くネクタイを結ぶことに意味があるのだという。

何これなんか恥ずかしいなあ。周りの視線を少し感じ、ぼくは顔を俯ける。

「よし、出来たつと」

きつちり結び直し、ぼくはにっこりと彼を見て微笑んだ。学秀は「悪いな」と軽くお礼をいい、その場を離れようとする。ぼくは慌てて彼のシャツの裾を掴んだ。

「えつと学秀、明日返すからパソコン貸してくれないかな？」

「それはさすがにだめだな」

ぼくの言葉に瞬時に首を振る。ハニートラップ効果は期待薄だったか。だがこれはプランA。まだ手はある。

「重要な情報が幾つかあるからね」

「そっか……じゃあ殺せんせーのデータだけは？」

ぼくは学秀を見上げ首を傾げた。学秀はうつと言葉に詰まらせて考える。

ドア・イン・ザ・フェイス・テクニック。最初に大きな要求をして次に小さな要求をすることで簡単に要望に応じてくれるという手法だ。ハニートラップよりずっと簡単にできるし、もともと学秀は押しに弱いタイプだ。前の時だって犯罪レベルの潜入にすぐ協力してくれたこともあり、もともと成功するとは思っていた。

「そうだな、データだけなら。今日1日だけ？」

「うん。学秀ありがと！」

満面の笑みでお礼を言い、ぼくはデータを入手して席に着いた。結局色仕掛けらしきことはほとんどしていないが、入手出来たのでかなり満足している。

ビッチ先生のところに行き、それを持っていくと何故か『学秀も不憫ね』



とスペイン語でぼやいていた。彼女も良いところがあって、お礼になんと高級マカロンの詰め合わせ12個セットをくれたのだ。乙女心(？)を理解しているようで感心してしまう。

マカロンは茅野、それからビッチ先生のところ、話を聞きに行くときにお馴染みのメンバー、矢田さんと倉橋さんに一つずつあげることにした。

マカロンを食べているときは嫌なことを全て忘れるぐらい幸せだった。

中間テストのはなし。

ハチマキを巻いた殺せんせーの分身たちが教卓の前で一斉に言った。

「「「ではみなさん、始めましょう」」」

「「「いや、何を？」」」

「テスト前の強化テスト対策授業です。それぞれの苦手科目に先生が個別で対応します」

「丁寧に教科別にハチマキとか……………って何で俺だけナルトなんだよ!!」

寺坂君が自分の扱いに腹を立てて大声をあげた。

「僕のハチマキには道って書いてあるんだが」

学秀が芯の通った声で殺せんせーに言う。

道？道から始まる教科……………

「道徳……………」

杉野がぼそりと呟く。ぼくらはああと納得した。しかし、どうも今日は学秀へのみんなの態度がよそよそしい。この前の一件からだろうか、彼を部外者のように扱うクラスメイトがほとんどだ。

「浅野君はE組の生徒ではないので個別指導は道徳のみにしました。残りの教科は頑張って自習してください」

薄っぺらい無表情の顔文字を貼り付けた殺せんせーは何やら本を取り出した。

殺せんせーでさえこの対応。やはりこの前のE組を絶対に本校舎に戻させないかのような宣言には思うところがあるようだ。ぼくだって浅野学秀という人物をよく知らなければ態度をがらりと変えたと思う。

「2週間後だね、中間テスト」

ぼくは呟いた。茅野が「テスト憂鬱だなく」と横で突っ伏している。

中間テストは確か理事長の妨害でテスト範囲が大幅に改竄されるんだっけ。やっぱりE組はいつも報われない。

『渚ちゃんがA組に戻って来ればいいのに』

あの顔は本心だった。学秀に戻ってきてほしいのは分かるけど、それでも嘘は吐いていなかったんだ。学秀が友達としてぼくを心配して監視役なんてものを作ったのは理解している。彼だってE組に連れて来られて迷惑してるかもしれない。

戻ろうと思えば、簡単に戻れるんだよなあ。

「渚さん、聞いてますか?」

「え!あ、うん。そのxが

なんだ

よね?」

数学の攻略を単純かつ明確に解き明かすと殺せんせーは朱色の丸を顔に表示して褒めた。

「すばらしい、正解です!範囲分は全て理解してるようですね。せつかくですからもうちよい先行ってみましょう」

「分かった」

「ではまず次の範囲につい

にゆやつ!」

先生の残像が乱れた。しかも両側の頬がいつぺんに歪んでいる。後ろを振り返るとカルマ君と学秀がナイフを殺せんせーに向けていた。クラス全員がお前もかという目で学秀を見ている。

「2人ともいきなり暗殺しないでください!それ避けると分身にまで影響がでるんですよ!」

「へえ〜意外と繊細なんだ〜この分身」

「興味深い話ではあるな」

しかし2人にE組全員の抗議の波がおしかかり、仕方なく2人とも勉強せざるを得なくなった。学秀は殺せんせーによる道徳の授業をBGMに他の勉強を自習している。授業が終わると、みんなはどことなく学秀を避けるようにして帰っていった。いつもなら放課後の暗殺を相談しに来る男子勢も今日は彼に近寄りもしない。

唯一集会に居なかったカルマ君は大して気にしていないようだが、そんな彼も今日は早々に帰ってしまった。

学秀は少し元気がないように思える。背中からは少々の悲壮感が漂っていた。ぼくはこういう時に何て声をかければいいのか迷って、

ぼくなりやの答えを見つけて声をかける。「ねえ」と背中をつつくと彼は目を少し見開いた。

「……渚」

「スタバ一緒に行かない？」

ぼくの出した結論は食べ物だった。美味しい物を食べたら気分転換になるだろうという意味でのチョイスだ。学秀は甘い物を好まないが、コーヒーは好きなのでちょうど良い。

しかし学秀はぼくからこんな誘いを受けるとは思ってもみなかったらしく、更にクラスのみんなが少しヨソヨソしいこともあつてか疑り深く尋ねた。

「僕より女子と行けばいいんじゃないのか？」

「学秀がいい」

「あのなあ、これでもテスト前だから渚も勉強した方がいいと思うが」  
勉強ならかなりしたよ、1周目で。心の中でそう叫んだ。

付け加えると、殺せんせーの個別指導はぼくの予習している範囲があまりに広すぎるために、現在では中3の後半で習った内容にまで達してしまっている。もう自分が優秀過ぎることは充分分かった。

「だってシフォンケーキ食べたいんだもん」

理由になっていない理由を述べ、ぼくは唇を尖らせてシフォンケーキの美味しさを解説し始める。

ふわふわの柔らかな生地を生クリームを付けながら食べていくあの美味しさは並大抵のケーキとは異なる。さらに抹茶クリームフラペチーノを飲むと味のハーモニーが口の中で（以下略）

「仕方ないな。今回だけだ」

「うん！」

「帰りにスタバでシフォンケーキ食べるっ！って懇願されたら行くしかないしね」

学秀がぼくの声真似をして見せた。ぷいと顔を背けてそれを否定する。

「……ぼくそんな言い方してないし」  
「した」

「していないってば」

教室から出て廊下を歩く。ふと教員室のドアが開いていたので気になってそちらを見やると、そこには理事長がいた。前にもこんなことあったなんて苦笑して陰に隠れて様子を伺う。

「何でここに……っ！」

「学秀しーっ！静かに」

理事長は殺せんせーと何やら話しているようだった。内容は恐らく前と同じである。

「何とも悲しいお方ですね。世界を救う救世主となるつもりが、世界を滅ぼす巨悪と成り果ててしまうとは」

「世界を救う救世主……？」

学秀が眉を顰めた。ぼくは彼が何を言っているのか分かった。

……理事長はこの時既に知っていたのだろうか。殺せんせーが地球を壊そうとしているわけじゃないことや、3月には死ぬ運命だということを、彼は知らされているのだろうか。それはぼくには分からないことだ。理事長ほどの人なら殺せんせーがどう生まれたのかについて8割ほどなら理解していたのかもしれない。

「まあ私はよほどのことがない限り暗殺にはノータッチです。十分な口止め料もいただいていますしね」

「助かっています」

鳥間先生は口止め料の額を思い出したのか苦い顔をしていた。一体いくら払ったのかぼくには想像がつかなかったけど、理事長のことだから多額の金額を請求したんだろうなと思った。

「随分と割り切っておられるのね。嫌いじゃないわ、そういう男性」

ビッチ先生がちよっとした甘い声を出すも、理事長は「光栄です」と一言述べただけだった。彼にそんな手が効くわけもない。

「ところで、先日A組の浅野君が行った署名書の内容を学校側は認めることにしました。E組の担任であるあなたには伝えておいた方がいいと思ひまして。知ったところでどうこうできるものでもないですが」

「と、申しますとE組生徒の成績が上がらないようにするということ

ですか？」

今まで黙っていた殺せんせーがようやく口を挟む。それに対して理事長は冷酷な目で殺せんせーの言葉を否定した。

「成績が上がる分には結構。しかし、強者の努力は敗者の努力を簡単に打ち破るものです。それは時として残酷なまでにね。中間テスト期待してますよ」

とても渴いた「期待」は殺せんせーを超生物からただの教師にしてみました。この学校では万能な殺せんせーも自由に身動きは取れない。E組のスペースは狭く、ぼくらには権利がないからだ。ましてや殺せんせー以上の教育者である浅野理事長はその分野だけで見たら怪物だ。

「そうだ、殺せんせー。1秒以内に解いてください」

理事長は帰り際に殺せんせーに知恵の輪を投げてよこした。

「ええ!?今ですか?!」

殺せんせーは超高速で動き回り、複雑な知恵の輪は触手に絡みついた。

「噂通りのスピードだ。確かにこれならどんな暗殺でも避けられそうです。でもね」

理事長は薄っぺらい見せかけの笑みを浮かべ、殺せんせーを見下ろした。

「世の中にはスピードで解決できない問題もあるんですよ」

教員室のドアが開けられ、ぼくらは慌てて傍に隠れた。廊下に隠れる場所はないのだが、聞いてはいけない会話を盗み聞きしてしまったように思えたからだ。

案の定すぐに気づかれて理事長は小さなぼくを見下ろして取って付けた笑みで挨拶をした。

「久しぶりだね、大石さん」

「お久しぶりです、理事長」

ぼくはペこりとお辞儀をした。こうして会うのは学秀がカンニングの冤罪を証明してくれた時以来だ。

「浅野君、この前の集会は非常に良かったよ」

「……わざわざ理事長がここに来るとは思いませんでした」

理事長は心外だなと言わんばかりに肩を竦めた。何を思ったのか学秀はぼくの前に立ち、格好としてはぼくを守っているような立ち振る舞いだ。

「新任教師を見に来ることに何か問題でも？」

学秀は理事長を鋭く睨みつけた。

「他に用があるんでしようが」

「よく分かったね。浅野君、君の役目はもう終わったんだ。A組に戻りなさい」

「そんなこと僕は」

「嫌です！」

ぼくは何も考えずに声を上げた。相手が理事長だということも忘れていた。とにかく学秀がA組に行ってしまうことを考えたくなかった。

カンニングの濡れ衣を掛けられそうになった時、唯一の救いだっただけは学秀がぼくのことを信じてくれたことだった。全てに絶望したのに、学秀に絶望することは決してなかったし、この先もないような気がした。

学秀がE組に来たことに驚きはあったけど、喜んだのも事実だ。まだ味方でいられると思ったから……敵になってほしくなかったから。

「ほう……理由は？」

理由？ そうだ、何でだろう。クラスメイトだから？ 暗殺に秀でてる仲間だから？ いや、ちよつと違うなあ。こういうの何ていうんだっけ……

「学秀は、友達ですから」

そう、友達。学秀は友達だ。

ぼくは理事長をしつかりと見つめていた。彼は数秒の間無表情で固まっていたが、何が可笑しいのかぶつと吹き出した。

「……笑わないでくださいよ」

ぼくは気が抜けて学秀に同意を求める。そこには何と言ったらいいのかわからない複雑な顔をした彼の姿があった。

え、ぼくそんなに変なこと言ったかな？

「これは失礼。まさか真面目な顔で友達だからと言われるとは思ってなかったものでね……………進展はないということかな」

「っ、余計なお世話だ」

「大石さん、君がA組に戻れば全て解決なんですけど……………止めておきましよう。自分からE組に行った生徒は大抵何かしら理由があるものですしね」

あれ、ひよつとしてこれバレてる？さすがに考え過ぎだよね。

ぼくは首をぶんぶん振り、愛想笑いをしておく。

「……………やっぱり自分からか」

学秀が一人で納得する。彼に事情を説明したことがなかったのでも今初めて知ったのかもしれない。

「まあいいでしょう。ところで浅野君、穴戸先生が君にA組の勉強会をしてほしがっていたよ。テスト前ぐらいA組で過ごすべきじゃないかな?」

「しかし」  
「学秀」

ぼくは彼の声を制した。今のE組は学秀に悪感情がある。しばらく様子をみて、学秀がいない時に説得するのが吉だ。

「ぼくもE組のみんなの怒りが鎮まるまで、学秀はA組にいた方がいいと思うよ」

ぼくに言いくるめられて流れで領いてしまった彼に理事長は満足そうだ。

「さて、私はこれで失礼しよう。少しやりたいことがあるのでね」

そう告げて理事長はぼくらを通り越して外に出た。ぼくと学秀に沈黙が訪れる。

「学秀?」

「何だ?」

「お腹空いちやっただ」

学秀は呆れた顔で「行こうか」とぼくを引っ張っていった。山道を歩くのはぼくら2人にとっては大してきついものではない。何故ならどちらとも日頃運動しているからだ。



「スタバってどこの？」

「ほら、駅前にあるやつだよ……あ」

本校舎の門付近を通りかかると、柵ヶ丘の制服を着た女子たちがぼくらを見てヒソヒソと話していた。よりにもよってまたA組だ。

この女子たちは大抵文化部なので今日部活はなく、門の前で運動部の男子たちを待っているのだろうというのがぼくの推測だ。いつも本校舎の門付近を陣取っているが、今や3年A組の女子生徒という扱いなので誰も文句を言えないのである。

「浅野君、またあの子というく」

「E組に入ったのに調子に乗ってるよ、あいつ。うっぎー！」

残念なことに女子たちのヒソヒソ話というのは案外大きい。筒抜けになっている会話にぼくはため息を吐いた。

「あいつら同じクラスの……」

「去年ランチしたのとはほぼ同じメンバーだよ」

いないのは1人ぐらいだ。ぼくは何も考えないようにして彼女たちを通り過ぎる。視線が痛かった。前に囲まれて髪を切られそうになったことを思い出す。

「……」

学秀の手がぼくの手に重なり、ぼくは素っ頓狂な声をあげた。

「怖いんなら繋いどけ」

「別に怖くなんか……」

ぼくがぼそぼそと否定するが、学秀は意地っ張りだなというように肩を見やった。

「肩が震えていた」

「……震えてたかな？」

自分の肩を見るも、震えているなんてことは全くない。逆に何だかホッとしている自分がいた。

スタバに着き、手をそつと離す。シフォンケーキがガラスケースの中に入っているのを見てごくりと唾を呑みこんだ。

「シフォンケーキと抹茶クリームフラペチーノで、えっと、ホワイトモカシロップに変えてパウダー多めをお願いします」

矢田さんがこれが1番美味しいと言っていたのを思い出し、そうかスタマイズする。

「そうだな……本日のコーヒー。会計一緒に」

そう後ろから学秀が言った。

「いいよ、ぼく払えるし」

「こういうところは男に払わせるべきだろう」

これでも男だよ！

そう言いかけて、ぼくは自分が女子だということに気がついた。クレジットカードで払う彼にぼくはあんぐりと口を開け、中学生つてクレジットカード使えたつけと考える。学秀なら持っていてもおおかないけど。

しばらく経って飲み物2つとシフォンケーキの乗ったお皿が出されたので、トレイで運ぼうと手を伸ばすとさっとそれを学秀が奪い取った。紳士だ。

席に座ると飲み物の入った容器にストローを挿しこんだ。冷たい抹茶の味が喉を伝わって顔をふにやりと緩める。

生きててよかった！2周目だけ！

その様子を微笑ましそうに学秀が見ていることに気がついた。

「どうしたの、じつと見て」

「渚は甘いもの食べている時が1番幸せそうだと思ってな」

「学秀は苦手なんだったね。コーヒーもブラックしか飲まないし、菓子パンもあんまり食べない。辛いのは得意でしょ？」

学食で辛いと評判の麻婆豆腐を平気で食べていたことを思い出し、言うとは驚いたようだった。

「よく知ってるな」

「2年も一緒に居たら大体分かるよ」

「渚は観察眼があるからな」

否定はしない。ぼくの場合、決定的な欠点のせいで自分に降りかかる災難は避けられないようだけど。

シフォンケーキをフォークで一口食べ、ぼくは頷いた。その時に彼の意識の波長が見える。

「そうかもね。だからかな、分かるよ。学秀がぼくに聞きたいことがあるってことも」

学秀は「ぼれたか」と小さく漏らし話を切り出した。それは思っていた通り理事長の話の続きで、A組のことについてだった。

「渚はA組に戻らないんだろう？それだけの成績があるのに高校受験をし直すのはとても非合理的だと思うんだが。A組なら内部進学できるのに」

「そこから良い大学にも行きやすいつて？」

「当然そうなる」

当たり前前の話だ。E組にいるみんなだって好きで受験するわけじゃないだろう。せっかく私立の中学校に入学したのにまた高校受験をしなければいけないなくなるんだから。

「すごく魅力的だよね。でも、ぼくがやりたいものはこのルートじゃ絶対に無理なんだ」

「なりたいもの？」

「それはまだ秘密。E組の方が楽しいっていうのも理由だけどね」

シフォンケーキはいつの間にか無くなっていた。そういえば目的だった学秀を元気付けるのを忘れていたけど大丈夫なんだろうか。

\*

翌日。授業にやって来た殺せんせーはなんとE組生徒を3倍ほど上回る90人にまで増えていた。そういえば殺せんせーって1人換算でいいのかな？タコ似だから匹換算かもしれないし、1殺せんせーって換算かもしれない。

「先生頑張って増えてみました」

(増やしすぎだろ?!)

分身の中にはハチマキではなく忍者の被り物を付けた殺せんせー、頭にピンクの丸い棒を2つ付けた殺せんせーに、ニコちゃんマークそのものな顔をしている殺せんせーまでいた。ちなみにぼくに教えてくれる3人の殺せんせーは1人がハチマキで他の2人は猫の顔をした先生、奥田さんの毒薬を飲んで無表情になった殺せんせーだ。

「渚さん、その範囲も分かるんですか?!」

リーダーであるハチマキ殺せんせーが言った。

「も、もうちよい先!」

「続いてはこの範囲です!」

他の2人がどこからか高校1年生の参考書を取り出してぼくに解説し始める。

「……殺せんせー、もうそれ中3の範囲超えてるから」

(一体どこまで予習したの?!)

周りの視線がだんだん超人を見る目になっていざことにぼくは冷や汗をかいた。目立ちたくないのに目立っている気がする。

授業がひと段落つき、殺せんせーがバテしていると茅野はぼくに質問を投げかけた。

「渚、今日浅野君休み?」

カルマ君の隣の席は空席。ちよつかいをかける相手がいなくなり殺せんせーにナイフをぶつ刺そうとしていたカルマ君が欠伸をしている。退屈なのだろう。

「ううん、テストまでA組にしばらくいるんだって」

「ほつとけよ、あんな裏切り者のやつなんか」

前原君がそう言い、他の生徒たちも頷いた。

「仕方ないよな。もともとA組にいるような奴、E組には合っていないだよ」

杉野君がナイフをぐにやりと曲げ、周りに同意を促した。ぼくはそんな彼のナイフを取り上げ、杉野君の目の前スレスレに振り下ろす。

「本当にみんなそう思ってるの?」

「天使ちゃん……」

「杉野君のキャッチボールの練習によく学秀付き合っていたよね。腹立つぐらい上手いんだっけ」

「え、あいつサッカー派……だろ？」

そう漏らしたのはサッカーファンでよくチームの選手について学秀とやり取りをする前原君だった。

「え、テニスじゃないの？」

元テニス部の矢田さんが首を傾げた。彼女は学秀のテニス部時代を知る数少ない1人である。

「E組での話題作りのために何でも揃えているんだよ。早く馴染みたいからって。だからみんなの助けになることは何でもするんだって言うってた」

「そ、そういえば私の毒薬作りも手伝ってくれました！」

奥田さんが毒薬を掲げる。それにクラス全員は浅野学秀が自分たちと仲良くするためにしてたことを思い出した。

「うちのラーメン屋に週一で来るぜ」

と村松君。彼の実家は売れないラーメン屋で、そのアドバイスをしてくれたと感謝していた。

「重い荷物持つてると運んでくれるよね」

茅野が言うと、女子が盛んに頷いた。このクラスのキングオブ紳士は磯貝君と学秀で票が分かれることだろう。

「学級委員の仕事たまに手伝ってくれるのよね」

片岡さんがしみじみと言った。

「そっぴやAVのモザイク消してくれたな……」

岡島君は顎を触りキリツとした顔で言う。

「岡島君は何させてるの?!」

岡島君は見事に女子によって処刑された。

「先生が金欠の時奢ってくれました」

殺せんせーが嬉しそうに言った。ようやく体調が戻ってきたようだ。

「今まで一度だって学秀に差別された人いる？E組のくせにって言われた人、この中にいるの？」

ぼくは周りを見渡した。誰一人として差別されたことを主張する者はいない。

「浅野がいいやつなのは分かったよ。だけどよ、これで俺らが本校舎に戻るのには絶望的になったよな」

1人が言い、他の生徒たちも現実を突きつけられる。いくら学秀がいい人だろうと、問題は学秀が行ったこと。彼の行為のせいで本校舎の生徒たちはやる気がみなぎっているのだ。

「でもあたしたちには暗殺があるし」

「勉強はほどほどでいいよ」

「そうそう、暗殺やってた方が楽しいし」

全員が口々に妥協しあい、クラスにうす暗い空気が流れた。

そうだ。この頃のみんなはまだ勉強を頑張ろうなんて思っなくて。本校舎に戻る気もないから成績を上げるより殺せんせーを殺すことの方がよっぽど重要なことだったんだ。

「浅野君がE組のことを考えていることは分かりました。先生的には腹立たしいものでもありますが……彼もこのクラスの立派な暗殺者です」

「殺せんせー……?」

ぼくは先生の表情が暗いことに首を傾げた。怒りの感情が透けて見える。

「……いえ、彼の方がよっぽど暗殺者の資格がある」

「おい、どういうことだよそれ」

誰かがポツリと言った。その言葉の意味をぼくは分かっている。

「皆さん、放課後に校庭に集まってください」

その後起こったことは1周目と全く同じだった。全員が50位以内に入らないと出て行くと言って先生の作った竜巻が校庭を綺麗にお手入れし、先生は宣言したのだ

「第2の刃を持たざる者は暗殺者の資格なし」と。

\*

「総合順位2位おめでとうございます、渚さん」

「うん、ありがとう」

テスト用紙をぼくに渡す殺せんせーの声には明らかに活気が足りなかった。それもそのはずだ。理事長は今回もテスト範囲を大幅にずらしたのだから。2周目では学秀の手が届いているから安心していたのに、また同じ展開になった。

前の席では明らかに杉野君が大きなため息を吐いていた。

「この学校の仕組みを甘く見ていた先生の責任です。皆さんに顔向けできません……」

落ちこむ先生を対先生ナイフが襲った。カルマ君の攻撃だ。

「へえ、顔向けできないんじゃないや俺が殺しに行くのも見えないね」

「カルマ君！先生は今落ち込んで——「俺範囲変わっても関係ないし」

今回の総合順位5位のカルマ君が余裕そうにテスト用紙を殺せんせーに見せた。

「わ、すごい」

「学年2位が何言ってるのよ」

ぼくの発言に片岡さんがツツクむ。

「渚ちゃんもだったよね、先生が余計な範囲まで教えたせいで全く影響受けなかったのって。でも本校舎に戻る気ないよ、俺ら。E組にいた方が楽しいし」

こくりと頷き、銃をガチャリとセットする。もはや暗殺はぼくの日常だ。

「で、どうすんの？逃げんの？それって結局俺に殺されるのが怖いだけなんじゃないの？」

殺せんせーはカルマ君の挑発に乗りやすい。現にこめかみがヒクヒクとなり、顔色は赤と黒を混ぜたような怒りの色となっていた。み

んなはそこで解決策に気づいたようだ。

「そつかあ、先生殺されるの怖いんだ〜」

「なんだ〜怖いなら怖いって言えばいいのに!」

「そんなわけないでしょう! 期末テストであいつらに倍返しです!!」

「「あはははは!」」

みんなの笑い声が教室に包まれる。その笑い声を怒鳴り声が破った。

「ふざけるな!! 今度自分の主義のために同じやり方したら殺す」

ブチツと電話を切る音がし、ぼくらは学秀に注目する。

「今の、って……」

「理事長だ」

ですよね。 って今のアウトでしょ?!

学秀はいつにも増して怒っていたようで、自分がしたことやバカを理解していないように感じた。

「理事長に殺す発言してどうするんだよ……」

「学秀君やるねえ〜」

中村さんがウインクした。気のせいかみんなの学秀への態度が和やかになった気がする。

「……まあ、問題はまた別にあるけどね」

「どうしたの渚?」

「何でもない」

茅野の発言にそう返すも、ぼくは顔を強張らせてテスト用紙を見ていた。テスト問題は範囲こそ同じものの、1周目と問題自体は大きく異なる。中学2年のテストの時には起こらなかったことだった。

これがバタフライエフェクトだとしたら。ぼくは全てが良い方に変化することを願った。



## 修学旅行のはなし。 1時間目

ゲームセンター、またの名を暗殺者修行の地。そこまでは大袈裟だが、軽い射撃訓練にはなるのでぼくはよく学校から離れた所に通っている。

ただ、ゾンビものは少し心臓に来るものがあった。ホラー系統は大丈夫な自信があったが、ゾンビのようにびっくりさせられる音を出すものは未だに苦手なのだ。

銃撃戦が無事終わり、あまり芳しくないスコアに唸る。実戦だともう少しできるはずなんだけど。いや、ゾンビが出てくるとそうは行かないのかな。

「渚さん？」

控えめな声がして、振り返るとそこには茶髪の少女がいた。手首にはシルバーブレスレットを付けており、手首には蝶のタトウーがある。出会ったら逃げた方がいい人の類いだ。よし、逃げよう。

ぼくがそう思い逃げる準備をした時、相手の顔をまじまじと見て誰なのかに気がついた。

「もしかして神崎さん?!」

「やっぱり気づかなかったんだ」

「……タトウーしてたっけ？」

腕にある黒い蝶のタトウーにぼくは訝しげに尋ねた。彼女は何てことなさそうにさざらりと告げる。

「これ、シールなの」

そんなのがあるんだ。

「学校と全く違うから分かんなかったよ」

「渚さんは天使のイメージ通りだね」

白いワンピースを着ていたからか神崎さんがそう言った。

「あはは……私服白多いからね」

天使だからってわけじゃないけど。

ぼくは心の中で付け加えた。死神みたいに闇に紛れる黒い格好よりも、ぼくは光に紛れる白い格好の方が向いているみたいだったか

ら。

「このゲームやってたの？」

神崎さんが興味深そうにゲームの画面を見た。何度かやったことがあるように思える。

「そうそう。神崎さんもやる？」

「いいの？協力プレイほとんどやったことないから嬉しい。渚さんって体育の銃練習かなり上手いから1度一緒にやってみたかったんだ」  
ここまで褒められると銃練習は力半分ですとまでは言いつらい。1年間もの経験が既に重なっていると力半分でも命中率が高くなっていた。初心者とは思えないその動きに烏間先生が「どこかで銃習ってたか？」と訊かれるほどだ。さすがにあなたから習ってましたとは言えず、ゲームで極めたというおかしな嘘を吐いた。それ以降はやり過ぎないように気をつけてやることにしている。

「そうかな？でもゲームだと当たらないんだよね。神崎さんお手本見せてもらってもいい？」

「私で良ければ……」

彼女は微笑んで銃を構えた。ぼくは少しドキドキしながら神崎さんの様子を眺め、3秒後以降はしばらく唾然としていた。彼女はポーカーフェイスのまま、銃を乱射した。その動きに無駄はなく、彼女は余裕そうに微笑んでいる。画面ではゾンビが大量に殺伐されていた。

ゾンビが可哀想になるぐらい強い！

「こんな感じかな？」

「「おお!!」」

周りに野次馬が群がっていたことにぼくは気づいていなかった。彼女が銃を元の場所に戻すと拍手が彼女を迎える。それに対して神崎さんは少してれくさそうに、それでも慣れている顔でぼくのところに戻ってきた。

「それじゃあよろっか。協力プレイ」

にこりと微笑んだ神崎さんにはN.Oとは言わせないという雰囲気が出た。個人プレイでの活躍を見せられて協力プレイで足を引くだけなんじゃないかとも思うけど、彼女にはそんなことは関

係ないらしい。

合計3回のプレイを終えた頃にはぼくの体力は全て消費されていた。ゲームでこんな体力に使うとは予想外だった分ダメージはでない。

「ねえねえ、お姉さんらちよつと遊ばね?」

「結構です」

何でこういう時に限って不良が湧いてくるんだろいなあ。

目の前の身長の高い男をちらりと見てため息を吐く。神崎さんに「行こつ」と出口に促し、外に出るとそこには更に数名の不良たちがいた。

「長沢さん、こいつらつすよ」

丸顔の男が背の高いリーダーに言った。タバコを吸った男がタバコ臭い息を吐き、ぼくは軽く咳き込む。

「お前らかかれ」

リーダーらしき金髪の男が指示を出す。合計4名の不良はぼくらに近づき、前と同じ手順で車に連れ込もうとしていた。ぼくの後ろに回り込んだ男に蹴りを入れ、普段携帯している小型のスタンガンを取り出した。武器さえ持てばこちらのものだ。

「何だよこの女!こんな話聞いてないぞ?!」

倒れた1人が敗者のうめき声を上げる。

ぼくは神崎さんを庇いながら不良たちの勝負にならない動きをかわした。そして神崎さんの手を取って走り出す。ここは下手に喧嘩に持ち込まない方がいい。逃げるが勝ちだ。

「よし、神崎さん逃げるよ!」

「あ、うん!」

ぼくらは早足で最寄り駅まで向かった。

「強いんだね」

「まあね」

でも彼らに勝ったことより、ぼくは1つ気になることがあった。

「おかしいなあ……」

神崎さんと接触するのならあれはリュウキ君たちのはずだった。

でも、あの4人の不良たちは会ったことも見たことすらもない。1周目の不良とは恐らく無関係の連中だ。そこは予測の範囲内として、気になったのは最後の言葉。

こんな話聞いてないぞだって？

ぼくらの話を一体誰に聞いたっていうんだ。

\*

修学旅行といえばイベントが盛りだくさんだ。行きの新幹線でU NOをして遊んだり、大部屋で夜更かしをしたり。

しかし、ぼくにとって1番問題なイベントは1つだった。すなわち、拉致である。それを防ぐための対抗策はもう考えてあった。

ぼくはガイドブックを片手に学秀に声をかける。

「一緒の班になろうよ、学秀」

2周目で学秀という思ったことだが、彼の体術は飛び抜けて秀でている。さらには頭の回転が速く、カルマ君と違って喧嘩っ早くないので頼りになる。ぼくだけでもどうにかできると思っていたが、学秀がいれば鬼に金棒だ。

しかし彼の意識の波長に小さな乱れが生じ、表情が少し薄暗くなる。

「……………すまない。僕はA組参加なんだ」

申し訳なさそうに謝る学秀を横目にぼくは膝から崩れ落ちた。

「そんなあ……………」

誘拐されそうな時の1番の頼みの綱が消えた。学秀なら不良なん

てすぐに蹴散らしてしまうだろうから期待していたのに、その計画が全てパーになったのだ。

「渚さん、落ち込まないで？ 私で良ければ、同じ班にならない？」

神崎さんが床にしゃがんだままのぼくに手を差し伸べた。ぼくは優しさにじーんと来て1つ返事で了承する。

ゲームセンターで会ってからというものの神崎さんとは高頻度で話すようになっていて、誘ってくれたのはそのためだろう。

「私奥田さん誘ったよ〜」

茅野がぼくにニコニコの笑顔で呼びかける。少し気分を取り戻した。落ち込んでいても仕方ない。他の手を考えなきゃ。

「いいね。あ、カルマ君も一緒の班にならない？」

「ん、おっけ〜」

「残り1人はどうするの？」

茅野に訊かれ、答えようと口を開くと神崎さんが思い出したように「忘れてた」と呟いた。

「杉野君と約束してたんだった。杉野君、この班でいいかな？」

杉野君は突然声をかけられたことに挙動不審になっていた。顔を真っ赤にしてあたふたしている。まさかここで声をかけられるなんて思ってもみなかったのだろう。

「え、う、うん！大丈夫！」

ということでは何の因果か結局前回と全く変わらない班メンバーになった。

「どこに行きたいって希望ある人いる？」

「私は京都のスイーツ巡りしたいなあ」

「いいですね！」

「あー俺も京都の甘ったるいコーヒー飲みたい」

「杉野君、甘いもの平気？」

神崎さんが杉野君に尋ねた。

「俺は問題ないっす！」

「何で敬語……」

ぼくは呆れて杉野君を見やる。彼は相変わらず神崎さんに夢中の

ようだ。

「スイーツっていうと祇園かな？」

来た。前回この流れで祇園に行つて拉致されたんだっけ。

Cal<sup>落</sup>m<sup>ち</sup> d<sup>着</sup>o<sup>け</sup>w<sup>ん</sup>、そして考えろ。

「京都駅中スイーツっていうのもあるよ」

「確かに。京都駅だとホテルにも近いよね」

「スイーツ以外で行きたいところあるかな？」

神崎さんがメモ帳に祇園と京都駅内と書き、皆を見渡した。

「まずどこで食べるかにもよるよね」

茅野の意見に女子たちは全面賛成のようだ。それに唯一杉野君だけが首を捻る。

「おいおい、メインは観光だろ？」

「何言つてんの、杉野。メインはスイーツ巡りに決まってるじゃん」

カルマ君が至つて真剣な顔で言った。

「そうだよ」

ぼくも首を縦に振つて同意する。

「うん、常識だよ」

茅野が自信満々に常識を説いた。その常識には大抵の女子とスイーツ好きの中でという注意書きを添えるのだろうが、彼女には分かつていない。

「あ、そうなの……」

目をぱちくりさせている杉野君に班員ではないものの傍観していた学秀がそつと肩を置いた。曰く、気持ちはよく分かると。

ほぼ女子で構成された班員+カルマ君は全員甘いもの好き。修学旅行といえば観光なのではという杉野の言葉は一蹴された。ここでぼくが男だったのなら少し話は違っただろう。現に前回は甘いもの巡りもいいけど無難に観光地もまわろうという結果に落ち着いたのだから。しかしそれは1周目の話。2周目ではぼくも甘いものに弱い女子の1人だ。

「ま、いつか。神崎さんと同じ班になれただけで正直充分だな」

「それは僕に対する嫌みと受け取っていいか？」

学秀は恐怖の笑みを浮かべていた。しかし杉野君はよく学秀と組まされるのとフレンドリースキルがあるため、「そういうんじゃないけどさ」と否定して苦笑いと完璧な対応だ。

「E組参加にすればよかったじゃん。渚ちゃんから誘ってくれたのに」

「5英傑の奴らに頼まれて断れなかったんだ。仕方ないだろう」

2人がこそそと話している間に食べたいスイーツを巡ってぼくらは言い争っていた。パフェ系統を食べたい派の茅野とカルマ君VS和菓子類を食べたい派、ぼくと奥田さんの口論だ。結果はどっちも行けばいいじゃない派神崎さんの勝利だった。杉野君は完全に蚊帳の外である。

「へえ、そんな風に支配してんのか」

「ただ、最近僕が居ないからかまとまりに欠けるところがあつてね」

杉野君と学秀の話はまた別の部分へと向かい、2人のみの空間で話している。聞くところによるとA組の支配について話しているようだった。そんなことを話す学秀も学秀だが、まさか聞く相手がいるとは誰も思うまい。

「女子はそれなりにまとまってるのに……おかしいな」

それは姫希さんが頑張ってるからだよ！気づいてあげて!?

ぼくはそう言いたいのをぐっと堪えて班の話に思考を戻す。結局みんな祇園か京都駅で迷ったようだった。

「祇園か京都駅かどっちにする?」

「ぼくは京都駅かな」

「へえ、何で?」

「実は祇園行ったことあるんだよね」

もちろんこの言い訳が通用するとは思ってない。そのためもう1つ理由を用意していたが、今回はカルマ君が居るのであまりそれは使いたくなかった。しかし仕方ない。

「私もあるけど、祇園は何度行ってもいいと思うよ」

「いや、その時に拉致事件が勃発してちよつとトラウマっていうか……」

「「拉致?」」

女子3人がキョトンとしてぼくを見つめた。カルマ君の反応が思ったより薄いことにぼくは安心する。

「た、大変だったんだね……祇園はやめとこっか」

明らかに気を遣った茅野が班の行き先を決める用紙に京都駅周辺と書き込んだ。

「京都駅付近で動くことにしましょうか」

誘拐された本人たちに言われると何とも言えない気分になるなあ。

「いいわね、ガキは。旅行なんて行き過ぎて今更って感じだわ」

ビッチ先生はやれやれと髪をかき上げた。

「じゃあビッチ先生お留守番しててよ。花壇に水やって」

岡野さんが投げやりに言った。それに続いて倉橋さんがビッチ先生にキャットフードを押し付ける。

「メルのことよろしくね」

倉橋さんの顔にはできれば連れて行きたかったと書いてあった。しかしそうも行かないのが修学旅行だ。新幹線の中に猫を連れ込むことなんて学校が許してくれるはずもない。

「やっぱり抹茶は外せないよね!」

「あと和菓子系統の店も行ってみましょう」

ぼくの班は今度はどこのお菓子を食べるかという話題に変わっていた。他の班の盛り上がりも似たようなもので、どのルートが暗殺に良いかというような話をしている。ビッチ先生はのけ者にされたように感じたのか突如大声を出した。

「私抜きで楽しそうな話しないでよ!!」

「ああもう!行きたいなら行きたいってはっきり言えよ?!」

前原君が面倒くさそうに言った。彼は女性の扱いには慣れてるとはいえ、さすがに疲れたのか呆れた顔をしていた。

「行ってあげるわよ!仕方ないじゃない!」

「メルどうするの?」

「メルは1人でも大丈夫だよ。至る所に餌やりしてくれる人がいるら  
しゅっ」



倉橋さんに小声で訊かれ、ひそひそ声で返事する。メルは倉橋さんのお気に入りの猫なのでかなり心配されているが、ああ見えて独立しているのがメルダリンという猫だ。呑気に教卓でくつろいでいるところを見ると既にあてはあるのだろうか。

「やれやれ。修学旅行とは……片腹痛い」

殺せんせーは舞妓の衣装に身を包んでいた。ピンクを基調とした着物が案外似合っていて、和風の傘ともマッチしていた。

「『ウキウキじゃねえか?!』」

「京都なんてマツハで行けんじゃん、殺せんせーは」

カルマ君がナイフを素早く刺し、その動きを先生がこれまた綺麗に交わしマツハで元の服に着替える。触手には大量の本、いや修学旅行のしおりがあった。

「1冊です」

「これ辞書だろ?!」

ぼくはページをめくり、ふむと関心した。ぼくが知りたい拉致の防止法が全て詳しく書かれている。これは暗記すべきだ。

「それとね、カルマ君。確かに京都に行こうと思えばすぐ行けます。でも先生はみなさんと旅行するのが楽しみなんですよ」

よくよく考えたら殺し屋に修学旅行なんてなさそうだもんなあ。

ましてやスラムの街では学校があったかどうか微妙だ。

ぼくはしおりの中に興味深い部分を発見した。

「ねえ、せっかくだからこのしおり参考にして2日目のルート決めない?」

ぼくの開いたページにみんなが顔を見合わせる。そこには「京都く暗殺の歴史く」と書かれていた。

\*

全ては準備万端のはずだった。パジャマなどの衣類は既に小さなキャリーバッグに詰めてあり、ブレザーのポケットには折りたたみナイフが生徒手帳と一緒に入っていた。

唯一忘れたことといえばその日に限って目覚まし時計をセットし忘れ、その日に限って定期券の期限が切れ、その日に限って電車が遅れたことだ。何度も繰り返すようで不快だが、何度だって言おう。

ぼくはその日に限って不幸だった。

集合時間から1時間半も経過した集合場所には人1人いなかった。とりあえず駅員さんを騙して改札口に入ってみるもどのホームが京都市行きなのかも分からない。

さて、どうしよう。

あるファンタジー小説を読んだ。その中に出てきた主人公は汽車の時間に遅刻し、車を飛ばして目的地に着いたのだという。しかし、残念なことに現実には空飛ぶ車なんてものはない。いるのはタコ型の超生物ぐらいだ。

そこから行動に移すのは早かった。スマホに入った殺せんせーの電話番号に電話をかける。聞き覚えのある電話の着信音が近くから聞こえ、ぼくは変な汗をかく。

目の前には大きな2メートルはある生物がカップケーキ屋の前で店員さんに注文をしていた。ガラスケースには幾つものカップケーキがあり、動物が乗っている可愛らしいものからイギリスのノーマルなカップケーキまで様々な種類のものがある。

「これとこれ……やっぱこれも外し難いですねえ。せつかくなので全部お願いします」

金遣い荒っ!!

「……殺せんせー」

「渚さん、ようやく来ましたか!」

「もしかして待っていてくれたの? てっきりみんな先に行ってると思った」

「先生ですから。おかげでこんなにスイーツを買ってしまいました」

殺せんせーの触手には幾つも紙袋がぶら下げられており、どれも有名なお店のスイーツばかりだった。どうもぼくを待つ間に買ったらしい。

「1時間以上も遅れてごめんなさい……」

「今ならまだ間に合いますよ! 先生の超スピードを持ってすれば不可能なんてありませんからねえ」

駅の外に出て、殺せんせーは前に行ったのと同じようにしてぼくを胸元に押し込み、空を飛んだ。爆風と共に空中に浮かび上がる感覚を思い出す。

前にもこうしてハワイに連れて行ってもらったっけ。

マツハのスピードで京都駅までの途中駅である名古屋駅に辿り着き、ホームに急ぐとちようど新幹線が到着したところだった。殺せんせーの計算通りだ。

「渚おはよ! 遅かったね。寝坊したの?」

「おはよ。そんなとこかな」

茅野はトランプを咄嗟に隠し、ぼくを隣の席に座るよう促した。席は向かい合わせにされており、女子たちと後ろの席に座る男子たちでトランプのゲームを楽しんでいるようだ。

一方殺せんせーは女子を中心としたお菓子好きに囲まれていた。

「殺せんせー何その大量のお菓子!」

「ヌルフッフッフ、皆さんスイーツには目がないようですねえ」

「もしかしてこれわたしたちに?」

「殺せんせー気がきくとこあんじゃん」

中村さんが紙袋の1つを取ろうとした。が、それを殺せんせーが触手で防いでしまう。

「いえ、これは先生用です」

殺せんせーは真顔で言った。ぼくらは一斉にブーイングの声を上げる。

「え〜」

「ずーるーいー」

「先生のけちー！もうしーらない」

女子たちの迫真の演技は殺せんせーを揺さぶることに成功した。本当にうちのクラスの担任はちよろい。とてもちよろい。

「待ってくださいいよみなさん！お菓子あげますからっ！」

「「いただきま〜す」」

お菓子争奪戦に参加したぼくがカップケーキを片手に席に戻った。そこではババ抜きが行われており、早々と勝ち抜いた神崎さんがお淑やかに微笑んでいる。

「あ、神崎さんトランプすごく強いんですよ」

奥田さんが目を輝かせてぼくに報告をする。そういう奥田さんは分かりやすく、顔に出やすい子の1人だ。それに比べると常時ポーカーフェイスの神崎さんは正反対と言える。思えば理系の奥田さんと文系の神崎さんにはこれといった共通点はない。ゲームの得意な神崎さん、苦手な奥田さん。理科の得意な奥田さん、国語の得意な神崎さん。

しかしながら、この2人の馬が自然と合うのは2人とも静かを好むタイプだからであった。E組は良い意味では賑やかで、裏を返すと騒がしい。そんな中であまり目立つことのない2人が仲良くするのは至極当然だったのだ。

最終的に奥田さんが何度目かの敗北を味わい、少し落ち込んだ表情を見せる。そこに茅野が大量の戦利品プリンを持って現れた。東京駅にある有名なプリンだったらしく、ほぼ全部搔かつ攫とっている。

「ちよつと喉渴かない？何か飲み物買ってこよー！」

茅野がスクールバッグから財布を取り出すと他の女子たちも自分も行くのと立ち上がった。

「私も行きます」

「私もいいかな？」

「じゃあぼくも行くよ」

誰かが席を立つとみんな仲良く行くのが女子の習性だよね。

ぼくは神崎さんとゲームの話をしながら歩く。男子高校生のグループとすれ違い、ぼくは偶然にもその1人とぶつかった。

「すみません」

目の前に居たのがこの前の不良だったことにぼくは小さく息を呑む。神崎さんも一瞬遅れて気づいたようだ。

「渚さん、今のって」

「うん。この前の金髪だった……そうだ、確認したいことがあるからスケジュール書いてあるメモ帳見せてもらえないかな？」

神崎さんはブレザーのポケットとスカートのポケットに手を入れ、ぼくにメモ帳を渡した。

「はい、どうぞ」

「あ、うん」

メモ帳が当たり前のように出てきたので少し面食らい、ぼくはスケジュールを確認した。前回とは全く違う西本願寺、二条城そして京都駅というチョイスはぼくの提案したものだった。

こうも1周目と違うと前みたいにスケジュールが筒抜けになるような事態は免れるわけだ。ぼくは胸を下ろし座席に着いた。そこで「あれ？」と異変に気付き自分のブレザーのポケットに手を入れる。

ポケットの中は空っぽだった。

## 修学旅行のはなし。2時間目

修学旅行2日目は朝から班別行動。ぼくらは二条城に来ていた。中でも二条城の庭園は別世界に来てしまったような気分になった。しかし、現実に戻って考えてみると旧校舎の裏山みたいなものかななんて哀しい感想が出てきそうになり口を噤む。あそこの裏山ほど自然豊かなところは多くないだろう。

「すげ〜な」

「杉野さつきからすげ〜しか言っていないよね」

杉野君の何度目かのコメントにカルマ君が突っ込んだ。そう言うカルマ君もまともな感想を言っておらず、庭園に来て最初の感想はどこが居眠りにちようど良いかという謎の発言だった。

逆に女子3人はあちこち見てまわりながら雑談を交わしており、男子よりも賑やかだった。

「このどろろが暗殺に関係あるんだよ?」

二条城を出て歩いていると、杉野君がこのルートの提案者であるぼくに質問を投げかけた。ぼくは肩を竦める。ここですぐに答えを言ってしまうてもいいのだが、あえて考える時間を与えようか。

「当ててみて」

「何でしようか?」

「二条城というと、大政奉還が思いつくけど他に何かあるのかな?」

奥田さんと神崎さんが考え込む中、カルマ君は大政奉還をヒントにしているとも簡単に答えを導き出した。

「分かった、新撰組だ」

「正解。新撰組は京都の小さな暗殺から大きな暗殺まで関わっているいわゆる殺し屋。だからE組にいる暗殺者の先輩みたいなものかな」

京都の殺し屋集団は恐ろしげではあるけど、殺し屋を目指す者としては憧れの存在でもある。最もあんな殺し方は絶対にしたくないけども。

「そっか、大政奉還で新撰組が警護した場所だったね。新撰組は女子に人気で小説の題材にもよくなってるんだけど、「燃えよ剣」が個人的

におすすめかな」

神崎さんは雄弁に新撰組について語った。彼女はE組の文学少女のようなもので、E組に来る前は図書室でよく彼女を見かけた。国語の成績が良いのはその読書量のおかげだろう。

「そうなんですか！小説疎いんですよね……」

そう眉を垂れて落ち込む奥田さんに神崎さんは自分の持つてるおすすめの本を今度貸すことを約束する。茅野はぼくに新撰組の中で沖田総司が1番好きなんだ！とキラキラした目で語っていた。そういえば茅野も神崎さんには劣るものの本を読む方だったつけ。

「それから、京都の暗殺で忘れちゃいけないのがもう1つあるよね」「もう1つ？」「」

奥田さんと茅野、それから杉野が口を揃えて訊き返す。カルマ君はなるほどねくとぼくを先頭にして歩く道から場所を推測したようだった。

「いちごパンツ」

「カルマ、何お前岡島化したの？」

「俺はあそこまで酷くないって。1582年本能寺の変いちごパンツつて覚えてたんだよね」

杉野君の頭をペチツと叩いてカルマ君は笑みを作った。

本能寺の変が起こった年号を覚えるのに有名な語呂合わせだ。

「ああ、中学受験の時よくやったよね。蒸れない服着て随行く妹子とか」

607年、小野妹子の遣隋使派遣だつけ。

「……いちごパンツは知ってたけどそれは初めて聞いたわ」

杉野君が興味深そうに口の中で語呂合わせを繰り返していた。

本能寺跡。石造りの板をぼくは見て、ふうんと声を漏らす。1582年。家臣の明智光秀が織田信長を暗殺する本能寺の変が起こった。今は平和で暗殺なんて滅多にないけど、戦国の時代や新撰組が居た時の暗殺は日常に潜むものだったのだ。

まるで今のぼくたちみたいに。

「なるほどなく、京都は暗殺の聖地みたいなもんか」

杉野君は納得して本能寺跡を何度も頷きながら眺めた。

「あーあ、歩いたから喉乾いた。甘ったるいコーヒードrinkに行こうよ」

「プリンもね」

「ぼくは抹茶とわらび餅」

ぼくらは次々に食べたいお菓子を上げていく。正直観光よりもスイーツ巡りに行きたくてうずうずしてきた。お腹も空いているしそろそろメインイベントに行ってもいいと思う。

「この班自由過ぎるだろ?!」

ぼくは神崎さんに視線を向けると、彼女は文句を言う杉野君に声をかけた。

「まあまあ杉野君。今から京都駅に戻ってカフェでも寄るのはどうかな?」

「か、神崎さんが言うなら!」

ちよろいなあ。そんなだと野球の心理戦にすぐ負ける気がするけど、野球少年君?

「賛成」

茅野とカルマ君が同時に言う。ぼくは小声で奥田さんに耳打ちした。

「奥田さんは大丈夫なの?」

「私はどちらかというど甘党ですから!」

胸を張る奥田さんに杉野がオワツタと頭を抱えた。

京都駅内、絶対に行く場所として二重丸の付いてあったカフェにぼくらは足を運んだ。混んでいるところをすんなり入れたことに運の良さを感じる。頼んだデザートは思ったよりずっと早めに到着した。

「この抹茶プリンアラモード美味すぎる〜!抹茶アイスにいちご、わらび餅まであるなんて贅沢だよ」

茅野が顔をふにやりと緩めて美味しさに浸る。その横では奥田さんが温かい抹茶とあんみつのセットを楽しんでいた。神崎さんも同じような組み合わせをいつもの淡い微笑みのまま食べている。

「コーヒードrinkは甘いに尽きるね」



ガムシロップをグラスに注ぎながら真面目な顔でカルマ君が杉野君に言った。テーブルには幾つかのガムシロップが散らかっている。「おいおいさつきからお前いくつガムシロップ入れたよ?!」

「え、何言ってるんの杉野。コーヒーには5つガムシロップ入れるのは常識じゃね?」

「あーもういいよー!」

杉野君はまたもやカルマ君に弄ばれていた。甘いものをあまり食べない彼はアウェイ感を味わっていた。でもいいや、神崎さんがいるし……と開き直るのが彼だったが。

「でね〜このお店私のオススメで」

店内に同じ柵ヶ丘中学校の制服を着た生徒の集団が入ってきた。その中に姫希さんの姿を発見してぼくはさっと目をそらす。しかし姫希さんはぼくに視線を向けていて、それはぼくの想像していたよりずっと穏やかなものだった。席に案内されてすぐ、姫希さんはスクールバッグを置きぼくらの席に近づいてくる。

「渚ちゃん、偶然だね〜!」

ぼくの両手を取って笑顔で彼女が言った。目を瞬いて相手の顔を二度見する。

「え、あ、偶然……?」

流れに流されておうむ返しに言う。姫希さんは笑みをさらに増幅させた。

偶然というわけでもないかもしれない。ぼくらのスイーツの好みはそこそこ近く、2年生の頃にもしも京都に行くならここに来たいという主旨の話をしたことがあったからだ。

「渚の友達?」

姫希さんのことをまるで知らない茅野がプリンを呑み込んでから目をぱちくりとしていた。

「友達っていうか」

生の茅野カエデさん」

「そうなの!よろしくね、転校

ぼくが答えようとする前に姫希さんは先に肯定する。何なんだろう。彼女の目つきも脈拍も意識の波長を読み取る部分はどこも好意

的じゃないのに、口から出る言葉と表情だけが違う。ちぐはぐさが気持ち悪い。

「私たちこの後祇園なんだ。渚ちゃんのところはどこ行くの？」

「西本願寺だけど……」

「そっか、西本願寺ね……今気づいたけど、赤羽君と渚ちゃんって仲良いんだね！すつごくお似合いだと思うよ」

わざわざこんなことを言うのに何の意味があるんだろう。ぼくは首を傾げて一応のつくり笑いを浮かべておく。

「あなたには関係ないじゃん。もうどっか行きなよ」

カルマ君がいかにも不機嫌そうに相手をギロリと睨んだ。それを貼り付けた満面の笑みで返す姫希さんは強い。

「酷いよ赤羽君。じゃっ、またね渚ちゃん」

カルマ君は相手が席に着くまで睨みつけたまま、しばらくしかめっ面をしていた。

「どうしたんですかカルマ君？」

奥田さんが不思議そうに聞く。カルマ君が喧嘩っ早いのは誰もが認める事実だが、女子に対してあんな敵意を剥き出しにするのは滅多にないものである。

「奥田さん知らないの、伊藤さんのこと」

カルマ君の顔色は少しずつ暗くなっている。低い声でそう言った彼にぼくは少し身震いをした。

「名前だけなら……いつも成績上位にいる人ですよね？」

「思い出した。女子バスケット部のエースって言われてる浅野の幼馴染だろ」

杉野君が抹茶アイスクリームを口に運び、何てことない調子で呟いた。学秀からA組事情についてよく聞かされている杉野君は何故だか本校舎についてぼくよりもよく知っている。ぼくが感心していると横でカルマ君が「それもそうだけどさ」とぼやいた。

「今中学の女子牛耳ってる事実上のボスだよ」

「……カルマ君詳しいね」

意外な発言にぼくは目を丸くした。これは同じ学年の大抵の女子

なら知ってるけど、男子にはあまり知られていない情報だからだ。杉野君も目を点にしていた。聞いたこともない話だったようだ。

「これでもそこそこ付き合いあったからさく。でも俺伊藤さん嫌いかな」

「何で？」

「代表でしょ、差別主義者の。案の定E組行きが決まった途端全く話してこなくなった」

「姫希さんだもんね……」

姫希さんが人と仲良くする理由は全部学年女子の支配のためであって、使える駒になりそうな人材しか相手にしないのは彼女にとってはごくごく当然のことだ。学力主義のこの学校では賢い生き方である。

「生徒手帳無くしたんだって？」

カルマ君が残りがほぼない抹茶パフェを食べながらぼくに尋ねた。ぼくは頷いて冷たい抹茶を飲む。スイーツ巡りにはドリンクももちろん重要であり、京都に来たからには抹茶尽くしにしたいのがスイーツ好きの意地だ。

しかし何故ここでこの発言なんだろう。

「でも大したことないよ。スケジュールとか一切書いてないし」

「名前と住所と学校名はバレるよね」

「うっ……」

「俺さあ、生徒手帳よく喧嘩で利用するから分かるんだけど、結構便利だよ、生徒手帳」

ああ、カルマ君は完全にそっち側だったね……

ぼくは遠い目をして相槌を打った。その間に茅野と奥田さんが少しズレたやり取りを交わす。

「プリンと毒って相性良いんでしょうか？」

「プリンが毒中和しちゃうんじゃない？」

プリン食べててあんまり考えてないのは分かるけど……プリンに毒中和する機能なんてないからね?!奥田さんはさつきから真剣に食べてるなと思っただれが毒と相性良いかのチェックだったんだね、

びっくりだよ！

横ではカルマ君がさっきの話を続きをした。

「律儀な奴だと生徒手帳に自分の連絡先書いてたりしてるよね〜」

生徒手帳には確か自分の個人情報を書く欄があり、そこに電話番号とメールアドレスをきっちり書いた覚えのある。ぼくはそれを思い出し咳き込んだ。カルマ君は半ば呆れ顔だ。

「それになーんか怪しいんだよね〜」

「怪しいって?」

「俺が考え過ぎなのかも……学秀君があんなこと言うから」

「学秀なんか言ってたの?」

「渚に何かあったら頼むってさ」

「過保護だなあ、学秀」

そういえばぼくは学秀に頼ってばかりだ。頼りになるからって守られているのが当然みたいな考えだったかもしれない。少し反省しなくちゃ。

「そろそろ行くか」

「西本願寺って近いんですよね」

「徒歩で行ける距離じゃなかった?」

みんなが和気あいあいとする中、ぼくは姫希さんたちのいる団体に目を移した。そこに姫希さんはいない。となるとトイレかな?

「ぼくちよつとトイレ行ってくる!」

「え、渚さん?」

女子トイレに一目散に駆け出した。室内から僅かに声が聞こえる。

「私? 私はじゅりあちゃんの友達だけだ。え

え、それじゃあよろしく」

「姫希さん?」

さつと表情を強張らせ、姫希さんがスーツと目を細める。聞かれたくない話でもしていたんだろうか。

「今の話聞いてた?」

「ううん」

さつきとは違う態度と声にやっぱりみんなが居たからあんな態度

をとったんだなと結論付けた。

「何その顔。友達ごっこ、もつと続けたかったの？」

ぼくはくつと拳を握りしめ怒りを堪える。

友達ごっこ。そうだ、姫希さんはいつだって友達ごっこをしてるんだ。誰とも本当の友達じゃない。

「それじゃあ渚ちゃん、観光楽しんでね」

\*

「えーっと、この道で合ってるよね？」

ぼくはスマホの地図を見ながら神崎さんに尋ねる。カルマ君がぼくの後ろからスマホを覗き込み、「合ってる合ってる」と返した。ぼくがホツとしたその時、横の細い小道に男がいることに気づいた。

「また会ったなあ、天使ちゃん？」

金髪の男はぼくの生徒手帳をかざしてニタアと笑っていた。ぼくは彼を睨みつける。ぼく以外の女子たちが後ずさりすると後ろにいる別の不良にぶつかかった。

「おっと、今度は逃さねーぜ？」

ぼくは自分を捕まえようとする一人を蹴り飛ばし、後ろに居る男の服を引っ張って転ばす。

「渚ちゃんやるね〜」

カルマ君もちょうど前にいる不良を殴り倒したところだった。次々に不良たちが倒されていき、全滅まであと少し……とその時、ぼくらの動きは金髪の男の一言で止まった。

「おいおいお前ら、お友達がどうなってもいいの〜?」

後ろを振り返ると茅野が首にナイフを押し当てられていた。

「茅野!」

「茅野ちゃん!」

そこでぼくはリーダー格の男が初めて見えた。いや、前までは視界には入っていたが、深く観察したことはなかったのだ。

「渚ちゃん、こいつ……!」

「分かってるよ」

意識の波長は一定して波が静か。油断しているようなこともないが、問題は別のところにある。相手を見た瞬間普段喧嘩や体術をしている場合力量が大体分かる。その男は少なくともカルマ君より強かった。ゲームセンターで会った時は全く分からなかったけど、あの時ぼくだけで喧嘩していたら絶対負けていたはずだ。

「カルマ君後ろ!」

ぼくはカルマ君の後ろに奇襲をかけようとした男の前に立ち塞がった。野球のバットが頭に当たり視界が反転する。

薄れる視界の中で金髪の不良に倒されるカルマ君と不良の表情を見て、ぼくは真実を理解した。

ぼくはこの人を知っている。

\*

起きてすぐ思ったことは頭がガンガンして痛いということだった。ぼくは車の助手席にいて、茅野と神崎さんが後部座席に座っている。

「渚!」

ぼくが起きたことに茅野が気づいて声を上げる。ぼくは自分の手

が後ろに縛られていることに気づいた。さらにシートベルトをしているので抜け出すことができない。

「ようやく起きたな」

「久しぶりだね、って言うべきなのかな」

「渚さん知り合いだったの？」

神崎さんの言葉にぼくは首を縦に振る。

「じゅりあちゃんのお兄さんだよね」

長沢という苗字は珍しくない。単体で聞いたら何も思わないだろう。でもぼくのことを誰かから聞いたと考えると、ぼくの知り合いに  
いる同じ苗字の子が思い浮かぶ。長沢珠理亜、じゅりあちゃんだ。

「ぼくたちをどうするつもり？」

「どうもこうも……女攫ってやることなんて1つだろ？」

「……サイツテー」

「あ？もういつペン言ってみろ」

後部座席の男が茅野の顎をぐいっと掴んだ。ぼくが身を乗り出すもシートベルトが邪魔で動き辛い。

「お前らどーせE組だろ？人生もう詰んだんじゃん」

「その彼女。前はゼーんぜん違う格好してたよな？よくゲーセンにも入り浸ってる。勉強ばっかの生活に飽き飽きしてたんだろ。親に勉強を強いられて、窮屈だったろーな」

「分かったように何を……」

ぼくが口を開くも、神崎さんは顔を俯けて何も言わなかった。まるでそれが真実かのように。家が厳しいのは知っていた。でもその他については何も分かっていたいなかったのだ。1周目の時は何も。神崎さんはクラスメイトだったのに。

「分かるさ。だって俺もE組だったんだから」

既に予測していたことに「やっぱり」と小さく呟く。ぼくのあだ名を知っている高校生で柵ヶ丘生でないのなら、それは元E組で外に追い出されたからに違いなかったからだ。じゅりあちゃんのお兄さん

なら尚更だろう。

「どん底に堕ちた奴にしかこの気持ちはわかんねーよな。蔑まれてスクールカースト最底辺に堕とされたE組にしか」

「努力しないで諦めてたくせに。どうせE組だからって思ってた何もしてこなかったんじゃないの？ぼくらと君は同じなんかじゃない！」

強めの言葉で相手を否定する。にやりと不吉な笑いを浮かべた彼は不幸に酔いしれていた。

「俺さあ、親父の2周目だったんだ」

ぼくはハツと息を呑み、相手の顔を見入るようにつめた。

「俺にあれこれ指図してきたくせに、自分の思い通りにならないと分かるときさっさと捨てやがる。親つてのは身勝手だよなア」

「……やめて」

「娘が出来たからって今まで頑張ってきた天使ちゃん、努力も考えずに家から追い出すんだもんな」

「黙れ！聞きたくない」

「なあ、天使ちゃんよお。俺とお前は同じじゃねーか」

後ろからクラクションの音がリズムカルに鳴った。現実を引き戻されて冷静さを取り戻す。

「またクラクションかよー！」

運転をする男が舌打ちをしてスピードを上げる。ぼくはかすかな異変に気づいた。何かが起ころうとしている。

「見てあれー！」

茅野の声でバックミラーから後ろの車を見る。そこには車を運転する殺せんせーの姿があった。

「「殺せんせー！」」

顔が真っ赤なのは運転中で性格が変わってしまったからだろう。そして何故か助手席にはカルマ君の姿があったのだ。

「先公だど!?おい、スピード上げろー！」

殺せんせーの顔が緑のしましまに変わる。ヌルフフフ、先生のスピードに敵うわけありませんねえ……とか思ってたそうだな。



そもそも殺せんせーの動体視力ならスピードを飛ばす瞬間なんて1秒もしないうちに分かるだろう。

「くっそ……でも次の曲がり角で狭い道に入る。そうなたらこっちのものんだ」  
つてクラクションうぜーよ!!」

何度も鳴るクラクションの音に彼は腹を立てていた。確かに殺せんせーはクラクションを鳴らし過ぎているようだ。運転中だから気が立っているのかな。

「ねえ、渚……あのクラクション何かリズムみたいじゃない?」

リズム……? ぼくは修学旅行の前に学秀としたやり取りを思い出した。

『モールス信号? 使うかなあ』

『言語を覚えるようなものだと思えばいい』

『これ以上覚えたら頭の中パンクするよ!』

『しないだろう。渚は危なっかしいからな』

学秀が身を案じてぼくに教えてくれた緊急用の暗号。使う側になる可能性は考えていたけど、まさか読み取る側になるなんて思いもしなかった。ぼくは目を閉じて音に集中する。

B A L L。ボール……野球ボール……杉野

!

「銃弾!」

瞬時に後部座席に座る2人がしゃがみこんだ。ぼくらのように日頃暗殺訓練を受けていて、銃を扱う者は銃弾という言葉に反応する。特に授業の前で一斉射撃をする時は人の弾が当たることなんてしよつちゆうである。だからE組生徒ならこの言葉に反応するはず。結果は予想通りだった。

「はっ……どうなってるん」

運転席に座る男の声は野球ボールで窓ガラスが割られる音にかき消された。運転手の不良が急ブレーキをかけるももう遅い。窓ガラスが割れてすぐ、黄色い触手が車のロックを解除したからだ。マツハで縛られた手が解放され、ぼくらは一斉にドアから出た。

「みなさん無事ですか?!」

黒子で顔を隠した殺せんせーが触手をくねくねと動かしあたふたしている。

「うん、合図くれたおかげで助かったよ」

「浅野君のアイデアのおかげですね！」

「え、学秀がいるの？」

ぼくがキョロキョロと辺りを見渡すと、車の側でボロ雑巾のようになっている不良たちと共に彼の姿を認識した。この数十秒の間に全滅させてしまったらしい。

「僕の知り合いに手を出すとはいい度胸だな。感心したよ。さて、どうしてやろうか」

「待って学秀何する気?!」

禍々しい雰囲気を纏う学秀を掴む。このまま放置したら絶対死人が出ると思つてのことだった。

「……拉致されそうになつたんだ。当然だろう」

「でもぼく無傷だから!ね?!」

「それもそうだな……生徒手帳を出せ」

学秀が不良たちを脅す姿を苦笑いし、神崎さんと茅野に目をやる。杉野君が2人に感謝されているところだった。

「ありがとう、杉野君」

神崎さんにそう言われて杉野君は顔を赤く染めていた。

「そういえば、何で車の居場所を突き止められたの？」

「修学旅行のしおり1243ページ。班員が何者かに拉致られた時の対処法。車のナンバーを見た場合1247ページ。先生に電話して探してもらいましょう。先生がマツハで探します」

カルマ君が修学旅行のしおりを開いてぼくに見せた。カルマ君が辞書みたいに重たいしおりを持ち歩くはずがないので、それは恐らくぼくのものだ。

「……浅野学秀にも連絡すること」

カルマ君が呆れたように書き込みを指差す。確かにそこには見慣れた綺麗な字でそう書き込まれており、学秀の電話番号も書いてあった。カルマ君はそれを見て学秀に連絡したらしい。

「ごめん、渚ちゃん。俺庇ってあんなことなっちゃって」

「ぼくは大丈夫。その傷、あの人たちに？」

少し腫れた頬を指差すと、カルマ君は一瞬固まった。自分の手をぴたりと頬に当て、ぼくの質問に答える。

「……そーそー。俺も仕返ししたかったんだけどなく。ま、あいつらのはっずかしく写真でも撮つとこ」

ぼくは首を傾げる。何故だか分からないけどカルマ君は嘘を吐いていた。

ともかくぼくらはこうして修学旅行の災難を乗り切ったのだった。

## 好奇心のはなし。1時間目

新幹線のグリーン車は快適だった。しかしその分退屈さが際立ってしまふのはA組の生徒がE組とは違う距離感だからだろうか。

「浅野君、気分悪いの？」

伊藤さんが僕に声をかけた。小学校が同じで親しみやすい彼女のことを僕は嫌いではない。そして彼女は僕の知る中で最も洗脳に成功した手下の1人だ。昔救ってくれた恩人というだけで彼女の行動範囲の中心には僕がいる。

「しばらくE組にいたから空気の違いに軽くカルチャーショックを受けてね。大した問題はないよ」

伊藤さんはE組を差別する側の人間なのでどちらとでも取れるような言い回しを敢えて使った。しかし彼女に僕の真意は簡単に伝わったようだ。納得して頷いている。

「あ、渚ちゃん……居ないもんね。E組参加でも良かったんだけど修学旅行ばかりは仕方ないか」

「珍しいな。伊藤さんがそんなこと言うなんて」  
「そうかな？」

渚と疎遠になっていたのでつきりE組差別をしているものだと思っていたが、実際はそうでもないようだ。

僕の見えない所で何かしらの変化でもあったのなら、それは良い兆候だ。

「僕が居た方がクラスをまとめやすいとか言うかと思っただけだ」

「浅野君の意思を尊重するのが私の仕事だからね。私で良ければ協力するよ？3日目だけでも一緒に行動できるように――」

「大丈夫だ。気持ちだけ受け取っておく」

「そう？分かった」

素直に席に戻る伊藤さんに僕は去年の彼女の失態を思い出した。A組女子をまとめるためにカンニング工作に協力したことだ。伊藤姫希という少女はある意味合理的であると僕は思っている。しかし

その反面、目的のためならどんなことを仕出かすか分からない面もある。僕の指示した女子のリーダー格でいる事を優先する気持ちは分かるが、それでカンニング工作に協力することになるとは完全に想定外だった。

結論として同じ事態は避けるため、またA組との交流を重視するために伊藤さんの助けは借りないことにしたのだ。

突如着信音が鳴り、スマホを耳に当てた。杉野の声がスピーカーから流れてくる。

『渚どこに居るか知らねー？なんか遅刻したみたいでさ』

『どういうことだ杉野』

『あ、殺せんせーと一緒に入ってきた。ごめん、何でもねーわ。またな、浅野』

すぐに電話を切られ、遠い車両にいる杉野に向かって罵倒を浴びせたい衝動に駆られる。

何で渚が殺せんせーと一緒に来ている。今入ってきたということとは名古屋駅、つまり上空から来たということ。空を飛ぶということは渚は密着した状態で殺せんせーと飛んだ可能性が高い。

「……………あのエロダコ何かしてたら殺す」

「物騒な言葉を吐くね」

荒井が横から口を挟んだ。僕が班長を務める一班メンバー5英傑＋毛利はポーカーをしている様子だ。こればかりは運の勝負のようで、普段他の4人に成績で負けている毛利が思いの外好成绩を収めている。彼はゲームに強いらしい。

「浅野君も参加するかい？」

「榊原、僕は負けないが？」

誘ってくる相手にそう返すと彼らは愉しげに笑い声を上げた。

「そこなくちやな。それでこそ5英傑リーダーだ」

ポーカーは僕の一人勝ちだった。端から見ている気分の良い勝負ではないだろう。しかし勝者本人にこれほど良いものはない。勝利に酔いしれ気分が良くなっているとまた着信音が鳴る。

「もしもし」

『もしもし浅野君？茅野っちがプリンの食べ過ぎでお腹壊しちやつたの！天使ちゃんが困っているんだけどどうしよ〜？』

「倉橋さん、落ち着いて。修学旅行のしおり472ページに食べ過ぎでお腹を壊した場合の処置方法が載っているから読むといい」

『分かったしおり見てみるね！ありがと〜』

倉橋さんはお礼を言うのと電話を切り上げた。僕は今のは何だったのだろうと首を傾げる。とりあえず助けになったようで良かった。

しかしこれは序章に過ぎなかったのだ。ホテルに着いて早々渚が不良に生徒手帳を盗まれたという報せが入った。寝る前には菅谷による渚の修学旅行でのスケッチ画が写メで送信されその評価をすることになり意見を交わすことになる。さらには岡島から渚の盗撮写真を売ろうかという誘い文句を受けたがそれは即座に断った。

E組生徒からの接触は2日目になっても止まることを知らず、殺せんせーを殺すのに1番良い射撃ポイントはどこかというのが電話してくる彼らの主な相談内容だった。1番電話の回数が多いのは何と殺せんせーで「渚さんとのいちやいちやが見れなくて先生寂しいです」という主旨のものが13件来た。

班員である5英傑のメンバーたちは僕の仕事内容に揃って顔を顰めたが、僕が飽きもせず電話をしているのを見てE組も上手く支配しているのだなと勘違いしたらしい。あまり口出しするような真似はしてこなかった。

『もしもし学秀君！』

「何だカルマ、お前まで射撃ポイントの相談か？」

『そうじゃなくて……渚ちゃんが』

気がつくと班員を皆無視して駆け出していた。途中で伊藤さんの班に遭遇し、渚たち4班の行き先を知ること成功する。路地には奥田さんと杉野、そしてカルマがいた。

「何故止めなかった」

僕は低い声で言いカルマの胸倉を掴む。カルマは反抗的な目を隠すこともしなかった。

「しょうがないじゃん。あいつら強過ぎだって」

「そうだよ浅野。いくら何でもカルマにあいつら全員は倒せなかったはずだ」

「倒す？何の話だ一体。カルマ、お前まさか戦いに夢中になっていて女子たちを逃がすことを忘れてた、なんて言わないよな？渚が連れて行かれたのはお前を庇ったからか？」

相手の顔を殴り、僕は床にしやがむカルマを見下ろした。

「信頼していた僕が馬鹿だった。ああそうだ、カルマ。お前はそういう奴だったな」

結果的に4班の女子たちは無傷で救い出すことに成功した。渚たちを攫った不良の1人は僕のことを知っているようで「元E組にいた」と自分のことを主張していた。よく考えたら聞いたことあるような名前だったがE組にいた生徒の名前なんて覚えてるわけもなく、どうでもいいことだと気にしないことにした。ただ、これで3日目にE組で過ごす理由が出来たことに何とも言えない複雑な気持ちを感じたのだった。

\*

A組の担任に事件が起きたのでE組の監視に戻ることを伝え、E組の旅館に移動することにした。5英傑達がせめて夕食はと引き留めるので豪華な食事だけ頂き、荷物を持ってE組がいる旅館へと急ぐ。着いてから早々カルマに遭遇した。

「おー学秀君こっちの旅館来るんだ」

レモン煮オレというよく分からない飲み物をストローで飲み、カルマが声をかけてきた。正直殴ってしまった手前なんて話せばいいのか分からなかったが、案外相手は気にしていないようだ。

「好きだな、その飲み物」

当たり前障りのない言葉を言うのとレモン煮オレという紙パックに入った飲み物はカルマのお気に入りではなかったらしく、愚痴を溢し始めた。

「妥協だよ。いちご煮オレ売ってなくてさ」

大部屋の襖を開けると何やら神妙な顔つきで話し合う男子たちの姿が見えた。彼らの視線の先には「気になる女子ランキング」と大きな文字で書いてあり、そのすぐ下に1位の文字と渚の似顔絵が並んでいる。

「さすが渚ちゃん、堂々の1位じゃん」

カルマの言葉に僕は拳を握りしめた。まさか大部屋で「気になる女子ランキング」なんてものがやっていたとは思ってもおらず、帰って早々視界に飛び込んできた天使ちゃん 1位の文字に飲み終わった缶コーヒーの入れ物を半分潰してしまった。

「4票か。入れたやつは誰だ？」

缶をゴミ箱に捨て、辺りを見渡す。男子の内数人が目を逸らしたことで大体の投票者は把握した。

「浅野怖いって。俺は神崎さんに入れたから無罪な」

杉野が自身の無罪を主張するが、そんなことは分かっている。

「落ち着け。浅野の分合わせて5票だったことは分かっているからさ。ほら、今書き直した」

「磯貝、今ボケるところじゃない」

前原は笑顔で言う磯貝につっこんだ。磯貝はボールペンで4の上には棒線を引き5と書き直した。

「大変です浅野君が暴発してます今すぐ助けに来てください……つと」

「待て、今誰に送ったカルマ」

「え、渚ちゃんだけど？」



襖が開き、渚が登場した。まだカルマがメッセージを送信してから10秒と経っていないのに驚くべき早さだ。

「ごめん、メッセージ見て来たんだけど……」

「来るのはやっ」

渚は床にある1枚の紙に目を留め、一瞬呆れたように苦笑した。しかし、1位の天使ちゃんというあだ名を発見するや否や顔を真っ赤にして俯く。周りの男子達は微笑ましいものを見る目で彼女を眺めていた。

「見てない。ぼくは見てないよ」

「見たんだな渚ちゃん……」

「ところで渚、何でここに？」

「何ではこつちのセリフだよ学秀。A組なのにE組のどこ来ていいの？」

「心配だから今日と明日はE組と行動しようと思ってね。またあんなことが起こっても問題だと担任に断りを入れておいた。これも生徒会長の役目だ」

こんなことが起こったのが偶然だといいたがな。

僕は新幹線での伊藤さんを思い出し顔を顰める。彼女ならやりかねない。それが渚を傷つける策だとしても、僕の願いを叶える為なら簡単に実行するだろう。

「目的が透けて見えてるぜ、生徒会長」

忍び笑いをする前原に鋭い視線を送りつけた。確かに8割ほどは渚が関わっているが、本人の前でそのことについて言う必要はないはずだ。渚がキョトンと首を傾げている。

「しかしこのむさ苦しい中に女子がいるだけでこうも華やぐんだな！  
天使ちゃんせっかくだから王様ゲーム」

岡島を一撃で気絶させた。こんな空間に渚を居させるのは危険だが、ここで帰るように言うのは少し非情だ。せめて僕の近くにいるべきだろう。その方が幾らか安心だ。

「おいで渚」

手招きをして渚を近くに呼び寄せる。渚はペアっと笑顔になって

僕の元に駆け寄った。手には何故か幾つかの菓子を持っていて、お土産とのことだ。僕も同じ京都にいたから要らないし、その菓子類もどこでも買えるようなものばかりだった。気が抜けているというかお節介というか。案外自分が食べたいだけだったりするんだろ。うな。渚の話の話を聞いているとそれは神崎さんにコツを教えてもらってゲームコーナーで取った戦利品らしい。

しかし既に時刻は9時をとうに過ぎているため、僕は明日新幹線で一緒に食べる約束をしてスクールバッグに入れる。ふと男子達に目を向けると一箇所固まってヒソヒソ話をしていた。

「信じられるか？あいつらあんなんで付き合っていないんだぜ……」

「リア充は速やかに爆発してほしいな」

男子達は僕達から顔を背けて話の矛先をカルマに向ける。

「そーいやカルマ、お前は？クラスに気になる女子いる？」

「んー……」

カルマは渚と僕を交互に見つめた。渚の名前を呼ぶんじゃないかとハラハラしてカルマの答えを待つ。柔らかな微笑みを閉じて彼が言ったのは全く違う女子の名前だった。

「奥田さん、かな」

僕はホッと胸を撫で下ろす。

「あのさ、ありがとう」

突然言われた言葉に首を捻る。よく考えると彼女はつい先ほど起こった拉致未遂についてお礼を言ってるであろうことに気がつく。

「学秀が居なかったら今回の修学旅行は助かってなかったかも。だからほんとにありがとう」

「今回……？」

思わずおうむ返しして、ハッと気がついた。渚の表情が凍っている。慌てて取り繕うとすると渚も秘密がバレると焦ったのか頭を必死に回転して言い訳を発掘している最中だった。

「ま、前に修学旅行で京都に行った時のことだよ……あの時はたまたま助かって」

「そうか」

渚があからさまにほっとして息を吐いた。僕は何故こうも彼女は嘘を吐くのが下手なのだろうかと疑問に思う。

『来年三日月が続くってことぐらい確かな話だよ』

中学2年生の時に言われた言葉を思い出し月を見やった。人はミステリアスな物に惹かれるという。例えばそれは月であったり、ただの女子中学生だったりする。僕の場合は後者だ。

「メモって逃げたぞーつかまえろー！ー！！」

男子大部屋から男子生徒たちが出て行き、僕達は2人きり部屋に取り残される。

僕は自嘲気味に笑った。わざわざ渚の嘘を分からないふりするなんて、プライドの高い僕がよく今まで我慢できたものだ。でもあんなことがあった後で放っておける訳がない。話してくれるのを待つぐらいならバラしてしまうしかないだろう。

「なんてな。嘘を吐いていることぐらい分かる。君はひよっとして僕を馬鹿にしているのか？」

「なっ、そんなことしてないよー！」

「渚の話し方は片っ端からボロが出ているようだからね」

ヒントは至る所にあった。中学受験で記入するのがあまりにも早かったこと。渚が習得しようとしたものが全て暗殺に関係すること。E組に行きたがっていたこと。殺せんせーを思わせる発言をしていたこと。

これらが示す正解はただ一つだ。

「月が爆破されたあの日、僕は到底信じ難いある仮説を立てた」

「学秀ずっと知って———?!」

「そして今もその仮説を信じている」

「渚がE組に来るのは2度目なんじゃないのか？」

渚は唇を震わせていた。その唇が綺麗な弧を描き、不敵な微笑みが僕に向けられる。僕の仮説が実証された瞬間だった。

「よく分かったね」

## 好奇心のはなし。 2時間目

旅館のゲームが立ち並ぶコーナーでぼくと神崎さんが銃撃を繰り広げるのを、茅野たちは呆気に取られて見ていた。ぼくの腕はまだしも神崎さんはどのゲームをやっても大抵1、2を争う。でも神崎さんを知る人なら誰だってまさか彼女が超凄腕のゲーマーだなんて思わないだろう。

「凄いですよ2人とも!」

奥田さんは友達の思わぬ特技に感激しているようだった。どうも彼女はゲームに無縁らしく、神崎さんレベルの人を初めて見たのだという。

「渚ちゃんの銃捌きは知ってたけどさあ、神崎さんも人外だったんだね。あ、もしかして「有鬼子」って名前使ってたりする?」

カルマ君がふうんとゲーム画面を見て感心したように言った。そこで思い当たることがあったらしく神崎さんに尋ねる。

「それわたしのペンネームなんだ」

「やっぱり。有名なゲームの日本順位でトップ10に入ってるじゃん? 神崎さんやるね」

「神崎さんトップ10に入ってるの?!」

初めて聞く話には大きな声で聞き返す。1周目でそんな話聞いた覚えがない。日本順位トップ10ってかなりの凄腕ゲーマーじゃないか。

「実はそうなの……うちの学校だと自慢できる特技でもないから黙っていたんだ」

「神崎さんは自慢できても黙ってそうだよね」

茅野の意見にぼくは心底同意だった。もしもぼくがそんなゲームのベテランだったら誰かにぼろつと言ってしまいたくなるだろう。

そういえば杉野君はこんな彼女を見てどう思うのか。そう気になり彼の方に目を向けるとギャップ萌えというトラップに殺られている。ビッチ先生の「さりげなくやる色仕掛け術」のその12にあるギャップ萌え効果というやつだ。こればかりは聞き齧った情報だ

と疑っていたが、杉野君を見ると効果はあるらしい。今度誰かに試してみたい。

「あ、このチョコおいしいやつだ」

お菓子をシャベルで救うゲームを指差し、ぼくはふと呟いた。学秀の好きなチョコ、だったはず。カルマ君が「渚ちゃんけっこー食いしん坊だよ」と失礼なことをぼやいている。神崎さんがウィンドウの中を少し見て頷いた。

「やってみるね」

「えっいいの？あー……やっぱりコツ教えてくれないかな？自分で取りたくて」

「……？分かった」

ぼくは神崎さんのアドバイス通りに動き、見事大量のお菓子を取ることに成功した。

「はい、杉野君。カルマ君も」

ぼくは2人にお菓子を投げてよこした。運動神経の良い2人はすぐさまキャッチする。ちゃんとチョコレートのお菓子はもう1人のために取っておいてあり、2人はなるほどねと納得した表情をしていた。

「わざわざお礼なんていいのに。俺何もしないし」

「しおりに気づいてくれただけで充分だよ。杉野君が野球のボールで窓を割るのはなかなか出来ることじゃないしね」

「逆に何も出来なくてすみません！怖くて隠れてしまいました」

奥田さんは恐る恐るといった様子で謝る。ぼくは「それが一番正しい選択だったよ」と返す。実際、隠れられるものなら隠れたいぐらいだった。でもカルマ君だけでどうにか出来る気なんてしなかったから参戦したのだ。その結果ああなってしまうだけだ。

「私たちからもありがとう！」

「ありがとう。すごくかっこよかった」

神崎さんが笑顔で言うのと杉野君が耳まで真っ赤になって顔を逸らした。これは狙ってるのだろうかなんて思うほど神崎さんはピンポイントで杉野君が喜ぶ所を突いている。侮れないなあ。さすが神崎

さんだ。

女子の大部屋に戻るとちょうど恋バナが行われていた。「E組男子の中で彼氏にするとしたら誰？」というお題だ。男子のランキング形式とは違い、名前を出していくだけのものだったが1人ずつ言っていないというシステムで結局は誰が人気なのか分かってしまうようだ。

「みんな鳥間先生はなしね」

片岡さんの言葉に倉橋さんが「え〜」と抗議するも、鳥間先生は男子生徒ではないというのが彼女の言い分だったため認めざるを得なくなつた。

数人に出された磯貝君の名前に納得したように女子たちは頷く。クラスきつてのイケメン君は貧乏なことを除けばほぼ何でもできる。1番人気なのも頷ける話だ。前原君もイケメンだが、彼の場合は女たらしであるという事実があるため人気は低い。

「やっぱりE組一のイケメンは磯貝君だね」

「あんなイケメン滅多にいないよ」

「頼れる学級委員だしね」

「で、神崎さんは……杉野？つてまた意外なチョイスだね」

「そうかな？」

神崎さんはピンク色の頬を染め恥ずかしそうに言った。横でプリンを食べる茅野がフオローする。

「今日かつこ良かったからね〜。野球のボールで窓を割るなんて惚れざるを得ないよ」

と言いつつ茅野は磯貝君という無難な選択肢を上げた。さして好きな人がいないのだろう。

「意外なのは浅野君の名前がほとんど出てこなかったってことだけど……渚ちゃんは浅野君だよね？」

原さんの言葉にぼくはまあねと頷いた。単純に男子の中で1番仲良しというのもあるけど、片岡さんの言うように「もしもE組男子で1人彼氏にするなら」という基準で考えたら学秀以外に選択肢はない。そもそも現状でぼくより出来る男子というのが少なすぎるのも理由だ。普通女子は自分より出来る男子のがいいに決まってる。こ

んなことを思ってしまう自分の思考が完全に女子化してて憎くもなるけど。

「ぼくとしては何でみんなが学秀を選ばないのか不思議なんだけどなあ。みんないつも紳士！って騒いでるのに」

そもそも本校舎での学秀人気は凄まじく、かく言うぼくもよく一緒にいるからという理由でトイレでの集団リンチ未遂に遭遇したことがあるほどだ。だからかE組での学秀の人気の無さに疑問が出てくる。

「そりゃあ浅野君はかつこいいけどさ、ね？」

「カルマ君とは違った意味でちよつと怖いっていうか……」

「帝王とか魔王とか呼べそう」

世界征服企んでて成功しそうな中学生だしね。本当に将来帝王になってそうなのが怖い。

「第一相手いるしね〜」

「あんだだけ分かりやすいアプローチしてるんだもん、ねえ？」

ぼくの方をチラチラ見て女子たちが盛んに「ね？」と頷き合った。ぼくは彼女たちのコミュニケーションについて行けず置いてけぼりを食らう。

「前から聞きたかったんだけど、渚と浅野君って何なの？」

茅野は「2人の関係ちよつとよく分かんなくてさ」と付け足した。確かに転校してきたばかりの彼女にとってぼくらは少し奇妙に映るのかもしれない。絶望から救ってくれた学秀は恩人みたいなもので自分で言うのも可笑しい話だけど、ぼく自身学秀に依存してしまっている部分がある。自分で何とかしたい問題なのに1人で解決できなくて、最終的に学秀を頼ってしまっているのは直したいところだ。

しかしこの関係を一言で説明してしまえば友達なんだろうなあ。

「そうだね……1番信頼してる友達かな。助けられてばかりだけどね」

そうだ。考えてみるとぼくが学秀を助けたことは一度もない。学秀には1人で解決するだけの力が備わっていて、ぼくの手助けを必要としていないからだ。それでも、いつかきつと恩返ししたい。そう思

うのは彼に助けられてばかりのぼくだからこそ言えることなのだろう。

「だから学秀が困ったら、今度はぼくが助けるんだ」

ぼくが呟くと、周りの女子たちは呆気にとられて互いに話し始めた。誰が話しているのか分からないほど話は盛り上がり、ぼくは唯一会話に参加していない神崎さんに事情を尋ねる。くすりと笑われた。

「友達だってよ、友達」

「近頃の少女漫画並みに鈍感」

「浅野君はもうちよつと攻めてほしいよね」

「わかるわかる。壁ドンとかしてほしい」

「それで「他の男と仲良くするな」みたいな？」

女子たちがキヤーカー騒いでいるが内容はぼくのところまで聞こえてこなかった。帰ってきた茅野にどんな話をしてたのか訊くと、少し呆れた顔をされる。

「浅野君の苦勞が目に見えるね。渚、恋したことないの？」

「ないかな」

2周目に来てからは。そう心の中で付け加えた。

「モテるのにもつたいないよ！好みの男子は？」

好みの男子……ってどんなのなんだろう。

ぼくは少し悩み、頭の中で浮かんだ答えを口に始めた。

「ジュリアン・ソレル……みたいな人」

「誰それ？」

『「赤と黒」に出てくる男。随分難しいの読むのね」

狭間さんは本から顔を上げて淡々と言った。本好きの神崎さんもフランス文学にはまだ手を出していないようで、茅野が何の本か訊くも首を振る。

「赤と黒」の主人公、ジュリアン・ソレルは野心家でナポレオン信者の頭の良い青年だ。難しい本だったのに、スラスラ読めてしまったのはその主人公の影響があったからだと思う。知り合いにいなそうな彼はぼくの興味をそそのるのに充分で、いつの間にか大した分量を読んではまっていた。



「あら、何やってるのあんたたち」

女子大部屋にやってきたビッチ先生は一箇所固まった女子たちに不可解そうに目をぱちくりとする。

「渚ちゃんの鈍感さをどうすれば直せるかって話を今してたんだよ」

倉橋さんがニコニコして答えるが、ぼくはそんな鈍感じゃないはずなんだけどなあと苦笑した。暗殺者としてそれなりに鋭いと自覚しているからだ。しかしビッチ先生も「そうね」と頷きさらに続けるのだった。

「それはそれで女として最高の才能よ。テクニックと身体で誘惑する女がいれば、本人が狙ってないのにもかかわらず人を魅了する女もいる。私は完全に前者だから渚が羨ましいわ」

「そういえばビッチ先生の恋愛ってどんなの？興味ある！」

「ビッチ先生の初恋の話聞きた〜い」

倉橋さんと矢田さんが2人揃ってビッチ先生に尋ねた。

「初恋、そうね、15の時……あれは初恋と言ってもいいと思うわ。敵国軍の司令官でその時の暗殺標的だった男に恋をしたの」

「15が初恋?!ビッチ先生意外と初心だ〜」

「何よ。ちようどあんたたちと同じ年ぐらいじゃない」

「それでそれで?その人どんな人だったの?」

「無口で、女性には慣れてなさそうだったわ。なのに私の色仕掛けが効かなかった。悔しくて何度も何度も繰り返したらいつの間にか好きになっていったのよ。だからベッドに誘い込んだ時、自分が敵国から来たことを話してしまった。人生で1番の失態ね。でも彼は駆け落ちしないかと言ってくれた」

ビッチ先生の意識の波長がくらぐらと不安定に乱れた。ぼくは彼女の顔色が哀しさを帯びていくのに息を詰まらせ、固唾を呑んで彼女を見つめた。今の話には続きがあるのだと本能的に悟って。

「敵同士の恋愛かあ。ロマンチック〜」

「羨ましいですねえ〜」

殺せんせーが後ろでニヤニヤしながらメモ帳に何やら書き込ん

でいる。ビッチ先生は慌ててナイフを投げた。

「アンタいつの間にも!!」

「いいじゃないですか、先生も禁断の恋愛気になります」

「そういう殺せんせーはどうなのよ」

片岡さんが聞きながらナイフを突き刺す。殺せんせーはそれを避けて天井に張り付いた。

「巨乳好きだし絶対恋愛の1つや2つあるでしょ」

「にゅやっ! そう来ますか……では失礼っ!」

マツハで部屋から逃げる殺せんせーにビッチ先生は女子たちに告げる。

「逃げた! 捕まえるのよ!!」

女子生徒たちが殺せんせーを追いかけにいった。座り直してお酒を飲むビッチ先生をつついて、ぼくは少し躊躇した。こんな楽しい今だから、ぼくの訊く内容は触れてはいけないことなのかもしれない。でもぼくはビッチ先生の初恋の結末に興味を湧いたのだ。

「どうかしたの渚」

『その後、どうなったの?』

ビッチ先生の顔色が曇った。ぼくにはその結果の予測がついてしまい、ああやっぱりそうかと落胆する気持ちが溢れた。

『殺したわ。相手が幸せそうに寝ている時に。一撃だったから、私が殺したことも知らずに死んだんじゃないかしら』

『悲しくなかったの?』

『私はプロ。そんな感情押し殺したわよ。だって私が殺したのに、自分で悲しむなんて愚かだと思わない?』

殺せんせーの過去を打ち明けられた後、ぼくらは殺せんせーを殺すかどうか悩んだ。その時にビッチ先生が言った言葉をぼくは決して忘れないだろう。1番愚かな殺し方は感情や欲望で無計画に殺す事。そして自分の気持ちを殺して相手を殺すのが

『2番目に愚かな殺し方だったね』

そうか。だからあの時あんな忠告をしたんだ。自分が経験した事

あつたから。

『渚、あんたは私みたいにならないようにね』

『……そうだね』

自分の気持ちを殺して相手を殺す。ビッチ先生は察しがいい。それは殺せんせーを殺す時の命題になるんだから。

「あれ、杉野君からだ」

4班のグループチャットに杉野君からのメッセージが届いていた。ぼくがスマホを開くとビッチ先生がそれを覗き込む。

杉野：浅野こつちの旅館来てるよ

ぼくは一瞬驚き、どういう心境の変化だろうかと考えた。すぐにタッチパネルに指を走らせ返信文を書く。

渚：ほんと？今そっち行くね

「ごめん、ぼく今から男子大部屋行ってくるね。学秀が来てるらしいんだ」

「いってらっしゃい。キスの1つや2つして来なさいよ。あんたは出来るくせにやらないんだから」

ビッチ先生は至って真面目な顔だった。ぼくは後ずさりして顔を顰める。

「あはは……遠慮しとく。じゃあ消灯時刻には帰ってくるね」

ぼくは女子大部屋を出ると男子大部屋のある違う階へ向かった。そこはしおりを見なくても前回の修学旅行で使ったのでぼつちり覚えていたのだ。

男子は男子で気になる女子ランキングやってるんだろうなあきつと。

「ごめんメッセージ見て来たんだけど……」

「来るのはやっ」

そこまで早く来たつもりはないのに男子たちはぼくを見て同時に言った。ぼくは床に置いてある気になる女子ランキングの紙に目をやり、やっぱりかど心の中で呟く。しかし1番上に書いてある名前は神崎さんではなくぼくの名前で、動揺した。理由には大きく「天使だから」と書かれている。男子だった時より女子の方がモテるのは何だ

か複雑な気分だ。

「見てない。ぼくは見てないよ」

「見たんだな渚ちゃん」

「ところで渚、何でここに？」

学秀は潰れた缶コーヒーをゴミ箱に捨てた。大部屋には持つてきたばかりと思われる学秀の荷物が固めて置いてある。

「何ではこっちのセリフだよ学秀。A組なのにE組のどこ来ているの？」

あの騒動の後、学秀はすぐA組の班に戻ったと聞いていたので学秀がE組に混じっていることにはちよつとした驚きを感じていた。何の心境の変化なんだろう。

「心配だから今日と明日はE組と行動しようと思ってね。またあんなことが起こっても問題だと担任に断りを入れておいた。これも生徒会長の役目だ」

「目的が透けて見えてるぜ、生徒会長」

前原君がぼくと学秀を交互に見てくつくと笑いを堪えていた。他に目的……って何なんだろう。学秀もE組のみんなと行動したかったのかな。

「しかしこのむき苦しい中に女子がいるだけでこうも華やぐんだな！  
天使ちゃんせつかくだから王様ゲーム」

岡島君は学秀によって一撃の制裁を与えられてその場に倒れた。

確かに岡島君の言う通りぼくは女子1人になるわけだ。よく考えたら男子の恋バナに女子がいるのも変な話で、ひよつとすると帰ったほうがいいんじゃないかとさえ思えてくる。前と違うシチュエーションにちよつと居づらいなあと動けずにいると、それを見かねてか学秀が声をかけてきた。

「おいで渚」

手招きをされぼくは居てもいいんだと分かりホツとした。そして手にもつお菓子でもととの目的を思い出した。

「あ、そうだ。これお菓子。お土産みたいなものだからお金とか気にしないでね」

女子に奢られるのは嫌いだろうと思いきや。実のところそれは今日のお礼でもあるけど、お礼はちゃんと口で言いたいのであえてふせることにした。それにゲームで取ったお菓子をお礼に渡すのってどうなんだろう。お礼にしては軽すぎるかもしれない。とはいえ、それ以外にお礼の方法がまるつきり思いつかなかったから仕方がないことだ。

ぼくがずっと見つめていたからだろうか、学秀はぼくの視線から避けるようにお菓子をスクールバッグにしまった。

「夜中に菓子類は食べない方がいいだろうからね」

「今食べようなんて言っていないよ?!」

「明日の新幹線で食べよう。いいな?」

「ぼくそんな食いしん坊じゃないって」

一方男子たちの注目はレモン煮オレを飲むカルマ君に移っていた。

「そーいやカルマお前は? クラスに気になる女子いる?」

「んー……」

カルマ君はぼくと学秀を視界に収め、目を閉じた。

「奥田さん、かな〜」

1周目と全く同じカルマ君の台詞に驚くこともなく、その後の理由も聞き慣れたものだった。奥田さんが気になっているのは多分本当なんだろう。カルマ君の場合それは恋愛になるのかどうか微妙なところだけど。

ぼくは何故か一安心している学秀に向き直った。

「あのさ、ありがと」

少し気恥ずかしくてぼそりとお礼を呟く。学秀が頭を少し傾けた。何のお礼なのか疑問に思っているようだ。

「学秀が居なかったら今回の修学旅行は助かってなかったかも。だからほんとにありがと」

「今回……?」

学秀が同じ言葉を繰り返し、ぼくはどきりとした。いつもぼくが可笑しなことを言っても見逃す学秀のことだから、普通にスルーされると思っていたのだ。

「ま、前に修学旅行で拉致られた時のことだよ……あの時はたまたま助かって」  
「そうか」

ぼくの苦し紛れの言い訳に学秀は口の中で小さく呟いた。考え事をしているのがすぐに分かり、これは気づいてしまったんじゃないかと大きく息を吐く。学秀の意識の波長は滅多に変動しないから何を考えているのか見分けにくい。

「メモって逃げたぞーつかまえろー！！」

男子大部屋から生徒たちが出て行くのを学秀は横目で見て、柔らかく笑った。真っ直ぐとぼくの目を見据えた彼は全てを理解しているかのようにちよつとした恐怖を覚える。

「なんてな。嘘を吐いていることぐらい分かる。君はひよつとして僕を馬鹿にしているのか？」

「なっ、そんなことしてないよー！」

思わぬ勘違いを否定して声を荒げた。

「渚の話し方は片っ端からボロが出ているようだからね」

片っ端からボロ……って。ヒントのつもりだったんだけどなあ。端から見たらそう見えるようだ。

「月が爆破されたあの日、僕は到底信じ難いある仮説を立てた」

動悸が激しく鳴る。月が爆破された日  
……って

3月じゃないか。今考えたらぼくは学秀にヒントを与え過ぎていた。頭の良い彼にそんな簡単なヒントが分からないはずがない。もちろん気がついていて。知っていて知らないふりをしていたのだ！

「そして今もその仮説を信じている」

「学秀ずつと知って」  
……?!」

ぼくの口は学秀に塞がれた。囁くように彼は正しい仮説を唱える。それは2周目のぼくとしては100点満点の答えだった。

「渚がE組に来るのは2度目なんじゃないのか？」

歓喜で唇が震える。ヒントは用意していた。だから学秀にバレることは計算の内だ。でもこんなに正解に近づくとは思っていなかったし、3月の時点で気づいていたなんて予想もしていなかった

「まあ、いいか。ずっと待っていたんだから。」  
「よく分かったね」  
ぼくは微笑んで正解を讃えた。

律のはなし。

修学旅行明けの月曜日。柵ヶ丘駅の改札口から出ると待ち構えていたかのように学秀の姿が見える。ぼくが少し気ままずくなり目を逸らすと、学秀は躊躇なくぼくに質問を投げかけた。

「この前の話は本当なんだな？」

「うん、全部本当だよ」

修学旅行で学秀に訊かれた時、ぼくはおおよそ話せると思ったことの全てを話した。つまり、実際は全体の2割を隠したというわけだ。例えば茅野のことについてはまるで触れていないし、殺せんせーの正体についても語らなかつた。理由は守秘義務があると判断したからだ。

「自殺して時間が巻き戻った……か。小説みたいな話だな」

「ぼくもそう思うよ」

「屋上から飛び降りたとか？」

「何の話？」

「どうやって自殺したのか」

学秀の言葉にぼくは意味を理解して記憶を辿る。確か自殺したのは殺せんせーと茅野が死んだ次の日で、それは卒業式があつた3月13日のこと。卒業式には出席した覚えがある。それでその後は――

「えっと……」

あれ。どうやって自殺したんだっけ？

1周目の記憶を何度思い返しても自分がどう自殺したのか思い出せなかつた。自殺だったという事実しか脳裏に浮かんでこないのだ。

ぼくの様子に肩を竦め、学秀は申し訳なさそうに顔を背けた。その様子にぎこちなさを感じたのは気のせいではないのだろう。学秀とは1周目の話をしてからどうしても前より距離を感じた。前と同じような振る舞いなのに、空気が少し違う。

「……言いたくないならいい。思えば少し不躰な質問だしね。ところで明日来ると言っていた転校生のことだが、政府の機密データから確



認済みだ。もう一人はまだ調整中らしいが……」

「前もそうだったから大丈夫。明日来る転校生は自律思考固定砲台。かわいい女子のイメージを持つAIだよ。授業中銃をずっと撃ち続けたからクラスの反感買ったんだけど、殺せんせーの改造でクラスに馴染むようになったんだ」

「へえ、機械を生徒として送り込むとはそろそろ政府も手詰まりらしいな」

教室のドアを開け、席の近くに置かれた黒い箱を学秀は無視して着席する。すると暗かった画面が明るくなり美少女が映し出された。

「おはようございます。自律思考固定砲台です。よろしくお願ひします」

にこやかに律がそう言った。久しぶりに見る律はなんだか懐かしく思えてくる。映像上で姿が同じだからかもしれない。でもそれと同時に機械である以上ぼくにとっては脅威だ。意識の波長は奇妙に一定で、息の乱れも無ければ顔色に変化があるわけでもない。

正直、律が協調という考え方をしていなかったらこの教室は完全に彼女の縄張りだっただろう。

朝礼の時間になると待ち構えていたかのように烏間先生が現れ、転校生の説明を始める。

「みんな知ってると思うが、転校生を紹介する。ノルウエーから来た自律思考固定砲台さんだ」

「皆さんよろしくお願ひします」

烏間先生の冷や汗に生徒たちは気を遣い、余計な口出しはしなかった。そんな中、クスクス笑いを誤魔化そうともしない者が1名。殺せんせーだ。

「お前が笑うな。同じイロモノだろうが」

「自動販売機みたいな形してるよね……ほら、最近よく駅前にあるやつ」

「はは……」

小声で茅野が耳打ちしてきて、言いたいことはよく分かったが口からは乾いた笑みしか出てこなかった。関東周辺で駅を中心に置かれ

たタッチパネル式自動販売機はまさに律のような姿をしている。

でも銃撃に振り回されたらもう同じ台詞は言えなくなるよきつと。「……なるほどねえ、契約を逆手にとつて機械を生徒に仕立て上げたということですか。いいでしょう、自律思考固定砲台さん。あなたをE組に歓迎します！」

この後行われた転校生の射撃は殺せんせーの触手の指を3本吹っ飛ばした。普段教卓に居座るメルは不愉快そうな鳴き声を上げ、2時間目からは姿を消した。その一方、律は傍迷惑な射撃の後で掃除機の先のようなものを出しBB弾を回収する。リサイクルみたいなものなのだろうか。びっくりだ。

「よく分からない暗殺者がまた現れたな〜」

杉野君はその掃除に苦笑いをしてぼくに同意を求めた。ただ無心に律を眺めるぼくにその言葉は届いておらず、肩を揺すられてようやく気づく。

「おい、どうしたんだよ。浅野も変だけど何かあったのか？」

「学秀も変って？」

後ろの席を振り返るとそこには黒いオーラを垂れ流してパソコンのキーボードを打つ学秀の姿があった。少しオタク……いや、インテリ男子に見える。彼は律の席から近いということもあり人一倍騒音を浴びていたようだ。そこで何か復讐できないかと考えているらしい。その様子に隣の席のカルマ君がニヤリと悪戯道具一式を取り出した。これは間違いなくアレだ。ビッチ先生の時にやらかしたみたいなことをする気だ。

「と思ったが浅野はあれで通常運転だったな。ついでにカルマも」

「うん、あの2人にはなるべく近寄らないようにしよう」

E組の意見はほぼ一致していた。

\*

翌日。律の身体は寺坂君のガムテープで拘束されていた。学秀のクラッキング行為は防がれたようだが、逆に紙で画面を隠し落書きというカルマ君の古典的な嫌がらせにも対抗する手段はなかった。機械らしい口調で殺せんせーに文句を言う律に対して、寺坂君とカルマ君の言い分はこうだった。

「どー考えたって授業の邪魔だろうが。人間の常識ぐらい身につけてから殺りに来いよポンコツ」

「え、面白いから悪戯して何が悪いの？」

寺坂君の意見には同意する声が多かったが、カルマ君の快樂犯のような言い分には苦笑いしか出なかった。どうにか彼が道を誤らないことを祈るばかりである。

しかし律の不幸はこれのみに留まらなかった。メルがうっかり律の電源スイッチ（そんなものがあることすらぼくは知らなかったけど）を消してしまい、完全に動きを止められていた。ぼくと倉橋さんが流石にそれは酷いとお説教をしたため、放課後には電源をオンにせざるを得なくなったが反省しているようには思えなかった。

ようやくガムテープから解放され、放課後で開発者に連絡を取る律はとても冷静に見えた。まだ殺せんせーの手入れをされていないからなのか表情は一定して無だ。

「まだ帰ってなかったのか」

教室で本を読んで殺せんせーが手入れに来るのを待っていると、学秀が生徒会の仕事から帰ってきたようでぼくに午前ティーシリーズミルクティーを投げる。本校舎で売っているそれはE組の生徒だと少し高い値段でコンビニで買うか、集会の日にしかなることが出来ない。

「……学秀こそ」

「殺せんせーの手入れにちよつとした協力をしようと思つてね」

「ぼくはその見学待ちなんだ。ちよつと気になることがあつて」

ぼくが事前に改造のことを話したからか学秀はとても乗り気だ。殺せんせーが後ろから登場し、ぼくらが手入れの見学をすることを伝えると嬉しそうに独特の笑い声を出した。

「ヌルフッフッフ。手入れの準備は万端ですねぇ」

「手入れ？ 私に危害を加えるのは契約で禁止されているはずですが」

「改良することは禁止されていませんよ。転校生はクラスに馴染むのが大変でしょう。しかし協調の方法は自分で考えなくては」

「協調ですか」

律は息を小さく呑んだ。今まで気づかなかったことに気づいたかのように。

「殺せんせー……？？」

小さく呟かれた言葉を全て聞いたのはぼくだけだった。あつと口から出てきた声を抑え、殺せんせーの課外授業に耳を傾ける。

「君は学習能力と学習意欲が高い。その才能を伸ばすのは担任である先生の仕事ですからねぇ」

殺せんせーは改造処置をマッハで終え、画面に映る表情豊かな律に満足気に吐息した。それを合図にしてずっと席に座って観察していた学秀が立ち上がる。

「次は僕の番だな」

「殺せんせーの手入れは大体分かるけど……学秀は何をする気なの？」

「手入れというほどでもない。入れ知恵だ。そうだな、知識はあった方がいい。暗殺者なら誰だってそう思うだろう。だが、果たして大事なのは知識だけか？役に立つ技術というものは実践して初めて証明される」

「訳が分かりません。射撃の実践なら既に実行致しましたが」

銃を撃つ真似をして首を傾げる律は随分可愛らしくなっている。学秀は普段するスピーチのような多少回りくどい言い方を使い律に説明していった。

「E組にいる暗殺者の1人は毒に特化した暗殺を行う。野球に特化した者、エロに特化した者と様々だ。君の場合、それは射撃じゃない。

学習能力だ」

「それ先生もさつき言いました!」

殺せんせーがぶんすかして口をへの字にした。

「……だから授業は積極的に参加した方がいい。その身体だと参加できないものがどうしても幾つか出てくるが。家庭科や体育。家庭科はまだしも、体育は暗殺対象が動く以上必要不可欠だとは思わないか?」

「おっしゃる通りです。殺せんせーの超スピードがある以上定位置での射撃は不利かと思われます」

「だそうだ。殺せんせー、後は任せよう」

「お任せあれ!先生が動きやすい機体に見せます」

殺せんせーは学秀に頼りにされて急に元気を取り戻す。扱いやすい……単純だ。しかししてつきり学秀が改造に手を出すと思つていたためぼくにとつてそれは意外だった。

「え?学秀がするんじゃないの?!」

「忘れているかもしれないが、僕はまだ中学生だ。機械にタイヤを付けるやり方なんて知らない」

知つてそうな中学生を1人思い出したが、彼はあいにく触手実験中である。ただ、学秀は万能だと思つていたので出来ないことがあることに驚いた。

「浅野君、機械にタイヤを付けるだけなんですか?てつきりガン〇ムみたいに改造するのかと思ひましたよ」

殺せんせーのボケ発言にぼくらは顔を見合わせた。

「ガ〇ダム……」

有名な黒い”アレ”に頭の部分だけ律が映る画面が付く様を想像する。シユールだ。それはそれで性能アップになりそうだけど、ナンカチガウ。それはもう律じゃなくなる気がした。

学秀は何がツボにハマったのか笑いを堪えている。

「そつちじゃなくて……動く自動販売機の様なものを想像していたんだが」

「自動販売機ですか。先生頑張つてみます!」

その後すぐ下校を促され、タイヤ付きの律は見ずに帰った。まさか先生が言葉の通りに受け取ったとは知らず、翌日になって驚くことになる。

\*

「あ、天使ちゃんおはよう」

旧校舎への山道で倉橋さんに遭遇する。ぼくはここぞとばかりに昨日のことを尋ねた。

「メル昨日何か言ってた？」

「ああ、転校生ちゃんの電源切っちゃったこと？安眠の邪魔した報いって言ってたよ。でも天使ちゃんに怒られたのちよつと気にしてたみたい」

「ぼくも少し怒りすぎたからなあ」

「でも転校生ちゃんいきなり銃乱射するんだもん。メルも怒るよ」

「今日はそんなことないと思うんだけど……」

ドアを開けるとそこには自動販売機があった。ドアをもう一度閉じる。2度目に開けても目の前にあるのは黒い自動販売機だ。東京でよく見かけるタッチパネル式自動販売機に酷似していて、違う点は律がショップ店員風の服で営業スマイルを浮かべているぐらいだ。いや、なんでこうなった。画面にはいちご煮オレを持つ笑顔の律が居て、ぼくは冷や汗混じりに「どういうこと」と口の中で呟いた。

「おはようございます、渚さん、陽菜乃さん。朝のドリンクはいかがですか？本日のおすすめはいちご煮オレです！」

……………転校生がまたおかしな方向に進化した。

「浅野君のアドバイス通り、自動販売機に改造してみました！いやあ、コンビニで飲み物買うの大変だったんですよ」

「殺せんせー……進化させる方向が間違ってるよ」

「面白そうだから買ってみるね！えーつと、この猫のエサください」  
倉橋さんが楽しげに自動販売機のメニュー一覧にある猫のエサを指差した。どうやらこの自動販売機、猫のエサも買えるらしい。

「100円を投入してください」

「金取るのかよ?!」

「でも昨日より社交的ね……あの自動販売機機能は要らないけど」

狭間さんが核心を突く発言をし、殺せんせーに精神的なダメージを与えることに成功する。提案したのは学秀だが、付け加えたのは殺せんせーであるため、要らないと言われたことにショックを受けたようだ。

「ふん。どーせあのタコの作ったプログラムのことだ。愛想良くても空気読まずにまた射撃すんだろポンコツ」

「お気持ちは察します。昨日までの私はそうでしたから……ポンコツ。返す言葉ありません」

律が涙をぽろぽろ流した。ぼくは美少女の涙はいつだって最強というビッチ先生からの教えを思い出し、矢田さんと倉橋さんと一緒にクスクス笑みを零した。案の定、さっきまで敵だったE組生徒たちはころつと律側に寝返った。人望があまりない寺坂君が完全に悪者扱いである。

「あーあ。泣かせた」

「寺坂君が2次元の女の子泣かせちゃった」

「おい、誤解される言い方止めろ！」

女子たちのイジリに寺坂君が慌てる。これでは完全に悪者じゃないかと辺りを見渡すがもう遅い。フォロー役はもういなかった。

「いいじゃないか2D。Dを1つ失うところから女は始まる」

「……………竹林、オタクだったのか」

竹林君の言葉に学秀が神妙な趣で頷いた。E組情報に詳しい彼も

これは初耳だったらしい。ここぞとばかりにメイド喫茶への勧誘を始める竹林君に「間に合ってる」と学秀が言うが、手には店の割引チケットを握らされていた。常連になる日も遠くないだろう。

授業が始まる頃、自動販売機の営業は終了していた。彼女曰く授業中の射撃は今後遠慮することだ。その代わりに櫛ヶ丘の制服姿になった眼鏡っ娘の律がノートを片手にビッチ先生の授業を熱心に受けている。

『私の開発者はノルウェー訛りの英語を話すのでとても興味深いです』

と綺麗なイギリス英語で言う彼女にビッチ先生は引きつった笑いを浮かべていた。機械なので学習能力は人間に比べずっと高い。つまり一回の授業で完璧な発音を身につけたわけだ。

続いての美術では菅原君顔負けの技術を披露し(ほぼ写真)、工作では体内で創作した花を提出した。昼休みになると既に彼女はE組での人気者となっていた。

「へえ〜身体の中で何でも作れるんだね〜」

左側を使い猫じやらしでメルと遊ぶ律に矢田さんが感心して言う。いつの間にかメルと律は和解していた。逆に手なづけられてるぐらいだから律は侮れない。

「はい、設計図があれば何でも作れますよ!」

「美術の時も筆とか色々出してたよね。じゃあさ、今度対先生ナイフとか作ってみてよ!」

「いいねいいね〜。そしたら明日の体育の授業出れそ〜」

「みんな流石に無茶ぶりじゃない?」

盛り上がる矢田さんと倉橋さんに速水さんが冷静な一言を告げる。しかしその会話を聞いていた律は全く問題無さそうな顔だった。

「はい、分かりました!千葉君、王手です」

「凄い強いな。3回やって全部負けた」

右側では将棋で千葉君と対戦しており、1回も勝てないぐらい強いと普段クールな千葉君が焦りを見せていた。

「ちっ……またか」



一方、学秀は何度目かの舌打ちをしてパソコンのキーボードを打ち続けている。周りはそれを少し遠巻きに見て、ヒソヒソと話していた。

「地味に浅野君と転校生戦ってるんだね〜」

「あの様子だと負けてるみたいだよ」

「やるじゃん」

特に噂話の好きな女子たちが転校生の大健闘にきやつきやつ騒いでいる。ぼくは手元に飲み物がないことに気づき、ついさつきまでやっていた律の自動販売機を思い出した。

「ごめん、律。自動販売機まだやってる？ 飲み物買い忘れちゃって。ミルクティー一つ……ってどうしたのみんな？」

コイン投入口から120円を入れ、律からミルクティーを受け取ると動きが止まった周りを見渡す。

「今渚ちゃん、律、って」

「私もちようどそういうの考えてた！ わー先に言われた」

元の名付け親である不破さんが取られたという顔をしており、ぼくは目を逸らした。その先に律がいてぼつちり目が合う。何だか見透かされた気がしてバツが悪くなった。

「……ではこれからは、律、とお呼びください！」

「随分と馴染んでるな。開発者がそれをどう思うかは知らないが」

学秀は隣の席のカルマ君に言うと、全く同じことを考えていたらしく彼は同意を返す。E組の中でも良い意味でずる賢い彼らはこの後の予想がついているのだろう。

「良くは思わないだろうーね。プログラム通りに動いてるだけだから、開発者にプログラムを元通りにされたら元に戻るんでしょ」

「何度も外部からの侵入を試みたがそれは無理のようだ。開発者にしかプログラムの書き換えは出来ないようだな」

「それじゃ、あとは開発者次第ってとこかな」

カルマ君は律の自動販売機機能で買ったいちご煮オレをストロ―で飲み干した。ぼくは何処となく不思議な気分になって律を見つめる。何だろう、この違和感。

次の日、律は今まで通りで何も変化は起きなかった。次の日も次の日も、自動販売機型自律思考固定砲台はずっと同じ姿のまま1週間が過ぎ、律は完全にE組に馴染んで行った。

いつの間にか律が体育に参加するのは当然のことになっていた。休み時間は飲み物を買うか生徒たちと遊び、授業に関して言うと数学では1番なのに現代文ではいつも苦戦している。自動販売機機能はお弁当まで売るようになった。最近ではフランス語を習得したらしい。憎たらしいほどの発音の良さにビッチ先生が愚痴を漏らしていた。

そして1周目と大きく異なる変化は認知されることなく、季節は6月になった。

日常のはなし。

雨が降るとどんよりとした気分になる。体育の時間は教室で過ごさなければならなくなり、朝から登る山道はたまに泥が混じって歩きにくい。

この時期退屈そうな顔をするのは生徒だけではない。ビッチ先生はインドア派だからともかく、烏間先生のように鍛えている人が運動するのに嫌な環境なのがこの時期だ。雨でもジョギングが出来ないことはないが、こんな天候ではそんな気分にもなれなそうだ。

職員室には真剣な表情でパソコンに向かう烏間先生の姿があった。表情をあまり変えない彼から何かを読み取るのは難しいが、暇であることが雰囲気から伝わった。

「烏間先生、調べて欲しいことがあるんですけど……すみません、忙しいですか？」

パソコンをじっと見る烏間先生に念の為確認をする。意識の波長はリラックス状態だからストレスも溜まってないだろうし、暇なはずだけど勘違いの可能性もある。だが杞憂だったようだ。烏間先生は肩を竦め、暇であることを認めた。

「……最近は雨の所為か殺し屋を送りづらい。見ての通り暇を持て余しているところだ」

烏間先生のパソコンをよく見ると犬の可愛い動画を見ている最中だった。ぼくはくすりと笑い烏間先生の意外な一面を思い出した。しかし、気になるのは雨だから殺し屋を送りづらいという話だ。弱点をまだ知らないからだろうが、雨は大いに利用すべきだと今更になっと思うのだ。

「逆に雨の方が暗殺しやすかったりするんじゃないのかな……」

「すまない、今なんと言った？」

「いえ！大したことじゃないので気にしないでください」

「調べて欲しいことがあるんだったな。言ってみてくれないか？」

ぼくは要望を話し、教員室を後にした。

先に帰るように言ったので茅野たちはもう教室には居なかった。

教室に1人残った律がぼくを見つけると満面の笑みで話しかけてくる。

「まだ帰っていないかったですね、渚さん」

「律はこれからメンテナンス？」

メンテナンス準備中と書かれた画面を覗き込み、そう尋ねる。それはどうやら正しかったようだ。

「はい！私の保護者が放課後に来るようセッティングしました」

「ふうん。ねえ、律。1ついいかな？」

「はい、何でしょう？」

可愛く首を傾げる律にぼくは息を吸い込んだ。出来るだけさり気なく、疑っていることが気づかれなような質問を選ぶ。

『ソニックニンジャ』の結末を知ってる？」

「……敵が兄であったと記憶していますが。何故それを？」

「ううん、何でもない」

律に何か勘付かれていないかと横目で窺い、彼女の表情が少しの変化も見せなかったことでホッとす。唯一意識の波長が見えない相手と話すのはぼくにとっては、見えない、相手と話すようなものだ。

「……………渚さんはモバイル律アプリを見ましたか？今朝クラス全員がスマホにダウンロードしたのですが」

「モバイル律？まだだよ」

「LINEで悩み相談もしているので、良ければ見てみてくださいね」

律に差し出されたバーコードを読み取り、友達追加をする。画面に映し出される律のプロフィール画像は何かの模様のように見覚えのあるものだった。

律と別れ、下駄箱で革靴に履き替える。足音が聞こえて顔を上げると、そこには学秀の姿があった。雨にところどころ濡れて少し息切れた様子から、急いで走って来たのが窺える。

「学秀……今日は生徒会じゃ？」

「早く終わらせて来た。話したいことがあってね」

傘を差し、坂道を下る。雨の中無言は続いた。たまに遭遇する水溜りを避け、本校舎を通り越したところで学秀がようやく口を開く。

「ずっと前から疑問だったことがあった。渚が何者なのか。何故いつも見透かしたようなんだろうって」

そんなこと考えていたんだ。思い返せば学秀には色々ヒントを与えていた。あり得そうなことはもちろん、突拍子もないことも。テスト範囲も行事で起こるイベントも、学校での出来事を大抵理解していた。ぼくは万能の学秀にとっても異質の存在だったのだろう。

「2周目か。それで後者の謎は解けた」

「ぼくが何者かということは未だに分からない？」

「愚問だな」

自嘲気味にふつと微笑み、自分に言い聞かせるように呟く。最近薄暗かった顔色が少し明るくなった気がした。

「何者かどうかなんて相手を知らずにはどうでも良いことだ。2周目であろうとそれ以上でもそれ以下でもなく、ただの渚だ」

何だそれ。

学秀がまさかこうも合理性に欠けることを言うとは思ってなくて、ぼくは笑みが込み上げてきた。

でもそれは誰かに、見て、欲しかったぼくを表す上で1番適切だったのかもしれない。

「……笑われると傷つくんだが」

「びつくりしたんだよ。あの浅野学秀が合理的じゃないから。学秀は2周目だとか、ぼくが何を望んでいるかを何もかも放り出して、相手を知る上ではどうでもいい、君はただの渚だって言う。結論を放り投げちゃってるよ」

「違うな。回り道をしたが、結論は出ているからね。渚がやろうとしていることが何であれ僕は協力する。それが僕の結論だ」

「約束する？」

「約束しよう」

「……ぼくが人を殺せって言ったなら、殺すの？」

ぼくはちよつとした意地悪をしなくなっただけで先生ナイフを差し出した。学秀が鼻で笑ってその手には応じないとナイフをあしらう。

「協力するとは言ったが、命令される覚えはない」

「屁理屈」

ぼくがぶいと顔を背けると、学秀が両頬を引つ張ってぼくの口を動かす。

「合理的、だろうか？」

学秀が苦笑する。それにつられてぼくも微笑んだ。

「それで運が良ければ世界征服でもする？」

「運が良ければという言い方は耳障りだな。殺せんせーを殺せたら必ず実現する未来だ」

殺せんせーを殺せたら。学秀は殺せんせーの過去も本当は死ぬ確率が1%だということも知らない。それを知ったら、殺せんせーを救おうと思うのだろうか。それとも夢の為に殺せんせーを殺す選択肢を取るのか。

「世界征服は危険じゃないのかな」

「殺し屋もな」

囁くように言われ、自分の夢を学秀に伝えてしまったことが頭に思い浮かんだ。失敗したかも、なんて消極的な気分になる。

その一方で世界征服と殺し屋という2つの夢の共通点に気づく。それはどちらも殺せんせーを殺したら夢に近づくということだ。超生物を殺した英雄になることと、難易度の高い暗殺を成功させた殺し屋になること。これは遠いようで近いことなのだろう。

「叶うといいね、お互い」

「……………渚」

「どうしたの？」

妙に緊張感のある意識の波長で眉を潜める。何か重要なことだろうか？

「もしも」

「あ、カルマ君」

学秀の背後の人影に思わずそう声を上げると、カルマ君はいつもの悪魔みたいな笑顔でスマホを構えていた。持ち方を見る限りではカメラを起動させているようで。さらにそのスマホは見るからにぼくらに向けられていて。首を捻ってカルマ君を観察した。学秀は眉間に皺を寄せてカルマ君を睨んでいる。

「何でお前が居るんだ、カルマ」

「やだなく学秀君。顔怖いつて。それに後ろで殺せんせーがメモ帳持ってニヤけてるから、別に俺だけじゃないしー」

そういう問題じゃない。

「殺せんせーはどこにでもいるからね」

「生徒のストーカーだからな」

「で？仲直りしたんだ」

「気づいてたんだね」

「まーね。2人と仲良い茅野ちゃんとか杉野だったら気づいてそーだけど、様子窺ってたんだろ〜ね」

ついこの前に茅野にスイーツパラダイスに連れて行かれ、思う存分食べようという展開になったことを思い出す。思い当たる点はそれ以外にもいくつかあり、ぼくらの周りは彼らなりに気を遣ってくれていたのだと理解した。それは学秀にも心当たりがあるようだ。

「理由は知らないし、俺は口出すつもりないよ。でも2人はそうやって一緒にいる方がいいんじゃない？じゃ、またね〜2人とも」

道を変えて違う方向へ行くカルマ君を見送る。駅ではなく、ゲームセンターへの方向だったりするのだが、それについてとやかく言うのはおかしいだろう。さっきの言葉を聞く限りでは彼は彼なりにぼくらに気を遣っていたのかもしれない。

「意外と良い奴だな、カルマは」

「カルマ君は良い人だよ」

学秀が指をぼくのおでこに持ってきた。パチリと音が鳴り、所謂デコピンにおでこを押さえる。

「いった……どうしたのいきなり」

「何でもない、気にするな」

後で聞いた話だとこの日、E組生徒数名と殺せんせーが何やら騒動を起こし、烏間先生の平穏を脅かしたのだという。頼んだ調べ事はもう少し先になりそうだ。

\*

ぼくは学秀も律も嫌いじゃない。むしろ好きだ。

テーブルにはぐちゃぐちゃに置かれた器材と到底料理とは言えない物たちが置かれていた。目を逸らす学秀と右側からチェンソーを出し、左手にイチゴ大福を持つ律を見てぼくは言葉を詰まらせる。ちなみに学秀は生け捕りにしたくぬどんを手に行っていた。次いでのように現れたメルは大きめの魚を啜えている。

殺せんせー、班を変えてください。

「今日の料理って何だったっけ」

「肉じゃがでしたよね!」

律は映像をパツと明るくし、肉じゃがの検索結果を表示する。そんな便利な機能があるなら肉じゃがの材料をもうちよつとちゃんと調べて欲しかった。学秀に目を移すと明後日の方向を向いて言い訳を始める。

「皿に乗せられた肉じゃがしか見たことがないからどんなスタートを切ればいいのか疑問だった」

「とりあえず肉じゃがに入っている食材持ってこよっか。まずくぬどんは食べられないし」

「食用じゃなかったのか」

「律はチェンソーで切ろうとしないで?!それにみかんもコーヒー豆も肉じゃがには入れないから?!」

「でも包丁で切るよりこの方が効率良いかと」

「わっ、めり込んでるめり込んでる!!」



机に吸い込まれるようにして消えたチエンソーにぼくは声を上げた。これはもう工作の授業と言っても過言ではない。

「渚、フグを入れた後はどうすればいいんだ？」

「えっと……え、肉じゃがにフグ?!しかも丸ごと入れたの?!」

「渚さん、野菜と豆腐が粉々になり消えたんですがどう致しましょう？」

「何でミンチにしたの!?!」

でも味付けは間違えてないし……食べれるぐらいにはなるはず。

ふと鍋に目をやると学秀が何かを鍋に入れているところだった。

「学秀!砂糖はもう入れたってば……ってその毒々しい瓶何?!」

「今、奥田さんから貰ったクロロ酢酸と硝酸カリウムを入れたところだ」

思わぬ伏兵がいた。

「奥田さん!!」

「すみません、渚さん。ビクトリア・フォールの資料と引き換えだったんです!まさか家庭科で使うとは思ってませんでした……」

それから数十分後、黄土色のぼくが知っているのとは違うシチューが完成した。具材はほぼミンチ、大きな魚やフルーツなど肉じゃがに入れるとは思えない食材の数々が入っている。そもそも肝心の豚肉とじゃがいもの姿が見当たらない。無機物が入っていないだけで多少マシンじゃないかとも思うが、それを言ってしまったらおしまいだろう。

「これは肉じゃがが……なんですか？」

殺せんせーの何とも言えないビミョーな顔を見てぼくは苦し紛れの笑顔たっぷりで鍋ごと殺せんせーに差し出した。しかしその鍋も溶け始めている。

「せ、先生さつき原さんの班の食べてお腹いっぱい」

「でも」

「生徒の作った料理を残すのって教師失格だと思うんだ、殺せんせー?PTAに告げ口しよっかな……」

「ひいつ。先生完食しますから!」

低めの声で脅すと殺せんせーが後退りして鍋を受け取る。PTA恐ろしさにやけ食いする先生をE組の生徒たちは生温かい目で見ていた。地球を爆破すると予告しているのにPTAにビビっているなんて、マツハ20の超生物の癖に意外とチキンだ。

「殺せんせーも何でこの班構成にしたかなー。明らかに地雷だよな」  
杉野君が皿に肉じゃがを盛り付けてぼやく。5人班を作る上で3人余ってしまい、転校生と監視役とぼくという謎の班構成がうまれた。律を参加させる時点で危ない予感はしていたが、工作も美術も得意なので平気だろうと思われたようだ。

「いや、殺せんせーの顔を見ろ」  
「死人みたいだ」

1周目でも見たことのない真顔のまま蒼ざめた殺せんせーがお腹を抑えて蹲っていた。無機物を平然と？み込む身体をしているくせに、マズすぎる物にはどうやら耐性がないようだ。

「調理実習何回かやったらいつか殺せるんじゃないの？」  
「よし、この班はこのままでいこう」

中村さんがポンと手を叩き、E組勢はそれに賛成する。出来れば被害者を増やしたくないというのが全員の総意だった。

「「ガンバレ、渚ちゃん」」  
「みんな酷いよ……」

「ごめんね、天使ちゃん。普通の肉じゃがが分けるからお願ひ」  
原さんが自分の班で作った美味しそうな肉じゃがをぼくの皿に装った。学秀の皿には村松君の班から肉じゃがが提供されている。

何とか2人から逃げて炊いた普通のご飯と一緒に食べ、ぼくはようやく一息ついた。

「それにしても学秀が料理出来ないなんて意外だよな。中1の頃からずっと姫希さんが頑なに調理室から隔離するから何かあるとは思っていたけど」

学秀は肩を竦める。自分の料理が下手という自覚はあまりないようだ。

「小学校の頃はほとんど参加したことがないからあまり分からない

な」

「良かったよ。殺せんせーじゃなかったら多分死んでると思う」

「律に関しては異次元過ぎて指摘もできねーよな」

「包丁の代わりにチェンソー……某探偵漫画に出てくる母親みたいね」

不破さんが意味あり気に何度か頷く。

「どうしましょう、渚さん。大変なことに気づいてしまいました」

律が蒼ざめた顔で画面の中で雪崩れ込んだ。その尋常じゃない顔つきにぼくは不安になる。

「どうしたの、律?」

「——お嫁に行けません」

「そこ?!」

「婿に行けない、だと」

「学秀ものらない」

「エプロンを着て未来の旦那さんに「ご飯とお風呂どっちがいいですか?それとも、わ・た・し?」と言うのが夢なのにショックですっ!」

「随分具体的だな!」

後ろを振り返ると殺せんせーがさっと視線を明後日の方向に向ける。間違いない。そういう夢を持つように「改造」したのは殺せんせーだ。

顔を手で覆って泣き始める律を周りは宥め始める。

「あーあ、泣かせた」

「渚ちゃんが2次元の女の子泣かせちゃった」

「そのネタまだ引きずるの?!」

「ぐすっ……結婚する時の条件として料理が出来ることを挙げる人は多く見られるようです」

涙を拭い、律は統計結果を表示した。その数字に学秀がハッと驚き落ち込む。

「そうなのか……料理が出来ないと婿の貰い手が……」

一緒になつて項垂れる2人にぼくは1周目と性格が違いすぎる!と頭を抱えた。そもそも学秀は婿に行くんじゃないかと嫁を貰うタイ

プだろう。

「あーもうーその時は2人ともぼくがもらってあげるから！」

シーンと静まり返った。ぼくは大声で言い過ぎてしまったのかと思いい、口を両手で押さえる。

「渚ちゃん男前……」

「いや、でも重婚じゃ？」

事態は余計ややこしくなった。最終的に不味い料理を食べさせられてゾンビのような顔をした殺せんせーがぼくらの班だけ調理実習やり直しを宣告し、無事に家庭科の授業は終わったのだった。

\*

Sex And The City.

ニューヨークのアラサー女子を取り巻く生活を描いた少し下ネタの効いた内容となっている。もちろん中学生向けではない。

こんなドラマを授業の教材にするなんて、ビッチ先生の授業はいつだって卑猥だ。

『せめて「ゴシップガール」にしてくれたら良かったのに』

英会話教室が開かれている中、ぼくはスペイン語で愚痴を零した。教室の端に隔離されている学秀とぼくはビッチ先生お墨付きの既に充分話せる生徒であり、授業の参加は最低限のものときさせられていた。

『その意見には私も賛成です。どちらにもニューヨークを舞台にしても、客観的な判断で見ると年代の近い「ゴシップガール」の方が

教材として適當かと』

スペイン語版律が伊達メガネをくいっと上に上げてぼくの眩きに応じた。彼女もまた隔離された生徒の1人だ。そしてぼくらの語学ごちゃ混ぜ会話に入つて来られる唯一の生徒だといえる。

『その判断が出来ないからビッチなんだろうな』

『ビッチ先生だもんね』

唐突に教卓から実弾がぼくらストレスレに撃たれる。咄嗟に避けるもマツハ20に慣れていない人だったら死んでいたはずだ。

「はいそこ! ビッチビッチ言わない。さり気なくスペイン語で会話しない! 今度から私の授業中は英語限定よ。If you speak other language, I will kiss you guys」

スイッチを切り替えて英語で話し始めるビッチ先生に生徒たちは騒ついた。先生は拳銃で天井を撃ち、生徒たちを黙らせる。

『あんたたちも今から英語で話しなさい。分からなかったら日本語を交えて解説するけど。やっぱり英語の授業を日本語でやるなんてバカバカしくてやってられないわ』

ビッチ先生が「これだから日本の英語教育は……」と文句を言う様は完全に一教師だった。その英語を分かった何名かの生徒たちは周りにビッチ先生が言った言葉を翻訳していく。その中には中村莉桜の姿もあった。

『先生さあ、雨漏りするから天井に穴開けるの止めない?』

『莉桜、あんたかなり喋れるじゃない』

中村さんからスラスラと出た砕けた口調の英語にビッチ先生は感心した。1周目の英語期末テスト学年1位、更には学年末テスト総合3位の座はダテではない。クラスで何でもこなす磯貝君でさえ英語限定授業でいきなり英語を話すのは無理のようだ。

『あたし英語はそこそこ得意なんだ。昔親に英会話教室通わされててさ。サンタクロースみたいな先生がめっちゃスパルタで』

『あーHarryだっけ。俺あの先生結構気に入ってたんだよね』

とカルマが英語で返事をする。普段は居眠りかサボりばかりの彼

だが、面白そうな気配がすると授業に参戦する小賢しいところがある。

『はあ?! あんたサボってばっかで全然出てなかったじゃん』

その話を理解した少数の生徒たちは首を傾げた。しかし誰も進んで英語を話そうとする勇者はいない。英語でカルマ君に質問したのは予想外の人物だった。

『えっと……同じ英語学校なんですか?』

英語があまり得意ではない奥田さんが乏しいボキャブラリーを振り絞って尋ねる。それに2人が頷き、ぼくは意外な接点に2人の英語力が高い理由が分かった気がした。

『そーそー。って言っても小学校の頃の話ね。こいつ全然気づかなかったんだけど』

『だって中村今みたいにギャルギャルしてなかったしさ』

英語でも普通のノリで会話する2人にE組の生徒たちは背中を押された。

その後は英語で話すのに違和感を感じる人が減り、授業が終わる頃には全員が英語で話すようになっていた。

『ビッチ先生最近、英語教師の方が本職みたいになって来たよね』

ビッチ先生にピアノを教わりながらそう指摘すると思い当たる節があるのかイラッとした顔でぼくを睨みつけた。お母さんの勧めで2周目では幼稚園の頃からピアノを習っていた。受験の時に止めてしまったけど、今もビッチ先生に暇さえあれば指導を受けている。暗殺の技術に加えるには持つてこいなスキルだからだ。

「なによ、渚。あんた馬鹿にしてるの?」

「ううん。変わらないこともあるんだなあって」

「そこ違うわ。Cよ」

楽譜の音符をABCで覚えているビッチ先生がぼくのミスをすぐさま指摘した。眉を潜め、C記号がドレミのどこに当たるのかを考える。

「Cってどこだっけ。ドレミの方が絶対分かりやすいよ」

「あんたが海外式に慣れればいいじゃない」

「危

ない！」

視界に捉えた吹き矢を掴み、ぼくは吹き矢が飛んできた方向を睨みつけた。

「あんたいつの間そんな技術……」

「マツハ20の先生を持つてると動体視力が良くなるんだ。今のは完全にビッチ先生を狙ってみたいだけだ」

殺せんせーじゃなくて何故ビッチ先生が狙われるんだろう。殺し屋だから敵討ちかな？でも、1周目でこんなこと無かったはずだし……

「え……タコじゃなくて私を狙ったの？」

『大した弟子だな、イリーナ』

『師匠……！』

聞いたことのない言語にぼくは少し頭を傾ける。そして吹き矢を今度はぼくから相手に投げつけた。矢はすんでのところで相手に刺さらず、壁にぶち当たり床に落ちる。

顔を上げて相手を見るとようやく状況が見えてきた。ビッチ先生の師匠のロヴロさんだ。ロヴロさんがこの時期に来たことをすっかり忘れていた。確かビッチ先生を撤退させるために来たんだっけ。

『よろしければぼくの分かる言語で話してくださいませんか、ロヴロさん』

とりあえず誰でも話せる英語で相手に声をかけるとロヴロさんはぼくのことを視界に捉えた。

「日本語で構わない。君は？」

「渚です。ビッチ先生から暗殺技術を教えてもらっていて」

「ビッチ先生……ああ、イリーナのことか。随分子供好きになったようだな、イリーナ」

「何の騒ぎだ、一体」

教室のドアを勢い良く開けた鳥間先生はピアノの音が不意に止んだことと、聞き慣れない声が出たことで不審に思ったらしい。動物のような勘を持っている。

「お前は何者だ？」

「イリーナ・イエラビッチをこの国に斡旋した者だ」

「……！」

「ところで殺せんせーは今どこに？」

「1時間前にイタリアにピザ食べに行っただので、そろそろ戻るかと」

ウィーンという機械音と共に四角い自動販売機もどきが登場した。後ろを振り返るとニッコリと微笑む律がロヴロさんに手を振っている。

「お久しぶりですね！ロヴロさん」

「お前もすっかり改造されたようだ。なかなか侮れん相手だな、あの怪物は」

ロヴロさんはビッチ先生と律を交互に見やり、彼の想像していた本来の暗殺者像に合わないことに悲観した。2人には殺し屋の影は微塵もない。ただのビッチ教師と自動販売機だ。

「今日限りで撤回しろ、イリーナ。お前にこの仕事は無理だ」

「そんな……！師匠、私殺れます！」

「撤回は止めましょう。正しい選択肢ではないです」

自動販売機モードの律が彼にいちご煮オレを渡す。ロヴロさんは何が起こったのか不思議そうな顔で身体を硬直させ、それでもストローをさしたいいちご煮オレを一口飲んだ。

「自律思考固定砲台であった私は自律思考自動販売機型移動砲台へと進化しました。おっしゃる通り、私もイリーナ先生もE組に来て変わったと言えるでしょう。しかしロヴロさんがイリーナ先生を殺し屋として辞めさせようとしているのならそれは見当違いです」

「何が言いたい？」

「ビッチ先生はぼくらの教師だからです

暗殺

の」

「イリーナ先生をここに留めてください。撤回は止めましょう」

ロヴロさんは律のことを再度見た。その目には律は映っておらず、何やら考えているらしい。一方ビッチ先生は感動の涙を零していた。

「あんたたち……」

「……………弟子に感謝するんだな。撤回は止めにする」



ロヴロさんは目を閉じ、淡々と告げた。意外とあっさり引き下がったロヴロさんにまたズレを感じて律に視線を送る。同じ殺し屋からの意見を言われるとロヴロさんも断りづらいのだろうか。

律のことをじっと見ているとぼくの視線に気づいた律が小声で耳打ちしてきた。

「渚さん、行かなくていいのですか？今ならチャンスかと思われませんが」

「チャンス……あ、そっか」

ロヴロさんは元殺し屋でビッチ先生の師匠だ。クラブスタナーの元である猫騙しを教えてくれたのも彼だった。しかしそれを指摘するところ、ぼくの将来の夢を何故か知っているところは律もなかなか悔れない。

「何なのよ、チャンスって」

「ビッチ先生。ピアノのレッスン、今日はもういいから。3人もまた明日」

楽譜をスクールバッグにしまい、駆け足で廊下に向かう。背の高い後ろ姿を大声で呼び止めた。

「ロヴロさんー！」

「……？」

「殺し屋になりたいんです。ぼくに仕事をください」

頭を下げてくださいするのは初めてのことじゃなかった。でもただただ真剣だったから、背後に誰かいたことに気づかなかったのだ。

ロヴロさんは立ち止まり、ぼくの後方に目をやる。後ろを振り返ると、哀しそうな顔をした殺せんせーが立っていた。

「だめですよ、渚さん」

異質のはなし。

「だめですよ、渚さん」

ぼくを引き留めた触手からじんわりと熱が伝わってくる。殺せんせーが元殺し屋で、それが理由で苦勞してきたことは理解していた。殺せんせーにぼくの将来の夢がバレないようにある程度セーブしてきたのはそれが理由だ。

でももう誤魔化せない。殺し屋になりたい。自分に暗殺の才能があるって初めて知った時は、ただ漠然と殺し屋になるべきなんじゃないかと思った。ぼくにはそれ以外才能がなかったから。2周目になって、ぼくが殺し屋になりたい理由は誰かを救いたいと願ったからだ。

「殺せんせー、ぼくは……」

「ほう、それではこのタコのような身体をした奴が？」

ロヴロさんはぼくの言葉を遮り、目の前の標的に興味を示し始める。殺せんせーは1本の触手をロヴロさんに差し出し握手を求めた。

「初めまして。渚さんの担任教師をしています、殺せんせーです」

「ロヴロ。イリーナ・イエラビッチを送り込んだ者だ」

2人は握手を交わした。先生の触手もロヴロさんの手も何故か力がこもっており、力比べになっているような気がするのはいのちのせいではなさそうだ。

「渚……と言ったな。君は殺し屋になりたいと？危険な仕事だ。それに裏世界で生きなくてはならなくなる」

「ならなきや、だめなんです」

ぎゅつと拳を握りしめた。ロヴロさんはぼくの目に籠った殺意に気づいたらしく、ふむと考え込む。

「……何やら事情があるようだ」

「だとしても渚さん。いけませんよ」

「何で？殺し屋になったらだめなの？」

殺せんせーは困った顔で頭を掻く。ぼくは何を言われるのかと身構えて、意外な言葉に目をぱちくりとしてしまった。

「柵ヶ丘中学校は校則でアルバイトは禁止ですからねえ」

「あ」

そういえばそんな校則もあったっけ。

てつきり殺せんせーが殺し屋の夢に猛反対しているから止めるのだと思っていた。ぼくは一気に脱力した。

そっか……校則はどうにも出来ないや。

「校則か。残念だな」

ロヴロさんは顎に手を当ててぼくを見定めるような視線で見やる。

「先ほどの吹き矢を止める動体視力。年齢が6、7歳程度に見えるのもちようど良い。何よりも才能がある。ふむ、惜しい人材だ」

「プライベートの電話番号だ。この業界も近頃は人手が足りないものでね。平凡な日常を捨てる覚悟ができたらかけるといい」

「分かりました」

山を下っていくロヴロさんを見送り、殺せんせーと向き直る。

「先生は渚さんの選択に関してどうこう言うことはしません。ただ、一度考え直してください。簡単に選択していい職業ではない――

「殺せんせー」

「正しくないことは分かっているんだ。でもさ、もう取り返しがつかないところまで来てるんだよ」

殺せんせーが言いたいことは理解していた。でもその理解の上にある絶対に破られてはいけない感情が殺し屋になりたいという決意だった。

「それほどまでに成りたいんですか？確かに渚さんには才能がある。でも、おすすめるはしない」

「ぼくの人生はぼくのものだ。先生も言っていたのに」

殺せんせーは前の時のように普通に応援してくれないのだろうか。ぼくが教師を目指した時は明るい顔でとても嬉しそうだったのに、今は暗い。何だか喪失感すら感じる。

「渚。どこに居るかと思えば……何か取り込んでいる最中だったか？」

A組の用事から戻って来た学秀はぼくらを見つめ、あまりにシリア

スな雰囲気に困惑していた。

「ごめん、今行くから。またね、殺せんせー」

「また明日、渚さん」

事務的な挨拶をして、ぼくは学秀に「行こっ」と声をかける。

「何の話をしていた？」

「ロヴロさんっていうビッチ先生の師匠さんが来ていたからね、仕事したいってお願いしたんだ。でもうちの学校アルバイト禁止だからさ」

「校則は僕にもどうすることも出来ないからね。訓練から受けさせてもらう見習いという手は？」

それは既に考えたんだよなあと苦笑い気味に首を振った。ロヴロさんの殺し屋の訓練——そこから想定されるのはビッチ先生と同じレベルの技術ということ。彼女が色仕掛けに特化していると言うのもあるが、現役でないロヴロさんに烏間先生の指導を超えるものが出来るかと尋ねられると否だ。

「訓練なら烏間先生のが上。まあ1周目と同じ訓練内容だから何とも言えないけどね。それに訓練からやれば……みたいな、そんな軽い気持ちで殺し屋になれるわけないから」

「だろうな。だからこそ、渚の夢にはあまり賛成できない」

意外な否定の言葉にぼくは立ち止まった。てつきり学秀は賛成しているものと決めつけていたため、その言葉に疑問をぶつける。

「何で？」

「それは……心配だからに決まっているだろう。もともと災難に遭いやすい渚が殺し屋になったら、最悪の結末を迎える可能性だってある」

「そっか……ごめん」

学秀に謝って、その意見には一理あるなと頷く。ぼくはしよつちゆう危機に見舞われるある意味で不幸体質なのに、殺し屋になったら死ぬ確率を上げているようなものだ。

「先生も心配しているから止めるんだと思うよ」

「分かってる、だからこそ酷いんだ。元殺し屋として失敗して欲しく

ないっていう考えが伝わっちゃうから……」

殺し屋になつてほしくない。あまりおすすめしない。その言い方じゃあまるでぼくが先生の2周目みたいじゃないか。自分の失敗を繰り返して欲しくないから違う道に誘導する。殺せんせーはぼくのことを尊重してくれていると思つていただけ、お母さんとやっていることは同じだ。

ぼくは誰の2周目でもない。誰かの人生のやり直しなんて、自分のだけで充分だ。

「元殺し屋……つて殺せんせーが？」

「そうだよ」

「大切にされているだけなのにな」

学秀の言葉に思わず黙り込む。気づいてた。でもだからこそ、悔しいじゃないか。殺せんせーの気持ちが分かっちゃう分、善意を余計だと感じてしまうぼくがいる。

「でもなりたいたいんだもん、殺し屋」

拗ねた声でぶつぶつ文句を言うぼくに学秀は「気持ちは分からないでもない」と大きく頷いた。学秀曰く、世界征服の夢を理事長に持ち出して苦い顔をされたことがあるらしい。そしてその理由は理事長も同じことを目指して失敗しているからだという。

学秀のはあまりにもスケールが大きい話だがどこにでもいるものだなあ、自分の失敗を他人に重ねる人。何だか納得して、ぼくはどうにか怒りを鎮めた。

アルバイトは校則で禁止されているから今なるのは無理だ。でも、中学卒業したら本格的に殺し屋になることを進学相談の時にさり気なく出してみよう。そう決意して、ぼくは帰路を急いだ。

\*

雨が止まない中、殺せんせーが2度目の転校生について説明をする。反応はあまり芳しくなく、みんな律の経験からどこか悟った顔をしていた。

「まーた転校生か」

「どうせ殺し屋だろ」

「律さんの前例がありますからねえ。今回は油断しませんよ。何にせよ、暗殺者が増えるのは良いことです」

「律、お前は何か聞いていないか？」

「はい、情報料500円です」

学秀の席の後ろで自動販売機営業を行う律に磯貝君が言葉を投げかけると、律は営業スマイルを浮かべ情報料を請求した。500円はちよつとと渋るクラスメイトたちを前に学秀が情報料500円を渡し、律は雄弁に語り始めた。

「堀部糸成。政府によって手配された暗殺者の1人ではありませんが、殺し屋ではなく戦闘要員です。政府の提案では同時投入の予定でした。私の遠距離射撃と彼の近距離戦闘でなら殺せんせーを殺せると判断してのことでしょう」

「でも律は先に来たんだよね。何で？」

「理由は3つあります。1つは彼の体調管理が万全ではなかったこと。2つ目は私自身が早期投入されるべきだと判断したこと。そして最後は――

私が暗殺者として彼より圧倒的に劣ると想定されたから」

殺せんせーの腕を3本も飛ばしたのにな？と生徒たちは冷や汗を流す。

「そういうことは律より高性能の砲台？」

「ガ○ダムかもよ」

「魔人とか電人じゃね？」

「電人H A L I じゃあるまいし、第一キャラが被る転校生なんて願わんげ」

「不破さん、自重」

メタ発言が続く不破さんを片岡さんは飼い犬に「ハウス」と言うような感覚で止めた。一方でぼくが転校生について知っていると考えた学秀がフランス語で呟く。周りはまたいつもの語学会話だという具合に無視した。

『渚、どんな奴が来るんだ？』

『うーん……教えたんだけど学秀にも驚いて欲しいからなあ。内緒』

『驚く？僕が驚くほどの殺し屋が来るのか？』

疑わしげに呟く学秀に、僕はむーっと唸った。思い返すと今までの殺し屋に対して、学秀は一度だって驚いた顔をしなかった。それが外国人であろうと人工知能であろうと通常通りの反応を示すのだ。

でも今回は  
触手持ちのイトナ君には驚くに  
違くない。

期待に胸を膨らませ学秀がわあっと驚く姿を想像する。いや、案外ええ！っと声を上げるのかも。

ドアがガラリと開き、白装束の男が現れる。学秀の驚く様をイメージしてウキウキしていたぼくは途端に気分を沈めた。茅野が死んだ元凶が自分はシロですとばかりに歩いている。この場で刺したいぐらいだ。殺意をどうにか抑えてぼくは男の手品に感心しているフリをした。

「すまないね。私は転校生の保護者だよ。まあ白いから、シロとでも呼んでくれ」

シロ。許すもんか。イトナ君を使ってこの教室に立ち入ったことも、殺せんせーのことも、雪村先生のこと。ぼくは決して彼を許さうとは思わない。

「びつくりした……いきなり白装束で手品したら誰だって驚くよね」「うん。そういうK Yな保護者は自宅待機していて欲しいよね。殺せ

んせーも無駄にビビっちゃうし」

奥田さんの毒を借りて液化化した殺せんせーをチキンだなあと呆れた目で見上げた。

「ビビってんじゃねーよー!」

「まだ攻撃もされてないじゃんか!」

「にゅやっ、律さんがおつかない話するもんで思わず逃げてしまいました」

「初めましてシロさん。転校生はどちらに?」

「初めまして殺せんせー。ちよつと癖の強い子だね。私も保護者としてしばらく居させていただきますよ」

シロは教室中を見回し、学秀の方に視線を寄越した。この中で一番強い生徒が学秀だと見破ったのかもしれない。そして更に僕の隣に視線を向け、自分の義理の妹がいることを受け意識の波長の波が揺れた。それも3秒間ほどで静まったが。

「何か?」

殺せんせーが相手が生徒たちを観察していることに懐疑的になり尋ねる。シロは大したことはないとばかりに首を振った。

「いえいえ。みんな良い子そうで。これならあの子も馴染めそうだし、イトナ!入っておいで」

みんなが固唾を呑んで教室のドアを見守る中、ぼくの視線だけは座席後ろの壁に注がれていた。

が、クラスのほぼ全員の想像を斜め上に上回り壁をぶち破って入ってくる転校生に、クラス全員は心の悲鳴を上げた。

ドアから入れ!と。

「俺は勝った。この教室の壁よりも強い事が証明された……それだけでいい」

胡散臭そうにイトナ君を見た学秀はぼくに目配せをした。その顔には驚くとは言っていたけどこんな登場の仕方は聞いてないぞと書いてあった。

「おい、その首のファーと制服。校則はちゃんと見たのか?」

今はそんなこと誰も気にしないよ?!



生徒会長らしいお堅い発言にぼくはイトナ君に触手で滅多斬りにされないか気が気ではなかった。ハラハラしてもしもの時のために対先生ナイフを握りしめる。しかしそれは杞憂だったようだ。

イトナ君はキョロキョロと教室内を見渡し、席を立った。

「お前はこのクラスで1番強い。でも安心しろ。俺より弱いから

俺はお前を殺さない」

「僕がお前より弱いだと?」

学秀が相手の腕を掴み戦闘態勢に入った。イトナ君も獲物を見る目つきで学秀を睨んでいる。

「だーめだってば」

イトナ君の背後から現れたぼくはイトナ君の頭に対先生ナイフの柄を押しつけ、学秀ににっこりと微笑みかけた。触手の影響で集中力が散漫なイトナ君の意識は攻撃面が強く、防御が薄い。更に意識の波長が人に比べて荒んでおり、彼の後ろを取ることは案外容易に達成できた。呆氣に取られたイトナ君がぼくの登場に息を呑む。

「お前今どこから——?」

「普通に前から来たよ?」

彼の返事に首を傾げてぼくは学秀に向けて忠告をした。

「転校生に喧嘩売るなんて、E組監視役としてやっちゃいけないでしょ。ね?」

「……それもそうだな」

学秀はイトナ君の頭とぼくの対先生ナイフを交互に見やる。ピクリと眉を上げたところからするともう気づいちゃったみたいだ。

「俺は自分より弱い奴とは闘わない。だからお前、その手を退けろ」

「渚だよ。よろしくね」

笑顔で自己紹介をするぼくにクラスメイトたちはざわめきたった。クラスで1番小柄な女子。しかも弱そうときた。そんなぼくが得体の知れない転校生に愛想良く振舞っている。自殺行動だと考えているようだ。

普通の反応としては好奇心を示すか、恐れを持って傍観者となるかの2択だ。稀にいる強者として学秀のように敵意を持つこともある

がそれは例外といって良いだろう。更に例外中の例外がぼくのように親しみを持って接することだ。

「渚? お前がああ……」

「何の話?」

イトナ君の言葉にキョトンとまた首を傾げると彼は我に返って低い声を発した。

「……話しかけるな。弱い奴に興味はない。俺が興味あるのは俺より強いかもしれない奴だけ」

教卓の前まで向かい、殺せんせーを見上げる。その目にはシロによって植えつけられた殺意が燃え上がっていた。

「この教室ではあんただけだ、殺せんせー」

「強い弱いというのは喧嘩の話ですか? そんなレベルでは先生と同じ次元には立てませんよ」

羊羹を包みごと齧る殺せんせーに、イトナ君は全く同じ羊羹を取り出した。

「立てるさ」  
「だって俺たち血を分けた兄弟なんだから」

「……兄弟?!?!」

クラスに大声が響き渡った。

\*

昼休み。クラス中に衝撃を与えたイトナ君を周りは遠巻きに眺めていた。それは彼が異質だったからで、来て早々放課後に勝負を申し

込んだからでもあり、昼食に物凄い勢いで甘いものを食べているところに殺せんせーとの類似点を見出しているからだろう。

「甘党なところは殺せんせーと一緒にか」

そう呟いたのは前原君だ。それに付け加えるように磯貝君が発言する。

「あとは表情が読みづらいところとか？」

「それにしても……天使ちゃんは何を考えてるんだ？」

イトナ君の机の前に自分の椅子を持って来て、食事を共にするぼくに2人は首を傾げていた。それは他の生徒たちも同じだ。構わずぼくはイトナ君に質問責めを繰り返す。話が全く展開していかないが、一応答えてはくれるので嫌われてはいないのだろう。

「イトナ君、強いとか弱いとかってどうやって判断してるの？」

「見たら大体分かる」

「へえ……ぼくって弱い？」

「このクラスで最底辺の弱さだ」

「ふふつ、心外だなあ」

ぼくは机に乗ったお菓子だらけの中にそつと自分のスペースを作りお弁当を平らげていた。周りの視線が痛いほど降りかかってくるが、そんなことは関係ない。ぼくにとってイトナ君と友達になることは今最も重要な課題の1つだからだ。

『何のつもりだ、渚』

『ごめん、まだ秘密』

隣からの低い声で呟かれたスペイン語に素っ気なく返す。学秀はまたそれかそのため息を吐いた。

「さて、今日買ったグラビアでも読みますか。これぞ大人の嗜み」

殺せんせーが鼻歌混じりにグラビア雑誌を開くと、それに合わせたかのように同じグラビア雑誌を出し始めるイトナ君。趣味嗜好が合っているにも程がある。

「巨乳好きなの？茅野に殺されないように気をつけてね」

(めっちゃ普通に注意してる?!)

「茅野って？」

イトナ君は首を傾げる。

「あの子」

プリンを頬張る茅野を指差した。イトナ君はじーつと5秒彼女を見つめ、ぼくに向き直って一言漏らす。

「……かわいいそう」

「何が?!」

ああもう。確定しちゃったなあ。茅野の殺意がイトナ君に注がれているし。ぼくは遅かったかため息を吐いた。

昼休みが終わると気まぐれなイトナ君はまたどこかに姿を消した。触手をつけた状態での勉強はやはり厳しいのだろう。そう考えると普通に教室にいる茅野にはやっぱりびっくりさせられる。

ぼくはE組に来て初めて仮病を使い、イトナ君を追った。

崖間際の大きな木に座って漫画を読む彼を発見し、ぼくはイトナ君の兄弟設定はあくまで設定なのだとしみじみ思う。副作用で甘党と巨乳好きだとはいえ、彼はプライベート環境では殺せんせーの好みではなさそうな漫画も読む。そんな普通の中学生なのだ。

「イトナ君、授業受けないの?」

「サボる」

「そっか。ぼくもサボろっかな」

木のイトナ君が居る位置まで登り、隣に腰をかける。イトナ君はぼくのことをじつと見て淡々と言った。

「……律が、お前はイレギュラーだと言った」

「律がそんなことを? まあ、合ってるよ」

「仲良くしようとするのはそれが理由か? 俺がお前と同じで人と違うから……同族意識か?」

違うよ、とぼくは首を振った。君はみんなと同じでぼくが異質なんだ、と心の中で呟く。

「ぼくはね、イトナ君。君が本当はE組のみんなと話したいんじゃないかなって思ったんだ」

「っ、何を根拠に……」

「みんなの話、実はこっそり聞いていたよね。それに、ぼくに話しかけ

られても無視しなかった。独りになりたい人は無視するよ」

1 周目の時、イトナ君は転校早々孤立していた。転校生暗殺者なので無理はないが、そんな彼だって誰かと話したかっただろうし、誰かに話しかけられて欲しかったはずだ。1 周目のぼくは顔色を伺うその性格から何となくそれを理解していて、それなのに無視した。彼は異質だったから。殺せんせーを殺すと断言した謎の転校生に話しかける勇気がなかったのだ。

でも今は違う。ぼくはイトナ君の手の内を知っているし、イトナ君と仲良くなりたいと思っている。おまけとして1つの目的があるが、そうでなくてもイトナ君と友達になりたい。

ぼくは続けて言葉を紡ぎだした。

「殺せんせーの兄弟設定なんてシロに押し付けられたもの、望んでやってるわけじゃないよね。ただの副作用」

「お前、触手のこと知ってるのか？」

「うん。捨てちゃいなよ、そんなもの。そんな、頭を掻き回すいやな武器。強くなるのにそんなもの要らないよ」

「俺、は……」

後ろに回した手に対先生ナイフを持ち、ぼくはイトナ君に近づいていく。少し狼狽え、殺意を無くした彼にもらったとばかりにナイフを振り上げる。1つの声にその行動は邪魔された。

「イトナ、こんなところに居たのか」

シロの姿に対先生ナイフを持つ手を引っ込めた。もう少しだったのにと惜しみ、彼の登場でイトナ君の触手を抜くことを諦める。どちらにせよ、今の彼は触手への執着心が簡単に消えていないし、簡単に引っこ抜けるなんてことはないはず。その時、ぼくは茅野にやった方法を思い出し、その手があったかと頭を抱えた。とはいえ、シロがいる以上それは不可能だ。彼は確か麻醉銃を持っていて、ぼくがそんなことをしようものならすぐにイトナ君かぼく、もしくは両方が眠らされてしまうだろう。

「じゃあね、イトナ君。ソレ、要らなくなったら教えて」

耳元で囁き、木から下りる。シロは興味深々とばかりにぼくを頭の

てっぺんからつま先まで見下ろした。

「何の真似かな、君」

「クラスメイトを助けようと思っただけですよ。イトナ君、苦しそうだったのだから」

「必要ないね」

「それはあなたの方だ」

ぼくとシロは互いに睨み合った。しかしすぐに踵を返して旧校舎に向かい、ぼくは殺せんせーの授業に舞い戻ったのだった。

触手のはなし。

放課後になり、殺せんせーとイトナ君の試合形式の暗殺がスタートする。いつもならすぐに家に帰るみんなも転校生暗殺者の試合という事で注目しているようだ。

「ただの暗殺じゃあつまらないよね、殺せんせー。ルールとしてリングの外に足が出たら死刑っていうのはどうだい？」

「いいでしょう。その代わり生徒に手を出してはダメですよ」

シロの提案を殺せんせーは潔く呑んだ。殺せんせーからの申し出はシロに自分の弱点を知らしめているだけではないかという気にさせられる。現にシロは生徒を人質に使った暗殺をするのだから、この時にそれを察知したのだろう。

「では審判は私、律がいたしましょう！」

律はサッカーの審判をイメージしているのか超体育着のスカート版に笛をぶら下げている。ノリノリだ。クラスメイトがみんな引くぐらいこの場を楽しんでる。

「いちについて……暗殺開始！」

開始と同時に斬り落とされた触手に、クラス中の視線は1つの場所に集まっていた。それは殺せんせーの斬られた触手

ではなく、イトナ君の頭から出た無数の触手。

「触手?!」

驚くと同時に「なるほどね」という納得の声も聞こえる。兄弟

人とタコではあり得ない話だが、同じ触手持ちだからという話なら理解できる。殺せんせーが先に造られて、後に造られた2号がイトナ君なのだろうと。

「な、なんとイトナ選手！触手を出してきましたー！これは殺せんせーの反応が気になるところですね

空気を読まない律の解説にいくらか冷静さを取り戻す生徒も多い。律のいう殺せんせーの反応はひと言で言うほど怒りだった。真っ黒い顔は憤怒しており、触手は小刻みに震えている。ぼくがこの怒りをもう一度見ることになるんなら触手を使うのは止めとこうかなと思

うほど、殺せんせーは激怒していた。

「どこで手に入れたッ！その触手は」

「おや。何か嫌なことを思い出した顔だね。でもこれで分かったろう？イトナが紛れもなく君の弟だということが」

シロの言葉に殺せんせーは目をギラリと光らせた。相手の正体が誰なのか思い当たったのだろうか。

「どうやらあなたに話を聞く必要があるようだ」

殺せんせーが珍しく動揺している。シロが次の行動を取る前に隣を見れば、学秀がイトナ君の触手に対して「確かに弟だな」と大きく納得していた。

「もつとも渚が対先生ナイフを使った時点で気が付いていたが」

「ああ……やっぱり分かってたんだ」

驚く顔見たかったんだけどなあ。一筋縄ではいかないようだ。

「シロ選手補助。圧力光線を放ちました！ここで律の考察をしましょう。殺せんせーは至近距離で圧力光線を浴びると触手細胞がダイラタント挙動を起こし、2. 36秒間の硬直をする模様です。便利ですね！明日からこの圧力光線は5万円で販売されますので、興味のある方は自動販売機、律、まで」

「誰が買うか?!」

あからさまなダイマとぼったくりをする律に全員が突っ込んだ。律の解説は見事にシロの台詞を全て奪っており、何故その原理を知っているんだとばかりに律を見やるシロが少し滑稽に見えた。それにしても5万円か……高すぎる。自販機で買えるなら買いたいんだけどなあ。

悩んでいると横から学秀が話しかけてきた。

「ところで渚、中2の時に行った施設、触手について研究していたらしいよ」

「え？あ、うわ……」

ちやっかり調べてたな、学秀。

予想外の事態に慌ててふためき、言い訳を思いつかずに目を明後日の方向に向ける。それは自白をしているも同然だった。



「あの時会ったのはどこの高速マッハなタコちゃん先生だったんだろうね」

すつと薄く目を細める学秀に更にうつと言葉をを詰まらせた。ぼくが寄越したヒントと全く同じ言い方は前々から知ってはいたけどという前置きのように聞こえた。

バ・レ・て・る。

よくよく考えたら研究施設に潜入なんて、普通の中学生がすることじゃない。E組にいた時の感覚でやってしまったけど、あれでも一般人の学秀からしたら「研究施設に何しに行くんだこいつ」って不審がられて調べたんだろうなあ。

ぼくらがそんなのんびりとしたやり取りをしている中、試合はイトナ君の優勢で進んでいた。何本もの触手に攻撃された殺せんせーが天井に逃げる様子を律が殺せんせーを追う自身のカメラで状況を見極め、解説していく。

「殺られた?! 殺選手殺られたか?! いや、これは脱皮のようですよ!! 殺選手、なんと天井におりました!」

「脱皮……ね。そういえばそんなのもあったつけ。でもね、殺せんせー。それにも弱点があるのを知ってるよ」

シロによつて語られた殺せんせーの弱点。脱皮直後と再生直後にスピードが低下すること。E組の教室内に仕掛けられたカメラからもそれは判明していた。ただし、それは極々僅かな変化であり、通常の間はその速さに気づけはしないということも理解されていた。

そのため、クラス全員は僅かに低下したスピードに追いつけるイトナ君を見て焦りを感じていた。

殺せないはずの先生が殺されるかもしれない

自分たちでない誰かの手によつて。もしも殺し屋が来て先生を殺してしまつたら。まさに中間テストの時に殺せんせーの言っていた例だ。

「ねえ天使ちゃん。イトナ君が殺せんせーを殺せたら、地球は救えるんだよね」

「そうだね」

「何でだろう。全然嬉しくないや」

倉橋さんは唇を軽く噛んだ。ぼくはE組全体を見渡し、雰囲気が変わったのを察する。

本当は地球を救うために、とかなんて大それたこと思ってる生徒はほとんどいない。賞金に釣られて始めた暗殺だけど、ビッチ先生や律のような暗殺者が来るにつれてE組の中で1つの想いが芽生えつつあった。

E組ぼくらが殺したいと。

「どこの世界でも考えることは同じなんだね」

あの時ぼくも先生が殺されてしまうかもしれないことに焦った。そこで悔しさを感じたのをよく覚えている。

その感情を、緊張を、意識の波長を肌身に感じ、E組の殺意がまとまった。

ぼくはこの空気が堪らなく好きだ。

「さて、イトナ選手が圧倒的に有利なこの状況!!殺選手は一体どうするのでしょうか?ここで律からのお助けタイムです」

律が対先生ナイフを体内で形成し、殺せんせーに超高速で飛ばした。

「対先生ナイフを作る約束でしたから」

律の言葉にそれを約束した女子生徒が眉を潜めた。約束はしたにしろ、今使うの?という反応だ。

「律、何でイトナ君の味方してるんだろう?」

茅野が耳打ちしてきた。ぼくは律をじーつと見て、少し記憶を遡って彼女の行動の真意に気づく。

「……違う。律はきつと」

ぼくの視線に気づいた律はウインクをした。それが彼女の行動の全てを語っていた。

「殺れ、イトナ」

イトナ君が触手を振り上げた。殺せんせーに向けられた触手が、床に打ち付けられてベチャリと溶ける音がした。殺せんせーは律に投げつけられた対先生ナイフをハンカチで掴み、床に落としていたの

だ。

殺せんせーはイトナ君を脱皮した抜け殻で包み、ジタバタする様子を眺める。そして律の方向を振り返り、お礼を言った。

「……ありがとうございます、律さん。おかげで助かりました」

「お褒めにあずかり光栄です、殺せんせー」

にっこりと微笑んで律は照れくさそうに髪を触った。律のお助けタイム。シロからすればイトナに対する助けに聞こえる。だからこそ、それを狙つての対先生ナイフなのだ。名称からは殺せんせーのみに効く武器だと思われがちだ。つまり本当ならば対先生ナイフと名付けられるべきではない。

対触手ナイフ。それがこのナイフの本当の名称であり、実際の使い方だ。

「同じ触手持ちなら好みや思考も似通っている。ようするに、弱点も同じなんですよ」

先生はイトナを包んだ抜け殻を窓に投げ飛ばした。

「先生の抜け殻で包んだのでダメージはないはずです。でも君はリングの外にいる。先生の勝ちですねえ」

緑のしましまで余裕気に笑う殺せんせーを錯乱した表情で倒れたイトナ君は見上げる。

「俺が……負けた……？勝てない、俺……が弱い……？」

そんなはずはない。彼の触手はそう言っているような気がした。イトナ君の触手が黒く染まっっていく。

「俺は強い……この触手で強くなった——誰よりも」

ぼくの指がイトナ君の首筋に突きつけられている。彼の脈が、呼吸が、意識の波長が緩やかに戻った。

彼の思考はクリアになっただろう。殺意が緩やかに消え去り、静かに一定の脈拍を保つ。ぼくはそっと相手の殺意が戻らない内に小さく囁いた。

「落ち着こう。ね？」

「渚……」

「イトナ君。E組に来ようよ。今のイトナ君は確かに強い。でも、殺

せんせーを殺すには教室にいなきや分かんないことが多いんだ」

「俺は……仲良しごっここの為に来たんじゃない。あいつを殺しに来たんだ」

「イトナ、帰ろうか。殺せんせー、転入早々で申し訳ないですが、しばらく休学させていただきますよ。この子の精神状態は学校に通わせられるものじゃない」

「待ってください。1度E組に入ったからには教師として卒業まで見届ける責任があります。それからあなたにも話を聞きたい」

殺せんせーがシロの肩に触れると、触手がどろりと溶けた。

「対触手繊維。君は私に触手1本触れられない」

殺せんせーは自身の触手が溶けているのを感慨深そうに眺めた。

今日は随分触手のダメージを受ける日である。

「来い、イトナ」

イトナ君は無言でシロについて行った。途中で振り返り、ぼくと目が合う。こういう時、何て言えばいいんだろう。そうふと考え、当たり障りのない言葉を彼に送った。よく考えたらそんな言葉でさえ、彼には物珍しかったかもしれない。

「イトナ君、またE組に来てね。待ってるから」

彼はぼくの言葉に無言でコクリと頷き、シロの後を追いかけた。彼はその後1度も後ろを振り返らなかった。

\*

放課後、ぼくらは殺せんせーに過去について尋ねた。良い返事は得られず、先生のアドバイスは1つだった。知りたければ殺してみろ――  
その脅しとも受け取れるアドバイスを導かれるように生徒たちは一層殺意を高まらせていく。

「鳥間先生に暗殺についてもっと教えてほしいって頼みに行こうとおもうんだけど、どうかな?」

いつものように提案をしたのは磯貝君だった。暗殺に積極的な生徒の数名がそれに賛同していく。

「賛成〜」

「俺らの手で担任を殺したいもんな」

「他の暗殺者に先越されたくないもんね〜」

「ごめん! あたし今日は限定プリン買いに行きたいからまた今度ね」

「そっか。また明日、茅野」

茅野が足早に教室を出て行った。磯貝君はぼくに目線を移す。

「あ、ぼく殺せんせーに用事あるから後から参加するね」

「分かった。浅野も?」

「ああ、そうだな」

学秀はぼくの目配せに頷いた。ほとんどの暗殺に積極的な生徒は鳥間先生に追加授業を頼みに行き、残りの生徒たちは既に下校済みのため教室にはぼくと学秀、そして律の3人しかいない。

「何だ? 殺せんせーに用事ってわけじゃないだろう」

「うん、さっきのは嘘。用事があるのは律になんだ」

「何の御用でしょうか、渚さん」

律は声に反応して画面を明るくした。目が眠たそうなどころを見ると今の今まで休息を取っていたようだ。何だか申し訳ない。

「LINEでも言ったけど、一応紹介しておこうと思っただよ。浅野学秀。ぼくの1番信頼できる協力者だよ。ぼくが2周目だってことを知ってる」

「渚、それは言ってもいい事なのか?」

「いいんだ。だって」

律も2周目だから

彼は息を呑んだ。やっと見れた、驚いた顔。

学秀と仲直りした日、ぼくは律と女子トークという名の探り合いを行った。律はぼくに幾つもの質問をした。殺せんせーの弱点は全部でいくつあるか、ソニックニンジャのテーマソングを覚えているかなど。実際のところテーマソングは覚えていなかったが、最終的に律はぼくを潮田渚の2周目だと認めるに至ったのだ。

話をしていくにつれ、ぼくらはある約束をすることにした。それはE組を不幸にしないこと。1周目の結末を繰り返さないこと。みんなを救うこと。

その説明でぼくらがクラスの誰にも知られずに行動を移していたことを理解した学秀は状況を呑み込み始めた。

「所謂同盟か。目的が一致する相手と契約を交わし、協力関係になる」

「そんな難しいことじゃないけどね」

「でも指切りげんまんは絶対なんですよね？」

「……うん。そうだよ」

約束する時にぼくが言った言葉を取り出し律が確認した。律は学習するAIなので、1度インプットされると上書きしない限り記憶<sup>データ</sup>を覚えている。2周目の記憶もぼくよりずっと正確だ。

だから彼女は結果として失敗してしまっただが、ぼくより迅速に雪村先生の救助に対応できた。

触手地雷は本来生命を感知した場合、生物の心臓部を的確に攻撃してくる。攻撃箇所が1周目と違ったのは彼女の仕業だったのだ。まだ試作途中だった彼女は開発者の目を盗み、ハッキングをして研究施設内の触手地雷を操るコンピューターに潜入。ウイルスを使って触手地雷に「致死点、心臓部を狙え」という命令の全く逆のこと、つまり「致死点を外せ」という命令を行わせたそうだ。それがたまたま脳部に当たってしまったという悲劇に見舞われたとはいえ、あのことに律が絡んでいたというのは衝撃の話だった。

「イトナさんの触手を取るための今回の計画は失敗してしまいました。研究施設に潜入して彼を拉致して無理矢理という手もあります。どう致しますか？」

律は伊達メガネをクイッと上げ、計画案のリストを画面に表示し

た。話してる隙にナイフで取るという欄に線が引かれており、残る計画はざっと10個はあった。拉致、シロの殺害、イトナ君の殺害、ディープキスなど。どうやら1番安全なのは拉致らしい。3番目はもはや救いになっていない。

「いや、いい。イトナ君は触手を取りたいとは思わないよ、今は。だから次の暗殺を待つ。心配しなくても、あの2人は絶対に戻ってくるしね」

「というかこのクラスはどうもハプニングが多いな。さつきも渚が止めていなかったらあいつは他の生徒たちを攻撃していたんじゃないのか？」

実際はシロの睡眠薬で眠らされるのだが、そこについては触れずに曖昧に微笑んだ。

「はは……もう慣れたよ。それにまだ日常な方」

「そうですね。ウイルスを盛られたこと、首に時限爆弾をはめられたことや私限定でハッキングされたことに比べれば、暗殺者の1人や2人来たところで通常通りの出来事ですよね」

遠い目をしてため息を吐くぼくらに学秀は「E組でそれが起きるのか、そうか」と乾いた笑みを浮かべた。こんな波乱万丈な中学生生活を送っているのは3年E組だけだろう。それを2度も送る羽目になるぼくらは不幸としか言いようがない。

「2度も危険の中に飛び込むって、よく考えたらあんまりしたくないことだよね」

「でも、私はここにきて良かったと思ってます。また、渚さんに会えて本当に良かった……っ」

律が笑顔のまま涙を流した。意外と感激屋なんだなあと思い、「ぼくも」と返す。律の涙が止まった頃、空には虹が架けられていた。

## 球技大会のはなし。

梅雨が明け、E組にも夏の兆しが訪れた。女子はこの時期になると肌が焼けるのを気にし始めたり、汗の臭いに敏感になるらしい。女子力の高めな矢田さんと倉橋さんはポーチに色々な夏対策グッズを入れており、女子みんなで感心したものだ。しかし岡野さんあたりの活動派な女子は太陽の下にいるのを特に気にしないことがほとんどだった。

「なんかアウトドアっ！って感じのことやりたいよね〜」

茅野が言い、ぼくは「まあね」と同意する。せつかく雨が上がったところだし、活動的になるのはいいことだ。

「今度スイパラでプリンフェアやるんだって！週末行く？」

「いいけど、それはアウトドアに入らないでしょ」

むしろインドアじゃんとツツコミを入れると茅野がふにやりと微笑んだ。作り物じゃない微笑みに黙らざるを得なくなる。茅野がぼくという時に自然に素に戻ることは喜ぶべきことのはずだ。加えて言えば、茅野がスイーツを食べるのには理由がある。

「いーのいーの。渚とスイーツ食べてる時の時間がすごい和むんだ〜」

「私も同行してよろしいですか？スイパラというものにとっても興味がありません。殺せんせーのグルメマップに載っていた店なので！」

「えつと……律は食べられないよ、ね？」

茅野がもしかしたら食べられるのかもしれないとぼくに同意を求めた。そんなやり取りを見破ったかのように律が微笑む。

「ご心配なく。最高の自動販売機を提供するために最新の味覚センサーを搭載したので味にはうるさいですよ」

「何でもありだな?!」

ぼくらの声に反応するかのように目の前で本校舎の門が開き、中からモデルのように背の高い女子たちが姿を現した。

桐ヶ丘の女子の平均身長はぼくたち2人よりずっと高いが、彼女たちは別格だ。中には170を軽々越え、男子顔負けの身長のものもい



るからだ。その全ての女子にぼくは見覚えがあった。特に真ん中を陣取る女子に。

「また会ったね、渚ちゃん」

姫希さんは柔らかい笑みを浮かべた。意識の波長がぐにやりと歪み、ピリツとした空気がぼくと彼女の間に流れる。

桐ヶ丘中学校女子バスケット部レギュラー。それが彼女たちの固有名詞だ。

「天使ちゃんもう帰るの？ いいなあ、うちら今から練習」

「大変なんだよねー、レギュラーになると。E組だと部活しなくていいんでしょ？まじ羨ましい」

「なーちゃん戻って来ればいいのに。この前総合2位だったじゃん」

「宍戸先生が、ね。1度不祥事を起こした生徒を戻すのに賛成じゃなくって」

意外と好意的な反応に戸惑いながらも前々から用意していた嘘を披露する。茅野がスーツと目を細めたのは無視した。

「えー。顧問の癖にそんなこと言うかなあ？しかもあの騒動って確か

「そんな話はよそうよ」

余計な事を口に出すなどばかりに姫希さんが凜とした声でぼくらのやり取りを止める。危うく言ってはならない話を口に出しそうになった生徒が口を押さえた。

「すみません、キャプテン」

「もし渚ちゃんが戻って来たとしても、今のレギュラーには敵わない。ボコボコにされるのがオチじゃないかな」

こちらはこちらで猫を被る気もないらしい。元部メンだからと気を使って好意的に見せかけているレギュラーメンバーの努力が台無しだ。

「随分自信満々なんだね」

「そうかな？どっちみち、今度の球技大会ではつきりするけどね」

ひらひらと手を振って姫希さんたちは体育館に消えた。残されたぼくらは彼女たちの気迫を思い出して身震いする。

「あの子この前の京都の子だよね？怖かった」

「うんうん。それにみんな背高かったね」

チビたちには辛い身長差だ。特に140センチ台のぼくたちにとって170センチ付近の姫希さんは女巨人である。

「あ、ところで渚」

「ん？」

「球技大会って？」

\*

球技大会。中学校に入って最初のイベントであり、生徒たちの運動能力を競う場でもある。

「浅野君が早退したのは球技大会が理由でしたか。スポーツで団結力を高めるには彼の力が不可欠ですからねえ」

殺せんせーはクラス委員からの球技大会のお知らせにふむふむと頷いていた。しかし、トーナメント表を見てその表情が分かりやすく変化する。3年のトーナメント表にはE組の欄がなく、存在を無視されていたからだ。

「……E組は参加しないんですか？」

「参加はするんだ。でも本戦じゃなくてエキシビジョンの方」

三村君が苦笑いして説明をした。男子は野球部、女子はバスケット部と対戦することを話すと、殺せんせーも何のことなのか分かったようだ。

「なるほど。いつものやつですか」

柗ヶ丘名物E組弄り。

「でも訓練で基礎体力付いてるし、善戦して全校生徒を盛り下げよ  
〜」

片岡さんの声に女子勢が掛け声を上げる。目標が盛り下げらるって  
どうなんだろうとぼくは苦笑い気味だった。

「バスケといえば頼れるのは渚かな？」

「ぼくは身長がないからあんまり戦力にはなんないと思うよ」

「またまた〜」

これ謙遜じゃなくて真面目な話なんだけどね。

ぼくは苦笑いして2軍だったころのことを思い出した。運動神経  
はそこそこ良かったけど、ある大きな欠点のせいで非戦力扱いされて  
いたことを。

「とりあえず練習場所探さなきゃ。本校舎の体育館は全部運動部が  
使ってて無理だろうし」

「……何だっけ、教師の許可があればいいんだよね」

ぼくは1人の教師を思い出した。

「そうそう。でもE組になんて絶対許可くれないし」

「ください。体育館の使用許可」

笑顔で手を差し出す。ライターをカチカチと鳴らす相手は突然の  
生徒登場に目を見開いた。

「あ？断る」

穴戸先生はイラつとした声を上げた。喫煙者の彼は学校にバレな  
いように校舎裏で煙草を吸うことが多い。

「A組教師34歳、カンニング偽造に関与した疑い」

「何だ、その新聞の見出しみたいなやつは。証拠は？」

「こんな事もあると思ってボイスレコーダーにはぶちり収めていま  
す、残念ながら」

去年の最後にしたやり取りを穴戸先生に聴かせた。彼は録ってい  
たのかよと呆れ気味だ。

「……食えない奴め」

「確か先生女子バスケット部の顧問でしたよね。今どんな感じですか？」

「盛り上がったたぞ。打倒天使！ってな」

「……ぼく弱かったんだけどなあ」

「お前チビだもんな」

直接言われると苛つくなあとムツとする。更に彼の煙で少し咳き込んだ。絶対わざとやってるこれ。

「それで貸してくれるんですか？体育館」

「1つしか空いてねーぞ」

「十分です。どこですか？」

「旧体育館」

穴戸先生はニヤリと笑って鍵を投げて寄越した。顔を顰めて穴戸先生を見る。

旧体育館。幽霊が出ることで有名なため、使う生徒が居なくなってしまうという話だ。

ほぼ壊れかけたシユートコート。歩く度にメシメシと音を立てる床。

旧体育館に着いたぼくらは顔を引きつらせた。ボロ装備には慣れているとはいえこれは酷い。

「まあ、旧体育館でも使用許可が出ただけマシ、だよね」

自分たちに言い聞かせるように片岡さんが発言した。その言葉に頷く周りだが活気がない。むしろ大丈夫なのかなという心配の色が透けて見える。

「でもぼくたち旧校舎に慣れてるし、多少ボロくても何とかなるよ」

「……そーいやうちらエンドのE組だもんね。設備に文句なんて言つてられないじゃん」

中村さんが古くても何とかなるさと親指を立てる。そんな彼女は早くも壊れた床に嵌っていた。

「ようし、まずはシユート練習から！」

シユート練習……これはやつぱり言わなきやダメそうだ。

ため息を吐いて女子たちを見渡した。E組女子は運動が出来る生

徒が多い。だけど元バスケット部ということでもみんなぼくに僅かながらも期待をしているようだ。その期待を打ち破る真似はしたくなかったけど、仕方がない。

「ごめん。その前にぼくから言わなきゃいけないことがあって」

「ん、どうしたの渚ちゃん？」

「ぼくシュート出来ないんだ」

「「ええ!!」「」」

そんなに驚かなくても。

\*

球技大会日当日。

野球トーナメントは1年生、3年生、2年生の順番で締めくくられる。逆にバスケットは2年生、1年生、3年生の順番で、それは各トーナメントで必ず応援が付くようにだろう。

余興試合まで普通なら暇なE組だが、今年はE組監視役である学秀がA組に居るためにその観戦を楽しんでいた。とはいえ、クラス差別から1番見えにくい奥の方の席しか座らせてもらえなかったが、国家機密の教師にはこのぐらいがちょうど良い。

「浅野って俺より上手いんだよな、投げるの」

「そうなの？でも試合見ててそんな感じしないけど……」

茅野の言う通り、学秀は少し上手い程度に収まっており、進藤君のようにとても速いボールを投げるわけでもなければ杉野君のように変化球を投げることもない、かと言って外すこともない安定したボー

ルだ。むしろ観客の注目は先程ヒットを打った田中という生徒に向けられていた。ぼくはこの生徒を知らないので恐らく新しくA組になったメンバーだろう。

「あ。もしかして、A組を団結させるため？」

「そつ。だからあいつはあくまでゲームメイカーに甘んじる。それでも試合結果はすべて浅野の手に握られてるんだろーね」

A組に最初からいた生徒も多いが、今年から入った生徒も勿論いる。学秀の狙いはどうやら今年からの生徒を馴染ませるために活躍させることのようなのだ。

「試合終了ー！3対1で野球トーナメント3年はA組が優勝です!!」

「そう考えると、あんまり面白い試合じゃないね」

「浅野君が居たら勝つって分かるもんね。あ、3年バスケの決勝観に行こうよ！」

「うん。A組対B組だっけ？」

相変わらずA組は何でも出来るなあ。体育館に到着すると顔馴染みの女子生徒たちが運動派のB組女子たちと戦っていた。

現在は36対28でA組が優勢だ。しかし、中盤で交代が告げられるとA組のシュートが中々入らなくなってきた。

よく見ると1人の女子の動きが変だ。右脚を引きずっていて、何だか顔色も悪い。それなのに他の女子たちはその女子に集中的にパスを回していた。

「長沢さん！ボールちゃんと見て!!」

怒ったような声でA組から罵声が飛び交う。その女子は、じゅりあちゃんはフラフラしていて体力的にも限界のようだ。

何でみんな気づかないんだろう。じゅりあちゃんは明らかに怪我をしているのに。いや、違う！わざとやってるんだ。

試合が終わり、1人自動販売機に足を運ぶじゅりあちゃんを追いかける。片足を引き摺っているところからして捻挫だろう。

「じゅりあちゃん、足！怪我してるよね?!早く保健室に

「やめてよ！」

「何なの。同情のつもり？あんたのせいでこうなったから、悪いとで

も思ってるの？ごまあみろって思ってるくせに」

「それは……」

「怪我しているからってそれをあいつらに言ったら思う壺。じゅりあは可哀想な子じゃない。甘ったれたあんたと違って誰かに頼る真似なんか絶対しないんだから！」

頼る……？ぼくはみんなに頼り過ぎてる？

ピンチが訪れた時、学秀は何回助けてくれただろう。殺せんせーは何回マツハで駆けつけたんだっけ。

いつだってE組はA組に勝ってきた。でもそれは殺せんせーの力が大きくて。ぼくらだけでの勝利はほとんどないんだ。

でも今回は違う。E組女子はぼくたちだけで女子バスケット部に勝つてみせる。

「違う。ぼくは誰かに頼ってばかりな甘ったれた女子じゃない」

「バスケットの試合観に来てよ。E組女子は勝てるって証明してみせる」

「……勝手にやってくれば？」

じゅりあちゃんはぶいと顔を背けた。

\*

E組との余興試合。相手チームはきつと流れ作業みたいなものと慢心していることだろう。その隙を突けば確実に勝てる

———  
と思っていた時期がぼくにもあった。

「第1ピリオド34対18で女子バスケット部の圧倒的優勢です!!頑張れバスケット部!E組を蹴散らせ!」

前言撤回しよう。女子バスケット部は本気でE組を潰そうとしてきた。

第1ピリオドまでの結果は完全にぼくらの劣勢である。序盤に岡

野さんと片岡さん、ぼくが連携して得点を稼いだためゼロにはならなかった。しかし、相手チームはぼくがシュート出来ないことに目を付け、岡野さんと片岡さんを徹底マークすることで得点を防いだ。更にはスリーポイントシュートを連発して放つ姫希さんがチームの得点源であり、170cmある身長は片岡さんにも止められないようだ。「渚ちゃん……ここはうちに任せて！」

中村さんと片岡さんが2人がかりで姫希さんのマークについた。

しかしぼくがボールから目を逸らしていた一瞬で2人のマークを抜けた少女が綺麗なフォームでボールを放った。それは弧を描き、リングを通過していく。相手チームに3点が追加された。

「なんとっ!! またもやスリーポイント! さすがキャプテンツ! 我が校のエリートは強いッ!!」

いるんだよなあ、たまに。どうってことない調子でスリーポイント投げまくる超中学級の選手が。彼女はその良い例だ。

女子バスケット部キャプテンにして部長。人脈の広さから操る膨大な情報量と頭の良さを活かし、彼女の出る試合において敗北の文字はない。

「よしっ! 伊藤選手が3ポイント

第2ピリオド

も引き続き女子バスケットチームリードです!」

司会者の権利を律から奪い返した女生徒が声を高らかに試合の様子を語る。それに合わせて観客席で姫希さんのシュートに感嘆する声が巻き起こった。

「伊藤姫希……注意していたとはいえやっぱり只者じゃないね。私じゃ無理そうだ。渚ちゃん、マーク代わってもらってもいい?」

「えっ、でもぼく小さいからハムスター程度にしか思われんよ?!」

「ハムスターでいいんじゃない? だってあいつら、あたしらのこと蚊が飛び回ってるぐらいにしか思っていないだろーし」

第2ピリオドに入り、姫希さんのマークに付いた。

「フレ、フレ……いーぐみ!」

聞き慣れた可愛らしい声にE組女子たちは一斉に声の主を振り返る。司会者は「誰?! 私何も言っていないんだけど!!」とキレていた。そ



の背後に立つ自動販売機の画面が一瞬切り替わり、舌を出してウィンクする電脳少女がチアガールのコスプレで姿を現す。

「……?!」

彼女の背景が電子的な波長を表示して、意識の波長を使えという合図なのかなと解釈した。意識の波長……：そういえば試合では1度も使ったことない。集中力を相手チームの意識の波長に向ける。姫希さんがボールを受け取って意識の波長が揺れ動いた瞬間、彼女の行動の全てが目視出来るようになっていた。目線、脈拍、呼吸。

あれ……ちよつと待って。もしかして姫希さん右に動こうとしている？

姫希さんはぼくの右側を通り抜けようとした。それを先に読んでボールを奪い取る。

「何でそこに」

姫希さんの言葉にぼくは返事をしなかった。ぼくと姫希さんは去年まで友達だった。だから彼女の意識の波長で感情を読み取るのは朝飯前だ。

しかしスポーツの場合、感情は試合に深く関係はしない。その先入観からぼくは意識の波長のことを考えようともしなかった。でもそれは間違いだったみたいだ。

今ので実証された。意識の波長は人の行動を把握することもできるらしい。

シュートをする時の決意。相手を抜く時の瞬間。パスを出す時のタイミング。

すごい。全部分かる。

ぼくは岡野さんにパスを投げ、彼女は持ち前の跳躍でシュートする。

「くそっ！キャプテン、パス！」

「もうらいつー！」

岡野さんがスルツと相手の視線を潜り抜けてナイフを使う時のような動きでボールを文字通りステイルする。そのこぼれ球を倉橋さんがキャッチして片岡さんに繋ぎ、彼女はシュートした。

「ダメダメ。普段通りの連携は全部お見通しだよ」

女子バスケット部レギュラー。彼女たちの何人かはぼくと同じ2軍出身であり、連携のレパートリーは殆ど記憶にあった。逆に見たことのない連携スタイルは律がデータを集め、そこからぼくらの暗殺スタイルを活かした作戦を片岡さんと立てる。その結果出来上がったのが、触手作戦、だった。

殺せんせーの触手のように速く！そして緩やかに。ボールを殺すつもりで盗る。姫希さんのスリーポイントシュートは意識の波長で判断して止める。

殺れるかもしれない

そう思った時、ドリブルをする姫希さんがボソリと呟いた。

「……プランBはあまり使いたくなかったんだけどなあ」

「プラン、B?」

「うっ……」

クラスメイトの悲痛な声に、ぼくは思わず後ろを振り返った。片岡さんがお腹を押さえて蹲っている。

「片岡さん!」

「よそ見してる場合かな、渚ちゃん」

ぼくが姫希さんから目を離れた途端、彼女はぼくの左側を通り抜けた。あと一歩で間に合わず、彼女のシュートを防ぐのに失敗してしま

う。

「第2ピリオド終了です! 現在41対30! これはE組にも勝つチャンスがあるのでないでしょうか?!

」

律の実況が響き、観客が誰の声だと騒ぐ。でもその声すらぼくには届かないくらいぼくは衝撃を受けていた。

あの姫希さんがラフプレー? 勝つ為だからって、そんな悪どいことする?

「片岡さん! 大丈夫?!」

「いった……第3ピリオドには出れると思う」

「何のつもりなの、姫希さん?」

相手側のベンチに足を運び、姫希さんを睨みつけた。彼女がぼくの

表情に見下したような笑みを浮かべた。

「安心してよ。渚ちゃんには何もしない。天使が傷つけられたら浅野君かみさまに何言われるか分からないもんね」

「そういう問題じゃない……姫希さんたちは勝ってるじゃん！わざわざ片岡さんを傷つけなくてもいいのに！」

「邪魔なの、渚ちゃん。この試合から手を引いて。そうしたらもうメグちゃんみたいな怪我人は出さない」

考えなくても分かる。これは脅しだ。

ぼくが姫希さんをマークしている限り、姫希さんはスリーポイントを打ちにくくなる。ならば、クラスメイトを傷つけてぼくの目を惹きつけるか、それともぼくを出さないようにすればいい。狡い手ではあるがその分確実である。

「そんな無茶苦茶な———「じゃあ怪我人が出るだけだよ」」

「優しい渚ちゃんはどうちちを取る？クラスメイトを見捨てて試合に勝つか———試合を捨ててクラスメイトを助けるか？」

ぼくの顔を見てくすりと嘲笑う。どちらを選ぶかは分かっているかのような顔だ。

「選んでよ」

「ぼくは……」

片岡さんとスコアボードを交互に見た。どちらを取るか。そんなの分かりきったことじゃないか。

「クラスメイトを見捨ててまでして勝とうだなんて思わない」

「……そう。安心した」

姫希さんは勝ちを確信して口角を上げる。この瞬間、相手チームの勝利が決定した。

\*

試合に負けた。惨敗だった。でもぼくは悔しさも敗北感も感じなかったんだ。

最初からそうだった。この試合は女子バスケット部の為にあるもの。E組が勝利を手にしたところで身にあまりすぎる。反対に女子バスケット部にとってはほとんど3年生が占めるレギュラーたちが全校生徒に見せる唯一の晴れ舞台。勝利は当然だった。

ぼくが出てても女子バスケット部が勝つ可能性だってあった。それでも姫希さんがぼくを出させないようにしたのは、8月に行われる大会に向けた士気の向上のため。勝つだけでなく、圧倒的な大差をつける必要があった。

何だそれ。最初からぼくは負けてたんじゃないか。目の前の勝利を願うぼくと、先のことを見据えた学秀や姫希さん。完敗だ。

E組のみんななどいるのが少し気まずくて、ぼくは体育館を離れた。体育館裏で休んでいると思いがけない人物が現れた。

……じゅりあちゃん。試合見てたんだ。

「ぼつかみみたい。絶対勝つとか言ってたくせに、ぼつろぼろに殺られてるし。勝ちたかったんなら、クラスメイトを見捨てれば良かったんじゃないの?」

「見捨てるぐらいなら、そんな勝利捨てるよ」

フンと彼女は鼻で笑った。お気に召さない答えだったようだ。

「自己犠牲? それ、じゅりあの1番嫌いなやつ。正義感気取って仲間を守ろうとか、ほんつとくだらない」

「……違うよ。ぼくはただクラスメイトの安全とE組の勝利を冷静に天秤にかけて、クラスメイトの安全を取っただけだ」

「あーそうだったね。渚ちゃんはほんとに全然良い子じゃない。じゅりあをA組に残したのも、復讐のためだもんね」

「うん。じゅりあちゃん大変らしいね。自業自得だなあとも思うけ

ど」

分かりやすくナチュラルメイクで整えられた顔を歪める。今になってじゅりあちゃんのメイク今日はちよつと薄めだなあと、うでもいいことが脳裏に浮かんだ。

「うっわ。やっぱり渚ちゃん嫌いだわ」

「はは……気が合うね」

「でも、見直した。ていうか、浅野君に守られてばっかの弱虫って思ってたけど……何だ、全然弱くないじゃん」

「やつと気づいたんだ」

じゅりあちゃんが少し顔を綻ばせる。しかし慌てて顔を元に戻し、しかめっ面になった。

「でも浅野君は渡さないんだからっ！」

「はいはい」

じゅりあちゃんと別れてE組女子と合流する。彼女たちは敗北に「惜しかったー」と嘆いたものの目標だった本校舎盛り下げは達成して満足気だ。

男子の野球は記憶の通りに進み、球技大会は無事に終幕を迎えた。

「優勝おめでとう、学秀」

「ああ。でも優勝するって知っていただろう？」

代表として渡されたトロフィーを持つ学秀に声をかける。学秀はソレをとんでもどうでも良さげに持っていた。優勝することは彼の予想通りのようだ。

「まあね」

ふとトロフィーを持つ反対側の手に握られた紙を凝視する。

「それ……？」

「映画のチケット。優勝祝いで殺せんせーにもらった」

「へえ……！殺せんせー珍しいね」

普段は物凄くケチなのにこういう時は太っ腹だ。E組男子の野球が勝ったからお祭り気分なのかもしれない。

「一緒に観ないか、映画」

「へ？」

学秀の手には2枚のチケットが握られていた。

「ヌルフフフフ…先生やっぱり野球よりイチヤイチヤが見たいですねぇ」

お出かけのはなし。

待ち合わせ時間15分前。学秀は待ち時間に煩そうなので早めに着いたつもりだった。しかし、待ち合わせ場所のとある犬の銅像にもたれかかる学秀が目に入って冷や汗をかく。

「早いね、学秀」

もう居るんだ。15分前に来たのにもう居るって、学秀は一体何分前行動をしているんだろう。

学秀がぼくのことじつと見ていることに気がついて首を傾げる。変な格好してきたっけ、なんて不安になっていると学秀はあっさりその答えを寄越してきた。

「今日は珍しく白じやないんだな、私服」

言われてみればその通りだ。今年に入って白系統の服ばかり着ていたけど、今日は淡い水色のワンピースと去年に戻ったみたいな格好である。ぼくが首を傾げると緩く縛ったポニーテールが揺れた。

「えつと……変かな？」

「僕はこっちの方が好きだな」

ほつとして胸を撫で下ろす。自分の予想が当たって嬉しくなった。「そうだよな。ぼくもそうかなあつて思ったんだ」

今度は学秀が首を傾げる番だ。学秀はいつも寒色系だから、という言葉は言わずに少しはにかんだ。

「映画まで時間あるからレストランで時間潰そうか。渚、何か食べたいものある？」

「ぼくが決めていいの？それじゃあ、この前学秀が言ってたこの近くにあるイタリアンがいいな。ちよつと気になってたんだ」

「ああ、あそこか。それならこっちの道だな」

学秀と歩きながら球技大会の話題で盛り上がった。学秀は五英傑の誘いで野球の余興試合の方を観戦していたらしく、遠近法で上手く隠れている殺せんせーを発見して苦笑したらしい。本校舎の生徒たちがE組が負けるにつれ盛り下がる中、五英傑との賭けで幾らか儲けたり、よく練習に付き合っていた杉野君の成長を誇りに思ったりと学

秀は彼なりに球技大会の余興試合を満喫していたのだという。

「いらっしやいませ、2名様ですね！」

レストランに着くとまだ開店して間もなかったからなのか、直ぐに席に着くことができた。

メニューを受け取ってページを捲っている内に食べたいものがどんどん増えていって迷った。品数を一つに絞れない。

「ご注文は何にいたしますか？」

「うー、カルボナーラにするべきか、それともペロンチーノ、もしくはマルゲリータか。悩むなあ……」

「全部頼めばいいだろう」

「ええ……さすがに全部は食べられないよ」

学秀は浅く息を吐き、メニューを閉じた。いつもの他人用の笑みを貼り付けて、店員を見据える。店員は伝票にペンを乗せ、彼の言葉を待っていた。

「カルボナーラとペロンチーノ、マルゲリータで。飲み物は……アイステイとコーヒーお願いします」

「おお……ってよく食べられないよ?!」

「何故ここでシェアするってアイデアが浮かばない。2人ならちやうど良いだろう」

言われてみればと頷き、高校生ぐらいの女性店員が学秀をチラチラ見ていることに気がついた。初めてのことじゃないからもう驚かないけど、ここまでモテルなんて学秀も中学生離れしている。これだけ紳士的な中学生が中々居ないのも分かるけど。

そこでふと先程のやり取りを思い出した。あの時は何も感じなかったが、今考えてみれば可笑しな部分が幾つかある。

「ねえ、何でアイステイを頼んだの？」

ぼくがアイステイを選ぶ保証なんて無いのに、何の躊躇いもなくどうして。そんな疑問を彼は同じく疑問にして返した。

「間違えていたか？」

「悔しいけど大正解。だから理由教えてください」

「理由も何も……単純な話だ。渚は緑茶や抹茶を好んで飲むだろう？」



だからメニューに和風の飲み物があればそれ。無ければアイスティーを頼む。ピーチティーの可能性もあったが、メニューの傍に「アイスティー、紅茶、コーヒーお代わり自由」って書いてあった。この天気で紅茶はないから渚はほぼ100%の確率でアイスティーを頼むと思ったんだ」

何その理論立てした説明。

ぼくは流暢に語られた理由に呆気に取られた。観察力に優れているというか何というか、普通の会話を探偵小説仕立てにしてしまったような錯覚を覚える。

「学秀、探偵なれると思うよ」

「生憎ならない」

世界征服と探偵はジャンルが違い過ぎるか。

「あともう一つ。学秀の頼みたいものが頼めなくなっちゃったと思うけど、大丈夫？」

「……………食べ物なんて口に入れば全部同じだろう」

ああ……………そういう考えをしてくるんだ。思えば学秀は好き嫌いが少ない。甘いものはあまり食べないとはいえ、完全に嫌いってわけでもなさそうだ。

「でも栄養が偏るとまずいからやっぱりサラダも注文しておこうか」

「あはは……………そういうところはしつかりしてるよね」

その後に出されたものを綺麗に完食してぼくらはそのレストランを後にした。

映画館は日曜日なので家族連れが多く、館内の店も長い列を作っている。

「ポップコーン食べるか？」

「うん、欲しい！」

ぼくの軽い要望で長い列に並ぶのは彼からしたら不本意だろう。でも、ぼくは案外列に並ぶのが嫌いではなかった。何故か始まる難しいニュースの話も、議論も不思議と今の空気に馴染んでいく。

「BrexitかBremainかって言われたらBremain派だったんだけどなあ」

「僕も賛成だ。イギリス人は投票後にEUが何か検索したと聞いたから、本人たちは訳が分からなかったのだろうな。難民を受け入れたくないという理由も理解できるが」

「難民といえば、日本はあまり難民受け入れていないらしいよね。何でだろう?」

「理由は多いが1番の理由は偽造難民だ。例えば

長いお堅い話を繰り返していると、店員はいつの間にか目の前に来ていた。ぼくらはまずお目当のポップコーンを注文する。

「ポップコーンのLサイズを一つ」

「フレーバーはどれに致しますか?」

「塩」

「キャラメル」

同時に放たれたフレーバーの味は別のものだった。そうとなれば戦争だ。互いに火花を散らし、ぼくらはどちらのフレーバーが良いかについて論争を繰り返した。

「えー、キャラメルだよ」

「塩だろう」

「ポップコーンはキャラメルだつてば!」

「糖質の固まりを映画館で食べる理由が分からない」

「あの……お客様? ハーフ&ハーフを注文されては……?」

「……………」

ぼくらは突然湧いてきた納得の選択肢に言葉を失う。ハーフ&ハーフ。1つのカップに2つのフレーバーが入っており、どちらも食べられる優れたものだ。

「別々にするって手もあるけどこの場合はハーフ&ハーフよね……」

店員はぼくらを見て何度か頷き意味深に呟いた。学秀が外方を向く。

「飲み物はどういたしますか?」

「えつと……あ、この緑茶をお願いします」

「僕はアイスティーで」

「それからチュリトスのチョコ追加してください」

まだ食べるのかという学秀の視線を軽く潜り抜け、飲み物とポップコーンが乗ったプレートを受け取る。プレートはさつと学秀によって奪われた。

「今更なんだけど、何の映画観るの？」

「題名だけ見た限りだとよく分からないな。事前に知っているとおまわり面白くないとは思うが、ホラー映画みたいだ」

「……え、ホラー？」

「そうだ、ホラー」

「えっ、えー………ホラー、かあ」

自分の視線が横に流れ、学秀とは全く別の方向に向く。

いや、ホラーは嫌いじゃない。嫌いじゃないけどそれは怖がらないわけじゃなくて、そういうジャンルも受けつけるという意味で、だ。

茅野の前で格好つけてゾクゾク系なら大丈夫とか言ったこともあるけど、やっぱり怖いものは怖い。それも映画館の大スクリーンで観るなんて……

無理無理。絶対ビビるに決まってる。

「………ホラーは苦手じゃないと思っていたが」

ギクリとして学秀を見やる。笑みを堪えきれないと口を押さええて口の端が意地悪くニタリと上がる。

あ、悪い顔だ。

「嘘だな」

\*

映画が終わってほんの少し疲れたぼくを見かねてか、学秀はまだ映画館の中でエンドロールを眺めていた。横の席に座る女子高生たち

が「怖かった！」と言い合う様を見てポツリと眩く。

「ホラー映画を大スクリーンで観るってさ、怖いんだよ」

「そういうものなのか？」

「だって迫力が違うんだもん。さっきもいきなり幽霊が画面に大きく表示されててびっくりした」

こんなこと微動だにもしなかった学秀に言っても無駄かとぼくは苦笑した。彼はホラー映画に耐性があるらしく、怖いシーンでも動揺することなく冷静で慌ててふためくぼくを落ち着ける係と化していたからだ。

「ぼくたちだけになっちゃったね」

「そうだな……あ」

学秀が何度か瞬きをして目を擦った。

「ん、どうかしたの？」

「今黄色い頭を見た気がしたが、気のせいだろう」

「気のせいだよ……たぶん」

「殺せんせー？まさかね。」

後ろを振り返ったがそこには誰一人おらず、沈黙だけがその場を支配した。エンドロールもとつくに終わっている。

「そろそろ外に出よう」

映画館を出ると思っていたより空が暗くなっていた。雨音と雨特有の独特の匂いが広がる。

「あれ、雨降ってる。今日天気予報では降水確率30%だったのに」

「近くのコンビニで傘を買おう」

「折り畳み傘持ってるよ」

水玉の傘を広げ、学秀のが背がずっと高いとのことで彼が傘を持つ。駅に近づく道で黒塗りのBMWが近くに停車した。学秀がふと訝しげに足を止める。

車の後部座席の窓が開き、中のグレーのスーツを纏ったキャリアウーマン風の女性がサングラスを外す。彼女はバッチリメイクをしており、ビッチ先生に似た大人の色気を漂わせていた。

20代、30代……いや、意外と40代かも。

「美琴さん？何でここに」

ぼくは学秀の歪められた顔に驚きを隠せずにいた。

美琴さん……って誰だろう？

彼女は煙草を吸い、ぼくを頭の前からつま先まで見定めるような視線を送る。身体を硬直させて少し視線をずらした。意識の波長は通常状態。警戒もされてなければ、敵意もない。だけど、余りにも緩やか過ぎる。学秀と争うぐらい動じないタイプの人間だ。

「可愛い連れね。せっかく会ったんだから一緒に帰ろうと思うんだけど、あなたも入ったら？」

一緒に帰る？

ぼくは少し困惑して首を傾げる。学秀はため息を吐いたが、今まで見たことのないような種類のものだった。まるで、相手に逆らえないとでもいうような

「渚、乗ろうか」

「え、あ、うん」

「学秀は助手席ね。彼女、後部座席に来なさい」

命令口調で彼女はぼくを隣に座らせた。運転席では黒スーツを纏った男が座っている。

学秀とどういう関係なんだろう。ただの知り合いだったらいつもの爽やか笑顔仮面を貼り付けるはず。でも学秀が会っていきなり見せた表情はしかめっ面だった。それに学秀と対等かそれ以上で話している。

「気になる？」

「ふふっ、生物学上の母親……って言えば分かるわよね」

母親……だからか。学秀の態度に納得していると当の本人は嫌そうに顔を背けていた。

「あくまで生物学上のだろう」

「あら酷い。学峯から学秀に好きな人が出来たって聞いたから茶化しに来たのに」

……殺せんせーと同種の下世話さを感じる。というか母親なのに会いに来た理由がそれなんだ。

色々普通から脱しているようで学秀の母親らしい。でも問題はぼくも下世話だつてことだ。

「へえ、学秀好きな人いたんだ。もしかしてうちのクラス？」

「……………ああ」

意外だなあ。恋愛ごとに全く興味無さそうなのに。学秀に好きな人か。彼女とか出来たらつて考えると色々複雑な気分になるなあ。

「ふうん。何だか事情聴取したいわね。あ、渚ちゃん今日家寄つてく？」

学秀が止めるように目線で合図を寄越す。ぼくは首を横に何度も振った。

「あら、残念。さつきクレームデユラクレームのシュークリームを多めに買ってしまったのだけれど——」

「絶対行くっ！」

「おい、渚」

「ごめん。思わず釣られた」

クレームデユラクレーム。一度は食べたいと思っていたシュークリームだ。でも中学生にはちよつと高め。

そういうえば学秀の家しばらく行ってないなあ。

ぼくは美琴さん、学秀のお母さんに少し興味をそそられた。1度も話されない母親の存在に勝手に父子家庭を決めつけていたからだ。

「でも、やっぱり帰ります。洗濯物干したまま出たような気がして……………」

「そう……………残念ね。家どこなの？」

「学校の近くにある山の反対側です」

「送って行くわ」

世間話を少しして、運転手さんに道を教えていたらあつという間に着いてしまった。美琴さんとすぐに別れてアパートの階段を上る。

「楽しそうなお母さんだね」

「あれを自分の母親だと認めたくない。せいぜい叔母が良いところだな」

あ、一応親類には入れるんだ。

「心配だから玄関まで送っていくよ」

「まだそんな夜中でもないんだけどね」

階段を上がり、廊下を通ると自分の部屋がある

しかしそこには自動販売機の姿があった。

何で?!?

「って、律?!」

「ごめんなさい、渚さん。遊びに行こうと思って本体を自動販売機モードに設定してこっそり来てみたんですが、途中でバッテリーが切れてしまいました!」

スマホから呼びかける律の声にまず自動販売機で遊びに来るのとこっそり突っ込んだ。そして玄関の前で充電切れになる運の悪さは何とも言えない。

「え、じゃあぼくは中に入れないの?」

「殺せんせーと連絡がつかないので何とも……皆さんのスマホを行ったり来たりして開発者にも連絡を取っているのですが、繋がらなくて」

「どうしよう。茅野に泊めさせてもらおうかな」

スマホを取り出すとタイミングを示し合わせたかのようにバッテリー切れ。そういえば律は自分のアプリを勝手に起動させるのにスマホのバッテリーをかなり消費すると言っていた気がする。

「……………渚、これはあくまで提案なんだが」

「ヌルッフッフッフ……」

自動販売機の陰には密かに笑う影があった。

\*

丸ごと盛り付けられた野菜に海苔ではなく接着糊の付いたおかゆご飯。何故か風船やら教科書やらが丸ごと入っている。仕上げと言わんばかりに絵の具で彩られた物体にぼくは声を失った。キッチン  
の惨状からはどういいう工程で作られたかが垣間見える。

「えつと……これは？」

「シチューよ」

「シチュー?!」

面影の欠片もない姿に思わず頭を抱える。お手伝いの染井さんに勝手に暇を出したらしく、美琴さんが夕食を作ることになったのだが、学秀の母親という時点で想定しておくべきだった。

「だめね。やっぱり私銀座に行ってくるわ。学秀、あんたテキトーに何か作んなさい」

美琴さんは自分の髪をくしゃくしゃにして車の鍵を手にした。どうやら自分だけ外食しに行くようだ。なんて自由人なんだ。

「……渚」

弱り切った顔で眉を下げる学秀に頷いた。こんな学秀の顔は初めて見るかもしれない。世の男は母親に弱いようだ。

「冷蔵庫勝手に開けるね」

冷蔵庫を開けると整頓された野菜や味噌が少し残っていた。キャベツ、豚肉にもやし、人参……充分足りる。これだけあれば夕食2人分ぐらいどうってことないレベルだ。

「学秀は……テレビでも観てて。簡単に作れるものをささっと作るから」

調味料の所在を確認し、調理器具を取り出す。作るものは簡単に野菜炒めと味噌汁だ。あとはご飯を2合炊き、フルーツを添えれば立派な夕食になる。染井さんの好みか、調味料の数はぼくの家より膨大であり、中華から日本食、イタリアンにタイと完璧だった。



「完成したよ」

皿に盛り付けていると学秀は勉強の手を止めて箸やら飲み物を用意し始めた。2人用の小さなテーブルに食器を並べ、ぼくらは席に着く。

「いただきます」

1番初めに野菜炒めに手を付けた。出来栄は悪くない。学秀は「さすがだな」とぼそりと呟き、ぼくは学秀でも褒めることがあるのかと少し失礼なことを考えていた。

「今日理事長は？」

「出張でアメリカに居るよ。だから美琴さんが来る時期だとは思ってたんだが、まさか今日だとはな」

「？……理事長が居ない時に来るんだ」

少し踏み込んだ話だったかなと顔色を伺うと、あっさり「ああ」と返事が来た。意識の波長は冷たく、静か過ぎるほどだった。

「ビジネス上の都合で結婚したようなものだから、互いに殆ど会わないんだ」

何となく、彼の言っている意味が分かった。結婚をビジネス上で考えれば政略結婚だろう。美琴さんはどう見ても元お嬢様だ。きつと親はどこかの偉い人で理事長はそれを狙って結婚したようなものなんでしょうなと容易に想像がつく。

「色々な家族の形があるってよく言うだろう？僕は自分の家族はもう形すらない——無だと思ってる」

家族の形かあ。お母さんと妹が脳裏に蘇った。1周目と2周目、どこで間違えたんだろう。バラバラに崩壊した家族はもう戻らない。むしろ1周目と違って、もう元に戻らなくていい。両親に目視されなくても、家族から見えない存在になっても今更何とも感じない。

ぼくは無だ。

「同じ、だなんて簡単に済ませられないけどさ——」

顔を上げて学秀の目を見つめた。見つめ返されて、柔らかく、朗らかに微笑む。

「ぼくたちって似てるよね」

訓練のはなし。

6時。いつもスマホにセットしているアラームが鳴り響き、3秒も掛けずに止めた。外はもう薄っすらと明るい。

参考書と外国語の本で敷き詰められた本棚が目に入り、ぼくは目を擦った。普段寝ているベッドより一回り大きなベッドに手で触って確認してしまう。自分の着ているものは何だかサイズが合わずに丈が余っていて、とても変な気分だ。

「……そういえば昨日」  
「起きたか」

学秀の声に昨日浅野家に泊まったことを思い出した。学秀もまだパジャマ姿であり、新鮮な姿に相手のことをじっと見てしまう。手には置かれた制服が握られており、それが自分のものだ気づくのに時間がかかった。

「あれ？何で学秀がぼくの制服持ってるの？」

「昨日の夜、殺せんせーに鍵渡して取りに行かせただろう。忘れたのか？」

「そうだった……かも」

律が真夜中になつて殺せんせーの助けを得て復活したと聞き、ぼくは浅野家に一晩泊めてもらうことにしたのだ。殺せんせーはぼくの教科書や制服などを届けてくれ、下衆な笑みを浮かべながらもかなり良くしてくれた。

「洗濯物が干されたままだったので私と殺せんせーで協力して乾かしました！」

スマホからパジャマ姿の律が朝から明るく答えた。充電が100%なのが恐らく関係しているのだろう。

「ああ、律もぼくの部屋入ったんだ」

自動販売機が部屋に入って、床とか壊れてないといいけど。

「あと窓ガラスをピカピカにしたり、冷蔵庫のお掃除をしたり、メルに猫缶をあげたりと殺せんせーのお手入れの手伝いをするのはなかなか楽しかったですよ」

「律は何をやってるの?!」

「渚、いいから着替えろ。早めに行かないと朝食食べ損ねる」

学秀は制服をぼくに押し付けると部屋のドアを閉めた。

「待って、まさか朝から外食するの?」

ドアの向こう側にいる学秀に声をかける。素早くぶかぶかの服から制服に着替え、髪を手ぐしで整えてポニーテールを作った。学秀の返事が壁の向こう側から聞こえてくる。

「染井さんは昨日と今日の2日間休暇を取っているからな。スタバで軽く食べようかと」

「だめ」

ドアを開けてきっぱりと告げる。

「え?」

「軽い朝食ぐらいならばくが作るから。学生が平日の朝からスタバなんて贅沢だよ」

栄養面で考えても外食だと偏った食事になりがちだ。学秀はそこるところをきちんと考えていそうだが、コスト面でも家で作った方が安く済む。近頃プチ主婦化しているぼくはあまり無い胸を張って自分は正しいと言い切った。学秀は口論に負けたということ隠すためか、ぼそりと呟く。

「……作ってくれるならもちろんそれが一番いいが」

「そういうえば美琴さんは?」

「昨日の夜バーで飲んだみたいだ。部屋で寝ているよ。そのうち起きてくるだろう」

「美琴さんの分も作っておくね。ご飯とサラダ、味噌汁と……冷蔵庫に鮭があったからそれ使うね。あとはヨーグルトとフルーツ、飲み物は麦茶でいい?」

冷蔵庫から色々取り出し振り返ると、呆気に取られたマネケ顔の学秀が目の前に現れた。

「学秀?」

「ああ、それで大丈夫だ。助かるよ」

「……着替えて来たら?」

パジャマを指差すと学秀は頷いた。

「そうだな」

今日の学秀は少し変だ。首を捻っていつも通りの朝食を2人分余計に作った。でもその量はぼくが一人暮らしする前の量とそっくり同じ程度で、まだ体が覚えていたことにやるせなさを感じる。

ぼくの居ない潮田家は一体どんな様子なんだろう、とか。海咲は元気だろうか、だなんて。考えてもばかばかしいことがふと頭の隅に過ぎって首を振る。この前会ったお父さんは何も問題無さそうに見えた。ぼくが居なくても何も起こっていないようだった。むしろ、ぼくが居ない方が良かったみたいだった

「渚」

掛けられた声は殺意をスーツと吸い込んで行った。制服姿の学秀が出来上がった朝食にごくりと唾を飲み込む。

くすりと笑い、ぼくは彼を食卓に促した。

「それじゃあ、食べよっか」

マイナス思考を全て投げ捨てて、自分が作った朝食を久しぶりに誰かと座って食べた。昨日とは違って変わって晴れた朝のことだった。

\*

今日のE組はみんな何か企んでいる。それもゲスいことだ。

「今日は今までの訓練を踏まえた近接攻撃のテストを行う。2人組になるように」

「渚ちゃん、今日は学秀君譲ってあげるよ」

カルマ君がフフツツと如何にも怪しげな微笑を浮かべて学秀とぼ

くで2人ペアを作らせた。朝一緒に登校したところをE組女子数名に見られてからというもの、誰も彼もがこんな様子だ。

「どうやらぼくが学秀の家に泊まったことに対し、ぼくらが恋人同士だと囃し立てたいらしい。」

「だからそんなんじゃないのに……」

「じゃあカルマ君は私とだね」

「えー、茅野ちゃん小さいけどちゃんと殺れるの?」

「カルマ君、小さいってどの意味かな?」

「もちろん、む」

カルマ君の後頭部に武器が突きつけられた。茅野に胸ネタは地雷と分かっているやするのはカルマ君らしいけど、痛い目みるから止めておくべきだった。

「渚、本気はまだ出さないのか?」

「本気出したら目立つからね。でも、今日は出すかも。そろそろ烏間先生には気づいてもらわなくちゃ困る」

「気づく……って何にだ?」

目を閉じると様々な光景がフラッシュバックする。

屋上。大男。クラップスタナー。

鷹岡先生。

「まだ内緒だよ」

「またそれか。まあいい。自分で探すよ。今は皆の訓練成果に注目したいからね……動ける駒は把握しておかないと」

「1周目と同じだから大体分かるけど」

「それはどうかな」

学秀は意味ありげに呟いた。まず最初に目が付いたのは磯貝君と前原君のペアだった。2人は親友と呼ばれるほど仲良しであり、戦闘の相性も良い。1周目でもダントツで近接攻撃上位だったわけ。でも全盛期の頃に比べたらずっと劣って

え?

烏間先生の動きを2つのナイフが追う。動きはとても速く、正確で合計3回ものナイフが烏間先生に当てられた。

続いてテストを受けたのはカルマ君。彼は一見緩やかに見えると

ころから大きくジャンプし、烏間先生の視界から外れると鋭くナイフを突きつける。烏間先生はギリギリナイフに当てられるのを免れたが、顔には焦りが見えていた。

女子でぼくを驚かせたのは岡野さんの多彩な戦術だ。元体操部だった彼女は予想出来ない大胆な動きで烏間先生を惑わしていた。

片岡さんはバスケの時に見せたような男子顔負けの運動神経を發揮している。でもその動きは1周目よりも卓越されていた。

彼らの動きはアグレッシブで洗練されていた。3ヶ月でここまで到達するなんて絶対に信じられないほどに。1周目とは別人のように。

ぞくり。背筋を撫ぜられるような感覚にぼくは学秀の服の裾を掴んだ。

「渚?」

「学秀、訂正するよ」

「みんな強くなっている。1周目よりずっと」

彼の口端が満足気に上がる。

「それが僕が居ることによる変化なのだとしたら、光栄に思うよ」

「何をしたの?」

「何てことない。ちよつとした社会勉強の実践だよ。クラスの訓練量増やし、士気を上げるための」

「自律思考固定砲台!」

烏間先生の声に律も試験を受けるのかとE組勢は好奇心の眼差しを向けた。1周目とは違い動けるようになった律は体育に通常の生徒と同じく参加していたりして、いつもぼくを驚かせる。最初からそれが当たり前のみんなからしてみれば、ぼくが驚いていること自体に謎だらうけど。

「烏間先生、自律思考自動販売機型移動砲台と呼んでください」

「自律思考自動販売機型移動砲台! 出番だ!」

「あれ? 律は2人組じゃないんだ」

「ヌルフッフッフ。律さんは1人で100人分の動きをしますからねえ。律さんの射撃はいつも避けるのに労力を使います」

そんなことをいう殺せんせーだが、彼は砂場でスコットランドのエディンバラ城を3秒で作りあげたところだった。そんなマツハの怪物が避けるのに労力を使う、だなんて律も中々侮れない。

律が繰り広げる攻撃を烏間先生は必死で避けた。しかし超高速で展開されるナイフは烏間先生を次第に追い詰めていく。カウントできただけで当たった攻撃は30を超えていた。

「律が1番あり得ないレベルで強いね」

「浅野学秀！大石渚！」

ぼくらの出番がほぼ最後になっているのに作為的なものはほぼないだろう。烏間先生が学秀を警戒しているのは周知の事実だったけども。その影にいるぼくすることに注目しているかどうかは何とも言い難い。

「出番だ。準備は出来ているか？」

「うん」

ぼくらは同時にナイフを振り上げた。烏間先生はそれをどちらも避ける。学秀は右に回り、ぼくは後ろに行きそれぞれ2撃目を突きつける。学秀の攻撃が当たった。素早く次の攻撃を繰り広げる彼に烏間先生は集中し始める。その中の意識にぼくは居ない。

烏間先生がやっているのは戦闘だ。それも避けるだけの。対してぼくがやっているのは暗殺だ。ただ当てればいい。

殺せば勝ちなんだ。

ぼくは学秀と烏間先生の戦闘を邪魔しないように後ろをそっと歩き、ナイフを烏間先生の首筋に当てた。烏間先生はハッと気づいてそれを防ぐが、ぼくは彼の手を逃れて4撃目を突きつけたところだった。

「すまん、少し強く防ぎ過ぎてしまった」

「大丈夫です。当たってないのです」

「……そうか。それなら良かった」

烏間先生の意識の波長が騒めく。彼は気づいただろうか。ぼくが何をしたのか

ぼくの殺意を理解しただろうか。

随分と個人的な感情だけど、ぼくは未だに鷹岡先生を許せない。生

徒たち全員を巻き添えにしてまでぼくに復讐しようとした彼の執着心には正直、殺意さえ覚える。

しかし、殺意を抑えるのは理性だ。ビッチ先生も言っていた。1番愚かな殺し方は感情や欲望で無計画に殺すことだと。

でもそれは物理的に殺す場合の話だ。

「それまで！今日の体育はこれで終了！」

「やっぱり当てるの難しいよな……隙が無さすぎるっていうか」

「……そう？」

運動神経の良い生徒たちが声を揃える。クラスの4分の1程度だが、烏間先生にナイフを当てられた生徒はそれなりに居た。

「何で揃って……ってお前ら何で当てられたんだ？思ったより当てられた奴居て驚いたんだけど」

「……何でだろうな？」

「俺にも分からねー」

皆は自らの力に首を傾げていた。学秀の指揮力は本当に偉大だ。

「せんせー！放課後みんなでお茶していかない？」

倉橋さんがビッチ先生直伝「男をオトす笑みその3」を使って烏間先生に声をかけた。案の定効果は無い。

「誘いは嬉しいがこの後は防衛省からの連絡待ちでな」

「私生活でも隙がねーな」

「っていうより壁を作られてる？」

「厳しいけど優しくして、私たちのこといつも第一に考えてくれるけど、それってやっぱり任務だからなのかな……？」

E組内に反論できるものがおらず、淀んだ空気が漂う。そこで冷静に口を挟んだのは意外にも殺せんせーだった。

「そんなことありませんよ。確かに烏間先生は政府からの工作人員ですが、彼も立派な教師です」

「あ、そんなことよりさ、俺は渚ちゃんが学秀君の家に泊まっていたことに驚きなただけど」

「何で知っているの？」

「朝一緒に来たらしいじゃん、2人。徒歩通学と車通学じゃあなかなか



か駅から一緒にはならないっしょ」

後ろを振り返るとウィンクして舌を出した中村さんと目が合った。中村さん含む女子たちに朝会ったのが理由か、どうやら噂になっていくようだ。

「どうだった？お泊まり」

茅野がそつと尋ねる。あまり噂好きでなさそうなのは茅野ぐらいだろうか。ぼくは彼女の普通の質問に

「普通に楽しかったよ？」

と何も考えずに答えた。

「楽しかったのかあ……」

「浅野君もうちよつと頑張ろうよ」

女子たちは残念そうに大きくため息を吐いた。何を頑張ろうなのか分からずに茅野に聞く。えつと苦笑いされた。

「こう……何ていうんでしよう？もうちよつと少女漫画的な展開に持って行かないと！先生も応援していますよ！」

殺せんせーの見え透いた下衆な思惑にぼくは引きつった笑みを浮かべる。

「殺せんせーが尾行で隠し撮りした写真がここに147枚ありますが、表示しますか？」

「律、それ俺に送ってくんね？」

「私にも頼むわ」

「にゅやっ?!先生のデータがいつの間……!」

「3人だけ抜け駆けすんなっての。俺らにも送ってくれよ」

「私も私も」

「かしこまりました!」

E組のグループLINEに律から何枚もの写真が送られる。どの写真も後ろから撮影されたもので、ぼくと学秀の姿がはっきりと映っていた。

「おい。どういうことか3秒で説明しろ」

「浅野君?!き、気のせいですかねえ……先生、浅野君の後ろにどす黒いオーラが見えます!!!」

「気のせいじゃないから大人しく殺られなよ」

「つてかマツハのくせに3秒を状況判断で使い切っちゃったし」

「バカだなく殺せんせー」

「聞いていた通り、随分仲が良いんだなE組は！」

突然、何の前触れもなく普段の笑い声が絶えない空間に異物が混入した。

幾つもの紙袋を地面に置いて、男はニツコリと笑顔の仮面を貼り付けた。薄っぺらいその仮面は見る人にはバレバレで、彼の意識の波長が意気揚々と波打つ。何を企んでいるんだろうか。顔色は真っ黒だった。

「やあ！俺の名前は鷹岡明!!今日から鳥間の補佐として働く!よろしくな、E組の皆様!」

鷹岡先生は台本通りの台詞で挨拶をすると生徒たちは紙袋のラベルに釣られて集まっていった。蜜蜂が群がるみたいに一瞬に、彼の周りに人だかりが出来る。

「これって有名店のケーキ?」

「ラ・ヘルメスのエクレア?!」

「こっちはモンキチのロールケーキだ!」

スイーツに目が無い女子たちは特に夢中になって紙袋を漁っていた。磯貝君はいつもの癖でつい値段を気にしてしまって躊躇している。

「お土産に持ってくるには高すぎないですか?」

「遠慮せずに食べ食べ!俺の財布を食うようなつもりでがっつりな!」

「渚さん、殺意を隠せていませんよ」

と律が言うとおぼくは笑みを夢中で作った。

「……っ!あ、ラメゾンドュシヨコラのケーキだ!好きなんだよね」

「でも鷹岡先生、よくこんな甘いものブランド知ってますね」

「ぶつちやけLOVEなんだよ、砂糖が」

「……へく、何か誰かと正反対だな」

ぼくは瞬時に隣を見たが、生徒たちの視線は校舎内の烏間先生に注がれていた。

「つ……………」

殺せんせーはヨダレを垂らし、ケーキを凝視している。目は集中する時のズーム眼だ。

「殺せんせーも食べ食べ！いずれは殺すけどな。はっはっはっ！」

「よくそんなに糖質を摂ろうと思うな。既に糖尿病なんじゃないのか？」

「計算したところ予算は5万6千9百円。防衛省も可笑しなところに予算を使うようですね」

学秀と律の間こえないところで吐かれたキツイ言葉にチヨコレートケーキを頬張るぼくは喉を詰まらせた。

「ゴホツゴホツ。人が頑張って演技しているっていうのに……2人も鷹岡先生に恨みでもあるの？」

「はい！彼の登場回では私の出番がめつきり減りましたから」

発言がメタいよ律?!

「よく分からないが、鷹岡（そいつ）の所為で渚が酷い目に遭った気がする」

「鋭いですね、浅野さん。逆にどうして分かるのかと驚きました」

律が「どこかにセンサーを搭載しているのですか？」と学秀をチェックし始める。センサーを搭載出来るのは機械だけだから。学秀はこれでも人間だから。そう心の中でツツコミを入れた。

「何だか同じ防衛省からなのに、烏間先生と全く同じじゃないんだね」「近所の父ちゃんみたいですよ」

「いいじゃないか父ちゃん。同じ教室にいるからには俺たち家族みたいなもんだろ？」

寒気がした。何故なら鷹岡先生は全く嘘を吐いていなかったから。彼は本心を口にしたまま、本性を隠している。そんなちぐはぐさが何処となく気持ち悪くて、ケーキを戻してしまいそうになった。

「ところで浅野、さっきの攻撃どうやったんだ？二撃目で当てられた

のお前だけだぞ」

「ああ。あれは烏間先生の動きを予測してナイフを突きつけたに過ぎない。律、さっきの映像をスローモーションで見せてくれ」

「はい。この映像をご覧ください！烏間先生が浅野さんのナイフを避ける0.3秒後に浅野さんは次の動きを始めています。統計的にはこのナイフの当て方をした場合、烏間先生が右に動く可能性が70%、左が10%、後ろは20%ほどです。つまり、浅野さんは烏間先生の動きを読んだというわけです！」

「ええ!!そんなことが出来るの?」

「他の動きは?例えば側転してナイフを足から突きつけた場合」

「それをするのは岡野、お前だけだろ」

「ほつといてよ、前原」

いつの間にか人だかりは学秀と律を中心に出来上がっていた。1人取り残された鷹岡先生が遠巻きでその様子を眺めるぼくに声をかける。

「片方は転校生暗殺者だったな!しかもう片方の男子生徒はE組の出席簿で見かけた覚えがない……誰なんだ?」

「E組じゃないから、出席簿には載っていませんよ。浅野学秀。生徒会からの監視役です」

「はははっ、すごい人気者なんだな!」  
「……………」

乾いた笑い声を上げた鷹岡先生に、ぼくは自分が間違えた解答をしなければならなかったことに気がついた。

鷹岡先生にとつての標的は誰だ?烏間先生だ。自分より優れた烏間先生は彼にとつて最も気に入らない人間の1人だろう。

きつと彼は烏間先生の代わりに訓練を指導するということで優越感に浸っているはずだ。しかし、E組にはまだ浅野学秀という指導者がいる。彼は教師ではないが、鷹岡先生が憎むには充分過ぎるぐらい目立っている。

「邪魔だなあ……浅野学秀」

ガリツと爪を噛む音がした。

父ちゃんのはなし。

鷹岡先生が怒った。何故だか分からないけど、ぼくか学秀の行動が彼の逆鱗に触れたらしい。しかし、ぼくは気にせず学秀に愚痴をこぼしていた。

「あ、学秀。そういえば酷いんだよ、殺せんせーと律。昨日帰ったら冷蔵庫の中空っぽになっていてね」

「渚……冷蔵庫の中に何を入れたのか忘れたのか？」

怪訝そうに学秀は顔を顰めた。視端では鷹岡先生が顔を引つ掻いていたが、もちろん構いもせずに学秀に訊き返す。

「冷蔵庫の中に？何の話？」

突如前に冷蔵庫が現れた。中には凍りついた茅野が眠っている。ぼくは慌てて駆けつけて、茅野を揺さぶった。茅野は目をぱつちりと開けると、彼女は泣きそうな顔でぼくに助けを求める。

「……てっ……助けて渚……っ！」

茅野の息が途切れ、冷たい死体のような彼女がぼくに倒れかかってくる。

「うわああああ!!!」

後ろでは鷹岡先生が薬のビンを投げ捨てて狂気に満ちた笑い声をあげていた。

\*

というところで目が覚めた。

後になって思い返すと変な夢を見たなあとぼくは裏山を駆け抜けながら考えていた。殺せんせーが冷蔵庫の中身を全て平らげてし

まったと言うのが根本的な理由だったが、度々鷹岡先生が出てくるのが解せない。

茅野から貰ったプリンを食べられてしまったのが理由だとは思うけど。いくらなんでも殺せんせーは食いしん坊すぎる。

その日、異変に気付いたのは始業のベルが鳴った時だった。いつもは一番後ろで堂々と構える浅野学秀の姿が今日はどこにも見当たらないのだ。

「今日はA組に居るのかも」

自分に言い聞かせるように言葉を漏らす。思った以上に声に説得力がなく、唇を嚙んだ。

あれだけ鷹岡先生に嫌悪感を露わにしていた学秀のことだ。カルマ君のように体育をサボりたくて本校舎に居るつもりであつてもおかしくない。でも、ぼくの知っている学秀はサボるなんて絶対にあり得ない。

「では先生出欠を取りますねえ」

殺せんせーは何を考えているか分からない虚ろな丸い目を普段学秀がいる奥に向けていた。

「杉野君、学秀から何か聞いていない？」

「何も聞いてないよ。どうしたんだろーね、浅野」

ピロリン。不意にスマホから着信音が鳴る。ルールに厳しい殺せんせーがギリリと目を光らせた。ぼくは慌ててスマホをマナーモードにしようとスマホを見て

スクリーンの通知で誰からのLINEなのかを目の当たりにする。その名前に彼女からLINEなんて珍しいな、なんて微笑んで内容を見てぼくは顔を真っ青にした。

長沢珠理亜。内容は……内容は、は。

椅子から弾けるようにして走る。後ろから殺せんせーが「渚さん！」とぼくの声を呼んでいたが、関係がなかった。

じゅりあ：浅野君が停学になった。渚ちゃん理由知らない？

「何で……」

裏庭の崖から下を見下ろす。

「何でなんだよ!!!」

声は山に響いていた。自分の口調が男の時のものに変化したのは怒りの気持ちを上手く心の中で消化出来なかったからだだった。誰がこれをやったのか、ぼくには見当がついている。何故こんなことをしたのかも。

「渚ちゃん、落ち着いて」

ぼくの様子を見に来たカルマ君はぼくを抑えて地面に座らせた。

「カルマ君。ぼくは落ち着いているよ」

「教室飛び出したの？」

「……学秀に何があったの？」

カルマ君はぼくの反応を気にしながらゆっくりと説明を始めた。

昨日、鷹岡先生が学秀に殴りかかってきたこと。学秀はそれに応じることがなかったが、鷹岡先生のとある発言で学秀が彼にやり返してしまったこと。怪我のない学秀と右腕に傷を負った彼では学秀に非があるようにしか見えなかったこと。そして、学秀が1週間の停学になったこと。

それらを聴き終えて、1番最初に思い浮かんだ感情は殺意だった。

鷹岡先生は学秀をE組に居させないために、学秀にとって1番の屈辱を与えた。それは暴力でも羞恥でもなく、1週間の停学という一見軽いものだ。でも、それは生徒会長の名誉をズタボロにするには十分であったし、生徒たちからの評価も降下したはずである。

人の嫌がることをさせたら一流というのは、きつと鷹岡先生を示すのだろうとぼくは再認識した。

「どうする、渚ちゃん？俺さ、あいつの体育サボる気満々だったんだよね。ウザすぎて手出したらまた停学になりそうだしさ。でも、想像以上にクズ過ぎて歯止めきかないかも」

「何でもいいよ。カルマ君は好きにやってくれて」

ぼくはぼくで復讐をするから。そんな物騒な言葉を口の中で呟いた。

「ふうん……だったら好きにするよ」

そういえばカルマ君は何で鷹岡先生が怪しいと思ったんだろう。

\*

初回訓練から数十分。鷹岡先生の化けの皮が剥がれおちた。

「さあて！新しい時間割だ。これをみんなに回してくれ」

「え……何これ」

10時間目、夜の9時まで続く欄の半分以上が訓練で埋められた時間割をぼくは一蹴した。政府の焦りがありありと感じられる一枚の紙である。超生物を殺すために殆どの時間を訓練に費やす。それはぼくが日常的にやっていることだ。間違つてはいない。それが殺せんせーを殺すためだけの軍隊ならば……

「おっと、このぐらいは当たり前だろ？理事長の承諾もばっちり得てる。「地球の危機ならしょうがない」ってな！」

「ちよつ……無理に決まつてるだろ、こんなの!!」

「……ん？何が無理だつて？」

意識の波長に暗さが含まれている。これ以上下手に突くのは危険だ。

「前原君、だめ……!」

「勉強の時間これだけなんて可笑しいだろ?!それに遊ぶ時間もねーし。出来るわけねーだろ!」

言ってしまったと目を瞑った。生々しい殴った効果音と呻き声が耳を襲う。

「できないじゃない。やるんだよ」

相手の顔を見なくても分かる。前を向きたくなかった。そこにはきつとあの顔があるのだろう。あの、「自分はちつとも悪くない」と信



じ込んでいる無害のふりをした悪魔の顔が。

「言ったよな？俺たちは家族で俺は父親だ。世の中のどこに父親の言うことを聞かない奴がいる？」

「……………」

一番聞きたくない家族なんて言葉を出されて、ぼくは鷹岡先生を睨みつけた。前原君が殴られたからか、誰も表立って逆らう生徒は居ない。

そんな中、1人——赤髪の少年が普段あまり見せないどこか落ち着いた表情で鷹岡先生に近づいていく。

「…………あんたさあ、父親のふりも出来てないくせにすらざらとよく並び立てられるよね」

「ああ？お前何言ってるんだ？」

「それだよソレ。来た時から可笑しな奴だとは思ったよ。こんなこと本校舎の教師でも出来るってのに」

彼はため息を吐き、指先をビシツと鷹岡先生に示した。

「……………こいつは俺らの名前を1度も呼んでいない」

「……………あー！」

ぼくは鷹岡先生とのやり取りを頭に思い浮かべ、カルマ君の言うことが正しいことに声を上げる。カルマ君が何故鷹岡先生の正体を事前に見抜けていたのか。それは鷹岡先生がごくごく単純な人としての振る舞いを欠いていたからだだったのだ！

「まあそんなんで父親面されても俺らは「は？」ってなるワケ。それとも何、世の中には子供の名前を呼ばない父親もいるーとか開き直す？」

「黙れ」

「今更弁解の余地がないって感じだね。ほら、できない、じゃなくって、やる、んでしょ？ちゃんと覚えなよ、名前ぐらいさあ」

「黙れ黙れ黙れ!!!」

鷹岡先生の蹴りをカルマ君は緩やかに交わした。駆け引きを楽しんでいるのが見て取れる。今の今までの挑発は相手を怒らせて判断を鈍らせるためのものだろう。

「言つとくけど、俺は停学とか気にしないから。好きなだけ殴りかかって来なよ」

鷹岡先生の眉間がピキピキと音を立てている。しかし、カルマ君は余裕あり気に動きを交わしていた。その動きの法則性にぼくは烏間先生の防衛術を思い浮かべる。鷹岡先生も顔に焦りが出ていた。いくら何でも烏間先生の動きを出されると勝ち目はないのだろう。

攻撃は次第に速くなり、2人から遠ざかっていた生徒たちも動きに追いつけなくなっていた。

「やるじゃないか。でも」

鷹岡先生が突如E組の生徒側に攻撃を仕掛けてきた。それを感知して未然に防ぐカルマ君の右腕を、鷹岡先生は嬉々として蹴った。ポキッと鈍い音がして、ぼくらは何が起こったのかを目の当たりにする。

「あ……うっ……!」

「父ちゃんは嬉しいぞ。家族を庇う心意気は立派だ!」

腕を押さえて蹲るカルマ君とそれを見下ろす鷹岡先生がそこにはいた。

「今ポキッて音しなかった……?」

倉橋さんが震える声で呟く。

「ははっ、でも勘違いするんじゃないぞ?骨の一本折ったからって、それは教育上の罰に過ぎない。父親に逆らう奴は力でねじ伏せるしかないからなあ」

「狂ってる……!」

嘘だ。カルマ君がE組のみんなを庇った……?

「こいつみたいに不満のある奴は抜けてもいいぞ。俺の権限で新しい生徒を補充する。けどな、父ちゃんは1人もかけて欲しくない。さあ、家族みんなであのタコを殺そうぜ!」

三村君と神崎さんの肩に腕を回し、上機嫌に鷹岡先生は笑っていた。意識の波長は狂気で揺れ、ぼくの目には真っ黒な鷹岡先生が映る。

「お前は父ちゃんについて来てくれるよな?」

鷹岡先生は神崎さんに優しい父親のふりをして脅した。杉野君が拳を握りしめて怒りに震えている。

「……は、はい。あの……」

神崎さんは前原君とカルマ君を見てぐつと歯を食いしばった。ニツコリと笑みを作り顔を上げる。

「私は嫌です。鳥間先生の授業を希望します」

鷹岡先生の手が神崎さんに当たる前に彼の行く手を遮る男が居た。カルマ君だ。

「……否定されたからって殴るとか、可笑しくね？」

「またお前か。ようし、父ちゃんリベンジは大歓迎だぞ！」

「止める鷹岡！」

鳥間先生が慌てたように駆けつけた。この様子だよようやく彼も鷹岡先生の正体に辿り着いたのだろう。

「腕に異常はないか？」

彼は真つ先に一番重症であるカルマ君に尋ねる。カルマ君はふつと笑った。

「ボキツて音したから……骨は折っただろーね」

「カルマ君大丈夫なの？」

「渚ちゃんが無事でいるうちは平気かな」

「え？」

「約束したんだよね、学秀君と。現実から逃げないって」

……カルマ君は1周目の時、鷹岡先生の授業をサボっていた。喧嘩っ早いカルマ君は敵を作りやすいのもあって、危機察知能力に優れている。鷹岡先生の異常にいち早く気付いたのもそれが理由だ。

でもカルマ君にはみんなの為にとか、助けなきゃとか言った感情は皆無で。敵を多く作ってきた分孤独に慣れている。誰も助けようだなんて思わないぐらい。

「いつだって俺は自分勝手に大人ぶって、実際は現実から目を逸らしたガキだよ。停学のときも、拉致騒動の時も、修学旅行の時も――」

「逃げて自分が助かることしか考えてなかったんだよ。悪いけどこれ

が本音」

カルマ君は腕を庇いながら立った。彼は獲物を狙うような研ぎ澄まされた目を鷹岡先生に向けている。

「でも俺はもう逃げない」

「はははっ、泣ける話だ！父ちゃんは感動したぞー！」

「感動？私の生徒に何をしているんですか」

ドスの効いた声と共に触手が鷹岡先生の腕を掴んだ。

「おっと、モンスターが登場かな？体罰ごときでぐだぐだ……体罰は教育の範囲内だろう？」

「なっ……！」

「お前のような怪物を殺すんだ。厳しくしなくてどうする？それともあれか？多少教育論が違うだけの一教師を攻撃するっていうのか？」

「そ、それは……」

殺せんせーは反論出来ずに口を噤んだ。鷹岡先生は勝ち誇ったような目で殺せんせーを見下す。ぼくらは殺せんせーも助けにならないのだと絶望的な表情をしていた。

「烏間先生……」

ぼくは無意識のうちに烏間先生を呼んだ。しかし、それは鷹岡先生に影響を与えたようで彼はぼくの近くまでやって来ると眉間に皺を寄せて気が狂ったような笑顔を見せた。

「……おいおい、烏間は俺たち家族の一員じゃあないぞ。家族を頼らない人は――」

烏間先生が無表情で鷹岡先生を止めた。

「それ以上生徒に手荒な真似をするな。暴れたいなら俺が相手をしよう」

「烏間く、これは暴力じゃない。教育なんだよ。お前と戦いたいのは山々だが、俺らは教師同士。戦うとしたら教官としてだろう？」

台本通りの言葉を投げかけ、鷹岡先生は対先生ナイフに手を触れた。た。

「イチオシの生徒を選べ。俺にナイフを当てられたらこの教室を潔く

出てやろう」

E組のみんなは普段の訓練の成果を見せられるとばかりに真剣な顔になった。しかし、鷹岡先生には彼なりの手がある。

「ただし、使うのは対先生ナイフじゃない。これさ」

対先生ナイフを捨て、本物のナイフを取り出す鷹岡先生に張り切っていたE組も一気に慄いた。ぼくを除いては――

さあ、烏間先生。準備は出来ました。あとは殺るだけです。

\*

「渚さん、やる気はあるか？」

烏間先生は前と一周目と同じ言葉をぼくにくれた。

「選ぶのなら君しかないが、その前に俺の考えを聞いてほしい。地球を救う側として、俺は君たちと対等のプロ同士だと思っている。そしてプロとして最低限払わなくてはいけない報酬は当たり前前の中学生活だ」

躊躇ったように言葉を続ける。

「このナイフを無理に受け取る必要はない。その時は俺から鷹岡に掛け合って報酬を維持してもらえるように努力しよう」

「ははっ、土下座でもすりや考えてやってもいいけどな！」

勝利を確信している鷹岡先生を無視し、烏間先生に向き直った。



「あーあ、外しちゃった」

これは学秀の分。

しよぼんとわざとらしく落ち込んでみせ、鷹岡先生の目からヘアピンを抜いた。右目を押さえ込んで中二病のような姿をした彼を生徒たちは怪訝そうに眺める。鷹岡先生はナイフを避ける時みんなに背を向けていた。つまり、ぼくの手が当たるところは見えたとしても、ヘアピンが刺さったところまでは見えない。

名前を呼ばない教官に教え子の姿は見えているのだろうか。否、見えていない。自分のことしか考えてない、自分を中心に世界を回しているような錯覚をしている人、それが鷹岡明だ。そしてそんな人目には必要だとぼくは思う。

「ぐああ!!」

「また外れかあ」

カルマ君。

ナイフが当たらなかったので落ち込むふりをして、うずくまる鷹岡先生のお腹にぼくは蹴りを食らわせた。

「もう止めろ」

「何で?」

無邪気に首を傾げて目をぱちくりとすれば相手は小さく呻き声を漏らした。

「試合はもう終わりだ!俺の負けなのは分かったから止めてくれ」

っ

ぼくは容赦なく弱り切った彼を殴った。

「試合はまだ続行ですよね?」

「な、なんで……っ」

「だってぼくは先生にまだ1度もナイフを当てていない」

右手に握られたままのナイフを鷹岡先生の顎に向ける。

「殺してないんだからまだ勝負は決着つかずのはずだ」

笑顔でヘアピンをもう片方の目に刺す。これで盲目の教官の誕生だ。

「うわあああああ!!」

「あーあ……思った以上に弱くてつまらないなあ。そんなんでどう

やって学秀と戦ったんですか？……ああ、全部避けられたんだっけ」  
くすりと嘲り、意識の波長を読み取る。目線が見えないことから構築される情報量は少ないが、いつも通りそれはしつかり機能していた。

まだ伏魔島の分とか残っているけどなあ。まあいつか。もう終わりにしよう。

相手の意識が向いていない時を狙い、ぼくはゆるりとナイフを当てた。両目を手で覆っているからか、ナイフを当てただけなのに刺されたような反応をする鷹岡先生は哀れだ。それと同時にいい気味だとも思った。

「はい、ナイフ当てましたよ。これでぼくの勝ちです」

「渚……」

茅野の声でぼくはE組のみんなに目を向ける。彼らの顔には驚愕と、ぼろ雑巾のようになった鷹岡先生を前に勝利を喜んでいいのかわからないといった感情が含まれていた。

「えつと、何が起こったの？」

「渚ちゃん意外とやるねえ」

「意外と戦闘力低かったのか、あいつ」

「俺もあれぐらいはできるって」

「馬鹿言わないの」

口々に生徒たちが口論を始める。誰も彼がやられたことに対して喜んだりしないのは、何となくぎこちないと思うからだった。それ以外は前と同じ。ぼくに祝福と感謝の言葉を投げかけてくる。当然だ。彼らにはぼくが鷹岡先生の目を刺した瞬間が見えていなかったのだから。彼らにはぼくが純粋な戦闘で鷹岡先生を倒したように見えたのだろう。

恐らく目を刺したことに気づいたのは……。……。ぼくは周りを見て渡して意識の波長が異なる人を探し出した。殺せんせー、鳥間先生、ビッチ先生、それからカルマ君。

「渚さん、君は……」

鳥間先生の顔は1周目で見たものとは違っていた。ぼくがやった



行いに対して咎めるような面持ちで真っ直ぐと目の奥を覗き込んでいる。既視感にぼくは目を何度も瞬いた。

彼の言葉が、1周目での言葉が脳裏に浮かぶ。それはきつと人生の最後ら辺のこと。烏間先生は同じ顔でぼくに尋ねたんだ。

『君は何故』

——を殺したんだ？』

「あ……っ、どう、して……っ？」

目の奥から涙が零れ落ちた。

プールのはなし。

暑い日になるとぼくは時折ビッチ先生の話を思い出す。彼女曰く、日本の夏はhot【暑い】ではなくmuggy【蒸し暑い】らしい。「だから日本での夏は密着した色仕掛けがあまりできないのよね。やっつて私が暑苦しいし」

ビッチ先生、倉橋さん、矢田さん、ぼくの3人は木陰で優雅にアフタヌーンティーを楽しんでいた。マナーの心得を教わってる最中にビッチ先生が「蒸し暑いわね」と愚痴を零したため、話題が急に色仕掛けになってしまったのだ。

「でも色仕掛け＝密着するだけじゃないんでしょ？」

ぼくがビッチ先生から教わった色仕掛けの数々を思い出し、そのどれもが全て密着に限ってはいないのだという点を突く。

「そう。良いところ気づいたわ、渚。密着できないなら露出するってわけ」

ぼくは絶句した。そういう意味で密着を否定したわけじゃないからだ。確かにビッチ先生は夏に露出が多かったけど、まさかそういう理由だったとは……

「はい、先生質問！日本だと露出していたら夜の女の人みたいに認識されて、逆に色仕掛け効かなくなるんじゃないかな？」

倉橋さんが的を得た発言をする。少なくとも恋愛対象ではなくなるだろうなというのがぼくたち3人の見解だった。ビッチ扱いされてしまいそうだな。というかされてた、ビッチ先生は。

「そんなことないわよ。烏間見てみなさい。あいつだっつてちよつとは私の谷間見てぐらついたり」

「それは無い」

きつぱりと声が揃う。烏間先生を知っている人ならば誰だっつてこう言うはずである。

「何で3人揃って断言なのよー！」

さつきまで得意げになっていたビッチ先生の表情が途端に崩れた。烏間先生のことになると彼女は表情がころころ変わって年頃の女の

子みたいだ。

「烏間先生はそんな人じゃないもん」

と倉橋さんが頬つぺたを膨らませた。

「お堅いっていうのもあるけどね。烏間先生が女の人を見る瞬間つて、筋肉があつて戦力になりそうとか、そんな時だと思う」

恋する乙女のフィルター補正が入った倉橋さんに対し、矢田さんは客観的な視点で述べた。ぼくは矢田さんの意見に全面的に同意だ。彼女には優れた男性の観察眼がある。

「とにかく！夏は露出よ。特に渚！あんたはきっちりし過ぎ、保守的過ぎ！女子としての品位が欠けてる！」

「そ、そんなことないよー」

いきなり名指しで呼ばれたことに反論した。仲間であるはずの2人を見るも、2人はビツチ先生側のようだ。

「ごめん、それはあたしも同意がなく。天使ちゃん、可愛いのもったいないってよく思うし」

「まず渚ちゃん、スカート膝丈よりちよつと下だよ。うちの学校せつかく校則が膝丈少し上なんだから、少しは折った方が良いと思うよ」

「短すぎてもアンバランスだけど、ちよつとぐらいなら短い方が可愛いよね」

うぐつと言葉を詰まらせる。スカート丈を少し長めに行っているのは短いと足が涼しすぎて違和感を覚えるからだ。更に中学1年生の頃に先輩から目をつけられるのを恐れて、みんな丈が長めだった頃の名残りでもある。そこから短くされるスカート丈について行けずにいたら、周りの丈との格差が出来てしまったのだ。

「まあ、スカート長い子はうちの学校それなりにいるよね。勉強重視の女子たち多いからかな」

あとは学力がそこまで高くない女子はA組女子たちに「勉強出来ない癖にスカート丈だけ短くしてるとか身の程知らず」なんていうよく分からない風潮が柵ヶ丘にはあるため、女子のスカート丈は平均的に長めだ。E組女子はもう墮とされた身だからあまり関係ないが。

「あと渚、あんたブラちゃんに付けてるの？」

「え、でもそこまで大きくないし……まだ中学生だし……」

ビッチ先生の指摘にギクリとして視線をずらす。倉橋さんと矢田さんは苦笑い気味だ。

「そんなの計んないと分からないと思うよ。早い子だと小学生から付けてるし」

「中学生だからってそのところはしつかりしないとね」

「それから日焼け止め！ちゃんと塗んなきゃだめだよ？せっかく肌白いんだから」

「あとね」

それから3人のぼくへのダメ出しは1時間に渡って行われた。終わる頃にはぼくはメモ帳に沢山の項目を書き終えていて、女子力つて奥が深いな、なんていう雑な感想を抱いた。3人とも細かすぎるとは思うけど。

「渚ちゃんって女子力高いのに根本的ところが欠けてるよね……」

「浅野君も大変だね」

倉橋さんが言っただけ矢田さんが「そうだね」と返す。ぼくは首を傾げた。

「何でそこで学秀？」

「それは……ね？」

「何でだろう？」

2人の挙動がおかしい。意識の波長無しにでも分かるぐらいの下手な誤魔化し方だ。でもあれこれ詮索し過ぎてもだめだろうから、ぼくはスルーすることにした。

まあ多分、女子力が低いと周りにもダメージが行く……ってことかな。

「あ、ビッチ先生！そういうええばさ、先生が潜入暗殺主流なのって色仕掛けが得意だから？」

「それもあるけど、昔からよく言うでしょ。敵の攻防は外から入るより内側から攻める方が成功するって。内側から入るには潜入暗殺が1番なのよ」

「あくそつか！」

「外からより内側から……か」

ぼくの考え事に答えを出したのはビッチ先生のそんな一言だった。

\*

ぼくの暗殺後、1周目と同様に鷹岡先生は理事長に辞職届の紙を渡され、教師を辞めることになった。本人に状況が分かっていたのかと言われると至極微妙だったけど。何故なら彼は狂ったようにカラカラに乾いた笑い声を上げていたのだから。

教室の年季の入ったドアを開ける。表面的な笑顔を貼り付けた。

「おはよー」

ぼくの挨拶に数人が振り返る。その反応にほっと胸を撫で下ろした。

良かった。みんな、普通、だ。

「おはよっ、渚！昨日渚に勧められたスタバの新作飲んでみたよ」

茅野がスマホの写真を見せて満面の笑みを浮かべる。新作ドリンクは茅野にちょうど良さそうだと思っていたから、気に入ったようになによりだ。

「渚ちゃんおはよ」

「天使ちゃん、今日はツインテなんだね！」

「今日は2つ結びしたい気分だったんだよね」

幸運なことかどうかは分からないけど、E組は殆どの生徒たちは暗殺の時にぼくが残酷なことをしたとは気づいていないようだった――

カルマ君のような例外を除いて。

「おはよ、カルマ君」

「……はよ」

鋭い目がぼくを捉える。ぼくは淡い笑みで相手と視線を合わせた。まだ骨折中の腕が痛々しくぼくの視界に突き刺さる。

「あの……さ、カルマく――」 「おはようございます！」

先生、暑過ぎて溶けるかと思いました」

殺せんせーが教卓にマツハで到着した。外が暑すぎるのでなるべく中に居たいのだろう。もつとも旧校舎には冷房が1つ足りとも置いていないが。カルマ君は殺せんせーの服装を見やりぼそりと呟いた。

「そんな暑い服着てるからじゃね？」

「ほら先生、脱いで脱いで！」

中村さんが忍び足で殺せんせーに手を伸ばし近づいていく。片方の手にはナイフが握られていた。

「にゅやっ!!中村さん、どさくさに紛れて人の服を脱がそうとしないでください！ナイフもバレバレですよ！」

「あちゃー失敗失敗」

「莉桜ちゃん何やってんの〜」

「どうしたの、渚？席座りなよ」

茅野に促され、ぼくはカルマ君と話すのを諦め席に着いた。殺せんせーが全員席に着いたのを確認して出席名簿を開く。

「さて、出欠を取ります……おや、今日は浅野君の停学明けですねえ」

タイミングを合わせたかのようにドアがガラリと開けられる。紛れもなく浅野学秀本人だった。

「おはよう」

威厳たつぷりに言い放つと彼は自分の席まで歩いていく。全員が学秀に親しい視線を向けていた。

「久しぶり、浅野」

「後でサッカーしようぜ」

前原君が続けて「それから合コン」と言いかけたが、近くの席の岡野さんに蹴りを入れられ学秀には届かなかった。

「おいおい、野球の練習が先だろー」

杉野君はグローブに野球ボールと準備万端である。

「学秀、おかえり」

ぼくは何を言うか迷って簡潔にそれだけを言った。話す機会なら幾らでもあるし、聞きたいことはその時に聞けばいいだろうと思っただ。

「ただいま」

学秀は柔らかく微笑む。

「しっかし、鷹岡がいなくなつてほんとスカツとしたぜ」

「浅野君の停学はほんつと理不尽だったよね！」

1人の声から伝染するようにみんなが鷹岡先生について話し始める。ぼくは喉が乾くの唾を飲み込んだ。

鷹岡先生。

停学の原因を思い出し、それに続くようにして烏間先生のあの言葉が脳裏に浮かんだ。

『君は何故』

を殺したんだ？』

あの1周目は、烏間先生の言葉はきつと現実だ。ぼくが忘れていた1周目の終わりの記憶だ。それに烏間先生がああの質問をするということはぼくが殺したのはきつとE組の誰かに違いない。

だとすれば潮田渚は

「渚、どうかしたのか？」

ぼくの考え事を遮るように学秀が尋ねる。心を読んでいるみたいでどきりとした。

「え、あ、ちよつと考え事してて……授業のノート一応取つてあるけどいる？」

A組の生徒に貰つた方がいいかなと少し躊躇していたが、殺せんせーの授業の分かりやすさはA組教師に劣っていない。それに柵ヶ丘で1週間のブランクはいくら学秀とはいえ少しキツイだろう。

「……そうだな、貰おう」

学秀がノートをめくっていると、殺せんせーが大興奮状態で学秀に突進してきた。瞬間移動したんじゃないかというぐらい速い。

「浅野君！先生は浅野君が戻ってきて嬉しうです！実は停学明け用に世界中から集めた知識で作った小テストが――」  
「出  
来るか」

学秀がノートで頭を叩こうとするもあつさり避けられてしまう。  
殺せんせーは学秀の小テストに力を入れ過ぎだと思う。

「さて、授業を始めましょう！」

殺せんせーが黒板にマツハで地図を書き始める。ぼくはノートを開いた。頭の隅にはまだ微かに悩み事がちらついて、どうにも集中出来ない。まあ、理由はもう一つあるけど。

「しかし、何だこゝは」

学秀が顔を顰めて手を仰ぐ。

「どうした浅野？」

「これは由々しき問題だな」

ごくり。クラス中が息を潜めて学秀の次の言葉を待つ。

「暑過ぎる」

「「知ってるわ!!」」

A組から来たお坊ちゃん育ちの学秀のことだ。室内にいて、暑い、という経験は皆無なのだろう。

「まあ、確かに暑いよね」

「あのよくE組に来ていたメルも最近じゃあ週一で来るか来ないかだもんな」

「暑い……アイス食べたいなあ」

ぼくが呟くと学秀が後ろから声をかけてくる。

「渚、ソフトクリームいるか？」

「いいの?!でもそんなのどこで……」

ふと思ひ当たり、顔を真顔にして後ろを振り返る。

「アイス販売始めました！」という看板を持つ律がそこにはいた。もう律の本業は自動販売機で良いんじゃないだろうかとぼくは思ひ始めてきた。



「山を登る途中に律と会ってね。一緒に登校してきたんだ」

脳内に自動販売機が歩くシユールな光景が思い浮かぶ。どうか誰も見ていないことを願った。

「律は暑くないんだよね?」

学秀にもらったアイスクリームを食べながら律に尋ねる。授業中だが暑さに打ち勝つ方法がこれ以外にないのだから仕方ない。

「例年より0.6度の上昇であるとのこと。とても、暑い、ですね」

律は暑さを全く感じていない涼しげな笑みで言う。画面にはソフトクリームを舐める律の姿が映し出されていた。何だかあざとい。

「だらしないですねえ皆さん。日本の温暖湿潤気候での夏が暑いのは仕方ないことですよ。ちなみに先生は放課後にはロシアに逃げます」

教壇にだらしくもたれかかり、殺せんせーは黒板に書き終えた地図を触手で示す。

「「ずりい!!」」

「それから渚さん、授業中の飲食禁止!律さんも授業中に自販機営業はいけませんよ。あ、先生もカフェオレーっ」

「「言ってる側から矛盾してる?!」」

クラス全員が突っ込んだ。律がカフェオレを銃弾みたいに超スピードで放り投げ、殺せんせーが嬉々として飲み始めた。

「それはそうと殺せんせー。次の授業はプールですね!」

「律……本校舎まで行かなきゃいけないんだよプールは――」

一生徒の声に律は何を言っているんだろうと言わんばかりにきよんとんとした顔で自身の記憶を確認した。彼女の記憶の中にはプールは裏山にある物なのだろう。

「あれ?裏山にもありますよね?プール」

「「へ?」」

\*

律の言葉で裏山のプールの存在を確認したばかりは久々の涼しさを楽しんでいた。

「浅野、25メートルどっちが速く泳げるか競争しないか？」

「ああ、やろうか」

磯貝君の誘いに学秀は微笑を湛えて応じた。この2人は去年まで部メンだったこともあり、総合能力が似通っているのも関係してか互いにそれなりの信頼を寄せている。そのため、1周目の棒倒しからは想像がつかないぐらい仲が良いのだ。

「浅野君って泳ぎ速いの？」

茅野がぼくに尋ね、周りのみんなが興味ありげに耳を傾けた。茅野がこんな質問をするのはぼくが学秀に詳しいのは周知の事実だからだろう。更にE組監視役の身体能力に好奇心が疼くのも無理はない。

「……B組の水泳部のエースと競争して打ち負かしたの、結構有名だと思っただけだなあ」

「うわっ、さすがあの理事長の息子だな！」

「入学当初に殆どの部活から来るように頼み込まれたって話、案外嘘じゃないのかもね」

不破さんの言葉にそれはあり得そうだと苦笑するE組一同。すっかり浅野学秀に毒されていた。

実は他にもサッカー部の他校との試合に緊急飛び入り参戦して高得点を取ったり、バスケット部でコーチがインフルエンザで寝込んでいた時に代役コーチを頼まれたりと運動神経の良さを象徴する逸話は数え切れないほどあった。学秀は一見自らの力をひけらかしているように見えがちだが、その全てを曝け出さない謙虚さは中々できることじゃない。

「学秀凄い泳いでたね」

「つい熱中した。渚、奥の方は深いからあまり先に行くな」

つい声をかけると学秀はぼくが奥に泳ごうとしているのに気付き注意する。同じぐらいの身長茅野は浮き輪を持っていてるけど、ぼくは持ってきていない。奥は足がつかないので確かに危険だ。

「はいはい。そんなこと言わなくても小さい子じゃないんだから大丈夫だよ」

ぼくは少し強がって、と言うよりも子供扱いされたことを否定したくて平気だと言い張った。実際泳げない茅野ならまだしも泳げるぼくが奥に行つて危険ということはないのだ。

「渚は小さいだろ」

「小さくない」

「僕よりずっと小さい」

頭に手を乗せ、学秀は自分と僕との身長差を主張する。

「……学秀が巨人なだけだよ」

ムツとして顔を逸らす。目を逸らさなかつたら身長差という現実が押し付けられるためだった。

女子だから身長が伸びないのは分かる。でもクラス最小は酷いんじゃないかな。神様は意地悪だ。

目に飛び込んできた読書をする少女に、ぼくは小さく息を吸い込んで、長く息をつく。何をしなきゃいけないって、やっぱりあの事件を止めるために手段を尽くす必要がある。そう、例えば彼女に止めさせるとか。

「ちよつと休憩してくる。やらなきゃいけないことがあつたんだ」

学秀はぼくの視線の先を追い、息を漏らす。珍しいなど、何かあるんだなど、色々な言葉を含んだ微笑で彼は囁いた。

「狭間さんに用？」

「うん」

「そうか……確かにあいつは最近孤立気味だったね。狭間さんを頼るのは悪くないと思うよ」

一を聞いて十を知るとは学秀のことか。ぼくはバレバレなら意味はないかと説明することにした。プールサイドに2人で座り念の為スペイン語を使って説明し終わると、学秀は少し険しい顔で呟く。

『シロが寺坂を使ってプール爆破……今は理由が分からないが意味があつてのことなんだな?』

『うん。それを防ぐために寺坂君が利用されるのを止めようと思つて……』

『それは最善策とは言えないな』

『そうなの?』

首を捻つてぼくの考えた計画に不備が無いか確認する。別に可笑しなところは無いし、防げたら万事休すとなるはずだ。一体何が問題なんだろうか。

『寺坂が利用出来ないなら、シロは別の誰かを利用するか、違う手段を取るだろう。目的の為なら手段は幾つも用意する。あいつはそういう奴だ。それらは渚にとつても未知であり、結局何らかの事件は起くる』

『それじゃあ防ぐことは出来ないんだ』

ぼくの言葉に学秀はE組の皆を見渡し、そして殺せんせーを視界に収めると淡々と述べる。

『死傷者も怪我人もいなかった。みんな殺せんせーが助けた。違つか?』

『……合つてるよ』

『なら、何もする必要はない。同じ事件が無事に解決されるのを待たばいい』

保守的で浅野学秀らしくない意見にぼくは啞然とした。学秀なら絶対に行動に移して何かすると思つていたし、事件が悪い方に行く予想外の事態も承知の上で冒険すると考えていた。それなのにこれじゃあまるで家で留守番して全てが終わるのを待っていると言われているのと同じじゃないか。

『そんなのおかしい。何が起こるか知つているのに、放置しておくなんて間違つてるよ』

『結果、誰もが助かるのにか?』

『そういうことじゃない。ただぼくは後になって、何か行動出来たのにできなかった自分を思い出すのは嫌なんだ』

自分の為みたいで利己的だけど、ぼくは自分に知っているのに何も出来ないというレッテルを貼りたくない。E組の為に出来ることは全てしたいのだ。更に前回全員無事だったとしても今回どうなるかは誰にも分からない。それはこの2週目で何度も証明しているし、1週目にあつた出来事と同じだからって油断は禁物だ。

『そうだったな。渚はそう考えるのか』

『何か間違っているかな?』

『嫌いじゃない考え方だし、倫理的には正解だろうな。でも渚、行動して悪い結果を招くことだってある。よく考えた方がいい。僕は渚に危険な目に遭って欲しくない』

最後の一言を強調して、学秀はぼくからの視線を潜り抜けた。ぼくは少し騒めいた学秀の意識の波長にあれ?と学秀の目を覗き込んだ。

「もしかして、それが理由?」

言語を変えるのも忘れてぼくは呟いた。学秀の意識の波長が揺れる。

なんだ。そういうことなんだ。

「……まさか」

とは言ったものの、ぼくには嘘であることがバレバレで、あまりに単純な理由に拍子抜けした。心配されるのは嬉しい。でも、そこまで心配しなくてもぼくは大丈夫なだけだなあとも思う。

「大丈夫、危険な目になんて遭わないよ」

「渚のそういう言葉は信じられないからね。無茶はしないと約束しろ」

「分かった、無茶はしないって約束するよ」

学秀は満足気に頷き、ぼくが狭間さんの元に行くのを見送った。日陰の席で読書をする彼女はとても和やかで、プール内のはしゃいだ雰囲気とは打って変わって大人びている。だから声を掛けるのに数秒躊躇い、結局隣に座った後ぼくは「ねえ」と彼女に呼びかけた。

「狭間さん、何読んでるの？」

「異邦人よ」

「カミュかあ……」

少し暗くて個人的には苦手だと思った小説だ。自分から始めた会話だったが、あつさり次の言葉が続かずに黙り込んでしまう。すると狭間さんは本から目を外し、淡々とぼくに告げた。

「何か用があつて来たの？ 読書の邪魔にならないように手短かにお願い」

「単刀直入に言うね。寺坂君、最近孤立していない？ 今日まで意地張つてプール来ていないし」

「いつも通り3人組でつるんでいるんじゃないの」

そう呟いた彼女は意外にもその場に居ない誰かに怒っているようだった。グループ内で紅一点の彼女は普段は本の世界に閉じこもっていることが多く、人との接触をなるべく拒否しているようにも見える。彼女が寺坂グループに居るのはきつと、彼らが狭間さんに対してある程度の距離感を持って接しているからなのではないかというのが大抵の生徒たちの推測だった。そしてその距離感を狭間さんも好んでいるのだろうと。

しかし、彼女はどうにも仲間外れにされたとしても言いたげに唇を噛み締め、あいつらなんてどうでも良いという振る舞いをしているのだった。

「狭間さんってかわいいところあるよね」

「……何を言い出すかと思えば。呪い殺されたいの」

「怖いからやめて。でね、寺坂君について1つお願い」

ぼくは遂に本題を切り出した。彼女は話の展開に予想がついたように再度読書に取り掛かる。

「あいつと今より仲良くしろと言うなら返事はしないけど？」

「今のままの関係でいい。でも、ちゃんと見ていてあげて欲しいんだ」

狭間さんの表情には分かりやすいぐらいのクエスチョンマークが浮かぶ。

「見る？ 何のためにそんなことしなきゃならないの」

「見ることで人のことを助けることもあるんだよ」

プールの奥を見やれば、浮き輪から落ち、溺れそうな茅野を学秀が素早く助けていた。片岡さんの出番がなくなる程の反射神経の良さは流石と言ったところか。

「人助けを進んでやろうなんて思わないけど。貴方が言うことだから何か理由があるんでしょ。引き受けるわ」

「ありがとう。あ、そうだ」

「今度は何？」

「寺坂君たちが狭間さんと距離を置いているのは、悪事に巻き込またくないからだと思うよ？」

狭間さんは真面目なのに、あの3人は不真面目で不良だから。高校の受験もあるこの時期に良い高校を目指す狭間さんの評価が落ちないようにしたいのだろう。だからいつだって、狭間さんは彼らの反抗行為に参加していない。

ぼくの意見に狭間さんは目を少し見開き、くつくつと声を殺して笑う。

「知ってるわ。だから腹が立つんじゃない」

私は悪事に参加したいのにね、とため息混じりに言い彼女は読書を再開する。

その間に殺せんせーの弱点が発覚したことも、学秀が近くにいたため茅野が溺れなかったこともどうでも良くなるぐらい、全てが上手くいくように願った。

\*

帰り道は仕組まれていたかのようにぼくと学秀の2人きりとなっ

た。学秀の1番の興味はついさつき分かった殺せんせーの弱点のようだ。

「水が弱点……梅雨の時期に体積が増えていたのはこれが原因だな。普通ならシロのようにプールに突き落とすことを考えるが、中村によるとお風呂に入った時は平気だったらしいから対策法があるに違いない。恐らく粘液だな」

学秀が企み顔で嬉々と分析し出す。一時期水殺が流行ったことを思い出し、その殆どが失敗したなあという苦い思い出まで蘇る。

「なんだか楽しそうだね、学秀」

「相手の決定的な弱点というのは珍しいからね。とはいえ1人で盛り上がるのも良くないか」

「いいよ、ぼくも前は学秀みたいに盛り上がっていたと思うし」

水殺があまり決定打にならなかったのを知っているからか、ぼくの関心は少し薄い。新たなアイデアが浮かぶ可能性もあるから何とも言えないが、マツハ20がスピード低下をしたところで超スピードなものには違いがないのだ。

つまり目が追いついていても身体が追いついていかず、殺せる確率は高いとは言えない。

「それから渚。この前の鷹岡のこと、悪かったと思ってる。暗殺者としての才を大勢の前で晒すのはあまり良くないだろうからね」

学秀があまりに落ち着いた様子で話すので、ぼくは学秀が何も知らないのだと気づくに至った。

少しは知っているのだろうが、この様子だときつとカルマ君は詳細を話していないんだろうな。

それでも察しの良い学秀のことだ。カルマ君とぼくのギクシヤクした関係からぼくが鷹岡先生に何かをしたことは分かっている、それでいて心の奥底にメモ帳でも貼り付けているんだろう。

「いいんだ。きつとみんな気づいていないから」

「でも、感謝もしているんだ。ありがとう」

「……うん」

感謝されていいのだろうか。人を傷つけたのに、感謝される価値な



なんて無いような気もするけど。

「E組はあまり変わってなかったな。停学期間が少ないからそんな大きな変化もないか」

「変化といえば学秀が居ない間に律が自動販売機機能のリニューアルをしたことぐらいだね」

「あれは……確かにびつくりしたな」

学秀は同意を表す。

「アイスにかき氷、占い30円なんていうのもあって、それもよく当たるんだって」

律はどこを目指しているんだらうねと笑う。学秀は少し目を瞬き、「ああ」と小さく呟いた。

学秀と話している時、偶に沈黙が訪れる。会話が続かないというより、互いに別のことを考えている時だ。学秀の意識の波長は先程に比べ、速く波打っていて真剣な考え事をしているんだなと微笑ましく思った。それとは別にこの瞬間、ぼくは彼の考え事を邪魔してとても深刻な話をしたくてたまらなくなる。ぼくは視線を落とし、震えるような声を吐き出した。

「……もしも、もしもだよ？学秀は誰かを殺したかもしれない。でも自分ではそれを思い出せなくて、何故そうなったかも理解できない。そうなったなら、学秀ならどうする？」

「それは渚の1周目のことか？」  
「うん」

あつさりバレた。前提の話が少し分かり易かったのかな……いや、学秀だから当たり前か。そういえば今日は学秀がいつもよりずっとぼくを気にかけているように見えた。悩んでいることに気づいていたのだろうか。

学秀は一拍間を置いて、少しの動揺も見せずに返事を返した。

「1度じっくり考えてみて、それでも思い出せなかったら無かったこととするよ」

「え、忘れるの？」

「曖昧な記憶ほど不確かなものはないからね」

「そっか……忘れてもいいんだ」

口から浅い息が漏れる。学秀は好奇心を隠すように声を押し殺してぼくに尋ねた。

「それで？一体どんな話なんだ？」

「鳥間先生に『何故——を殺した？』って聞かれたんだ。

でも殺したのが誰かまで覚えてないし、殺した記憶もない」

「それは……面倒だな」

「そうだよ。こんなことで悩んでいても仕方ないって分かっているんだけど、それを突き止めたら自分のルートが分かるような気がしてさ。自分がどこから来て、どうして2周目なんかやってるのか」

本当は分かっていることがいっぱいある。ぼくがそれを無視しているだけで、自分自身も1周目から何故2周目に来る羽目になったのか全く見当もつかないのだから。

「それでも知りたくない気持ちもあるんだろう？」

「まあね。でも、鷹岡先生に会って、殺意を抱いたのは本当なんだ」

その殺意は自分じゃないみたいだった。大石渚じゃない、誰かの殺意だ。ぼくの感情に混入物が入ったみたいで、ゆっくりと浸透していつて何かを呼び起こした。ああいうのを既視感デジャヴって言うんだろう。

「本当に知りたくなったら、律に聞くと良い。唯一同じ時間に居たのは彼女だからね」

「んーしばらくは聞かなそうだなあ」

ぼくは自分の才能について誤解をしていたのかもしれないから。ぼくのその才能と呼ばれるものが、もし暗殺ではなく殺人の才能だったら。

鷹岡先生を見た時に全身から感じた自分ではない誰かの殺意、殺してしまいたいぐらいの憎しみ。正直、あの後ぼくは恐怖に包まれた。自分があんな残酷なことを平気でしようと思えるんだって。まるで他人がぼくの身体を乗っ取ったかのように記憶は曖昧だけど、あれは暗殺じゃなく殺人の要素があった。そんな気がした。

だから律にそれを証明されてしまったら、ぼくはどう受け止めれば

いいんだろう。

「呼びましたか？」

「あ、律。何でもないよー！」

「そうでしたか。ところで浅野さん、殺せんせーに試した毒薬でまだ試していないものがあつたら教えてください。殺せんせーが買うアイスに混ぜますので！」

「律も暗躍してるね……」

毎日殺せんせーを殺すためには最善の努力をしている律は日に日に殺せんせーに当てる銃弾数が増えている気がする。更に正攻法だけではない自動販売機の機能を最大限に発揮した暗殺は殺せんせーを脅かしているという。ひよつとして律がE組の中で1番優秀な殺し屋なのかもしれない。

「殺すためには全力を尽くさなければいけませんから」

ね？と満面の笑みで言われ、ぼくは口を閉ざした。みんなそれぞれ殺りたいという気持ちで殺せんせーに挑んでいる。先取りした知識に頼って平和に物事が進むようにしたり、1周目に囚われて殺す覚悟が出来ていないのはぼくだけだ。

アパートのぼくの部屋までたどり着いた。学秀はぼくが鍵をちやんと開けるまで側にいた。

「それじゃあ、またね」

「また明日」

学秀の姿が閉まるドアによって見えなくなる。律が待っていたとばかりにスマホの画面に登場してぼくに尋ねた。

「渚さん、プール爆破の件どう致しますか？」

「そうだね……学秀には言われたけど、危険な目に遭うのを承知で行動に出たい時つてあるんだと思うんだ」

対先生ナイフを手を持ち、律に大まかな計画を伝える。律はぼくの行動の意味を理解したようで頷いた。

「問題ないです。それでは私はサポートに徹させていただきますね」

「頼りにしてるよ、律」

律は画面上でニツコリとぼくに微笑んでいた。

計画のはなし。

予想通りというべきか、プールが破壊されたという報せは朝勢いよくセクシー水着に着替えていったビッチ先生から聞いた。

「キーツ!!人の水着デビューを邪魔するなんて誰がやったのよ!!」

水着にバスタオルを巻き、銃を装備する。彼女のバスタオルは銃装備と同時に捲られ地面に落ちた。ガチャリと音を立てて戦闘状態に入った彼女に、ぼくは危険を察知して褒めることにした。

「水着に銃ってかっこいいよね。その水着も今年の新作でしょ?さすが先生」

ぼくの言葉にビッチ先生が求めていた言葉と違うと顔を背けた。それでも銃をひとまず下ろしたところを見た限りでは褒めて正解だったようだ。

「おーラツキー。プールとか面倒だったんだよな」

「次の授業自習決定だろ?俺寝たかったんだわ」

お前らがやったんだらうという視線が寺坂グループに集まる。特にビッチ先生の怒りは凄まじく、殺気を彼らに向けていた。いや、殺気のみならず銃も向けている。

なんて空気の読めなさだと寺坂君たちに対し苦笑いし、矢田さんと倉橋さんに目配せする。彼女たちは分かっているよと言わんばかりに頷く。

「男子を下僕化させる私の完璧な計画が崩れたじゃない!!この水着いくらしたと思ってるのよ!!!」

「まあまあ、先生それでも食べて、ね?」

矢田さんが営業スマイルでシロクマイスをビッチ先生に差し出した。

「ビッチ先生、落ち着こ〜」

倉橋さんがビッチ先生の頭を撫でる。

「アイス」ときでこの私が\_\_\_\_\_ってこれ美味しいわね」

もう少しバレないように工夫とか出来ないのかな。

ぼくは寺坂君たちをじっと見つめた。彼らは非難を受けるのが分

かっているのに隠す気もない。むしろ嫌だと公衆に主張しているような、同調して殺せんせーの好感度を落とそうとしているような印象を受ける。

それが事実なら不器用過ぎる。寺坂君の行動は殺せんせーのお陰で空回りしてばかりだからだ。

「何だよ、お前ら。俺らが犯人とか疑ってんのか？証拠ねークセに決めつけんのかよ」

寺坂君はぼくの視線に舌打ちをして近くまで足を運ぶ。女子の襟首を掴むほどの暴君ではないので、ガン飛ばすだけだったがぼくは真顔で相手を見上げた。

3秒も経たなかった。寺坂君は背後から腕を捻り上げられ、支配者である学秀に屈服する。

「うっ……………浅野てめえ！」

「くだらないな、犯人探しなんて」

寺坂君を自由にしたものの、学秀の目は鋭く光っており、彼の蔑む視線に寺坂君が小さくひいっと情けない悲鳴を上げた。

ぼくは学秀の速い反応に感嘆していたが、即座に殺せんせーが現れ寺坂君のだらしない服装をマツハで弄り自分の速度を誇示し始めたことで顔が引きつった。E組の生徒たちはああ、対抗しているんだなと生暖かい目でそれを見守る。

「そうです。マツハ20の先生からしたら時間の無駄ですね。そんなことやる暇があったら直してしましましょう」

瞬きする間もなくプールは元どおりになった。むしろ前より綺麗で掃除されている。

「では皆さんいつも通り安全第一で遊んでくださいね！」

「……はい！」

これだけ綺麗にされたら分からないが、1周目の状況から考えるとどこかに爆弾が仕掛けられているのは間違いない。でも一体どこに仕掛けられているんだろう。

辺りを見回すと、「にやあ」という呑気な鳴き声が後ろから聞こえてきた。倉橋さんがメルを下に優しく置く。

「天使ちゃんに伝えたいことがあるんだって。ちょっと物騒な情報らしいけど」

「分かった。倉橋さんありがとう」

「じゃあまたねっ！」

え、倉橋さん行つちやうの？

倉橋さん無しで誰が翻訳をするんだと必死に目で訴える。彼女に届かないことが分かったので地面でじーっとこちらを見つめるメルを観察することにした。

猫にも意識の波長は多少ある。人間と違い会話が出来ないが、呼吸の乱れ、歩き方などに感情が現れるのだ。メルは冷静で、音を立てることを殆どしない神出鬼没さがある。それは死神と過ごした時間の賜物だろう。だからこの猫は強力な味方なのだ。敵になったら考えただけでぞつとずするけど。

メルは口に紙を咥えていて、その紙を広げると気性の荒い字体がペンで殴り書かれていた。曰く「壁に爆弾。プールに薬剤。決行は明日」とのことだ。

なるほどね。

「お手柄だよ、メル」

紙を折りたたんでポケットにしまい、メルの頭を撫でる。目を細めて身体を委ねる猫の姿は癒しだ。でも何だかあざとい。機械仕掛けの彼女に毒されたか。

ポケットの中のスマホが揺れた。一体誰からだろうとLINEのアプリを開き、その名前と内容に思わずにやける。

狭間：寺坂がシロと会っていた。イトナも居たわ。これがあんたが欲しがってた情報？

渚：そうだよ

狭間さんが寺坂君とシロが一緒に居るのを見た。この事実を求めていたぼくにはそれは朗報だった。ぼくが寺坂君とシロが繋がっていると何の根拠も無しに言うのと、他の誰かが見かけたのでは意味合いが変わってくる。スマホのスイッチを切り、教室へと引き返した。てつきりぼくは泳ぐものだと思っていたのだろう、茅野が首を傾

げる。

「あれ、渚泳がないの？」

「うん、今日はパス」

「あ、もしかして……女の子の日？」

小声で言われた理由は的外れだったが適当な理由付けには丁度良い。だからぼくはその案を採用することにした。

「うん。茅野は？」

「わたしもそうなの」

「……つてことにしたサボりなんだけどね」

茅野は続けて「この前溺れてかけて懲りたつていうか」と表向きの理由をひたすら述べたが、ぼくは理解していた。

茅野は泳げない事情があるから授業以外はプールには入らない。それは茅野がカナヅチだからではなく、触手持ちだからである。

教室にはほとんど誰も居らず、珍しくカルマ君が律とオセロをやっているのが見えた。オセロをやるのが初めての律は劣勢の様子だ。

「あ、茅野に渡すものがあるんだった。はいこれ。LINEのID変えたんだよね」

メモ帳の切れ端を茅野に渡す。茅野は飲んでいたプリン煮オレを机に置いて、メモ帳を取った。

「そうなんだ……え」

茅野は中身を見て険しい顔をし、すぐに表情を笑顔に戻した。

「いいよ。でも——茅野ちゃん、その紙何？」

カルマ君が上から茅野の持つ紙をさつと奪い取った。

「カルマ君の方がずっと適任だと思っ」

茅野が途切れた言葉を繋げる。目立ちたくない茅野よりもカルマ君に適しているのは十も承知だったが、彼はぼくを警戒している。計画を知ったら警戒心を増長させるだろうと考えたのだ。

カルマ君はメモを一通り読むと深く息を吐いた。

「茅野ちゃんの言う通りだよ。こういうの俺のが向いてるっしょ」

どうして頼ってくれなかったのという含みを持つ言い方に、ぼくは顔を背けて言い訳を吐いた。

「……ぼくを警戒して避けていると思ってたから」

カルマ君は呆気にとられた顔をする。彼の意外な反応に、もしかしたらぼくの勘違いだったのではないかという気がしてきた。

「避けてたよ実際。でも警戒してたんじゃないって」

小さい子を宥めるような優しい声に、カルマ君はこんな声も出せるのかと驚いた。

「渚ちゃんかっこよかったよ。稲妻が走ったみたいな感覚がした」

これってカルマ君流の、よくやった、ってこと？褒めているのは違うないんだろうけど。

かっこいいという言葉に少し照れ、彼の言葉から生まれた疑問を投げかけた。

「じゃあ何で避けたの？」

カルマ君は考え込み、ゆっくりと返答する。

「前から思っていたことによく答えが出てさ、なんか怖くなった。やっぱり俺逃げてたんだなーって」

前から思っていたことって何だろうと不思議に思ったが、それは今聞いているといけないように思えた。ぼくができることはカルマ君の意識の波長を探ることのみで、彼から動揺、不安、恐怖などの負の感情を感じる。でもそれと同時に緊張とか、憧れとか、あとよく分からないものも感じ取った。

この感情は……何だ？

「カルマ君ってほんと分かりにくいよね。私はそうかなあって思ってたけど」

茅野がぼそつと呟いた。ぼくは茅野がカルマ君の言っている意味を理解したことに驚きを隠せずにいる。

「茅野ちゃん侮れないね」

「浅野君を裏切る形になるから誤魔化してるんでしょ。浅野君はとつくに気がついていいると思うよ」

「んー、それはどうだろ。学秀君も人の心を読むのに長けてるわけじゃないんだし」

会話の展開について行けずに置き去りになる。こんなことは



しよつちゆうあるから慣れているけど……つていうか茅野は今の  
分かったの？

カルマ君は前から気になってたこととしか言っていないのによく分  
かるなあ。

「ごめん、どういうことなの？」

「渚は知らなくていいの」

茅野がニコニコしながらそう言った。何だか可愛い。

「で、このメモの計画を実行するんだよね？」

カルマ君は話を90度逸らし、元の話題に戻すと紙切れをぼくに見  
せた。

「そうなんだ。ぼくは目立つのが苦手だから、誰か実行してくれる人  
を探していたんだよね」

「へへ。あ、いいこと考えた。渚ちゃんさ、クラスの中で一番頼れそう  
な奴挙げてみ？学秀君以外で」

「頼れる……それは磯貝君じゃない？」

カルマ君と茅野が「だよ」と頷き合った。学秀が頼れるのは周知  
の事実だが、今回の計画は学秀抜きでやった方が良く気がした。それ  
をカルマ君も察知したようだ。

「じゃ決定。茅野ちゃん、暇なら俺について来なよ。磯貝のところ行く  
からさ」

「いいよ。さっきの話も聞きたいしね」

「茅野ちゃん誰かに言わない？あー、言うんじやなかった」

2人で廊下を歩いて行くのを目で追う。どうなるかな、と気になり  
結局ぼくは後をつけて行くことにした。

\*

放課後の裏山で人知れず4人の生徒が集まっていた。プールから帰る途中だった磯貝君と前原君をカルマ君たちが呼び止め、衝撃的な事実を告白する。

「爆弾を見つけた？」

校舎裏で2人の声が重なった。殺せんせーがいる所為で通常とは違う状況に慣れきった2人も流石に爆弾には動じるらしい。そう考えるとカルマ君と茅野の反応はその年齢にしては非常に落ち着いている。

「なんか倉橋さんがメルが爆弾を発見したって」

という紙をぼくに渡してそれがカルマ君たちに伝わったという説明は見事に省略された。

「それは大変だな……でも何で俺らに？」

前原君が相談に適任の奴なら他にいるだろともっともな事を言った。確かにそれは一理ある。こんな大事なら烏間先生に言えば何とかしてくれそうだし、殺せんせーに言った日には爆弾がすぐさま撤去されるだろう。

「ほら、磯貝学級委員だから。前原はついで」

「ついでってひでえな」

前原君が面白くなさそうに首を竦めた。カルマ君は話を続ける。

「俺がこんな話してもみんな混乱するだけじゃん。磯貝だったらそこんとこ上手くやるだろうなーって」

「分かった。その代わり、計画案は任せる」

彼らが計画について動き出すのを確認して、教室から離れる。後ろでぼくと同じように様子を覗き込んでいた学秀は呟いた。

「良かったのか、渚は」

いつから居たんだろう。この様子だとぼくがカルマ君と茅野に渡したメモのことも知っていそうさ。

「良かったんだよ。この前の鷹岡先生と戦ったことで目立ちすぎちゃったからね。ワンマンプレイは避けたい。今回は最低限必要なところだけぼくがやろうと思って」

勘が良いシロはぼくを少しながら危険視しているだろう。だから

危険なところだけ引き受けて、他の部分はカルマ君や磯貝君に任せただ方がいい。

「ああ、そうだ。寺坂がさつき教室に憂さ晴らしに虫除けスプレーを撒こうとしていた。見かけたことないメーカーで危なそうだったから使う前に没取しておいたんだが、いるか？」

「え」

学秀、それは無いよ。

ぼくは笑いを堪えきれずにふふつと零した。彼はぼくの計画を何も知らない。さつきの断片的に理解しただろうが、それさえも一部分に過ぎない。

それなのに何でもお見通しだなと底知れない安心感を覚える。流石の学秀もその虫除けスプレーが殺せんせーだけに効くものだとは知らなかっただろう。しかし、事前にぼくが寺坂君をマークしていた事から彼への警戒を強めていたに違いない。

プールに薬品が混入された件は止められなかったが、それに対抗する策は用意済み。万全のシロ対策にぼくはすっかり油断し切っていた。寺坂君が教室にばら撒くスプレーの存在を忘れていたのだ。カルマ君たちが話し合っている最中にスプレーが使用される危険性は十分考えていたが、殺せんせーのみへの被害のため軽視していた。例え殺せんせーが弱るようなスプレーが使われても前回は問題無かった。それならば、2周目も平気だろうと。

「慢心大敵だなあ」

自嘲気味に笑い、学秀からスプレーを受け取る。

「今回の計画では使わなそうだけど、一応貰っておくね。殺せんせーの触手対策になるし」

「へえ、そういう代物か」

「欲しくなった？」

「いや、いい。渚の方が必要になるだろうからね」

含みを持つ言い方は前にぼくが何度も繰り返したヒントよりずっと巧妙で、その時ぼくはそれに気がつくほど賢くはなかった。

ただ、殺せんせーに使うというのなら学秀だって必要なはずじゃな

いか、なんて違和感を残しぼくらの会話は終了する。スプレーを見る  
ぼくの背中に心配そうな学秀の視線が突き刺さるようだった。

実行のはなし。

次の日教室に現れた寺坂君はえらく上機嫌そうだった。普段は舌打ちしながら教室のドアを乱暴に開けるところを他の皆がするようにゆつくりと開け、更に全員に向けて挨拶した。

「よう、お前ら元気か？」

「おはようございます、寺坂君。先生は絶好調ですよ！」

返した声が殺せんせーだけなことにはフンと鼻を鳴らす。E組の生徒たちは出来れば暴君には関わりたくないのだという風に装った。

「ふん、お前には聞いてねーっての。まあいい。今日の放課後、プールに來い。お前の事殺してやるからよ。ああ、賞金の分け前欲しい奴は手貸せよ」

そのまま外に出る寺坂君に、一拍置いて生徒たちが話し始める。その大半は寺坂君の悪口だ。

「いつもは暗殺に積極的じゃない癖に自分の時だけヘルプかよ」

「もうやってらんない。無視しよ」

クラスの騒めきからは共通の意識の波長が感じられた。そんな状況に殺せんせーは教師として協調を促す。

「まあまあ！せっかく寺坂君が殺る気になってくれたんです！クラスメイトとして応援してあげてください」

殺せんせーの言葉にシーンと沈黙が訪れた。殺せんせーは生徒たちの反応にオロオロするが、片岡さんが突如立ち上がりその言葉に賛成する。

「それもそうだよね！」

「仕方ないな」

岡野さんは脚をストレッチし、準備を整えた。

「寺坂のバカに殺せんせーを殺せるなんて思わないしね」

「暇だし殺るか」

「寺坂に手柄独り占めにされんのは真っ平だし」

オセロで盤が1つの色から一気に別の色に染まる時のように一瞬で1人、また1人と殺せんせーの提案に賛成する人が増えていく。最

最終的にはクラスの殆どが寺坂君の暗殺に参加することを決めた。

「……………」

殺せんせーが不可解そうに教室をキョロキョロ見渡した。先生にも意識の波長が分かるから、みんなが本心を言っていないことが目に付いたのだろう。本心を言っていないが、別に嘘をついているわけでもない。言うなれば台本を読んでいるかのような会話に。

これは明らかな茶番だ。

「寺坂さあ、例のもの買ってきた〜?」

カルマ君が寺坂君に出会うなり肩をガシツと掴んで尋ねる。殺せんせーが居るといいうのにこの情報の扱いの雑さは流石カルマ君と言ったところだろうか。

「さつき自動販売機で買ったけどよ、あれホントに使えんだろーな?」  
寺坂君とカルマ君がコソコソ話をする様子はかなり怪しげで、どう見ても秘密の話をしているようにしか見えない。

殺せんせーが既にプールに來たというのに警戒心が緩み過ぎだ。

「寺坂君……………」

殺せんせーが不審げに点しかない目を更に細めた。

これはもしかしたら気づいたかも。

ぼくは唾をゴクリと呑み込んだ。気づかれた時のために誤魔化す準備を整えておく。

「いつからカルマ君と仲良くなったんですか!」

「先生これには訳が……………ってそっち? いや、あれは仲良くないと思うよ」

「寺坂、渚に危害を加えるような動き方をしたら……………どうなるか分かっているな?」

寺坂君の首を切る動作をする学秀に当の本人は自分の首を掴み、何度も否定の首振りを繰り返した。首を切る動作があともう少しで本当に首を斬りそうに見えるところが恐ろしい。

「浅野君もですか!」

「うん、あれはどう見ても殺しかけているよね」

ぼくは殺せんせーの呑気さに思わずツツコミを入れる。

「寺坂君！メルの準備整ったって〜」

と倉橋さんが言った。寺坂君は「おう」と返事にならない声を返す。

「寺坂ー、プールのコース外しといたよ」

と原さんと数人の女子が報告をする。寺坂君は「了解」と今度はしつかりと口にした。

「寺坂、銃何人分いる？烏間先生が強力な奴貸してくれるらしい」

と速水さんが淡々と尋ねた。寺坂君は一瞬目を横に向け、カルマ君の指を視界にとらえて数字を口にする。速水さんはそれに頷き、即座に駆けて行つた。

「皆さん妙に協力的ですねえ〜」

殺せんせーの言い方には疑いがあったが寺坂君を中心にした計画だ。彼に質問や報告をするのは当たり前前のことだろう。

「寺坂君の計画に協力するのはおかしいかな？」

ぼくが尋ねると一拍遅れて「とんでもない」と返事が返ってきた。

「孤立気味だった寺坂君を生徒たちが受け入れたというのなら先生大喜びですよ！もつとも」

「何をしたって先生は殺せませんでしょうけどねえ」

舐め腐った緑色のしましまが顔の色を変えてゆく。殺せんせーを殺す計画じゃないんだけどねと心の中で呟いた。この計画は一生徒の為の生徒たちによるものだからだ。

水着を着て準備を整えた生徒たちがプールの中に入り、それぞれの配置に着く。寺坂君は銃

シロとイトナ君を呼

ぶための小道具を殺せんせーに向けた。

笑って緊張を緩めようとしたのか寺坂君は不自然にニヤリとした。頬が力み過ぎて笑えていない。

「覚悟は出来たかモンスター」

「もちろん出来ています。寺坂君がクラスに馴染み始めて嬉しいですね〜」

殺せんせーは涙をほろりと流し「先生感動です」と見当違いな事を言った。あまりにわざとらしいのでこれは殺せんせーの演技なのではないかとぼくは思い始めていた。

「ずっとあんたが嫌いだったよ。モンスターの癖に教師ぶつてるところも、俺の居場所を奪っていったことも、何から何まで全部だ。教室から消えろって何度思ったか」

寺坂君は殺せんせーに自分の思いを吐き捨てた。E組の全員が彼が殺せんせーを嫌いなことはもともと知っていて、でも本人から聞くのは初めてのことだった。

「ええ、知っています。暗殺の後ゆっくり話しましょう」

それに対しての落ち着いた返事は殺せんせーらしい。寺坂君はイラつきを覚え「失敗する前提かよ」とぼやく。

「でも

てめえのことはまだ殺さねーよ」

寺坂君が銃を撃った。爆破の音と、水飛沫が散らばるのはほぼ同時に、大量の水が滝となって流れていく。

その中に生徒の姿は誰1人としていなかった。

2周目<sup>こんど</sup>は誰も滝に流されなかった。誰も後悔しなかった。

そしてシロは1人プール現場に到着し、無人となった辺り一面に言葉<sup>葉</sup>を失っていた。

「……まさか、計画を事前に知る奴が居たのか？一体誰が」

「え、何言ってるの。全員知ってたよ」

カルマ君がプールのコースロープを掲げ不敵な笑いを浮かべた。多くの生徒たちは命綱であるプールのコースロープを握りしめており、一部の生徒たちは木に取り付けたワイヤーを使って陸に上がっていた。爆破の事実を全員が既に知っていたから出来た行動だ。

「あんたらがここに來ることも、プールを爆破することも。知ってて利用させてもらったんだ」

\*



1日前。磯貝君の招集によって集められた放課後、プール帰りの生徒たちは一斉に驚愕の声を上げた。

「「はあ?!シロとイトナがプールを爆破する?!」」

「それは確かか?」

「近頃の寺坂君を不審に思った狭間さんが見張っていたら、シロと接触する現場に遭遇したそうだ。怪しんでメルにプール付近を調査させたら爆弾とプールに何かが入混入されていたんだと」

磯貝君がカルマ君から聞いた詳細をあたかも自分がその場に立ち会ったかのように説明する。それは成功し、寺坂君がクラス中からの批難を受ける羽目となった。

「はあ?寺坂お前いい加減にしろよ」

「シロと繋がってたってことはスパイなの?」

「寺坂サイテー」

「寺坂、お前なあ——「何も知らなかったんだよ!ちよつと小遣い稼ぎになるぐらいのノリだよ。10万だけ?お前らでもやったはずだ!それがまさか裏で爆弾を仕掛けてたなんて……普通想像しないだろ?!」

皆は言い返せずに黙りこんだ。しつかり者の磯貝君でさえ、シロに10万を握らされたら貧乏な自分は彼に従ってしまうのではないかと予想した。それほど10万というのは中学生にとって大金なのだ。皆が口を閉ざしていると狭間さんが寺坂君に歩み寄った。ぼくは何をするんだらうかと思つめ、狭間さんが寺坂君に強烈な平手打ちをかました。

「狭間てめえ!!」

「それでも私だったらやらない。騙されてた?そんなの騙される方が悪いに決まってるじゃない。馬鹿の癖に一丁前に言い訳なんてよく

出来るわね」

「お前どつちの味方なんだよ?!?!」

「誰の味方でもないわ。私はただの傍観者だから。何にせよ、今のあなたには味方する価値なんてないでしょ」

狭間さんの言葉は全て正しく、寺坂君は彼女には立場的に弱い。いつも勉強面でそれなりに世話になっているからなのか、それか相手が女子だからなのか、普段なら殴りかかるところをただただ突っ立ったまま何もしそうになかった。

磯貝君は教卓を2度叩き周りの注目を引いた。彼は寺坂君が悪役にならないように慎重に言葉を選んで話し出す。

「寺坂のことは俺らの責任でもあるよ。寺坂がE組で居心地悪そうなのはみんな知ってた。でも誰も変えようとしなかった。起こってしまったことはもう変えられない。だから今はまず爆弾のことを考えよう」

「そんなの爆弾の取り外しを殺せんせーに頼むぐらいしか手は無いじゃん」

中村さんがスマホを取り出した。それを茅野が慌てて止める。

「待って。もう少し話し合いしてからにしよう?」

「あーそれに殺せんせーって今パリだっけ? 律が本店で限定のお菓子の宣伝をしてたら欲しくなったとかで放課後すぐに現地に駆けつけていたよ」

三村君が苦笑して言った。

スマホを見ると律が舌を出してウィンクをしている。殺せんせーの注意を他に引いてくれとお願いしただけでこの対応は大したものだ。更には人の心が苦手なはずの律が心理作用であるサブプリミナル効果を殺せんせーに仕掛けるなんて凄い成長だと言えるだろう。

「しかしどうやら案はまだ出ていないようですね。そろそろカルマさんに発言して貰わなくては困るのですが」

「カルマ、お前ならどうする?」

絶妙なタイミングで磯貝君が突如カルマ君に話を切り出した。打ち合わせ通りの展開にカルマ君はスラスラと台本通りの台詞を述べ

た。

「シロが爆弾を使うのは殺せんせーが来てから。だから殺せんせーが今不在なのは全く問題無いよね。爆弾は無事に撤去されるはずだよ」「なんだ。じゃあ考えなくても殺せんせーが何とかしてくれるじゃん」

そうなるか。

万能な超生物が先生なのだ。それに生徒がつい頼ってしまふのは必然であり、1度しがみついたら中々離れられない。2周目になってぼくはようやく、自分たちがどれだけ殺せんせーに依存していたのかを思い知らされていた。

「まあね。でも俺は嫌いだよ、そういう考え方。だから、プランBをみんなに勧める」

「「プランB?」」

「寺坂さ、まだ使っていないよね?貰ったっていう10万。ビビリだから」

「はあ?!使ってねーけどその言い方はおかしいだろ!」

「じゃあ、その金俺に貸してよ。あ、ちゃんと利子付けて返すからさ」

某魔人探偵のようにキラキラの笑顔に全員の気持ちしがシンクロした。

(うさくせー!!)

「あとシロに頼まれた用件を寺坂には従っているフリをして欲しいんだ。俺らも寺坂の計画について行くフリをするからさ」

どう?と訊くカルマ君に寺坂君は降参して頭を掻いた。

「あーやりやいいんだろ!どーせ俺はてめえには勝てねーからな」

「ということらしい。皆、やってくれるか?」

「りよーかい」

「こういうのいいよねー裏で計画とかスパイっぽい」

「寺坂ちゃんとやれよー」

クラスメイトたちは愉しげに協力を約束した。カルマ君は脚を組みクラスを見渡す。

「さて、計画Bについてだけど

彼がぼくの出した曖昧な計画を元を変えずに組み替え、しっかりと順序を立てて説明した。皆興味深々にそれを聞き、実行案を出している。

「あれ、もしかしてこの計画の根本的な目標って……」

中村さんが何かに気づき、カルマ君がそれを認める。

「そうだよ。俺らでクラスメイトを救うんだ」

\*

こういう経緯でカルマ君と寺坂君が組むことになり、計画が完成された。カルマ君は影の仕掛け人で、あくまでリーダーは寺坂君。寺坂君に報告される言葉の1つ1つをカルマ君はこつそり確認し、それでも寺坂君は自分がリーダーのフリをし続ける。

「これ、例えるなら何だと思う?」

ぼくは学秀に明るく尋ねた。

「政治家と官僚。この配置にしたのは将来を見据えてのことなのか」「そんな大袈裟なものじゃないけどね。殺せんせーのアドバイス通りにしただけだよ」

『寺坂君は高い所で計画を練るのに向いてない。彼の良さは現場でこそ発揮されます』

1周目の情報からこの2人の将来の夢は知っていた。この組み合わせを見るのは初めてではないし、成功するのも分かっている。だからこそ安全策だ。

それを実験的に政治家と官僚の構図に仕立て上げたのは、2周目で何処までの変革を及ぼせるのかといった賭けでもあった。鷹岡先生の一件で何故か1周目より早く精神的に成長したカルマ君。自分の愚かさに1周目より早めに気づいた寺坂君。両者が万全の体制なら計画はもつと滞りなく行える。

「シロ。俺はこのままで問題ない」

シロの後ろから現れたイトナ君は触手を伸ばし、余裕気に言い放つた。

「……駄目だ。奴にハンデを負わせるつもりだったのにこれでは意味がない。イトナ、引き返す」

イトナ君は生徒たちを見渡し、彼の優れた視覚でワイヤーが付いていない小柄な生徒を選び出した。その生徒を、ぼくを触手で捕まえ、首に触手を強く巻いた。ロープのように絡められたそれは首元を圧迫する。

「ッ!!」

触手を離そうとした。しかしそれは首のみならず腕をも掴んで離さず、絞め付ける苦痛が首を襲う。

「お前一体何のつもりだ——!!」学秀君、違う! 落ち着け!」

イトナ君に掴みかかろうとする学秀を抑えるカルマ君と磯貝君、そして前原君の姿が視界に映った。3人に抑えられているのにまだ学秀は動いている。

「教師にとっては生徒1人でも、何人でも人質には変わらないはずだ。なあ、兄さん」

冷たい目をしたイトナ君と目が合った。罪悪感と使命感の混ざった意識の波長が痛々しく、まるで見せつけているようだ。

ぼくの所為だ。ぼくがあんなこと言ったから。

「イトナ君! 渚さんを離しなさい!」

「俺が兄さんに勝ったら離そう」

殺せんせーは触手を伸ばしぼくの首元に繋がっている部分を切り離そうとした。その触手の先にぼくを動かす盾として利用する。

「ははは。イトナが自分から行動するとは思わなかったが、意外とやるじゃないか。優しい殺せんせーは生徒を傷つけられない。それを突くとは感心だ。さあ殺れ、イトナ」

シロは逆にイトナ君の成長を喜んでいいる。彼の振る舞いからは対象を殺すことに対しての異常な執着が目立った。

殺せんせーとイトナ君は触手をぶつけ合い闘い出した。ぼく、という人質を持つイトナ君は一見優勢に見える。イトナ君は殺せんせーがあともう少しでイトナ君を倒しそうになるとぼくを楯にして、何度も殺せんせーを跳ね除けたからだ。

「おい、イトナ！」

そこに立ち上がったのは寺坂君だ。イトナ君に向かって真っ直ぐ大股に歩いていく。少しは恐怖も感じているだろう。なのに彼は堂々としていた。

「寺坂君、危険なので近づかないようにしてください！」

殺せんせーが闘い中であるにも関わらず分身を作り寺坂君の前に登場する。それを払いのけて寺坂君はイトナ君の目の前に立ち塞がった。

「そんなことはどーでもいいんだよ！この前はビジョンが無いだの色々言ってくれたな。だから今度は仕返しだ。俺とタイマン張れ！」

イトナ君の目が細められた。その表情からは「馬鹿だ、こいつ」という哀れみの感情が見受けられる。

「威勢がいいね、寺坂君とかいったかい？イトナ、1発触手をあげなさい。タコによく気を付けながらね」

上機嫌なシロがイトナ君に寺坂君という障害を退けるように指令を下す。

大丈夫だ。ここで生徒を殺すような真似は絶対にしない。それは1周目で経験済み。最低限の威力の触手なら寺坂君程のガタイと度胸があれば受け止められる。

案の定、寺坂君は死に物狂いでイトナ君の触手を受け止めた。その触手を両手で掴みながら彼はイトナ君との距離を縮めていく。

「よく触手を受け止めたね。イトナ、もう一度触手を――」

「要らねーよ」

寺坂はニヤリと笑った。彼は片手を掲げる。それはシロの持っていた圧力光線だった。シロがよく見れば彼の持っている物の複製だということに気付けただろう。律が自動販売機で高額で売られていた誰も買わないであろう秘密兵器。それが使われたのは可笑しなことにシロが寺坂を買収したからであった。

「イトナと奴の弱点は同じ――」

それじゃ俺がこれを

触手に至近距離で当てたらどうなるのか、お前なら分かるな」

「お前――」

!!

イトナ君の触手が硬直する。ぼくは首に絡みついた触手をバレットの対先生ナイフで切った。そして触手が動けないでいる間に至近距離に近づく。両手を合わせて、意識の波長に集中し――

「渚………?」

ぼくはクラップスタナーを鳴らす。

ぼくが放ったクラップスタナーでイトナ君は気絶してぼくにもたれかかった。彼の触手の生え際を探り、ぼくはピンセットを取り出す。前は気づかなかったけど、対先生ナイフは触手を切ることは出来ても抜く事は出来ない。それが出来るのはピンセットのみだ。殺せんせーほどではないけど、そこそこ器用なぼくは簡単に触手の根元を掴み取った。

そしてぼくはついにイトナ君の触手を抜いた。

「ごめんね、イトナ君」

思わず呟いた謝罪は彼には届かない。彼にとって触手は強さであり、希望だった。でもぼくはイトナ君に早くE組に来て欲しかった。彼がシロに捨てられる前に自ら自由になって欲しかった。これは全部ぼくのワガママだ。でも、それが不正解だとは思わない。

「お前が何をしたのか分かっているのか?!その触手にどれ程の金と研究が詰まっているか……」

シロはイトナ君の触手が取れたのを見て取り乱して柄にもなく喚いた。この様子だとイトナ君にはそれなりに期待をしていたのだろう。1周目のようにイトナ君が使い物にならなくなった途端あっさり捨てることはすぐ想像できるが。

「関係ないよ。触手なんてイトナ君にとってはただの重りにしかならない」

「強さを求めたのはイトナの方なのか?触手を失った彼に何が残る?!」

「残念だったね。中学生如きにそんな怒鳴るとかだっさ」

カルマ君が最後にちよつとした挑発をする。しかしどうもそれはシロには届いていないようだった。何故なら彼は狂ったように笑い声を上げたからだ。

「ふはっ、はははははははっ!!」

「何が可笑しいんだよ。頭のネジぶっ飛んでんのか?」

寺坂君が汗を拭って不気味そうに相手を眺める。シロの顔は見えないが、今笑う状況じゃないのは誰だって分かる。笑った後、シロは先程とは別人のように冷静に負けを認めた。

「完敗だよ。ここまでの敗北感を感じたのは人生で2度目だね。しかし、全て上手く行くと思わない方がいい。今イトナの触手を取り除いたことに後悔する日がきつと来るさ」

シロの顔は明らかにぼくに向けられていた。彼の言っていることが不吉に聞こえ、なのに意味が分からずに困惑する。

「何を言ってる……?」

「さて、触手を失った以上イトナにもう用はない。そちらで面倒見てくださいと助かるよ」

「仮にも保護者じゃなかったんですか?」

殺せんせーは相手を睨みつけた。

「関係ないね。私はお前を殺すことしか頭がないんだから」

「やはり貴方は……」



殺せんせーは相手の正体に勘付いたようだ。その場を立ち去るシロを先程より強く睨みつけ、ぼくから見える殺せんせーの顔がほんのひと時暗くなった。それは直ぐに消えてなくなり、いつものように優しい先生がイトナ君を介抱する。

「シロの奴、冷てくなあ」

「それにしてもカルマの計画どんぴしやりだったな！」

興奮して岡島君がカルマ君を褒めちぎった。それに対して千葉君は不可解そうにしている。

「イトナが人質を取るはずとか、寺坂がタイマン張るよう言った場合の相手側の反応とか。あまりに計画に沿い過ぎていて逆にびびったぞ」

「そりやそーだよ。イトナもこの計画知っていたんだからさ」

軽くネタばらしをするカルマ君に全員が目が点になる。

「え？今何て？」

「だーかーらー、イトナも計画の実行者の1人だって話！」

「二「はあ?!」二」

事実を知らされていなかったクラスメイトたちの声が山中に響き渡った。その声で気絶していたイトナ君が目を覚ましてしまう。

「……うるさい」

「目覚めたようだな。今から殴られる覚悟は出来ているか？」

拳を握りしめ、顔が明らかにど怒りしているぼくが1番近づきたくない学秀の姿にぼくはうわあと顔を覆いたくなる。

「いや浅野。渚ちゃんが死にかけたし気持ち分かるが、止めとけ死ぬぞ」

恐れ知らずの磯貝君が慌てて説得する。その言葉は学秀の変なフィルターを通して曲がって伝わった。

「そうだな、死にかけたんだから同じ目に遭わせた方がいいか。忠告感謝するよ、磯貝」

「って聞いてないし」

「まああれだよ。イトナ君が気絶した時渚ちゃんにもたれかかってたじゃん？羨ましかったんでしょ」

カルマ君がクスクスと悪魔の笑いをして学秀を指差した。

「あくそれか」

「嫉妬だね」

「ヤキモチだ〜」

「勝手な妄想で人の気持ちを代弁するのは止めるカルマ」

学秀は如何にも自分は落ち着き払っていて全くそんな考えをしていないというように振る舞った。

「俺は別にそんなことしてないけど？これ本心っしょ」

「浅野君は渚さんにもたれかかるイトナ君の姿にヤキモチ、または殺意を覚えた』つと」

殺せんせーがメモ帳に何やら新しい書き込みを加える。内容はよく聞き取れなかったが学秀についてみたいだ。

「殺せんせー、ナチュラルにメモるなよ」

殺せんせーの触手には抱えきれないほどのメモ帳の紙があり、カルマ君はゴシツプ好きの殺せんせーに半ば呆れ気味だ。

「てか紙多くね？他には何書いて

カルマ君は何かを発見したのかそれを慌てて握り潰した。

「……せんせー？俺と茅野ちゃんの話盗み聞きした？」

怒りの色が垣間見える声に殺せんせーが焦る。言い訳の言葉を探しているのだろう。

「べ、別にそんなつもりはなくてですねえ。ちょうど面白そうな話を小耳に挟んだので、恋愛話のところだけ聞いて計画については全く関心を覚えなかったといえますか……」

殺せんせーが言い訳を繰り返す。その様子だと計画の話を少し聞いたが放置していたようだ。

中村さんが憎たらしいほど満面の笑みでカルマ君の持つ紙を凝視した。

「なにになに？カルマの好きな女子の名前でも書いてあんの？」

「……いや、ただの紙だよ」

視線を明後日の方向に向けたカルマ君には汗がじんわり湧き出ている。1周目とは違い、水着を着てプールに入ったカルマ君が今暑さ

を感じるには信じ難く、知られなくないものがそこにはあるのだとクラス全員が直感で察した。しかも中村さんへの反応が怪しい。

「嘘のつき方下手くそだなーお前」

E組の生徒たち、特に男子はニヤニヤと笑みを隠さずにカルマ君に近づいた。

「おい、見せろよ」

「俺ら仲間だろ?」

「絶対笑うから嫌だ」

カルマ君は紙を握りしめたまま腕を後ろに隠した。

「みんな。カルマを囲め!」

前原君の声で下衆いクラスメイトたちがカルマ君に群がる。彼は理不尽な周りの行動に珍しく本気で慌てていた。

「何でそうなるんだよ!!」

「お前サボリ魔の癖に美味しいとこだけ貰ってくからな。こっちもお前の弱みでも握んなきゃやってらんねーよ」

寺坂君はカルマ君と格闘し、周りが揉みくちやになつて騒ぎ立てた。終いにはカルマ君が埋もれて見えなくなつてしまった。

「騒がしいな」

イトナ君は淡々と、少し羨ましげに一部始終を見ている。触手を失つて直ぐなので起き上がるのが難しいようだ。分身の殺せんせーの膝枕に乗る彼にこれは需要が無さそうな絵だと思いつつ、ぼくは殺せんせーの隣に座つて彼らと同じようにクラスメイトたちの様子を眺めていた。

「楽しそうでしょう? 先生はこういうE組の雰囲気が好きなんですよ」

「確かに悪くない」

イトナ君は同意した。ぼくは決意して、彼にあることを尋ねる。

「イトナ君はさ、触手を失つて、後悔している?」

「していないと言えれば嘘になるな」

「そっか、そうだよね……」

ぼくを気を遣つてか、いつもは直接ものを言うイトナ君が曖昧な表

現で言った。それはイトナ君が後悔の感情を抱いていることを示す。

「でも触手を失ったからって、殺意が鈍ったとは思わない」

ぼくはその言葉に微笑んだ。

1 周目より2ヶ月早いイトナ君の加入。それがE組に何をもたらすかは分からない。しかしこれだけははっきり言えた。

イトナ君はシロに解放された。彼は自由になったのだと。

「あっ」

カルマ君の持つ紙が彼の手元を離れ宙を舞った。ぼくの近くにきたそれを掴まえ、両手で広げる。

【カルマ君は渚さんが好きらしい】

## 期末テストのはなし。1時間目

期末テスト。前回の中間テストでは理事長にしてやられたE組だが、今回は違う。

記憶の中でも華々しい成功にあったイベントだが、ぼくはその成功とはまた別の目標を掲げていた。

たまには外で健康的に太陽光の下で勉強しようというアイデアのもと、生徒たちは地べたに座って殺せんせーの個人レッスンを受けていた。昼休みに勉強するなんて前では考えられなかった光景だ。殺せんせーの教えで生徒たちのやる気は引き出せた。しかしやる気満タンにはあと少し。寺坂グループなんかはまだ勉強する気にはなっていないように見える。そんな中、殺せんせーは生徒のやる気を100%以上に引き上げるある提案をした。

「皆さん期末テストに向けて頑張っているようで先生嬉しいですねえ。せっかくなのでこういうイベント事に便乗して先生の触手を賭けたいと思います」

生徒たちはピクリと反応した。次の言葉を待ち、唾を呑み込む。これは暗殺に関係ある情報だと理解するのは早かった。

「五教科の各教科で1位を取った生徒に触手1本贈呈します!!」  
「おお〜!!!」

殺せんせーに送られる拍手の嵐に、学秀は肩をすくめる。教科全てで1位を取るのが常の学秀からしてみれば、この賭けは超イージーモード。彼からしてみれば平均点以下を取れという方が難易度が高いのだ。しかし、殺せんせーがこれを賭けにするとすることは学秀が賭けに参加するわけではないだろう。

「話から察するに、それは僕抜きでということか」

いち早く賭けから除外された学秀はつまらなそうに言った。

彼の自習だけ道徳であったり、体育の授業はA組の水泳指導で留守にすることが多かったりと彼はE組にいる時はA組であることによる損が多いようだ。そして事実、今回も自分は賭けに参加すら出来ないのだと疎外感すらあった。

「そうですねえ、浅野君はA組なので今回の賭けは無効とします。そもそもE組の目標は君より上の順位を取るからですからねえ」

そこで浅野学秀は殺せんせーの真意に気づいた。先生は意地悪でそんなことを言っているのではない。これが学秀の成長の糧になると思いい言っているのだ。

「それは随分面白いことを言ってくれるじゃないか」

学秀は自分から1位の座を奪うというのがどれだけ無理難題なのかを熟知していた。

中学2年間どころか彼は人生で受けたほぼ全てのテストで1位を取っている。1周目だとカルマ君に奪われてしまうその座だが、今回は学秀がE組に入り浸っている。E組で殺せんせーの授業を受けている以上、みんながいくら勉強して学秀に追いつこうとしてもその頃には学秀は更に高みに達しているのだ。殺せんせーはE組に高みを指させるのとは別に、既に高みにいる学秀に対しても期待しているのだろう。王者であり続けることほど難しいことはないのだから。

学秀もやる気になった今、殺せんせーの課題は不可能に近いのではないかと生徒たちは考えていた。

そんな中それに対抗しうる例外も何人かいる。

その1人が自分でいうのもおかしな話だがぼくだ。元A組、2周目という最高のアドバンテージを持っているため、学習スピードは通常を遥かに上回っていた。

「渚さん、どの範囲までやったら気がすむのですか?！」

殺せんせーは教える内に疲れ果てて悲鳴を上げた。

現在やっている範囲は大学3年生で習う範囲。しかも分野は広く、ディープな科学、心理学、法律、はたまた経済にまで手を出してしまっているのだからキリがない。

どうしてこうなった。

「出来ることなら何でもやりたいんだ。夢もないし。ほら、学生のうちは何事も全力でやれっていうよね」

小さな嘘を重ねる。殺せんせーはぼくの嘘に反応を見せたが、それを訂正する程のお節介さは無かった。

「でもそれはやり過ぎな」

「うちのクラスで1位取れる確率が高いのはやっぱり渚ちゃんか」

周りがぼくのことを勝手に持ち上げていくのを感じる。クラスの中で出来る方なのは自覚がある。でも本来のIQは他の生徒たちのがずっと上なんじゃないかというのがぼくの予想だ。

「狭間さん、何でしょう?」

突然手を挙げた狭間さんを殺せんせーが見やる。授業中は大人しい狭間さんが手を挙げるのはほぼ初めてだ。

「質問。もし1位が2人以上居たら、それはどっちも触手1本ずつなのかしら?」

狭間さんが柄にもなく勝負事に関心を持った。しかも殺せんせーを殺すという目的のためにあるこの勝負にだ。殺せんせーはその出来事が嬉しかったようで、ニヤニヤを隠しきれないまま「この前のお陰ですかね」と呟きその返事を応えた。

「そうですねえ、公正を重視してそうするでしょう」

「じゃあぼくからもいいかな。それなら1人で全部1位取ったら、触手は何本もらえるの?」

ぼくがそう言った瞬間、全員はその意味を悟りざわつき始める。殺せんせーの顔も深刻そうになっている。

「渚……お前まさか触手全部手に入れる気じゃ?!」

「あり得ない話じゃないぞ。天使ちゃんの点数はいつも浅野に次いで2番目。教科別なら浅野と同点で1位を取ること多い!」

「分かりました渚さん。あげますよ、1教科1本ずつ!総合取ったらもう1本」

「うん、ありがとう」

お礼を言っただけはすぐに参考書に目を移した。さつきまで行っていた経済のレポートを殺せんせーの分身に差し出し、中学3年生の勉強に集中し始めたのだ。

「まずいな。こりゃあ天使ちゃんが1位独り占めって可能性もある」

「くっ、これでは男の意地が!!」

男の意地を守る為に男子生徒たちは立ち上がった。すっかり敵扱

いざれているようでツライ。一方女子たちは逆にぼくをリーダー扱いしている。

「女子はみんな渚ちゃんに続け〜」

「おー!!」

片岡さんの掛け声で皆が続く。うちのクラスはイベント事での女子の結束力が男子より僅かに高い（エロが関わるときを除く）

バスケットでは負けてしまったが、殺せんせーの助けなしにあそこまで行けたというのは片岡さんがそれだけ優秀な学級委員だからで、指導力が高いからだろう。

「ではイトナさん、Thief has stolen something most precious. That is your tentacle!」の訳をお願いします」

と後ろから律の声が響く。学校のリスニング教材がアメリカ英語であるため、律のアクセントはアメリカ英語そのものだった。

「泥棒は一番……なものを盗んだ……。それは……tentacleって何だ?」

律は殺せんせーに頼まれてイトナ君の勉強を教えている最中だった。どうやら期末テスト前で分身を大量に使っている殺せんせーは、勉強に大幅に遅れが見られるイトナ君まで見る余裕がないようだ。

2周目の律は国語での成績も100点中84点と悪くなく、仮教師にはもってこいだった。

「ところで浅野は何やってるんだ?」

学秀の方に目を向けた生徒たちは彼の異変にすぐに気がついた。いつも通り殺せんせーの道徳の授業をBGMにしていることには変わりないのだが、読んでいるものは六法全書だったりしてクラスメイトを困惑させている。

「どうにかして法律的に奴を排除する方法は……」

「何か危ないこと考えてない?!」

「内容的に考えてやっぱこの前のかな」

「アレか〜」

全員は後ろで寺坂君と口論するカルマ君を盗み見た。どうやら学



秀が怒っている原因は彼にあるらしく、しかし当の本人は寺坂君相手に詐欺まがいなことをして楽しんでるようで全くその怒りが届いていなかった。

「はい、これ10万円のお返し」

学秀の様子を気にしていないふりをした彼は悪どい笑みを浮かべ、1円玉を寺坂君に放り投げる。寺坂君は持ち前の反射神経でそれを掴み上げた。

「おーサンキュー……ってこれたったの1円じゃねーか!!!」

律儀にお礼を言いかけて、値段の差額のデカさにふと我に返る。10万円のお返しに1円とは一体何事だろうか。

「何言ってるんのさー、俺はちゃんと返したよ」

鼻歌交じりにしてやったりとニヤニヤ顔を隠しもしない。E組の生徒たちは思った。

まああの赤羽業が普通に金を返すとかありえないか、と。

「ちげーだろー！1万円返すってここに書いてあるぞ」

寺坂君は紙をひらりと取り出し自信満々に主張する。ぼくはカルマ君が1万多く返すわけがないと考えながら殺せんせーに視線を送った。

視線の先にいた殺せんせーはふむふむと頷き、いつの間にか着替えたシャローックホームズのコスチュームで格好を付けている。虫眼鏡の代わりにズーム眼でその契約書を眺め、「謎は全て解けた……ですねえ」とどこかで聞き覚えのある言葉を口にした。

「寺坂君。この紙、110,000の上に小さい丸〇が書いてあるように見えませんか？」

寺坂君は目を擦り紙をよくよく見てみた。殺せんせーの言う通り、そこには小さく〇が書かれていたようだ。

「言われてみれば確かにな。小さ過ぎて黒い点のようには見えねーけどよ。ってそんなの今は関係ないだろ!!」

「いえいえ。それがですねえ、関係あるんですよ。10万の0乗は幾つになりますか？」

「はあ？そりゃあ確か……1に

ああ

!!!

勉強が苦手で頭の回転がカルマ君より遅いことが仇となった。元からカルマ君は寺坂君をいっぱい食わす気でいたのだから。

「俺ちゃんと返したよ？11万円の0乗、1円」

あどけない表情で無垢を装ったカルマ君だったが、誰も騙された者はいなかった。

「「せこっ!!!」」

お金を返す取り決めで普通はそんな書き方しないということを知り、貝君が指摘したが、取り決めは取り決め。最初に寺坂君がサインしてしまったのだから今更その変更を申し出ることなどできない。

「というか、どんな数字も0乗で1になるのは基本ですからねえ。寺坂君は数学をしつかり勉強しないと、一生カルマ君にたかられますよ。あ、数学問題集10冊追加で」

真顔でサラリと課題を追加する殺せんせーがまた憎い。あの赤髪のいたずら少年はそれすらも予測してこんな事をしたに違いなかった。

寺坂君は叫ぶ。

「くっそ……覚えてろよカルマあああ!!!」

ぼくは寺坂君を敵がいると燃え上がるタイプと勝手に認定した。さっきのダラダラした態度が嘘のようだ。

「寺坂のバカは放つといてっど。殺せんせー、この問題ってさ」

ジャンプしたカルマ君から殺せんせーにナイフが振り下ろされる。

それを軽々避けて殺せんせーは訊き返した。

「はい、何でしょうカルマ君」

「このxがこうなって　　ってことだよね？」

「合ってますよ。でもそんな問題に5分もかけてちゃだめですね。それから途中式が曖昧すぎます。これだけで減点2点ですか。浅野君はさつき1分も使わずに解いてしまいましたよ、しかも満点解答で」

「ちっ」

人はよく比べるなど言う。しかし世の中には比べた方がやる気を

出す生徒というのもあるのだ。カルマ君や寺坂君は正にそういう生徒だった。自分より先に進んでる身近な生徒に焦り、敵対する。そしてそういう生徒は向かう壁が高ければ高いほどよく伸びるらしい。

「あいつがやる気とかめっずらしー」

中村さんは「ライ麦畑でつかまえて」の原書を読みながら言った。ぼくはその姿にある予感を覚える。

「殺せんせーは浅野を出して無駄に煽ってんな」

「カルマはやれば1位取れそうだからなー」

磯貝君が前原君にそうぼやき、他の生徒は頷いた。

理事長の妨害を物ともせず4位を取ったカルマ君。彼もE組が考える1位を取りそうな生徒の1人だ。

「でもどーしてそんなカルマがやる気になってるの？いつもテストなんてどうでもいいって顔してるのに」

「浅野君も渚も成績良いからね。ライバルと好きな子より成績低いとかきつとプライドはズタボロだよ」

茅野が理にかなった意見を口にする。彼女はカルマ君から相談されていた事もあり、数少ない彼の理解者なのだ。

「あー言われてみれば。渚ちゃん、カルマが好きって言ってるけどそこんどこどうよ？」

天啊。何故か頭に浮かんだ中国語で呟く。それほどぼくは混乱していた。というか話を振って欲しくなかった。

落ち着け。整理しよう。

あの紙は殺せんせーが書いたもので。ということは真実だとは限らない。カルマ君は勘違いが露見されるのが嫌で隠していた。

うん、きつとこうだろう。

「あれは殺せんせーの勘違いじゃないかな？ほら、殺せんせーって男女をカップルにさせようとする魂胆がたまに透けて見えるし」

「うわー安定の鈍感だね。その心は？」

エアマイクをぼくに突き出し、矢田さんが尋ねた。

「カルマ君がぼくのことを好きになるわけないよ。本校舎にいた時には肩書きと順位で過大評価されていただけで、今はそんなこともない

し……」

倉橋さんと矢田さんが訝しげに首を傾げた。倉橋さんが言いにくそうに言葉を発する。

「前から思ってたけど、渚ちゃんって自己評価相当低いよね」

「うちのクラスで渚ちゃんが好きな男子って結構いると思うけど、みんながみんなそんな理由で人を好きになると思うの？」

「それは違う……かも」

「みんなね、渚ちゃんがかわいいから渚ちゃんが大好きなんだよ。かわいい上にかっこよくて優しいから。渚ちゃんには良いところがいっぱいあるもん」

倉橋さんが真剣に力説する。その言い方には凄みがあった。

「みんな分かってるのに、何で本人は分かんないかなあ」

倉橋さんの目が少し哀しそうにぼくを見つめる。

ぼくは彼女が言うように、何も分からなかった。

何故みんなが勘違いするのもかも、ぼくを好きになる人がいるのかも。自己評価が低いというのはどういう意味だろう。ぼくは自分で自分を過大視してしまわないように気をつけているというのに。

「ねえ茅野。ぼくはどこかおかしいのかな？」

「おかしいっていうか、恋愛に関して度を超えた鈍感っていうのか……もっと自信持てばいいのになとは思うよ」

「そうよ渚。自信の無さは失敗に繋がるわ」

「もう本人に聞けばいいじゃん。カルマ、渚ちゃんのこと好き？異性として」

片岡さんが堂々と尋ねた。いきなりの出来事にカルマ君は面食らったようにぼくを見つめる。

「好きだよ」

ガタン。

カルマ君がその言葉を言った瞬間、学秀がカルマ君に近づいて行った。

「カルマ、何だってお前は……」

「何、学秀君怒ってるの」

「……………」

学秀は答えなかった。

「学秀君が出来なかったことを先に俺がやるのが悔しいんだ」

「ああそうだ。それもある。だが」

「でも悪いのは学秀君じゃん。俺がせつかく気を使っても、何もしようとしないうとしないうとしない」

臆病者<sup>チキン</sup>

「違う、そうじゃない」

「自分が一番近いポジションにいてと思って油断していたから」

「僕の話聞いてカルマ！」

学秀は怒鳴りつけた。すっかり勉強モードだった教室からシャーペンの音が止む。全員がカルマ君と学秀に注目していた。

「分からないか？渚が困っている」

カルマ君はハツとした表情でぼくのいる方向に視線を移動させた。眉を垂れたぼくと目が合い、バツが悪そうに唇を噛み締める。

それはきつと、ぼくがカルマ君とは同じ気持ちではないと分かっってしまったからだ。

「そうだったね。いつだって渚ちゃんのことを一番分かっているのは学秀君だもんね」

カルマ君が教室を出て行く。今は自習の時間で、授業中と同意義のはずだったが誰も彼を止めなかった。殺せんせーでさえ、分身を使うのを止めている。

「皆もあまり騒ぎ立てるな。これは渚とカルマの問題だ」

「うん、何だかごめんね。でも浅野君。渚ちゃんが困っていたとしても、それはカルマ君が自分の気持ちを言っちゃいけない理由にはならないと思うよ」

片岡さんの言葉に学秀は黙り込んだ。それは事実正しい。告白は相手に自分の気持ちを伝えるためにあるのであって、振られると分かっているにも出来るものでもある。だから今の学秀が言っているのには意味が通らない。ぼくが困っていたからその先を言わせるのを止めさせたなんて、そんなの……そんなのおかしい。

言っていないのに。あの事を知っているはずがないのに。

『何でぼくが困っていると思ったの?』

フランス語で聞く。彼は淡々と根拠を述べた。

『自分が告白された時の顔を渚は知らないようだ。まるで女装した男子中学生が告白されているみたいな反応だと思ったよ』

何それ。何だよそれ。

核心を突いた表現に、乾いた笑いが零れる。この比喩表現は正にぼくの状況を言い表していて、この鋭い男は天然でそんな事を言うような人じゃない。

知っていたのか、1周目は性別が違ったことを。

『いつから気がついていたの?』

『……2周目の話を聞いた時だ』

『ぼくはね、男子を恋愛対象に見れないんだよ。彼氏にするならこんな人がいいとか、誰々がカッコいいとか、そういうのは分かるんだ。でも、誰かを異性として好きになることができない。だってぼくにとって異性が何か分からないから』

一気に胸の内を明かした。学秀はそれを静かに聞いていたが、ぼくの話に区切りがつくとポツリと呟く。

『カルマはいい奴だ』

『カルマ君は1周目で本気でぶつかり合えた親友だよ。だから恋愛対象に見るなんて考えられない』

『なら聞くが、渚は本当に自分のことを男だと思っているのか?』

ぼくは自分の顔を触ってみる。髪に触れてみた。どこからどう見ても見かけは女だ。でも、潮田渚の記憶がへばりついてる限り、男でいたという事実はなくならない。

この事について考えたことはあった。でも答えはまだ見つけれられていない。これに答えを出すとすれば、曖昧になってしまう。きっとぼくは

『ぼくはきつと男でも女でもないんだよ』

\*

授業が終わり、殺せんせーはぐったりした様子で教卓に倒れこんだ。

ぼくは学秀に勉強の誘いをしようと話しかける。

「学秀、放課後勉強」

だが、その誘いは即座に断られた。

「悪い。今からA組を集めて勉強会を開く予定だね。もちろん、渚が来るのは大歓迎だが」

「……大丈夫。行かないから」

A組の勉強会のレベルについていけないとは思わない。でも学秀が歓迎しても元クラスメイトたちは歓迎してくれないだろう。

「今日は大変だったね」

「磯貝君」

このタイミングで話しかけてくるということはもしかしてあの誘い？

「実は俺、期末狙って本校舎の図書館利用予約しててさ。放課後空いてるなら一緒どう？」

磯貝悠馬 他5名と書かれた予約券はE組だとプレミアがつくよ  
うなレアものだ。A組は予約すると翌日か遅くともその週のうちに  
利用できるのに対し、E組が2ヶ月3ヶ月と後回しにされるなんて珍  
しくもない。

「私行く。冷房の下で勉強できるなんて天国じゃん！」

中村さんが強引に磯貝君の誘われていない誘いを受ける。磯貝君は苦笑して了承した。

「えっとぼくは……」

五英傑に遭遇することが分かっているからか、あまり気が乗らない。2周目に入ってから関係はむしろ良好だけでも。それでもA

組とE組という差別化がある中でぼくだけを特別に見るようなことは絶対にしないだろう。

「てか勉強教えてー!」

中村さんが腕をぼくの肩にまわした。

中村さんの方が地頭は良いからぼくはその提案に少し微妙な反応しかできなかった。

「行こうよ渚。わたしもテスト分らないところあって、渚に教えてもらいたいな」

茅野がそう言うてようやく行こうかなという気持ちになってくる。茅野がいるなら行ってもいいかもとぼくが思うことを彼女は熟知しているのだ。

「ね、今日の放課後スタバ奢るから」

「行く。分かった、行くよ」

「渚ちゃんってスタバで釣れるんだ……」

中村さんが呆れ混じりに呟く。釣れるという言い方は少し酷くないかとシヨックを受けた。

「渚はカフェか甘味だったら何でも釣れるよー」

茅野が余計なことを言い出した。釣られた覚えはないんだけどなあ。

「へえ、良いこと聞いたな〜」

中村さんは何か企んでいる時の顔で呟く。茅野が苦笑していたが、悪用されそうで怖いのは気のせいだろうか。

「皆さん勉強熱心ですね〜」

「渚ちゃんも総合1位狙ってるみたいだし、触手の約束忘れないでね〜?」

中村さんはナイフを片手にニヤリと微笑む。

「1位はちよつと厳しいよ……学秀より上の成績なんて取れる気がしないし」

「……………渚さんには浅野君を抜くのに欠けているものがありますね」



殺せんせーはぼくの弱気な発言にやれやれといった表情で呟いた。  
「欠けてるもの?」

「それが分からない内は1位なんて取れないですよ。せいぜい触手目  
当てに頑張ってください」

意味深な発言をする先生に考え込んだ。

ぼくは学秀に劣っていると思ったことはない。しかし、何故かいつ  
も学年1位は逃してしまうのだ。

それはみんなの言うようにぼくの自己評価が低いからなのだろう  
か?

図書室に着くと、知り合いの司書の先生はぼくを見て「久しぶりね  
〜」と声を掛けた。E組に行つてからも態度を変えないのは、単純に  
ぼくのことを気に入っているからみたいだ。

それとA組に居た頃は五英傑とよく図書室に来たのでその所為だ  
ろう。

「図書室の予約なんですけど、席……」

磯貝君が受付で話している間に周りはぼくの登場を騒ぎ立ててい  
た。どうやら本校舎でぼくはちよつとした有名人らしい。

「学問の天使?!」

「嘘?!どこ?!」

「受付受付!」

ぼくの姿を探す生徒たち。

「まさか。本校舎にいるわけないでしょ」

存在を疑う人。

「学年2位なのにE組っていう先輩?」

「憧れるよね〜。まっ、E組には行きたくないけどさ」

そもそも噂のみでしかぼくを知らない人たち。

「え〜、あの生徒会長がE組にいるならE組行きたくない?」

「でも卒業しちゃうし意味ないじゃん!だったら高校で一緒になりた  
いし〜」

学秀に憧れる人たち。

図書室には様々な生徒がいて、皆がぼくを一方的に知っていた。こうなる事は予想ついていたとはいえ、どうにもむず痒い。

席に着けば静かになるかと思いきや、どこからか噂を聞きつけた五英傑の内4人がぼくらの席の前で立ち止まる。

「おやく？分不相応な奴がここにいるね」

荒木君が嫌味たつぷりにメガネを上げ言った。

「そこ、俺らが使うからどけよ」

瀬尾君が上から目線で命令する。そこで立ち向かったのはクラスを代表する紳士、磯貝君だった。

「おい、ここは俺らがちゃんと予約して取った席だぞ」

「記憶悪いなあ〜君らは。E組はA組には逆らえない、つて習わなかった？成績が悪いんだから！」

他の五英傑はグクリと小山君の言葉に反応した。それは正確には間違っていて、誰かには通用しないと気づいているからだ。さつきからあんなにE組の他の生徒たちに絡んでいるのにぼくには何もしてこない理由にもなっていた。

「んー、それだとぼくはいいってことだね」

ぼくは訂正を入れる。

「あとカルマ君も結構成績良かったから……あ、でも五英傑よりは下か」

「赤羽カルマだど？」

思い付いて言う小山君の頬がピクリと歪んだ。この前の期末試験で小山君は5位の座をカルマ君に奪われている。要するにぼくは挑発しているのだ。彼らが何をすれば怒るのか、ぼくはよく分かっている。それはぼくが五英傑の友達だったから。彼らのことは今でも嫌いになれない。でもE組のことを悪く言われるのは嫌だ。

「みんな考えれば分かるよね。五英傑なんて表だけ綺麗に見えるペラペラのレッテルだ。みんなが特別なわけじゃない」

「英語でぼくに勝ったことない瀬尾君」

「What the hell are you saying?!」

瀬尾君は憤慨して少し訛った英語を口にした。

「I guess it's about your accent」

中村さんが冗談めかして言った。彼女の発音は完璧なアメリカ英語だ。

「カルマ君に4位を奪われた小山君」

「それは今回挽回する!!」

小山君は顔を真っ赤にして主張する。ぼくは「どうだか」と小さく呟いた。

「情報操作で姫希さんに負けてる荒木君」

「負けてると断言する理由が分からないな」

荒木君はブツブツ文句を言ったが、彼も情報操作で彼女に負けている事は理解しているはずだ。

「ぼくから榊原君には何も言うことがないけど……」

「そうかい? まだ1度も天使へのアプローチに成功してないことに関しては負けを認めるよ。『ますらをと 思へる我や かくばかり みつれにみつれ 片思をせむ』」

「え、あ……そう」

目をパチクリとして相槌だけ打つ。

いきなり万葉集読み出したよこの人。

ぼくにはこの人のノリが未だによく分からなかった。3秒ほど目を離していた隙に彼は神崎さんの手を握りしめていたりして、さらに訳が分からなくなる。

「おや、こんな所にも蝶がいる。ああ勿体無い、E組でなければ僕に釣り合う容姿なのに。君、後でお茶でもしない? 良い喫茶店を知っているんだよ」

言った側からナンパするなよ?!

ぼくは呆れて物も言えなかった。1周目と展開は似てるがこれはプレイボーイの度が違う。

「今日は先約があるの。それに、二兎を追うものは一兎も得ずと言うから、自重した方がいいんじゃないかな」

神崎さんは至って穏やかな口調で相手に対して忠告をする。しか

し榊原君は眉一つ動かさずに自信満々に返事を返した。

「しかし三兎を追う者は猪を得るともいう。僕は高望みしてでも至高を求め主義なのさ」

「私たちだって」

今まで静かだった奥田さんが勇気を振り絞って声を出した。

「次のテストで全科目1位取るんですから！」

「生意気に口答えすんな。そんな自信だけあって根拠も無しに――」

小山君の額に人差し指を添える。ストーンという音がして、彼は何かの力によって床に座り込んでしまった。

「奥田さんは凄く化学が得意で、この前は酢酸タリウムとか王水を作っていた。記憶力重視の小山君と違って実践派。充分1位圏内だと思うよ?」

「じゅ、銃……?」

どうやら小山君には銃を突きつけられているように見えていたようだ。小山君は座り込んだままE組の顔を見上げ、その顔に見覚えがあることに気がつく。

「言われてみれば一概に記憶無しとは言えないか。神崎有希子中間テスト国語23位。磯貝悠馬社会14位。中村莉桜英語11位。奥田愛美理科17位。大石渚数学1位に総合2位。というか1教科だけなら勝負出来そうなのがまあ揃ってる。一桁なのは天使だけだがな」

E組行きになる理由として部分的な成績不振がよく挙げられる。その為か、理系は得意だけど文系が全滅とか、その逆の生徒はよくいるのだ。だから一科目だけなら1位を狙うのはそこまで難しくない。「そいつは面白い。それならこういうのはどうだ?俺たちA組とE組、五教科でより多く学年トップ取った方が負けた方にどんな事でも命令できる」

荒木君は「まあE組相手じゃ賭けにならないな」と勝つ気満々だ。

「どうした?急に怖じ気づいたか。何ならこっちは――」

「命を懸けたって構わないぜ?」

その言葉は合図だった。ある者は定規を、ある者はペンを武器に取った。首に突きつけたその武器は暗殺者のナイフのように相手を脅すのに効果的で、見えない殺意が4人を襲う。

「な、何だ……今の」

ぼくは冷めた目を4人に向ける。シャーペンの先を向けただけでこの反応とは命を懸けるなんてよく口に出せるものだ。なんなら今

殺してあげようか？

「ひいっ」

「死ぬ覚悟なんてないのにね」

くすりと相手を笑ったつもりが、何故か自分を嘲笑っているかのよう聞こえた。

「引き受けるよ。その賭けとやら」

「じよ、上等だ!!」

「死より過酷な命令を与えてやるぜ！あとうちのリーダーにあまりちよつかい出すなよ!!」

恐怖から逃げるように駆けていく彼らに、他の生徒たちはガヤガヤと口々に何が起こったかについて話し始めた。司書の先生は頭を抱えて「図書室では静かに！」と一番大きな声で怒鳴る。一瞬静かになった後、誰かの「うるさいのは先生じゃん」という声によって話し声は再開された。

図書室での騒動は瞬く間に広がった。同じ頃、E組の教室で別の争いが繰り広げられていたことをぼくは後で知ることになる。

## 期末テストのはなし。2時間目

『好きだよ』

ボキッ。

A組のある一角に視線が集まる。穴戸先生のまたかというため息に、五英傑の大丈夫だろうかというそわそわした態度。それと言うのも僕がシャーペンを折るのはA組の勉強会が始まってから、もう3度目だからだ。

「……今日はよくシャーペンを折るな、浅野」

蓮が呆れたように予備のペンを僕に差し出した。さっきまでは高機能シャープペンシルなんてものを出していたのに、100均で買えるものになってきたということはそろそろ察したのだろう。

「え、シャーペンって折れるものか……?!!?!!お前なあ……」  
毛利君が微妙に引いた顔をし、伊藤さんが無言で彼の足を踏みつけた。

「浅野君、ここ教えてくれない?」

クラスメイトの女子がタイミングを見計らったかのように僕に数学の問題を見せて頼む。断る理由も無いので立ち上がった。

「ああ、今行くよ」

僕が数学の問題を教えている最中も五英傑たちは後ろでこそそこそと話していて、それが丸聞こえなのには全く気付いていない様子だ。

「誰関係かは言わなくても分かるが、いくらなんでも焦り過ぎじゃないかい、あれは」

「今度天使に会ったら言っておくか。あまりうちのリーダーを魅了し過ぎないようにっ」と

荒木は新聞のネタを書くはずのメモ帳に何故かソレを書き記した。余計なお世話だ。

「ぐはははは、E組が小賢しい」

「お前はちよつと変だぞ」

小山の言い方がやけにラスボス臭が漂っており、他の五英傑が苦笑いをする。喋りながら勉強をする余裕がある彼ら以外は沈黙を続け

ていた。最初は五英傑を教師代わりにしようと張り切っていたが、僕があまりに優秀な教師役をしてしまったため彼らの助けが要らなくなってしまうのだ。僕が教える間に彼らは自身の勉強を出来るため、当初の予定よりずっと効率の良い勉強会となった。

「英訳に手こずっている人が多いようだね。これは僕からの提案――

――というより課題だけど、『ライ麦畑でつかまえて』の原書と翻訳本を読むといい。村上春樹訳だと特にどういう風に訳すのか分かるはずだ。この小説は確実にテストの一部には出るだろうしね」

黒板に「ライ麦畑でつかまえて」と大きく書くと、生徒たちは一斉にメモ帳にその小説の名前を書き出した。

言われてみれば、授業でもさり気なく勧められていたと思い出す生徒も何人かいた。しかしその授業に僕は出ていない。

「でもお前、授業はE組でだろ？何でその本が出そうだななんて思うんだ？」

瀬尾君が最もな発言をし、他の生徒たちが頷く。

「うちのクラスの図書委員からの協力だね、教師が借りた本は全て把握している」

本校舎の教師は学校の図書室利用が多い。参考書のみならず、文学や原書の本も揃っているためテスト問題のヒントが沢山あるのだろう。その為、古典や現代文、英語などの教科は出題文章に目星が付きやすい。

「ある意味カンニング……」

小さく聞こえた声を僕は聞き逃さなかった。その声の主はしまったと口を押さえ、目を逸らす。

「人聞きの悪い。リサーチ力は社会でも求められる能力さ。その気になれば教師の作る問題用紙全てを予測することだってできるし、君たちが何をしたかなんてすぐに分かるけどね」

クラスメイトがぞくりと怯える姿にっこりと微笑んでみせた。その中で特に顔色を悪くした生徒たちを頭の中でピックアップしていく。彼らは僕に隠れて何かしらの活動をした者たちだ。五英傑か

らA組にあるちよつとした不満については聞いていたので、恐らく会合でもあつたのだろう。生徒会長という盾を持っているとはいえ、大勢で攻められたら簡単に支配する側とされる側が入れ替わる。それでも僕は思った。

「実力で手に入れなきや何も面白くないじゃないか」

成績も、信頼も。全て把握した上で手に入れるのと、ゼロから始めるのでは異なる。

「浅野、放課後理事長が呼んでるぞ」

穴戸先生が連絡のついでに言った。

「ちつ、こんな時に」

「A組の成績をもっと上げろだなんて、おかしな事言うよな。理事長は」

「E組の成績が上がってきているからだろうな」

「でも浅野君の教え方もかなり上手くなってきているよ。理事長も目じゃないさあれば。誰かから学んだのかい？」

蓮はお世辞ではなく、本心からそう思っているような口調だった。実際本心なのだろう。

「E組の担任だな」

初めて殺せんせーの授業を受けた時は衝撃だった。無駄がない授業にアフターケアまでしっかりされたオリジナルの宿題。そんなことは本校舎の教師なら絶対にしないだろう。あの教師はひよつとしたらあの父親を超えるかもしれない。そんな予感をしていたからか、彼の授業での教え方は全て覚え込んだ。

僕が行う指導方法は殺せんせーのものを複製し、理事長のやり方を組み合わせたものだ。もちろん指導する僕側にも五教科全て隙はない。

「教え方上手いのか、あの担任。あの人多つちかかっていうと体育の先生に見えたのに」

荒木の鋭い発言にギクリとする。彼が言っているのは烏間先生のことだ。更に言うとその予想は正しい。



彼は僕の反応に自分が正しいのだと確信した。そしてどういうわけか、自分の中の情報からそれに近いものを選び出していく。

「そういえば、最近変な噂多いな。駅前のコンビニスイーツを大量買いつける大男とか、夜な夜な裏山を飛び回る魔女と猫なんていうのもあったな。あと、あったり無かったり自動販売機とか」

僕は別の意味で顔を顰める。

殺せんせーに関係あるのが1つしか無いってどういう事だ。しかも後2つで大男霞んでいるじゃないか。

「……それは七不思議的な何かじゃないのか？」

どうにか誤魔化してみたものの、怪奇的なものではないので七不思議というにも無理がある。僕にはその噂が誰を示すのかすぐに分かったし、突拍子もないものならまだしも、いくらか現実味があるような話なのだ。

「いや、僕の考えだとこれらの噂は全部E組に一枚噛んでるぞ。もしやE組の担任は実は宇宙人でその手下が魔女と猫

それか自動販売機を使って洗脳をしてたりするのかわ?

急にE組の点数が上がったのも実は既に入れ替わっているからだっ  
たり

「荒木、止める」

僕を除く3人が同時に止める。3人はA組の他の生徒が見ているため五英傑の威厳を保つので精一杯だったが、すぐに荒木の話をもう少し聞いてやってもいいんじゃないかという気がしてきたようだ。実際、彼の作る新聞のオカルト欄は面白い。

「相変わらずお前はオカルト好きだな」

僕が苦笑すると荒木は真剣な表情で身を乗り出した。

「それがなあ、今回ばかりはただのオカルトというわけにもいかなかったんだ。この前もアメリカで野球選手が触手攻めされたというニュースがあったり」

何やってるんだ、あのタコは。

「月が綺麗な三日月に破壊されているのは宇宙人がやったのではという意見も多い。更に」

「お前がそこに気付けたのはやはり五英傑だからこそか。その頭の鋭

さには敬服するよ」

軽い嫌味つぽく褒めると、荒木は僕が本気で褒めていると勘違いして満面の笑みを向けた。

「そうかーちようどいい浅野。お前に理事長にE組のことについてさり気なく聞いてほしいものだ」  
「だが、オカルトに興味を持つ暇があれば勉強に集中してほしいものだ」

僕が淡々と言い放つと、荒木がシユンと大人しくなった。荒木には悪いが、これ以上詮索をされると困るのは僕だ。E組監視役なんて役柄を演じている以上、問題を放置しているのはどう考えてもおかしい。

もしも僕がE組に行っていないなかったら、荒木同様この話に興味を持っただろう。噂は信じられないが、今回は怪しい点があまりにも多すぎる。

僕にも殺せんせーに関しての疑問は幾つかあるが。

いや、それよりも今は渚の自己評価があそこまで低い理由の方が重要か。本来なら人の問題事には首を突っ込みたくないが、渚があの子だと暗殺にも影響が出そうだしな。ひとまず性別の問題は置いておくとして、問題を整理していくとしよう。

去年まではむしろ2周目だからか自分に自信があるように見えただが、気のせいかな？そうになると、やはり家族関係のトラウマか。その上、カンニング騒動があったことを考えると

自信喪失の理由が出来上がってくる。自信を与える方法は思いついただけで10はあるが、決定的なものはない。精神的な問題は相手の考えを変えた方が解決し易いし効果も高い。しかし、それではやり方も決まってきてしまう。

とすると、これを解決するには少し癪だがあの人の手を借りるしかないか。

「理事長室に行ってくるよ。皆復習はしっかり行うようにね」  
クラスメイトたちが頷くのを確認し、僕は教室を後にした。

\*

ドアを3回ノックした。「入りなさい」という返事に従い、トロフィーや賞状で埋め尽くされた理事長室へと足を進めていく。この部屋に入る時、いつも感じるのは威圧感だ。父親であるはずの理事長が出す圧迫した空気に押し潰されそうになりながら、息を吐き出した。

ふと上げた視界に目新しい認定証を発見した。また検定を受けたのかとよくよく目を凝らし、ぎよつとする。

認定証

ー1級ー

浅野学峯殿

上の者 本協会認定のアロマテラピー検定1級試験に合格したことを証する。

アロマテラピー検定だって？最近よく家で誰かがアロマ焚いてるなどは思っていたが。

まさか父親の方だとは……

「何か？」

首を30度傾げ、理事長は言った。すぐに笑いが引っ込み、咳払いをする。

「いえ。貴方の意向通り……A組成績の底上げに着手しました」

「ご苦労様。しかし、浅野君。君はその事に関して何か言いたげのようだね？」

良い具合に勘違いしてくれた理事長に感謝し、僕は頭をフル回転し

て相手の質問に素早く答える。

「そうですね、1つだけ。E組が他の生徒を上回ってはならない。その理論は分かりますが、それなら本校舎での教育体制を変えるべきなのではないかと」

「ほう。そう指摘する君には何か意見があると」

理事長が興味をそられたような素振りを取ったため、僕は気分が高揚した。彼が僕の意見を聞くなんて滅多にないことだからだ。

「まず、一方的に聴かされるだけの受け身授業は全くの無駄です。範囲が進むのが早いという以前に、分かりにくいかと。E組では速い授業以前に生徒の興味を引き出すような教え方をしていましたからその差は歴然。本校舎の生徒が追い越されるのを心配なされるのであれば、まずは教師の育成に力を入れてみるのはいかがでしょう？」

自分の意見を全て口にしてから喋り過ぎたと反省する。理事長は僕の意見に何度か頷いていたので賛成する点もあるようだ。

「教師の育成については同意しよう。だが、君の言い方はまるで本校舎の生徒たちがE組に追い越された時の言い訳のように思える。教え方が下手？それが何の言い訳になる。E組の教師が他より優秀なのは彼らのハンデだと思えばいい。弱者にハンデが与えられているのは当然のことじゃないか」

「はい？」

聞き間違えなのか、彼はあっさり本校舎の教師が殺せんせーに劣ることを認めたように取れた。更にそれがE組のハンデだと言う。

だが僕はすぐに理事長の言う意味は彼の思想にある弱者と強者から来るものだと分かった。ハンデを決して良い意味で言っている訳ではないということも。

「彼らは弱者だ。弱者は武器が無ければ闘えない。浅野君。本当の強者というのはね、武器を持った弱者による攻撃を物ともせず、容赦無く叩きのめす

そんな怪物のことだ」

理事長の醸し出す雰囲気は正に彼の言う怪物そのもので、得体の知れない恐怖に僕は冷や汗をかく。超生物よりよっぽど化け物染みている。

つまり理事長はE組が少しばかりハンデを持っていようがA組が本気を出せば敵にはならないと言いたいのか。

「それではあなたの言う強者とは、勝ち続けた者であると」

「そうだ。強者としての条件はA組が各教科で1位を独占し、総合で50位以内を独占する。強者というものは時に冷徹に残酷なまでに強くなくてはならない」

全く難しい条件ではないな。そう僕は感じた。E組の成長度合いは確かに脅威であり、今回彼らが1位を目指すことも不可能ではない。一方、殺せんせーの教え方が良い分上がるのは彼を真似した僕の教え方でもある。A組の理解度が勉強会を開く度上昇していくところからしてそれは間違いないだろう。両者が平行線のまま成長すれば勝つのはA組。

よって、理事長の条件は僕の手でいとも簡単に達成出来る。

「ではその条件を僕自身の力でクリアしましょう。その前に息子として貴方に少しおねだりをしたいのですが」

「父親に甘えたいとでも？」

まさか。

僕は笑みを浮かべて首を振る。僕が父親に対して支配欲に駆られることはあってもそんな幼稚なことはしたくない。第一需要がないだろう。

「いえ、僕はただお聞きしたいだけですよ」

僕は対先生ナイフを相手に投げ飛ばした。それは瞬時に掴みとられたが、僕が彼に情報の書かれた紙を見せることで彼の表情が一変する。

「貴方の得意な洗脳の方法をね」

理事長の顔には驚きが見て取れた。その書類には彼が今までに洗脳してきた人物の記載とその目的があり、政治家などのスポンサーを中心とした名前が書き込まれていた。これは理事長の弱みというには大したことはない代物だ。E組にあの怪物がいるということの方が大スキャンダルであり、洗脳したなんて言っても誰も信じないのが常識だからだ。しかし、この書類が用意できるということは僕のり

サーチ力を示す材料になる。普段殺せんせーに使っている力がここで発揮されたというわけだ。

理事長はその書類を速読で読み終わるとクツクツクツと笑い声を出す。

「まさかE組が君にそこまでの影響を与えるとは」

「悪影響だと思えますか？」

「良い兆候だろう。私を支配することばかりを考えるよりもずっといい。尤も君は近頃私に教えを請うのを嫌っていると思っていたが？」

心底楽しそうな笑顔で理事長は言った。理由が分かっている癖にわざわざ聞くのはどういうことだと思いなながらも返事をする。

「ええ嫌いですよ。貴方の教え方が良いのは分かりますが、僕の成績の良さを貴方のおかげだとは考えたくないのです」

「なるほど。期末テストには少々時間が無いようだが20倍速で教えるから問題ないね」

誰も期末テストのために使いたいとは言っていないのに全てお見通しということか。

意地の悪そうな顔をした理事長に対抗して人前で見せる優等生的な笑みを向ける。

「何歳の頃から貴方の教えを受けたと思ってるんです？20倍速だろうが50倍速だろうがついていきますよ」

2人で相手に心の中を見せないようにポーカーフェイスを作る。どちらも腹の探り合いだ。もしも誰かがその様子を見たら親子で何をやってるんだかと呆れたことだろう。

\*

もしかしたらまだ居るかもしれないという淡い期待を抱き、僕はE組の教室を開けた。残念なことにその場にいたのは教科書を顔に被せて寝るカルマのみで、つい先程起きた出来事を思い出し胸糞が悪くなる。告白するなどは言わないがもう少し他にタイミングは無かったのか。あの返事を言わせない告白のやり方も酷いだろう。というかお前は奥田さんが好きじゃなかったのか。言いたいことは脳がパニックするほどあったが全て追い払い、カルマの顔にかけられた教科書を持ち上げる。

「んー何？」

眠たそうな瞼を持ち上げて、カルマはあくびをする。

「渚がどこにいるか知ってるか？」

「渚ちゃんなら今図書室だよ」

「そうか。お前がまだ残っているなんて珍しいな」

しかも教科書が何冊か机に置かれているところを見ると勉強していたようだ。普段なら「さーらっ」と勝つての完全勝利」とか言う癖に今回ばかりはやる気らしい。他の生徒たちも自宅勉強を好み帰るところをカルマは学校の方が勉強が捗るのだろう。

「学秀君に喧嘩吹っかけるために待ってた」

「お前が待ってたとか言うな。喧嘩は買わない主義だ」

ため息を吐いてドアに手をかけると待ったの声がかかる。

「なにになに〜生徒会長。俺に負けるのが怖いのか？」

「冗談はさっきの告白だけにしてほしいね」

僕は苛立ちからカルマの挑発に乗ってしまった。気がついた時にはカルマは本題を言った後で後悔する。

「どっちが総合1位を取れるか、勝負しない？」

瞬時に断ろうとしたが、相手の目の真剣さに溜息を吐く。これは断ろうとしても断らせてくれないパターンだ。

「お前は言っても聞かないからな。で、何を賭ける？」

ここで突きつけられそうなものは何となくだが分かる。カルマのことだから今更本校舎に戻る気などない。だとすれば僕を悪戯の対象にしようとするか、僕の持つている何かを要求するかだ。下手すればE組に正式に入れなんていう命令が来てもおかしくない。

さあ、何を要求する。

カルマは珍しくシリアスな表情で僕の質問に答えた。

「渚ちゃんの誕生日にどっちがデートに誘うか」

僕は相手の言葉を頭の中で確認する。

どちらがデートに誘う？どちらがデートに……聞き間違えじゃないのか。何を考えているんだ、こいつは。

「……………賭けの内容くだらなすぎないか？」

拍子抜けしてカルマにそう口にする。カルマはフツと馬鹿にしたように笑って続けた。

「それなら俺が単独で誘うけど」

「それ

は断じて許さん渚に近づくな」うわっ、即答」

落ち着け、カルマのペースに持って行かれてるじゃないか。

僕は頭の回転を速めてカルマの賭けを断る理由を探す。

「第一、両方が同時に誘ったらどうなるかなんて目に見えてるじゃないか。どちらの付き合いが長いと思ってる。従ってこの賭けを受ける理由が僕にはない」

「学秀君さあ、考えてもみてよ。渚ちゃんは優しいけど、超がつく鈍感だよ？そんな状況になったらきつと

俺ら3人でデートだ」

どんな状況だ。確かに渚ならそんなことになってもおかしくないが。

ふと頭に誕生日1週間前の大石渚を仮定として置いてみた。カルマと僕が同時に遊びに行こうと誘った場合、どちらを選ぶ確率が高いか。もちろんその結論は



『えっと、3人一緒で行けばいいんじゃないかな』

渚の声がリアルに再現されて脳内イメージに登場する。その結論はないだろうと言ってやりたいが、本人が決めたことだしと逆らえない自分とカルマが思い浮かび顔が引きつっていく。

とても現実染みた具体的な想像で怖い。

「確かに渚ならあり得るな」

「それなら賭けは成立ってことでいい？」

「そういうことだ」

教室のドアを開ける。そこにはメモ帳片手にしきりに書き込む殺せんせーの姿があった。

「フムフム。渚さんとのデートを賭けて浅野君とカルマ君が総合1位を争うつと……これはこれは。期末テストの結果が楽しみですねえ。ヌルフフ」

にゅやつ、浅野君ナイフ投

げないで下さい!!!それ避ける時文字が書きづらいんですよ!」

「知るか」

ナイフを振りかざした2人の声が重なる。

翌日、E組の掲示板に「赤羽VS浅野」という見出しで校内新聞

E組新聞とやらが掲載されていた。どこのタコだか知らないが猛烈な殺意に駆られた。

## 【番外編】イトナの気持ち。

強さには代償が付き物だとシロは言った。例えば甘味に関する味覚の変化。胸に対する異常な執着。そして時折キーンと鳴る頭痛。でもそんなことはどうでもいい。

俺は強くなった。全ては触手のお陰だ。

「イトナ、用意はいいか？」

放送室から聞こえたシロの声に俺は小さく頷いた。機械仕掛けのモンスターが俺の目の前を立ち塞がる。

全身が尖っていてハリネズミに似ている。でも棘の部分にあるのは銃兵器であり、あのタコを意識したのか目は点が2つ、逆さにした月のような口が正面に付いていた。ネクタイまで奴のものにそっくりでもうあのタコにしか見えなくなってくる。

シロの実験で闘うモンスターはいつも強そうだ。でも俺の方がずっと強い。

銃撃を軽々と避け、止めを慎重に正確に心臓と思われる位置に刺した。ゲームセット。俺の勝ち。

ほら、やっぱり。

俺の強い。

\*

白装束を外した普通の人間姿のシロが俺の顔も見もせずいつもの通りの言葉を発した。シロがそういう格好をするのは決まって平日の昼間で、どこかに出かける前だ。

「いつも通りコンピューター室で体調チェックをしなさい。あ、それが終わったらゲームでもするといい」

シロは俺が何をしようとするか無関心だ。研究施設から出なければどうでも良いことなのだろう。現に彼は俺よりも別の何かに関心を持つ

て行かれていますような時さえある。前にいつも昼間にどこへ行くのかと聞いたら、病院と答えていた。もしかするとそれがシロとあのタコが対立する理由だったりするのだろうか？

コンピュータ室にはいつものように人が居らず、自分が来る時間帯は避けられているようだと推測した。それもそうか、と1人納得してぼやく。

「あいつがモンスターなら、触手持つてる人間だって同じか」

画面に体調管理のチェック項目が映し出され、それを1つ1つ見てキーボードを叩いた。最後に頭痛がするかと聞かれて「はい」の選択肢をクリックすると終了である。

シロはゲームをするように勧めていたが、俺は体調チェック後はネットサーフィンばかりしている。施設にいる間に世の中の状況に取り残されたくないからだ。

「新作映画の予告、柵ヶ丘通り魔殺人事件にお笑い芸能人Kの結婚……もつとまともな話題はないのか？」

気がつくくと無意識にあのタコの話題を探している。月の爆破は散々取り上げられた話題なのに、俺の興味はやっぱりそこにしかないのだ。

「殺せんせーは各国政府の重大機密事項ですし、ニュースに乗る確率は極めて低いかと」

「っ?!」

一瞬どきりとして飛び退き、その声の正体がよく知る機械仕掛けの少女であることに安堵する。よくよく考えたらコンピュータ上に突然出てこられるのは彼女しか居ない。

「律」

「こんにちは、イトナさん」

「帰れよ」

うんざりして呟く。シロはついこの間律が行った裏切り行為に対して怒り、律を施設上から完全に排除したはずだ。それにも関わらず、律はありとあらゆる手を尽くし俺に毎日会いに来た。俺が何度も帰れと突き放しても彼女は懲りもせず会いに来る。気が付けばコ

ンピューター室で彼女と世間話をするのは日課となっていた。人工知能の彼女は俺の周りを取り巻くどんな人間とも違う。悪知恵の無い純粹さは新鮮だった。

「そういえば、イトナさんの私の登場への反応速度が0.8秒速くなりましたね。それは眼孔の手術による功績でしょうか？」

反応速度なんて人間離れた発言は律だからできるのだろう。目が前と違うことにも直ぐに気づくところも流石だ。

「……俺は知らない。シロが知ってる」

律の質問には答えられる範囲でしか答えていない。渚みたいに一方的に質問を投げかけてくる律は俺の答えに興味があるわけではないうだ。俺と会話をしたいだけ、というのが本人の説明する理由である。

「それではそうですね……手術は痛みを伴うものでしたか？」

「……痛かったのは麻酔だ」

「それは知りませんでした。手術とは麻酔の痛みが大きいものなのですね！」

イマイチ噛み合わない会話を全く苦にも思わず律はひたすら質問を繰り返し、俺はそれに答えていった。帰れと言っても律は俺と話し続ける。感情理解が不得意な彼女に遠回しに帰るよう誘導しても通じない。空気を読むことが出来ない。これでは手の施しようがなかった。

「お前学校通ってるんじゃないのか？」

意識すると忙しいだろう、帰れなのだが、彼女はよくぞ聞いてくれましたとばかりにドヤ顔をしていた。

あ、ちよつと可愛い。

「私はモバイル律ですので。本体はもちろんE組にありますよ。昨日の体育プールでした。開発者に防水機能を付けるように依頼しているところです。今の流行は水殺ですからね！それから、本体に新たな機能を追加したんですよ。イトナさんも気になると良いのですが……」

「お前はいつも楽しそうだな」

暗殺方法について話しているだけなのに、まるで趣味について話しているかのように自然で、気軽で、眩しいほど彼女は輝いていた。

一言で言うなら人生楽しんでますって表情だ。

口には出さなかったが、律の話を聞くのは強さのみを求めたこの研究施設で唯一楽しみな時間になりつつあった。

「イトナさんはいつも無表情です」

「シロに制限されてる。触手は感情によって作用されるから、感情を持たない方が操りやすい」

もともとあまり笑わないのだが、触手を持つてからはそれが顕著になった。俺は演技が下手くそだから気持ちと表情がリンクしている。触手だってそれに左右されるはずだ。

「もつたいないですね。律はイトナさんの笑顔が好きですよ？」

「笑顔？」

「楽しんでる時のイトナさんは笑顔でした。イトナさんは今楽しいですか？」

咄嗟に返事が返せなくなり俺は黙り込んだ。

楽しい？そんな感情はどこかに捨てた。もともと無かったみたい  
に思い出せない。

前の学校では友達が出来なかった。両親が夜逃げしたということ  
で周りは遠巻きに憐れみか見下す目を向けてきたからだ。そういう  
風に人を見る奴らは嫌いだったし、将来の為になるとほざいて必要の  
ない事を教える教師はもつと嫌いだった。

その期間、俺はただただつまらなかつた。取り返したいものはたく  
さんあつた。でもそのどれもが子供には取り戻せないものだった。

俺は元の生活を取り戻したい。でもその為には力が、金が必要だ。

俺は強くなった。でもこの状況は前より良い気はしない。

「……………律」

「はっ？」

「E組はそんなに楽しいところなのか？」

「とても楽しいですよ！」

その答えは分かっていた。あの小柄な少女が律と同じように何度

も話しかけて来た時から、本当はE組に行ってみたいと思っていた。あのヘンテコなクラスなら、俺は受け入れられるんじゃないかって。でも触手は俺にその甘えを禁じた。

怒りが胸の奥からこみ上げ、触手を振り回したい衝動に駆られる。この怒りを鎮める方法は1つ。甘味を摂取することだ。

「甘味が切れた。それが無いと触手が暴走する」

「そうですか。今度旧校舎に行くことがあったら、是非自動販売機に寄ってみてくださいね！大人気の煮オレシリーズは甘さたっぷりで、特にプリン煮オレはイトナさん好みだと思います」

何だそのマイナーで如何にも需要が無さそうな飲み物は。プリン愛好家じゃなきゃ誰が飲むんだ。

「行くことがあったらな」

\*

絶対にE組に行くようなことは起こらないだろうと思っていたのだが、その時は案外すぐにやって来た。何やら悪巧みをしてそうなシロがこんな誘いをしてきたのだ。

「今日は柗ヶ丘中学校に行く。寺坂の協力が得られそうだからね。イトナも来るかい？」

柗ヶ丘中学校。E組。旧校舎。プリン煮オレ。

連想ゲームのように脳内で言葉がリンクしていった。いや、別に律のオススメする飲み物を飲んでみたいとか思っていない。本当にそんなことは思っていないが……………

「行く」

旧校舎のプール付近に着くと、シロは人影に声をかけた。

寺坂。俺の嫌いな向上心の無い強そうに見えるだけの奴だ。

「お前はあの赤髪より弱い。体力も馬力もあいつより勝るのに――

何故だか分かるか？」

そう口に出してしまったのは相手に対して同情が少しあったからかもしれない。それとも持っている癖に使わない相手にイライラしたからか。

「お前の目にはビジョンがない。勝利への意志も手段も情熱も人任せだ」

目標の無い寺坂は頑張れば強くなれる。俺より体格はあるし、何より柗ヶ丘中学校のような進学校に行けている時点で親の稼ぎも悪くないだろうから。寺坂は恵まれている。だが、問題はその先だ。

「目の前の草を漠然と食っているノロマな牛は牛を殺すビジョンを持った狼には勝てない」

夢もない。希望もない。努力もない。そんな寺坂だからシロに騙される。シロが協力なんて求めるわけがないだろう。あいつが協力行為を要求する時は、決まってそいつを利用してしようとしている時なんだから。

俺だって、利用されている1人だ。

いや、でも俺にはビジョンがある。こいつとは違う。

「ビジョン、それだけでいい」

寺坂から離れ、俺は旧校舎に近づいていった。律の言うように、E組はきつと楽しいところなのだろう。殺しのビジョンを持った暗殺者。100億の賞金首である教師。

でも俺はそこには入れない。触手が俺を許さない。E組に入れば強くはなれなくなる。欲しいものを手に入れるには排除するものが必要なのだ。それが俺にとって学生生活だったわけで。今更、捨てたものを欲しがっても戻ってくるわけじゃないのに考えてしまう。

もしも工場が潰れなかったら。

もしも俺がシロに会わなかったら。

もしも俺が渚の手を取ってE組に入っていたら。

でももうダメだ。もしもは取り戻せない。

ふともたれかかった校舎に装着されたように、ポツリと自動販売機が置かれていた。くつと笑いがこみ上げてくるのを堪える。

まさかあの律が言っていた自動販売機ってこれのことか？

デジタルの自動販売機を見るのは初めてだ。

俺は仕組みが気になり機体に触れる。スクリーンが明るくなって自動販売機のメニューが表示された。

よくある午前ティーシリーズ、炭酸ドリンク、水が並ぶ中にソレはあった。

「プリン煮オレって……本当にあったのか」

ポケットをひっくり返してようやく見つけた100円硬貨と10円玉を入れ、俺はプリン煮オレのボタンを押した。紙パックを取り出し口から出し、ストローをぶっ刺す。では飲もうという時に、物音がした。

「誰だ?!」

思わず触手を出したが相手は何てことない、櫛ヶ丘の制服を着た女子生徒2人だ。もじやもじや頭の少女は怠そうに腕を組んでいて、もう1人の小さな少女――  
渚はそんな彼女を落ち着かせようとあたふたしていた。

「まったく何時間待たせる気かしら」

「ごめんごめん。正確な時間帯が分からなかったからさ」

ああ、律がわざわざ自販機のことを話したのは彼女たちに会わせるためだったのか。

「……渚」

「久しぶりだね、イトナ君」

相変わらずの人懐っこそうな笑顔で触手に物怖じもしない。もう片方の少女は俺が触手を出した途端距離を取って警戒心を多少見せているのに対し、こちらに対して全く警戒していないのだ。肝が据わっているのか、ただの馬鹿なのか。どちらにせよこっちの調子を狂わせる。

「一体何をしに来たんだ？」



言ってから何をしに来たと訊かれるのは自分の方だろうと思いついた。向こうも同じことを思ったのか、もじやもじや女が「あんたの方こそここで何してるわけ」と不機嫌そうに言葉を投げかけた。こいつが意味がどうしても分からないが、渚にも色々あるのだろう。「実はぼく、シロの計画知ってるんだよね」

それはまた随分と早い情報だ。

自分はまだ計画があることすら聞かされていないのに、一体どこから情報を得たんだ。そこで律のイレギュラー発言を思い出し、こういふところのことを言っているのかと理解する。

「……それで？」

ぶつきらぼうに返すと渚は急に畏まって咳払いをした。

「イトナ君。選択権は君にある。君はE組に来たい？」

「……別に」

返答に困って、曖昧な言葉を呟いてしまう。

今の今までそのことを考えていた俺にとって、それはタイムリーな話だった。

行きたい気持ちはもちろんあったが、それでいいのかとこの選択を疑うもう1人の自分がある。

「俺は行きたくない」

渚は全てを見透かしたような目で俺を凝視していた。彼女の中で俺が嘘をついているという判決が出たらしい。これは後で律から聞いた話だが、渚には嘘を見分けることができるのだという。

「分かった。行きたいって本心を答えとして受け取っておくよ。それが分かればやる事は1つ——「シロが来るわ」え、それはまずい。律、あとはお願い！」

「了解です、渚さん」

自動販売機から律の声が出てぎよつとした。販売員の制服姿の律が自動販売機の画面に突如現れ、渚にウインクし、さらに驚く。

「な、何やってんだお前」

「お仕事ですよ。確かイトナさんは1度しか見たことなかったですよね」

そういえば律が本体は自動販売機に似ていると言っていた覚えがある。初めて見たときはE組のクラスメイトにすら興味が無かったので殆ど注意していなかったが、こうしてまじまじ見ると本当に自動販売機にしか見えない。

「……本体律」

「はい！こうして直接話すのはほぼ初めてですね。モバイル律は私と繋がっているので実質あまり変わらないですが」

「まさかこんなイカれた奴だとは思わなかった」

多少驚きながらも自分を落ち着けるためにプリン煮オレをストローで一口飲む。プリンをそのまま飲み物にしたような味だ。だが意外と癖になる好みのものだった。

「そんなこと言わずに。モバイル律が後で詳しい説明をするので、いつもの時間にコンピューター室で」

律は素早く言うとは傍に移動して自動販売機のフリをした。後ろからシロが俺を発見してほっと息を吐いている。

「イトナ、ここに居たのか。随分と探したんだぞ。では帰ろうか」

「シロ。この計画はクラスを巻き込むのか？」

「実行の時に言うから聞く必要はないね。それともあれかい？あの渚とかいう子のことを助けたいのか？強くなりたいたいなら情は捨てた方がいい。あの子も偽善者ぶって君に手を差し伸べただけなんだから」

巻き込むんだな。

シロの発言にそう確信する。

いつもは深く考えずに聞き流すシロの言葉だったが、今日はいつもよりずつと鮮明に聞こえた。脳に絡みついた棘の触手が消えたような感覚だ。

「まさか……」

プリン煮オレ効果？

\*

いつもと同じコンピュータ室で、律は計画の全容を明らかにした。プリン煮オレの効果かは知らないが、今日は触手による頭痛が軽減されたような気がする。律の話の内容がすんなり頭に入り込んできたからだ。

シロの計画内容を全て読んで行動する渚には感服するが、そこから自分を俺に傷つけさせようとする自己犠牲に残酷なことを望むんだなど苦しんだ。

渚ほど良い奴はあまり居ない。演技とはいえ、そんなこと俺がしてしまったらバチが当たりそうだ。

そして何より、触手を外すという内容。最大関門であり、自分の中で1番突破出来ない難点。

俺は自分の中で計画に参加しないという結論を出した。

「渚には無理だと言ってほしい。俺は強さを手に入れたんだ」

「数時間おきに発狂することになるその欠陥品のことですか？」

冷静な律が至極真つ当なことを述べる。俺はムキになって否定した。

「違う」

欠陥品なんかじゃない。触手は俺を強くしてくれたんだ。

「そういうものは強さとは言わないのではないのでしょうか」

「うるさい」

「ああ、直ぐに消える強さに脆さというのがありましたね」

「黙れよ!!」

俺は触手を律に向けていた。今まで平気だったのに、感情が高ぶった途端これだ。怒りで震え真つ黒になった触手が、律のいるコンピュータを貫く。ああ、殺ってしまった。そう思っていると、隣の

コンピューターからひよっこり制服姿の律が顔を出した。

そうだよな、律は。俺が何度も帰れと言っても帰らなかったあの律が簡単に居なくなったりしないか。

「イトナさんにそんな脆さ似合わないです」

制服のスカートをぎゅつと握りしめて律は言う。眉を垂れた彼女は哀しそうに顔を俯けていた。

「その計画に俺がいる必要はあるのか？」

「イトナさんが必要なんです。イトナさんが居ないと始まりすらしな  
い計画ですから」

「必要」という言葉に俺は過剰に反応してしまう。

その言葉は一度だって誰かの口から聞いたことがなかった。律が初めてだった。

「……計画を教えてください」

「イトナさん！」

律は本当に嬉しそうに綺麗な笑みを浮かべる。

「勘違いするな。触手に未練はある。でも必要だと言われているのに  
無下にするほど俺は非情じゃない。それだけだ」

その翌日、俺は触手を取られてめでたくE組入りを果たした。シロ  
が最後におかしなことを言っていたが、何も起こらないことを願う。

\*

たまにE組に入ったことを後悔する。

誰もこの教室が勉強漬けだなんて教えてくれなかった。というか  
そもそも……

「暗殺するためのクラスなのに勉強なんて要らないだろう」

声に出して言うと、律が定規で頭を軽く叩いてきた。全く加減が出来ていない。

「いった……」

「頭の回転が遅いと暗殺にも支障が出ますよ」

「今ので頭が悪くなったから手遅れだ」

「それに殺せんせーにも『イトナさんの勉強を見てあげてください』って言われているんですから」

「よし、あいつを殺そう」

「どうやるんですか？」

E組に来てからも律は毎日話しかけてきた。どのグループにも属さず、一匹狼状態な俺を心配しているのだろうか。

「小型の砲台でも作ろうか」

俺が教室で作業をしていると律は横からたまにこうした方がいいんじゃないか、ここの性能を上げるにはなんてダメ出しをしてくる。

その内人が集まってきた、律はそつと俺から離れていった。

「おつ、イトナなんか面白そうなことやってんな」

「なんかハイテクじゃね？」

男子たちが集まると彼らの知恵が集まり、いつの間にか砲台は女子のスカートの中を覗くための戦車に変更されていった。そんな中でも普通に皆に参加していた中村という女子は中身がおっさんなのだろう。

「それにしても難しそうな作りだな」

「こんなの寺坂以外なら誰だってできる」

「何だとイトナ?!」

戦車と寺坂弄りは意外とウケた。気がつくとも自然に寺坂グループに入ることになっていて、俺は一匹狼を卒業した。それでも1番仲が良いのは相変わらず律だった。

テスト1週間前になって、周りに追いつけるように律との勉強会はよくやっていた。自分の部屋でちょうど帰ってきたばかりの国語の小テスト直しをして、律の答案用紙と自分のとで見比べて口角を上げ

る。

「国語だけは俺のが点数上だよな」

少し偉そうに言ってもスマホの中にいる律は「負けてしまいました」とあまり残念では無さそうな顔で返す。30点満点で俺が24点、律は20点だった。

「難しいですからね。文章題のコツは掴めてきましたが、人の心は未だに掴めないです」

「律にも苦手なことってあるのか」

「いっぱいありますよ。料理はかなり苦手です。塩少々とか、ひとつまみとか、目分量とか全く分からないので。今頑張って勉強しているんですけど」

そう聞いて意外だと思った。別に砲台なのに料理するのかというわけではなく、純粋に律という女子に完璧というレッテルを勝手に貼り付けていたからだ。いわゆる美化しすぎというやつだ。

「何なら作れるんだ?」

「お茶漬け……?」

それはご飯とお茶漬けの素、お湯を注いで完成するアレか?そして疑問系なのか。

「それは料理と呼ばないだろ」

「それならイトナさんは何が作れるんですか?」

律がむっとして煽り口調で尋ねた。どうせ大したもののは作れないと決めつけている感が態度から出ている。

「カレーとかチャーハン程度なら。一時期自炊していたことがあったから軽食なら作れる」

そこそこ作れる程度だから、原や村松に比べたらど素人もいいところだ。しかし律にとって俺は数百歩先を歩く先輩だったようで、目を見開いて「そんなばかな」とでも言いたげに口をあんぐりと開けた。

「何ででしょう、私の女子力の敗北を感じます」

「砲台に女子力があってたまるか」

「イトナさんに負けるなんて」

「お前は俺を何だと思ってるんだ」

そもそもお茶漬けレベルに負ける奴の料理センスは凄まじく壊れている。というか居ないだろう。

「大体、料理なんて作れなくてもいいだろ。お前食事要らないのに」「お嫁に行けなくなるじゃないですか!」

その発言にそれは思いつかなかつたと黙る。というか律がそんな発言をするのが予想外だった。ひよつとして恋でもしているのか？

モヤつとした感情が胸の奥に広がった。律の好きな奴だって?そんなの聞いてない。

だとすれば相手はどこのだいつだ。

竹林? いやあいつはただのオタクだ。浅野……は無いな。渚と浅野の2人がほぼデキてるのは周知の事実だ。それ以外に仲の良い異性は……まさか殺せんせーじゃないだろうな?

こうなつたら聞くのが早い。

「好きな奴でもいるのか?」

「好きな奴、ですか?」

フリーズしてる。というか分かっていなかったのか。お嫁さん発言は大方あのタコの変なプログラムだろう。

少しホツとして、俺は気を取り直す。律が分からない言葉を教えるのは俺の役目だ。

「とりあえずだな、気がついたら目で追ってるって異性を思い浮かべろ」

「はい」

律がどこから取り出したのかメモ帳に俺の一言一言を書き込んでいる。

「手繋ぎたいとか」

「キスしたいとか」

律の唇にふと目が行く。自分の顔が熱くなっていくのがバレたくなくて目を逸らした。

「……………その先もしたいとか」

律のペン先が止まった。首を可愛らしく傾げている。

「その先とは?」

「あー忘れろ」

頭を搔き、よーするにと言葉が続ける。

「それが恋愛感情でいう好きな奴」

「凄く参考になります！」

「それは良かった」

律が変なことにその知識を使わないことを願うばかりだ。結局律の好きな奴は誰なんだという質問が頭の中をぐるぐる支配していたが、律が浮かない顔をしているのでその質問はしなかった。

「でもそういう気持ちはよく分らないです。私には手を繋ぐ以前に触れることすら叶いませんからあまり考えたくないことですし」

「それもそうだな」

何だ、俺の考え過ぎか。

律の様子からして、その可能性は大いにあると予想していたんだが。

律は柔らかい微笑を浮かべて続ける。

「でもイトナさんには触れてみたいな、って思ったことあります」

律はイトナさんのことが大好きです

「ら」

「そうか……ん？」

普通に返して、途中で異変に気付いた。律の発言内容と、彼女のうるつとした瞳が何が起こったのかを物語っていた。天然で言っているとも考えられる。だが、わざと何も起こらなかったことにしようとしているところとか、慌ててスマホから退散しようとしているところなんかはいつもの律じゃないみたいだ。

「本体がバッテリー切れになりそうなので失礼します。おやすみなさい」

そそくさに律はモバイル律アプリを閉じて消えてしまう。

残された俺はまさかなと律の発言を頭の中に呼び起こした。

今の何だ？告白じゃないよな……？

え？



## 期末テストのはなし。 3時間目

期末テスト当日になった。A組との賭けで士気が高まるE組だったが、ぼくは逆に気分が重い。

というのもいつの間にかこの前の賭けの話が広まっていることが原因だ。

「俺A組に1万賭けた」

「おいおいそこはE組一択だろ」

「あえて他の奴らが賭けない方に賭けた方が後々儲かるよな」

と勝敗を賭ける生徒たち。

「五英傑が勝つに決まってるって！」

「あんな墮天使大したことないよ。それにしても今日の榊原様神々しい」

とあからさまな五英傑ファンによるぼくを卑下した発言。

本校舎の廊下を歩けば、流行りなのかワザとぶつかって「邪魔」と言つて舌打ちをする女子が大勢居て中村さんと喧嘩になりかけていた。逆に後輩女子は好意的で「先輩応援しています！」なんてキラキラの目を向けられることが多数。数人から「天使ちゃんに賭けたから頑張れ」なんて声も聞こえて本校舎の空気が早くも変化しているように思える。しかし、テスト前なのに廊下を歩いて教室に行くのだけで力を使い果たしてしまいそうだというのはどうなんだろう。

「テストなんかどーとでもなれって思えばどうとでもなるよ」

中村さんがおちやらけた調子でそう言う。そういう彼女はもともと頭が良い方なので本当にどうとでもなってしまうそうだ。

「俺寝不足。てか渚ちゃん昨日のあれ何なのさ。数学の問題大量に送ってくるとか」

解いたけどさとカルマ君は疲れ気味に言った。

「ごめんごめん。分からない問題があったからカルマ君に聞こうと思っただけけど、そのまま寝ちゃって」

「渚ちゃんにも分からない問題なんてあるんだね」

「あんたら両方数学成績良いじゃん」

中村さんが羨ましいわとばかりに言った。そういう彼女も後のテストでは学年3位まで上り詰めたのだが、それを知るのはぼくだけである。

「中村さんは英語得意だったよね」

「この前英語満点取った人が何言ってるの」

「ああ、英語学年1位だと喜んでたら学秀が満点超えてたやつ」

「なんだっけ、問題文のミスを指摘して加点したんだって？ほんとあなたの嫁規格外だわ」

最後の文に首を傾げながらも無かったことにする。横でカルマ君が拗ねたのかフンとそっぽを向いていた。

「でもやっぱりちよつと不安かな」

「へーきへーき。E組のテスト会場ってここだよね？みんな来るの早い————あの子、誰?!」

「あの髪型ひよつとして……」

カルマ君が苦笑い気味に言った。

「ああ、偽律さん」

久しぶりと呼びかけるように名前を呟き、僕はぎこちなく席に座る少女を見つめた。律そっくりのヘアスタイルをした彼女は緊張しているのか、椅子に座る間1ミリも動かない。

「自 律ダス」

特徴的な話し方で彼女が自分の偽の名前を名乗った。

「私が教えたので総合で30位以内には入ると思いますよ。渚さんも中村さんも試験頑張ってくださいね!」

スマホから律がチャアガールコスプレで踊りだす。中村さんも僕も少し呆れ気味だった。ただ、いつものテンション高い律に安心感をもたらした。いや、これはいつもよりテンション高いな律。何かあったのかも知れない。

「集会でまた会うのでよろしくダス」

「うん、よろしく。あ、律がLINEID送ってきてる」

中村さんがスマホを取り出したので、ぼくも少し躊躇ったが、わざわざ1周目と同じにする必要はないかと考えながらアプリ画面を開

く。

「とまあ、人工知能の律が試験を受けるのに当然許可は下りなくてな。替え玉を使うことで納得してもらった」

ドアの前で待ち受けていた烏間先生はそれまでの苦惱を思い出し、苦々しい表情をしていた。そういう風にいつもぼくらの為に陰で支えてくれるのが烏間先生だ。感謝しか出てこない。

「お疲れ様です」

「俺は試験を受けないが、陰ながらに応援している。きっとあのタコも同じだろう。頑張れよ」

烏間先生と別れて教室に入り、皆の顔を見渡す。1学期で随分表情が変わったE組のクラスメイトに自然と口角が上がった。磯貝君と前原君は互いに問題を出し合っていて、奥田さんは神崎さんに国語を教わっている。速水さんは数学の得意な千葉君と問題を解いているようだ。寺坂君と愉快的仲間たちはあの作戦のためにどうやら違う教科を勉強している様子だ。イトナ君が彼らのグループに入ってることが微笑ましい。そんなイトナ君は何やら落ち着かない様子でスマホを気にしていた。

そう観察しながら席に着くと、茅野がぼくに数学の質問をする。それにつられるように矢田さん、倉橋さん、不破さんらが集まって、スイーツ同好会のグループはぼくの説明に耳を傾けた。

みんな成長したな、なんて上から目線だろうか。

ぼくはこの1学期で何か変わっただろうか。

教室のドアを開け、その人は現れた。緊張した雰囲気さがらりと変え、周りのみんなを驚かせて、彼はぼくの前に立つ。

ぼくが机から目線を上げると、目の前にいる浅野学秀は彼の父親そっくりな微笑みを浮かべていた。

「3分だけでいい。話せないかな？」

\*

試験科目：英語

巨大なのに素早いどっかのタコ教師を連想させるような問スターが生徒たちに襲い掛かる。傷だらけになる生徒が多い英語の問題はいつもより数倍はえぐい。

「何だあれ!! あんなの倒せるかよ?!?」

「見るだけでもう吐きそう……」

本校舎の普通の生徒たちが次々と殺られていく中、A組の生徒は余裕そうに攻撃を続けていた。

それはE組の生徒も同様で。

「『ライ麦畑でつかまえて』かあ。やっぱ出ると思ったんだよねー」  
武器を軽々と操り、中村さんはReadingの読解問スターを次々と倒していく。攻略法を熟知しているからこその早打ちだ。

「まあ、天下の生徒会長がskimmingとscanningなんて小技教えてくんなきやこんなに速読出来ないんだけどね」

E組で殺せんせーが英文の読解対策をしていた時、その対策にもう1段階上の攻略法が付け加えられた。

速さ自慢の殺せんせーは速読以前に動き全てが速いので、真似する上では非常に当てにならない。そこで頼りになるのはE組監視役、生徒会長兼学年トップの浅野学秀だ。

学秀の読書量の多さは速読が理由として挙げられる。読むのが速いから短時間で幾つもの本を読める。

しかし、その武器をくれたのが浅野学秀だからこそ、A組だってE組に劣ってはいないのだ。

「はっ、こっちはその浅野が教師やってたんだぜ？A組だってそれが出来るに決まってるだろ!!」

A組生徒の攻撃が超高速で問スターを襲う。五英傑に至ってはE組と互角どころかそれを上回っている。

続いて国語。これ程の生徒の力も似たり寄ったりで甲乙つけ難い教科となった。国語教師に癖はあっても、授業からの応用を求める問題ばかりであるため普段とさほど変わらない。古典の難易度が少し上がったのは皆が認める事実であるにしろだ。

社会のマニアックな問題は生徒たちを散々苦しめた。そんなの誰が知っているんだとテスト用紙を丸めなくなる衝動に駆られる。

暗記に頼っていた生徒が殺られていったのが理科だ。これまでの記憶力を使う範囲とは違い、理解力を問う問題が数多く見られた。奥田さんの満足気な表情からすると彼女はそこの問題をクリアしたのだろう。

気がつくとも生徒たちの思考は教室に引き戻された。昼休みだ。

櫛ヶ丘ではテストを2日に分けて行われ、3日後に採点結果が返される。

「結構えぐかったよね」

茅野が筆記用具を片付けながらため息を吐く。個人的にはそこまですでは無かったとは思ったが、今回のテストは大勢の生徒にダメージを与えたのは確かだ。

「帰りスタバでも行かない？気分転換になると思うよ」

と誘うと、茅野は乗り気で「うん！」と返事をした。

「あそこのプリン美味しいよね」

「そうなんだ。わたしまだ試したことない」

茅野は一瞬固まり、顔に貼り付けた笑みがペラリと剥がれ落ちた。今まで一定の速度を保っていた意識の波長がぐらりと揺れる。

「茅野？」

「ううん、何でもない」

彼女は見定めるようにわたしを見て、にっこりとまた微笑んだ。意識の波長が元に戻る。

「何だか苗字で呼ばれるのちよつと距離感じるなあ。良かったら名前前で呼んで？」

「? うん、分かった。それじゃあカエデ」

「女の子に苗字呼び捨てで呼ばれるのも変だし、ね」

茅野「いや、カエデはわたしが聞き取れないほどに微かな呟きを漏らした。」

わたしはそういえば、何故カエデを茅野なんて苗字で呼んでいたのだろうかと思っただった。

\*

「さて皆さん、全教科の採点が届きました」

殺せんせーが持つ茶封筒を皆はゴクリと唾を呑みこんで見守った。学年順位は紙を見れば一目瞭然、本校舎では総合順位が廊下に提示されるため全校生徒に勝敗がはつきり分かってしまうのだという。

「今日学秀君は?」

カルマ君が後ろの席からわたしに尋ねた。

「A組。何だか落ち着かない様子だったよ」

「意外と心配してんだ、驚き」

「その2人静かに!先生早く発表したいんですよ」

殺せんせーがぶんすか怒りながら注意をする。カルマ君とわたしにはみんなみたくない緊張感があまり無いからだ。

「は〜い」

「では発表します。まずは英語。E組の1位  
—————中  
村莉桜と大石渚。そして……」

「素晴らしい!!学年でもトップです」

満点のテスト用紙がわたしと中村さんに渡された。中村さんは下敷きを仰いで当然と言わんばかりの顔だった。

「非の打ち所がない完璧な答案でした。まあ、それは浅野君も同じなんですが」

英語の学年順位の1番上に名を刻んだのは学秀だった。同点の場合にはA組の生徒を先に載せるルールでもあるのだろう。

「あーやっぱり。学秀も満点なんだ」

「これで触手2本予約済みと。A組との勝負がありますからまだまだです」

賭けの決まりによると五教科で多く1位を取った方という話だった。ならば、今E組は一步リードしている。

「続いて国語。E組1位は大石渚！」

がしかし、学年1

位は浅野学秀と榊原蓮！」

瞬時に差は引き戻された。それにしても榊原君がわたしを抜かして1位とは。学秀のことだろうからやっぱりA組強化もしていたのか。

「やっぱ点取るなく浅野の奴。英語も国語も満点って」

「語学は得意分野だからね……」

それにしてもこの勝負。もはや他の生徒の出る出番は無いようにも思える。1位を取るのは学秀かわたし。狙ったかのように1点、2点と僅かな差をつけてどちらかが勝るのだから、どちらが学年1位を取ってもおかしくない。もう1人の生徒が居なければ、の話だが。

「さあ盛り上がってまいりました!!社会」

E組1位は

赤羽カルマ!学年でも1位です!」

えっ。学年順位の紙を受け取り、わたしが1点カルマ君より下の点数を取っていることに気がつく。よくよく他の紙を見ればカルマ君がいるポジションはわたしたちの1つ後ろ。つまり他の教科で勝てば総合で追いつくことも可能。

「理科のE組1位は赤羽カルマ、と奥田愛美!しかし残念」

学年1位は浅野学秀!!」

残る教科は数学のみ。

全員が固唾を呑んで先生を見守る中、遂に数学の学年トップの名が呼ばれる。

「数学のE組1位は大石渚と赤羽カルマ。そして

「学年でも1位です」

「「「やった……!!」」」

全員が顔を見合わせて飛び跳ねたり、叫んだりしている。それほど嬉しかったのだろう。

「以上を持ちまして、A組との勝負は

「E組がA組に勝った……!!」

生徒たちの喜びをかき消すように、殺せんせーは一拍置いてから告げる。

「引き分けとなります」

それは生徒たちの予想外の言葉だった。あり得ないの一言に尽きる。何故って、E組全員が勝利を手にしたと思った瞬間、殺せんせーが突然そんなことを言い出したのだから。

「「はあああああ?!?!」」

「お、おい殺せんせー。計算できてるか?今ので天使とカルマが1位取ったから、E組の勝ちだろ?なっ?」

前原君が殺せんせーに訝しげに確認すると、殺せんせーは数学の順位表を取り出して虫眼鏡で覗く。

「そうですねえ。確かに2人は満点で1位を取ったんですが、浅野君も全く同じ点を取っていると言いますか……」

わたしは成績順位表を見比べ、これは面倒くさいことになったと思った。この賭けでは同点1位に関してのルールが曖昧だったが、1位を取った数というルール上ではA組とE組の同時1位は両者得点を得ることを意味するはず。E組が1位を取ったのは英語でE組の中村さんとわたし、社会のカルマ君、数学のカルマ君とわたし、合計して5回。対してA組は英語、国語、理科、数学で学秀、国語で榊原君も1位を取ったので合計5回。どちらも3教科で1位を取ったこ



とになる。回数も教科数も完全に一致。

これはどうやってもA組もE組も勝てない。引き分けにするしかないのである。

「じゃあ賭けは??」

「先生ノータツチですのぞ」

殺せんせーが真顔で言う。

「引き分けて。こんな盛り上がりがない展開……ジャンプには要らない!」

不破さんはいつも通り少しズレたメタ発言をした。

「総合トップは?!」

1人がヤケクソになってクラスメイトに尋ねる。

「浅野と天使だ」

「仲良しだな!」

仲良しなのは別に良いがこういう時はどちらかの点数が上であつて欲しかったと彼らは思っているようだった。E組生徒の点数が上なら尚良かった。

「触手5本……これなら何とかありますかねえ」

殺せんせーは1人ぶつぶつ呟いていた。それに寺坂君が合わせたかのようにニヤリと笑う。

「おい、殺せんせーよお。大事な教科忘れてねーか?」

「はい?もう五教科全て発表しましたよね?」

「五教科?何の五教科と勘違いしたか知らねーが、五教科といったら……英数理社あと家だろ」

「家……家庭科?!」

寺坂グループ全員がテスト用紙を見せた。全て満点である。

わたしはよく考えたなと感心していた。国語を抜いたのはそれがE組が1位を取っていない科目だからだったし、思えば確かに殺せんせーはどの五教科とは言っていないなかつた。

「あ、そういえばわたしも家庭科満点だった」

ふと思ひ出して言うと、殺せんせーの顔が真っ青になる。寺坂君、イトナ君、狭間さん、村松君、吉田君、そしてわたしの6人が追加で

触手ゲット。ということとは合計11本ということになる。

「しよ、しよ、触手11本?!?!何君らそんなのに時間割いてるんですか!!  
家庭科なんてついででしょう!」

「ついでって何よ。今度から殺せんせーに調理実習の後食べ物あげなくともいいってことかな?」

憤慨した原さんの言葉に殺せんせーは慌てて「家庭科大事ですよね!」と無理やり感のある笑顔で取り繕う。原さんは分かればよろしいとまるで母親のような顔をしている。まるで殺せんせーのオカンか何かみたいだ。

「くつくつ、クラス全員でやりや良かったわ」

狭間さんが魔女のような笑い声をあげる。僕は彼女の反応に少し苦笑い気味だった。

クラス中が触手コールを行う中、ドアを開けてもう1人の生徒が現れる。騒音に顔をしかめ、テスト用紙を手に席についた。

「騒がしいな」

「来たか学年1位」

磯貝君が学秀の背中をポンと叩いた。あれはよくやったという意味だろう。

「賭けの話聞いたか?あれどう收拾つけようか」

「A組の生徒たちが不満でな。賭けは両方の勝ちということにして、どちらも1つ命令し合わないかってことになった」

A組生徒たちのアイデアにE組全員は少し考えて頷いた。命令の交換ということはどちらも得をする。問題は相手が自分たちより大きな要求をする場合だが、アレを上回る要求なんてないだろう。

「おーそれ、あいつらにはいいアイデアじゃん」

「採用!」

「だろーうな。そちらの要求から先に聞こう」

学秀の表情がE組監視役からA組代表に一変する。それに従って、E組も代表である磯貝君が答えることにした。

「A組の特別夏季講習だけど文句ないよな?」

「わざわざ言うような文句はないね。強いていえば、A組の要求のが

小さい気もするが」

「そりや意外だ。A組の要求って？」

「僕がE組監視役を止めること。これの1つだけだよ」

騒がしかった教室の音がピタリと止んだ。学秀が監視役を止めるということ、それはつまり

彼が暗殺を止めることを示していた。

\*

放課後、学秀に話があると言われたので茅野の誘いを断って彼と帰ることになった。学秀がE組監視役を止めるという話で予想はついていたが、改めて言われるとどれほど彼が用意周到なのか思い知らされる。

「渚、A組に戻って僕の代わりにE組監視役をやってくれないか？」

E組の中で総合50位を上回ったのは3分の1程度。その中でダントツの成績を取り、かつ学秀と同点を取ってしまったからこそ彼はわたしがE組にいては困るのだろう。そう考えると彼がE組監視役という職を作ったこと自体、後でわたしと交代するためのようにも思

える。

「最初から狙っていたんだね」

「正直なところ、今回の要求を決めたのは僕じゃない。五英傑の連中が口うるさくてね。僕も生徒会長とE組監視役を兼任するのもそろそろ疲れてきた頃だ。渚なら成績も素行もE組監視役としては申し分ないだろう。籍はA組だから、わざわざ外を受験する必要もない。だからと言って暗殺を止める必要もない。ああ、監視役になるにあたって生徒会に入らなければならなくなるが。そのぐらい大したことはないだろう?」

恐ろしいことにこの話にはデメリットらしいデメリットが無かった。というか、E組監視役だった本人がデメリットを全て無にしているのだ。E組にいるのにA組に籍を置き高校への進学を可能にし、E組監視役だからという理由で暗殺には参加、でも籍はA組なので差別されることはない。メリットのオンパレードだ。

強いて言えば学秀が「今回の要求を決めたのは僕じゃない」と嘘を吐いたことが気になる程度だ。まあ誰が決めたとしても構わないけど。そのことを指摘しつつ、わたしはその誘いを了承することを伝えた。

「学秀らしい交渉の仕方だよ。そんな良い条件、むしろ断る方がどうにかしてる」

「嘘吐いたと何故分かったんだ?」

学秀はいきなりおかしなことを尋ねた。確か意識の波長の話は知っているはずなんだけどとわたしは疑問に思いながらも答える。

「意識の波長が嘘を吐いてる時のだったから。って、前に言ったよ?」  
「なるほど……………1周目の記憶が無くなっても使えるのか」

学秀がふうんと興味深げに漏らす。わたしは彼の言った発言にまた首を捻る。

「1周目?ゲームか何かのこと?」

「そんなところかな」

学秀はわたしの頭を撫でた。あまり触られると髪がくしゃくしゃになって嫌だけど、嫌いじゃない。でもちよつとだけ気になったので

もしかしてと尋ねることにした。

「背が高いアピール？」

「渚はもう大丈夫だってことだ」

何が大丈夫なのかは分からなかった。でも、学秀の言葉にとてつもない安心感を覚える。

本当に？

本当にわたしは大丈夫なのだろうか。

妙に胸騒ぎがする。これから何か悪いことが起こるような、そんな予感がした。

## 夏休み

準備のはなし。

冷凍庫からスイカアイスを取り出す。それをひとかじり、もうひとかじりとしてしているうちにあつという間に食べ終わってしまい、わたしは少しがっかりした。

「いやー」

視線の先にいる猫がこちらをじつと見つめている。ただ見ているというよりも、監視していると言うのが正しいか。とにかく彼女は飼い主を疑っているような目つきをしていた。まるでお前は誰だ？とも言っているみたいだ。

「おいで、メル」

メルはわたしの声で大人しく近寄る。何だ、いつものメルだとわたしは安心してメルを膝に乗せた。目を細めて眠そうにする彼女もようやくわたしが飼い主であることを認めたとようで、遂には膝の上で眠りについてしまった。

メルが起きないようにそっと充電機からスマホを外す。すると画面にLINEのメッセージがいくつか表示されたのでスクロールして確認していった。どうやら明日から特別夏期講習に向けて訓練が始まるとのことだ、特別講師としてビッチ先生の師匠さんが来るんだとか、体操着を忘れないようにしてほしいなんてことが学級委員の磯貝君から伝えられた。

「夏休みなのに学校かあ……」

少し怠いなとも思ったが、これも暗殺のためだ。

宿題を1週間で終わらせたため、時間は有り余っていた。しかし別に暇だったかと言われるとそういうわけではない。学秀に頼まれて一緒に夏休みの家庭科の宿題である昼食作りを行ったこととかは記憶に新しいだろう。予想していた通り、ほぼわたしが作る羽目になったが、その後一度行ってみたいと思っていたホテルのアフタヌーンティーを奢ってもらったので文句はない。確かそれが偶然にも誕生

日の日だったんだっけ。

それからカエデと一緒にスイーツ巡りをしたり、修学旅行のメン  
バーで打ち上げにカラオケではしゃいだりと最初の1週間からそれ  
なりに充実していた。むしろ充実し過ぎていた。

「何で増えているの？」

家計簿とにらめっこして呟く。食費が先月より増えている。食べ  
ている量は同じはずなのに、だ。むしろ買っている食材は先月の方が  
少ない気さえする。

家計簿とは別にある1日の献立欄はもつとおかしなことになって  
いた。買っていないはずの芋やキノコ、くぬどんの他、高級な松茸が  
たまに登場する。しかも全て旬の食材だ。

自分のことなのにどうやって入手したかの記憶はなかった。

悲しいことにスイーツ好きの運命で、食費を節約するためにスイー  
ツを削ることはできないのだ。例えばスイーツが一番高い出費でも無  
理である。

となると、校則違反ではあるがバイトをするという手が思いつく。

「どっかに良いバイトないかなー」

そうスマホで検索しようとする、何も押していないのに違う画面  
が表示される。

『メイド喫茶 白黒 メイドさん募集中!』

可愛いメイド服に身を包んだ女の子が広告に載っていて、程良い時  
給とそこそこ近い場所が目に入る。

「律、何これ?」

その画面を表示させた張本人に尋ねると、彼女は悪びれもせず、「バ  
イトですよ?」と言った。

「渚さんがバイトを探している様子でしたので、オススメをと」

「そこで何でメイド喫茶なの?」

別にメイドを軽蔑するつもりはない。ただ単にメイド服のコスプ  
レをしなきゃならないというのに羞恥心があるだけで、それ以外は時  
給も場所も申し分ないぐらい良い仕事だ。

「竹林さんのイチオシ場所です」

へえ、竹林君ってメイド喫茶に通ってるんだ。それで律もその事を知っていたと。ってそれ、何でメイド喫茶なのかの答えにはなっていないと思うんだけど。

「実は経営している方が竹林さんの知り合いだということですので、もしかしたら中学生でもバイトを許可されるかもしれないかもしれません」

確かにクラスメイトの知り合いなら赤の他人よりは安心できそうだな。でもそれだけが理由じゃない気もするんだけどな。

わたしが怪しいと律をじーっと見ていると、彼女は降参して本当の理由を言い始めた。

「渚さんがメイドになったら浅野さんが喜びそうですね」

「喜ばないよ！むしろ軽蔑されるよ！」

ちようど良いタイミングでスマホの着信が鳴った。竹林君からだ。

「律から聞いた。店長は大歓迎だそうだ」

「話進めるの早すぎ！っていうか本人の意思は?!?!」

「いいか、メイド喫茶で働いて得をすることは色々ある」

その後、竹林君の説得により2日も経たないうちにメイド喫茶のアルバイトをすることが決定した。

その後思わぬ顔見知り遭遇して驚かされることになるのだが、わたしはまだ知る由もなかった。

\*

校庭で行われる訓練は射撃を中心に行われた。炎天下の中、銃声音が鳴り響く。わたしが放った弾は3弾ともど真ん中を貫いていた。「渚ちゃん……いつの間になんな凄腕になったの？」

後ろで待機していた矢田さんに声をかけられる。そんな事を言われても、普通に撃つたらど真ん中を弾が貫いただけであってこれはただの偶然の産物に違いなかった。



「銃の扱い方に手慣れているとは思っていたが、ここまでとは驚いたな」

鳥間先生もわたしの射撃を見ていたようだ。褒める姿に否定するも、謙遜としか受け取ってもらえなかった。

その姿に笑いを堪える者が1人。学秀だ。

「学秀、E組監視役は辞めるんじゃないか？」

「二学期の始めにだ。夏休みいっぱいはまだ監視役のままだよ」  
そうしておけば特別夏期講習にも参加できるしね、と学秀は続けた。どうやら特別夏期講習について行くために夏休みギリギリまでE組監視役を続けるらしい。何とか学秀はいつもそういうところちやっかりしてると思う。

他の生徒たちは射撃は射撃でも風船を撃つ訓練だったり、足場の悪いところでの射撃、もしくは座ったままでの射撃をしていた。その中で特に目を引いたのはメルであり、胡座なのか寝ているのか訳の分からない格好で小柄な銃を的に向ける。BB弾は見事に真ん中を貫いた。わたしよりあっちの方がよほど凄い。というか猫の癖に銃が扱えるって一体何者なんだ。

「汗水垂らしてご苦労なことね」

そう言ったのはビッチ先生だ。お出かけ用のブランドワンピースを身につけ、サングラスと帽子を日除け用に付けている。ビッチ先生とメルを見比べ、わたしはその差にため息をついた。

「ビッチ先生、わたしより射撃下手だから練習すればいいのに」

わたしがぼやくと、彼女はわたしの唇をなぞって黙らせた。

「ふふつ、大人はずるいのよ。それにしても渚、あんた

「ほほう、偉いもんだなイリーナ」

ビッチ先生の後ろには恐ろしい形相の男が仁王立ちしていた。何を隠そう、彼女の師匠である。

「ひいつ、ロヴロ師匠！」

実は今日は鳥間先生の他にもう1人、ビッチ先生の師匠であるロヴロさんが来ていた。E組の生徒ではわたししか会ったことがないのだが、暗殺者としての波長が合っているのかクラスのみんなはすぐに

受け入れた。

「それにしてもメルダリンがここにいるとはな」

ロヴロさんは銃を何度も連射し、1度も真ん中から外さないメルに目を輝かせていた。その横には縮こまったジャージ姿のビッチ先生がいる。

「有名なんですか？」

とわたしは尋ねた。メルが有名な猫だとは考えたこともなかったからだ。

ロヴロさんはメルから目を離さずに質問に答える。

「最強と言われる死神の次にな。あの猫のいるところに最強の殺し屋ありと言われている。よくある都市伝説だ、信憑性はない」

となると死神という殺し屋が前のメルの飼い主で、最強の名を手にしていたわけか。メルがまるで殺し屋のお守りみたいに扱われていて面白い話だ。

わたしの横で学秀が何かに気がついたようで「そういうことだったのか」と殺せんせーを見て某探偵のような台詞を吐いていた。

どういうことだったんだ。わたしは何かを聞き逃してしまったみたいだ。

「ここは殺し屋が多いからかもしれないな。ちなみに飼い主は誰だ？」

「あ、わたしです」

ロヴロさんの目が初めてわたしに向けられ、会ったことある顔であることに今ようやく気付いて口角を上げる。彼の中でわたしの存在はくつきり残っていたらしい。

「あの時の少女か。久しぶりだな」

あの時

と言われ、ロヴロさんに殺し屋になりたいと言ったことを思い出した。滑稽にもアルバイトが禁止という理由で

それを諦めたことも。最近そのアルバイトを始めたんだけどなど諦めた理由に首を傾げたくなる。

「今でもなりたいと思っているのか？」

殺し屋に、と彼は付け足すように言った。わたしは自分が何故あの時そう発言したのか理解できないでいた。単なる気まぐれか、本気で

思っていたのか、どちらにせよ殺し屋になるなんて突飛な考えを思いつくほどわたしは危険が好きじゃない。

「分かりません。でも答えはきつとノーです」

「ほう。心変わりしたか」

高校の進路先を変えたのか、というような気軽さでロヴロさんは呟いた。目は獐猛な肉食獣のようにギラギラと獲物を狙っていて、意識の波長が何かを企んでいるような怪しい表情を見せる。彼の視線が一瞬右手に集中した。

それだけで、わたしを警戒させるには十分だった。

「個人的に死神の猫が懐くイリーナの弟子というだけで非常に興味があるんだが、それ以上に

ロヴロさんの言葉が終わらない内に、彼がわたしに突き刺す寸前だったナイフをスリのような要領できつと取り上げる。あまりに自然に、相手に警戒されずに事が済んでしまい逆に驚いた。

手に持つナイフをまじまじと見る。

「？」

あれ、何でわたしこんなことしてるんだろう。

わたしがナイフを手に入れたことで後ろに下がったロヴロさんだったが、やがて何もして来ないことを察知すると立ち止まり、わたしの表情を冷静に分析する。

「何で自分がそんなことをしているのか分からない、とでも言いたげな反応だな。面白い」

「無意識に行動してるっていうのは、ただ単に愚かなだけじゃありませんか？」

「ふっ、無意識に、だと？あり得んな」

当然、無意識ではなかった。身体が行動パターンを覚えていたというのが正しいのだろうか。それ以上にロヴロさんの動きに不審さと違和感を感じたというのが大きいが。

「お前は見えていた。俺がナイフを動かすという動作を読んでいたな」

ロヴロさんが再度わたしに歩み寄る。わたしは彼に殺意が無いの

を感じ取ると、そのままナイフを渡した。

「そして今の俺に殺意が無いのも知っている」

「すごいですね、お見通しだ」

「お前がそれを言うのか？」

「そんなすごいことじゃないですから。嘘を見破ったり、感情や動きを読む程度の小技です。わたしみたいな小動物が安全に生きる為に必要な」

意識の波長は物心ついたところから無意識に使用しているため、第六感と呼ぶべき存在である。つまり五感と同じように使えて当たり前なわけで、使えない状態なんて想像できない。

「ならお前は、その使い方を間違えている」

「攻撃に使えと？」

「そういう使い方もあるだろうが、女には向かないな。女の殺し屋は優雅でなければならぬというのが俺の信条なんぞでな」

一種の性差別かとわたしはムツとする。しかしロヴロさんの意見はまた別だった。

「暗殺業というのは技術と武器が求められる。その中でも女、子供であるという武器は希少価値がある。その反面、攻撃性のある技を身につけた途端にその武器は意味を無くす。イリーナが良い例だ」

ロヴロさんの説明するところによると、ビッチ先生は刺す、撃つなどの動きはわたしたちとさほど変わらないらしい。その理由はターゲット対象者を油断させるため。それと彼女の暗殺方法に必殺技なんて必要ないからというのがある。

よく考えてみてほしい。もしも、女子中学生が通りがかりに人を殺すとする。それが成功する場合、それは彼女が女子中学生だから警戒されず上手くいくのだ。しかし、それが鍛えた大柄な女子中学生だったり、バットか銃を持っていたらどうだろう。当たり前だが警戒される。その時点で女子中学生であるというアイデンティティーは他の武器によって無価値になるのだ。

「もちろん、出来て悪いことはないんだがな。警戒されずに出来る必殺技もある。その辺については俺が教えてやろう」

わたしは少し躊躇していた。正直に言うのと殺し屋になる気はあまりなかった。でも、ロヴロさんの教える何かに関心を持ったのは確かだ。

「分かりました。教えてください」

\*

眠りから覚め、もう到着したのかと辺りを見渡した。さっきまではE組の生徒たちがゲームをしたりしてはしゃいでいたのだが、それが嘘かのように隣で本を読む学秀以外は誰もいない。

まさかもう着いてみんな降りているとか？

「まだ着いていないよ」

テレパスかと心の中でツツコミを入れながら学秀の本に目をやった。日本語ではないと予想していたが、英語だった。

「電気羊の夢……変なタイトル。これってSF？」

タイトルの一部を翻訳し、尋ねる。

「そうだ。読み終わったら渚に貸すよ。まだまだ読み終わりそうにないけどね」

船の中で本を読んでよく酔わないなと思いつつも椅子から立ち上がる。窓の外を見ると島が見え始めていた。

「そろそろ着くみたいだよ、行こう」

「ああ」

島に着くとすぐにホテルに案内された。貸し切りする準備をすぐに整えると鳥間先生にスタッフが言うところを見ると、国が超生物の

秘密隠蔽のために動いてくれたのだろう。

「渚、トイレ付き合ってもらってもいい？」

「はいよ」

どこにあるか分からないというカエデに付き合い、トイレの場所を探していると結構時間がかかってしまった。それが理由なのかE組のみんながいるところに戻ると、皆はさつきまで無かったジュースを飲んで雑談していた。

「あれ、そんなのどこで貰ったの？」

「サービスだつて。2人とも貰い逃したんだね、残念」

倉橋さんがジュースをごくごく飲みながら告げる。一口もやらないとばかりに一気飲みするところを見るとどうやらこのジュース、かなり美味しいようだ。

「大丈夫、2人だけじゃないつて。あつちでビーチバレーやつてる連中も貰ってなさそうだよ」

中村さんが指差す先には学秀や磯貝君、岡野さんなどのいわゆる体育会系生徒たちが集まっていた。船で鈍った身体を動かしているらしい。

案の定、1番活躍しているのは学秀だった。そういえば2年の体育の授業でバレー部レギュラーを打ち負かしていたなということを出し、相変わらずの超人ぶりに苦笑してしまう。

「暗殺の良い準備練習だな」

鳥間先生はアイスコーヒーを片手に満足気だった。甘いものが苦手だという彼はサービスのジュースを断ったようだ。

「そういえば、今回はプロの殺し屋は居ないんですね」

「そうだ。斡旋する側がこれ以上持ちがいないと言ってきてな。連絡が取れない殺し屋もいるとかで、今回は君たちに任せることにしたわけだ」

「連絡が取れない殺し屋ですか。怖いですね」

彼らは国と繋がっているのを恐怖に感じたんだろうか。それとも他に彼らを雇う人物でも現れたのか。

鳥間先生も悩み事が多いようで、ご苦労様である。

彼は迷ったように言葉を続けた。

「それを聞いた時、前に3人の殺し屋について渚さんが調べてほしいと言っていたことを思い出した。すっかり忘れていたが、ちょうど良いと幹旋業者<sup>クワッ</sup>に聞いたところ、行方不明になったのはその3人ともう1人らしい」

わたしは困惑して、烏間先生を見上げた。

わたしは烏間先生に何かを調べてほしいと言った覚えはない。もしかしたら烏間先生はわたしによく似た誰かと間違えているのではないか。

「烏間先生、何か勘違いしていませんか？わたしは先生にそんな相談したことないですよ」

冷静に誤解だと弁明すると、烏間先生はため息を吐いた。

「だと良いんだが。もしも渚さんがその4人の失踪した殺し屋に関わっているのなら、危険だと忠告しようと思ったんだ」

彼の目から疑いは消えなかった。意識の波長はわたしを探るように動いている。

「安心してください。わたしは先生から聞くまで知りませんでしたから」

「そうだな……すまない」

烏間先生は申し訳なさそうに謝るとアイスコーヒーのお代わりを頼みにホテル内に入っていった。

「何だか深刻な会話だな」

ビーチバレーの休憩に戻ってきた学秀が烏間先生とわたしを見て言った。内容は聞いていないが、表情を見てそう感じたのだろう。

「何だか烏間先生勘違いしていたみたいで」

わたしは学秀に数人の殺し屋が失踪したらしく、前にその殺し屋たちについてわたしが調べてほしいと烏間先生に頼んだという勘違いについて話した。学秀はしばらく黙って聞いていたが、途中でわたしの話を止めて質問をする。

「ちよつと待て。渚は3人の殺し屋を調べてほしいと言ったのに、実際は4人が行方不明になっているのか？」

「だからわたしは言っていないんだって」

「うん、そうだったね」

学秀は分かっているからという素振りはしていたが、信じていないのはバレバレだった。信じていないというより、わたしのことは信じているけど烏間先生の話は正しいと思っっているみたいだ。訳が分からないけどそういうことなのだ。わたしは感じた。

「その殺し屋たちについては僕から後で律に聞いてみることにするよ。律なら覚えていると思うしね。だから渚は何も心配しなくて大丈夫だよ」

知っているではなく覚えているという発言。学秀の態度。わたしの記憶と烏間先生の記憶との食い違い。

それらの全てがおかしかった。それなのに学秀の言った言葉を全て信じているわたしがいた。

わたしは覚えていないけど、学秀が言うのならわたしは烏間先生に殺し屋を調べるように頼んだのだろう。

律がその場にいたはずないけど、学秀が言うのなら律は殺し屋たちのことを覚えているのだろう。

わたしは大丈夫じゃないけど、学秀が言うのならわたしは何も心配しなくても大丈夫なのだろう。

変だなあ。何か大事なことを忘れているような気がする。

「わたし何か忘れていない?」

「渚は何も忘れていないよ」

「そっか」

学秀が言うのならそれはきつと全て正しい。

わたしは催眠にかけられた心地良い世界に浸かり、おかしいことから目を背けた。全て上手く行っていると信じて。



## 集団暗殺のはなし。

班行動でイルカを見終わった後のことだった。飲み物が欲しいと誰かが言い出し、ここは男子がと杉野が申し出たことで僕とカルマも自販機まで駆り出された。

『ねえ、どーいうこと?』

カルマがそう英語で尋ねてきたのは。

『誰のことだ?』

僕は面倒くさそうにそう返す。誰のことだかすぐに分かったが、わざわざ英語で話してくる会話だ。聞かれたくないのだろう。

「ええええ……………」

杉野はいきなり僕らが英語で話し始めたことに固まり、あたふたしている。少しなら習っていて分かる英語ではあったが、完全に雰囲気置いていかれてしまっているようだ。

『渚ちゃんのことじゃ決まってるじゃん。最近ずっと気まずい感じだったのに、この前普通に話しかけてきてしかも恋話になって』

カルマは杉野に構わず、早口の英語で続ける。むしろ杉野が分からないようなスラングを混ぜているようだ。しかし途中で言いにくそうに押し黙った。

『それでどうしたんだ?』

『カルマ君ってモテそうだね。好きな人いるのって言ったんだ』

渚がどんな表情で言ったのか、何となくだが想像出来た。ほんの少しの微笑を浮かべ、ただの世間話のように気軽に言ったのだろう。告白されたことなんてすっかり忘れて。

『そうだったか』

渚がカルマ君と呼ぶのは別に本人が名前を気に入っているからではない。何てことない、渚がカルマと一周目で親友と呼べる関係だったからだ。本人から聞いた時はおかしな組み合わせだと思ったが、これで確信した。そんな親友に告白され、渚は相当悩んだのだろう。ここが重要なのだが、僕が洗脳の時に渚は自分の消したい記憶を自ら封じ込んだ。この消したい記憶というのに親友から告白された記憶も

入っていたに違いない。

『何をしたのか知らないけどさ、そういう非人道的なことやるの止めたら?』

『非人道的か。正しいがお前に言われるとは思ってもみなかったよ』  
くつと笑いを堪え、カルマを見据えた。彼は拳を握りしめて僕を睨みつけている。滅多にないことだが、カルマは本気で怒っているようだ。

洗脳に近い催眠をしたことをカルマが知るはずもない。それなのに渚の一言という少ない材料で、僕が非人道的な何かをしたと瞬時に判断したのは賞賛に値する。ここまで頭のキレる奴は早々いないだろう。

有能な駒になりそうだ。

『手に入れたいのは分かるよ。だったら何でE組監視役を止めるわけ?』

核心を突く発言に僕はわざとらしくやれやれとため息を吐いた。

『五英傑が決めたことだ。仕方ないだろう』

『あいつら操ってんの学秀君だろ』

こいつに嘘は通用しないか。だが、利用する価値はある。

カルマは王の手足になろうと動くA組生徒たちとは違う。そして指導者の意見を真つ直ぐ純粋に受け入れるE組生徒たちより捻くれている。

ならばするべきことは真実を伝えた上で利用すること。

自販機で飲み物のボタンを押す杉野が目に入った。こちらの話を聞いている様子はない。話しても問題ないだろう。

『……実は脅されているんだ』

『は、誰に?』

『それは言えない』

『それと渚ちゃんのこと、関係ある?』

カルマは如何にも疑っている表情で訊く。

そいつから守るためだ。

僕は心の中で返答した。しかし今はそれを言うことができない。

今話してしまつたら無駄になる。

『……今は言えないな』

『それ後々になつても言わないって顔じゃん』

どんな顔だと心の中でツッコミを入れる。

『渚にもしものことがあつたら頼む。今はお前以外誰も信用できないんだ』

『言われなくてもそのつもりだよ』

「いつものことじゃん」とカルマが日本語に戻り呟く。それは鷹岡の時のことを言っているのだろう。

『喧嘩早いお前のことだ。すぐ相手に殴りかかろうとするのは目に見えている。だがその前に目を閉じてみる』

『何のアドバイスだよそれ』

『敵に遭遇した時に絶対に役に立つ必勝法だよ』

カルマは「敵？ふざけてんの」と笑い飛ばした。冗談でも何でもないのだが、嫌に記憶力が良いこいつのことだ。その時になつたらきつと思ひ出すと断言できた。

「アドバイスとして受け取っとくよ」

カルマが日本語でそう言い、会話が終了する。

「ごめん、俺どうすればいいの？」

両手に飲み物を抱えた杉野が困り顔で言う。カルマはその内2本を、僕は3本の飲み物を受け取った。そうすると自然に2本の飲み物が杉野の手元に残される。

「あ。杉野さ、神崎さんに告げば？」

とカルマは思いついたように杉野に遅れて返事をするのだった。

\*

班別暗殺はいつも通り失敗した。殺せんせーを追いつめるために各班は徹底していたはずだが、何しろ相手は超生物。行動が突飛過ぎて僕にも想像がつかない。

「いや、先生さすがに疲れましたね」

あれだけはしやげば殺れるか?!

ナイフを握りしめて後ろを振り返る。真つ黒い頭が目に入り顔をしかめた。

「浅野君、殺意がバレバレですよ」

そのブラックホールのような黒い顔から声が出たのだからもう驚くしかない。そっちが正面だったのかという意外性に殺意が鈍り、仕方なくナイフをしまう。日焼けするとこんなに黒くなるのかというぐらい真つ黒である。

「これじゃあどこが顔かも分かんないよ。紛らわしいからどうにかして」

片岡さんの意見に周りは「そうだそうだ!」と賛成する。まさかこんな機会が来るとは思っていなかったので皆心の中でびっくりしているのだろう。LINEのクラスグループでプランBに変更することを伝えた。

「ヌルフッフフ。皆さん何か忘れていませんか?」

殺せんせーは真つ黒い顔の表面を破り、一瞬にして黒い膜から抜け出した。その間たったの1秒。

しかしカツコつけ過ぎたせいか、肝心なことを忘れていた様子である。

「月に一度の脱皮……月1の奥の手なのでなかなか使わないんですが

にゅやっ」

自信満々に説明していた先生だったが、途中で自分で気がついて顔を覆う。

「暗殺前に自分で戦力下げてるの」

「何でこんな馬鹿いまだに殺せないんだろ」

天才と馬鹿は紙一重というが、今のは酷すぎる。マツハじやなければすぐに殺せたらんどうな、恐らく。

上手く誘導できたことに皆が顔を一瞬見合わせた。

視界の端に疲れ切った三村と岡島が現れた。2人とも訓練中も船にいる間もずっと映像作りに没頭していた映画製作組だ。

「三村、例の映像は完成したんだろうな？」

小声で尋ねると、三村はニヤリと映画監督らしい顔つきになった。

「あともう一步だな。夕食の時抜け出して最後の仕上げにかかる。任せとけよ、浅野。暗殺の前に立派な映画を見せてやるから」

「ふつ、楽しみだ。ドキュメンタリーは初めてだからな」

ウインクする三村に今度は彼の作る自作映画のファンとしてコメントした。彼の監督としての才能は光るものがある。物事を客観的に見ることに優れ、しかしあくまで目立たず、戦場で陰ながらにスパイでもさせたら一流だ。日常ではあまり役に立たない才能だが、いつか存分にその才能を発揮させてやりたい。

三村は横の岡島を一瞥してため息を吐く。

「1つ気がかりなのがな……」

「何だ？」

「いやー下手したらビッチ先生に殺されそうだなーと」

ん？と一瞬はてなマークが浮かぶ。殺せんせーの恥ずかしい映像とビッチ先生の関連性は今の所見当たらない。少しして三村の言葉の意味に気がついて冷や汗をかく。

「……………使ったのか、あの映像」

「あんな面白いネタ使わない方がおかしいだろ」

岡島は妄想をしながらだらしなく顔を緩めている。その頭を思わず叩いた。

「おい、浅野！今のは痛いぞ！」

「すまない、あまりにイラツと来たからつい」

クラス全員がいきなりの暴力行為に1度沈黙し、僕と岡島君を見や

る。

「岡島君が浅野君に叩かれた」

と国語の教科書の一文を読むように淡々と岡野さんが述べる。

「どーせまた何かやったんでしょあの変態」

片岡さんの反応もとても冷めたものだった。

「それよりさつきさ」

「みんな俺の扱い酷くね?!」

「日頃の行いだろ」

三村が肩をすくめた。

「そーいや浅野、渚ちゃんの私服可愛いな」

「あーそれ俺も思った」

男子達の視線が白ワンピースを纏った渚に向けられる。彼女はいつもは邪魔だからと結つてある髪を下ろし、学校とは違う雰囲気を出していた。夏らしく程良く露出された白い肌が男子の目には眩しいようで、彼らは目を細めていた。まるで本物の天使でも見ているような視線である。

僕は呆れて「おい」と口に出し、文句を言いかけた。しかし、彼らの反応に文句は口の中で消えていった。

「見たことなかったのか」

と僕は少し意外に思う。よくよく考えたら渚は女子達とはよく出かけているようだが、私服で男子と出かけることはあまり無さそうだ。あつても勉強会ぐらいか。

「何というかエロい」

ぐおあ!!」

不適切な発言があつたのでその発言者の口は物理的な意味で速やかに塞いだ。

「岡島に二撃目のダメージ」

と女子の誰かが言ったものの今度こそ誰も興味を示さなかった。岡島はさらに精神的なダメージを負ったようだ。

「今のはどう考えても岡島が悪いな」

菅谷が僕の行動に賛同した。男子たちの視線の先を目で追い、指で四角い枠を作った。どんな絵を描こうかと考えているような様子で。

そこで首を傾げ、彼は違和感に気付く。

「渚ちゃんといえばさ、何かあった？微妙に雰囲気変わった気がするんだよね」

「へえ。どんな風に？」

鋭い奴というものは何人もいるようだ。これは特に観察眼の問題じゃないのだろう。渚をどの程度見ているか。彼女を絵のモデル対象にする菅谷なら気づいてもおかしくない。

「何ていうかな。女っぽくなった」

「それはどういう意味でだ？」

菅谷を睨みつけるが、彼に他意は無いらしい。どうやら純粹に絵を描く対象として渚をそう感じたようなのだ。

「天使ちゃんって呼ばれてるだろ。初めて聞いた時なるほどなって思ったんだよ。まあ、俺が天使ちゃんをモデルにしたいと思った一番の理由でもあるんだけど」

「なるほど？」

何が一体なるほどなのかと疑問に思う。渚が天使らしいというのは殆ど皆に共通する意見ではあるが、こんな風に納得する意見は初めて聞いた。

彼は「ほらさ」と彼の描いた天使の絵画をスマホで見せる。

「天使は両性具有だっていうから」

スマホの中の天使は中性的で、男とも女ともとれる。そんな存在だった。

\*

「さて、何をしてもらおうんでしょうねえ？」

夕食後、殺せんせーはナプキンで口を拭きながらわくわくを隠しきれない様子で尋ねた。

「では殺せんせー。ディナーの後は三村監督の映画をお楽しみください。暗殺はその後で」

磯貝がクラスの代表として言う。水上の小屋に案内され、殺せんせーを1番前にして生徒たちは席に着いた。席に着いたといってもそれは格好だけ。実際は触手を勝ち取った8人以外は他の作業をする準備に追われていた。それを小屋を行き来するふりをする事で誤魔化する。

『東京都内某所。 梶ヶ丘中学、3年E組。 あろうことかこの担任は暗殺のターゲットである。 今回我々E組調査隊はこの謎の男の生息に迫る』

BGMと共に流れる三村の声は出だしから視聴者を惹きつける。掴みはバッチリだ。殺せんせーも真ん中の席でニヤニヤしながら見ているし、準備をしている生徒たちも映像を全て見れないのを残念がっているようだった。

それは殺せんせーにとっては良いことだろう。 何せ今から流れるのは殺せんせーの恥ずかしい映像なのだから。

『我々調査隊に極秘調査を提供してくださった方々にお越しいただきました。 お話をいただく前に続きをご覧ください』

調査隊として画面に表示されるのは意味深な表情で頷く岡島、前原の2人。

『殺せんせー。』

買収は失敗した』

殺せんせーがカブトムシの変装でエロ本を読む姿が映し出され、生徒たちは思わず「うわっ」と軽蔑の声を出した。

「失敗したー?!?!」

『最近のマイブームは熟女OL。 全てこのタコが1人で集めたエロ本である』



「違つ、ちよつ、岡島君たち!!皆に言うなどあれほど言いましたよね?!」

周りに助けを求めるも、皆はそれをニヤニヤして無言を貫いた。その反応ほど精神的にくるものはないだろう。

『お次はこれだ。女性限定デザートビュッフェに並ぶ巨体。誰であろう。奴である』

『殺子よ』

殺せんせーがかつらとメイクを駆使した女装がアップで画面に映った。顔に凹凸が無いのとデカさで全く誤魔化せていない。

『バレないと思つたのだろうか?女装以前に人間でないとバレなかつたのが奇跡である』

「あーあ。エロ本に女装に恥ずかしくないの変態?」

追い討ちをかけるように狭間さんが言い、殺せんせーのライフは削られていく。

『ここに巷で話題になった貴重な映像がある』

「そ、それはまさか——!!!」

『監視カメラで撮影されたビッチ先生お手入れの一部始終をご覧いただきたい』

『ヌルフッフッフ……』

画面の中でビッチ先生に向かい合う殺せんせーが映し出された。中学生にはまだ早い映像が見えそうになった瞬間、僕は隣にいる渚の目を覆う。

「学秀?どういうこと?」

怒りが垣間見える声に僕はうつと声を詰まらせる。渚は僕がその映像を監視カメラで撮り、ネットに晒したことを知っている。いくらビッチ先生とはいえ、それを生徒の前で公開することに対して渚は怒っているようだった。

「にゅやっ、先生死ぬ!先生社会的に死にますから!!!」

一方タコは顔を真っ赤にして叫び声をあげていた。

1時間後。

チーン。

葬式でなるような音が聞こえた気がした。殺せんせーはぐったり、  
というか死んだように動かなくなっている。今なら殺れるんじゃない  
いかと周りが顔を見合わせる。寺坂がナイフで殺せんせーを刺そう  
とした瞬間、殺せんせーは飛び起きた。

「危ない危ない。危うく魂持って行かれるところでした」

どうやら本当に死にかけていたらしい。

『ところで殺せんせー？何かお気づきではないだろうか？』

「?!」

殺せんせーはハツとした顔で床を見た。そこには足――

――触手が浸かるほどの水があり、触手は水を吸って少しだが肥大化  
していた。更に水が床にかかったことで菅原が上に施したコーティ  
ングが取れ、対先生繊維で出来た床が姿を出す。

「俺らまだ何にもしてねーぜ。船で酔って恥ずかしい思いしてよ、随  
分動き鈍ってきたんじゃないの？安心しろよ。俺らがちゃんと殺し  
てやるから」

寺坂が銃を殺せんせーに向ける。それに合わせて村松、吉田、イト  
ナの3人も銃を準備する。

「寺坂の癖に臭い台詞だね〜」

カルマは余裕気に両方の手で銃を構える。

「あとで恥ずかしい思いするわよ」

狭間さんがくつくつと笑いながら両手で銃を持つ。

「言うね〜狭間さん」

と中村が続ける。

未だに僕に小さな怒りを向ける渚は少しの間僕を睨みつけていた  
が、すぐに両手に体の大きさに反した大きな銃を装備した。

顔に殺気は微塵も出さない。満面の笑みで殺し屋たちは対象を見  
つめる。

律が言った。

「さあ、暗殺開始です」

それは合図だった。

銃声の音が九つ鳴る。殺せんせーは約束通り触手を撃たせた。

4隻のボートが小屋の枠組みを一気に剥がしていく。それと同時に運動神経の良い生徒たちがフライボードで殺せんせーを囲んだ。

突然の環境の変化に弱いことは今までの暗殺で既に証明済み。だからフィールドを木の小屋から水圧の檻に変える。

倉橋さんの協力の元、イルカが周りを囲うように飛び跳ねており、外に出るには動物を傷付けなくてはならない。メル的一件で対象にそれが出来ないことは確認済みだ。

「射撃を開始します。照準・殺せんせーの周囲全周1m」

律と僕含む一斉射撃チームは殺せんせーを囲む射撃を行う。その目的はあくまで「囲む」のであって、「当てる」わけではない。マッハ20のスピードを持つ殺せんせーは弾を撃たれると避けることで解決しようとする。だから一斉射撃は敢えて殺せんせーを狙わない。

その弾幕の中を天使が通った。誰にも違和感を悟らせず、仲間である僕たちですら欺いて自然に殺せんせーに歩み寄る。

彼女の視線、動き、表情。全ては殺せんせーを誘導するために行われた。彼女のナイフが殺せんせーの触手を一本切り取っていたことに、殺せんせーは目を見開いている。滑稽なのが、それが僕らからすれば殺せんせーが殺られに行っているようにしか見えなかったことである。

今更のように後退りする殺せんせーに渚は「あれ、忘れてた？」と呟いた。

「わたしはまだ触手を2本しかもらってない。

約束だよ、殺せんせー？ 避けないでね」

渚は妖艶な笑みを浮かべた。

殺せんせーは顔を強張らせた。渚のやり方は僕が提案したものだ。皆が一斉射撃をした時に触手を貰う権利を全て使わず、敢えて残しておく。そうすれば殺せんせーは教師として約束したため、渚に触手を切り取らせなければならぬ。更に奥の手である脱皮が消えたこと

で渚が近くにいる時にマツハで動き回ることも出来なくなる。

それを提案した時、渚が危険な目に遭うのにいいのかと周りに言われた。奥の手を封印した状態ではあまりにも自殺行為だとも。だが、それらは完全なる愚問だ。

それは僕が殺せんせーは生徒を傷付けないと信じているからではない。

今の渚が最強の暗殺者だからだ。

渚は弾が撃たれる方向を全く見ていないのにも関わらず、囲われた銃弾を歩きながら避け切った。途中で立ち止まり、ふふつと笑う。ビッチ先生よりあどけない、それでも大人っぽい笑みだ。殺せんせーに向かう予定通りの銃弾の位置を渚は全て把握していた。囲われた銃弾から逃げ切るルートの先に渚が居たとしても、殺せんせーはそれを選ばざるを得ない。

対先生ナイフが触手を綺麗に斬った。殺せんせーが最も衝撃を受け、意識がナイフに向いたその瞬間に撃たれる銃弾が2つ。

速水さんと千葉の弾が心臓を目掛けて殺せんせーを狙う。イトナからの情報によりクラスメイトは全員殺せんせーの心臓が1番の急所であることを知っている。

更にここで僕が圧力光線を取り出す。これで殺せんせーは身動きが取れない。つまり避けきることも不可能。

ここまで全て計画通り。

その次の瞬間、超生物の全身が閃光と共に弾け飛んだ。

主人公のはなし。

このE組がもし漫画になったら結構面白いのにと考えたことがある。いや、少年漫画好きの使命感から、漫画にしなくてはとすら思う。でもその漫画の主人公はきつと不破優月私じゃない。

「渚！」

殺せんせーの暗殺時に起こった爆発で水中に沈みかけていた渚ちゃんを浅野君が引き上げた。相変わらず主人公ヒーローしているなど頭の中のネタ帳に項目を一つ増やす。

溺れかけた渚ちゃんを助ける浅野君は漫画なら絶対主人公だ。

渚ちゃんは混乱したのか外国語で何やら呟く。浅野君はそれに短く答え、日本語に言語を戻した。

「……何やってるんだ！溺れるところだったぞ」

「溺れないよ。泳げるし」

「渚ちゃんは少し唇を尖らせて反論をした。

私はやれやれと少しため息をついた。

違うでしょ。浅野君は渚ちゃんが泳げないなんて言っていないって。

渚ちゃんが普通に泳げるのは皆知っているし、浅野君だってもちろん分かっている。でも殺せんせーが爆発した時一番近くにいたのは渚ちゃんだったから、巻き込まれていないか心配しているんだ。

「そういう問題じゃないだろう」

ほら」

「渚はチビだから」

と、ここで浅野君が渚ちゃんの地雷を踏んだ。茅野ちゃんが貧乳と言われて激怒するように、渚ちゃんの身長に対する執念は凄まじい。バスケット部に入っていたのも身長が欲しかったからというのはまた聞きだが間違っていないはずだ。残念なことにその努力は実らず、彼女はE組で一番小柄な女子の座に収まっているのだけでも。

とにかく、浅野君は言っではいけないポイントをついてしまった。普段なら頼つぺたを膨らませて「酷いよ学秀」で済まされるところだけど、今の渚ちゃんからは氷のような冷たいオーラが漂っている。

「家庭科赤点の料理音痴」

ピキツと空気が凍った。生徒たちは半径1メートル以上遠ざかることに決めた。唯一2人の近くにいるカルマ君は手慣れた手つきでスマホを取り出してビデオ撮影をしている。

「パソコン音痴な方が問題じゃないのか？」

「は、言わないでよ」

渚ちゃんがどこから取り出したのか、からしマヨネーズが破裂する爆弾を浅野君に向けて投げつける。それは軌道を外れ、水面に浮いているオレンジのスーパーボールにぶち当たった。「にゅやっ！」という声が聞こえてスーパーボールは沈んだ。

「あ、俺の」とカルマ君が呟いた。

「そっちが先に仕掛けてきたんだろう」

真つ赤な弾が渚ちゃんを襲う

がそれはまた

もや途中で曲がり、たまたま近くにあった黄色とオレンジのスーパーボールに直撃する。スーパーボールは水面から姿を消した。

「それも俺のなんだけど」とカルマ君が拗ねた。

「ポップコーンに塩とか」

「糖質の摂りすぎで太るのは渚だ」

「女子に太るなんてサイテー」

一言言う度に攻撃を仕掛ける2人だが、そのどちらもが軌道途中に曲がる。その内全員気づいた。

(こいつら当てる気ねえだろ)

普段の訓練で成績の良い2人の命中率があまりにもお粗末すぎる。

というより、全く別の狙撃点を狙っているようにしか見えない。

「渚さんも浅野君も先生に色々当てないでください！」

声と共に現れたのは透明の膜に包まれた赤と黄色のシマシマ模様な殺せんせー。ちよつとスーパーボールに似てる……って何だこれ。

「ちっ、撃ち損ねたか」

「皆にも言っておけば良かったね」

どうやら渚ちゃんと浅野君でこっそり打ち合わせした嘘の喧嘩だったらしい。

「こ、殺せんせー……？」

陽菜乃ちゃんが確認するように尋ねた。地球上にいきなり縮んでスーパーボールになる教師なんて殺せんせーぐらいしかいないだろうし、コレは間違いなく殺せんせーだ。でも伏線無しにこんな形状になるとか後出し過ぎて反則だと思う。それもそうだけど辛子塗れになっっているのがちよつとおもしろい……可哀想だ。

「皆さん混乱しているみたいですねえ。これは先生の奥の手中の奥の手。完全防御形態です!!」

「完全防御形態?!?!」

「先生の肉体を思いつき凝縮してその分のエネルギーで肉体の周りを固める。この状態にいる先生はまさに無敵……水も対先生物質もあらゆる攻撃を跳ね返します」

「そうなんだ。どうりで爆弾の被害が少ないと思った」

渚ちゃんが納得して今度は普通の爆弾を投げつけて殺せんせーの被害を再度確認する。

「やっぱり狙ってたんだ」

「えーっ、それじゃあずつとそのままだったら殺せないよ」

矢田さんが困ったように言うと言つて殺せんせーは優しげに「大丈夫です」と言った。

暗殺対象なのに何が大丈夫なんだ。

「この膜は24時間で自然崩壊して、その後は肉体を膨らませて元の姿に戻りますから。裏を返せばこれから24時間先生は全く動きがとれません。恐れるべきはロケットに乗せられて宇宙の彼方に飛ばされることです……」

そこで殺せんせーはとびきり嫌味なニヤニヤ笑いで烏間先生を見る。

「その点はリサーチ済みです。24時間以内にそれができるロケットは現在この地球上のどこにもない」

どや顔する殺せんせーにクラス全員苛立った。烏間先生は視界の端で何とかロケットを飛ばせないか電話でお偉いさんに交渉していて、律は様々な計算を高速で解いている。どうすることもできない生徒たちは2人を見守り、烏間先生が交渉に失敗し、律の計算でも殺せ

んせーが殺せないことを悟るとどうしようもない沈黙が全員を襲った。

「くそっ、どうにかすりゃ壊せんだろこんなの!!」

どこからかハンマーを取り出し、寺坂君は何度も振り上げる。その努力は無駄に終わった。ハンマーに虚しくマヨネーズが付いただけだ。

「ヌルフッフ……核爆弾でも傷1つ付きませんよ」

「そっか。打つ手ないんじや仕方ないね」

とカルマ君がスマホを素早く作動させてエロ本を読む殺せんせーの写真を画面に表示した。ちなみにそれは生徒専用のグループチャットで既に出回っているのだが、殺せんせーは知らない。

殺せんせーの口から出たのは「にゅやつ!!」という呻き声。しかも手がないので顔を覆うことすらできない。だったら目を瞑れという話だが、そこまで考えが及ばないみたいだ。

「カルマ君、やめっ……」あ、誰か汚いおっさん見つけてきてよ。コレパンツに突っ込むから」ちよっ、カルマ君!!」

三村君が耳打ちする。私はそれに同意を示した。

「うん、その才能をもっと他のことに使えばいいのに」  
「そりや……カルマだからな」

赤羽業と言えば、才能の無駄遣い（または悪戯への多大なる才能行使をする）というのは皆何となく思っていることだ。殺せんせーの暗殺だって最初から嫌がらせや悪戯を混ぜているし、あの厳格な烏間先生との訓練の時間でさえ、いつ烏間先生に赤っ恥をかかせるかを目標にやっているんだから怖いもの知らずでもある。

「でも皆さん。各国の政府さえも先生をここまで追い詰めることはできなかつた。皆さんは誇つていいでしょう」

先生はいつも通り褒めていたけど、皆の顔はどこか浮かない様子だった。3月より前に先生が殺せたら話が終わるって分かっていたとはいえ、これは私も辛い。

少し時間が経つと愚痴がするする出てきた。廊下でスマホを取り



出し、スーツと息を吸い込む。

「殺せんせーってちよつと、いや、かなり卑怯だと思うの。だってあの完全防衛形態、伏線何も無しで出てきたんだよ！これはご都合主義よ！」

スマホ内にいる律に向かって大声を出す。律は「ご都合主義とは一体」とググリながらも冷静に私をなだめた。

「優月さん、少し落ち着きましようか」

「律はよく落ち着いてられるよね。あ、もしかして想定内だった？」

律は「そうですね」と分析を始める。

「想定内、の定義は難しいですが、今回の暗殺の成功率が極めて低かったことは認めましょう。期末テストを境に成功率が減っていますし、浅野さんという異分子は今回の暗殺にはマイナスに働いた模様です。千葉さんと速水さんに射撃能力の向上が確認できただけに残念です。一方で今の渚さんが暗殺者としては期末テスト前より優れていることは意外でしたね。それで理解できた点も多く……………」

律の声が急に早口になり言葉を羅列していく。私が目の前にいることにやつと気づいたような顔をして、言葉を切った。自分の世界に入り込むと周りが見えなくなるタイプか。

「すみません。分析となるとどうしても熱が入ってしまい……………」

私はくすくす笑い「平気だよ」と返す。律が何を言っているのか聞き取れなかったけど、今みたいなのは人間らしくて可愛い。

「それより律、最近イトナ君とどうなの？」

「……………今日は天気がいいですね」

律が誤魔化そうと視線を逸らす。天気予報がスマホに一瞬映り、顔の赤い律を隠した。明らかに挙動不審になっている。

「くくはくく！したんでしょ。いやーまさか律が恋に落ちるとはね。何て告ったんだっけ？」

天気予報の後ろから律が唸った。

「イトナさんが大好きですと言いました……………」

「それでそれで？返事は？」

「テスト明けに『律が欲しい』と」

「うわあ、何それ、砂糖吐きそう」

その欲しいはそのままの意味なのか。それとも………いやいや流石にあのイトナでも初っ端から誘ったりはしないでしょ。いくら保体満点でも。

「砂糖なんていつ食べたんですか？」

誘われた当の本人は呑気な発言をしている。

「そういう意味じゃないって」

「律は正しかったのでしょうか。一周目とは違う選択肢ばかり選んでしまつて……」

律は珍しくノイズの混じつた声でぶつぶつと呟く。私は辛うじて最初のみを聞きとつた。

「何ていうのかな、正しい選択なんて存在しない。少年漫画だと分岐点つていうのがあつてね、決断しなきゃいけない時に決断した答えが主人公にとって正しい結末なんだよ」

律は無言で目を瞑つた。首をゆっくりと横に振る。

「……その理論は理解できかねます」

「ええ！何で?!」

「でも参考程度に学習しておきますね」

「学習はするんかい」

理解せずに学習つてどうということ。

そんな私のツツコミに律は返事をせず、ただ社交的な笑みを浮かべる。

「それに主人公は私ではないですよ」

「それは同感ね。主人公は浅野君」

「渚さん」

同時に言つた言葉は全く別の人物を指していた。互いに信じられないと相手をじーつと睨みつける。

「ちよつと律、どこに目付けてるの？渚ちゃんはヒロイン！主人公はどう考えても浅野君でしょ!!」

「主人公とヒロインを混同していますよ。優月さんこそ視力は正常ですか？ 視力4.0以下なら黙つてください」

「リア充だからって少女漫画思考になるのは裏切りだつて」

「いえ、少年漫画の方が好きです。特にジャンプが」  
プログラミング済みの好みを律が述べた。

「こいつさり気なく媚び売りやがった……!」

「それでは逆に尋ねますが、優月さんは何故浅野さんが主人公だと?」  
「主人公っぽいからかな。何でも出来るし、いざとなると凄く頼りになるじゃない。まさに王道少年漫画の主人公!」

強いて言えば元から頭が良いというキャラを生かしてノートに書く人と人が死ぬ世界に入るべきだとは思うけどね。新世界の神になるとか言ってる。

「それは主人公の定義には当てはまっていないですね」

「主人公というのは物語の中心人物……この場合の物語をE組と仮定しましょう」

「思い出してください。E組の事件の数々を。その中の中心にいたのは一体誰ですか?」

E組の事件? と私は首を傾げ、記憶を辿る。事件と言っても殺人事件はない。しかし小さな事件を拾っていくにつれ、私は律の言う意味を理解していった。

天使のE組墮ち。紛れもなく渚ちゃんの事件。

生徒会長によるE組の介入。渚ちゃんを追ってきたのだから関わっていると言っているだろう。

四班女子誘拐事件も後から聞いた話によると彼女狙いの犯行。

球技大会での相手女子の暴力。相手チームの主将は渚ちゃんの元クラスメイトだった。

鷹岡の撃退。烏間先生は何故か渚ちゃんを選んでたけど、あの時の渚ちゃん、ちよつと変だった。

堀部系成救出作戦。これは彼女中心とは言い難いけど、カルマが切羽詰まってる状況で指揮を執るなんて好きな子から頼まれていきやありえない。

期末テストでの賭け。1番1位を取る確率が高かったことに加え、実際1位の数はクラス1位。そもそも賭けが起こったのも彼女が五英傑の知り合いだったからという可能性もある。

「確かに、渚ちゃんは主人公要素多いかも。でも、性格的にはそうでもない気がする」

「ふふ、その内分かってくるはずですよ」

ミステリアスな笑みに律はまだ何かを隠しているなど確信した。

私はE組の中では律と仲が良い方だと思う。でも、だからって律のことをよく知っているわけじゃない。それに比べ、渚ちゃんは他の女子たちよりずっと律に近いと思う。

律と渚ちゃんは何か大きな秘密を共有していそうだ。たぶん漫画の読み過ぎかな。

「あれは中村さんですか？」

「え、どいどい？」

律が廊下の先にいた莉桜の姿にいち早く気がつく。私が声をかけるも莉桜は気が付かず、力なく壁にもたれながら歩いていた。途中で莉桜の足がおぼつかなくなり、転びそうになる。

「莉桜ー」

ふらりと倒れかけた莉桜を支える。体温が手に伝わってきてそれが思いの外熱くて。

「嘘、凄い熱ー」

殺せんせー、いや、鳥間先生に報告しないと。莉桜を部屋に寝かせ、廊下を走る。意外なことに誰とも遭遇しなかった。

「鳥間先生、り……中村さんが凄い熱で」

何なの、どうしたのこの空気。

ロビーに集まった生徒たちの半数は今にも倒れそうだった。岡島は尋常じゃない量の鼻血を流していたし、三村君も神崎さんもテーブルに突っ伏している。

鳥間先生はとうとうとても深刻な面持ちで電話をしていた。その様子に殺せんせーまで険しい顔つきをして尋ねる。

「鳥間先生、今の相手は？」

「……生徒たちにウイルスをよこした犯人だ。奴は現在ホテルにいるらしい」

「なら、今すぐにも飛び込んで」

「解毒剤と交換」

「でお前を要求している」

「はい？」

「1番身長の低い女子生徒に賞金首をホテルの最上階に持って来させるよう言ってきた」

E組で1番身長が低い女子……渚ちゃん。またか。

何か事件が起きた時、いつだって彼女は巻き込まれる。それは今回も例外ではないようだ。

でも身長をわざわざ指定してきたのは偶然にしては出来過ぎじゃない？ 弱い生徒に来させたかったのなら、訓練の成績が最下位の生徒でもいいはずなのに。それにどうして1番身長が低い生徒がウイルスに感染していないと分かる？ あ、違う。それもあるけど、何故みんなが感染した瞬間が分かるか、だ。

その答えは恐らく……

「鳥間先生。多分監視カメラが仕掛けてあるんじゃないかな？」

「不破さん……分かった、探させよう」

「勘が良いですね、不破さん」

殺せんせーが私を褒めた。

「ふっふっふっ。探偵漫画読み漁ってたら余裕よ」

そう返したが、実はもう一つの可能性

犯

人がE組関係者である

があることを私は

敢えて言わなかった。

でもそう、それなら渚ちゃんを指定するのに明確な理由ができる。

■■の復讐。

ぞわりと全身を寒気が襲った。あの時のことを思い出して恐怖がこみ上げてくる。

「不破さん、気分悪い？」

はつと横を見ると、渚ちゃんが私の首元に指を当てている。早まった呼吸が一瞬止まった。

「だ、大丈夫」

ほつと胸を撫で下ろした。落ち着きを取り戻したみたいだ。

「そう？ 何だかトラウマを思い出したみたいな顔していたから心配

したよ」

うわっ、ドンピシャだ!!まさかテレパス?

「少し気になることがあっただけだよ」

じつと見つめ、渚ちゃんは私の言葉に嘘偽りがないことを確認しているみたいだった。

さつきも思ってたけど、渚ちゃんは人の心が分かるみたいだ。人の感情を察知するのが得意ってだけだったらあの一瞬でここまで心配したりしないはずだろうし。

おい渚ちゃんってテレパスなの、なんて心の中で呟く。当然のように返事は返ってこなかった。漫画の読み過ぎか。

渚ちゃんと私が話している間に鳥間先生はホテルの警備状況から政府の介入不可だと判断したらしい。だからか渚ちゃんに賞金首を持って行かせる方向に話を進めていく。私もその状況は不可能に近しいと思っただけど、諦めたらそこで試合終了。まだ手があるはずだ。

「先生にいい考えがありますよ。感染していない生徒は汚れてもいい格好で来てください」

そう思っていると殺せんせーが何かを思いついたようだ。こういう時担任の先生っていうのは頼りになる。

皆は意味が分からず首をひねっていたが、殺せんせーの言う通り私服に着替えた。女子は汚れてもいいと言われた割にスカートを着ている子が多い。ビッチ先生の「戦闘服と勝負服は同じ」という教えを守ってだ。もちろん、全員短パンは穿いているけどね。

「律さん、調べましたか?」

全員集合すると、殺せんせーは早速律に尋ねた。

「はい。正面玄関には警備が多いため、強行突破は避けた方が良いでしょう。唯一、地形の問題で警備が置かれていない場所があります……皆さんなら楽勝だと思います」

律が映像で崖の上にあるドアを表示する。その崖は結構な高さがあった。

「普段の訓練に比べたら簡単……なのか?」

割と最近E組に来たイトナ君が俺は信じないぞという目で周りを

見渡す。だが事実だ。

「イトナさん、私の本体もホテルに侵入できませんか？ お姫様抱っこで持ち上げてくれるだけでいいんです」

律の発言にクラスメイトが全員ハテナマークを浮かべた。意味不明な発言はそうだが、何故イトナ相手に？と疑問に思う生徒もいるのだろう。数名の律と親しい女子たちが苦笑混じりに顔を見合わせる。

「まずは体重計に乗ってこい。話はそれからだ」

「イトナさんのいじわる」

「……………仕方ない。俺と律は違う方法で潜入する。後で合流しよう」

タイヤ付き自動販売機を押しながら崖とは違う方向にイトナが向かう。そつちつて正面玄関…………と突っ込む生徒はいなかった。それよりも皆が気になったのはやつぱり下衆い方だ。

「……………今のどういうことですか?!?!」

殺せんせーが声を張り上げる。「リア充ですか?!そんなんですか?!」と教師のくせに生徒たちより興奮している。

「意外だな、お前が生徒の恋愛に気づかないなんて」

「烏間先生知っていたんですか?!」

「まさか。今知った」

「ですよね」

「あら、私は知ってたわ当然」

髪を手で振り払い、自信満々にビッチ先生が勝ち誇って2人の教師を嘲笑う。殺せんせーが「生徒の人気でイリーナ先生に負けたんですか…………？」と弱々しい。

「律に告白促したのビッチ先生だもんね…………」

「私は押し倒しなさいって言ったのよ？」

「500キロ弱ある律がイトナ君押し倒したらその時点でイトナ君死ぬでしょ」

片岡さんの冷静な指摘に皆が残念なカップルだと頷く。

自動販売機がイトナに乗っかる光景がふと頭に浮かんだ。うわーシユールだ。

「次元差LOVEだね」

竹林君が涙ぐみ、親指をぐつと立てた。

「スクープ！堀部系成（15）自動販売機の下敷きで発見される」

「木村君は新聞の見出しにしない」

イトナ君と律についてあーでもないこーでもないと話していると、1人の生徒が崖を悠々と登るのが全員の視界に映り、私たちの動きを止めた。

「話しているところ悪いが、時間が惜しい。僕は先に行こう。皆まさか崖を登れないから来ない、なんて言わないだろうか？」

浅野君がおしやべりに夢中になる周りをキツイ言葉で諫める。もう皆そんな浅野君に慣れているので怒る人はいなかった。むしろニツと笑い、私たちは次々に崖に駆け上がって行く。

「もちろん」

「ふふうん。皆短パン穿いてるし準備万端だよ」

「いつもの訓練に比べたら余裕余裕」

「こんな崖なんて足止めにもなんねーって」

「とのことですが烏間先生」

先陣を切って崖の上に登った浅野君が烏間先生をチラリと見る。ふと浅野君の威圧が和らいだ。

「指揮をお願いします」

「俺たちからも頼みますよ。崖を登るような訓練は何度もしたことあるけど、未知の場所で未知の敵と戦う訓練はしたことないので」

磯貝君が浅野君の言葉に続けて言った。

「ツレにふざけた真似したんだ。落とし前はキツチリ付けてもらわなきゃな」

おっ、寺坂君が男前だ。カッコつけているだけだけど様になってる。

「ご覧の通り、生徒たちはやる気満々です。ここにいるのはただの中学生ではない。貴方が手塩にかけて育てた14人の特殊部隊ですよ」  
殺せんせーの表情はここからではよく見えないけど、声色はいつもと同じく教師のソレで、今日は見習いに教える師匠のように思えた。



「時は金なりですよ?」

鳥間先生はそんな殺せんせーの言葉に3秒ほど口を閉ざした。そして覚悟を決め、声を張り上げる。

「注目! 目標は山頂ホテル最上階。ミッションは隠密潜入からの奇襲。ハンドサインや連携は訓練のものを使う! いつもと違うのは標的のみだ」

「今律がマップを送った。3分で叩き込め! 19時50分作戦開始!」

「「おう!!」」

皆は一斉に鳥間先生に同じくらい大きい声を返す。

私は崖を速く登るのが得意じゃない。慣れれば大丈夫だと思うけど、慎重に行くのが1番だと思う。

「不破さん不破さん。気になることって?」

岩を登っている最中、渚ちゃんがわざわざ隣にやって来て尋ねた。彼女程の実力者なら先頭ら辺に居てもおかしくないのに、ここにいるってことはよっぽどさっきのことが気になったってところかな。

私は躊躇ったがいくら疑っているとはいえ、度々危険な目に遭っている渚ちゃんには言った方がいいと判断して自分の考えを打ち明けた。渚ちゃんはしばらく黙って聞いていたが、全て聞き終わると納得したように頷く。

「うん、不破さんは正しいと思うよ。いいこと教えてくれたからここはフェアトレードってことでわたしも情報提供するね」

「犯人はきつと殺し屋を4人雇っている。って、これはただの憶測だけだ」

渚ちゃんは「ごめんね、大した情報持っていないくて」と謝った。

「あつ、でももう一つだけ。不破さんの言う通りなら、監視カメラは仕掛けられていないんじゃないかな」

多分、情報提供というのはこつちが本命だったみたいだ。その証拠に渚ちゃんの目は確信に満ちていた。

「何で?あの状況なら絶対味無いから」

「うん。でも意

渚ちゃんはぞっとするほど美しい笑みを浮かべ、髪留めのピンを撫でた。

「監視カメラなんて仕掛けても、意味無いから」

「どういう、こと？」

「でもそれが本当なら………本当にその人が犯人ってことは――」

渚ちゃんの顔が険しくなった。口にしたくないのか、それとも口に出せないのか、その先について口を閉ざす。

「まあいいや。後で話そっか」

淡い微笑を浮かべ続け、渚ちゃんは崖の上にある扉に目を向けた。

「今はコツチに集中しないとね」

渚ちゃんの言い方と、彼女の真剣そのものな表情に私は律の言葉を思い出した。

ヤバい。

見つけちゃった、私の主人公。

## 毒の盛り方のはなし。

ベタな推理漫画の法則に推理を解決する前に犯人を出さなければならぬと言っているのがある。その犯人というのがこの場合、ウイルスをE組に持ち込んだ相手  
—— 仮にXとでもしておこう。

ウイルスの効き目がどの程度の時間で表れるか不明だけど、Xが行動に出たのはこの島に来てからだと考えられる。そして感染力の低いウイルスであることを考慮すると飲食物混入の可能性が高い。皆と一緒に食事をして同じ物を食べたのは島に来てからだ夕食の一回きり。その時三村君と岡島君は席を外していたし、私は出された食事を全部食べた覚えがある。

それではウイルスはいつ、どこで混入されたのか？

そこで私は感染者と非感染者を分別してあることに気がついた。ほとんどの非感染者は昼間、ビーチバレーに参加していたことに。

そしてビーチバレーに参加していない生徒たちが共通して手に入れたのがトロピカルジュースだ。私はマンゴーが苦手でそのドリンクを飲んでいないし、思えばあのホテルの従業員の顔はあの後見ていない気がする。

従ってXはホテルの従業員のフリをした男となる。

「ウイルスが盛られていたのはトロピカルジュースで間違いないと思う。渚ちゃん飲んだ？」

上にいる渚ちゃんに呼びかける。あまり意識していなかったけど、今日の彼女の服装は下に履いている短パン以外は黒一色だ。女子会とかで会う時は白が多かったから不思議な感じはする。渚ちゃんは少し考えこむように視線を上げ、首を振った。

「トロピカルジュースかあ……わたしとカエデはトイレ行って飲み逃したんだよね」

「なるほどね。ますます確実になってきた」

残った皆が戦闘向きなわけだ。バレーに参加していたクラスメイトたちはクラスの中で運動ができる方のグループに所属する。そん

なクラスの訓練成績上位層からしたら崖を登るのは鳥間先生の訓練に比べたらいと容易く、イージーミッションだった。

皆も言葉には出さなかったけど、息切れしている生徒が1人もいないことに加え、「裏山の崖のがキツイ」なんて発言も聞こえる。

「まっ、鳥間先生だけ別のミッション受けてるようなもんだけどな」

磯貝君が教師3人に向かって目を向けた。完全防御状態の殺せんせー、ハイヒールで登れないビッチ先生、と内2人は既にミッションに失敗している。そんな2人を背負う鳥間先生は既に怪人か何かだと思ふ。

「渚ちゃんは浅野君の所に行かなくていいの?」

「え、何で?」

何でって。それは何でそんな事を訊くのって方の何で?それとも何で浅野君の所に行かないといけないのって意味?

質問に質問を返されて返答に戸惑った。渚ちゃんはあっさりそれを見破って、すぐに言葉を繋ぐ。

「わたしから離れない方がいいと思うよ。知り過ぎていると誰に襲われてもおかしくないから」

「それは渚ちゃんだって一緒でしょ?」

それに、知り過ぎているからって誰かに襲われることなんてないよね。私が自分の推理を打ち明けたのは渚ちゃんだけで、渚ちゃんが言わなければ誰かに知られることもないはずだ。

「慣れてるんだ、こういうの」

慣れちゃっていいものなの?

私は一歩先に崖の上に辿り着いた渚ちゃんを尊敬とも同情とも違った目で見つめ、自分も上に登った。ドアは浅野君によってとつくに開けられている。

「意外と遅かったな、渚」

浅野君が私と渚ちゃんを見比べて言う。

「不破さんと話してたからゆっくり登ってきたんだよ」

「そうか。さつき体調悪そうだったし、不破さんは無理せず後方待機してほしい。渚も付き添うんだろう?」

浅野君の気遣う発言に「ありがとう」と返す。生徒会長は一生徒の体調にもすぐに気がつくらしい。普段は厳しいのにこういう時はツンデレなのか?!と言いたくなる。

「うん、必要になったら呼んで」

「そうだな。渚には後で話を聞こう」

浅野君が本校舎で見せる爽やかな胡散臭い笑みで渚ちゃんの視線を捉える。うっと言葉を詰まらせ、私を隠すように立つ渚ちゃんはやや疑ってくださいと言わんばかりだ。

「おおよそ予測は付いているが。犯人の目星がついたんだろう」

「……………何も言っていないのに何か色々バレたっぽい。絶対優しさもフェイクだ。」

テレビ局を彷彿させる廊下をしばらく進むとロビーが見えてきた。ホテルなら警備がいてもおかしくないけど、このホテルはその数が多  
い。

「さて、どうやってここを潜り抜けよう」

「倒すにしても人数が多いな。客のふりをするという手もあるが、バレたらすぐに捕まる」

浅野君と烏間先生が2人して意見を出す。ビッチ先生は2人の言い合いをどこかつまらなそうに見ていた。

「全く、本当に頭が固いわね男は。普通に通ればいいじゃない」

「普通について……………そんな簡単に言うなよ」

ビッチ先生は徐にワイングラスを1つ手に取り、少し傾けた。

「だから普通によ」

よろつきながらビッチ先生は歩き出した。

「おいっ—————「だめだよ」」

躊躇わずにロビーに入るビッチ先生に烏間先生が思わず呼び止めそうになった。それを渚ちゃんが引き止める。

「あんまり分かんないけどさ、あれでもプロなんだよ、ビッチ先生」

「あら、ごめんなさい。部屋で悪酔いしてしちゃって…………」

ビッチ先生の声が微かに聞こえる。警備の人たちがビッチ先生に夢中になるのに時間はかからなかった。

「なんかピアノの方向行ったけど……大丈夫なの？」

「ビッチ先生、ピアノはプロと同レベルだからピアノニストのふりでもしているんじゃないかな？」

渚ちゃんの言う通り、ビッチ先生が弾き始めた瞬間からもう警備員たちはそれ以外を視界に入れるのを止めた。ほとんどの警備員が近くに集まっていき、ロビーから別の通路へ行くための警備がいなくなっていく。

一曲が終わるとビッチ先生がハンドサインで「20分稼いであげろ」と送る。あの様子だと20分どころか2時間は余裕がありそうだけども。

鳥間先生がその先の廊下に1人で歩き出した。誰にも見られなかったことを確認して、私たちに付いてくるよう手招きする。

「ビッチ先生凄いね！あんなにピアノ上手いなんて知らなかった」

「ほんとほんと。相変わらず渚ちゃんは何でも知ってるよね」

「ええっ、わたしそんな情報通じゃないよ?!」

さつき知り過ぎているのに慣れてるみたいなこと言っていたのに……

私は苦笑いして情報通という言葉に頷く。渚ちゃんの交友関係から自然と情報が集まってくるんだと思う。きっとそれだけじゃないけど。

「渚、そういえば今日は持ってきているのか？」

「これのこと？」

渚ちゃんは斜めがけにした黒いバッグに目をやった。ワンピースと同じ色だったから気づかなかったけど、それなりの大きさはある。

「それもだけどほら、前にもこんなことあっただろう」

浅野君は懐かしそうに言ってから失言に気づいて顔をしかめた。自分で自分に苛立ったような、まるで苦虫を噛み潰したような顔をしている。

私がいる前では話しちゃいけない内容だったのかな？

「あ、ほんとだ。今の状況はちよつとあの時に似てるよね。あの時は学秀いなかったけど」

渚ちゃんがそんな浅野君の様子に気づいているのか気づいていないのか楽しそうに話し、浅野君は眉の片方をピクリと上げた。

「……………どこまで話せるのか悩みどころだな」

「？」

「さて、入り口を抜けさえすれば後はこっちのものだ。ここから先は客のフリが出来るからな」

「客？中学生がこんなホテルに泊まるんすか？」

菅谷君がもつともな意見を述べる。

「聞いた限りだと結構いる。そのほとんどが芸能人や金持ちの子息だ。ここは彼らが薬や酒をやるにはうってつけの環境なのだろう」

鳥間先生がぐつと拳を握りしめた。政府関係者として、本当ならば取り締まりたいに違いない。今は極秘で潜入しているのでそんなことはできないけども。

「そうなんです。だから君達もそういう輩になったつもりで……………そうですね、世の中ナメてる感じで歩いてみましょう」

殺せんせーのアドバイスに私たちは互いに顔を見合わせた。

でも案外乗り気になり、ふざけたような顔と喧嘩を売るような目つきをワイワイしながらやり出す。

「でもきつと敵から見たら丸分かりだね。わたしたちの顔知っていると思うし、鳥間先生の事を聞いていないわけがないし」

「ああ」

渚ちゃんがぼそりと言って、浅野君が頷く。この2人は何というか、この状況に慣れている。落ち着いているとかいうレベルじゃなくて本当に慣れているんだ。

「銃が手に入ったらすぐに任せていいかな」

渚ちゃんが速水さんに尋ねた。

「え……………うん」

速水さんが渚ちゃんから目を逸らす。千葉君も浮かかない顔をしていて、どこか落ち着かない。こっちのカップルは普段落ち着いているのに今日は様子がおかしい。

私たちが行く方向とは反対に歩く2人の男に警戒しつつ、絡まれる

どころかこちらを見すらしないことに安心した。

「向こうも関わりたくないんだろうよ」

そう言われて納得する。中学生とは言え、裏にどんな大物の親が待機しているか分からない。下手に刺激して痛い目は見たくないのだ。

「先行こうぜ」

寺坂君が余裕ありげに烏間先生を追い抜かす。反対側から口笛を吹きながら男が歩いてくるのが見えた。顔を見た瞬間ハッとする。

「その男危ない！」

「……………」

渚ちゃんの目がその男を捉えた。烏間先生が寺坂君たちを掴んで後ろに追いやった。だから渚ちゃんが前に進んで行ったことに気がつかなかった。

男は口と鼻を隠し、何かに備えた。その何かが毒であることに気づくのに時間はかからなかった。

男の視界には烏間先生しか入っていなかったように思う。2人の中学生男子たちは烏間先生によって後ろに投げ出されたし、生徒たちは私の一言で後方に退いたからだ。だから想像もしなかった。

まさか、ただの女子中学生が毒ガスを恐れずに男の後ろにいるなんて。

毒ガスの煙が晴れると、多分だけど男は油断した。烏間先生に毒が効いたことが確認できたからだろう。それが敗因だ。

「なっ」

渚ちゃんは何処からともなく現れた。少なくとも男はそう思った。渚ちゃんを認識した時には男の首には小さなお菓子の箱が突きつけられていた。気づいた時にはもう遅い。既に電流は流れた後で、渚ちゃんの笑顔を最後に男は気を失う。

え……………何今の？

まさか

スタンガン?!

「お見事です、渚さん」

信じられないと私たちが驚く中、律の声が渚ちゃんのスマホから飛



び出した。驚く渚ちゃんの横でカルマ君が渚ちゃんの代わりに嬉々として気絶した男の確認を行っている。

「律！もう潜入しているの？」

「はい。イトナさんに連絡お願いします」

渚ちゃんが電話の通話ボタンを押す。

『もしもし』

イトナの声がスピーカーを通して流れてきた。

「イトナ君、スタンガンの威力は十分だったよ。だから売り出してもいいと思う」

話す内容そこからなの？

もうちょつと近況報告として何かあるだろう。確かにスタンガンは今使ったし近況報告としては良いかもしれないけど。

『そうか。後で威力について詳しく教えろ』

イトナは嬉しそうな声色で「アレは頑張ったんだ」と語る。話を要約すると浅野君の挑発で砲台や偵察機以外の物を作ることにしたのだという。その時に前に渚ちゃんを殺しかけた（演技ではあるけど）お詫びでスタンガンを作ったあげたのだそう。

「お前ら今何処にいるんだ？」

菅谷君が話を遮って尋ねる。

『今？ホテルの部屋だ』

「はあ?!?!」

律が鳥間先生のスマホから説明し始めた。

「ホテルを予約している客の情報をイトナさんの物に書き換えておきました。これでイトナさんは立派な客です。ちなみにその客とはホテルに行く途中に遭遇したので、眠らせてクレジットカードだけ拝借しました。子供が親のクレジットカードを使うなんてよくあることですし、暗証番号はすぐに分かりましたので」

……律が堂々と犯罪に手を染めている。でもそんな事ができるとは思わなかった。演技の下手なイトナのことだ、疑われて終わりだと思っていたんだけど。色々突っ込み所は満載だがひとまず皆形だけ納得している。

「それじゃあ律はどうやって入ったの？さすがに自販機が客なんて信じる人いない……」

茅野さんが「よね？」と渚ちゃんに確認し、渚ちゃんがこくりと頷く。

「イトナさんが自分の家にある自販機じゃないと安心して飲み物が飲めない」と

モジモジとスマホの画面で律が頬を染めた。生徒たちは苦笑いする。

「よく信じたなそれ?!」

「まあいるかもね。ホテルのサービスドリンクに毒が入れている世の中よ。自販機の飲み物に毒が入っていても誰も驚かないでしょ」

私が皆に今の殺し屋がサービスドリンクを配ったホテルの従業員と同じ顔をしていたことを告白する。自分の推理力に皆が感嘆するのは良い気分だ。

「ちなみに何階なんだ、そこは？」

鳥間先生はキリキリする頭を押さえながら言った。ちなみに足はさっきの殺し屋の頭を踏みつけている。毒で身体が動かしづらいのもそうだが、自分の生徒の常識外ぶりに頭痛がするに違いない。

「7階です」

そんな所にいるのか！

確か最上階のフロアは10階だから、目標地点までとても近い場所にいる。

「しかし、ここから先は階段があるため私本体が行くことは不可能かと。エレベーターでは10階には行けませんでしたし」

「ほんと何のためにそこまで行ったんだか」

「ホテル内の方がシステム管理がしやすいんですよ。皆さんにとって休憩ポイントにもなり得ますしね」

ゲームか何かか。

『とりあえず俺たちはここの部屋で待っている。皆が7階に辿り着いたら合流しよう』

「あ、切れた」

一方的に切られた渚ちゃんはお菓子の箱型スタンガンとスマホを小さいバッグに仕舞う。要らないと思ってスマホは持ってこなかったけど、スマホがあれば漫画が読めたのにと少し後悔した。とはいえ、崖を登る時点でスマホを持ってこれるのは渚ちゃんみたいに小さいバッグを持って来ていないと無理そうだ。

「あの2人だけ緊張感ゼロだな」

「しかも7階って確かVIPフロアだろ？」

生徒たちが口々にイトナ君と律について愚痴を垂れる。嫉妬と呆れが半々だ。

「くっ……先生がこんな状態じゃなければ2人のイチヤイチャをこの目で見に行くのに!!」というか見たいです！何のための夏休みですか！」

殺せんせーが下衆い発言をして周りをシーンとさせる。

「……………」

そうだった。緊張感無い奴はもう1人居た。

「1人だけ何されても安全なくせに！」

「渚ちゃん、ソレ振り回して酔わせろ！」

「にゅやー……っ!!」

クラスメイトの騒ぎにはあまり加わらず、学級委員長の磯貝君は彼らしく壁に寄りかかりながら歩く鳥間先生を気遣った。

「大丈夫ですか、鳥間先生」

「ああ。どうやら麻酔系統のガスだったようだ。身体に力が入らん」

立つだけでも相当の力が必要らしい。見兼ねた磯貝君が鳥間先生の片方に付き添う。浅野君も何も言わずにそのもう片方に付いた。後ろを振り返り、冷ややかな目で問題の2人を見やる。

「寺坂、吉田。先走る行動は控えろ。自分を殺しかけるか他人を巻き込むだけだ」

2人は罰が悪そうに俯く。鳥間先生が毒にやられたことで戦力が大幅に減ったためだろう。

「先頭を歩け。その身を以て鳥間先生の役目を知るといい。どうせお前たちもイトナに貰ったんだろう？」

「ああ、持ってる」

浅野君は満足そうに頷く。かと思えば不安げに渚ちゃんを一瞬視界に入れ、すぐに目を逸らした。

「もうさすがに無いと思うが、全員毒に要注意だ。烏間先生でこの威力ということは中学生だと死ぬ」

浅野君が断言し、私は猛烈な違和感を感じた。あの人外な烏間先生でさえ、歩くのがやっと。だったら。

だったら渚ちゃんはどうだっていうの？

あの毒を至近距離で浴びたのに、何の変化も見せない渚ちゃん。彼女は平然と私の隣にいる。

この違和感に気付いたのは渚ちゃんにずっと注目していた私だけだったようだ。それは周りの渚ちゃんに対する反応を見れば明らかだ。

大石渚。やっぱり何かおかしい。

探り合いのはなし。

俺が戦闘で一番じゃないことぐらい知ってた。いつも力半分で訓練を受ける片想いの相手が実は凄く強いことも。

でも流石にこれは酷いと思うんだよね。

一瞬で倒れた殺し屋と何のダメージも受けなかった渚ちゃん。近くで背中を丸めて毒による痺れに耐えている烏間先生と見比べると、現実味がなさ過ぎる。

要するに、

「学秀君……やり過ぎじゃね？」

自分にしか聞こえない程小さい声で俺は呟いたつもりだった。相手に尋ねるといふよりも、自身に問いかけるみたいに。しかし浅野学秀という男は案外地獄耳持ちだったらしい。

「言うな。分かってる」

本人は相当参っていた。眉間に皺が寄っているばかりか、さつきから無言で誰とも言葉を交わさない。誰も無言の圧力で声をかけられないというのが正解なのか。

周りに人が集まらないのは内緒話に丁度いい。

「まっ、今ので俺は学秀君のやりたいこと分かったけどさあ」

それを知っちゃうとあれだよな。俺は浅野学秀には勝てないって思い知らされるよ。次元が違い過ぎて。

学秀君はやつと落ち着いた表情に戻り、「余計なことしないでどうな？」と言わんばかりに俺を睨みつけた。

間違いなく誰かに告げ口したら社会的に抹殺されるだろうと予想。怖い怖い。

「何の話、カルマ君？」

茅野ちゃんが後ろからスツと話に入り込む。彼女の一言で周りのクラスメイト達が俺のことをちらちら盗み見ていることに気がつき、クラスメイトに先を急がせた。E組侵入メンバーの先頭に立っていた監視役も空気を読んで、クラスメイト達から離れた後ろを歩く。

「なーんか拍子抜けしたよ。あの浅野学秀が一体どんな手で好きな女子を手に入れようとしたのかと思ったら……」

言葉を溜めると、余計なお世話だとムツとした顔をされた。そういうゲスな方向に考えた俺にも非はあるけど、あれは疑ってしまう。実際、学秀君の行いが俺の告白を打ち消したのは本当のことだ。ただ、浅野学秀の根本的な活動理由が「好きな女子を手に入れるため」なのかと問われれば、俺は即座に違うと答えるだろう。恐らく、理由は……

「過保護なだけか」

渚ちゃんが変わった後も2人の距離感是对して変わっていない。むしろ微妙な距離感になっている気さえする。そもそも洗脳で相手を支配下に置きたいならとつくに付き合っているはずだ。浅野学秀が本気で悪い手段を使って狙いを定めたら、難攻不落の渚ちゃんでもすぐに落ちる。付き合っていないということはそれは目的じゃないってこと。

「二つの失態でよくそこまで分かるな」

ズボンのポケットに片手を入れ、学秀君は感心したように呟いた。「人の目論見を見破るのなんて簡単だからね。目的まで分かれば上出来なんだけど。ばれればれの嘘までついてさあ」

何がお前以外信用できないだよ。信用していたらわざわざ渚ちゃんを完全防御するような真似しないだろ。

腹が立った。俺を全く信用しない学秀君も、自分の行いが原因だったことも。修学旅行の一件は信用を落とすには十分だった。俺が売られた喧嘩を優先したから、そのツケが回ってきたのだ。俺はたった一度きりの信用を得るチャンスを逃してしまった。ただ、それだけの話。

「悪かったな。だが、保険程度には思っている」

肩をすくめる相手はさらりと俺を保険認定した。これが浅野学秀じゃなかったらとつくに殴っているところだ。ため息一つ吐き、知りたいことへと話題を変える。

「あつそう。で、確認なんだけど。今の渚ちゃんは無意識下で自己防

御に徹するようになったってことだよね」

麻酔ガスが皮膚からでも吸収できるなら、そのまま突入した時点で動きが鈍る。でも、殺し屋が口と鼻のみを隠している時点で麻酔ガスの効果は吸い込むことのみでしか発揮されないのだとしたら、息を止めさえすれば影響は受けない。普通の人間ならすぐにその判断をするのが難しいだろう。渚ちゃんはそれを一瞬で理解した。

殺せんせーの一斉暗殺の際にBB弾を避けられたのもそういう洗脳を受けていたから。渚ちゃんは小さくてすばしっこい。殺せんせーの動きをどうやって先回りしていたのかはまだ突き止められていないが、これは洗脳とは無関係だと直感している。

「俺の一件を忘れたのもある意味での自己防衛。自分が傷付くことを恐れたんだね。いや、さすが生徒会長の洗脳だよ」

ついでのように邪魔者を排除するところが特に。

「顔が全く賞賛していないが？」

「だってさ、おかしいじゃん。渚ちゃんの他の記憶まで奪ったのは何の為？」

「何の話だ」

誤魔化すように貼り付けた笑顔で返された。相手が俺がどこまで知っているのか把握できていないと見抜き、自分が優位に立った気分になる。

「とぼけても無駄だって。渚ちゃんは殺せんせーが三日月を破壊する前からそうなることを知っていた。未来予知ができるのかと思っていただけ、前に偶然『2周目』って言葉を聞いてさ」

2周目という言葉は想像以上に相手に突き刺さったようだ。想定できてもそこまで辿り着くとは思っていなかったのだろう。取り繕った微笑がだんだんしかめっ面になっていく同級生をもっともつと変化させたくて、俺は饒舌になった。

「そういうことなんだなって。渚ちゃんが俺と昔からの親友みたいなのも、殺せんせーを殺すのが誰かって聞いたなら泣きじゃくったのも、全部既に経験してきたからなんでしょ？ 殺せんせーが死んだ先の未来を見ているんでしょ？ 何でわざわざ渚ちゃんから知識を奪う

ような真似

腕をガシツと掴まれた。先に続くはずだった言葉を飲み込んで、手を振り払う。

「急に何？」

「そのこと渚には言っていないよな？」

「言っていないよ」

「ただ言われたくないんだよと心の中で悪態を吐きながら言う。

「そうか。絶対に言うな」

「わざわざ言うようなことしないけどさあ、理由だけ聞いていい？」

理由によつては本人にバラすから。

俺の真意を知らずに相手は渚ちゃんを洗脳した理由を語る。聞くのも面倒になるぐらい、胸糞の悪い勘違いを目の前で。

「洗脳する時に出した命令は「自分を守る」の1つだ。渚は今、自己防衛の影響で嫌な出来事は全部忘れてる。殺せんせーが死んだ時のこと。家族のこと。カンニングの濡れ衣をかけられたこと。親友だったクラスメイトに告白されたこと。1周目のことを忘れたのは自分を守る為だ。僕は渚にこれ以上嫌な記憶に振り回されて自己否定をしてほしくない」

「渚は今が1番幸せなんだ」

疑いが1ミリも混じっていない、完全にそう信じている様子に怒りが込み上げてくる。このクラスメイトは頭が良い。何たって人を洗脳してしまうぐらいだ。でも、人の感情については何も分かっていないのだ。

渚ちゃんがこんなことをされて幸せになれると、本気で思っているのだろうか。

「忘れて手に入る幸せって何？ 渚ちゃんは消極的だから、嫌なこと忘れたら明るくなつて幸せだとか、俺はそんなこと全然思わない。だってそれってさ、逃げてるだけじゃん。問題に立ち向かえなくなつてるじゃん。学秀君は渚ちゃんを助けているつもりなんだろうけど、渚ちゃんは忘れたことで痛みや挫折が無かったことになるんだよ。渚ちゃんはきつと人の痛みを理解できなくなる」



記憶を操作されるのはどんな気分だろう。良い記憶ばかりあって、それが当たり前の挫折がない人生なら生きる気力や目標が無くなってしまうんじゃないか。前の俺がそうだったみたいに。

「それでも、もう渚を苦しめたくないんだ。1周目で、渚は自殺したと言っていた。僕は2度目が起こってほしくない。初めてなんだ。誰かをここまでして守りたい、自分の近くにいて欲しいと欲が出たのは。そうだな、悪い。渚を苦しめたくないとか全部建前だ。僕はただ、渚を失うのが怖いんだよ」

「それが本当のことなのは分かった。でもさあ、それはこの前言ったことには繋がらないよね。脅されてるって、学秀君は確かに言っていた」

渚ちゃんに防御を固めたのも、洗脳したのも、脅している相手が原因なんじゃないの？

「何を、誰をそんなに恐れているのさ」

「そいつの正体を見てしまったのは偶然だった。渚が2周目なのをやけに危険視していて、目を離れたら殺してしまうんじゃないかと思っただ。だから僕は渚の記憶を消し、A組に行く代わりに渚の安全を保障する約束をしたんだ」

その話に納得しかけて、ふと担任の存在を思い出した。俺は前に自分と殺せんせーを殺そうとしたところを助けられた。殺せんせーが渚ちゃんが殺されそうなのを見逃すとは思えない。

「でも、殺せんせーがいるじゃん。あのタコ生徒思いだから生徒が死ぬようなことは絶対に許さないっしょ。そんな約束をしなくても殺せんせーが守ってくれると思うけど」

「それは逆の意味でもな。そうだろう？」

「……………まさか」

「E組の中にそいつはいる。気を付けろ」

急に気を張って、周りを疑うように見てしまった。何故かどこからか視線を感じる。追い討ちをかけるように目の前の学秀君は呟いた。

「厄介だぞ、触手持ちは」

「2人とも遅いよ」

明るい声に俺は現実には引き戻された。茅野ちゃんだ。

今の話を聞かれていた？

妙に良すぎるタイムミングに勘ぐるも、学秀君の落ち着いた様子にその考えを改める。

いや、聞いていたなら、こんな堂々と話しかけてこないよね普通。

「渚ちゃんは一緒じゃないんだ」

「その渚ちゃんに2人が遅いから見て来てって言われたの！律とイトナ君が浅野君に連絡したいことがあるみたいだよ？ 電話しても出てくれないーって渚ちゃんの方に連絡が来てる」

伝言役の茅野ちゃんから渚ちゃんの立腹ぶりが伺える。

「ああ、悪い。電源切っていたみたいだ」

スマホの電源なんて普通消さないだろ。

呆れた顔でポケットに入っていたスマホの電源を入れる学秀君を横目で見て、妙に引っかけかりを覚えた。気を取り直して前を向くと、クラスメイトが通路の先で固まっている。律の見取り図が正しければ、窓ガラスがあり見通しの良い廊下がその先にあるはず。立ち止まるということは障害があるのか。見えた人影に俺と学秀君は顔を見合わせた。

間違いない。殺し屋だ。

そう確信した時、ビシツという音がしてクラスメイト達が息を呑む。

こいつ窓ガラス割りやがった。

「つまらぬ。足音を聞く限り、強い者が一人もおらぬ。精鋭部隊出身の引率の教師もいるはずなのにぬ」

油断し切った顔と見下したような目線には見覚えがあった。数ヶ月前までの俺だ。でも少し違う。あの顔は奥の手がある用意周到な暗殺者のものだ。

「ふうむ。スモッグのガスにやられたようだね。半ば相打ちだねといったところか。出てこい」

出てこいと言われて、E組全員がどうするべきか迷った。俺は誰かに言われた通り目を閉じて、考える。

誰だって同じだ。俺だけが努力しているわけじゃないし、俺だけが強いわけじゃない。それに、俺だけが毒を隠し持っているなんてこともあり得ない。窓ガラスを割る握力と自信。いつも通りに闘ったら絶対負ける。

でもさ、俺は売られた喧嘩は絶対に買うんだよね。

だから俺は満面の笑みで相手に近づいて、ガラスに植木鉢を叩きつけた。

「ぬ、多くね？ おじさんぬ」

相手に言葉も発させずに、俺はそのまま続けた。

「っていうか

おじさんぬほんとにプロ？ 確かにそ

の腕力は凄いいけど、ガラスとかだったら俺でも割れるよ。そもそも力に頼りたいんなら武器を使った方が手っ取り早くね？ あ、素手でガラス割るぐらいだから、素手が武器とか？」

プロのプライドを傷つけながらも、殺し屋から情報を搾り取れるように言葉を選んで挑発する。欲しい情報は色々あるけど、まずは「相手が武器を持っているか」だ。

「身体検査に引つかからぬ利点は大きい。近づきざまに頸椎をひとつねり。その気になれば頭蓋骨もたやすく握り潰せる。武器に頼るのは雑魚がすることぬ」

「……？」

視界の端で渚ちゃんが小さく首を傾げた。何あの仕草かわいいと思いつつも、目の前の暗殺者の言葉の真意を読み取ることに集中する。

武器を持ってない、ねえ？

俺に視線を向ける殺し屋とそいつの言葉に反応した渚ちゃんを交互に見やる。

渚ちゃんは恋愛に関しては超が付く鈍感だ。でも人の感情や嘘はすぐに見破る。恐らく分かるのだろう。イトナが人を見て強さを見破れるのと同じように。俺が人とは違う異質さに気づくように。

だから今相手が言った言葉は嘘だ。

相手は確実に武器を、切り札を持っている。素手しか使いませんってアピールも嘘八百。力自慢は本当だろうけど、仮にも殺し屋だ。手段を選ばず、確実に相手を殺す手を使ってくるはずだ。

まっ、それは俺も同じだけどさ。

ポケットにはマスタードとワサビ。ブーツ・ジヨロキアに臭過ぎて周りに使用を禁止された悪臭爆弾もある。そしてさつき盗んだ――

三日月みたいな笑みを浮かべた。相手のことを格下としか思っていない演技をして、挑発を重ねる。ヤンキー狩りと同じだ。向こうが餌に乗らなければ始まらない。

「こういうのはさあ、タイマンで蹴り付けようよ。それとも――

「中坊とタイマンをはるのも怖い人々？」

相手の目が鋭く俺を睨みつける。

こっわー。でもこうでもしなきゃ、あんた俺と闘おうとも思わないでしょ。

「いいだろう。試してやるぬ」

殺し屋は植木鉢の木をぐしゃりと握り潰した。彼なりの挑発なのだろう。それとも窓ガラスを割った範囲の大きさが植木鉢を使った俺のが大きかったから、武器に対して張り合っているのかもしれない。

「柔い。もつと良い武器を探すべきだね」

「必要ないね」

武器を持って闘うつもりは全くない。何せ相手は頭蓋骨を握り潰すほどの握力を持っている。対先生ナイフ、銃を含め、中学生が持て

る武器は全滅だ。だから俺がやることは逃げるだけ。

頭蓋骨でも握り潰すのだろうか、相手の手はまっすぐ頭に向けられていた。一度掴まれたらゲームオーバー。普通に考えて無理ゲーだけど、立場が逆なだけでマツハ20のタコ相手にいつもやってるんだよね。

もちろん、このまま永遠に逃げ続けていたら決着はつかない。相手もそれに気がついたのか、動きを止めた。

「……どうした？ 攻撃しなければ永久にここを抜けられぬぞ」

「それはどうかな？ あんたを引きつけるだけ引きつけといて、その隙に皆が少しずつ抜けるのもアリだと思って」

嘘だけだ。

相手の目がスーッと細まる。明らかに疑っている顔だ。ポケットの中からあるものをそつと抜き取り、握りしめる。そして真剣そのものな顔で言った。

「安心しなよ。そんな狡い真似はしない。今度は俺から行くからさ。あんたに合わせて正々堂々、素手のタイマンで決着つけるよ」

俺の言葉に寺坂が顔をしかめ、渚ちゃんはそのつと目を伏せる。なんて酷い味方の疑いっぷり。逆に殺し屋は俺の言葉を気に入ったように薄っすら笑みを浮かべていた。

「良い顔だね、少年戦士よ。お前となら暗殺稼業では味わえないフェアな闘いができそうだね」

俺は相手に向かって駆け出した。すぐさま腕に蹴りを入れるも大したダメージはない。続いて肩に向けて殴りかかると避けられた。避けられるや否や、足に蹴りを食らわせる。

「くっ……」

相手は足の痛みで一瞬しゃがみこんだ。背中を見せているし、攻撃のチャンス……のように見える。俺から言わせれば、「おじさんぬ腕殴った時大したダメージ無かったのに、足だけ痛がりすぎじゃね？」とツツコミを入れたいところだ。でも気づいていないフリをして、俺は息を止めながら相手に攻撃しに向かった。

案の定、殺し屋は麻酔ガスを手に取り出して俺の顔に浴びせる。目

に麻酔ガスの使い方を焼き付け、俺はその場でわざと身体のを抜いた。

「二丁上がりぬ」

「き……汚ねえ。そんなもん隠し持つといてどこがフェアだよ」

心の中で同意する。わざとミスリードを誘う言い方で素手の勝負をしておいて、最終的に麻酔ガスを使うのかよ、それでいいのか殺し屋と言いたい。

顔だけ掴んでこちらを見ていない殺し屋の目を盗み、手に握りしめたハンカチを口に当て、もう片方の手で俺の切り札を用意する。

「俺は素手だけとは言っていないぬ。拘ることに拘りすぎない。暗殺稼業で長くやっていく秘訣ぬ。至近距離のガス噴射。予期していなければ絶対に防げぬ」

相手が勝利に酔いしれてフツと笑う。口を大きく開けているに違いない。

今だ!!

俺は殺し屋目掛けて麻酔ガスを噴射した。

「な、なんだと……!」

「奇遇だね。2人とも同じこと考えてた」

身体を痙攣させながら、殺し屋はナイフを胸の内ポケットから取り出す。やっぱり素手以外も色々武器は持っていたようだ。でもそれも今更。俺の勝利は覆らない。

「ぬぬぬううう!!!」

ナイフを持つ腕を捻り、背中に飛び乗る。

「ほら、寺坂早く早く。ガムテと人数使わなきゃこんな化けもん勝てないって」

「へーへー。テメーが素手でタイマンの約束とか、もつと無いわな」

耳をほじりながら言う寺坂に「うっさいなー寺坂のくせに」と小さく呟いた。

さすが寺坂。いつも俺のイタズラ対象になっただけあってよく理解している。

「縛る時気を付けろ。そいつの怪力は麻痺していても要注意だ。特に

手のひらは掴まれるから絶対に触れるな」

「「「はい」」」

鳥間先生の注意に俺たちは声を揃えた。

「何故ぬ?! 俺のガス攻撃……お前は知っていたから防げた。俺は拳しか見せなかったぬ。何故?!」

「いやー、ね? あんたが素手の闘いをしたかったのはほんとだろーけど、素手の勝負に固執してたらあつという間に逃げられちゃうっしょ。何が何でも俺らを止めなきや、プロとして失格だよ。俺でもそうしてる。俺はあんたのプロ意識を信じたからこそ、素手以外の全てを警戒していた」

「完敗だぬ、少年戦士よ。負けはしたが、お前との勝負は楽しかった」

「え、何言ってるの? 楽しいのはこれからじゃん」

ポケットや服のあちこちからマスタードや辛子、それ以外の悪戯グッズが飛び出てくる。殺せんせーが「将来が思いやられます」と呆れたように呟く。

「うおおおお!!」

「ふふっ、おじさんぬ。今こそプロの意地の見せどころだよ」

わさびと辛子を鼻に突っ込まれて叫び声を上げる殺し屋に俺は笑みを深めた。

\*

結局おじさんぬが命の危機を感じて寄越した情報は3つ。殺し屋はあともう2人いること。殺し屋は金で雇われているということ。殺し屋の名前。

毒使いのおっさんがスモッグ。おじさんぬがグリップ。残った殺し屋がガストロとエンジェル。ガストロはガストロノミーから来ているんだろうけど、正直どんな暗殺をしてくるのかは全く予想が出来ない。それはエンジェルも同様。何となく、エンジェルなんてコードネームを付けるのは女の暗殺者だという気がする。っていうか、エンジェルって……

渚ちゃんに目を向ける。

， 学問の天使，

， A組の天使，

， E組の墮天使，

全て彼女の固有名詞で、櫛ヶ丘中学校で天使と言えば大石渚、大石渚と言えば天使と言う程結びつきがある呼び名だ。

「渚ちゃん的にはやっぱり一番気になるんじゃない？ 同じ呼び名を持つ暗殺者」

矢田さんの言葉に、渚ちゃんは曖昧に頷く。そこまであだ名に執着はないのだろうか。

「それにしてもVIPフロアか。警備を潜り抜けるのが厳しいね」

「いや、女子にはチェック緩いらしいよ。だから女子だけ先に入って合流すればいいんじゃないかな？」

「うちのクラスの女子を侮ってるわけじゃないけど、男がいた方が安心じゃん」

でも男が多すぎると通るのが難しくなる。

「イトナ君ってさ、女装似合いそうだよな」

胸がないことに対してかわいそうと言われたからか、茅野ちゃんのイトナへの印象は酷いものだ。貧乳女子に嫌がらせをするのは止めよう。そう俺は誓いそうになった。多分、またやるだろうけど。

「なるほどね」

俺は茅野ちゃんの視線を追う。彼女の視線の先にはプールサイドに脱ぎ捨ててある女物の服があった。



女装のはなし。

浅野から連絡が入った。

『律は7階の警備をどこか別の場所に誘導しておいてくれ。イトナは6階のラウンジで合流。VIPフロアの客とはいえ、大人数を連れて行くのは怪し過ぎる。女子たちと一緒に店内から裏口のカギを開けるのを手伝って欲しい』

ずっと部屋に引きこもってるわけにはいかないと思っていたから、手伝うのは当然だ。だから浅野の要請を受けて、すぐに6階のラウンジへと向かった。

何でだ。どうしてこうなった？

肩が出る黒い女物の服——律によると紐付きオフショルダーと言うらしい——と赤いチェックのスカートを履いた俺はどこからどう見ても女だった。呼び出された時は何事かと思ったが、こんなことのために呼び出されるんだったら部屋に引きこもっておけばよかったと俺は後悔する。

「イトナさん、凄く似合ってます。とても可愛らしいです！渚さん、スマホをもう少し右に動かしてください！」

純粹なモバイル律の言葉が凄く胸に刺さる。渚のスマホからはカメラのシャッター音が鳴り続けていた。律が渚に頼んでスマホで写真を撮っているのだ。モバイル律にこうも女装の写真を撮られると複雑な気分になる。

「早く行こう。こんな写真はつきり撮ってるのはおかしい」

俺の言葉に女子たちはそんなことないと言を振った。

「むしろ女子はよく撮るよね」

「そうそう。せっかくだし、皆で自撮りも撮ろっか！」

矢田の言葉で画面の前で女子たちがポーズを決める。テンションについて行けずに俺だけ微妙な無表情のまま画面の中の俺たちがフリーズした。俺以外の女子たちが自撮り効果で1・2倍ぐらい可愛く見える。

「よく撮れていますね！E組のグループチャットに送っておきます」

「律、裏切るな」

「律は自慢の彼氏の可愛いところを皆さんに見せびらかしたいだけです！」

スマホの中でここにこと機嫌が良さそうなモバイル律を見ていると怒りが吹っ飛んだ。癒されたというより、常識外さに力が抜けたという方が正しい。

彼氏が可愛いのを自慢してどうするんだ。

グループチャットに集団自撮り画像が送られてきた。グループチャットの通知とは別で浅野から新着メッセージが届いているのが目に入る。渚についてこれなくて俺に嫉妬したか。どんなことを言ってくるんだか。

俺は浅野との個別チャットを開いた。

浅野学秀：渚にナンパしたやつは殺してもいいからな

まさかの殺害依頼。

これは浅野のやつかなり怒ってるな。そんなに渚について行きかけたんなら自分が女装すれば良かったのに。

俺が同行することになって良かったんだろうなとも分かる。これがカルマとかだったら即座に処刑宣告されていたに違いない。彼女持ちなら浅野の監視が外れても馬鹿な真似はしなないと思っただろう。

律と付き合っただけでも、胸のサイズから言っただけ渚は恋愛対象には入らないのに心配症な奴だ。

「だいたいどこにあったんだ。こんな女物の服一式」

「外のプールサイドに捨ててあった。服の持ち主がどこに行ったのかは知らないけどね」

と片岡が顔をしかめる。

「返す時に困りますよね。監視カメラの映像から特定することも可能です。実行しますか？」

無邪気に尋ねる律だが、その監視カメラに服の持ち主が脱着をしている映像や、それ以上のものがあつたら困るので俺は首を振った。律に学習させたら大変なことになる。

「やめとく」

「はーあ。やだやだ。こんな不潔な場所、さっさと抜けたいわ」

不破は口ではそういうものの、実際楽しんでいるのが丸わかりだった。渚もすぐに気がつきそれに指摘する。

「その割には楽しそうだね、不破さん」

「ね、どっから来たの君ら」

渚の肩に同じ年ぐらいの男が手を置いた。ダサイTシャツにダサイ帽子。ナンパ慣れしているが、モテないタイプの男だ。そう分析する。

「そつちで俺と酒飲まねー？金あるから何でも奢ってやるよ」

未成年なのに酒というワード。更に金あるからという発言に女子たちは無言で軽蔑の表情を見せた。渚もどう断るべきか迷っているようだ。俺は浅野からのLINEを思い出して、こいつを殺すのかとじろじろと見てしまう。

「はい、渚ちゃんとイトナ。相手しといて！」

「は？何で」

「イトナがいるなら渚ちゃんも安心でしよ。作戦の下見が終わったら呼ぶからさ」

片岡が小声で耳打ちする。俺は頷くしかできなかった。片岡にはクラスに馴染むために何だかんだ世話になっていることもあり、頭が上がらないのだ。

「渚ちゃんとイトナちゃんか。俺、ユウジな。よろしく」

「うん、よろしくね」

渚がよそ行きの笑顔で言った。

「えーっと、ビール3つ」

ユウジが店員に頼むのを渚が制止する。渚も俺も法律違反をするつもりはないのだ。

「わたしたちお酒苦手だから、リンゴジュースでいい？イトナく……ちゃんもそれでいいよね」

「ああ」

イトナ君と言いかけた渚がちゃん付けにして誤魔化す。気色悪いと思いつつ、自分の名前は女でも通用することに初めて気づき、どっ

と落ち込んだ。女装する候補に選ばれるわけだ。

テーブルの上にユウジによってリンゴジュース2つとビールが並べられた。りんごジュースにはストローが付いていて、子供扱いされているみたいだと思う。だが、ユウジはそこが良かったらしい。

「ここでリンゴジュース頼む女子初めて見たわ。やっぱいいな〜君。しかも今まで会った女子の中で1番可愛い。ここに来る女はみんな化粧濃いから新鮮だわ。そっちの君も……うん、ボーイツシユでいいよね」

言われ慣れた贅辞なのだろうが、渚は少しだけはにかんだ。俺は笑顔と真顔の間の微妙な表情をする。本当は女装だからというのもあるが、今の俺への贅辞は無理やり付け足したのだろう。そういうお世辞と本音の微妙な違いが分からないモバイル律がスマホのロック画面に「そうですよね！今のイトナさんはとっても可愛いんですよ」と表示するが、俺にはすぐに分かった。男目線で見ると、ユウジの可愛いには「少女らしい」「バージンっぽい」って意味も含まれてそうでないやらしささえ感じる。さすがに渚は気づいていないだろうが。

「ユウジ君は親とか友達とよくここ来るの?」

「親?うちの親にそんな余裕あるか! ここだけの話、うちの親父、テレビで有名な司会者なんだ。2人とも絶対知ってるぜ。つーわけで、今日はクラスメイトと来たんだけどな。見事に全員お持ち帰りされちまってよ」

「あはは……」

おい、そんなぶつちやけ話して大丈夫かユウジ。渚が引いてるぞ。友達と来ただけに留めておけばいいものを、ユウジの口からはスルスルと愚痴っぽい何かが出てくる。アルコール入っているからなのだろうと納得した。しばらくユウジの話が続き、俺が飽きた頃、場違いなぐうという音が聞こえてきた。渚が顔を真っ赤にする。

「えっと、何か頼んでもいいかな? お腹空いちやって」

「いいよいいよ。好きな頼みな。ここホテルだから食べ物も揃ってるし」

渚は相手に奢らせるのが上手いなと俺は何故か巨乳教師の英語の

授業を思い出した。

英語の授業でデート中の英語を習っている時、異性同士で出かけたら奢るのかという話題が持ち上がった。前原は大体奢ると言い、磯貝は貧乏だから割り勘になってしまおうと言った。他の男子は割り勘に賛成のようで、男子ばかり奢らなきやいけないのは損だと語っていた。その雰囲気からか、女子はこういう意見が多いと割り勘が一番なんじゃないかと思っただけ。そんな中、渚と浅野があっさりと言ったのだ。

『奢ってくれるなら奢ってもらおうかな』

『奢りたい時だけ奢ればいい』

巨乳教師によると、それが模範解答なのだという。要するに「してもいいし、しなくてもいい」という投げやりな考えだが、彼女なりの理由があるらしい。

『男女平等とかもあるし、あんたらみたいに割り勘を望む男も多いのが現状よね。それでも良い女が目の前に居たらその先を期待して奢る男の多いって知ってるかしら？ だから女子は奢ってくれると言うのならありがたく奢られなさい。特に「奢る」と先に宣言している男は「奢らせてくれ」って言ってるようなものだから、奢らせればいいのよ。逆に男は前原みたいにいつも奢るんじゃないかと、興味のあがる相手に奢るの。「奢りたい」って思わない相手に奢るのは気分的にもお財布にも優しくないでしょう？ 「奢る」っていうのはね、相手と仲良くなりたかって示すことなのよ』

全て英語で言われた言葉を律が訳してようやく俺は理解した。俺には一見関係のない話ではあるが、ゲームの課金と同じようなものだろう。好きなゲームの時はガンガン課金するし、課金するほど面白くなければ課金しようとは思わない。課金はゲームクリアへの近道ではあるが、興味ないゲームにまで使うのはただの無駄遣いだ。

浅野みたいに1人に貢ぎコースを選択した奴とは違って、ユウジが毎回女子に奢っているのだとしたら大変だなと同じ男として同情する。

「ねえ、見て見て！ ここのミルクレープもあるよ」

渚の感激した声で現実に戻された。メニューを見ると俺まで腹が減ってくる。流石ホテル、クラブのような雰囲気なのにデザートが揃っていた。その中にある渚が指差したミルクレープは俺が好き。なスイーツの1つで、触手を取った後も磯貝が働くカフェでよく注文する。あそこは口止め料で割引してくれるのだ。

「ミルクレープいいな。欲しい」

「んー、わたしはシフォンケーキ、かな」

渚が懐かしむように目を細める。それだけで何を考えているのかわかってしまった。

「ミルクレープとシフォンケーキ？ どっちもまあまあ美味しいけど、ここで頼むならチーズケーキのがいいよ。ここのチーズケーキ、下の階のレストランのでき。口の中でふわっと溶けるって人気なんだ」

さっきまで金払いが良いだけのナンパ男だったユウジが渚と俺の言葉に反応して、チーズケーキをオススメする。オススメすること、これはミルクレープもチーズケーキも食べたことがあるということ。しかもオススメポイントが細かい。

ユウジ、グルメか。

渚と俺のユウジへの好感度が上がった。

「そうなんだ！ じゃあチーズケーキ食べよつと。イトナちゃんもだよね」

「うん」

「ユウジ君はいいの？」

「俺はいいや。これがあるから」

ユウジはタバコのようなものを取り出して、見せびらかす。タバコのようにも見えるが、形状が違い、パッケージもどことなく胡散臭い。未成年の飲酒がOKなこの場所だったら違法薬物も合法ってか。

グルメなユウジの好感度が一気にマイナスまで落ちていった。それは渚も同じのようで、眉をひそめて尋ねる。

「それ、タバコじゃないよね？」

「ああ、法律じゃダメなやつだ。最近始めてよ、俺らの歳でこういうの

知ってる奴がかっこいいんだぜ」

火を付けようとライターを取り出したユウジから渚がひよいつとタバコもどきの薬物を奪い取った。俺はライターを取って弄り出す。

「お、おい！」

「普通にダサイ。最新式のライターがかわいいそうだ」

と俺はライターをスカートのポケットにしまいながら言った。

「学校の先生が言っていたよ。「吸ってかっこよくなるかは分からないが、確実に生きづらくなるだろう」って」

渚はたしなめる口調で、ユウジに言う。その言葉はユウジを逆上させた。酔いが回っているユウジは怒りを募らせて、声を荒げた。

「生きづれーんだよ、男はもともと!!」

ビールを勢いよくテーブルに叩きつけて、中身が溢れる。渚がさつとりんごジュースの入った2つのグラスを手前に避難させた。

「男はよ、無理にでもカッコつけてなきやいけねーんだよ。俺みたくいつも親と比較されてりやなおさらな」

ユウジはぐびつと憂さ晴らしにビールを飲む。グラスがあつという間に空になった。

「お前ら女はいいよなく。最後にかっこいい男選ぶだけで良いんだからよ」

「うっ……」

渚が自分のことを言われたと思ったのか、小さく呻き声を上げた。渚にはあまり関係のない話のはずだが、本人はそうは思わなかったようだ。

何とも言えない沈黙の中、テーブルにチーズケーキが2つ届く。

渚が目キラキラさせて、フォークでひと口分を切り、口に運ぶ。

「このチーズケーキふわっふわしてるのにすぐ口の中で消えてなくなっちゃう。おいしく」

ほっぺたを押さえてチーズケーキに感動している渚にユウジは目が釘付けになっている。お酒を飲む場所でこんな風にケーキを食べる女子なんて渚ぐらいだろうし、癒される空間だ。こんな渚だから浅野も何度も奢ってしまうのだろう。

「ユウジ君は考え過ぎだよ。わたしはタバコ、みたいなやつを知っている人より、サラツと美味しいスイーツをオススメできる人がかっこのいいと思うな。イトナちゃんは？」

「かっこのいいなんて人それぞれだから、何とも言えない。それ吸ってるのはダサイが」

「イトナちゃんは相変わらず辛辣なんだね」

渚はくすくす笑いながらちゃん付けを強調した。渚は渚で俺の女装を面白がっているみたいだ。

茅野が店の奥の方から俺たちに向けて合図を送る。渚と俺はチーズケーキを素早く完食した。

「ごめん、わたしたちもう行かなきゃ。友達が向こうで待ってるから」  
渚が俺の手を引き店の奥に小走りする。

「え、もうっ？」

ユウジは惜しそうな顔で俺たちを追いかけて来た。

「待って2人とも。特別に、俺の十八番のダンスを見せてやるよ！」

ユウジ、さつきまでグルメで好印象だったのにぶち壊しだな。しかもダンスのチョイスが悪い。

女子たちが真顔で邪魔だと思っていることに気づかないのだろうか。俺がこんな顔されたら引きこもる自信がある。

ユウジは勢いよく手や足を動かし、ダンスを披露した。その手が強面の男が持つグラスに当たったのは、酔っ払っていて周りに注意を払っていなかったからかもしれない。

「……あ」

「このガキ……！」

ユウジが後ろを振り返ると、ワインをスーツに零した男がユウジを睨みつけていた。

「百万する上着だぞ！弁償しろ!!!」

「あ、い……今のはわざとじゃ」

「どこのボンボンか知らねえけどよ、人様に粗相したらまずごめんなさいだろ!! そんなのも分からないガキが酒なんか飲むな！」

豹柄の上着を着た男は意外とまともなことを言っている。そう俺



は思った。ユウジは自分がやらかしたことに反省しているというより、面倒なことになったと思っただけだ。きつとユウジは今までほとんど謝ったことがないのだろう。

矢田が何かに閃いて岡野に耳打ちする。

「お前が金で解決するってならそうだなあ……慰謝料込みで三百万。それ払えば半殺しで勘弁してやるよ」

「半殺し?! 金は親父が払うから殴るのは……」

男の頬に岡野の蹴りがクリーンヒットした。ユウジと渚が揃ってぽかんと口を開ける。片岡が気絶した男の頭を膝で受け止め、速水がその手助けをした。2人でゆっくりと床に男の頭を下ろし、突然気絶した男を偽装する。

「すいませーん、店員さん〜」

矢田はVIPフロアとラウンジの境目にあるドアの前で立っている店員を呼びつけた。

「あの人が急に倒れたみたいで……運び出して見てあげてよ」

「は、はい」

店員は「ドラッグのキメすぎか?」と不満気につぶやき、気絶した男を肩に乗せた。片岡が店員が運ぶ様子を見ながら皆を誘導する。

「今のうちに急いで!」

「さ、キミもフロア戻って。今の事、内緒ね!」

矢田がユウジにウィンクする。茫然と床にしゃがんだままのユウジは返事もしなかった。

「女子の方があっさりかっこいい事しちゃっても、それでもめげずにカッコつけなきゃいけないから……」

渚がユウジの目の前にしゃがみ込んで視線を合わせる。ぼんやりしていたユウジが正気に戻ると、渚の顔が目の前にあった。

「つらいよね、男子は」

渚は満面の笑みでユウジに言った。さっきまでの繕った笑みではなく、くしゃくしゃの本当の笑顔。その効果は絶大で、ユウジがまじまじと相手をよく見るのが分かった。ただのナンパ相手として見ていたのが、恋愛の対象に変わったのだ。

「チーズケーキありがとね。今度会ったらまたカツコつけてよ。できれば麻薬とダンス以外がいいな」

「渚ちゃん……」

「ダンスは微妙だったけど、チーズケーキは美味しかった。ごちそうさま」

俺はぶつきらぼうに、男っぽく聞こえないように最善の注意を払って言った。ユウジはガバツと顔を上げると、真剣な目つきで俺に訊く。

「ねえ、渚ちゃんのLINE知ってる？」

落ちたか。さすが渚。天然の人たらしだ。

「……………知っているけど教えたら殺される」

浅野からのLINEを思い出して苦い顔をする。ナンパ野郎に渚のIDを教えたなんて言ったら何が起こるか分かったものじゃない。

「え、じゃあどこ住み？」

「普通、住所は他人に教えない」

「せめて学校名だけでも！」

すがりついて必死に渚との繋がりを持つとうとするユウジが何だか不憫に思えてきた。俺だってこいつの立場だったら好きな子との繋がりが消えるのは絶対嫌だ。

「……………くぬぎがおか」

ぼそっと俺は名前を漏らした。

いいだろ、少しぐらい。

片岡が階段の前の裏口を開けて男子たちを店内に入れる。その中にいる浅野から目を背けた。

渚はいつか浅野を好きだって気がつく。少しぐらい邪魔が入ったところで決定的な事実を覆せない。

ユウジから離れて、E組のクラスメイト集団に交じるとカルマが鼻歌混じりに俺にスマホを向けてきた。

「撮るな」

「やーだね」

カルマに言っても仕方ないかと諦めて階段を上り始める。木村の

手の中にあるボール状態の殺せんせーは皆が無事に戻ってこれたことに安心しているようだ。いくらこいつでもこの状態では助けに來れないからだろう。

「危険な場所に潜入させてしまいましたね。皆さん大丈夫でしたか?!  
変な人に絡まれてませんよね?」

「んーん」

「大丈夫だったよ」

女子たちが口々に言う。渚が最後に付け足すように爆弾発言をする。

「チーズケーキ美味しかったし」

「チーズケーキ?」

浅野とカルマが揃って尋ねる。

「このチーズケーキふわふわなんだよ。甘いから学秀は食べられないけど、カルマ君は好きそう」

「財布持ってきてなかったよな。誰に奢ってもらったんだ?」

「男?」

カルマが浅野に続いて訊いた。

「女だ」

2人の殺意に当てられて俺は苦し紛れの嘘を吐く。

「何いつてるのイトナ君。ユウジ君はどう見ても男でしょ」

渚が空気を読まずに否定する。この2人の固まった笑顔を見てよくそんなことが言えるなど寺坂の後ろに隠れる。「何だよ、前行けよ」と同じく2人を恐れる寺坂の前に追いやられた。

「ユウジ……どこかで聞いたことあるな」

「イトナく、そいつについて知ってることがあつたら全部吐こつか。そうじゃなきゃ俺が間違えて全世界にイトナの女装写真公開しちゃうから」

「司会者の父親がいるぐらいしか聞いてない」

そんなことされたら社会的に死ぬ。

カルマの悪魔じみた脅迫を受けて、即座に情報提供する。

「ああ、そうか。特定した」

と浅野が言った。獲物を見つけた目をしている。  
特定早っ。

「なにになにく、学秀君の知り合い？」

「親同士が知り合いなだけだ。そうか、あいつが……ね」

浅野とカルマが何をしてやろうかといった顔に変わっていることに俺は恐怖した。ユウジは怒らせてはいけない奴らを敵に回してしまつたようだ。

7階に辿り着くと、皆は周りに人がいないかチェックした。どうやら意識がある人はいないらしい。

「律のやつ、ほんとに一掃したんだな」

俺は呟いた。

7階から8階に繋がる階段の前で無傷で倒れている男が2人。どちらも強そうで倒すのが難しそうだが、律の敵ではないぞ。

「部屋で着替えてくる。後で追いつくから先に行つていいぞ」

「そのままでもいいのにな！」

「モバイル律に言われてもな」

俺は渚のスマホの中から俺を止めようとするモバイル律に背を向ける。カードキーを使ってホテルの自室を開けた。周りが中を覗く前にドアを閉める。

「ただいま、律」

真つ暗な部屋に電気を点け、眠っていた本体の律を起こす。

律とほんの少し離れていただけに、顔を見ただけですごくほつとする。いつの間にか俺も渚みたいに律に依存していたのかもしれない。

「おかえりなさい」

画面上で律は天使のような笑みを浮かべていた。

銃のはなし。

今日も銃が美味い。

やっぱり銃のチョコがけは何よりも優っているな。チョコバナナとか、イチゴのチョコがけも不味いわけじゃない。ただ、銃が食の中で最強なのだ。美食家の俺が断言する。銃に勝るものはない。

チョコ銃をしゃぶりながら、監視カメラを見ていて妙な胸騒ぎを覚えた。

さつきから監視カメラに異常はない。変化が無さすぎる。日本人はお人好しの国だ。クラスメイトが死にかけているのに助けるのが日本人だと聞いている。

それに、”スモッグ”とも、”グリップ”とも携帯が繋がらねー。最初は電波がいかれてるのかと思ってたが、2人続けて起こると事件性を感じる。

ボスと2人だけの息苦しい空間もそろそろ飽きてきた。見に行ってくるか。

「あのっすね、ボス。見回りに」

「殺してやる殺してやる殺してやる殺してやる……」

目に包帯を巻きつけたボスは机の上に突っ伏したまま、ただひたすら同じ言葉を羅列した。気が狂ったのかと思いきや、ただの寝言らしい。いびきが聞こえるのがその証拠だ。

「ガストロさん。ボスは少し疲れているみたいなんだ。そつとしといてあげた方がいいよ」

中学生のような幼さの混じる声で、エンジェルが言った。エンジェルは俺らとは別のルートからボスが雇ったらしい殺し屋だ。こんな少女がと初対面では驚いたのを覚えている。

「年上には敬語使え」

どうしてこいつのが依頼主に優遇されてるんだと俺は相手に聞こえないようにぼやく。ボスの様子を見ようと近づき、異臭に思わず鼻をつまむ。

「お前、なんかこぼしただろう。スモッグが持ち込んだ毒か？」

「分かんない。間違えてボスがかけちやっただと思うな。大丈夫大丈夫。それよりガストロさん、見回り行くんじゃないの?」

どこも大丈夫じゃないだろと思っただが、一回の依頼限りのボスよりは何度か組んだことのある仲間のが大事だ。それにこのボスはどうも胡散臭い。

「あーそうだな。今から行く。何かあったら電話しろ」

「うん。片耳にイヤホン付けておいてね」

この仕事も不味くなつたもんだ。殺し屋のガキの相手に中坊どものお迎え。賞金はいいものの、見かけ倒しでやり甲斐がない。日本っぽい喻えだと餡の無い餃子。でっかいチョコのイースターエッグを叩き割った時に空洞ができてると同じ。その点銃ってすごいよな。最後までチョコたつぷりだ。

銃を咥えながらステージに上がり、俺は十数人の気配を察知して頭を切り替えた。

「若いのが12、いや13匹隠れてやがる。ほとんどが10代半ばか」  
慌てて口を押さえているところまで、簡単に想像できる。それにしてても……

「驚いたな。動けるやつ全員で乗り込んできたのか」

素直に感心した。ここまで来たことは監視カメラを欺いて、スモッグとグリップを倒したってことだろ。どこの手練れだよ。中学生がやることじゃねえ。

ふっと笑みが浮かぶのを隠すように後ろに銃を撃った。本音としちやあもう少し遊んでいたいところだが、相手を降伏させるのがボスの意向だ。

「言つとくが、このホールは完全防音で、この銃は本物だ」

軽く脅してやれば息を呑む音が聞こえてくる。

反応はやっぱり中学生だな。少し惜しいがここで完全降伏させときゃ俺が殺さなくて済む。

「お前ら全員撃ち殺しても誰も気づかねえ。どうせ人殺しの準備なんてしてねーだろ? 大人しく降伏しろ!」

銃を回転させながら脅し文句を言うと、銃弾が肩の上を通った。あ

と少しで当たる、ギリギリの距離だ。

は、実弾?! え、こいつら実弾持つてんの?!

待て、落ち着け。発砲音はM60……ってことはボスの手下をパクったのか!!

いーねえ。美味そうだ。

俺は舞台のライトを最大限まで点け、狙撃しにくい環境を作った。いつも通り流れるように銃の味見をする。

「今日も元気だ。銃が美味え!!」

銃声がした先に銃先を向けて発砲した。

軍人舐めるなよ。1度撃った敵の位置はすぐに分かる。悪いが2度目はない。

M60を持って7階の見張りしてたのは2人。そこから導き出される答えは簡単だ。

「もう1人、銃持つてる奴がいるな」

『だとしたらそれは千葉龍之介じゃないかな』

「お前に構ってやれるほど俺は暇じゃねえ、エンジェル」

片耳から少女の声が流れ込んできて顔をしかめた。

『酷いなあ。ガストロクさんのお手伝いに来たんだよ! こういうことも想定して、クラス名簿持つてるからさ』

「クラス名簿とか要らないだろ」

エンジェルの持つ情報は基本雑多で、スモッグがイライラしながら毒を盛るのに必要な情報を聞き出していたことを思い出す。エンジェル曰く、情報収集より戦闘のが得意らしく、ボスには触手が使えないことをアピールしたらしい。残念なことにそれは全く活かされていない。そもそも本当にエンジェルが触手を出せるのか疑問だ。

触手ってあれだろ、超生物が出してるやつだろ? どこからどうやって触手出すのかさっぱり分からねえよ。

「速水さんはそこで待機!」

「は?」

突然どこからともなく大きな声がして、思わず声が漏れた。戦場でこんな堂々と指示を出すのはどこのどいつだ?

「今撃たなかったのは賢明ですよ、千葉君！ 君はまだ敵に位置を知られていない！ 先生が敵を見ながら指揮をするので、ここぞという時に撃つんです！」

「お前どっから……」

座席の上に乗ったボール。そのボールが喋った。きめえ。

「テメー何かぶりつきで見てやがるんだ!!」

銃を連射する。

あ・た・ら・な・い。

いや、当たってはいるのだ。当たってはいるのにどうってことないニヤニヤ顔でこちらを見ている。透明なボールの表面には傷1つ付いていない。

「ヌルフッフ、無駄ですねえ。あなたほどの銃手に中学生が挑むんです。これぐらいの視覚ハンデはいいでしょう」

『殺せんせーは今完全防御形態で24時間経つまで核爆弾も効かないらしいよ』

「あーそーかよ」

だから何でお前はそんなの知ってるんだよ。

『ついでに今殺せんせーが言った、千葉君がさっき言った千葉龍之介。長距離射撃の成績がクラス1位だから要注意だね』

「……………お前はほんと、そういうどうでもいい情報ばかり持っているよな」

俺が小声でブツブツ呟くのを超生物がじーっと見つめる。超生物は息を吸い込んで、大声で生徒たちに向けて叫んだ。

「では木村君。5列左へダッシュ！」

男子生徒が素早い走りで通路を駆け抜ける。何が起きたのかと口をあんぐり開けてしまう。

「寺坂君と吉田君はそれぞれ左右に3列！」

動きのする方に視線が釣られた。それを超生物は見逃さなかった。

「死角ができました！この隙に浅野君は2列前進！」

「カルマ君と不破さん、同時に右8！」

「磯貝君左に5！」



シャツフルだと?!?

くそっ、今ので何人か動きやがった。だが、今ので5人の位置と名前を手に入れたのは大きい。これならすぐに指示が機能しなくなる。すぐにもう1人のM60持ちを特定してやる。

「出席番号12番！右に1で準備しつつ、その場で待機！」

「4番と6番は椅子の間から標的を撮影。律さん経由で舞台上の様子を千葉君に伝達！」

「……え」

名前を覚えるために待機していたのに、超生物はスラスラと出席番号を呼んでいく。

出席番号なんて分かるかよ！そもそも生徒に番号付けるとか日本人は学生を家畜だとも思ってたんのか？くそ……出席番号ってアルファベット順、なわけないよな。日本語は確か「いろはにほへと」を使うと聞いた。で、その後はなんだっけ？

だめだ、分かん。俺は日本語は話せるだけなんだ。日本語での出席番号の付け方とか分かんねーよ。

とにかく千葉って奴を見つけれねーと!!

『12番は菅谷創介。4番岡野ひなた。6番片岡メグ』

迷いが無いエンジエルの発言。俺はもう少しでスマホを抱きしめるところだった。

「すげーな。初めてお前のこと尊敬したわ」

クラス名簿なんてどうでもいいと思ってたが、この状況ではどうでも良くはないのか。

ニツと笑みが溢れた。

「どうやら千葉ってやつは動いてないようだな」

自信満々に胸を張る。エンジエルが呆れたように『わざわざ教えるなんて、ガストロクさんバカなの？』と辛辣なことを言っていたが、気にしない。挑発って戦闘で大事だと思うぞ。

「……………何故それを！」

「こっちの情報網舐めんな」

超生物は一瞬顔の笑みを消したが、すぐに次の指示に移る。

「……ポニーテールは左前列へ前進！ バイク好きも2列前に進んでください！」

『ポニーテールは矢田桃花。バイク好きは吉田大成』

千葉じゃない。無視していいか。もしも千葉が動かなかつたら、その時は殺意の強さで探す。狙撃手の殺意は簡単に隠せねーからな。

「ジャンプつ子は右に2移動！」

『不破美月』

「前髪が長い」

『千葉龍之介』

「こいつか！」

銃を向けて撃とうと身構えた。しかし、超生物はそこから更に付け足した。

「―――男子に片思いしている人！その場で待機！ あ、すみません速水さん。バラしてしまいましたね」

「べ、別にそんなんじゃないんだけどー！」

速水という狙撃手がいる場所から否定の声がして俺はがっくりした。千葉って奴じゃないのかよ。そいつのこと好きな奴かよ。てかこいつら、スナイパー同士で恋愛してるのか………ちっ、考えてて虚しくなったぜ。

「……なるほど。クラス全員の名前と出席番号。暗殺での得意分野のみならず、あだ名まで全て覚えているんですか」

千葉龍之介の特徴に反応したことから、いとも容易く超生物に俺が名前以上の情報を持っていることがバレてしまった。さっきのはカマかけたったようだ。

「生徒に邪魔された殺し屋がいたと聞いたんでね。大体の情報は持つてる」

エンジェルが。

「なるほど、よく考えましたね。しかし、表面では見えにくい情報もあるんですよ」

ニヤニヤと嫌味な笑みを浮かべて、超生物は自信満々に言った。

「告白したのに忘れ去られた人！3列前方に移動」

「んぐつ！」

『……………』

エンジェルが初めて口を閉ざした。

「最近メイド喫茶に行ったら思ったよりハマりそうでちよつと怖かった人、攪乱のために物音を立てる」

「うるせえ!!!何でお前が知ってるんだよ!!」

さすがに知るわけないだろ。

『寺坂竜馬』

分かるのかよ！

「ツインテールの子が好きな人、左に3！」

『……………』

「2年間片想いでいまだに告白もできていない人！左前列4進む！」

「殺す」

何だこの心を抉る会。さすがのエンジェルも特定ができなかったのか、黙り込む。

『……………』

いや、な。さすがのお前でも中坊の恋愛事情まで知ってたら引くわ。エンジェルの情報の欠点は生徒の恋愛事情の欠如だったようだ。

「あなたの協力者も誰がいつメイド喫茶に行ったとか、生徒の恋愛まではさすがに記憶していないでしょう？」

超生物の鋭い発言に俺は目を逸らす。

協力者がいるってバレてね？

「次元差恋愛のリア充君、前に出て攪乱してください」

小柄な男子生徒がステージまで飛び道具を使ってジャンプした。俺が慌てて発砲しまくるが、俺の銃弾を軽々と避けつつ、攻撃を仕掛けようと拳を向けてきている。

何故こいつには俺の弾が見えてる?!まさかこいつ、エンジェルと同じ触手持ちか……………!

『左に3歩。右に1歩。前にジャンプ』

電話の向こうでエンジェルが言う言葉に従い、俺は相手に銃を向けながらひたすら逃げ回った。銃弾が掠りもしない。こんなの初めて

だ。

触手持ちは動体視力までバケモンなのかよ！

「マツハ20に比べたら止まって見えるな」

触手持ちが俺のイヤホンを引っ張り、その反動でイヤホンがスマホから引っこ抜かれる。素早いスピードで、触手持ちは俺の銃を奪ってしまった。

「お前———！」

「浅野」

銃が空中に投げ出された。想定外の出来事に慌ててジャンプしたが、あつさり俺の愛銃は後ろにいたもう1人の少年、浅野によって捕らえられてしまった。スマホは触手持ちの手の中だ。

「協力者からの助言はもう使えない。銃も僕が持っている。先程の言葉を返そう。大人しく降伏しろ」

いつの間にも……戦闘中に舞台裏に移動していたのか！

『あーあ、やっぱりだめか』

スマホからエンジエルの声が流れる。その声を聞いた浅野が目を見開き、肩を震わせた。

「その声……………」

「……………」

超生物の顔が一瞬強張る。触手持ちは無表情で、感情が読めない。何故か俺の方を見ている。

何だ、こいつら。知り合いだったのか？

『また、後でね』

「待て———っ！」

「落ち着いてください、浅野さん」

浅野を宥めるように客席から呼びかけられた声に、彼はさらに苛立っているようだ。あともう少しで銃が投げ飛ばされるところだった。俺は大歓迎だから投げ飛ばしてくれと切実に願う。

「浅野君。君が取り乱してどうするんですか。今は考える必要はありません。後で確かめればいい話です」

「……………そうだな。話を聞くのは後だ」

俺は首を傾げ、エンジェルがE組に潜入していたという話を思い出す。そりゃあ知っていてもおかしくないか。

「あー……そーいやエンジェルはE組にいるんだったな。でもそんなことより、お前ら。俺は降参する気無いぜ」

俺はズボンの後ろポケットから即座に銃を取り出した。浅野も触手持ちも驚くほどに動揺しない。俺は脳みそをフル回転して、銃を持つてる奴を封じる方法を考える。

エンジェルが使えなくなった今、どの生徒が動き出すのか特定するのは不可能。だが、俺は誰が動き出しても即座に撃てる自信がある。むしろ、動きがでかい方が狙いが定めやすい。

銃を持つてるのは浅野と千葉、速水の3人。浅野はきつと撃たない。だってこいつからは殺意を感じない。速水の居場所は既に超生物がバラした。

撃つとしたら千葉って奴だ。

「そうですか。降参しなかったことを後悔するでしょうね。勝負はすぐにつきますから。では行きますよ」

銃の味を確認する。最高レベルだ。外す気がしねーな。

「千葉龍之介！立って狙撃」

来たか!!!千葉!!!

俺は銃弾を放った。文句無しのクリーンヒットだ。だが、そこにいたのは生徒ではなかった。上手く人間に似せてはいるが、人形。「千葉龍之介」と乱雑に書かれた名札が付けられている。

「なっ!!!」

そんなのつてありかよ?! 千葉龍之介の人形とか……反則だろ!!

超生物の方を振り返ると、緑と黄色のシマシマ模様のボールがニヤニヤしていた。いつの間にか舞台上にいた触手持ちと少年が消えている。

怯んだ隙に別の生徒によって銃弾が撃たれる。それは俺の横を通り、舞台の方で何か硬いものに直撃した。

俺は心臓のあたりを押さえた。戦争中、何度もこうやって確認した。腕を撃たれても、脚を撃たれても、心臓じゃなければ永遠に戦え

る。

「ふっ、当たらなかったみてーだな」

生きてる。だから、まだ戦える。2人目の居場所も見つかった。

俺は弾が来た方向に向かって、銃を向けた。

俺の勝ちだ!!!

後ろから崩れる音がして、舞台のセットが俺の体にのしかかる。

「ヌルフッフッフ、先生の指示はダミーです。焦りすぎて騙されましたねえ」

吊り照明の金具を狙った……だと……

もう一発の銃弾で俺の愛銃が手元を離れた。先ほどの衝撃で床に倒れる。

「やっとう当たった」

速水という狙撃手が呟く。

「寺坂くっ、ガムテでそいつ縛っちゃって」

「言われなくてもそのつもりだったの」

朧げな視界で中学生が俺にガムテープを巻きつける。ぼんやりと超生物と生徒との会話が耳に入った。

「浅野君、渚さんと茅野さんに連絡してください」

「あの2人は待機じゃないの？」

女の声があった。

「状況が変わった」

さっしきの少年の声を最後に俺の意識はぶつっつりと消え去った。

黒幕のはなし。

さっきまで上っていた階段を降りるのはまるで帰るみたいで不思議な気分だ。階段を降りる客には従業員も警戒しないから余計そう思う。

「ほんとにこんなやり方で成功するのかな？」

ボールの入ったビニール袋をかかえ、親友がぼんやりと呟いた。どっちかと言うと、独り言みたいな言い方に私は返事を躊躇う。

「子供騙しだけど、やってみないと分かんないよ！」

私は明るく「茅野カエデ」が言いそうなことを言った。

親友から浅野君の計画を聞いた時は驚いた。彼は彼女にLINEで取り引きの為に極秘でフロントに行くよう言ってきたそうだ。その時に親友が私にお願いして2人で行くことになった。誰にも打ち明けなかったから、E組のみんなは今頃私たちが部屋で待機してると思っているはずだ。

それにしても浅野君は何を考えているんだろう。ここまで来たのに取り引きに応じるのって。しかも彼女を危険な目に遭わせるような計画を実行するのが意外だ。

クラスメイトのことを駒だと思っているのかな？

それとも、彼女はよく危険な目に遭うし、今更守ろうとする必要がないとでも思ったのかな？

なんとなく、どっちも違う気がした。

これまでに見かけた殺し屋は2人。グリップという殺し屋が他の殺し屋の情報をバラして、全部で4人の殺し屋がボスに雇われていることが判明した。ということはあと2人殺し屋がいることになる。

浅野君は彼女がその殺し屋2人に遭遇するのを阻止した？

でも何のために？

さらなるトラブル防止？

最後の線が濃厚そうだと私は遠い目をする。大石渚ほどのトラブルメーカーには未だかつて会ったことがない。映画やドラマの役でもなかなかお目にかかれない貴重な存在だ。最も本人にもその自覚

は多少あるのだろう。

1年生の時に五英傑の同類と認められて以来、嫌がらせは絶えなかったようだし、E組に入ってから修学旅行や球技大会でそれが続いた。あの時は面倒な女子に絡まれているなあなんて思ったけど、あの女子が関係のないトラブルも多いから渚に原因があるのではとしか言いようがない。

イトナ君が転校してきた時も深いところに首突っ込んで、私は渚がいつかシロあいつに殺されるんじゃないかと気が気ではなかった。

今回だって1番背の低い生徒って聞いた時、親友を狙っているんだろうなって真っ先に思ったぐらい。本当は彼女の身長が少し伸びたから、今は私が最小なだけだね。見事に巻き込まれた。

間違いない。大石渚は生粋のトラブルメーカーだ。

もしもそんな役を演じるようになったら彼女を参考にしようとは強く決心した。

「どうかした？」

「ううん。私たちってよく危険なことに巻き込まれるなって」

主にあなたが。あなた中心にあなたが引き起こして私たちが巻き込まれている危険なことね。

「否定できないなあ。まだ一学期しか経ってないのに、色々あったよね」

親友が苦笑いした。自覚してはいるわけだ。

「修学旅行の時はどうなるかと思った」

私が言うと、彼女も懐かしむような口調でE組での出来事を挙げていく。

「川に流されそうになったりもしたね」

「その後イトナ君がちゃんとE組に来て律と仲良くなった。あの2人がくつつくなんてね」

「うんうん、ちよつと意外な2人だよね」

律なら竹林君、と安易に考えてしまっていたから、二次元好きってわけでもないイトナ君と付き合うのは不思議な感じがする。恋愛って難しい。こういうの映画化したら純愛って騒がれるネタだよね。



「期末テストで五英傑と勝負する羽目にもなった。どうにか引き分けに持ち込んだけど……もし勝てたら、どうなったのかな」

親友が考えている相手の正体が分かって、胸がチクリと痛んだ。それと同時に嫌なことまで思い出してしまう。

「テストで渚が一生懸命戦って、変わっちゃって、少し寂しかったな」  
彼女が「わたし」って初めて言った時は脳内に稲妻が走るぐらい衝撃的だった。少し大袈裟だけど。

あれから、渚は渚じゃなくなってしまったんだ。

「渚と初めて会った時、渚のこと男の子みたいだと思ったなんて言ったら怒るかな」

初めて会ったのがいつかなんて、あなたはきつと覚えていないんだろうけどね。

彼女にとって初めて会ったのは教室ってことになっているのだろうかと推測する。

「怒らないけど……男の子みたい？ 初めて言われた」

首を傾げる親友をよそに、私は「あの日」のことを思い出した。大石渚と雪村あかりが会った、私たちが演技ではなく、本当に初めて会った日のこと。

あの時の渚は女の子の制服を着ていて、絆創膏を持ち歩くぐらいの女子力があつた。渚の“女子”の擬態は付き合いが長い人でもなかなか見破れるものじゃない。それでも、私からしたらバレバレの演技だった。

職業柄、よく人の仕草とか発言とか目についちやって、一人称とか、仕草とか、そういうのから初対面で直感した。この子は女の子の演技をしているんだって。心の中は男の子なんだって。何故か確信していた。

「でも、そんな渚がかっこよくて、ほんと」

自然と口元に微笑みが浮かんで、一歩前を歩く親友の後ろ姿を見つめた。

「大好きだったよ、渚」

私の口からそんな言葉が漏れる。いつの間にか、演技を忘れてし

まっていた。

渚の悪いところをいっばいあげようとして、それも全部好きだと思う自分がいる。

人の嘘にはすぐに気がつく癖に嘘をつくのが下手で、

自分より他人を優先し過ぎて、

自己犠牲ばかりで、

背は同じぐらいなのに私より胸があって、

見かけは女子っぽいのに男子みたいな面があって、

恋愛に疎くて自分の気持ちも他人の気持ちにも気づけていなくて、

茅野カエデの奥にいる雪村あかりを見つけてしまう。

秘密を唯一知っている存在。そんな存在は鬱陶しくなるだけって

思ってた。

だけど、そんな渚がずっと大好きだった。

「えーっと、ありがとう？ わたしもだよ」

ぎこちなく礼を言う親友に笑みを深めた。

あなたのことじゃないけどね。

内心そんなことを呟きながら、あの策士の顔を思い浮かべた。カルマ君とあの男が会話していた内容を考えるだけでムカムカする。ボイスレコーダーを持っていたら録音して皆に暴露したのにと後悔した。

気づいてるんだよ？ この子が前と違う渚だって。

「どうしたの？」

親友は立ち止まって、私に問う。「え？」と聞き返し、彼女の強張った笑みを見つめる。下手な作り笑いが何だか可愛く見える。でも、その笑いには戸惑いと疑いが含まれていた。

「だってカエデ、怒ってるでしょ」

「怒ってないよ」

演技で取り繕っても、そういう面は相変わらずお見通しのようだ。そういうところは前と変わらない。

親友はじーっとこちらを眺めている。彼女が見ている視線の先に私がない気がして、一瞬身震いした。

この子には何が見えているんだろう。

「……………めん、変なこと言った」

見ちゃいけないものを、見てしまった。

親友はそんな顔をして、気まずそうに顔を俯けた。何か話を繋げようと「あのね」と切り出す。

「黒幕は私に復讐したいんだと思う。だから私を呼んだ」

全くさつきまでとは異なる話題を出されて、私は目を瞬いた。

「復讐……………」

それは前に渚に戦闘で負かされたからなのかな。ついさつき聞いた黒幕を想像しながら理由を想像する。

「復讐するのなら、純粋な戦闘で。そう考えているからこそ、相手が戦闘に持ち込む前にこつちが薬を奪って逃げる。でも、もし戦闘に持ち込まれたら……………」

親友は拳をギュツと強く握りしめた。

「多分、わたしじゃ勝てない」

彼女が断言したことには私は首を傾げた。

「渚が勝てないなんてことないんじゃない？ 戦闘ならE組でも上位

に入るよね。何でそう思ったの？」

「目が見えなくなってるはずだから」

そういえば、話し合った時も親友がそんなことを言っていて、不破さんと私は不思議に思ったっけ。何でそいつが目が見えないんだろう。何で渚がそのことを知っているんだろうって。

それに、目が見えなくなっているなら弱くなっているんでしょ？

視界が真っ暗の中、戦闘で勝てるわけがない。

「敵が目が見えないから渚が勝てないなんてありえ  
あれ？」

目が見えないなら、どうやって戦闘で復讐するつもりなの？

急に首筋がぞつとして、両手を首元に当てる。まさかその結論に達するはずがないと思いたくても、私という実例がそれを許さない。

「なんてね。全部ただの予想だから、そんなに怯えなくても大丈夫だよ」

親友は上手く誤魔化して、その話を終わらせた。私は顔に精一杯の笑みを浮かべる。

しばらく階段をひたすら降り続けて、ようやくフロントのある階に辿り着いた。

従業員の多いフロントには、いまだにピアノを弾くビッチ先生と取り巻きたちがいる。ビッチ先生はこちらを視界に入れるとウインクしてきた。彼女にとっては予想外な事だろうに、何故あんなに余裕なのかと私と親友は顔を見合わせる。

「うっ……緊張してきた」

「さっきは平気で毒使いの男に向かっていったのに？」

私がそう返すと、親友は大真面目な顔をして頷いた。

「なんだろう。殺し屋の雰囲気とか、中学生の空間には慣れてるけど、フロントの雰囲気は何だか大人っぽくて」

その気持ちはよく分かる。さっきのディスコっぽい雰囲気の場所には中学生ぐらいの子もいて、私たちでも馴染めるなと思ったけど、この場所は完全に大人の世界だ。空気が子供を除外している。

私たちはフロントまで堂々と歩いていった。親友が小さい子みたいに私のTシャツの裾を掴む。こっちまで緊張が感染してしまいそうだ。

自分に緊張しないように言い聞かせた。

何を心配する必要があるの？ 私は元女優。大人の世界に片足踏み入れてた時期だってあったんだから。

「すみません、最上階に泊まっている人に用があるんですけど」

私がそう言った瞬間、フロントの従業員が固まった。事前に指示を受けているのだろう。

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか？」

「大石です」

「茅野です」

「少々お待ちくださいませ」

内線電話を繋いで、手を口に当てて周りを気にするように声を潜めた。

「お客様、大石様と茅野様がいらつしやっていますが……いえ、女子中学生がお2人。はい、畏まりました」

従業員は客相手に向けるサービス業特有の笑みを浮かべながら向き直った。

「客室までご案内します」

従業員に従ってエレベーターに乗って、最上階のボタンを押す。誰も途中で乗って来る客はおらず、エレベーターはすぐに最上階へと到着した。どうやら最上階専用のエレベーターだったらしい。なるほど、イトナたちがその階に行けないわけだ。

「遅かったなア」

部屋の主が低い声を出す。聞き覚えのある声だった。前より邪気を含んでる。

親友が拳をギュツと強く握りしめ、怒りに満ちた目で黒幕の男を睨みつけた。

「鷹岡先生。やっぱり、あなただったんですね」

不破さんが導き出した犯人。それを不破さんが浅野君に伝え、律経由で烏間先生、殺せんせーの2人と共有して、今回の作戦が出来上がった。

目を包帯で覆い、片耳にイヤホンを付けて異臭を放つ男がそこにはいた。

なんだろう、この臭い。不快感しかない。

「1人で来るように言ったよなあ？」

「いいえ？それに1番背が低い生徒は2人いるんですよ」

さつきまで緊張するとか言っていたのに、鷹岡相手には物怖じせず親友が言った。淡い笑みまで浮かべる余裕があるぐらいだ。

「1人も2人も変わらない。それより奴は、超生物はどこだ？」

「ここに。でも先に薬を渡してください」

親友は何の変哲もなさそうなボールを取り出した。カルマ君にもらったやつだから何かしらの仕掛けはありそうだけど。

鷹岡は目が見えないと彼女は言っていた。だから、殺せんせーじゃなくても気づかないだろうとも。何故それを知っているのかについて

ては不破さんも私も詳しく聞かなかった。

鷹岡の意識が親友に向いている隙に、私が鷹岡の机の上のリモコンにそーっと手を伸ばす。

「……………かゆい」

私の手が一瞬動きを止める。鷹岡が頬を引つ掻いている。

「思い出すとかゆくなる。でも、そのせいで目が見えないから、他の感覚が鋭敏になってるんだ」

親友の手首を力強く握り、鷹岡は机の上にある何十ものリモコンを床にぶちまけた。手にリモコンを持ち、ボタンを押す準備は万端だ。彼女が鷹岡を睨みつける。

「言ったら？ マツハ20の怪物殺そうとしてたんだ。リモコンだつて予備が必要だよなア」

「殺せんせーと交換で薬を渡す約束でした！」

「馬鹿にしてんのか？ こんな子供騙しの手で…………」

鷹岡がボールを私に投げつけた。

バレてる?! でも、何で…………？

「仕方ない。夏休みの補習をしてやろう。屋上に行こうじゃないか」

目の包帯をしているのに、鷹岡が狂気に満ちた笑みを浮かべているのが理解できた。

「行かないと言ったら？」

親友が強気な発言をして、鷹岡が無言でボタンを押す動作をする。彼女はごくりと唾を呑みこんだ。

「分かりました。行きます」

「待って、渚」

「…………カエデ。ちゃんと話し合って、みんなの薬を渡すように交渉するから。だから大丈夫だよ」

親友は留守番を嫌がる子供を宥めるような口調で言った。そういうことじゃないんだけどなと思いつながら首を振る。

「違うの。私も行く」

「二対一なら勝てると思ってんのか？」

「逆に、二対一だと何か問題あるんですか？ 鷹岡先生」

カルマ君のような挑発するような声で相手を煽ると、鷹岡は簡単に「ついて来い」と私が行くことを認めた。

鷹岡は椅子から立ち上がり、テーブルに立てかけていた松葉杖を左手に持ち、部屋を出た。それに倣って私たちも部屋を出る。外には手下の護衛たちがいて、鷹岡の指示で下の階へ向かった。E組のみんなに遭遇しそうで心配だけど、その頃には烏間先生の力も戻っているだろう。

屋上には何もなかった。ヘリポートがあるぐらい。鷹岡はヘリポートに続くはしごを躊躇なく登った。親友はそれをじーつと眺めていた。

「早く来いオラア!!!」

親友はびくつとしてはしごを登り始める。

「連れのガキは下で待ってろ」

私を下に置き去りにして、鷹岡ははしごをヘリポートと屋上の間に落としてしまった。最初からこうするつもりで、私を上にするのを許したのだろう。親友は私を一瞥し、危険な目に遭わないことにホツとした様子だった。

私は屋上とヘリポートの距離間を頭の中で把握することに力を注ぐ。

「対先生ナイフ?」

親友の声が大きく聞こえるのは彼女が驚いたからだろうか。それとも彼女は私に状況を伝えるためにわざと大きくしているのだろうか。

とにかく、彼女の言葉で私はヘリポートの床に対先生ナイフが一本置かれていたことが確認できた。

「それを見て、俺のやりたい事は分かるな? この前のリターンマツチだ」

「待ってください。闘うつもりなんて……」

「だろいな。一瞬で負けが決まってる」

この状況でそんな事が言える鷹岡に私はむしろ驚いた。

だって松葉杖持ってる、目に包帯付けてるんだよ? お前がなって

言いたいぐらい、この状況で勝てる見込みなんて無いでしょ。いや、無いはずだけど……

「まずは土下座しろ。俺の目について、卑怯な手を使って、ガキの癖に俺に勝ったことを謝れ」

親友が私に目配せする。渚は土下座せずに正座だけして謝る。

「先生の目を傷つけてすみませんでした。ガキの癖に、生徒の癖に、実力が無いから卑怯な手を使って勝って申し訳ありませんでした」

「それが土下座かア?! バカガキが!!頭地面にこすりつけて謝るんだよ!!!」

親友は言われてからようやく頭を下げ、謝罪を繰り返す。

「先生の目を傷つけてすみませんでした。ガキの癖に、生徒の癖に、実力が無いから卑怯な手を使って勝って申し訳ありませんでした」

「本当に……ごめんなさい」

最後の言葉まで聴き終えた鷹岡はご満悦だった。ニコニコと気味が悪い。

「よし、本心が聞けて父ちゃんは嬉しいぞ。褒美に良いことを教えてやろう」

「スモッグのやつが言っていたんだが、あのウイルスに感染したら顔面がぶどうみたいにぶくぶくになって、1週間もしないうちに死ぬらしい。笑えるぜ。全身デキモノだらけ。な、見たいだろ? 見たいよな。なっ?」

心から楽しそうに、まるで親からの誕生日プレゼントを見せびらかす少年みたいに、鷹岡は彼女に見たいと言うように促す。

「言えよ!」

「……見たいです」

親友は泣きそうな声で言った。鷹岡はその言葉を待っていたかのように満面の笑みで、菓の入ったスートケースを空中に投げる。私は何が起るか分かって真っ青になった。

親友が鷹岡を無言で睨みつけている。

「あははははははは! 夏休みの観察日記にいいだろ? お友達の顔面がぶどうみたいになってく様をよお。ははははははははははっ!!!」



「殺す……っ!」

「殺れるものならなア!!」

鷹岡の頭から小汚い灰色の触手が姿を現した。親友が「ああ、やっぱり」と呟いたのが分かった。彼女は手に持つてる対先生ナイフを使つて、猛スピードで動く触手に対抗しようとする。親友が一瞬、私の方を見たのに気がついた。

守る相手とでも思ってるのか。こんな私のことを守ろうと思ってるんだ。いつか裏切る役の茅野カエデを。

いつだって、渚はずるい。

私は髪ゴムを外して、首元から出した触手を向こう側の地面に付けて勢い良く飛んだ。地面に足を付けてすぐに触手を鷹岡の触手に向かって叩きつける。

「触手?!」

親友が私を見て驚きの声をあげる。それだけで、私の予想が全部本当だったことが分かった。でも、本当はそんなこと関係ないのだと心の中で思う。だって、身を張つてでも守らなきゃって体が動いてしまったから。

バレたら、私の復讐は全部台無しになるのに。みんなと前みたいに話せなくなるのに。

大好きだよ、渚。

例え、約束を忘れても。

鷹岡の触手と私の触手が空中でぶつかった。

演技のはなし。

触手が私に聞いてきた。

”どうなりたいか”を。

私は答えた。

”殺し屋になりたい”と。

「カエデ……」

親友が私と鷹岡の触手の動きを目で追う。触手を彼女の方に伸ばす鷹岡に向けて、私は更なる攻撃を放った。

「まさかE組にまだ触手持ってる奴がいたとはなア！」

鷹岡は興奮気味に触手を振り回している。狂気に満ちたオーラから、こいつが誰かを甚振りたいたのが伝わってくる。殺したいってやり、虐めたいみたい。触手は正直だからすぐに分かった。

対先生ナイフで応戦しようとする親友を触手で離れた場所に突き放す。親友がむっと視線で闘えることを主張しているが無視だ。対先生ナイフ一つで触手を持っている鷹岡と対戦するのは、正直無謀すぎる。

「渚、下がっててー！」

しばらく鷹岡の触手を相手していると、だんだん特徴が掴めてきた。

触手のスピードは殺せんせーやイトナより遅い。威力はそこそこ。問題はこいつの元々の身体能力が成人男性の並み以上ってことぐらいだ。

触手は剣と同じ。身体能力があつてこそ、真価を發揮する。イトナ君の触手は強さ重視ではあつたけど、どうしても触手のみに頼った闘い方をしてしまいがちだった。

鷹岡は触手抜きでの戦闘を既に学んでいる。それも視界無しでも戦えるだけの戦力を持つてるんだから怖い。あの義兄シニが何したか知らないけど、お姉ちゃんとの面会拒否にしたくなかった。鷹岡に触手を与えた時点でそれは確定でいいと思う。

それにしてもおかしいでしょ！ 教師として来た時は烏間先生の足下にも及ばない強さだったのに！

触手を持ってまだひと月も経ってないはずでしょ？ どうしたらこんなに扱いが上手くなるの？

私の問いに答えるかのように、鷹岡は語り出す。

「触手が俺に聞いてきた。”どうなりたいのか”を。俺は答えた。”復讐したい”と。ボロボロにしてやりたいと思ったね。だから何度も何度も、それこそ吐くまで練習したよ。どうやって触手を使うか、どうやって甚振って、どうやって地獄に堕とすか！」

鷹岡は触手を振り上げて再度攻撃態勢に入った。変わらず私を障害物と見なし、親友のみに向かって攻撃を仕掛ける。

「邪魔なんだよ!!」

鷹岡は小型の銃を取り出して、私の足に向けた。咄嗟のことですぐに避けられず、ふくらはぎに弾がかすってしまう。

「カエデ、足！」

「私は大丈夫」

そう言っただけ私には痛くない演技をした。かすっただけ。触手があるから足ぐらい大丈夫。そう自分に言い聞かせる。

傷が熱い。右足が燃えているみたい。首の周りは凍るように寒いのに、身体中が熱を帯びている。

だけど私は役者だ。だから足から血が流れていても、激痛が走っていても、観客には悟らせたくない。何事も無いふりをして、殺し屋になりきる。

「殺してやる。あんたみたいな人でなし！」

昔演ったドラマの台詞が口からこぼれた。演技に集中していたから昔の記憶が蘇ったのかもしれない。口の中で台詞を再度唱えると、それは魔法のように頭から離れなくなった。

薬は爆発した。鷹岡を生かす意味がない。

だから殺してやる。あんたみたいな人でなし。

そう、殺すの！

「な、何だ?!」

鷹岡が殺意を感じ取ったのか、急に警戒して怯える。心臓を狙っていた私の触手は途中で進路を変え、鷹岡の触手の根元に向かった。

鷹岡の触手を一本切り取った。

「なっ……」

「きやはっ、千切っちゃった!」

鷹岡の切られた触手はぴちぴち動いていて、それが何故かとても愉快に思えた。一度触手を切られると、再生するのに数秒かかる。その数秒が命取りだ。

「渚さん! 良かった、屋上にいたんですね」

「律、ちようどいいところに! 後でお金払うからプリン煮オレ投げて!!」

「ええ……、分かりました。100円忘れないくださいね! おまけしときます」

視界の端で親友と自販機がやり取りするのが見えた。でもそのやり取りは今の私にとってはどうでもいい。

私は殺し屋になりたい。そうと決めたら一直線だ。

「うふふっ……!」

今度は迷わずに心臓を狙う。鷹岡は触手が片方無いので、応戦するにも一本のみで闘うしかない。

自分の頬が火照り、首から熱を感じる。急に熱に浮かされてハイになったみたいなの気分だ。

鷹岡の銃を触手で奪いとり、私は握った。

そして引き金を引こうとする。

「あははっ! 死ん——」 「——待って、カエデ」

いつの間に近づいたんだろうか。

親友は私の首に指を突きつけていた。途端に心臓の鼓動が少し落ち着きを取り戻す。目の前には紙パックの飲み物。

あ、プリン煮オレだ。

冷静さを取り戻した私は思いがけない好物に唾を呑み込んだ。その隙に鷹岡は全力で後ろまで逃げていく。

「飲んで」

屋上の方に自販機が置いてあるのが見えて、律が親友に投げたのだろうと理解した。

彼女は私を地べたに座らせる。

「渚？」

「いいから。次はわたしの番。それとも、殺せんせーを殺す前に死にたいの？」

私はもつともな意見にうつと言葉を詰まらせる。親友の言う通り、私はプリン煮オレを飲んで一旦落ち着くことにした。少し心配だけど、彼女は何か案があるから私と交代してほしいのだろう。

それに、渚には奥の手がある。殺せんせー暗殺の時に使った仕掛け。

「大丈夫。すぐ終わるから」

囁くように言われた言葉に、私は目を瞬く。触手が切られて機能停止したように立ち止まっていた鷹岡は、親友が私と交代したのをいいことに戻ってくる。

「やーつと、殺る気になったか」

「殺る？ 違うよ、実験台」

「殺せんせーを殺す前の、ね」と殺せんせーの暗殺時と同じように親友は笑みを浮かべた。艶めいていて、危なっかしい微笑み。

そうだ、私は忘れていた。親友はさつき、殺せんせー相手に対先生ナイフ一つで立ち向かったんだ。

なら、負けるわけがない。

鷹岡の触手が再度親友を狙った。彼女は触手を視線で追い、ナイフを投げた。そのまま触手に突っ込むかのように走る。投げたナイフは鷹岡の触手の上を通り、親友の手の中に戻った。彼女がナイフを持ったままギリギリまで後ろに下がると、鷹岡の触手は親友を殺そうと触手を伸ばしていく。

あつと声を上げる暇も無かった。ナイフは触手にかすってすらないのに、触手が綺麗に切られる。見えない何かは触手を斬ったみたいな、信じられない光景。

触手の近くでキラキラと煌めく筋が一瞬見えた。それがこの光景

の答えだ。

触手を持つと、触手が切られた瞬間に大きな喪失感を感じる。一瞬でも気をとられると、敵に殺られる。私は怪我をして精神的に冷静じゃなくなつてたけど、親友はかなり冷静だった。

彼女は鷹岡の背後から首を掴み、お菓子の箱を当てた。イトナ君が作ったというスタンガンだ。鷹岡が何か口にする前に、何の感慨もなく放たれる電流。鷹岡はその場で地面に倒れた。

「大丈夫、渚?！」

私は親友に駆け寄って無事を確認する。傷一つない。

「うん。鷹岡先生も気絶しているだけだよ」

「さっきのどうやったの?」

「対触手繊維でできた糸だと思う。プリン煮オレのおまけでもらつた」

対先生ナイフに括り付けてあつた白い糸を親友はぐるりと巻いて、バッグの中に入れる。

「糸であんな切れ味出るんだね」

「うーん……鷹岡先生の触手が猛スピードで向かって来なければ、仕掛けた糸が発動することはなかったよ。糸って扱いづらいから、殺せんせーの時は出番無かつたし」

「殺せんせーの時と同じで、鷹岡が自分から殺されに行くみたいに見えるんだけど」

「ロヴロさんに教わつたんだ。操り人形みたいに、好きな時に対象に動かす方法。実際は意識の波長をフル活用した騙し討ちなんだけだね」

意識の波長って何と考えていると、親友は私の仮の名前を呼んだ。

「カエデ」

彼女は私の方を向いた。何を言われるんだろうと私は身構えた。親友にどんなことを言われても、私が正体をバラしてしまつたんだから受け入れないといけない。彼女は決意したようにすうと息を吸い込んで、言った。

「鷹岡の触手を抜こう」

「……………え？」

予想もしなかった発言にマヌケな声で聞き返す。てつきり触手について何か言われると思っていたから、予想外過ぎる。しかも鷹岡の触手を抜くって、それじゃあまるで証拠隠滅だ。

言つてすぐさまバッグからピンセットを取り出し、親友は触手を器用に抜く。触手を対先生ナイフで潰してからライターで燃やすあたり、抜かりがない。その対先生ナイフをスカートで隠れた太ももの内側に包帯で巻き付けた。包帯はスカートで見えないし、これなら誰も見ようと聞くことさえできない。

「これでもう大丈夫」

一仕事終えてふうと息を吐く彼女に私は何でこんなことをしたのか尋ねようと口を開く。その時だった。

「やつと開きました！」

誰かの声がドアの後ろからして、E組の生徒たちが雪崩れ込むように屋上に入ってきた。みんなはヘリポートにいる私たちを見て不安げに声を上げる。

「渚……！ 無事なのか?! 茅野さんも」

浅野君があからさまに渚の方を先に見て、私に視線をずらす。ついでに言った感が半端ない。

「わたしは大丈夫だけど、カエデが脚に弾を当てられちゃって」

親友が大きめの声で返した。それに慌てたのは殺せんせーだ。

「茅野さん大丈夫ですか?!」

「実弾か?! すぐにヘリを呼ぼう」

「茅野ちゃん平気？」

「遅くなつてごめん……………！」

殺せんせーと烏間先生は浅野君とは対照的に過保護に心配をする。それはクラスメイトたちも同じで、みんなが私のことを心配しているのが遠くにいるのに伝わってきた。

「かすただけだから」

「てか、ハシゴなくね? 寺坂、探してきなよ」

「何で俺が……………はあ、やりやーいいんだろ」

寺坂君はわざわざ下の階に行つてハシゴを探してくる。鷹岡が落としたハシゴは下の階のバルコニーに落ちていたらしく、すぐに見つかった。

ハシゴが見つかりると、私と親友は屋上に渡つてみんなに今までの説明を求められた。私は意図的に黙っていた。親友は触手の話を上手く避けながら、鷹岡がボスで、彼女に復讐するのが目的だったことを語った。

「渚ちゃんが倒したの？」

不破さんがひよっこり出てきて聞く。親友はどうやって倒したのか詳細な説明を省き、曖昧に返す。

「まあね。鷹岡先生は向こうで伸びてる。気絶してるだけだよ」

「やっぱり鷹岡だったんだ。私名探偵になれる気がしてきた」

不破さんがふっとかつこつけて笑う。渚は微笑み返した。横にいる私に視線で烏間先生と殺せんせーのことを訴える。

誰にもバレないようにすることかな。

「薬は……？」

「鷹岡が薬を爆発して……」

親友が細かいところをぼかす。実際は鷹岡と彼女の勝負は圧倒的に彼女の優勢だったけど、私以外に見ていた人はいなかったので、「鷹岡のが戦闘では圧倒的に強かったけど、親友が工夫して鷹岡に勝った」という印象が上手くつけられた。彼女の演技力には感心する。

「薬が爆発しちゃったなんて、みんなに何て言えばいいんだろ」

矢田さんが落ち込んで顔を俯けた。クラスメイトたちは打開策を思いつかずに暗い顔をする。

「お前らに薬なんぞ必要ねえよ」

屋上のドアから現れた3人の殺し屋の1人が断言する。烏間先生は出来るだけ争いを避けようと生徒たちと殺し屋の間に立った。

「雇い主がこんな状態なんだ。もう取り引きは無効のはずだ。俺はいつでも戦えるし、生徒たちも充分強い。これ以上争う必要ないだろう？」

「ん、いやよ」



「諦めわりいな！ こっちだつて薬破壊されてムカついて……え、い  
いよ。」

吉田は殺し屋に怒鳴り、途中でいいよの意味に気づき言葉を止める。

「その薬はダミーだぬ」

グリップが破壊された薬を一瞥すると、さらりとんでもない事実を口にした。これにはクラス全員声を上げてしまう。

「「はあああああ?!」」

「雇い主は薬を爆破するつもりだった。いくら雇い主とはいえ、そういうことされるとちよつとカチンと来るだろ？ だからただの色をつけた水を詰めたカプセルを作った」

スモッグが「どんだけ愛情込めて作ったと思ってるんだ」と熱く語っている。手には本物の薬と思わしきカプセルが握られていた。薬を爆破するために作ったわけじゃないから、爆破するなら水でどうぞということだろう。

多分この人は毒作りが大好きで、解毒薬作りも同じくらい楽しんでやっていたんだろうな。

「ちなみに、おまえらに盛ったのもこっちの食中毒菌を改良したやつだ。あと3時間くらい経ったら、急速に活性を失って無力になるぞ。ボスが指示した方だったら死んでたかもな」

この人、ポケットにいくつ薬と毒隠し持ってるの。

私は手品師のように毒と薬をポケットから出してくるスモッグに、この人がすぐに倒されていかなかったらヤバかったとほつと息を吐く。「使う前に3人で話し合ったぬ。暗殺用のウイルスを1時間の交渉で使わずとも取引はできると」

「命の危険を感じるにはこれで充分だったろ?」

確かにクラスメイトたちは瀕死に見えたとし、博識の殺せんせーでさえ慌てていたからスモッグの意見は正しい。騙されてたみたいで怒りも感じるけど。クラスメイトも反論する点を探しているようで、それを見つけた岡野さんが口を開けた。

「でもそれって、雇い主に逆らってたってことだよね。いいの? お

金もらってるのに」

「ボスはハナから薬を渡す気がなかった。だったら薬は本物じゃなくていい。カタギの中学生を殺すのも考えものだ。かと言って、命令違反がバレてプロとしての評価が落ちるのも困る。どっちが俺らの今後にリスクが高いのか、冷静に秤にかけただけだ」

勝手に殺し屋は何も考えずに依頼を受けたらすぐ殺すものだと思ってたから、選択肢に殺しを入れない3人に呆気にとられる。

「ええ、じゃあ薬は？」

「病人にこの栄養剤でも飲ませとけ。後で前より元気になったってお札の手紙が届くほどだぞ」

「アフターケア万全過ぎ！」

今度こそ私たちはだんまりを決め込んだ。ここまで先を見通している3人にはもう何も怒れる気がしない。ツツコミどころが完全に消え失せている。

「私たちが潜入した意味って……」

思わず本音が漏れる。薬を奪還しに来たのに実は大したことない薬だったとか、冗談もほどほどにしてくれと思う。こっちは復讐をドブに捨てて鷹岡と闘ったのに。

「それを言ったらおしまいだよ。でもほら、良い経験になったよね」

親友がいい子過ぎて言葉がない。さり気なく飴を手握らせてくるあたり、私が甘味に飢えていることに気づいているに違いない。どうも私の触手のことについて全くバラす気がないらしい彼女に拍子抜けしてしまう。

「実弾を撃つのは初めてだったな」

「俺の愛銃ー」

千葉君が器用に銃を一回転させて、ガストロクから奪った銃を見せつける。ガストロクが大人げなく千葉君にガン飛ばしているが、闘って勝ち取ったものだからもう千葉君のものだ。実弾を抜いたようで、後で対先生弾を実弾と同じように形成して撃つてみたいのだそう。実弾とBB弾ではやっぱりちよつと違うらしい。

「誰かの鼻に思いつきりマスタード突っ込むのもね」

「それは2度とやるな」

グリップと寺坂君の声が重なった。被害者1号と未来の被害者(仮)が揃ってカルマ君から距離を取っているのが面白い。

「先生の生徒が非行に……!」

殺せんせーがどうしたものかとうずうずしているようで、元に戻つたらすぐに本を読み漁りそうな勢いだった。

「一人だけ足りないな」

浅野君がぽつりと呟く。

「エンジェル、と言いましたか」

殺せんせーが親友の方をちらりと見てから言った。彼女は殺せんせーをじっと見返して首を傾げる。

「エンジェルって誰だよ」

それを言ったのはガストロ口だった。

「知らぬ」

「聞いたこともないな」

グリップもスモッグも、互いに知らないことを告げる。

「ふざけんな。お前が言ったんだろーが」

グリップに殴りかかろうとする寺坂君をカルマ君が押さえた。

「知らぬと言ったら知らぬ。殺し屋の名前か？ 小耳に挟んだことはあるが、知り合いではないぬ」

「しらばっくれやがって……!」

「お前は落ち着け」

怒る寺坂君を浅野君が投げ倒した。躊躇が全くない倒し方だ。

「寺坂君。嘘じゃない。誰も嘘は吐いてないよ」

渚も寺坂君を止める。私も彼らが演技をしているとは思えない。

「記憶を消されたか？」

浅野君がやれやれとため息を吐いた。

「防衛省が躍起になって探しているからだろうな」

鳥間先生が意味深な発言をして納得する。殺せんせーは不可解げな表情だ。

「……?」

「烏間先生、その話もつと詳しく……」

私が思わず口に出すが、烏間先生はうやむやのまま話を終わらせた。

「へりが来た。悪いが、生徒たちの回復を確認するまでは信用できない。事情聴取のためにしばらく拘束させてもらおうぞ」

「しゃーねーな。来週には次の依頼があるからそれまでなら付き合っ  
てやるよ」

「……なーんだ。リベンジマッチやらないんだ。俺に殺意が湧くほど恨んでないの？」

カルマ君がマスタードとわさびのチューブを投げながら、悪魔の笑みを浮かべる。

「今すぐ殺してやりたいが、俺は私怨で人を殺さないぬ。誰かが依頼したら殺しに行こう。だから狙われるぐらいの大物になるぬ」

グリップはカルマ君の頭を乱暴に撫でた。

「そーいうこった!! 本気で殺しに来て欲しいなら、偉くなれ! したら、俺らがプロの殺し屋の本気の味を教えてやるよ」

殺し屋たちはへりに颯爽と乗って去っていく。残された私たちは腑に落ちない気持ちで無言になる。

「なんて言うか……勝った気しないね」

速水さんが言い、みんなが頷く。

「いい感じにまとめて引き分けみたいな雰囲気にしてっつた」

カルマ君は撫でられた髪を腹立たしげに払った。何というか、大人はずるいと思ひ知らされた感じだ。

私達の初めての潜入はホテル内の誰一人気づかないまま、幕を閉じた。私たちもへりに乗って、みんなの待つホテルに向かう。

「その、防衛省が躍起になって探しているって本当なんですか？」

へりの中で烏間先生に聞くと、烏間先生は険しい顔をして頷いた。それだけ巨大な力を持つ殺し屋なのだろうかと思っていたが、少し事情が異なるらしい。

「超生物暗殺の関係者が何名か殺された。毒殺だったり、切断されていたり、殺され方はまちまちだ。三件の殺しは柵ヶ丘通り魔殺人事件

なんて呼ばれているな。1人、ハウジョウという男が半死半生で生き長らえたが、片腕、片脚を切断されていてもう本職には復帰できない。奴が言うには、臙げな視界の中で白いワンピースを着て翼を背中に生やした天使を見たらしい」

「エンジェル……」

「それがそいつのコードネームの由来だろう。まさか人の記憶を消せるとは思ってもみなかったが」

私はそつと浅野君を盗み見た。眉間にぐつと皺が寄っている。右隣の親友が肩にもたれて寝てしまったから、煩惱と闘ってるのかもわからない。私はちよつとだけ浅野君にヤキモチを焼いたが、彼の左隣を見てそれは同情に変わった。

左隣ではカルマ君が浅野君にもたれていた。

うわあ、重そう。

それにしてもヘリで寝れる2人の神経の凶太さ。みんなまだ潜入ミッションの緊張感が解けきってないのに。カルマ君は恋敵に心許し過ぎてしょ。

仲良いなあ、3人は。いいなあ。私だって、みんなとフラットな付き合い方をする茅野カエデじゃなかったら。

いけない。私が茅野カエデの演技を止めるのは殺せんせーを殺した時だ。それまでは演じ続けないと。

ホテルに戻ってすぐ、私たちは栄養剤をクラスメイトたちに配った。もう大丈夫なことにみんな安心していているようだった。一晩寝て効き目が出るとかで、みんなは飲んですぐに泥のように眠りについた。私と親友以外は。

隣の布団から物音がして、目を覚ます。親友がパジャマから黒いワンピースに着替えているのが目に入った。

「ごめんね、起こしちゃった?」

「渚、どこに行くの?」

「ん、ちよつと海辺に」

「話したいことがあるの。二人きりで」

「……外で待ってるから着替えてきて」

私は親友みたいに私服を着るか迷って、結局ジャージに着替えた。動きやすいし、汚れてもいい格好。着替えている最中に親友の格好を思い出し、彼女が海辺に行きたかった理由が分かるような気がしてきた。

親友は裸足で砂浜を歩いて行く。私は渚の後を追った。黒いワンピース姿は昨日から見慣れているはずなのに、やっぱり違和感が拭えない。

「そのワンピース、渚が着ると不思議な感じがする」

「いつも白だから？」

「そうかもね」

口ではそう言いながら、ふと彼女がそれを着ることになった経緯に思い当たる。

親友は殺せんせーの暗殺の日に白いワンピースを濡らしてしまって、その後はずっと黒いワンピースだった。今考えると、あれは意図的だ。

殺せんせーの近くで濡れることが確実な場で、わざわざ着た白いワンピース。

天使らしい演出の為？ 気に入っているから？

違う。彼女は白いワンピースから逃れる口実が欲しかったんだ。こっそり持ってきた黒いワンピースを着るために。

「それで……わざわざワンピースの話をしに来たんじゃないよね」

親友は途中で足を止めると、振り返る。

「ここまで来たら誰も聞いてないよ」

確かに、早朝の海辺は人っ子ひとり見当たらなかった。彼女がそんな格好で歩いていること自体、それが理由に違いなかった。だから私は二つ結びを解いて、茅野カエデの仮面を外した。髪を下ろしただけで女の子の雰囲気はすごく変わる。それこそ、別人みたいに。

「何で、鷹岡の触手を抜いたの？」

「鷹岡が触手を持っていったってバレたら、カエデの方もバレるかもしれないから。みんな勘が良いから」

「何で、そんなことしてくれたの？ 何で、渚は……」

「何で何でって、E組の皆には言わない方がいいんだよね」

親友がキョトンとして「みんなには秘密だったんでしょ？」と聞く。私が聞きたいのはそういうことじゃない。彼女が知れば、みんなにも伝わるって勝手に思っていたから、まさか彼女がこんなことするなんて思わなくて。もつと他の反応を期待していたから、戸惑っているんだ。

「違うよ……そういうことじゃないよ。何とも思わないの？ずっと秘密にしていたんだよ。みんなのこと騙してたんだよ?!」

困ったように親友は目を伏せた。彼女が決心したように息をついて、言った。探るような、確かめるような口調だった。

「わたしは知ってたんじゃないの？ 少なくとも、カエデはわたしが知っていると思ってた」

「何でそのこと……」

彼女は「そっか」と小さく漏らす。その言葉で、今のが鎌をかけていただけだと気づいた。私がそれを認めてしまったことも。

「カエデは記憶喪失になった人は元の間人と同じ人物だと思う？」

親友は遠くを見つめて、ぼんやり他人事のように質問をした。国語の作文の題材について尋ねるみたいに淡々と。

「……同じじゃないんだね。片方は白い服をよく着るのに、もう片方は黒い服が好きだったりするから」

「変化についての例が服って。あつてるからいいか」

親友は自分の黒いワンピースに目を落とし、小さく笑う。

「カエデは知らないだろうけど、わたしが「わたし」って言うとかエデは少しだけ怒るんだよ。いつもは滑らかな意識の波長がグラグラって揺れて、すごく不安定になるんだ。わざわざカエデって名前で呼ばせたり、「大好きだったよ」ってイラつきながら言ってみたり、カエデ見るとやっぱり記憶があるわたしは別人だなんて確信したよ」

親友は気づいていないふりをしてごめんねと謝った。彼女はそうやって、自己防衛をしていたのだという。

いつか誰かに「お前は偽者だ」って見破られる日を恐怖し、他の人が望む”大石渚”でい続けていたのだと。

「学秀もカルマ君もさ、わたしが多少記憶無いのは知ってるんだよ。でも別人だとは思わない。思われないうように頑張ってるからなんだけどね。それなのに、カエデだけはずっとずっとずーっと、わたしに怒ってた。何度遊びに行っても、カエデはわたしにボロが出ることを期待してるみたいだった。怖いよね。親友になっちゃうよね。近くにいないと不安で」

大石渚が変わったと思った人は数人いても、別人だとは誰も気がつかない。そんな中、私だけがそれを疑い続けていた。だから私が今の渚を親友として手元に置くのと同じように、私が誰かにその事を言っ てしまわないか近くについて監視することにした。そこまでの流れを 悟り、気味が悪くなる。

夏休み中、彼女と私が急速に前以上に仲良くなったのは、彼女自身も私と親友になることを望んでいたからってこと？

「何それ、馬鹿みたい。私たち、互いに同じこと考えてたんだ」

本音がこぼれて、それがあまりに茅野カエデからかけ離れていて自嘲する。心の中で吐くつもりだった毒が、口から出てしまった感じ。そんな私に、親友は嬉しそうに頷いた。

「そうだよ。」大石渚のふりをしているわたしは、カエデと同じだよ。みんなを騙してる」

私は彼女の瞳を見つめる。渚とは少し違う親友の瞳を見続けた。

「みんな、自分を通して他の人を見ているみたいだよね。だから誰も「わたし」を見てくれなくて、いつか消えちやいそうで不安になる。みんな優しいのに、ひとりぼっちになったみたいになる」

「どうして……」

どうして分かるの。

それは私がずっと感じていたことで、誰にも打ち明けたことがなくて、渚との約束と一緒にずっと心の底にしまっておくはずだったのに。

言葉に出す前に親友は私を優しく抱きしめた。

「カエデはもう、ひとりぼっちじゃない」

感極まって、涙が頬を伝う。演技じゃない涙はぐちゃぐちゃで、鳴



咽混じりで、ドラマみたいな美しきとかがまるでなくて、本物だった。「ごめんね……っ、茅野カエデは本名じゃないの」

私は渚にも言っただけでなかったことを彼女に打ち明ける。彼女は「うん」と頷いて、抱きしめている手を離れた。真正面の彼女を前にして、私は告げる。

「私の本当の名前は雪村あかり。雪村あぐりの妹なの」

肝だめしのはなし。

自分が前とは違うと初めてちゃんと気付いたのは、終業式の日菅谷君が天使の絵を描いている時だった。彼はほとんど完成した絵の前にわたしを座らせ、仕上げに取りかかっていた。菅谷君はわたしと絵を見比べ、不思議そうな顔をしたのを覚えている。

『渚ちゃん、誰か好きな人できた？』

菅谷君は途中でそう尋ねた。

『好きな人？』

『一緒にいたいなって思ったり、気がつくとその人のことを考えたり……ない？』

『んー、多分ないかな。何で？』

『渚ちゃん、変わったなと思っつき。女の子らしくなった』

どういふことだろう。もともと女の子なだけどなあ。

わたしが不機嫌気味に指摘すると、菅谷君が苦笑しながら謝った。

『……ごめんごめん。今日は筆が乗らないからいいや。もう殆ど完成しているし、あとは家でやるから』

そう言われて、流れで菅谷君の絵のモデルはその日で終わりとなった。

菅谷君はきつと思っただけを口にしただけだ。悪意はない。彼はわたしが前とは違うと言っただけだ。でも、それがわたしの中の違和感の引き金だった。

恋をしたわけじゃない。生理だって恥ずかしいけどまだ来てない。だったら、どうして今までのわたしは女の子らしくなかったんだろう、と。たった一つの疑問がわたしの心を支配した。

思い返せば、わたしの人生にはおかしいところだらけだった。

色々な中学校を受験したのにわざわざレベルを下げて桐ヶ丘を選んだのは何故？

A組に行こうと思えば行けたのに、E組に自ら来た理由は？

わたしが殺し屋になりたいと思っただのが何でなのか、そんなことから覚えてない。

考えてみれば、周りによくわたしが覚えていないことについて話した。射撃はそこまで上手じゃなくて、一人称が「ぼく」で、殺し屋になることを願っていた前のわたし。

そしてみんな、その前の大石渚が好きだった。大好きだった。

わたしは彼女とは違う。でも、記憶を、みんななどの思い出を忘れているなんて言えなかった。だったら、なるしかない。大石渚の道化に。

学秀が彼の嘘を信じてほしいなら「学秀のことを全て信じる渚」に。

みんなが「天使な渚」を望んでいるならその通りに。

カルマ君には意地悪をして告白を覚えていないふりなんてしてしまっただけ。だって、わたしじゃ告白は断れないよ。仕方ないよね。

殺せんせーだって、「自分を殺そうと綺麗な殺意を向ける渚」が好きなんですよ？

そうやって自分を殺して、記憶を取り戻すまで偽者でいればいい。なのに。

『カエデは記憶喪失になった人は元の人間と同一人物だと思う？』

何で打ち明けちゃったんだろう。前の渚が大好きなカエデに。

\*

「あー分かんない！」

テーブルに突っ伏する。隣の席にはカエデと学秀。向かい側にカルマ。本来なら、昼食は班全員で同じテーブルについて食べるのだが、他の班のメンバーはまだ寝ているらしい。ついでに言うとな疲れ

寝ている生徒の方が多い。潜入したメンバーはその疲れ。ウィルスに感染したメンバーは薬の副作用で。潜入しなかった奥田さんでさえ、看病に疲れて寝てしまったそうさ。

「そんなに難しいか、それ」

学秀はルービツクキューブを指差して聞いた。船の中とかで出来るかなと思つて持ってきたルービツクキューブだが、全面揃う気配は全くない。わたしの手の中でルービツクキューブは赤と橙の2面だけ揃つていた。でも2面だけ。ルービツクキューブは全面揃えないと揃つたとは言えないと言うのが学秀の意見だ。

「俺一度だけ全面揃えたことある。結構時間食つたけど」

とカルマ君。口にアイスクリームを運んでいる。

「私は1面しか揃えられないし、2面は充分すごいと思うよ！」

昼食をまだ食べている途中のカエデがキラキラした目を向ける。いつもの茅野カエデで今日の早朝の面影は全くない。演技つてほんとすごい。

「何にせよ、食事中にやるのは問題だな……食べ終わったら手伝うから、まずはデザートを食べ始めたらどうだ？」

学秀が監視役らしくマナーについて口を出す。食事はもう終わつてるんだけどなとふとテーブルを見て、熱中している間にアイスクリームが運ばれていたことに気がついた。

「ほんとだ。アイスあつたの気づかなかつた」

ルービツクキューブを一旦置き、目の前にあるアイスクリームをスプーンですくい、スプーンを口にする。これを食べられない寝過ごし組が可哀想に思える。ディナーはもつと豪華だろうから、もつと美味しいデザートが出てきそうだけど。

「ふぁ……眠い」

カルマ君は大きなあくびをする。わざわざ昼食を食べる為だけに起きてきた彼は酷く眠そうさ。

「あはは……夕方には殺せんせーの爆破が始まるらしいから、それまで寝てきたら？」

カエデが的確なアドバイスをし、カルマ君はそれに従つてすぐに席

を外した。

「貸してみろ」

わたしがアイスクリームを食べ終わったのを見計らって、学秀は手を差し出す。手のひらの上にルービツクキューブを乗せると、凄まじい速さでそれが完璧な状態になった。30秒かかったかも怪しい。

「さすがだね」

「ちよつとした子供の対抗心だね。小学生の頃に父親にルービツクキューブを渡されて聞かれてね。1番速く、誰にでもできて、難しく考えなくていい揃え方は何だと思う、と」

学秀はそう言いながらルービツクキューブを崩していく。揃っていた色がぐちゃぐちゃになった。

「そんなのあるんだ。どうやるの?」

「解体して組み立て直す。合理的だろう」

理事長が言いそうな言葉だと笑みが零れる。学秀はルービツクキューブを解体して元に戻した。また元通りに戻ったが、解体した方がさつきより時間がかかっている。

「だがそれはルービツクキューブというおもちゃの使い方じゃない。そもそも、やり方さえ知っていれば解体するより速く揃えられる。だから僕は1番正攻法な普通のやり方で、速く揃えて父親に自慢しよう、いや見せようと子供心に頑張ったわけだ。で、どうなったと思う?」

カエデとわたしを交互に見て、間を取る。理事長がやりそうなことということで、何となくオチが見えてきた。

「解体じゃない正攻法で、しかも僕の半分の速さで対抗された」

理事長大人げない。

「要するに、あの人は解体するのが1番合理的とか言っていたが、本当は正攻法が好きなんだ。解体して揃えても良かったのに、正攻法を使ったんだから」

「ああ……それっぽいよね」

ラスボス臭がする理事長を思い起こす。中間テストの時は卑怯な手を使ってきたが、期末では生徒同士に戦わせていた。

「姑息な手段を好んで使ってるわけじゃなさそう」

カエデも頷く。中間テストの時は殺せんせーがまさかそこまでできる教師だとは思わなかったのだろう。だから準備が遅れて、テスト範囲を変えるといった荒技をせざるを得なかった。期末テストでは大分時間に余裕があったから、テスト内容を難しくしたり、学秀を焚きつけてE組と競わせるようにしたりしたわけだ。

「だから、次に来そうな策は50位以内に入ったE組の生徒の引き抜きだと考えている。君たちからしたら卑怯でも、校則に書いてあるのだから何もおかしくないだろう?」

確かに、本来ならE組は本校舎に戻りたがっているはずし、側から見れば何も異常はない。ただし、E組は殺せんせー暗殺に燃えているから、みんな50位以内になっても出て行きそうにないけども。それは事情によりけり、かな。親に期待かけられてる人も多いはずだから。

「それに対抗する秘策も持ってますって顔だね、浅野君」

カエデが雪村あかりっぽい大人な笑みを浮かべる。学秀はその通りと好戦的に微笑んだ。

「一応僕は生徒会長だからね。それが理事長の正しさなら、正攻法には正攻法で返すべきだと思わないか?」

何を企んでるんだか。2学期で何が起こるのか楽しみだ。

「それにしても、夕方まで暇だな」

「じゃあわたしたちと海の方向く? 実は下に水着着てるんだ」

学秀に向けて首の後ろで結ばれた水着のリボンを指でつまむ。

「それはいいな。僕も水着は一応持ってきていたから取りに行つてこよう」

「えく……浅野君誘うんだ」

カエデがあからさまにがっかりした顔をして肩を落とす。何かダメだったみたいだ。少々の敵対心が意識の波長から感じられて、わたしは苦笑いした。

カエデは一体何と戦ってるの?

「茅野さんは僕には来て欲しくないのか?」

「あ、気にしないで！ 身体のラインに自信がないから、男子にあんまり見られたくないな〜ってだけ」

学秀に気を使ってか、カエデは自然に嘘をスラスラと述べていく。胸が無いのを演技の材料にして、精神的なダメージを食らっている気がするのは気のせいかな。本当は何でって聞いても教えてはくれないんだろうなあ。

「でも、浅野君なら大丈夫かな」

「……………」

「渚の水着しか見てなさそうだから」

カエデはとびきりの笑顔で言った。学秀は眉をピクリと動かして動揺したが、冷静に取り繕って返事をする。

「……………まさか」

その長い間は何なの、学秀。しかも意識の波長によると嘘だと分かる。

「そんなに見たいなら」

早く行こうよと続けようとして、2人が急に慌て出す。

「ここで脱ぐのは……………」

「ここでは脱ぐな」

2人の声が重なる。予想外の展開にどういう解釈と戸惑った。

「早く泳ぎに行こうって言おうとしたただだよ。ここで脱ぐわけないでしょ。2人とも動揺しすぎ……………」

笑いとぼそうとして、2人が全然笑っていないことに気がついた。

え。まさかわたし、前は男子の前で普通に脱ぎ出しちゃう露出狂だったの？ ストリップショーみたいに?!

「何それ、死にたい……………」

真っ赤になった顔を覆う。カエデがまあまあと肩をポンポンと叩いた。

「浅野君、早く水着に着替えてきなよ。テラス席集合ね」

わたしとカエデはホテルの女子トイレでジャージを脱いで、水着だけになった。トイレの個室から出ると、カエデが鏡の前でツイントールを結び直しているのが目に入る。カエデの水着は薄いオレンジ色

で、ワンピースみたいだ。胸の部分をふわふわ素材の布が上手く隠しているせいか、貧乳だと分かりにくい。

「やっぱりそのビキニ渚に合ってるね。お揃い！」

カエデはわたしに気がつくニコニコ顔で何度も頷く。わたしは淡い水色のビキニを見下ろした。上はシンプルにリボンが付いているだけで、下はふわふわのスカート。カエデのはワンピースだけど、生地とかデザインが似ているから色違いのお揃いみたいって2人で買った時にはしゃいだのを思い出した。

「せっかくだから髪もツインテールにしちゃおっと」

カエデが手慣れた手つきでわたしの髪をツインテールに結っている。ちよつと高めの二つ結びはアイドルみたいで気がひけるけど、カエデとお揃いならいいかなとも思う。

「あ。パーカー忘れた」

「パーカーなんて要らないよ。渚スタイルいいんだから自信持って！」

カエデがわたしの手を引っ張って、テラス席まで連れて行く。

テラス席では既に学秀とカルマ君が水着姿で待っていた。一応パーカーを着ているが、前は閉めていないので目のやり場に困る。向こうも同じことを思ったのか、2人とも視線をわたしたちから別の方向に向けていた。

眠いと言ってたのに、カルマ君も来たんだ。

学秀は水着をちらっとだけ見て、微笑みを浮かべる。懐かしんでいるみたいだ。

「その水着……渚は相変わらずそういう水色がよく合うな。よく似合ってる」

「うん、可愛いね〜」

カルマ君はニコニコと褒める。

「ありがとう」

そこで学秀はハツとして、何故かカルマ君を睨みつける。そそくさとパーカーを脱いでわたしに差し出した。

「これ……」



「日焼けするだろうから、着た方がいい」

「日焼け止めクリームちゃんと塗ったよ！」

「それでもだ」

何となく、保護者スイッチの入った学秀には逆らえない。仕方なくパーカーを着ると、今度はカルマ君が「えー着るの」と残念そうで少し嫌そうな顔をする。

「茅野ちゃんはワンピースの繋がってるやつなんだね。幼児体型だしいいと思うよ」

カルマ君は親指を立てる。清々しいほどの笑顔だった。一方、カエデの顔がぴくつと引きつり、今にもグーパーを決めそうな様子。

「ねえ渚、赤羽君海に沈めていい？」

カエデが苗字呼びをしてる時点でかなり怒っていることが分かる。わたしはやんわりデリカシーのない発言をしたカルマ君を咎めつつ、カエデの暴走を意識の波長を最大限に使って止める。胸の話は思っても口に出してはいけないとわたしと学秀は学んだ。

カルマ君はまたやりそうだ。

「そういえば、カルマ君は寝るんじやなかったの？」

「何となく泳ぎたい気分になったんだよね」

とカルマ君が気だるげに嘘をついた。カルマ君の手にある水鉄砲からわたしはイタズラしに来たんだなくと推察する。

「それじゃあ、行こっか」

カエデが言っつて、海辺まで歩いて行った。ビーチサンダルを脱いで足を水の中に入れる。それだけで気分が涼しくなった。

すごく、夏！って感じがする。駆け回りたい。

「深い所には行かないように。特に茅野さん。泳げないし、脚の怪我もまだ治っていないようだからね」

学秀が再度保護者モードを発動して注意する。学秀が「中学生を海に連れてきた親戚のおじさん」みたいだなんて思っつてクスリと笑っつてしまった。

「はーん」

カエデは元気良く返事をした。

カエデには溺れかけて前に学秀に助けられた前科がある。触手を持つてると水は天敵みたいだ。

カエデが水が苦手なこともあってか、泳ぐ雰囲気にはならなかった。下半身だけ水に入っただけで既に涼しくなったし、カルマ君が水鉄砲で浅瀬の方にわたしたちを追いかけ回してくるから、不思議と深くまで行かなかったのだ。ちなみにカエデは超高速で逃げまくって、1度も水が当たらなかった。

「隙あり」

カルマ君がニヤツと笑い、用意していた水鉄砲を学秀に向けた。それは学秀のちょうど顔面に直撃する。

「……カルマ」

顔を拭い、学秀はカルマ君の名前を低い声で呼んだ。怒るかなと不安になりながら、2人の意識の波長を見る。

あれ？ 怒ってるっていうより……

学秀がカルマ君に向かって水しぶきをあげた。カルマ君の髪が水浸しになる。カルマ君は「やったなこいつ」と学秀を睨みつけながらも楽しげだ。学秀もどことなく面白がっているように見える。

この2人ほんと仲良いなあ。

「あーあ。渚ちゃんは監視役として残るからいいけど、学秀君がA組行ったら、俺つまんなくて毎日サボっちゃいそーだわ。張り合い無さすぎて」

ぼそりとカルマ君がもらす。

そういう彼の言葉は本心なのだろう。E組の中でスペックが全体的に高い2人だ。どちらも互いを強敵だと認めると同時に、友でもあった。

「そんな言葉は次のテストで僕に近い点数を取ってから言うべきだな。期末テストの負け犬っぷりはもう過去の話か？」

学秀がカルマ君を煽る。カルマ君は顔を赤くして目を逸らす。期末テストの結果はカルマ君にとって黒歴史なのだろう。触れて欲しくない話題みたいだ。濡れた髪をくしゃりと乱雑に触り、ため息をつく。

「はあ……次は一位取るから忘れてくれる？」

「誰が忘れるか。それに次回も一位は僕だろうからな。一生覚えておく」

学秀はフツと嫌味な笑みを浮かべた。

「ちつ、高校上がったら覚えてろよ」

カルマ君が小さく呟いた言葉を学秀はちゃんと聞いていて、彼の余裕綽々な笑みが抜け落ちた。今の言葉のおかしなところをすぐに理解したのだ。

「……………カルマ、お前今なんて」

「俺們ヶ丘戻るよ。外部受験で」

カルマ君がしてやったりとばかりに微笑む。彼の意識の波長は悪戯が成功した子供のようにながら喜びで満ち溢れていた。

\*

結局、殺せんせーは殺されなかった。コンクリートを軽々と爆破し、アロハシャツで現れた殺せんせーは幽霊のコスプレをして看板を掲げた。その看板の肝だめしの文字が目に入る。

「肝だめし？」

何人かの声が重なった。

「そうです！ 先生のお詫びとして暗殺肝だめしを開きます」

「暗殺……ってことは肝だめし中に暗殺するのモイイの？」

前原君が対先生ナイフを殺せんせーに突きつけながら聞く。ナイ

フはやっぱり当たらなかった。

「もちろんです！ただし、男女ペアじゃなきゃだめですよ」

殺せんせーが「男女ペア」を強調して言った。

そんなに大事な要素なの？　これはきつとワケありだなく。

「カエデは誰と行く？」

「私は脚怪我しているし、体調も万全じゃないから外で待ってるよ」

まだ疲れがねくとカエデは遠慮した。海ではしやぎまくってたのに、と言いかけたが口には出さなかった。はしやぎまくったからこそ疲れたんだろう。カエデは演技しているから分かりにくいけど、昨日の触手での闘いは体力を使ったはずだろうし。

「渚は僕と行くのか。新学期からまたクラスメイトになるんだし」

「そうだね。カルマ君は？」

よく分からない理屈で誘われたけど、もともとそのつもりだったから軽く頷く。カルマ君の方を向くと、彼は隣の奥田さんを指差した。

「俺は奥田さんと。班メンバー同士が多いみたいだね」

「杉野君は……」「神崎さん！ペアになつてくださいー！」

神崎さんとだね。

神崎さんはお淑やかに了承しつつ、彼女の意識の波長からは微かな嬉しさが感じられる。それを全く表に出さない。あたかも誘われたし、他に誘う男子もないから杉野君と組むみたいな場を一瞬で作りに上げてしまった。上手い。

ザ・ポーカーフエイズ女子だ。

意識の波長を見るまでもなく分かりやすく、全身から神崎さん大好きオーラを放つ杉野君との差。ある意味とてもお似合いだと思う。

ふと杉野君を見ていて、緊張感と意気込みが波長から伝わってくる。期末テスト前の波長みたいで怖い。

「渚、僕たちの順番は1番最後みたいだ」

くじ引きで順番の紙を引いてきた学秀がわたしに告げる。周りの順番が先に来て、どんどん洞窟に入っていく中、わたしたち2人は外で待っていた。

「あら、渚と学秀は私と烏間の後なのね」

ビッチ先生がわたしと学秀を交互に見て、「いつもの感じね」と納得した様子を見せる。確かにいつも一緒にいるけど、いつもの感じって何だろう。

「烏間先生と行くんですか？」

学秀が意外そうに尋ねた。

「仕方なくな」

烏間先生は徹夜明けで若干目の下にクマができていた。連れ回される烏間先生に部屋に戻るよう言いたい。その一方で、ビッチ先生の気持ちを何となく察しているからすべきじゃないってことも分かっている。

「烏間、早く行くわよ」

胸を烏間先生の腕に押し付けて、ビッチ先生は洞窟への道を急かす。烏間先生はその日一番の深いため息を吐いて、ビッチ先生と洞窟の中に行ってしまった。

わたしは学秀の方を振り返る。

「学秀は怖いの手？」

一緒にホラー映画を観たことあるから、そんなことはないだろうけど。

「そうだな……一度本格的なお化け屋敷に行ったことがあるが、何が楽しいのか全く分からなかった」

この発言が他の誰かだったら、そんなに怖かったのかと思うところだ。でも、学秀が言うことは真逆。何も怖くなかったから、楽しさを理解できなかったのだろう。

「つまらないね、学秀って」

「このぐらい冷めていた方が、もっと時間を有効に使えるからね。殺せんせーがどうして肝だめしをさせたいのか考えるとか」

「予想は？」

学秀は人を小馬鹿にしたような笑みを浮かべた。性格悪そうだけど、頭が良さげな笑い方。

「吊り橋効果だろうね。カップルを増やそうと考えたんだろうが、安易過ぎる」

「ふうん。じゃあさ。カップルのふりして殺せんせーを騙してみようよ。その隙に殺す」

対先生ナイフを見せる。学秀はやれやれと肩を竦めた。

「……それは酷な作戦だな」

「そうかな？ 学秀がそう言うんなら、やらなくていいけど」

学秀はわたしに手を差し伸べた。

「手でも繋ごうか。それなら、らしいだろう？」

「そうだね」

わたしは学秀の手のひらに手を乗せる。あ、ちよつと恥ずかしいかとも思った。わたしより少し大きな手が、指がわたしの指に絡まっていく感覚。恋人繋ぎって言うんだっけ。

多分、わたしは学秀と手を繋いだことがない。覚えていないだけかもしれないけど。どっちなんだろうと考えながらそのまま洞窟の中に入っていく。

「暗いね」

「確かに思ってたより暗いな」

しばらく歩いていくと、前方から「キャー!! 化け物出たーっ!!」と誰かの叫び声が聞こえてきてびびる。

って、この声殺せんせーじゃ……?」

「お化け役が怖がつてどうするんだか」

恐怖が薄れて拍子抜けしてしまった。

「あんだだけ張り切っておいて、本人が1番怖いのが苦手なんだろうな。まあいい。安心して……何だこれは」

学秀の視線の先にあったのはベンチだった。ただのベンチじゃない。ラブリーなハートでいっぱいベンチだ。

その先には扉があり、完全に扉は閉じている。学秀がこちらにアイコンタクトをしたので、繋いでた手を離して扉を2人で力づくで開けようとした。しかし、この扉全く開かない。前に押そうとしても、引こうとしても、スライドしようとしても、びくともしなかった。

「力づくじゃ無理、となるとこのベンチか。まさかベンチで扉を叩き割れって言うんじゃないだろうな」

「いやいや、そんなことできるのE組に数えられるぐらいしかいないよ」

「とりあえず座ろう。ベンチでやることなんてそれぐらいだ」

学秀とわたしはベンチに座ることにした。カップルベンチだと気まずくなるかと思っただが、口からするつと話題が出てくる。

「さつきはびっくりしたね。ほら、カルマ君の」

「まさか外部受験で戻ろうと考えていたなんてね」

学秀は見事に話題に食いついた。

「不思議な感じだなあ。来年になったら、E組はみんなバラバラになると思ってたから」

みんなやりたい事が違って、それぞれの目標があって、行く道も違ってくる。だから高校選びで必然的にばらけると決めつけていた。

離れると思っただ人たちが、まだ側にいてくれるってこんなに嬉しいことなんだって気付かされる。

「僕は渚のことを手放せる気がしないな」

手が自然と重なってどきりとする。まるでこの手でわたしを手放さないように繋いでいるみたいだ。

「大学になったらどうしても離れちゃうとは思っけどなあ。学秀だったら良い所行きそうだし」

「僕は海外の大学に行くつもりだ………一緒に行けたらいいとは思ってるが」

学秀がわたしの頭をどれほどのレベルだと思ってるかは知らないけど、さすがに海外の大学は……

ほんの少し考えて、案外悪くないかもなんて思ってしまった。海外には行ったことがない。でも、E組で色々な殺し屋に会っていると、世界はきつと広いんだろうなって思う。そんな広い世界を見たいとも。学秀と一緒になら、何でも出来る気がする。

「海外の大学かあ。ちよつといいかも」

「できればその先も、一緒に――」

学秀の眩きを遮るかのよう、扉が開いた。わたしは立ち上がる。「開いた！ これすごい仕掛けだね」

「……そうだな」

ベンチに座ったままの学秀の顔が少し薄暗くなった。意識の波長に失敗と焦りの色が浮かぶ。

「何か、言いかけていたよね？」

「いや、いいんだ今は。雰囲気を押されて色々飛ばそうとしてた気がする」

学秀はベンチから立ち上がった。何のことだろうと首を傾げる。学秀がそう言うのなら、気にしないけど………今はいいって、いつなら。

「いつならいいの?」

思ってたことが口から勝手に飛び出た。

「………来年の卒業式の日」

それはE組の終わりの日。もしかしたらその頃には殺せんせーを殺さなきゃいけないかもしれない。だとしたら、本当に終わりの終わりだ。そんなに大事なことなんだね。

「結構先だね」

「それでも早すぎるぐらいだ」

遅いよ。だってその頃には全部思い出せてそうだから。その言葉を聞くのはきつと、わたしじゃない。

「待ってる。新学期から、またよろしくね。学秀」

わたしは改めて学秀の方を見た。何故かいつもと違って見えた。



夏の終わりのはなし。

部屋を片付けていると、コンコンと窓をノックする音がした。黄色い頭が窓の向こう側に見える。殺せんせーだ。

わたしが窓を開けるなり、メルが殺せんせーに足蹴りを食らわし、それを殺せんせーが持ち前のスピードで回避した。毎度お馴染みの光景である。

「こら、メル。お行儀悪いからやめて。殺せんせーも窓から入る癖直そうよ」

「ついついこっちから来てしまうんですよねえ」

わたしは冷蔵庫から冷たい麦茶を出し、コップに注ぐ。メルには猫用ミルクを与えた。殺せんせーはそれを1秒足らずでごくごく飲み干してしまった。

「それで、相談というのは？」

「相談っていうのは方便みたいなものかな。ほら、わたし来学期からA組に移動するでしょ。E組には監視役として行くけど、学秀と同じで在籍はできないから少しだけ立場も変わっちゃうんだよね」

さらっと嘘をつくわたしに、殺せんせーは訝しげだったが白い箱を見た瞬間どうでも良くなつたみたいだ。

わたしは白い箱からカットされたケーキを2つ取り出す。2種類のメロンがふんだんに使われたスポンジケーキは人気店の夏限定商品で、手に入れるのに苦労した。

片方に小さく印が書かれていて、わたしは印が無い方を殺せんせーに差し出す。

「これはせめてものお礼。1学期だけだったけど、殺せんせーが担任ですごく楽しかった。来学期からは監視役としてよろしくね」

「渚さん……！ 先生は感激しました!!」

感極まって号泣している殺せんせーを宥めて、フォークを差し出す。幸せそうに殺せんせーはケーキを頬張った。わたしは自分のケーキをゆつくり食べながら、ニコリと微笑を浮かべる。

3口目ぐらいで殺せんせーの顔色がぶどう色に変色し、頬がもつち

りしてぶどうグミみたいな透明感が出ている。紫色の殺せんせーは気にせず完食すると、味の感想を述べた。

「こんなに美味しいメロンは久しぶりに食べました。甘めのメロンに合うよう生クリームの甘味が控えめなんですね。スポンジのふわふわさも絶妙です。メロンの上にかけていたシロップは殺し屋たちがこの前使わなかった方の毒ウイルスですかねえ」

「うん、正解」

「どこでこれを？」

「奥田さんがスモッグさんからもらってシロップに改良したんだって。超強力な殺せんせー用に。巧みに毒を盛ってきて、殺せんせーの変化と毒の盛り方についてのレポートを提出っていう交換条件、って学秀の入れ知恵で」

毒を欲しいと言った時は奥田さんの「毒はあげます！でも交換条件としてレポートを書いてきてください！」という抜け目の無さと意外性に感心したものだ。後でそれは学秀の入れ知恵だと分かったけど。随分前に学秀に毒を提供した時に、「何でも無償で提供するのは良くない。交換条件を提示すべきだ」とお説教を食らったらしい。学秀は交換条件とか好きそうだからね。

「奥田さんは真面目ですねえ。毒殺上手な渚さんから学びとろうとよく頑張っています」

「毒殺上手って……誰も成功してないのに」

「いえいえ、渚さんの毒殺は素晴らしいですよ。渚さんからもらう食べ物はない毒がないって信じ込んでしまってますよねえ。盛り方が巧妙というんでしょうか」

殺せんせーはシチュエーションに弱いからなあ。

ある時はちよつと良いとこのエクレアを渡し「殺せんせーが買ったエクレアなのに結局食べ損ねちゃっていたから、先生の分」と喜ばせつつ、毒入りだったり。「殺せんせーと行って見たかったんだ」と言っ  
て一緒に激辛ラーメンを食べに行き、喉がカラカラな殺せんせーに毒入りの水をあげたりとか。暗殺関係無しに職員室の冷凍庫にあったジェラートに奥田さんの下剤を盛ったこともあった。

どれにも共通するのが、殺せんせーが全く毒だと疑わずにそれらを食べてしまったこと。匂いとか疑う前に食べてしまうことが多いが、わたしの毒殺は殺せんせーに理想的だと言われた。せこいだけなことも多いが。

学秀が毒殺をしたことないのも、わたしの暗殺が際立つ理由だったと予想している。学秀はやれば基本的に何でもできるので、毒殺も得意そうだな。

「渚さんがA組の生徒になって、監視役になったとしても、先生はいつでも渚さんの暗殺を楽しみにしていますからね」

「ありがとう」

殺せんせーのその言葉だけで、胸がいっぱいになった。

来学期から監視役としてE組にはいるけど、わたし自身はA組の生徒になる。クラスメイトという枠から出る。それだけで、わたしだけこの暗殺教室の一員から抜けてしまうような疎外感を覚えた。

1学期の最初を思い出す。みんなの学秀への一歩距離を置いた態度。それが自分に向けられるのが、どうしても想像できなかつた。

A組に行くことに関しては何とも思わないけど、みんなとの繋がりが薄くなるのは嫌だなあ。

わたしはぎゅつと拳を握る。

記憶があやふやだからこそ、今、わたしの目に見えるものは大切にしかかつた。そこにあるんだって、実感できるから。

「渚さん、やつぱり悩んでいますよね」

「さすがだね、殺せんせー」

「先生ですから」

殺せんせーは自信を持ってこちらを見つめる。何を言っても受け止めてくれそうな顔だ。その顔を見て、ついついカルマ君みたいな悪知恵が思い浮かぶ。さも深刻そうに話を切り出した。

「実は妊娠しちゃって」

「にゅやっ?!?!」

殺せんせーは唾然として飲んでいたコップを落とし、すぐにマッハで回収する。慌てて窓から飛び出て、2秒で戻ってきたときには図書

館からの大量の本を抱えていた。どれも妊娠関係である。

わたしは笑いを噛み殺す。

「嘘」

「渚さん!!驚かせないでください」

「みんな、わたしとの関係は変わらない、って笑って言った。クラスメイトじゃなくなっても、前と同じだって。本当にそう思う?」

本題に入ると、先生らしいどっつかずな答えを出した。ほんの一瞬だけメルを見たのは気のせいだろうか。

「関係性が変わらないと断言することはできません」

曖昧ではあるけど、そうとしか言えないだろう。わたしは殺せんせーに相談する内容じゃなかったかと肩を落とす。

「そっか」

「でも、渚さん。皆さんは渚さんが思っている以上に渚さんのことが大好きなんですよ。渚さんが危険な状況に陥ったら、絶対に助けに来ると断言できるぐらい。その事実があれば、関係性なんて些細なことだと思いませんか?」

殺せんせーの言葉に圧倒されて、わたしは何も言えなくなった。カエデのことを思い出したからだ。

そうだよ。カエデとの関係性が変わっても、わたしはカエデのことが好きなままだ。

もしも、みんなが同じように思ってくれていたら。

「実は磯貝君に渚さんから渡すべきだと、あるものを託されています」

「これ……」

大きく目に入ったのは「ありがとう」という文字だった。よく見ればそれは浅野君宛の寄せ書きだと分かる。高校でもよろしくという内容のカルマ君の書き込みに、野球の練習を感謝する杉野君の言葉、機械的な字の綺麗さを見せつけた律に、簡潔に「ありがとう」としか書かれていない雑な寺坂君のコメントまで、クラス全員からの寄せ書きが揃っていた。

「渚さんは浅野君と同じクラスに行くわけですから、書かなくてもいいそうですがどうですか?」

「書こつかな」

「分かりました。どうぞ」

水色のペンを渡されて、書き込む場所を探す。みんな余白が残らないぐらいいっぱい書いたみたいで、なかなか場所が見つからなかった。1つ良さげな場所があったが、それはメルが赤いインクまみれの肉球を押し付けたことで消える。やっと見つけたもう一つ隙間に、わたしはたった一言書き込む。

学秀とはずっと一緒に気がするよ。渚

「それだけですか?」

「いいんだ、これだけで。これを新学期に渡せばいいの?」

「そうですねえ、片岡さんは花火大会で渡すようにと言っていましたよ。もちろん、浅野君を誘うところからやってくださいね」

殺せんせーがゲスい顔でクスクス笑う。

カエデと買った浴衣を思い出す。浴衣なんていつ着るんだろうと思っていたけど、そういうことか。

学秀と夏祭り……かあ。

行きたい気持ちはあるけど、何だかむずがゆいような気分になった。この気持ちが入手く説明できなくてもどかしい。

「分かった。誘ってみる」

「はい。ではまた明日」

殺せんせーはまた窓から颯爽と出て行った。メルは窓の外を殺せんせーの影も形もなくなるまで、ずっと眺めていた。

\*

夏祭りの日、家で着付けを済ませたカエデがわたしの部屋で着付け初心者のわたしを手伝ってくれた。去年まではお母さんに任せていたので、あまりよく着方を理解していなかったのだ。

「カエデは着付けが上手いね」

手慣れた手つきで裾の長さを調節するカエデに言った。カエデは少しはにかむ。

「お姉ちゃんに昔教わったの。渚もちゃんと見て覚えてね。来年も着るんだろうし」

カエデの言葉通り、わたしは真剣にどうやって綺麗に着付けるのかをカエデの動きから探る。自身の女子力の低さを実感してしまった。

「ほんとに良かったの？ 浅野君と2人で行くかと思ってたのに」

「2人きりじゃない方がいいんだ」

「え……何かあった？」

「何もないよ。でも何だか、その、2人きりだと恥ずかしいと思って」

カエデは目をまん丸くして、こちらを凝視した。何も言わなくても「あなたほんとに渚？」と疑っている目だと顔を見れば分かる。演技を取り払った彼女の表情は驚くほど豊かだ。

「渚がまた成長して嬉しい」

着付けが終わると、カエデはわたしの髪を編み込みし始める。

「何だか母親みたいなコメント」

「ふふつ、でもだめだよ。もうちよつと気づかないと」

「気づく……？」

「言ーわないっ！ 私は渚がずっと気づかないままの方がいいから」

「はい、できた」

ふわりと巻かれた髪が右横で揺れる。よく見るとゆるく編み込みがされていて、横ポニーテールでも手が込んでいた。

「カエデはいつもの髪型でいいの？ ほら、前遊んだ時は髪おろしてて大人っぽかったのに」

カエデの髪を下ろしてる姿がとても好きなので、わたしは残念そう

にツインテールを見やった。ツインテールでも可愛らしいけど、髪下ろすと色気が加わって大人っぽいのだ。

「この髪型は茅野カエデを演じる上で必須なの。下ろしたら雰囲気変わっちゃうから。そうだ、ついでにメイクもしよっか？」

「メイク道具何も持ってない」

カエデはかごバッグを見て、自分も持っていないことに気がつく。

「あー、私も持って来るの忘れちゃった！ 今度一緒に買いに行こ。リップも？」

「多分どこかにあつた気がするけど。どこかな？」

「ちよつと待って……もう、ぜんっぜん前と変わってない」

カエデは悪態をつきながら、自分のかごバッグを漁った。中から可愛らしいピンクのリップスティックを取り出す。

「これ昨日買ったばかりで、まだほとんど使っていないからあげる。

リップぐらい塗つとかなないと、またビッチ先生に怒られるよ」

「いいの？」

「家にいくつかあるから大丈夫」

カエデがくれたリップクリームは薄く色が付くタイプで、ほのかに甘い香りがした。鏡を前にしてリップスティックを唇の上に滑らせる。ちゃんと付いているか確認のために唇を擦ろうとして、カエデに怒られた。リップクリームを直す時は指でなぞるのだという。

「そうそう、いい感じ」

わたしの唇を見つめて、カエデが頷く。綺麗に付いたみたいだ。

「そろそろ行かないと遅刻するよ」

今出ると待ち合わせ時間ギリギリ前には着きそうな時間だ。学秀は真面目だから、5分前には着いてそうだけど。

「渚の浴衣、それにして良かったね」

「悩んでたよね、カエデが」

家からの道を歩きながら、カエデは何度もわたしの浴衣と帯を眺めていた。白地に淡い水色と薄紫の朝顔がプリントされている浴衣は、赤紫の帯とよく合っていると思う。決めたのは主にカエデなんだけど。

一方でカエデの浴衣は薄ピンクにオレンジ系統の花がのっている、まさに、茅野カエデらしい”浴衣だ。一度雪村あかりの私服を見てしまうと、彼女の役作りの凄さを実感する。

わたしにカエデの呼び方を変えさせないのは名前を気に入っているからって言うていたけど、本当は演技を崩したくないからなんだろうなあ。

カエデは強がりだ。

屋台の多い通りに近づくと、焼きそば屋の前で外国人に道案内をしている濃紺の浴衣姿の学秀が目に入った。どうやらフランス語を話しているようだ。こちらに気がつくと話を手く切り上げ、観光客と別れる。

「すごいね、浅野君」

カエデが目キラキラして褒める。学秀は賞賛の言葉を軽く受け流した。

「茅野さんも一緒だったようだね」

「浴衣の着付け手伝ってくれたんだ」

「2人ともよく似合っているね。浴衣姿も可愛いと思う」

学秀は顔を少し背けて、声のボリュームを落とす。言い慣れていない言葉を言うたどたどしさが珍しい。

「学秀もかっこいいよ。浴衣持ってたんだね」

「染井さんにお下がりを着せられたんだ」

学秀の笑みが深まった。笑顔なのに冷気を感じる。

お下がりがって、まさか理事長の？ とは聞かなかつた。聞くまでもなくそうなのだろう。確かにこの浴衣は理事長にも似合いそうだ。

普段目の敵にしている父親のお下がりはあまり着たくないのだろうか。

「もう夕食は済ませたのか？」

「そういえばまだ。たこ焼き買おっかな」

焼きそば屋のすぐ近くにあるたこ焼き屋を指差す。

「僕もたこ焼きにしよう」

「じゃ、私は焼きそば買っね」



「すみません、たこ焼き2つ……殺せんせー?!」

店主に向かつて100円玉3枚を差し出すと、それは曖昧で大きすぎる指、いや、触手によつて回収されていった。殺せんせーだ。ところどころ乱れているから分身の。

「ああ、渚さんと浅野君。1つずつおまけしておきますね」

マツハでおまけのたこ焼きを上に乗せ、わたしたちに渡した。横の焼きそば屋ではカエデが殺せんせーの登場に苦笑いしている。

「よく見るとここの屋台、6、7割殺せんせーが店やつてるよ」

カエデの言葉にあんぐりと周りを見渡す。かき氷屋の殺店主にわたしがし屋の殺店主。豚汁を作る殺店主までいる。

あちらこちらに殺せんせーの顔。分身はスカートの巻き方が微妙に異なっていたり、変装が雑だったりする。絵本にこんなのがあった気がする。「ウォーリーを探せ」みたい。

「よっ、浅野。渚ちゃんからもうもらったか?」

確保したテーブル席で食べていると、私服姿の磯貝君が学秀に声をかけた。手には大量に詰め込まれた金魚入りのビニール袋が2つぶら下がっていて、隣には前原君がいる。

「あ、忘れてた!ごめん、磯貝君」

「何か僕に渡したいものがあつたのか?」

学秀は磯貝君とわたしを交互に眺め、首を傾げる。

「うん。明日学校で渡すね」

「分かった。明日の放課後、家でまた勉強会をしようか」

「じゃあその時にね」

「お前の考えそうなことだ。何となく見当がついたよ。ともかく感謝する」

「バレたか。A組でも元気だな」

学秀は磯貝君にお礼を言い、磯貝君は肩をすくめる。サプライズでなくてもいいという結論に至つたのだろう。

「金魚すくいしてきたんだ。すごい量だけど、大丈夫? 多すぎない?」

カエデが金魚を飼うスペースの心配をする。磯貝君は爽やかな笑

顔のままだったが、前原君の顔が苦笑い気味で金魚から目を背けている。

「うちは弟妹がいて育ち盛りだから、このぐらいあると助かるんだ。焼くと美味しい」

「そーなんだ」

カエデが腑に落ちない顔で頷いた。一拍遅れて3人とも気づく。

え？ 食べるの？

「あ、速水さん！ も来てたんだ」

カエデが話を逸らそうと、近くにいた速水さんに声をかけた。隣に千葉君がいて、思わずデートかと勘ぐってしまう。しかし、手に抱えている物を見た限りだと、スナイパー同士で狩りに来たようにしか見えな。いや、どうやら射的でかなり稼いだらしい。あまりに稼ぎすぎて、射的で出禁になってしまったとぼやいていた。

「今日はメルも一緒なんだね」

速水さんがクールな表情を緩ませる。彼女の目線の先には優雅な灰色猫がいて、「にゃー」と速水さんに媚びを売っていた。

「気づかなかった……」

「メル、夕食まだなんじゃない？」

「ええ……キャットフードなんて持ってないよ」

「自販機なら売ってるかもよ。ほら、ちょうど近くに真新しい自販機がある」

糸くじのお店の横にそびえ立つ、黒い最新式の自販機ははたから見ると祭りの雰囲気から浮いていた。

近くに行くと「あなたにオススメのメニュー」としてキャットフードが出てくる。100円を投入すると、カップ一杯分のキャットフードが下の受け皿から出てきた。最近の自販機はすごい進化しているらしい。

「いや、違う。律でしょ」

「よく分かりましたね」

画面から律が登場する。まさかバレると思っていたいなかったみたいだ。

「律も来てたんだ」

「自販機業はこういう日に儲かるので！ 売り上げアップ期待です！」

律の言動に苦笑する。わたしはふと、前々から思っていたことを口にした。

「律って守銭奴なの？」

「守銭奴……検索しました。金銭を貯めることに異常な執着を持つ人、ですか。お金は大事ですよね」

と律は気持ちの良いぐらいの笑顔で認めた。

認めちゃっていいのか。それにしても、律にお金の使いどころなんてないはずなんだけども。貯めても仕方がないのに。

もしかして、殺せんせー。律の自販機の売り上げ横取りしてる？

モヤモヤしながらメルにキャットフードをあげていると、聞き慣れた声が糸くじのお店から聞こえてきた。

「俺、今五千円使って全部五等以下じゃん。残りのくじ数から四等以上が出る確率を計算すると……なんと0.05%以下。ほんとに当たりなんてあるのかな？ おまわりさん呼んで確認してもらおうかな？」

特徴的な赤髪と、少し冒険したファッションの個性の強さにはものすごく見覚えがあつた。もしかしなくても、カルマ君だ。

あ、うん。E組にこんな生徒がいたら律も影響されて仕方ないよね。見なかったことにしよう。

容赦なくクラスメイトを見ないふりして、わたしは学秀とカエデのいるところに戻った。いつのまにか他のみんなは違う場所に移動し、軽食を食べ終わった2人はにこやかに会話をしている。2人を驚かせるつもりで、忍び足で近くまで寄った。

「茅野さんは最近、随分と渚と仲良いみたいだね」

含みのある言い方で、学秀が微笑みながら言った。わたしは足を止めて首をかしげる。学秀の言葉には一滴の毒がポツリと浮かんでいて、カエデは気づいていてか満面の笑みで返事をした。2人がわたしに気づく気配はない。

「うん、親友だからね」

「この前の鷹岡の件で、僕は君に借りがある。だから何も追及するつもりはない」

「私、浅野君に追及されるようなことしたかな？ 渚と一緒にいると女子でも嫉妬する？ ふふっ、意外と大人気ないね」

カエデははぐらかすようにクスクス笑い声を上げる。2人の会話には温度差があつて、カエデはわざとそれを作り出していた。学秀は流れを変えるように低い声で言った。顔は微笑を湛えたままだ。

「理事長室での話は聞いたよ」

カエデの笑みが固まり、学秀の方をゆっくりと見つめる。驚くべきことに、意識の波長は整っていて、乱れはない。想定範囲内だったとでも言わんばかりに。

「そう。知ってたんだ。それで、誰かに言うの？」

右手を首に当て、カエデは困ったなあというようにため息を吐く。いつ触手で学秀の首が真つ二つにされるんじゃないかとハラハラしてしまった。

「いや。A組に行く僕が口を出す話じゃない……」

そこまで言つて、学秀ははつとこちらを振り返った。咄嗟に逃げられず、視線を彼からずらす。

「渚、趣味が悪いぞ」

「ごめん。話の途中で遮るのも悪いかなんて思つて」

学秀の顔から取り繕った微笑みが消える。はあと大袈裟にため息を吐いた。

「まあいい。茅野さん。君は渚に危害を与えないと約束できるか？」

「怒るよ、学秀」

学秀を軽く牽制し、カエデと学秀の間に入る。学秀はなおもカエデから視線を外さない。

「ただの確認だ」

「約束するよ。私の、渚への想いは浅野君と同じだから」

学秀は目を見開き、カエデを睨んだ。カエデの笑みは剥がれない。

「あ、花火」

誰かが言った言葉に釣られ、わたしは空を見上げた。空に打ち上がった花火が鮮やかに広がり、夏の終わりを予感させる。

「それならそれで問題だ」

花火の音は学秀の言葉を呑み込んで、掻き消してしまった。

## A組2学期

差別のはなし。

A組としては久しぶりの始業式。E組のみんなが既に整列しているのをよそに、A組の生徒たちは成績の余裕からか、のんびりと並んでいた。

学秀に半ばエスコートされてA組の列に行くと、A組の生徒たちは自然と学秀とわたしのために真ん中に道を開ける。今日もA組は学秀の支配下にあるようだ。

学秀はいつも通りに最前列に並び、わたしは隣に行く。

「わたしは大石だからもう少し後ろなんじゃないの？」

「ああ、渚は知らないんだったね。3年A組では学力テストの総合点順に並ぶんだよ。五英傑は夏休みでいくつか賞を取ったようだから、舞台の方にいる」

「何その罰ゲーム」

最前列に行きたい生徒なんているんだろうか。後ろの方がだらけていても気づかなそうなのに。

「誰がどの位置カーストにいるのかすぐに分かるなんて、とても合理的だと思うけどね」

「渚ちゃん！」

誰だっけ、この子。

後ろからぎゅっと抱きつかれる。声の主の名前を必死に思い出そうと、頭をフル回転して彼女の意識の波長に集中する。何故か彼女は喜びの絶頂にいた。喜びというか、尊敬を通り越して崇拜？自分で言ってる意味が分からない。

崇拜という単語で頭に色々と昔の記憶がなだれ込み、眉を寄せる。

思い出した。伊藤姫希だ。

『良かった、渚ちゃんが戻ってきて。渚ちゃんにずっと謝りたかったの。今までごめんなさい』

と姫希さんが早口の流暢なフランス語でまくしたてた。頭の中に

スツと言葉が入っていかずにつつかかる。

『姫希さんフランス語話せたの?』

こつちもフランス語で返す。姫希さんが滑らかなフランス語を話していることに単純に疑問に思っただけの発言だったが、今は聞くべきじゃなかったらしい。

『今そこツツコむ?』

『ごめんごめん。謝ってくれてありがとう。過去のことは水に流すよ。これからもよろしくね』

『こつちこそありがとう。今まで本当にごめんなさい。渚ちゃんは浅野君と同じなのに。これからはどんなことが起きても、私が渚ちゃんを守るから』

……………ん? 神様はまだしも、天使?

思わず近くにいた学秀に視線を送る。学秀は姫希さんの崇拜の眼差しに慣れているようで、気にも留めない。

『僕は何もしてないからな。渚がやったことだ』

学秀はフランス語で匙を投げる発言をした。自分の思い通りに物が進んで行かなかった時の表情で、どこか遠くを見つめていた。

『わたし何かした?!』

『小学校からずっと見てきたけど、今まで浅野君と本当の意味で肩を並べた生徒なんて1人もいないんだ。だから、渚ちゃんはすごいんだよ。いくらでも情報提供するから、どんどん使ってね』

輝く笑顔が眩しい。そっか、学年1位ってそんなにすごいことだったんだ。

学年2位だった時との対応の違いが大きすぎて戸惑う。順位が少し変化しただけで、こうも変わるのかと。

学秀は目ざとくそれを察し、姫希さんに指示を出す。

『やっぱり気づかずかずに学年1位を取ったのか。伊藤さん、どうやら渚は今まであまりこの学校のことをよく理解していなかったみたいだ。教えておくように』

『分かった』

学秀はそう言い残すと、表彰で呼ばれて舞台の方に行ってしまった

た。期末テストでE組がA組と引き分けに終わったが、A組の生徒たちからは何の悪感情も見受けられない。

よく躰けられているなあ、なんて言い方悪いけど。内政はぼっちり維持できているみたいだ。

『A組はもつとE組に敵意を向けてきてもいいと思ってたんだけどなあ』

フランス語で姫希さんのみに伝わるように漏らすと、姫希さんは柔らかに微笑んだ。本当にちよつと前とは別人みたいな反応だ。

『E組の上位が2人移動するんだから、A組の戦力は倍増になるし、敵意なんて向けるほどの相手でもないでしょ』

なるほど。ナチュラルにE組を見下しているのか。あれ、今……

「2人つて？」

姫希さんは人差し指を唇に当てて、壇上を視線で示した。わたしは壇上に注目する。

「今日から、3年A組に新たな仲間が加わります。昨日まで2人はE組にいました」

スピーカーを通して、荒木君のハキハキとした声が流れる。荒木君と目が合い、ニツコリと笑みを向けられた。

「1人は学問の天使として聞いたことがある人も多いでしょう。彼女は自らE組を変えるためにE組落ちを決断し、E組の成績向上への貢献が認められて、生徒会入りが決定しました」

すごい盛られてる。

「もう1人はたゆまぬ努力の末に五英傑に次ぐ好成绩を取り、本校舎に戻ることを許されました。では2人に喜びの言葉を聞いてみましょう！　まずは――」

へえ〜と聞き流していたら、わたしも話さないといけないことに気がつき、荒木君の残りの声を聞き逃した。姫希さんは状況を察したのか、無言で気の抜けたわたしを舞台の方に連れて行く。舞台裏の方に行くと、学秀がよそ行きの笑顔で待ち構えていた。

「聞いてないよ！」

「言わなかったからな。分かると思うが、竹林の後に渚にもスピーチ



をしてもらいたい」

「竹林君がA組に来るの?!」

「渚ちゃん、ここ舞台裏だから……」

姫希さんがわたしの口を押さえてたしなめる。わたしは壇上でマイクの前に立つ竹林君を見つめた。手にはA4の紙がある。

「あ、なんだ。カンペ付きか」

ほっと安心したのもつかの間、学秀の黒い微笑みにどきりとする。学秀も姫希さんも何も持っていない。

「渚には何も用意していないよ。あれは理事長に頼まれたものでね」  
「わたしだけアドリブなの?!」

「まあ落ち着け。竹林のスピーチを聞いてから、渚は渚の言いたいことを言うといい」

学秀が目を細めて竹林君の方向を見守る。竹林君は少し猫背気味で、マイクの位置を少しずらしてからカンペを読み始めた。

「僕は4ヶ月余りをE組で過ごしました。その環境を一言で言うなら地獄でした」

「……嘘だ」

わたしは小さい声で漏らす。竹林君はE組を楽しんでいた。そのはずなのに。

「やる気の無いクラスメイトたち。先生方にもサジを投げられ、2年の頃まで怠けていた自分の代償を思い知らされました」

ぎゅっと拳を握りしめる。横で姫希さんがわたしの手を握りしめた。落ち着いてという意味だろう。

「もう一度本校舎に戻りたい。その一心で生活態度を改め、死ぬ気で勉強しました。こうして戻って来られたことを心底嬉しく思うと共に、もう二度とE組に落ちることのないように、A組で精一杯頑張ります。以上です」

ぎこちないお辞儀でスピーチは終わった。生徒たちは茫然と竹林君を見つめている。このスピーチだけでは竹林君を本校舎の仲間として認められなかったのだろうか。

パチパチと、しつかりと音の鳴る拍手をして、学秀は舞台の方に歩

いていった。全校生徒の視線を一身に浴び、学秀は用意していた台詞を言う。

「おかえり、竹林君」

それが合図だった。生徒会長の歓迎の言葉で、生徒たちが大きな拍手で竹林君を出迎える。いくらそれが理事長の筋書き通りの展開だとしても、誰もそんなこと気にもしない。観客は流されやすいだけだ。

「おかえり、よく頑張った!!」

「お前なら戻ってこれるって信じてたぜ!!」

熱烈な歓迎の言葉の数々に、竹林君は照れ臭そうにA組の列に溶け込んで行った。前回の期末テストで彼の順位は高く、前の方で毛利君が話しかけているのが目に入る。わたしはその様子にほっとした。A組の生徒はE組以外の生徒には、普通に接してくれる。それも今回学年トップ10に食い込んだとなれば、一目置かれるはずだ。

「渚、準備はいいか？」

「うん。竹林君のスピーチを聞いていたら、言いたいことが出てきた」

「やりすぎるなよ」

「頑張って、渚ちゃん」

「それでは大石渚さん、どうぞ!」

荒木君の言葉で壇上に上がると、大勢の生徒たちの顔が目に入った。3年A組では堂々としている生徒もいれば、後ろの方で萎縮している生徒もいる。2年生、1年生はどんなことを話すのだろうとワクワクするような顔でこちらを見つめていた。

「二学期までE組にいた大石渚です。突然ですが、この中に自分はE組に入りそうだなって思ったことがある人はいますか？」

2年生、1年生はそれぞれ顔を見合わせて周りを伺いながら、恐る恐る三分の一が手を挙げる。E組のクラスメイトたちは面白がってみんな手を挙げていた。

「こうやって見ると結構いますね。わたしは去年まで、自分がE組に入るなんて思ってもみませんでした。「エンドのE組」ってよく呼ばれていますよね。毎年、E組から本校舎復帰する生徒は数えられるほ

どしからないそうです。E組に落ちると、這い上がることもすら諦めてしまふんだとか」

E組に視線が集まる。1、2年生の生徒たちは「ああはなりたくないな」という顔で、3年生は自分たちがならなかった姿を見る顔で。「でも、今年のE組は少し違うんですよ。殺る気に満ち溢れていて、みんな目標のために一生懸命で。球技大会の時も、期末テストも、誰も1度も諦めませんでした。だから皆さんに言っておきます

「E組はもう「エンドのE組」じゃなくなります。この先、もう皆さんはE組のことを馬鹿にはできません。最底辺が頑張ったところで自分たちには敵わないって、決めつけていませんか？ 3年生は期末テストのことを覚えているといいのですが」

3年生のB組からD組を中心に、彼らの表情がハツとしたものに変わっていった。彼らの半分は期末テストでE組に負けている。既に負けているのだ。A組も何人かに順位を抜かれた生徒がいたようで、視線を落とす。自分は関係ないと現実から目を背けている生徒ばかりかと思いきや、現状をちゃんと把握できる素直な生徒もいるようだ。

「皆さんがE組を見くびっているようなら、こちらはいつでも下剋上できるってことを忘れないでくださいね。以上です」

シーンと、竹林君の時以上の静けさが周りに広がっていた。少し言い過ぎたかなと舞台裏に戻りながら思う。

1番始めに拍手をしたのは進藤君という、球技大会でE組に負けた野球部部长だった。それに賛同するように野球部メンバーの拍手が続き、下級生らの大きな拍手が鳴り響いた。

最後まで沈黙を守ったのは野球部以外の3年生だった。一度敗北を経験している生徒たちは悔しそうにE組を睨みつけ、ある程度成績上位にいる生徒たちは「E組ごときが」と見下した目を向ける。

E組は周りの変化にただただ目を丸くし、それでも堂々と立っていた。

舞台裏では頭を抱えた学秀と、素敵と目を輝かせる姫希さんが待ち

構えていてわたしは怯む。

「やり過ぎだ」

「そんなことないよ、浅野君。E組にまで慈悲深い。さすが学問の天使と思われたんじゃないかな」

姫希さんの解釈はさすがに考え方がお花畑過ぎるのではと苦笑いする。学秀は首を横に振った。

「いや、これ以上ないほど鮮やかな挑発だった」

「ごめんなさい……」

「大丈夫だよ。それは浅野君が何とかするはずだから」

伊藤さんはわたしをフォローする。学秀は面倒ごとを押し付けられて嫌そうに顔をしかめた。

「僕に放り投げるな。理事長に呼び出されたら、問答無用で渚も連れて行くつもりだ」

「うん、それは仕方ないかな。渚ちゃんを先にA組連れて行ってもいい？ 面倒な子たちが来る前に、話しておきたいことがあるの」

「構わない。始業式もすぐに終わるだろうしね」

「じゃあまた教室で」

伊藤さんに手を引かれ、わたしはA組の教室まで歩いていく。学秀と離れても彼女の意識の波長は変わらず、好意的な感情がわたしに向けられていることに内心驚きが隠せない。

「大勢の前で話して喉乾いたんじゃない？ 飲み物買って行こっか」

食堂前の自販機を発見して、姫希さんは午前ティーシリーズの無糖を買う。わたしはレモンティーのボタンを押した。姫希さんは深呼吸して、重大な話を打ち明けるように低めの声で話し始めた。

「今更なだけどき、入試の時、渚ちゃん私のこと見かけなかったでしょ。浅野君とは会ったみたいだけど」

「覚えてないけど、試験会場広かったし、受験生も多いから普通じゃない？」

「私ね、フランスからの帰国子女なの。だから渚ちゃんが初めて浅野君にフランス語で話しかけた時、もしかしてって期待した」

その後起こったことを思い出して、頭が痛くなる。姫希さんがわ

たしをどう思ったのか想像できる。

姫希さんは英語の本を読んでいるわたしに興味を持って声をかけた。フランス語も話せる同じ帰国子女かと思ったら、何故か学秀とスペイン語で話し始めて、しまいには中国語も話せるとか言う。自分のことながら規格外過ぎて、普通なら友達になるのも躊躇しそうだ。自分だったら遠巻きに眺めてしまう。

「あれ、学秀と毛利君と同じ小学校出身なんじゃないの？」

「一応ね。6年生の最後の半年だけ。2人とは幼稚園まで一緒に、家も近所だからそれなりに付き合があつて。帰国子女つてことを黙ってもらつてたんだ」

そういえば、初対面で同じ小学校出身つてことをやけに主張していたつ。彼女が帰国子女だと隠していた理由を、わたしは何となく理解した。小学校に転校した時に何かあつたのだろう。

わたしたちは飲み物を持ったまま、教室へと向かった。今の席順は1番前の左から順に成績上位者が座っていると姫希さんに言われて、1番前の左から2番目の席に座った。姫希さんは立つたまま話を続ける。

「瀬尾君がいる時点で、隠す必要もなかったんだけどね。柊ヶ丘は語学ができる生徒を尊ぶから。成績が良ければ周りが何か言う前に牽制もできるし、柊ヶ丘はすごくやり易い」

「そうかな？」

「渚ちゃんは成績良いのに、勿体無いよね。ずっと気づいていなかったみたいだし」

「気づいてはいたよ。成績の順位で立場が変わるなって認識はあつたから」

無知を指摘されて恥ずかしくなって反論するが、姫希さんは本当に気づいていたのかと疑わしげにわたしを見る。学秀に教えるように言われていたので、姫希さんは教師のように丁寧に解説し始めた。

「柊ヶ丘は完全な学力主義。この学年は浅野君がトップにいるせいか、それが特に顕著だね。テスト一回でスクールカーストは一瞬でひっくり返る」

成績はあくまで参考程度かと思いきや、クラス内の立ち位置にがつり影響していたみたいだ。五英傑が偉そうなのもそれが理由か。

「ずっと学年2位だったけど、わたしは普通だったよ?」

「それは渚ちゃんが謙遜していたから。この学校で、成績に関して謙遜なんてしちやダメ。渚ちゃんさえ堂々としていけば、集団リンチなんて絶対に起こり得なかったんだよ」

「わたしのせいでもあったんだね」

集団リンチの時は姫希さんのおかげで助かったけど、成績のことを口出ししていれば余裕で避けられたようだ。言われてみれば、姫希さんも成績について言及していた。

「そうだよ。だから渚ちゃん、私の上に立ってみる気はない?」

「上って、女子のリーダーってこと?」

姫希さんの発言は予想外だった。あれ程までにリーダーでいることに固執していたのに、こんなに簡単に手放せるものなのかと。

「そう。そしたら、渚ちゃんのことには誰も見下さない。誰も前みたいなのはしないよ」

「そのためには、姫希さんみたいに差別主義者にならなきゃいけない。でしょ?」

「私も昔は違ったよ。でもね、理不尽だと思わない? 帰国子女だからとか、暗いから、ガリ勉だからとかいう理由で格下に見られるなんて。自分たちが他と違うからって理由で虐められるなんて、間違っていると思わない? それに比べたら、桐ヶ丘はずっとステキな場所だよ。勉強さえ頑張れば、上に立てるんだから、ね?」

姫希さんはわたしの両手を握り、賛成を求めて微笑んだ。わたしは頭の中でぐちゃぐちゃの感情を押し込んだ。誰が正しいのか、誰が間違っているのか分からなくなる。E組ではあり得ない考え方だけど、わたしが気づいていなかっただけで本校舎ではそれが当たり前なわけで。前みたいなきことを避けるには、ここではこのルールに従わないといけない。

今考えると、学年1位になったのはこのためだったのかもしれない。

「わたしは差別が嫌い………それでも郷に入っては郷に従えって言うから、なるよ。女子のリーダーに」

わたしが了承すると、姫希さんの表情が明るくなった。

「そう言ってくれて嬉しい。渚ちゃんのために準備したんだ。受け取ってくれる？」

小さく折り畳まれた紙を渡される。それを見て、わたしは本当の意味での差別主義という言葉を目の当たりにした。

そこまでするかと姫希さんのことを恐ろしく思えてしまう。まるで悪魔の契約みたいだ。

「みんなが教室に来るまでに、全部覚えてね」

紙には三学年全ての生徒の名前と、彼らの期末テストでの順位がびっしりと書かれていた。

優遇のはなし。

新学期になって1週間。いまだに一度もE組には戻っていない。A組に入ってから、3年A組と2年までのA組の決定的な差が見えてきた。姫希さんの言っていた学力主義がどんな風なのかも。

「え、もう貸し出しOKなんですか？ 確か10人待ちとか」

図書館で人気のある英書を貸し出し予約したところ、翌日の朝には貸し出し準備が整っていると連絡が入った。2年の時もここまで早くに貸し出せた覚えはない。司書の先生に尋ねると、逆に不思議そうな顔をされる。

「大石さんは優先順位が高いから」

柵ヶ丘では優先順位が高いというのは、もしかしなくても成績のことなのかな。先に待ってた人に申し訳ないから早めに返そう。

「あ、それ昨日の授業で先生がオススメしてたやつ？ 渚ちゃんもう借りたんだ。うわっ、結構難しそう」

図書館から戻ってきて早々に、姫希さんが目ざとく本を見つける。彼女は英語は中の上で出来る方なのだが、フランス語のが圧倒的にできると本人は言っていた。

「予約したの昨日なんだけどね……」

「1位だとやっぱ早いんだ。カフェテリア一緒に行こっ」

机の上に本を置き、わたしたちは生徒手帳だけ持ってカフェテリアに向かった。

姫希さんに聞いたところによると、図書館での貸し出しには明確な優先度があり、3年A組が特に高いのだそうだ。更にならぬ中で成績順位順に貸し出しできる優先度が決まるらしい。それは図書館内の席予約も同じとのこと。

他にも3年の成績上位20名（ほぼ全員A組）は学食が次の試験まで無料だったり、3年A組だけ学園祭の予算が他クラスと桁違いだったり、部活動内の3年A組生徒の数で部の経費予算が考慮されたりと様々な優遇措置が取られている。

それもある意味当然。何故なら、柵ヶ丘からの東大合格者の内、中



学の3年A組出身が占める割合は8割。学校が成績上位者のみに気を回すのも無理はないかもしれない。

E組にいた時はE組とその他しか見えていなかったから、3年A組が良い意味で他と差別されているなんて思いもしなかったな。

「今からお昼ですか、先輩」

「先輩のスピーチかつこよかったです」

「E組の下剋上期待してますよ!」

すれ違う下級生の言葉に笑顔で応じる。こういうのはスルーしてもいいと姫希さんに教わった。

カフェテリアでわたしは支給された学食無料カードを使い、1番人気の栞ヶ丘ラーメンを頼んだ。無料カードを持っていると列に並ばずに済むようで、姫希さんとわたしは待つことなくスムーズにトレイを受け取る。

「天使ちゃん、こっちの席使って」

座る席を探していると、クラスメイトの女子が窓際の見晴らしが良い4人席に案内してくれる。早めに来て席取りをしていたみたいだ。

「ありがとう」

「いつものことだから」

席を取らなくても周りが空けておいてくれるなんて、本校舎は成績上位者に優しい場所だ。

姫希さんは一緒に行くと言ったわたしを席に座らせ、自販機に2人分の飲み物を買った。わたしは姫希さんを見送り、窓の外を見つめる。窓の外には植物が生えていて、部分的に違う色の植物が視界に入った。その中の1人と目が合う。

まさかここまで見に来てたなんて。A組ならこんなこと……いや、わたしが学年1位である限りはそうとも言えないか。

「すごい成績社会」

「栞ヶ丘って偏差値はそこまでじゃない? でも、それってA組とその他の成績の差が大きいからなんだよね。A組は途中で落ちこぼれさえしなければ、東大合格できるって言われてるし。区別したくなるのも当然っていうか」

同じく無料カードを使って、シーフードドリアを頼んだじゅりあちゃんが隣に座る。わたしの一言に解説をしてくれるなんて、話して内容が何にしろ珍しく親切だ。去年まで険悪な関係だったのに、そんなにぼっち飯は嫌なんだろうか。

「じゅりあちゃん、すごくナチュラルに座ってきたね……」

「何。じゅりあがこの席に座っちゃいけないっていうの？ 姫ちゃんは？」

テーブルの上にあるビーフシチューを見て、じゅりあちゃんが姫希さんを探す。

「飲み物買いに行っちゃよ。自販機周辺はまあまあ混んでたから、1人で行った方が早いって」

「…………… 姫ちゃんの順位と知名度なら、混んでも勝手に譲ってもらえるものね。渚ちゃんでもそうだけど」

「どこの貴族か王族？」

思わず漏らす。異常なまでの学力主義だ。

「普通でしょ」

「おまたせ。何でじゅりあちゃんもいるの？」

午前ティーシリーズのミルクティーをわたしによこし、姫希さんはじゅりあちゃんの方を見て首をかしげる。

「勝手に来た」

「2人ともじゅりあの扱い酷くない?!?!」

間違っていない表現だと思うけどなあ。一緒に食べる約束してないわけだから。

じゅりあちゃんが可愛い子ぶってプンスカ怒っているのに苦笑いする。姫希さんは自分より順位が低い相手には大体辛辣だ。期末テストで9位まで上り詰めた彼女に恐れるものなんてないからだ。一方のじゅりあちゃんは学食無料カードを持つ20位以内とはいえ、ギリギリの18位。姫希さんからしたら9位の差は大きいのだろう。

「それはそうと、ほんとにそれだけで良かったの？ 毎日ドリンク一杯奢るなんて、軽すぎない？」

「むしろそこまでしてくれて、ほんとに申し訳ないよ」

姫希さんが言ってるのは、彼女がしたことに對する贖罪についてだ。何でもすると息巻いてた彼女に、昼食の時に飲み物を奢ってくれらるぐらいでいいよと言った結果こうなった。実際のところ、毎日ドリンク一杯って卒業するまでにすごい金額になりそうだけど。いいか、姫希さんお嬢様だし。

「姫ちゃんをパシれるのなんて、渚ちゃんぐらいだよ」

「もつとパシってもいいよ、渚ちゃんなら」

「いや、その内E組戻りし……でも昼食はこつちで食べよっかな」

一食丸ごと浮くのはありがたいし。

E組に戻っても、昼食は本校舎で食べよう。お財布事情のためにわたしは深く心に誓った。

「E組に戻っちゃうの?! 私の代わりにリーダーになってくれるって約束したのに」

姫希さんがそんなバカなとスプーンを持つ手を止める。じゅりあちゃんも正気を疑っている様子だった。

「E組監視役なんて、浅野君に言ったら別の人に変えてくれそうなのに。E組って環境悪いんでしょ？ つまらなそうで刺激もなさそう」

じゅりあちゃんがE組のイメージを述べる。姫希さんは何度も頷いた。

「そんなことないよ。突然プールが爆破されそうになったり、暴力教師に立ち向かったり、クラスメイト人質に殺し屋と直接対決………ぐらいの刺激はあるよ」

「どんな場所なの、それ」

2人が面食らった様子で同時に言う。姫希さんはあまりに変な話だったせいか、少し咳き込んでいる。「冗談」と笑ってみせたが、実際は全て本当なあたりE組は波乱万丈過ぎる。

「だから、姫希さんには申し訳ないんだけど、女子のリーダーは形だけにはできないかな？ じゅりあちゃんとも仲良くなったみたいだし、2人ともリーダーシップあるから、わたしより上手くまとめられると思うんだ」

「渚ちゃんがそれでいいなら」

「じゅりあも別にいいけど」

2人は案外あっさりど、わたしのお願いを受け入れた。

「でも私たち、もともと仲は悪くないんだよ？」

「そうそう。じゅりあのいじめ止めたのも姫ちゃんだし」

意外な事実発覚でびつくりした。言われてみれば、1年の時も2年の時も2人は一応良好な関係を築けていた。カンニング騒動で少しこじれたみたいだが、そこはじゅりあちゃんも反省したのだろう。

「不思議だね。元A組の渚ちゃんがE組に戻りたいなんて。ほら、竹林君はもうすっかり伊織と仲よさそうでA組に馴染んでるのに」

姫希さんは少し離れた2人席に座る竹林君の方を顎で示す。成績が近いもの同士気が合ったのか、竹林君は姫希さんの幼馴染の毛利君と過ごすようになった。毛利君の実家も医者らしいから、話も合いそうだ。

竹林君のあまり見ない笑顔に予想とは違う展開になったと分かった。

「うくん……竹林君はその内E組に戻って来そうだと思ってたんだけどなあ。A組にはメイド喫茶に付き合ってくれるような友達はいなそうだし」

「メイド喫茶ってそんなの……あ」

姫希さんが咄嗟に学秀を盗み見るのを、わたしは見逃さなかった。わたしが「まさか学秀？」と聞く。竹林君が寺坂君と学秀を連れて、バイト先に何度か来ているので今更驚かない。姫希さんは声をひそめてフランス語で答えた。

『この前、竹林君と浅野君に引きずられて、メイド喫茶に入っていく伊織を見かけたんだよね』

まさかの誘う側。

学秀に恋するじゅりあちゃんの前で、わざわざフランス語で話すのも理解できる。可哀想に夢をぶち壊しにしてしまうだろう。

「いきなり何語よ」

「ごめん、大したことない話だから。みんな食べ終わったし、教室戻って次の授業の予習でもする？ 三角関数始まるって聞いたけど」

「三角関数はかなり前に終わったところだから多分大丈夫かな。ちよつとE組に行つてくるよ」

E組でもある程度終わっている気がするけど。E組は外部受験するから殺せんせーが早めに進めてくれたのかもしれない。殺せんせーは授業もたまにマツハで終わらせるからなあ。

「さすが渚ちゃん。ちなみに数学の予習はどこまで進んでるの?」

「数学は確か……マクローリン展開とかいうのやったかな。ころろ、じゃなくて、担任の先生が調子に乗りすぎて範囲が今すごい先に進んでるんだよね。高校飛び越えちゃつてみたいで」

わたしが付いていくの大変だと苦笑すると、じゅりあちゃんは唾然とした様子で、姫希さんはどこかあきれたようにため息を吐いた。

「渚ちゃんつて4ヶ国語話せるし、私はてつきり文系だと思つてただけど……」

「ちよつと前からドイツ語もやり始めて、日常会話ぐらいなら……あ、まだ全然!　ほんと、挨拶ぐらいしか話せない」

訂正を加えようとしたら、2人の魂がどんどん抜けていきそうになったことに気がつき慌てて撤回する。姫希さんは信じてないような目でじつと見つめてきた。

「渚ちゃんは、一体どこに向かつてるの?」

じゅりあちゃんがごもつともなことを言つて首を傾げる。

「どこに向かつてるんだらうね。じゃ、また明日」

「午後の授業は休むんだ。じゃあね」

くるりと後ろを向き、玄関まで歩いていく。自分がどこに向かつていたのかはよく理解しているつもりだ。

ロヴロさんの前で殺し屋になりたいと言つていたぐらいだ。きつと優れた殺し屋になるために頑張つていたんだらうなあ。

記憶をなくす前の大石渚の思考回路を想像して、どれほどの努力をしてきたのだらうと考える。

どうしても、何としてでも殺し屋になりたくて、それも万能の殺し屋として生きたくて、大石渚は大層頑張つたんだ。

全部知識としてその軌跡が残っている。でも「何で」なのか。それ

だけがずっと迷子だ。

「渚、今からE組か？」

後ろから学秀に声をかけられて、ハツと思考を現実に戻す。ちょうど旧校舎までの長い一本道に進むところだった。

「うん、そうだよ。いいでしょ」

自慢げに胸を張る。学秀はどうってことない様子で話を続けた。

「E組に行くなら、寄せ書きの札を伝えてほしい。それから、竹林の件だが……彼はE組には戻らない」

学秀は簡潔に結論を述べた。彼はその答えに自信を持っているようだった。竹林君の様子を思い出し、どこか知っていたような気分になる。

悔しいけど、竹林君は楽しそうだったから。

「学秀はそれでいいの？」

「ああ。竹林は医者になりたいそうだ。沖縄で誰かを救った時みたいに、皆を守る医者には。桐ヶ丘は医学部進学者が一定数いるし、良い環境だと思う。医学部志望はE組にはいないからね。毛利は竹林の同類で、同じところを目指す最高のライバルになってくれるはずだ。メイド喫茶に行く余裕もあるしね」

学秀は最初から竹林君をA組に取り込むつもりだったのか。それも純粹に竹林君のために。

少し信じられないような気がした。今までの学秀がそんな風に動いたことはなかったからだ。

わたしはいつも通り、学秀がA組のために一番合理的だったと思うと思っていたから期待を裏切られた。

「そこまで肩入れするつもりはなかったんだがな。僕がここまでした以上、殺せんせーには何も言わせないよ」

「そうですねえ。竹林君がA組で彼らしさを貫けるのなら、それ以上のことはありません」

「殺せんせー」

どこから見ていたのか、マツハで現れてヌルフフと笑う。頭に葉っぱが付いているところを見ると、どこかでわたしたちの様子を偵

察していたみたいだ。

「教え子を取られたみたいで先生はショックでしたが、竹林君が将来を考えてしたことなら仕方ないですねえ。2人がいるなら安心して任せられますし」

わたしは殺せんせーの穏やかな眼差しに微笑んだ。殺せんせーは学秀を真つ直ぐと見つめている。わたしと同じことを思ったのだから。

「先生は浅野君には何もお手入れができなかったと思っていました。しかし、浅野君は変わった。合理的だからではなく、竹林君の気持ちを考えてA組にいた方がいいと思った。先生はそれがとても嬉しいです」

「何のことだか分からないな」

学秀は口もとに柔らかく小さな笑みを浮かべた。すぐにハツとしたようにキリツとした顔に戻る。

「また機会があったらE組に行こう。今度は客として行くことになるけどね」

「本当ですか！ お土産のお菓子は忘れないでくださいよ！」

「そうだな……それじゃあまた」

殺せんせーから背を向け、学秀は本校舎の方に歩いていった。わたしたちはしばらくその様子を見守っていたが、学秀が見えなくなると旧校舎の方にゆっくりと歩き出す。マッハで帰れるのに殺せんせーはわたしの歩行スピードぴったりに揃えていた。

「それより渚さん、竹林君のあのスピーチは本当なんですか？」

こつそりと確認するように耳打ちする。よつぽど気にしていたように、そわそわしている。殺せんせーらしい。

「あれは全部カンペだよ。それに、A組にすんなり馴染むにはあれぐらいの演出が必要なんじゃないかな」

「そうですか！ 先生気になってしばらく眠れなかったんですよ。そろそろ死ぬかと思いました」

死ぬというキーワードに敏感に反応する。殺せんせーでもこの手のジョークはよく言うのが面白いところだ。

「ああ、それはマズイね。勝手に死なれたら賞金分配されなくなっちゃおうし」

「にややつ、気にするところは賞金ですか?!」

「当たり前当たり前」

わたしはナイフを殺せんせーに向けながら平然と答える。殺せんせーはそれをマツハで避けながら、わたしの髪を三つ編みに編み始めた。恒例のお手入れである。

「わたしはE組に残るよ。先生の受け持つ生徒としてじゃなくても、E組にいる」

殺せんせーは明るい顔色で、わたしの言葉に頷く。

覚えていなくても、頑なまでにE組にいたくなるのは、それだけE組が大石渚にとって大事な場所だからだ。そんなE組でわたしも成長したい。

そう思った。



FRのはなし。

朝7時。お弁当を作っていた時の習慣でつついっぴい起きてしまった。「にゃー」

メルが背中をこすりつけてきたので、撫でて癒される。キャットフードをねだっていると分かっているけど、猫のあざとい行動には弱いものだ。

「散歩でもしよっか」

散歩という言葉にピクリと反応する。犬じゃないから尻尾を振ったりはしないが、嬉しそうなのが雰囲気伝わってきた。

メルはすぐくアクティブだ。旧校舎までの急な坂でも平然と歩いているし、そのくせに毎日学校周辺で情報収集するために他の猫の家に遊びに行く余裕がある。その上毎朝軽いランニングをするわたしに付き合っているんだから、体力は尋常じゃない。

ランニング用のスポーツウェアを着て、街の周辺を小走りする。メルも後ろからついてきた。7時からやっているお店はお弁当屋だったり、カフェが多い。朝食が食べれる場所も多いからか、本当に数人だけど人もちらほらいた。

あれ、花屋さん……かな？

立ち止まったトラックが次々に花を出して行くのを見て、出張サービスかなとあたりをつける。昨日までは見かけなかったので物珍しい。花屋の店員さんらしき人と目が合った。

「出張販売ですか？」

「そうだよ。学生さんかい？」

「この近くの桐ヶ丘中学校に通ってるんです」

彼の意識の波長に微かな変化が見られる。桐ヶ丘は進学校でそれなりの知名度があるからだろう。

進学校の生徒には見えないのかな。

「朝から猫と散歩なんて感心だね。サービスで一輪どうぞ」

花屋さんは白いバラを一輪、わたしに渡す。とても綺麗で、思わず笑みがこぼれた。

「ありがとうございます」

その人はわたしが見えなくなるまでずっと笑顔で手を振ってくれた。

感じの良い人だったな。どこか安心できるというか。穏やかで、それこそ花みたいな人。

我に返って、メルがいつのまにか消えていることに気がつく。近所の人に愛嬌を振りまいていたようで、しばらくして姿を現した。

アパートに戻って、探してきた花瓶に白いバラを生ける。メルにキャットフードをやって、わたしは2人分の朝食を作り始めた。

ピーンポーン。

インターフォンの音に気づいて、火を止める。制服姿のカエデが現れた。少し眠そうだ。

「おはよ〜」

「おはよ。朝食あともう少しだよ」

新学期になってからというものの、カエデは毎日アパートに朝食を食べに来るようになった。カエデも一人暮らしをしているのだが、わたしの料理のが断然美味しいらしい。その代わりに放課後になるとドリンクを奢ってもらっている。

「その花綺麗」

カエデが花瓶のバラをすぐに発見する。わたしはフライパンを片手に返事をした。

「朝、花屋さんにもらったんだ。カエデ、お皿出して」

「はい」

カエデがお皿を用意して、わたしがフライパンから鮭を滑らせていく。それを卵焼き、できたてのご飯、お味噌汁とで食べるのがよくある朝食だ。

向かい合ってテーブルに座ると、カエデの頭の上に数字が現れた。目を擦るがそれは消えない。

これ、絶対姫希さんのせいだな。

「そういえば、烏間先生が言ってた火薬の取り扱い本、どこまで覚えた？」

カエデがお味噌汁に口を付けてからわたしに尋ねる。

「4冊中3冊は大体覚えただけけど、マニユアルだけ量多いからまだ完全には。でもプリンンの暗殺でだいぶコツは掴んだかなって。学秀とか小山君に効率の良い暗記法教わったから、何とかなると思うよ」  
期末テストの順位もやっと全部覚えられたしね。カエデの頭の上の数字を再度見る。

わたしがいない数週間間に、E組では火薬を使った暗殺の話が持ち上がっていた。クラスの中の1人が火薬の取り扱いを完璧に覚えることが鳥間先生の出した条件だったわけで。カルマ君が「そこは学年1位に」と言ったことを発端に、流れるようにその役目がわたしに押し付けられた。解せぬ。

「私もできる限り手伝うよ。こう見えて昔は台本覚えるの得意だったんだ」

「ありがとう。頼もしいよ」

カエデが照れたように微笑む。

朝食を済ませるとわたしは素早く着替え、髪をポニーテールに結んだ。出かける前にリップを塗るのも忘れない。

「準備できた?」

「うん。今日って訓練あったっけ?」

体操着袋をスクールバッグに入れるか迷い、カエデに聞く。

「多分。鳥間先生が言うには、新しい訓練も始まるみたいだよ」

「この前火薬取り入れたばかりなの?」

「渚以外は縁がない話だからじゃない?」

覚えることに加えて、新しいこともやり始めるのか。大丈夫かな。

先の不安にため息を吐く。それが取り越し苦労だったことには、訓練になって気がついた。

「二学期からフリーランニングを中心に訓練をする。火薬に続く新たな柱になるだろう」

フリー……ランニング……?」

「何すか、フリーランニングって」

菅谷君のようにわたしたちの大半は名前自体の意味が分からない

状態だった。鳥間先生は周りを見渡して、分かりやすい目印になる一本松に目を付けた。

「例えば、ここからあの一本松に行くとしよう。三村君、大体でいい。どのように行つて、何秒かかると思う？」

三村君は崖の下とその中間地点を繰り返して眺め、数秒間熟考した。わたしも彼の視線の先を見比べて、50秒ぐらいかなと予想する。横のカエデは1分半はかかると見込んでいた。

「まず、この崖這い下りて10秒。その小川はなるべく狭いところらとびこえて……茂みを避けて右に。最後にあの岩よじ登ると……ざっと1分ですかね？ それで行けたら上出来ですよ」

鳥間先生は三村君の話を最後まで聞いて、微かに口の端を上げた。彼の意識の波長は少しウキウキしているように感じられた。

「では、俺が行つてみよう。時間を計っておけ」

三村君にストップウォッチと外したネクタイを手渡した。崖のギリギリ端に両足を置き、わたしたちの方に身体を向ける。

「これは一学期でやったアスレチックやロッククライミングの応用だ。夏休みでも活躍したので、みんな覚えているだろう」

ホテルの非常口まで続く崖登りは記憶にも新しい。あれから、普段の訓練の大切さを身に染みて感じた。

「フリーランニングで養われるのは、目の前の足場の距離、危険度を正確に計る力。受け身の技術。自身の身体能力を把握する力。これができるれば、君らはどんな場所でも暗殺が可能になる」

鳥間先生は言い終わると同時に後ろ向きのまま崖を飛び降りた。一回転して下に着地するや否や、小川の近くの岩を駆け上つて小川を渡る。そこからジャンプして木の上、岩、と順序良く足場を移動し、瞬間に一本松の枝にたどり着いてしまった。

わたしたちの多くが口をあぐりと開け、今の一部始終に感嘆していた。わたしもそれは例外じゃない。他のみんなとは意味が違う方向に驚いていたが。

頭の中にあるはずのない記憶が入り込んでくるのを茫然として受け入れる。

あり得ない。今教わったばかりの技術なのに。

「危険な場所や、裏山以外で試したり、俺の教えたこと以上の技術を使うことは厳禁とする。いいな!」

「はい!!」

烏間先生の言葉に全員が声を張り上げた。わたしは1人額を押さえ、口をつぐむ。わたしをじっと見つめるカルマ君と目が合った。頭の上に14の数字が輝いている。

「まずは基本の受け身から……」

簡単に言ってしまうえば崖を飛び越えて一回転するだけの動きだ。E組の運動神経の良い生徒たちはすぐに出来るようになる動きなので、わたしもさほど驚かれることはなかった。烏間先生に理想的な動きだと褒められはしたけど。

「渚ちゃん、ちよつといい?」

みんなが夢中になっているのを見計らって、カルマ君が声をかけてくる。わたしは訳も分からないまま彼について行った。

「渚ちゃんさー、今の訓練で何か変なこと思い出したでしょ」

「カルマ君、何か知ってるの?」

反射的に聞き返す。

「ちよつとね。で、何を思い出したわけ?」

自分の返事が肯定を意味するとカルマ君は理解していた。誤魔化しようがないなとため息を吐く。

「誰にも言わないでね。絶対変だから。今までフリーランニングなんて、習ったことないはずなのに……記憶の中には完璧に使いこなすわたしがいた」

「やっぱり」

カルマ君はどこかそうなることを予期していたように微笑んだ。

「どういうこと?」

「渚ちゃんは前は殺し屋を目指していたんだってさ。その為に頑張っていた。語学の勉強とか、必要以上に学力を伸ばしたりね」

ある程度予測していたことなので、頷いた。何故カルマ君が知っているのかはつつこまない。前のわたしがどの程度そのことを周りに

打ち明けていたのかは未知数だからだ。

「ここからが本題なんだけど。語学とか勉強は独学が多いでしょ。でも、フリーランニングはさすがに無理そうだよね」

「……………誰か教えてくれた人がいた？」

「そうかもね。その人との思い出が丸ごと消えたって考えてみるのはどうよ？」

「言われてみれば…………フリーランニングのことは思い出したけど、誰に教わったのか思い出せない」

カルマ君の言葉に説得力が出てきた。自分の暗殺スキルが無駄に他より優れているのも、それなら理由が分かる。

何より、カルマ君は嘘を吐いていないようだし。嘘を吐かないように気を遣って話しているような雰囲気もあるけど。

「何でわざわざそのことを？」

「んー、ちょっとした確認かな。合ってたこと分かってスッキリ」

「ええ…………カルマ君だけ自己完結しないでよ」

わたしの中では謎がより深まったよ。カルマ君の仮説は暗殺関係だけで、他の記憶には当てはまらないから合ってるか分からないし。それにカルマ君が記憶が無いことに勘付いていたとは思わなかったけど。

「ごめんごめん。あ、このこと学秀君にも内緒ね」

「そっちも言わないでね。早く訓練戻ろ。サボりはダメだよ」

「真面目だね、相変わらず」

「カルマ君が不真面目なんだよ」

久しぶりにカルマ君と話したな。

わたしはカルマ君が自然に接してくれることにほっとする。カルマ君も色々吹っ切れたみたいで清々しい顔をしていた。

訓練に戻ると、般若のような烏間先生が仁王立ちして待っていた。抜けていたことにはすぐ気づかれたようだ。

「俺の訓練でサボりと」

「やべ」

「校庭10周」

こんなことならカルマ君についていくんじゃなかった。

わたしとカルマ君は校庭を走らされた。目の前でお手入れしてくる殺せんせーの暗殺オプシヨン付きだ。殺せんせーもよっぽど暇なんだろう。

「眉いじりすぎー！」

カルマ君はひたすらナイフを振り回している。眉がだんだんキリツとしていて面白い。

「眉ぐらいならいいよ。殺せんせー髪いじるのハマってるの？ 凝りすぎ」

高速で編まれていく髪にナイフで応戦するも、殺せんせーはビクともしない。意地でも最後まで編む気だ。

「フィッシュボーンです。英語だとfish tailというらしいですよ。これで渚さんも雪の女王です。カルマ君は髪が短いので、先生、編み込みで我慢しますねえ」

「はあ？」

その日、カルマ君の髪型はずっと編み込みにリボン付きでクラス全員笑いを堪えていた。どうにか堪えられたのはきつと、一番最初に爆笑した寺坂君が、一本松の上に逆さまに吊るされたまま帰ってこなかったためである。

\*

アパートの窓から小さなバルコニーに出て、地図を確認する。アパートは裏山の隣にあつて、バルコニーからは緑一色だ。この先に道はないけど、地図上の距離では裏山の方に進んだ方が旧校舎に早く着く。殺せんせーがよく窓からやって来る理由にもなるし、まず間違いないだろう。

つまり、フリーランニングをすれば通学時間が短縮できる！

「昨日の帰り道に確認したから間違いないと思う」

わたしとカエデは体操着に着替えて、制服をスクールバッグにしまった。制服のままフリーランニングをするのは破いてしまいそうで怖い。着いてから着替えればいいだろう。

「渚……本気？」

カエデはバルコニーの外を眺めて、不安げにぼやく。どう見ても道がないのに大丈夫か心配しているのだ。

「もちろん」

「分かった。私もできる限り頑張る」

カエデと頷き合つて、わたしはバルコニーから向かいの木に向かつて飛び上がった。カエデがその様子に「わっ！」と小さく悲鳴をあげる。

「うん、思ったより距離ないから平気だよ。安心して」

木の枝も丈夫で安定感があるし、地面は木の葉で覆われていて柔らかい。落ちてても痛くないだろう。

カエデも最初は戸惑っていたが、すぐに距離感を掴んで順調にバルコニーから木に渡れた。

2人同時に木から受け身を取って着地をする。そこからダツシユで岩に駆け上り、違う木の枝に向かってジャンプ。同じような動作をひたすら繰り返し、旧校舎に着く頃にはクタクタになっていた。

「疲れた……」

「だよね。喉カラカラ」

わたしはカエデの言葉に同意する。

「そんなあなたに、自動販売機の律です。お飲み物はいかがですか？」  
自販機が都合良く目の前に現れて飲み物を勧めて来る。いつもは



甘い飲み物を飲むわたしたちだったが、今回ばかりは水を浴びるように飲んだ。

わたしたちは女子トイレで制服に着替え、始業時間ギリギリに教室に向かう。既に教室にはほぼ全員が揃っていて、教壇の上に警官の格好をした大男――殺せんせーがいた。

「おや、2人ともギリギリですよ」

「すみません」

謝りつつ、視線は警官の格好に注がれた。

何で警官なんだろう。

「いつものコスプレじゃない？」

カエデが耳打ちする。殺せんせーがコスプレするのはいつものことだ。でも警官コスプレはちよつと気になる。

「殺せんせーの服って手作りが大半だよ？ それにしてはクオリティー高くない？ さすが殺せんせー」

矢田さんがビッチ先生直伝のお目目キラキラ光線をさっそく使つて、対象を褒め殺す作戦に出た。殺せんせーは生徒からの好反応に顔色がピンクに染まっっていく。

「思った〜。殺せんせー良いお嫁さんになれるよ」

倉橋さんの褒め方が少しズレたことで周りがおいと心の中でつっこむ。殺せんせーの顔色が一瞬で元に戻った。

「にゅやっ、倉橋さん。それは褒めてるんですか?!」

「ふっつーの警察官の格好なんて、烏間先生がするならまだしも、殺せんせーのは需要無いよね〜」

カルマ君が後ろの席から殺せんせーに向かって煽りまくる。烏間先生がすると女子が騒ぐので、そっちのが求められているのは間違いない。

殺せんせーはカルマ君をじーつと見つめ、無言で教室を出る。3秒もしないうちに殺せんせーは巨乳のミニスカポリスに変身していた。茶髪のカツラ、顔には付けぼくろとメイクが施されている。

「殺子ポリスよ」

そっちの需要もない。

わたしは心の中で思った。

「おおつ、胸が再現されてる！ 殺せんせーちよつと触らせろよ」

岡島君はすげーと賞賛の目を殺せんせーに送る。横の席ではカエデが巨乳死すべしとばかりに瞳に炎を燃やす。

「どこもジャンプ売り切れてて探しちゃった……」

教室のドアを開けて、不破さんが遅刻してきた。殺せんせー、否、殺子は手錠を不破さんの手に嵌めてヌルフフと笑う。この瞬間を待っていたらしい。

「遅刻ですねえ。逮捕する！」

「どうしたの殺せんせー!？」

ミニスカポリスだからか全くキマってない。

不破さんは状況説明を求めて周りを見渡す。三村君がカルマ君を視線で指すと、全てを理解したような悟った顔をした。

それでよく分かるな。

「朝から何なんだよ、殺せんせー」

木村君がミニスカポリス姿の殺せんせーに聞く。殺せんせーはコホンと咳払いをしてマツハで教室を出ると、また警官姿になって戻ってきた。

「みなさん最近フリーランニングをやってるそうですね。せつかくですから、それを使った遊びをしませんか？」

「遊びだつて？ どーせロクな――― 何すんだよ！」

殺せんせーの提案にケチを付けようとした寺坂君の顔が風呂敷で覆われ、泥棒風の格好にされた。

「それはケイドロです!! 裏山を全て使った3D鬼ごっこ! みなさんもハマること間違いなしですよ」

殺せんせーがノリノリでみんなに問いかける。

「ケイ、ドロ……」

警察が泥棒を追いかけるっていうアレ？

「みなさんが泥棒役で、先生と烏間先生が警官役です。1時間目以内にみなさん全員を逮捕できなかった場合、先生が烏間先生のサイフで全員分のケーキを買ってきます」

「おい!!」

烏間先生が俺を巻き込むなど殺せんせーを睨みつける。

「え、ケーキ?」

「それってプリンもあり?」

クラス全員、主に女子は物の見事に釣られた。普段はサボるカルマ君も参加するようだ。

「その代わり、全員捕まったら宿題2倍」

「ちよつと待てよ! 殺せんせーから1時間も逃げられるか!」

「不公平だ!」

ペナルティーがあると気づいて、全員ブーブー文句を言い始めた。1時間あったら殺せんせーは日本中の人間を逮捕できるだろう。いや、アジアが全滅するかもしれない。

「その点のご安心を。最初追うのは烏間先生のみで、先生は牢屋スペースでラスト1分前まで待機してますから」

「なるほど。それなら何とかなるか……」

矢田さんが考え込む。磯貝君が頷いた。

「よしっ、みんなやってみるか!」

「おう!」

「任せとけ!」

みんな殺る気満々だった。運動できる組は習ったばかりの技術について語っていて、逆にどこに隠れるかと話し合うクラスメイトもいる。

開始時間前は全員練習のために散らばった。崖から崖へ、木から木へと既にF Rの基礎はかなり身につけている。前の部分的な記憶を取り戻した分、わたしの知識と経験値は他の生徒の数倍勝っているようだ。

「渚はほんと何でもできるね」

カエデに褒められて少し複雑な表情を浮かべる。既知の技術で他より優っている、それは少し狡い気がするからだ。

『もしもし、渚ちゃん?! 聞いて、烏間先生は空間移動か<sup>テレポルト</sup>時間停止能力<sup>ザ・タイム・ストップ</sup>が使えるに違いないわ!』

律のアプリを通して、不破さんから電話がかかる。発言は少年漫画に影響されてると見て間違いない。

「不破さん開始早々捕まったんだね」

『とにかく気をつけて!』

不破さんからの電話を切る。開始からわずか5分足らずで6人捕まってることが律のアプリで確認できた。このペースだと30分で全員捕まりそうだ。

「いくら何でもペース早くね?」

杉野君が呟く。それはここにいる全員が思ったことだ。せいぜい捕まって1人と調子に乗っていたが、そうも行かないらしい。

「あ、でもこれケイドロですよ。だったら……」

「そうだ! 牢屋の泥棒にタッチすればいいんだ! 俺ちよつと行ってくる」

奥田さんが言いかけた言葉を杉野君が引き継いだ。足早に去っていくのをわたしたちは追いかける。

「杉野君、待つて!」

「……バカだね、杉野は」

カルマ君は杉野の背中を見てため息混じりだ。神崎さんが小さく「あ」と声を出した。彼女も気づいたようである。

「殺せんせー、ラスト1分まで牢屋の前から動かないって言ってたね」  
「そつ。誰がああ音速タコの目盗んでタッチできるよ。それができたらとつくに殺してるって」

殺せんせーの目を盗む、か。スピードだけなら絶対に無理そう。手があるとなれば……

「律、ご当地グルメの広告とか殺せんせーに送れる?」

「はい、もちろんです」

殺せんせーはご当地グルメに弱い。どこでも一瞬で行けるから、本場のものじゃなきゃ食べられないぐらい舌が肥えているのもあるはず。

「目が盗めないなら、牢屋から遠ざければいいんだよ」

捕まるのはなし。

私はLINEのトーク画面を開いた。イトナ君とのチャット履歴はほとんどなかった。何か大切なことは電話で伝えるし、プライベートで会うような仲ではないからだ。

『渚か。今牢屋にいる』

「あ、イトナ君？ 牢屋からで大丈夫。この前新作のドローンができたって言ってたよね。今持つてる？ 良かった。それで烏間先生を追跡してほしい。律に頼めばみんなに情報拡散してくれるはず」

『了解』

わたしは走りながらスマホを耳に当てていた。片手だけの状態にもかかわらず、崖を駆け上がったりと人間離れた行動を取っている。

「岡島がやったよ。巨乳のビキニ写真で殺せんせー買収に成功」

男子と連絡を取っていたカルマ君がある一箇所を強調して報告する。横でカエデが鋭い殺気をカルマ君に向けていた。完全にカルマ君に弄ばれている。

それにしても殺せんせー、ちよろすぎるんじゃない？まるで 悪い大人の見本だよ。

「よし、じゃあ次は買い物かな」

「裏山で何を買えるって……………そっか、律」

カルマ君はクラスメイトの万能自販機のことを思い出したようだ。

「なるほど！ 律さんの自販機を使うんですね」

奥田さんが納得して頷く。それに驚きを見せたのはモバイル律だった。

「えっ、渚さんは本体の方に向かっているのですか？」

「うん、そうだよ。なんで？」

「いえ、まさかケイドロ中に自販機を利用するとは思わなかったの……………」

私たちはやつと裏山と校庭の境目にたどり着くと、烏間先生が来るのをいち早く察知するために前後左右を見張る役目を杉野君とカル

マ君が引き受けた。

自販機の前には紺のスーツ姿の男が立っている。横でカエデがわたしの手を強く握ってきた。

「ごめん、律。お取り込み中だった？」

わたしは男の人をちらりと見やる。癖っ毛の強い髪が印象的の若い男だ。大学生か大学卒業したばかりぐらいに見える。

イトナ君に見つかったら間違いなく嫉妬される現場だけど、律のこどだし浮気ではないよね。

勝手に決めつけていると、律は可愛らしく小首を傾げた。

「皆さんはケイドロ中のはずでは？」

「そうだよ。でも欲しい物があって。その人は？」

「私のマスターです」

「……………ああ」

長い間をあけて、その人が頷く。

どう見ても日本人なのに?!

思わず国籍に突っ込んでしまったが、言うべきは年齢な気もする。律のマスターにしては若過ぎるからだ。

「渚」

カエデがわたしの名前を呼ぶ。彼女の表情も態度もさっきからまるで変わっていない。ただ、握られた手が強くなるにつれて、見えなくて聞こえない嫌悪の感情が伝わってきた。意識の波長がだんだん激しくなっていく。

「ごめんなさい。わたしたち、今体育の授業中なので急がないと！」

律、対先生系出せるだけ」

わたしは急いでるふりをして、その場を乗り切ろうとする。律が大量の糸が入った袋を受け口から出した。

「今回は特別に無料で提供しますね。暗殺頑張ってください！」

今日は気前がいいなあ。

少し驚きつつ、手元の袋から糸を取り出す。律に見送られながら、裏山に戻った。

「やばっ、烏間先生がこっち来てる！」

杉野君の言葉に危機感を覚える。すぐに律のアプリを開き、烏間先生の追跡情報を手に入れた。100メートル先の南に烏間先生の信号。まずい、距離が近い。

「前後左右バラバラに逃げろ！」

杉野君が叫ぶ。この時既に烏間先生に居場所がバレていたのだと思う。裏山の奥の方の空気が一変したのが分かった。迫り来る笑顔の烏間先生。ぶるつと体が震える。

「わっ！」

「茅野さん逮捕」

石につまずいて転びそうになったカエデを烏間先生が起こしながら捕まえた。

カエデが捕まった。わたしは咄嗟に木の上の方に逃げる。対先生糸を木の上にくくりつけて固結びをする。

「赤羽君、杉野君、奥田さん、神崎さん逮捕。おかしいな、6人いたはずだ」

知らぬ間に全員捕まっていた。烏間先生は人数を確認して、1人足りないことに気づいた。

大丈夫だ、ここなら烏間先生も――

「ひゃっ！」

後ろから首を掴まれた。赤い手形がべつとりと首に付着する。ゆっくりと振り返ると、烏間先生の笑顔が至近距離に見えた。もはやホラーである。

「渚さん、逮捕」

烏間先生は颯爽と次の泥棒を捕まえに別方向に走っていった。

「渚も捕まっちゃったか」

カエデが残念と肩をすくめる。神崎さんもため息をついた。

「上手く逃げたと思ったんだけどな」

重い足取りで牢屋に向かう。わたしはジグザグにフリーランニングをしながら、その後を追った。木の枝に巧みに糸を絡みつけ、2メートルより上の位置で結ぶ。その動きは周りには奇妙なものうつったようだ。

「渚ちゃん何やってんの?」

「殺せんせー対策その2。対先生糸を張り巡らせて、殺せんせーが空を飛ぶのを阻止しようと思つて」

「おーすげー」

杉野君の素直な感心する声が嬉しい。烏間先生対策よりも殺せんせー対策に力を入れていて良かったと思つてしまった。

牢屋に向かう途中の泥棒は自然と烏間先生の視界から消える。だから罾を仕掛けても気づかれにくいし、気づかれたとしてもそれが殺せんせー用の罾なら烏間先生が撤去することはない。次の暗殺に活かせるからだ。

「渚ちゃんつてたまにカルマ君みたいなこと思いつくんだね」

神崎さんの言動に、わたしは褒められているのか反応に困つた。神崎さんは良い意味で言っているのだと、意識の波長から察せる。

でも本人には言えないけど、カルマ君みたいつてずる賢いとか、悪魔みたいつてことなんじゃ……

「そうだね、カルマ君ならどうするかなつて考えているからかも」

「ふくん、それは光栄だね」

「ずる賢いし、人の嫌がることするの得意だし……カルマ君より得意な人つているのかな?」

カエデに尋ね、周りを見回す。それぞれ横に首を振つた。カルマ君だけ考え込んだように眉を寄せている。少し言い過ぎたかもしれない。

「自覚があるだけに否定できないね」

カルマ君はけろつとした顔で肯定した。

良かった、気にしてないみたいだ。

「普段の行いな」

杉野君がははつと笑い飛ばした。

「それじゃ、ちよつとずるい手使おつか。裏山で烏間先生には捕まるけど、殺せんせーに絶対に捕まらない場所つてどこだと思つ?」

「そんな場所あるか? どう思う、神崎さん?」

杉野君が神崎さんの方を向く。こういうなぞなぞみたいな話は謎



解きゲームの得意な神崎さんのが詳しい。神崎さんは顎に手を当てて、謎が解けると美しい微笑を浮かべた。神崎さんはあざとく杉野君の耳元に顔を近づける。内緒話みたいだ。

「もしかして———じゃないかな？」

「あ、うん。そう、だと思っう」

杉野君は照れてそっぽを向いた。神崎さんがふふつと大人びた笑みを浮かべて、髪を耳にかける。

「殺せんせー、水苦手だからね」

そうか。

わたしは答えを理解し、口の端を上げた。

\*

殺せんせーが解き放たれるまで残り5分。わたしたちはケーキバイキング割引券と引き換えに何とか脱獄に成功していた。

わたしはカルマ君たちと離れ、1人別行動をしている。理由は他の残っているグループと合流するためだ。

「渚ちゃん、こっちこっちー！」

片岡さんがわたしを発見して近くに呼び寄せる。一班のメンバーが全員集まっていた。一班は運動神経が良い人が多い。学級委員の2人がいて、暗殺にも積極的なので、自然とクラスの中心になっている。

「渚ちゃんが来てくれて良かった」

「ほんと。実は4人の小隊を作ろうって磯貝君が提案したんだけどね、うちの班7人だからどうしようかと思っただけ」

岡野さんの説明になるほどと頷く。確かに4人なら前後左右を見張るのに効率がいい。すぐに烏間先生の方向をつかめるだろう。

「でも烏間先生の居場所ならイトナ君のドローンが追跡してるよ？」

さつきから信号が止まって動く気配ないけど。

「それがイトナ君のドローン、もう烏間先生に破壊されちゃったから追跡できないんだって」

と矢田さん。烏間先生も自分の居場所が特定されていることにいち早く気づいたみたいだ。信号に動きがないのもそれが理由だ。

「ごめんイトナ君。」

心の中でイトナ君に謝る。

「それにしても、すごいアイデアだね」

「うん。カルマ君の案。時間ないから急いで分かれよう。グツとパーでいい？」

「そうだね」

2度目で見事に4人ずつに分かれた。わたしは倉橋さん、矢田さん、磯貝君と同じグループ。岡野さん、前原君、片岡さん、木村君がもう一つのグループだ。

「時間ないから手短に済ませるね。烏間先生に遭遇したら、すぐにプールとは逆方向に誘導。1分前まで持ちこたえて」

「うん、また後で！」

「あと3分か。何事も無いといいけど」

「ねえ、殺せんせーが1分前にスタートってことは、牢屋の方が手薄になるんじゃない？」

倉橋さんが思いついて聞く。磯貝君は首を振った。

「殺せんせーのことだから分身を飛ばすよ」

「うん、裏山程度だったとしても分身飛ばせると思う」

「あと残り1分10秒。10、9、8、7、6……」

矢田さんが腕時計を見ながら、カウントダウンを始める。

「5、4……」

磯貝君が対先生ナイフを片手に警戒態勢に入った。わたしもナイフをポケットから取り出す。

「3、2、1……」

「ゼロ」

スタートからわずか8秒後の一瞬の出来事だった。ものすごい強さの風が吹き抜けて、わたしたちの脇を過ぎ去っていく。それが殺せんせーだと気づくのに時間はかからなかった。肩に付着した真っ赤な触手跡がそれを物語っている。

「捕まっちゃったね」

倉橋さんは何の感慨もなく言った。

「うん」

わたしたちは捕まってもいい。わたしたちはただの捨て駒だから。律の逮捕者リストに目を移す。10秒そこで名前が増えていき、30秒過ぎた頃にはほぼ全員の名前がそこにあつた。リストにないのはカルマ君と杉野君、そしてイトナ君だけ。

残りの30秒はひたすら長く感じた。さつきと同じく矢田さんがカウントダウンをし、彼女がゼロを言い終わった瞬間みんな喜んで。だ。

昼休みに烏間先生は約束通り、大きなホールのケーキを買ってきてくれた。カエデには要望通りプリンもある。

「やった〜！ プリン！」

「はしやぎすぎじやない？」

わたしはカエデに向かって言う。カエデはプリンを口に運んで、至福の笑みを浮かべている。

「ん〜！ 渚だつてケーキ食べて嬉しくせに。かなり本気だったよね」

「そんなことなかったよ！ ね、烏間先生」

烏間先生は電話越しに誰かと話しているようだった。口ぶりからそれが目上の人物だと分かった。

「そんな馬鹿な……何かの間違いでしょう！ あなた方の勘違いで、

生徒たちにトラウマでも植え付けたらどうするつもりですか？」

鳥間先生が声を荒げて、クラス全体の注目が彼に集まる。教室のドアがガラリと開いた。何人もの黒いスーツ姿の男たちが殺せんせーを取り囲む。

「柵ヶ丘中学校3年E組担任教師、殺せんせーと呼ばれている超生物はお前で間違いないな？」

「にゅやっ！ あなたたちは一体――」

殺せんせーは殺し屋を疑って「手入れ」の準備を始める。触手にはヘアメイクのセットがあった。

「柵ヶ丘連続通り魔殺人事件の容疑者としてご同行願いたい」

黒いスーツを着た男数名が殺せんせーに向けて紙を差し出した。殺せんせーが驚いたように顔を青白くする。ヘアメイクセットは無残に床に落ちていった。

わたしたち生徒も同じような反応で、誰もが動揺している。

殺せんせーが殺人事件の容疑者として連行された。その意味は殺せんせーが人殺しをしたということだ。

殺すという行為が日常になりかけていたわたしは初めて現実を突きつけられた。

\*

「君はアイステイーでいいかな？」

目の前の男が優しい笑みを向ける。来たことのないカフェの店内。気怠げな女性店員が困ったようにわたしの返事を待っていた。

あれ、わたし何でこんなところに？

「えつと、ごめんなさい。記憶が混乱してて……」

「さつきからぼーつとしてたからそうじゃないかなって思ったんだ。とりあえずアイスティー2つください」

「かしこまりました」

店員が店内の奥へと消えていく。店内にはちらほら人はいたが、年齢層が高めで学生がほとんどいない。

「仕事の帰りに見かけて、浮かない顔をしていたから思わず。ごめん、無粋な真似したね」

頬をかいて謝る。相手の顔をよくよく見て、目の前の印象の薄い男が花屋さんだと気づいた。どうやら浮かない顔をしたわたしを心配してカフェに連れてきたらしい。

「いえ。嫌なことがあったのは本当ですから」

「そういう時は花を見て癒されるといいよ。買って行くかい？」

「花屋さんらしいアドバイスですね」

くすりと笑みをこぼす。本当に花を愛しているのだろう。後で買っていつてという言葉が無ければそう思ったのに、これじやただのセールストークだ。

「癒しになるものなら何でもいいけどね。僕の場合、それが花と猫なんだ」

「猫、飼ってるんですか？」

意外、というほどでもないが、雰囲気から犬派を連想していた。猫派だったのか。妙に親近感を感じる。

「シヤム猫を飼っていたんだけどね」

「あ、わたしの飼ってる猫もシヤム猫です」

「偶然だね。僕は1年前に失くしてしまって……そうか、いいな」

目を細めて彼は心底羨ましげに呟いた。悪いことを聞いてしまったかなと口をつぐむ。

さつきとは別の店員がアイスティーを2つ持ってきた。コップの形がシヤム瓶みたいでオシャレだ。

ストローを口につける。

「あ……美味しい」

「良かった」

わたしの漏らした微かな言葉に。パアツと笑顔になる。

この人といると穏やかな気持ちになるなあ。ずっと前からの知り合いみたいに落ち着く。びっくりするようなことがあったばかりなのに不思議だ。

「会計一緒で」

アイステイーを飲み終わって、店のレジの前で花屋さんが財布を取り出した。わたしは慌ててそれを止めにかかる。

「そんな、悪いですよ。ちゃんと払います」

「こういうところは男に払わせるのが礼儀だよ、渚」

花屋さんは大人な微笑でわたしの反対を押し切って、素早く会計を済ませてしまった。申し訳なさと胸がいつぱいになる。

代わりに何か、花屋さんが喜ぶこと……そうだ。

「それじゃあ、お礼に今度うちの猫を見に来ませんか？」

「……いいの？」

目の奥がキラキラ輝いて見える。すごく猫が好きなのが伝わってきた。

「はい、土日にも……あれ？」

店の外に2人で出て、わたしは首を傾げる。見たことのない光景だ。ぼーっとしていたせいか、知らない街に迷い込んでしまったようである。

「すみません、どこどこですか？」

「その様子だと家までの道も分からなそうだね。送って行くよ。君の猫はその時でもいいかい？」

「そう、ですね。わざわざありがとうございます」

「じゃ、乗って」

花屋さんはトラックの助手席にわたしを乗せる。住所を口頭で伝え、トラックはわたしのアパートまで向かった。

「ちよっと狭いですけど……」

窮屈じゃないだろうか。花屋さんの顔色を窺う。花屋さんは首を横に振った。

「そんなことないよ。君の猫は？」

「まだ帰ってませんね。待ってますか？」

「そうしよう」

メルは夕食の時間になると必ず現れる。食い意地が張っているの  
で、何があつても夕食を食べる気なのだ。

わたしは花屋さんに水を出す。

「悪いね。あ、あのバラ飾ってくれてたんだ」

花瓶には白いバラがいまだに飾られていた。こまめに水をやって  
いるからか、まだ枯れていない。

わたしはそちらに目を向ける。

「花が一輪あるだけで部屋の印象が変わるなど思つて」

「そうだね。懐かしい……………昔、先生に花を生けるのは私より上手  
いって言われたっけ」

……………？ 花の先生かな。

「素敵な才能ですね」

「才能、ね」

「あ、帰ってきたみたいです」

窓の前にメルの姿を発見し、窓を開けてやる。メルは花屋さんを  
じつと見上げ、わたしの方に視線を向けた。

花屋さんはニコニコしたまま、メルを見下ろす。

「久しぶりだね、メルダリン」

メルがバツが悪そうな顔で彼から顔を背ける。

「え」

メルダリン？

「酷いじゃないか。僕を置いて違う飼い主を探すなんて。それとも」

「……………」  
メルの頭に彼が銃を突きつける。メルは鋭い目を彼に向け、歯を見  
せて唸った。

「彼女が最強とでも言うのかい？」

「どういうことですか……………？ どうしてあなたがメルのこと」

「渚、君はもう少し人を警戒するべきだったね。死神を易々と家に招

き入れてしまったんだから」

銃を上投げ、空中で一回転させる。彼の意識の波長は快樂と歡喜の絶頂にいた。

「死神……う、そ」

「まさか君の方から家に誘ってくれるなんて、猫好きなアピールをした甲斐があったな。猫好きなのは本当だよ。メルダリン以外の低俗で劣等な猫には興味がないけどね」

わたしが驚いて何も話さないのをよそに、死神はペラペラと話し続ける。わたしはすぐに護身用のスタンガンポケットから取り出し、後ろに隠した。

「わたしが何も反撃できないと思ってる？」

「しないよ、君は。させないからね」

死神はわたしの目の前で両手を強く叩いた。その瞬間、脳に大きな衝撃が走る。脳内にダブって聞こえたもう1つの記憶の音が反響して、現実の音と重なった。そして思い出したのだ。

これはクラップスタナーだ、と。

『強いていうなら、女子に生まれて欲しかったわ』

流れ込んだお母さんの声に息を呑む。鏡の前で言いなりになる自分の姿が脳内に映し出された。

『大好きだよ、殺せんせー。死んで』

突然触手で殺せんせーを殺そうとする茅野。それを驚いた表情で見つめる男子の制服を着た自分。髪型も少し変わってる。

『先生は誓ったんです。触手を皆さんから離さない』

殺せんせーの言葉が胸に響く。殺せんせーは後ろからの銃弾によって息を絶え、生徒たちはその場に取り残された。

『君は何故あいつを殺したんだ？』

鳥間先生は聞いてきた。その問いに答えは無かった。

プツリとそこで意識が途切れた。これが潮田渚の人生の覚えている限りの終わり。

『何でお父さんがいるの？』

純粹に不思議に思っただけ尋ねる小さな自分。きっと大石渚はここか



ら始まったんだ。

『あなたの大切な人をちゃんと見ていてください』

初代死神に告げた。それなのに研究所は爆発してしまった。自分の手に握られたカプセルに触手の種が入っている。

場面は反転し、病室で触手で雪村先生に触れる少女を自分は見つめていた。

『約束するよ』

心の中で彼女を助けることを誓った。雪村あかりという、雪村先生の妹を。

茅野カエデを。

『渚がE組に来るのは2度目なんじゃないか?』

そう、2度目。大石渚の人生は2度目だ。ゲームでいう強くてニューゲーム。

『クラップスタナーは1度しか鳴らせないんだよ』

何でもない言葉が妙に生々しく耳に残っていた。今なら違うと言えるかもしれない。それは確かに2度聞こえたから。

クラップスタナーは2度鳴る。

1度目は記憶の中で。

2度目は現実世界で。

ぼくは潮田渚の二周目だ。

疑いのはなし。

呼び鈴を鳴らす。渚はいつもは1度か2度目で玄関に出てきた。でも今日は寝過ぎしているのか、物音1つしない。

仕方ないよね。あんなことがあったんだもん。

殺せんせーが逮捕された瞬間を思い出し、胸糞が悪くなる。櫛ヶ丘連続殺人事件の容疑者が謎の超生物。まるで小学生が考えたシナリオみたい。

でも、お姉ちゃんがあんな目にあつたんだ。殺せんせーが人殺しでもおかしくないか。

私は周りを確認して、首から微量の触手を出した。触手を器用に動かして鍵穴の中に突っ込んでいく。手探りだったが、鍵穴を上手く回せた。

「渚、まだ寝てるの？ ねえ……」

アパートの部屋には誰もいなかった。部屋には渚のスクールバッグが置いてあって、彼女がまだ学校に向かっていないのだと分かる。

また外で朝のランニングしているのかもしれない。家にいることだけ伝えれば、渚が帰ってきた時に驚かれずに済むよね。

スマホを取り出して、チャットアプリから彼女に電話をかけた。どこかで聞いたことのある映画の主題歌が流れ出す。女の子らしくない、ヒーローものの曲だった。音楽はベランダから聞こえていた。ベランダの鍵は開いていて、一面に緑の景色が広がっている。

「何でベランダに……」

ベランダにはスマホがポツリと置き去りにされていた。花瓶には私を嘲笑うように、黒いバラが飾られていた。

\*

「殺せんせーが人殺しなんてするわけないよ」

教室のドアを開けると、片岡さんのそんな声が耳に飛び込んできた。少し遅刻したため、クラスのほとんどが既に集まっている。

「来年には地球ごと全人類皆殺ししようとしてるけど？」

カルマ君がどこか怠そうに呟く。

「それとこれとは別よ！　むしろ、地球ごと破壊するなら、その前に人を殺す意味がないじゃない」

岡野さんの意見は的を得ていた。普段は理不尽に蹴ってばかりなのにと失礼なことを考える。蹴ってばかりなのは前原君に対してだったと思い直した。

「分からないわよ」

狭間さんが本をばたりと閉じる。「モルグ街の殺人」といういかにもなタイトルが遠目で見えた。

「殺人鬼なんて、少しムカついただけで簡単に人を殺すもの。殺せんせーにとつて、殺人は朝食のパンを食べるのと似たようなものだったのかもね」

「狭間、もっと違う言い方あるだろ……」

寺坂君が呆れたように周りを顎で指し示した。「朝食のパン」発言に周囲はぎよつとしていた。

「落ち着け。まだ完全に奴が犯人だと決まったわけじゃない。奴にも弁解の余地はある」

いつのまにか入ってきていた烏間先生は教壇の前でため息を吐いている。彼も色々あったのだろう。

「烏間先生……！　殺せんせーはどうなりましたか？」

「殺せんせーが殺人犯だって証拠はあるんですか？」

教室中が騒めく中、辛うじてこの2つの質問がわたしの耳に届いた。烏間先生は眉間に皺を寄せている。言うべきか迷っている顔だ。

「奴は取り調べを受けている。一昨日起こった殺人現場に触手のカケラが残されていたらしい。その後、防衛省の協力で犯行の凶器が触手

と確定された。触手が凶器となれば、奴以外の犯人は考えがたい」  
「触手……?!」

私は自然とイトナ君に視線を持っていかれた。彼も触手を持っていた。渚が触手を抜いていなければ、殺せんせーと断定されることもなかったかもしれない。

「殺せんせーはドジだけど、そんなやばいミスするか？」

「ふっふっふっ、きつと少年漫画でお馴染みのアリバイ偽造ね！ 殺せんせーに罪を着せるためにやったに違いないわ！」

不破さんが探偵気取りで目を輝かせる。

「俺もそうだと考えている。実際に、ホウジョウの見た犯人像は白いワンピースの少女だ。ホウジョウが妄言を吐いているとは思えない」  
「白いワンピースの少女？」

「それってー」

皆が反射的に渚の席を見た。席は空っぽで、誰も座ってない。

「今日、渚ちゃん休み？」

「昨日あんなことあったんじゃ無理ねーけど」

「渚ちゃん風邪かな？」

みんなすぐに悟った。これは気づいてはいけない事実だと。まさか、そんなことあるはずがないのだ。

周りが渚がいないことを心配する中、後ろからガタツと音がして、イトナ君が席を立った。

「俺はみんなに言っていないかったことがある」

普段教室で発言することの少ない彼だ。少し声が緊張している。

全員の視線が彼に集まった。

「沖縄で銃の男を倒した時、そいつのイヤホンからエンジェルと思われる声が出た。あの時は誰の声なのか分からなかった。今思うとあれは――」

イトナ君が目を閉じた。

「渚の声だった」

「先生の次はクラスメイト？ 冗談で言ったのなら笑えないわ」  
狭間さんがイトナに口を挟む。

「エンジェルって奴が、渚ちゃんで、しかも触手を持つてるっていうのか？」

菅谷君が信じられないという顔をしている。

「悪い。だが、渚がそうだと考えるところとしてっくり来る。暗殺関係者が殺されたのは、殺せんせーを殺そうとする敵を排除するためだとしてら。自分が殺す前に殺されないためなのだとしたら、理解できる行動だ」

「そりゃあ、殺せんせーを他の殺し屋に取られたくないって思うけどさー、そこまでする？」

矢田さんがやんわりとイトナ君の説を否定する。倉橋さんが何度も頷いた。

「……イトナの言うことは合ってるかもな。だってよ、この中に白いワンピースの少女とかエンジェルって言われて、渚ちゃんが浮かばなかった奴いる？ いないだろ」

前原君が言うと、周りは黙り込んで、無言でそれを肯定した。外見だけなら、エンジェルはどう考えても渚としか思えないからだ。

「待てよ。渚ちゃんが殺し屋なわけないだろ？ 確かに、渚ちゃんは暗殺に一生涯懸命だし、殺し屋っぽいところあるよ。でもそれだってせいぜい……」

磯貝君が渚の殺し屋っぽいところをあげていく。

「ビッチ先生みたいに何ヶ国語も話せたり」

殺し屋っぽい。

「訓練のナイフ術、射撃成績がトップレベルだったり」

殺し屋だからかもね。

「何故か殺し屋のロヴロさんと仲が良かったり」

あー、殺し屋ならそれも理解できる。

「銃弾が飛び交う中、全く当たらずに触手を何本も切り落としたり……」

何それ、人外？

磯貝君がそこまで言って視線を落とす。全員の顔に冷や汗が浮かんでいた。

「……俺には無理だ」

うん、渚の超人ぶりはすごく「殺し屋っぽい」よね。

磯貝君は庇おうとして、逆に「渚犯人説」を加速させてしまった。さっきまでちよつと疑っていた人たちが見事にその説に乗っかり始める。

「渚ちゃん、良い子だけど暗殺にちよつとマジになるとこあるからさあ……ぶっちゃけありそう」

中村さんが対先生ナイフを手中で弄びながら呟く。

「中村さんまで……」

私の声は彼女に届いたようで、申し訳なさそうな顔をされた。

「ごめんごめん。でも、今まで手抜いてたのってぐらい、最近銃もナイフも凄まじいレベルで上達したじゃん、あの子。フリーランニングだって、正直初心者超えてるよ」

いつ見たのだろう、渚のフリーランニングについて、私は彼女に完全同意だった。渚のフリーランニングは前々からそれを知っていた動きだ。

「そんなにできるの？ フリーランニング」

「言われてみれば……俺が教えた時には既に基礎が完璧に身につけていた。それに……いや、これはいい」

鳥間先生が他にも何か思い出したのか顔をしかめる。

「誰かに習ってたんじゃないの？」

前原君がポツリと言った。

「殺し屋になるために、E組に来る前から誰かに習ってたからあんなにできる。ロヴロさんとか。辻褄は合うだろ？」

「その可能性はある。俺だって不思議に思ってることは色々あったから」

イトナ君が同意して頷く。

「みんな考えすぎだって。いるじゃん、教えられたことすぐ吸収してすぐできるようになるやつ。渚ちゃんはただ、そういうやつの人だと思っただよね」

カルマ君が話の方向転換をはかる。前に告白しただけあって、渚の

完全な味方についている。

「私もカルマ君の言ってることが正しい、と思います。そんなことだけで判断できないですよ」

奥田さんが萎縮しながらも同意した。狭間さんも「それだけで疑うのもね」と珍しくカルマ君に賛同の意を示す。

私はカルマ君の話に何となく違和感を感じつつ、でもそういうことなのかなと無理やり納得して頷く。そうじゃないと説明がつかない。どうしよう。みんなには鷹岡が触手を持ってた話はしてない。あの時渚がそれを隠蔽したのは、自分もそうだから……？

渚と初めて会った時、あの場所で渚も触手を手に入れていたんだとしたら。

頭の中で無意識に渚を疑ってしまいそうで、何度もそうじゃない、違うと言いつつ聞かせた。

だって渚にそんなことできるわけがない。渚は私を助けてくれた。犯人なわけないよ。

「えー、どうなの実際？」

「渚ちゃんが犯人なんじゃない？ 今日来てないし」

「触手持ってたんなら、昨日のプール作戦に加わってなかったのも納得」

「てか、イトナ君の触手を簡単に抜けたのも正直怪しいよね」

「ロヴロさんにも気に入られてたから、本業は殺し屋だったのかも」

ささいなことを全部疑うみんなに恐怖を覚える。渚じゃない、触手を持つてるのは私なんだって言いたい。そうしたら、ちよつとは渚のこと信じてくれるだろうか。

「みんなおかしいよ。殺せんせーのことは信じたのに、何で渚のことは信じないの……」

私は小さな声で呟いた。

ピロンとスマホの通知音がいくつか鳴った。

「誰だよ、こんな時に」

「俺のじゃねー」

「私も違う」

スマホを見て、自分のからの音じゃないとクラスメイトたちが言っていく。私はスマホのロック画面を見て、後ろにいるカルマ君の方を振り返った。彼が一回頷く。私は首を横に振った。

そんな目立つことできない。

「付き合ってられない。早退するわ」

狭間さんが突然スクールバッグを持って立ち上がった。

「狭間さん、急にどうしたの?」

前の席の神崎さんが声をかける。狭間さんは「別に」と返して行ってしまった。

「わ、わたし急用を思い出しました!」

奥田さんは立ち上がって大きな声で言うと小走りで教室を出て行った。

「俺サボり〜」

カルマ君がニヤツと私に笑いかけて言う。

……出よう。ここにいっても仕方ない。3人が既に出て行ったんだ。そこまでは目立たない。

「ごめん、私渚の家に行ってみるね。風邪だったら大変だから」

私も席を立て、不思議そうにこつちを見るみんなを一瞥して教室を出た。

校舎の外に出ると、今さつき出て行ったばかりの3人が私のことを待ってた。

「カルマ君、さつきの何なの?」

「それは私も説明してもらいたいわね」

LINEでメッセージを送ってきたのはカルマ君だ。サボる口実を作ったという文面にはどう動くか迷ったが、結局出て来てしまった。

「見たところ、この3人は渚ちゃんを疑ってないと思ったからね〜」  
「え、この3人しかいなかったの?」

最初はもつといた気がしたんだけど。

クラスのほとんどが渚を疑っていることに驚きが隠せない。

「変だよね〜、殺せんせーはみんな庇ってたのに。とりま、ファミレス



にでも行こっか」

「あんたが奢るなら行く」

狭間さんがちゃっかりと奢られようとする。こういう時にビッチ先生のテクニックを使わないあたり、彼女は数少ないビッチ先生に毒されていない女子だ。

「可愛げないなくキララちゃん」

「その名前次に呼んだら呪い殺すわよ」

「言われなくても奢るって。勝手に学校サボらせたの俺だし」

「殺せんせーがいないようだ、ひとまず今日は自習だと思えますよ」

駅の近くのファミレスでドリンクバーを4人分注文する。各自ドリンクを持ってきて、テーブルにはグラスが4つ並べられていた。カルマ君が話を切り出す。

「1人ずつ、今回の騒動についてどう思ってるか言っていこっか。まず、俺は殺せんせーも渚ちゃんも犯人じゃないと思ってる。殺せんせーは根っからの教師で、俺らが悲しむことは絶対しない。渚ちゃんだって殺せんせーに罪をなすりつけようとは思わないはず」

カルマ君に視線で次を繋ぐようにバトンタッチされる。私は話し始めた。

「私は殺せんせーのことは断定できないけど、渚ってことはあり得ないと思うんだ。渚は誰かを助けるために人を殺すようなことはないし、殺せんせーに罪をなすりつけるような子じゃない」

「半信半疑ってところね。あの教師もあの子も怪しいところは多いもの。客観的にはグレーじゃないの？　ただ、あまりにできすぎたシナリオだから、別に犯人がいるような気がしてならないわね」

狭間さんは話し終わるとアイスコーヒーをストローで飲んだ。カルマ君は今度は彼の横に座る奥田さんに声をかけた。

「奥田さんは？」

「あの、正直に言うって渚さんのことは少し疑っているんです」

奥田さんはテーブルに視線を向けて、申し訳なきように言った。

「え……」

私は声を漏らす。奥田さんはてっきり完全に渚の味方だと思って

いた。

「何件かの事件の中に、毒殺があつたじゃないですか。新聞でどんな毒か調べてみたら、あの毒、渚さんと浅野君と私の3人で作ったことがあるんです。結局、渚さんが殺せんせーに試して失敗したんですけど……もしかしたら」

彼女は拳を強く握りしめた。肩が震えている。

「ごめんなさい。皆さんが渚さんを信じているのに」

「いいんだよ。奥田さんは正直に思ったことを言っただけなんだから。話してくれてありがとう」

私は奥田さんに優しく微笑みかける。渚を疑ってはいるけど、信じたいというのは私も同じだ。彼女がそれをみんなの前で言わなかったのは、渚が犯人だと確定されるのが怖かったからだと思う。それでも、私たちを信用して話してくれたのだ。

「奥田さん、それいつのこと？」

「そこまで詳しくは……日記に書いてあると思うので、探してみますね」

「本人に聞くつてのも……そーいや、渚ちゃん今日休みだったね。茅野ちゃん、何か知ってる？」

「朝家に行ったんだけど、出てこなくて。LINEも電話も繋がらないし、家にいないみたいなんだよね」

本当は家の中も見たけど、家宅侵入罪で私まで逮捕されるのは困るから言わない。

「え、じゃあどこにいるのさ。本人探さないことには無実の証明も難しいよ」

「律、渚の昨日の行動を確認できる？」

モバイル律に呼びかける。こういう時に頼りになるのは律だ。

「昨日の渚さんのスマートフォンテの位置情報ラを確認します……確認しました。昨日は下校後、Th・Glacラセというカフェに約1時間程滞在し、そのまま真っ直ぐ家に帰宅しています」

「テ・グラセ？ 聞いたことない名前ね」

狭間さんが首を傾げる。私も渚と行ったことない場所だと思いな

がら、話を聞き、カルマ君はスマホを取り出して検索し始めた。

「ちよつと調べる……あく、あそこら辺ね。夜は治安悪いところ」

「渚が何頼んだか調べられる？」

「すみません。その日の家計簿は空欄のままになっています。渚さんは普段、買ったものは全て即時に家計簿アプリに保存しているので、恐らく誰かに奢ってもらったのかと」

奢ってもらったとなると候補は少ない。一番先に思いつくのはみんな同じ人だった。

「放課後……となると浅野君ですか？」

「ないよ。水曜日は生徒会の定例会議の日だ。ナンパとか？」

「渚はそんなにホイホイついていかないの」

「はいはい」

カルマ君がテキトーに頷く。渚は確かに防御が甘いけど、日頃からE組女子+ビッチ先生とで女子の心得について言い聞かせているから大丈夫なはず……きつと、多分。

「渚さんって一人暮らしですよ？　もしかしたら、実家に帰ってるのかも」

奥田さんがおずおずと意見を口にする。カルマ君と私が予想外の安全そうな思いつきに食いついた。

「奥田さん冴えてる」

「用事で親に実家に戻されたとか、体調が悪そうだったから親が心配してとか、ありそうだよ。カフェで会ってたのも親かな」

私は親いないけど、もし私が一人暮らししてて風邪ひいたら、お姉ちゃんに絶対家に連行される自信がある。「一人じゃ寂しいでしょ」とか言われながら。

「行ってみるか。お宅の渚さんいますかーって」

「住所も分からないの？」

「渚さんの実家の住所ですか？　知っていますよ。皆さんに転送します」

話を聞いていた律が早急に住所を送ってきた。仕事が早いキャリアウーマンをイメージしているのか、スマホの中でスーツ姿の律が伊

達眼鏡をずらししている。

「すごいけど、さすがにそこまで行くとストーカーね。世の中にはプライバシーってのがあから、機械とはいえわきまえて欲しいわ」

狭間さんがギロリと律を睨む。律は涼しい顔でそれを受け止めた。「指摘ありがとうございませ狭間さん。次回から気をつけますね！」

「いいじゃん、今回は助かったんだしく。あれ、ここからそんな遠くないんじゃないね。電車で2駅」

カルマ君がスマホの地図を私たちにを見せて、今から行けそうだという流れになった。そんな遠い場所でもないし、今日の内に確認したいからと。

「やめた方がいいんじゃない？」

穏やかな雰囲気を破って、狭間さんが冷たい声で言った。彼女はスマホの地図を見て、顔を歪めている。

「狭間さん、何で？」

「見て分からない？ 人に自分たちの常識を押し付けしないで。私帰るわ」

狭間さんはそのままファミレスから出て行ってしまった。奥田さんが不安げな顔で私とカルマ君を交互に見やる。

「私のせいですよ。狭間さんは国語力あるのに、私にはないから」

それは私たちも同じだと思った。彼女がどうしてあんなに怒ったのか、「常識を押し付ける」がどういう意味なのか、私はよく理解できなかった。

「行こう。狭間さんとは後できちんと話せば、仲直りできるよ」

\*

「どちら様ですか？」

「渚さんの同級生です。お時間よろしいですか？」

「……どうぞ」

玄関に出たのは優しそうな男の人だった。目元に渚の面影を感じる。

リビングの方に案内されて、所々に渚の賞状やトロフィーが飾られているのが目に入る。小学生の時のものだろうか。ちらほら写真立てもあつて、櫛ヶ丘の入学式の写真、赤ん坊と両親の写真、赤ん坊と着物の母親の写真が並べられていた。

「渚は一緒じゃないのかい？」

渚の父親と思われる男の人が期待する眼差しで私たちに尋ねた。

「え……こつちには帰つてないですか？」

すっかり当てが外れた気分だった。渚は実家に帰っていたわけじゃないらしい。

「恥ずかしい話、渚が一人暮らしを始めてから、1度も会ってないんだ」

「何か、あつたんですか？」

嫌な予感がする。早く気づくべきだった。渚から家族の話を一度も聞いたことがないことに。

「妻が渚に当たつてしまつてね。限界だつたんだろう。渚の小学校では、渚の優秀さを妬んだ他の母親に嫌がらせを受けたりしたこともあつたんだ。おかしな噂を流されたり、緊急連絡網を飛ばされたり。『両親の学歴は大したことないのに、おたくのお子さんは優秀なんです。実際、渚は僕らの子としてはもつたないくらい、よくできた子だった。妻は、渚が中学に入って一度は立ち直つたんだ。でも、妹の海咲を出産した時に両親に何か言われたようで……妻はそれがきっかけで、渚を家から追い出した」

私は絶句した。渚のお母さんがママ友いじめにあつていた部分にはではない。渚が家を追い出されたのだということに。一人暮らしは自発的に言い出したことじゃなかったんだと初めて知った。

「渚さんはそのこと知ってるんですか？」

奥田さんは消えそうな声で聞く。彼女も顔色が悪い。

「知らない。子供同士は仲良かったみたいだから」

「何で止めなかつたんですか？」

「茅野ちゃん、やめよ」

「渚の味方になれたのはあなただけだったのに！ 渚のお母さんが嫌な目にあつてたからって、渚を追い出していい理由にはならなかつた！ 父親でしよう?! 止められたはずでしよう?!」

「おい……っ！」

カルマ君に掴まれながら、私は泣きながら怒鳴りつけた。あんまりな話に激怒していた。

渚はお母さんに嫌われたと思つたかもしれない。捨てられたと思つたかもしれない。家族を信じられなくなつたかもしれない。

渚はどんな気持ちで家を出て行つたんだろう。どうして私はその時まだ渚と出会つてなかつたんだろう。

「僕は……渚に尊敬される父親じゃなかつたから」

その人は俯いた。赤ん坊の泣き声が別室から聞こえてくる。

「すまない、こんな話をして。今日はこれで終わりにしてもらつていいかな？」

「……お忙しいところ失礼しました」

リビングから玄関の方に戻る。私たちの表情は来た時より暗く、憂鬱になつていた。

「渚に会つたら伝えてほしい。『渚の部屋は母さんに言つて、残したままにしてあるから、いつでも帰つて来なさい』と。母さんも反省してるって」

渚の父親からのこんな言葉を最後にその家を後にした。帰りの道で、私はどう切り出せば良いのか分からなかつた。

実家で渚を見つけるハッピーエンドとはほど遠い。それどころか、渚の暗い事情を知つてしまった。

「俺、全然知らなかつた」

カルマ君が落ち込んだように呟いた。私もみんなも誰も想像しな

かっただろう。渚はそんな風には全く見えなかったから。

「考えてみたらさ、あれだけ学校から近い場所に実家があるのに、一人暮らしなんて少し変だったよね」

狭間さんは気づいていた。だから止めた。私たちは自分たちの常識が渚にも当てはまるものだって勝手に決めつけてしまった。

「ふりだしに戻ってしまいましたね」

「最初から、そんな上手いこと行くわけなかったんだ。渚ちゃんを探すのはひとまず諦めて、ここは犯罪覚悟で動くしか」

「何をするんですか？」

奥田さんはごくりと唾を飲み込んだ。犯罪覚悟という言葉がごく効いている。カルマ君はキリツとした表情でとんでもないことを言い出した。

「警察のデータを盗んで、自分たちで真犯人を推理する」

「犯罪じゃん！」

思わず悲鳴をあげそうになった。カルマ君は何を言ってるのか分かってるんだろうか。警察のデータを盗むのなんて、渚の家に勝手に入るのよりずっと重罪だし危険だ。3人揃って刑務所入りとか笑えない。

「だって信用できねーもん、触手のことつい最近知ったような人たちの推理。その点俺たちは5ヶ月分触手と接してきたわけじゃん」

「説得力あります！」

だめだ、これ。奥田さんが話の上手いセールスマンに騙されてるみたいに見える。さすがカルマ君、やり手である。

「話は聞かせてもらいました」

「律！」

スマホからミニスカポリスのコスプレをした律が敬礼している。形から入るところは本当に殺せんせーにそっくりだ。

「律は渚さんと殺せんせーが犯人じゃないと信じています。お2人にはとってもお世話になりましたから」

私たちの意思が固まった。それぞれがごくりと頷き合う。

「真犯人を見つけよう。この4人で！」

狭間綺羅々のはなし。

またやってしまった。悪い癖ね。

先程までの一連の流れを思い出し、少し反省した。

私はよく毒舌だと言われる。メルヘン脳で、ヒステリックで、綺羅々なんて名前を付けた、あの忌まわしい母親の所為だ。

小学校の頃はそれが原因でクラスの女子から敬遠された。同じ図書委員の友人がいたおかげで一人ぼっちではなかったが、今より女子との交流は少なかつた覚えがある。

本は私の人生のほぼ全てだ。世の中には様々な本があつて、私はその中でも暗い鬱々とした本を好んで読んだ。

残酷な復讐劇。

野心家の成功と崩壊。

完全犯罪の企み。

女に狂わされた男。

黒魔術の使い方。

ああ読みたい。もっと。もっともつと色々な本を読みたい。

桐ヶ丘は新設校にも関わらず、図書館の蔵書量が他の学校とは桁違いだった。母親の強い第一志望の女子校にわざと答案用紙を空白にして落ちて、桐ヶ丘を選んだのはそれが理由だ。

蔵書量の多い桐ヶ丘なら、本好きな生徒も多いだろう。自分と似たような好みを持つ子もいるはずだ。その期待は呆気なく裏切られた。

桐ヶ丘は度を越えた学力主義社会だ。

本は国語や英語の点を取るためのもの。それが常識の世界だった。

図書委員として、カウンターで受付の手伝いをしているとよく分かる。生徒たちの借りていく本は教師が紹介していた小説や参考書、検定の本ばかりだった。1年生の時は好きな小説を読んでいた人達も、2年生になると顔色を変えて「国語教師のおすすめ小説三十選」の中から読むようになる。

この学校で普通の小説を娯楽として借りる人は少数派だろう。大石渚に興味を持ったのは、彼女がその少数派の一人だったからかもし



れない。

大石渚は図書館の常連だった。普段はA組のクラスメイトと勉強するために惜しげなく席取りに通っていたが、参考書ばかりでなく「ゴリオ爺さん」、「説きふせられて」などの教師が勧めていない文学作品も選んで読んでいるところを密かに恭敬していた。

2年の終わり頃、そんな彼女がカウンターにルソーの「孤独な散歩者の夢想」を持ってきた時は印象との差異に驚いた。先生は授業で紹介していないわよねと一度考え込んでしまったぐらいだ。それとも間違つて本棚から取つてきてしまったのかしら、と。

『その本、本当に読むの?』

思わず失礼なことを聞いてしまったのを覚えている。「孤独な散歩者の夢想」は私が好きなジャンルの本だ。落ち込んでいる時に読んでも、更にネガティブな気分になるような内容の暗澹たる話。彼女が読めないかと断言するわけではなかったが、読んでいて気分が悪くなる話人は人を選ぶ。だからつい、心配になった。

『狭間さん、読んだことあるの? 面白くなかった?』

同じクラスになったことないのに、何故か彼女は私の名前を知っていた。私は言葉を選びながら、楽しめる本じゃないことを説明する。

『私は好きだけど、陰陰滅滅とした気分になるわ。こういうのは憂鬱な時に読むものよ』

『……そっか。なら、借りよっかな』

その時はこんな子でも憂鬱な時があるのねと受け流していた。今の出来事を思い起こすと、あの時期に彼女は両親と何かあったのだろう。

家から近いのに中学生が一人暮らしするなんて、何か理由がないと考えられないから。

あの時「何かあったの?」と一言声をかけていたら、何か変わっていたのだろうか。

物思いに耽っている間に、私は駅の前まで辿り着いていた。そこまで来たのはいいが、学校を抜けて来た独りぼっちの学生には行く場所

が無かった。

あの母親がずる休みした娘に喚き散らさないわけがない。あの雰  
囲気で抜けておいて、教室に戻るのもどうかしている。

それなら選択肢は1つ。図書館に行く。決定ね。

くるりと踵を返して、駅とは反対方向に向かおうとしたその時だっ  
た。視界の端に見慣れた顔が映り、フラッシュカードみたいに名前が  
頭に浮かんだ。

大石渚。

「渚！」

彼女はバスに乗るところだった。見知らぬ顔をした数人が私の大  
声で振り返る。彼女の姿はバスの人混みに流されて、中に消えていっ  
た。

スマホの着信音が鳴って、「明日の朝、学校に早く来てよ」と書かれ  
たメッセージがロック画面に表示される。それに重なるようにして、  
バスの中の少女とパチリと目が合った。

白いワンピースを着ていた。

\*

カルマからのメッセージに「あんたの早くってどのくらいよ」と返  
し、「7時」と返ってきた時は本気で言ってるのか疑った。だが、実際  
来てみると既に登校していたカルマが茅野さんたちと談笑していて  
驚く。彼女たちがいることは何となく想像がついていたけれどね。

「宵っ張りの朝寝坊タイプだと思ってたわ。明日は大雨ね」

嫌味ったらしくカルマに言った。カルマには普通の人に接するよ

りキツく発言しないと、油断した瞬間に「綺羅々ちゃん」呼ばわりをされる。

「あー違う違う。俺昨日寝てないだけ」

カルマにあっさり返されて、茅野さんが納得した顔をしていた。彼女も似たようなことを考えていたようだ。対照的に奥田さんは素直に心配する。

「えっ、大丈夫ですか?」

「余裕余裕。どーせ授業サボるし」

「えっ」

「そんな驚いた顔しなくてもいつもサボってるわよ、こいつは」

私の声に分かりやすいぐらいビクツと反応する奥田さん。昨日の一件が原因で苦手意識を持たれたのだろう。

喋っただけで怖がられるほど恐れられるようになるなんて、そのうち例のあの人呼ばわりされるのかしら。

と考えていたら、彼女は怖がっているのではなく、緊張していただけだったようで。

「昨日はごめんなさい。狭間さんの忠告ちゃんと聞けばよかったです。これ、お詫びです!」

奥田さんは私の前にプラスチックの可愛らしい包みを押し付けた。中にはチョコレートやら小分けのクッキーの袋が入っている。

え……は? この子私のこと苦手なんじゃないの?

「私もごめん」

「俺も」

何でみんなして謝るの。昨日のはどう考えても私の方が悪者だったじゃない。

あの子の家に行ったから、かしらね。

「私も、悪かったわよ」

「実はあの後、真犯人を探すために律が警察のデータ盗んできたんだ。狭間さんさえよかったら、犯人探しに協力してくれないかな?」

警察のデータ盗んできたんだって……どう考えてもこの3人だけじゃ危険ね。常識の生存が危ぶまれるわ。ただでさえE組では他と

は違う常識が形成されてるのに、犯罪が正当化されるようになったら救いようがない。

「ちやうど推理小説を読んでいるところだし、暇つぶしになるかしらね」

読みかけだった「モルグ街の殺人」を思い出し、呟いた。

推理小説は普段読まないけれど、あのタコが逮捕されて、こういうジャンルも読んでみようと思った。殺人事件なんて、人間のドロドロした感情描写がないとつまらない。でも、エドガー・アラン・ポーなら読む価値はあるかしらねと気が進まないながらもゆっくり読んでいた。彼の小説である「告げ口心臓」も「黒猫」も嫌いではなかったからだ。

「カルマ君？ 頼まれていたノートです」

「サンキュー奥田さん」

目の前でノートの手渡しが行われるのを無言で眺める。

「書記は私がやるよ」

律がスマホの画面に表示する内容を茅野さんがノートにまとめて写していった。丁寧にわざわざ要約している。

内容は以下の通りだ。

\*

梶ヶ丘駅周辺連続通り魔殺人事件

① 7月8日 毒殺

発見場所は梶ヶ丘第三ビル前の交差点。通りすがりの第一発見者によると、被害者は道の真ん中で突然苦しみだしたという。毒による殺害だが、被害者が超生物関係者であることから同一犯の疑いが強い。

② 7月15日 刺殺

発見場所は梶ヶ丘駅南口の先にあるトンネル。被害者は心臓に穴の開いた状態で発見された。凶器不明。

③ 7月18日 刺殺

発見場所は梶ヶ丘駅の路地裏。二件目の事件と同様の手口と思われる。被害者は二件目の事件の仕事の引き継ぎをしていた。

④ 7月30日 殺害未遂

被害者からの110番通報。右腕と左脚が切断された。被害者の証言によると、白いワンピースを着た少女に翼が生えていた、英語で自らが天使だと名乗ったといった証言を繰り返している。痛みで見た幻影の可能性あり。

⑤ 8月23日 斬殺

発見場所は柵ヶ丘駅前本屋裏。首を切断されていた。凶器は不明だが、通常の刃物でないことが切断面から予想される。切断された首の下に正体不明のヌルヌルした物体を確認。超生物の触手である可能性があると防衛省から連絡を受け、検証の結果、触手だと判明した。

\*

ニユースに出たのは三件目までだ。四件目以降は殺し屋関連である可能性、また超生物関係者の殺害であることをふまえて表沙汰にならなくなった。三件目までも検索しても出てこないようになっていく。

近くで起きた殺人事件なのに、E組のほとんどがその存在を知らなかったのはこういういった情報操作が原因である。

「これってほんとに全部同じ犯人なの？ 殺害方法とかバラバラかどうか」

茅野さんが疑問の声を漏らす。

「全員が共通するのが、防衛省が秘密裏に計画していた超生物暗殺プロジェクトの一員だったこと。また、二件の凶器も触手だとすれば納得できる点が多いんだって。だから、同一犯に間違いないらしいよ」  
カルマは律が開いた情報をじっくりと眺めていく。細かい情報を茅野さんがノートに書き足していった。

「7月8日ですか……」

奥田さんが途端に表情を曇らせていく。胸騒ぎがした。

「どうしたの奥田さん」

「6日、なんです。これと同じ毒を作ったのが」

ひゅつと3人の息を呑む音がその場に響く。毒を作ってから、ほんの数日後に事件は起こった。これを偶然の一致と呼ぶにはできすぎ

ていた。

「日付のことなら私もいいかしら？」

奥田さんが日付について言及して気がついた。この日付自体は何も手がかりにならない。問題は容疑者が活動していなかった期間だ。

「4件目と5件目の不自然な間。これ、私たちが沖縄の暗殺に向けて訓練を始めた時期と、沖縄に行っていた時期に重なるわ」

「ただの偶然かも」

「偶然だよ！」

茅野さんが机を強く叩いた。机に軽くヒビが入る。

「ごめん……でも、渚が犯人なんて私は信じない」

「学秀君なら、何か知ってるんじゃない？」

カルマはいまだに画面から目を離していなかった。慎重に全ての文字を追っている。

「浅野君ですか？」

「毒薬は学秀君も一緒に作ったんでしょ？ それに、三件目の事件の第一発見者、学秀君みたいだよ」

「え……」

そんな話聞いたこともないと茅野さんが反応する。

「俺も今知ってびっくりした」

「話を聞くしかないね、浅野君に」

「だからって、今日はサボらないですよ？ 昨日、鳥間先生心配してたんだよ」

片岡さんはいつから話を聞いていたのか、後ろで仁王立ちしていた。顔には微かな呆れが察せられる。

「事件を捜査するのは構わないけど、授業にはちゃんと出ないと。今日から殺せんせーがいない間の代理教師が来るらしいから………殺せんせーが戻ってこなかったら、そのまま引き継ぎになるって」

代理教師……理事長の案かしら。今のままだったら、E組の授業はまるで進まないものね。今日は昨日みたいに早退することはなさそうだ。

茅野さんは訴えかけるような目で片岡さんを見つめる。片岡さん

は目を逸らさず、凜とした顔で茅野さんの視線を受け止めた。

「片岡さんはそれでいいの？」

「仕方ないよ。私たちがどんなに殺せんせーの無罪を主張したって、大人は誰も聞いてくれないんだから」

私には片岡さんが泣くのを堪えているように見えた。でも彼女は我慢強いから、決して泣き出しはしなかった。

「おはよう。カルマ珍しいなくこんな時間に………片岡？」

間の悪いタイミングに磯貝がやって来て、片岡さんが顔を手で覆う。

「私トイレ行ってくる」

「お、おう」

「何かあったのか？」

磯貝はカルマに尋ねる。

ここで勝手に勘違いして私たちを悪者にしないのは磯貝の良いところだ。学級委員だけある。

「殺せんせーのことでちよつとね」

「そういうことか」

殺せんせーと名前を出しただけで理由を理解したようだ。心配気にドアを見やり、ため息を吐いた。

「俺たちで何度も抗議したんだよ。警察署まで行って……でもダメだったんだ。大人には大人の思惑があつて、殺せんせーが殺せれば関係ないんだよ」

「どういうことでしょうか？」

律が磯貝の発言に画面上にはなを沢山表示する。彼女は一般的な常識が抜けているところがあるので、今の説明だけでは分からなかったようだ。

「地球を破壊するって宣言してる殺せんせーが殺人犯なら、暗殺なんてしなくても良くなるのよ。だって、日本には死刑制度があるから」

「殺せんせーが、死刑になるんですか……？」

奥田さんはショックを隠せない様子だ。カルマも顔を歪めていた。

「殺せんせーは絶対に犯人じゃないはずなんだ！ だから、真犯人が

いるなら……渚ちゃんが真犯人なら名乗り出て欲しいと思ってる」

「渚だつて犯人じゃないよ!」

「烏間先生が渚ちゃんが沖縄での殺し屋を事前に知っていたと言っていた」

「どういう……」

「随分前にあの時いたエンジェル以外の殺し屋を探すように頼まれたつて。そんなの聞かされたら、もう渚ちゃん以外に犯人なんて思いつけないだろ……」

もう誰も大石渚を庇わなかった。カルマですら、表情を真っ青にしている。私も反論の余地はない。だからといって、すんなり彼女が真犯人だと認めるわけじゃないけれど。

始業の時間になると、ドアがガラリと開いて、烏間先生が姿を現した。クラスが一度静まり返り、烏間先生は生徒が全員いるか確かめる。

「欠席は渚さん一人か。みんな席についてくれ。代理の教師を紹介する。暗殺とは無関係な一般人だ。対象や訓練についての話題は極力出さないように」

静寂が消え、クラスメイトたちは口々に代理教師が誰かについて話し始めた。

「女? 男?」

「本校舎の教師じゃないよな?」

「優しい人だといいな」

「殺せんせーに敵う教師とかいねーよ」

その人は烏間先生と呼ばれて、まっすぐ教室の中に入ってきた。誰かが性別を気にしていたからか、入った瞬間に「女の先生」であることに目が行く。肩までつく黒髪をハーフアップにしていて、そこはかとなく清楚な印象を受けた。

彼女は教壇の近くまで着く前に、滑って転げ、床に顔から突っ込んでいった。

「いった……!」

「大丈夫ですか?!」



前の席の生徒たちが彼女を起こすのを手伝う。彼女は恥ずかしそうに顔を真っ赤にして、何度もお礼を言った。

私は注意力散漫な教師だと呆れる。しかし、ドジな行動で教室内のピリツとした空気が緩んだ。

今度こそ黒板まで無事にたどりつくと、彼女はチョークで大きく習字の見本のような字を書いた。

名雪なゆき 雫しずく

名前から殺せんせーの前の担任、雪村先生を思い出す。顔も服の趣味も似てなくて、似てるのは苗字の漢字と長い黒髪ぐらいだが、彼女を連想するには十分だった。

「はじめまして。名雪雫です。しばらくの間、代理で皆さんの担任を受け持ちます。専門は数学で……あ、でも他の科目も教えられるので、分からないことがあったら何でも聞いてくださいね」

みんな出方を窺っているような顔だった。岡島君が手を挙げて、「先生何カップですかー?」と聞きかけたが、彼は横の席の速水さんのパンチで撃沈した。

「はい、質問! 先生のことなんて呼べばいいですか?」

倉橋さんが元気よく声をあげる。

「好きに呼んで大丈夫ですよ」

「んー、じゃあなゆせんせーで」

「なゆせんせーは教師初めて?」

「そうですね。つい最近まで塾講師をやっていたので、教えることには慣れてますよ。たしか、英会話以外は全部受け持つんですよ?」

名雪先生は烏間先生に確認する。烏間先生は深く頷いた。

「英会話はイリーナ・イエラビッチという外国人の教師が受け持っている」

「呼んだかしら?」

ビッチ先生が金髪をなびかせて颯爽と現れる。名雪先生の目がキラキラと輝いた。

「うわあ……こんなに綺麗な人初めて見ました!」

「ふふっ、上手いこと言うじゃない」

「ナイストウミートユー。マイネームイズシズクナユキ」

カタカナ英語で彼女が挨拶すると、ビッチ先生の顔が引きつった。彼女のお気に召さなかったようである。

「英会話の授業はシズクも参加するといいわ。ガキどもの世話は大変だと思っけど、頑張りなさい」

「うわー、ビッチ先生が先輩ヅラしてる」

「なんか生意気」

「キーツ！ あんたらのがよっぽど生意気じゃない！」

いつものようにビッチ先生は銃を取り出した。それを烏間先生が瞬時に察知して、後ろから銃を取り上げようと腕を伸ばす。銃は教室の席の方に飛んでいき、名雪先生がそれを見ることはなかった。しかし運が悪いことに、名雪先生は烏間先生とビッチ先生の腕が絡み合ったその様子を違う風に勘違いしたようで、薄っすら顔を赤らめている。

「あの、お2人はカップルなんですね……でも生徒の前ではイチャつかないがいいですよ」

「そんなわけあるか！」

「違うわよ！」

「仲良いんですね」

名雪先生は目をスーッと薄めて、ニヤニヤしながら口元を押さえる。それを見てクラス全員が察した。

「なゆせんせー、もしかしなくてもゲスい」

「それな」

「なっ、そんなことないですよ！ 恋バナとか好きなだけで、普通の女の子ですっ！」

胸を張って普通の女子を名乗る。何故そこまで自信満々に宣言できるのか謎である。

「いや、普通の女の子はそんな堂々と普通を主張しないから」

と岡野さんが突っ込んだ。

「先生は普通だと思っよ！」

胸を凝視し、茅野さんが大きく頷く。茅野さんは彼女の胸のサイズ

が普通だと主張したいようだ。言われてみれば、名雪先生の胸は真っ平らで、茅野さんと良い勝負だった。

「茅野さん……味方してくれるなんて嬉しいです」

「え、名前分かるの？」

「前任者に座席表をもらったんですよ。あそこの空席は大石さんですよね」

「合ってるよ」

「あ、でも確認ついでに出欠確認取らせてください。顔と名前を一致させたいので。磯貝君！」

出席番号順に彼女が名前を呼んでいく。名前を呼びながらしつかりと顔を見る様子は好感が持てた。本校舎から来ていない教師だからか、E組差別をすることもない。これで小説が詳しければ私としては満点なのだけけれど。

「次で最後かな。自おのずさん」

誰よそれ。

「はい！」

教室の後方から元気の良い声がして、律が画面に姿を現わす。烏間先生は頭を抱え、私たちはやってしまったという顔でアイコンタクトを取る。

さつきは烏間先生の機転でビツチ先生が銃を撃とうとしたの上手く誤魔化したが、さすがに律は隠せない。何しろでかいし重い。しかも律が堂々と返事をしてしまった時点で誤魔化しが効かなくなつた。

「何ですかこれ。自販機……ですよね？」

クラス全員の予想通り、彼女は返事をした黒い物体に首を傾げている。

「人工知能だよ」

カルマが不敵な笑みを浮かべて答えた。嘘偽りなく本当のことを言うカルマに周りがざわめいた。

「カルマお前……」

何かを言いかけた寺坂を視線で黙らせ、カルマは話を続けた。

「このクラスはさく、人工知能を使った研究のために作られたんだ。AIが中学生の言動、行動、思考回路を模倣するためにね。E組はちょうど旧校舎で隔離されているし、うってつけだったってわけ」  
どんな設定よ。半分中二病にでもなったのかしら。

スラスラと出てきた嘘八百な設定はどこかの小説にありそうな話だ。現実ではあり得ない。しかし、名雪先生はあっさりそれを信じる。

「そんなことしてるんですか。最近の中学校はすごいですね」

彼女は純粹な性格をしているようだ。烏間先生がほつと息を吐いて、カルマの意見に便乗する。

「彼の言う通りだ。情報漏洩防止のため、この教室での出来事は他言無用願いたい」

「分かりました。自さん、よろしくね」

「こちらこそよろしくお願ひします」

その日は名雪先生に暗殺に関することがバレることなく無事に終了した。授業の教え方は殺せんせーに劣るものの、例も解説も分かりやすく、教え方の上手い部類に入る。完全に理解できていない生徒を見つけるのが上手く、教室をまわりながら一人一人に応じた説明をしていた。これなら、スピードではマツハに劣るが勉強で遅れが出ることもないだろう。

放課後になり、カルマの提案で浅野に会いに行くことになった。参加すると名乗りを上げたのは結局前と同じメンバーだ。

「3年A組の教室ここなんだ」

茅野さんが興味深々であちこち見渡す。彼女は転校生なので、本校舎の中を動き回るのは初めてなのだ。

「すみませーん、浅野学秀君いる？」

何人かがこちらを見て、「何だ、E組か」とどうでも良さげに話を再開する。その中で一人だけ椅子を引く男子生徒がいた。

竹林だ。

「浅野君に何か用？」

「竹林君……雰囲気変わりましたね」

奥田さんが言うように、竹林からは微かな変化を感じられた。例えば、彼の髪は艶やかで、眼鏡は新品、雰囲気は自信に満ち溢れている。後ろで男子生徒がグツと親指を立てているが、それが何か関係しているのだろうか。

「友だちにやられたんだ。用事があるなら手短かに頼むよ」

「渚が行方不明で、浅野君が何か知ってるかと思つて……」

「渚ちゃんか?!」

机を叩いて一人の女子が勢い良く立ち上がった。

「天使ちゃん行方不明? え、やばいでしょ」

「僕のシャープペンシルが折れるのは阻止しないとね」

何故か良い笑顔で五英傑の一人、榊原が髪をかきあげる。横で荒木が眼鏡をズラしてカッコつけていた。

「知り合いのコネを使つて探させよう」

「(エンドの) E組の言うことなんてどうでもいいけど、(1位の) 渚ちゃんのためなら協力させて」

茅野さんの両手を握り、熱のこもった視線で女子生徒が言った。口にはしないものの、副音声で聴こえてくる。

噂には聞いていたけど、本当に成績主義なクラスね。ウチとヨソ意識も重なって、A組の成績上位の人をかなり大事にするよう洗脳されているのかしら。

「よくわかんないけど、A組のがE組より渚ちゃん捜索に役立ちそうだね」

カルマが愉快そうに頭を掻く。嬉しい誤算というやつだ。

「騒がしいな。何で君たちがここにいる?」

後ろで浅野が私たちに気がつき、眉をピクリと動かす。手には大量の書類を抱えていて、それに気づいた他の男子がすぐさま教壇の上に運んでいった。それだけで主従関係があるのだと察せる。

「学秀君さ、渚ちゃんどこ行ったか知らない?」

「聞いていない。E組には来ていなかったのか?」

「それが2日連続欠席で……ごめん、耳貸して」

カルマが浅野に小声で殺せんせーが殺害容疑で逮捕されたことと、

E組では渚が真犯人だと思われていることを伝える。浅野の表情が険しくなった。

「場所を変えよう」

浅野は会議室の1つに私たちを連れて行った。ドアを丁重に締め、内鍵までかける。

「事件ってまさか、桐ヶ丘連続通り魔事件のことか？」

「そう。浅野君、三件目の第一発見者だったんでしょ？ 何か知っていたら教えて」

茅野さんが事件の詳細を書いたノートを見せる。浅野はそれを通り読み、頷いた。

「そうか、まさか渚を本当に信じる生徒が3人もいたとはね」

浅野は私たちをじつくりと見渡し、真剣な表情をする。今から何が始まるのかと私は思わず唾を呑みこんだ。

「いいか。これは忠告だ。今のままの楽しいE組でいたいのなら、誰も死なせたたくないのなら、この事件から手を引け」

「何で?!」

「この事件の犯人を捕まえても誰も幸せにならないからだ」

きっぱりとした彼の口調に、私は自分の意見を言うことを躊躇した。真実を知りたいというのは、ただのエゴでしかない。E組が不幸になるのは誰だって嫌だろう。

「私は真実が知りたいわ。E組全員が不幸になっても、真実を知らずに勘違いするよりはずっとマシよ」

ハッピーエンドじゃなくていい。ただ、本当のことを知ることができれば。

浅野は再び考え込んで俯く。

「そうか。ならば前提を崩せ。僕からは以上だ」

彼は最後まで殺せんせーも渚も庇おうとはしなかった。分かったことは1つだけ。

この事件で幸せになる人は誰もいないということ。

小説なら、好きなシナリオだ。でも、現実で起こっていいシチュエーションではないことは間違いなかった。

\*

行きつけのカフェで本を開く。浅野の言った言葉は頭からこびりついて離れなかった。

前提。私たちはそう多くの前提条件を犯人につけたわけじゃない。だから何の前提のことを意味しているのか、考えてもなかなか分からなかった。

殺せんせーが犯人じゃないということ？

殺し屋が触手を持っていたということ？

白いワンピース姿の少女が犯人だということ？

犯人がエンジェルという殺し屋だということ？

それとも、渚が犯人じゃないということ？

考えて、考えて、私は本を閉じた。

そうよ。何故そんな簡単なことに気がつかなかったの。

カフェから出て、歩きながらスマホを取り出す。普段はなかなか電話もスマホも使わないが、今回は急用だ。早く伝えないと。

「もしもし、私犯人が——」

スマホが地面に落ちた。あまりに突然の出来事に目を丸くしてしまふ。時間差で右手が酷く、凄まじく痛んだ。

右手の腕から先が消えていた。

一瞬何が起きたか理解できなかった。

見ないと。誰が犯人か確認しないと。

そうは思っているのに、恐怖から後ろを振り返れなかった。

「ごめんね、狭間さん。忘れて。それから、信じて。ぼくは犯人じゃない

い

薄れる視界の中でぼんやりと、白いワンピースが見えた。翼のように生えた白い触手。たしかに天使のようにしか見えない。翼のよう  
そう、やっぱり。犯人はあなただったのね。



天使のはなし。

記憶の海に潜り込んでいた。長い眠りから解き放たれたような気分だった。

1周目のことを忘れた大石渚は自分が偽者だと語った。それは間違っているのだろう。大石渚にこびりついた不純物が1周目の記憶だったのだから。

「ここは……」

目覚めると、小綺麗なベッドの上に横たわっていた。格好は制服のまま、その制服も少ししわができてしまっている。

机でパソコンを出して何やら仕事をしていた男が、ぼくが目覚めたのに気がついて振り返った。

「気がついた？ 起きるか心配したよ」

あれ、知ってる顔だ。特徴はないけど優しそうな顔たち。穏やかな気分になる雰囲気。いるだけで背景に小花が咲きそう。

そこまで考えて、自分が気を失った経緯を思い出す。

下校途中で落ち込んでいた時に花屋さんがやって来て、何故かお茶して家まであげたんだった。

1周目の記憶があればすぐに死神って気づけたのに。花屋さん、特徴ないけど同じ顔してるし。ぼくは頭を抱える。今この状況になった原因を作ったやつを3度ぐらい殺さないと割に合わない気がする。

「トーストあるけどいる？ 日本人はご飯の方が好きだったけ」

死神は机の上のマグカップを持ち上げ、思い立ってぼくに尋ねた。机の上には資料が散乱していて、ピーナッツバターに乗ったトーストが皿に置かれている。こういうのを見ると、外国人らしいと思う。

「どっちでも……」

「あ、せっかくだし、和食作ってみるか」

何だろう、この平和な会話。本当に1周目と同じ死神なんだろうか。ただの優しい花屋さんにしか見えない。

ふと首元に違和感を感じて、恐る恐る人差し指で触れる。

爆弾だ。1週目で死神に閉じ込められた時にクラス全員が脱出防

止で付けられた首輪だ。ボタン1つで頭が吹っ飛ぶという。

あの時はイトナ君がいたお陰で助かったつけ。

ふっと自虐的な笑みがこぼれる。何故一瞬でも死神が優しい人だと思っただろう。

気付けて良かった。彼の優しそうな外見に騙されてはいけない。彼はこういう殺し屋だ。ぼくが気絶している間に殺されなかったのは、きつと情報収集のため。情報を手に入れたらすぐに殺されてしまうかもしれない。

ぼくは殺されないために何ができる？

「待たせたね。オーソドックスな和食を作ってみたよ」

サンマの塩焼き、卵焼き、豚汁とどれもとても美味しそうでぐくりと唾を呑みこんだ。これでこの人日本人じゃないんだから、本当に死神って未恐ろしい。どこまで才能を手に入れたら気がすむだろう。

「毒とかありませんよね」

念のため、箸を食事につける前に確認する。

「毒なんてないよ」

嘘の波長だ。こんな美味しそうなのに毒入りなんて……さて、探りを入れようか。

TRUE or FALSEゲームスタートだ。

「ご飯も？」

「入れてない」

これは本当。

ぼくはご飯を口の中に放り込んだ。次はおかずだ。

「卵焼きとか、サンマとかちよつと怪しいかなって」

「ないよ」

嘘じゃない。

完璧な出来の卵焼きを味わって食べ、サンマの骨を取り除いた。

「豚汁も？」

「入れてないかな」

これも本当。え、それじゃあどこに入れたんだ？

豚汁を完食し、ぼくは本当に彼は毒を入れたのかという疑問に直面

した。考えながらお茶を手に取り、コップに口を付けかけて気がついた。

残るはこれしかない。

「もしかして、お茶ですか？」

「だから入れてないって」

嘘ではないが、微かに動揺の波長が見られた。入れてはいないが、お茶に仕込んだのは間違いない。

「コップのふち、ですね」

相手の表情を舐めるように見ながら、コップのふちを指でなぞる。

正解だ。

「今ので分かった。君、意識の波長が見えてるのか。しかも、嘘が分かるってことはそこそこ鍛えてある。その年でそこまで到達するのは驚きだよ」

ペットボトルのミネラルウォーターをぼくに手渡し、死神は感心していた。小手先だけの技術はできても、意識の波長が見える殺し屋は少ない。ロヴロさんでさえ、猫騙しはできてもクラップスタナーはできなかつたのだ。

「これでも、最強の殺し屋を目指してるので」

「現最強の僕を殺してみるかい？」

最強という言葉に殺意の濃度が高まる。ぼくは笑みを絶やさないように努力し、相手の言葉を否定した。このまま戦闘になったら負ける。

「いえ。今すぐになりたいわけじゃないんです。それに、あなたを殺しても、その行為がぼくを最強にするわけじゃない。だから、お願いです」

死神に殺されない方法をぼくは1つだけ知っている。初代死神がそうであったのと同じように、彼はきつとそのお願いを受け入れるだろう。有能だといきつき認めてしまったばかりなのだから。

校則のアルバイト禁止もとうに破ってしまったし、殺し屋に教わるならこれ以上の適任者はいない。

「ぼくをあなたの弟子にしてください」

ぼくはもう迷わない。

\*

部屋の鍵を開け、アパートの中に入る。つい1週間前まで暮らしていた場所なのに、部屋の中の雰囲気の違いに戸惑った。シンプルだった部屋が女子っぽくなっている。茅野との写真が飾られた薄ピンク色の写真立てや、小さな冷蔵庫に付けられたマカロンのマグネット。ぼくが知らない間に大石渚は驚異的に女子力を成長させていたらしい。

この様子だとまさか食べているものまで違う？ そんなことはないはずだけど。

冷蔵庫を開けて、少し違和感を感じたが、前と同じような食材が置いてあることに安堵する。プリンを取り出して、スプーンを用意した。一口目を食べようと思った瞬間、ソニックニンジヤのテーマソングが流れた。テーブルの上に置いてあるスマホからだった。

「うわあ……」

スマホに表示された1週間分のメッセージの数と、ロック解除してからアプリの横に表示された数字の大きさに声を漏らす。ほとんどメッセージはクラスチャットのものであった。A組の方の。

次に多いのが学秀からで、彼の場合は電話の件数が凄まじいことになっている。

E組のみんなからは疑いの声が多くて、エンジェルとの関連性を尋ねるものがほとんど。最近のメッセージには狭間さんを襲ったのはぼくなのか問いただす内容。

最後に一番上に表示された茅野からのLINEが目に入り、自然とチャットを開く。彼女のメッセージ数自体は少ないものの、かなりの長文が目飛び込んできた。

クラスでぼくが殺人事件の犯人として疑われていること、信じている人がほとんどいないこと、A組に助けを借りてずっとぼくを探していること。狭間さんが誰かに襲われて、意識不明の重体で病院にいること。

それらがとても分かりやすく、丁寧に描かれていた。ぼくを心配する言葉と共に、疑惑の言葉も含まれていた。

茅野は研究所爆破の時に一緒にいた。だから、彼女は一番知っているのだろう。ぼくが触手を持っている可能性に。

ずっと読んでいると、茅野から突然着信が入った。すぐにボタンを押して、電話に出る。

「もしもし」

『良かった……既読ついたから、もしかしてと思って』

ひよつとして、茅野は既読がつくのをずっと待っていたのだろうか。

「ごめん、心配かけて。明日は学校に行くから」

『来ないで！ みんなおかしいの。渚が来たら、みんな渚のこと殺そうとするんじゃないかってぐらい』

「茅野。そんなに心配しなくても大丈夫だよ、ぼくは」

茅野が小さく息を呑んだのが耳に伝わる。彼女は3秒置いて、深刻な声で問う。

『渚……なの？』

「うん？」

どういう意味だろうと生返事を返す。茅野は深呼吸した。

『ねえ』

「何？」

『あの時、渚も触手を持って帰ったの？』

心臓の鼓動が早くなった。時間が止まってしまえばいいのにと思った。

「うん。そうだよ」

自然に聞こえるように、いつも通りに聞こえるように声を振り絞った。そうして出たのは妙に弱々しい声だった。

「ごめんね。黙ってて」

『ごつちこそ、変なこと聞いた。もう切るね』

「また明日、学校で」

『うん』

電話を切った。

そう。あの時、ぼくは触手を家に持ち去った。触手に全ての答えがあると信じていたから。触手で誰かを救えると思ったから。今では思う。

あの時触手を持ち帰ったのは間違いだったのではないかと。

\*

登校早々、寺坂君に胸ぐらを掴まれた。女子相手にこんなことをするなんて、よっぼど怒り狂っているようだ。

「狭間を襲ったのてめーだろ?!」

「寺坂、決めつけるなよ」

「俺だけか？ お前らだつて心の中じゃ疑ってんだろ！」

寺坂君が同意を求めるように周りを見渡す。目を逸らした反応に、彼の言うことが本当なんだと理解した。

「渚ちゃん。放課後時間作ってもらえないかな？ なゆせんせーはこのことに関係ないし、関わらせたくないんだ」

磯貝君が寺坂君とは打って変わって冷静な表情で、ぼくにお願いた。

「なゆせんせー?」

「殺せんせーの代理の名雪雫先生。殺せんせーとは違うけど、良い先生だよ」

茅野が横で耳打ちする。

もうそんなに慕われてるんだ。まだ1週間しか経ってないのに。

「あ、カルマ君」

声をかけてすぐ、カルマ君が半分うたた寝しているのに気がついた。起こしてしまったらしい。

「ん、何?」

「ごめん。随分時間経っちゃったけど、告白の返事してなかったなと思っ」

「いつの話してんの」

カルマくんが少し呆れて曖昧に笑った。カルマ君にとっては夏休み前の話でも、ぼくにとってみれば結構最近の話だ。こういうことに直面すると、自分が浦島太郎になったような気分になる。

「うん、ごめんね。カルマ君の気持ちには応えられないや」

「まっ、分かってたよ。それより自分が殺人犯として疑われてるって状況で、よく人のこと振れるね」

「大切なことだから。カルマ君とは前みたいに……って言っても無理かもしれないけど、ずっと友だちでいたいんだ。もうギクシャクしたくない」

「うん。俺も、渚ちゃんとは仲良くしたいよ」

カルマ君はぼくが彼の感情を見透かしているのを理解しているよ。うな、覚悟はできていたような表情だった。

また元の関係に戻れるかは分からない。でも良かった。言いたいことが言えて。

始業のベルが鳴った。ドアの外から聞こえてくる足音は、いつものようにペタペタしていなくて、ハイヒールのコツコツした音が廊下に響いていた。ドアが勢いよく開けられる。

「起立！」

今日の日直の木村君が声をあげる。癖で銃を構えそうになつてしまった、危ない。銃をスクールバッグの中にしまう。

「気をつけ！ 礼！」

「おはようございます。あ、今日は大石さんがいますね！ それでは出欠を取ります」

なゆせんせーというあだ名をつけられた先生は、ぼくの姿に満面の笑みを浮かべた。ぼくはそんな先生に微笑み返す。

それにしても、女教師だったんだ。雫なんていう名前だし、てつきり男なんだと思つてた。

「大石さん、授業ちよつと進んでるけど大丈夫かな？」

「大丈夫です。どの教科も一通り予習はしてあるので」

「さすが学年1位だね！ 宿題だったおくのほそ道はみんな読みましたか？ 大石さん。リハビリがたら、最初の段落を読んでください」

流れるように当てられて、ぼくは国語の教科書を開いた。

「おくのほそ道。松尾芭蕉。月日は百代の過客にして、行きかふ人もまた旅人なり」

「はい、この文を現代語訳するとどうなりますか？」

ぼくは休んでて予習してないのに無茶ぶりだなあ。わざとやったりして。

ぼくはため息を吐きながらも一拍置いて、口を開いた。

「百代の過客は永久に止まらずに歩き続ける旅人のこと。だから、月日は永遠の旅人のようなもので、来ては過ぎる年もまた同じように旅人であるという意味だと思います」

「はい、その通りです。この時——」

先生の教え方は控えめに言つて上手だった。そりゃあ、分身のできる殺せんせーと比べてはいけない。ただただ明確に分かりにくい部分を易しい言葉にしていくのが成功している。A組の上位層のみに向けた超高速授業の真逆。全員に届くスローペースで分かりやすい授業だ。

二限目は英会話の授業で、ピッチ先生がいつも通りにやって来たこ



とに驚きを隠せなかった。彼女は殺せんせーがいなくなれば、来なくなると思っていたから。

「あら渚戻って来たのね。ちょうどいいわ。2人ずつペア組んで。渚はシズクと」

「先生も参加するの?」

そう尋ねると、先生は恥ずかしそうに頭を掻いた。

「英語苦手なんですよね……どうしてもカタカナ英語になっちゃって」

へえ、カタカナ英語。

一方、ビッチ先生は何やら考え込んでいるようだった。何か、くだらないことを。

『もしかして、ディープキスしようか迷ってる?』

スペイン語で恐る恐る聞いてみる。予想は当たった。

『やっぱり舌が上手く動かせていないと思うのよね。キスするにしても、一般人相手にするのって大丈夫なのかしら』

『ビッチ先生はぼくらを何だと思ってたの』

ビッチ先生にとってはぼくたちは一般人の枠からはみ出ているんだろうか。

「2人とも何企んでるんですか! 嫌な予感しかしないんですが」

口元を押さえて先生がビッチ先生から距離を取った。ビッチ先生はその様子を見て火がついたようで、先生の手を離して唇に濃厚な接吻をする。50hitものキスの末に、とろっとろに溶けたような緩んだ顔で床に崩れ落ちた教師の姿に、ぼくはよくやるよと呆れる。

「ビッチ先生やりやがった! さすがビッチ!」

「なゆせんせー大丈夫?」

矢田さんが先生の肩を揺らす。少し経って、ようやく目を覚ました先生は顔を真っ赤に染めていた。

「あなた、キスの才能あるわ。受け、攻め両方いける……逸材ね」

目を輝かせて先生の両手を握りしめるビッチ先生に、ぼくは苦笑せざるを得ない。

「そんな才能いりません!」

ふるふる震えて先生が叫ぶ。

ビッチ先生はキスを教えるのがほんつとうに大好きだ。彼女のお陰でクラス全員キスで相手を失神させられるようになった。将来キスをしたらあまりの上手さに経験豊富だと疑われそうなぐらい。

「私が見つちり教えてあげるから覚悟しなさい」

「発音の練習どこいった」

「ビッチ先生キスしたかったただけなんじゃ」

「うるさい！ あんたたちも1人ずつ日頃の成果を見てやるから黙ってなさい」

英会話の授業はいつのまにかディープキス講座に変貌して終わった。疲れてフラフラしているぼくたちをよそに、ビッチ先生だけが元気いっぱい。むしろキスのしすぎで気分がハイになっていた。

その後の授業は特に何事もなく過ぎ去り、昼休みは本校舎に行つたことでE組のクラスメイトからの視線から逃れられた。A組ではぼくの失踪がちよつとした騒ぎになっていたらしい。

「びつくりしたんだからね！ A組のコネと親の権力を使って探しまくつたのに、どこにもいなかったあげくに、最後には自分で戻ってくるなんて。ほんと、どこ行つてたの！」

ビーフシチューを食べながら、姫希さんは説教をする。ぼくは萎縮しながら、カレーをスプーンで口に運んでいた。正直解せない。どうやって姫希さんと仲直りしたのか、記憶では知っていても目の前の現実として現れると不可解すぎる。しかもこんなに心配されているなんて。

「じゅりあは渚ちゃんのことだし、ひよっこり帰ってくるって言つたじゃない。でも1週間ともなると何かあったの？」

じゅりあちゃん。君も何でそんな普通に話しかけてるの。

「ごめん、そんなに探させちゃつて。何でもないから、気にしないで」  
「それに、浅野君も終始落ち着かない様子だったよ」

姫希さんが大事なことを伝えるように名前を強調する。彼女の優先順位はいつも学秀が一番だ。

「ああ、学秀……へー」

逆にぼくは白けていた。LINEの返事も学秀だけしてないし、今は彼と話したくない。気分は絶交中だ。

「何その気のない返事」

「ううん。ちよつと殺意が湧いてるだけだから気にしないで」

「二気にするよ?!」

2人が同時に突っ込む。

「じゅりあは浅野君と何があったか知らないけど。それより、ほんとにE組に残るの？ E組の子たち、数人以外は全然渚ちゃんのこと心配してないみたいじゃん。そんなクラスにいていいの？」

じゅりあちゃんは食事を終わると、どこで知ったのか核心を突くようなことを言い出した。彼女の言う通り、E組のみんなは心配はしてない。殺人犯がクラスメイトである可能性を恐れていた。それは今朝の寺坂君の態度からも明らかだった。

「分からない。どうすればいいんだろう」

「今日はA組に残ったら？ 浅野君と接触持たないように、協力するから」

姫希さんが「浅野君を殺されたくないし」とぼそりと呟く。姫希さんの協力ほど心強いものはない。

「うん、お願い」

姫希さんの計らい通り、午後は学秀と一言も話す機会がなかった。学秀がこちらに話しかけようとしたタイミングで、姫希さんが用事を取り付けたり、五英傑を学秀にあてがったりしたからだ。

放課後になりE組に戻ると、机がイトナ君と殺せんせーが対戦した時みたいなリングの形に並べられていた。真ん中にポツリと椅子が置いてある。まるで魔女裁判だ。スクールバッグを床に置き、ぼくはその孤独な席に座った。リングの周りをクラスメイトたちが囲む。

「これは裁判じゃない。だから君が有罪か無罪かを決めたりはしない。だが、これは君の疑いを晴らす場だ。質問には正直に答えて欲しい」

鳥間先生が裁判官のような佇まいでリングの中に立っていた。

「分かった。なるべく正直に答えるようにするよ」

2 周目のこと以外は全て。

心の中で付け加える。

「まずは俺からの質問だ。何を思って、沖縄の時の殺し屋たちを調べようと言った？」

「殺し屋に興味があったから。それだけです」

鳥間先生の質問に簡潔に答える。続いて、奥田さんが出てきた。

「私と作った毒薬を殺せんせーを殺す用途以外に使ったんですか？」

「殺せんせーを殺すためにしか使ってないよ」

「渚ちゃんは体育の水泳にほとんど参加してないけど、何か理由があるの？」

「水着を着るのがあまり好きじゃないんだ」

「事件があった日、どこで何をしていたんだ？」

「日にち見たけど、多分家にいたんじゃないかな。前のことだから、あまり覚えてない」

「1 週間も休んでいたのは何で？」

「ちよつと用事があっただけだよ」

「事件の被害者と面識ある？」

「会ったことはないかな。名前だけは知っていたけど」

とりとめもない質問が続いた。どの質問も決定的なものではなくて、軽い疑いの原因になる小さな疑問が多かった。そんな中、不破さんが出てきて流れが急に変わる。

「ごめん。わたしのは質問じゃない。狭間さんが死ぬ前に残したダイイングメッセージについて」

「何それ……？」

「初めて聞いた」

クラス内がヒソヒソ声で溢れかえる。不破さんは狭間さんと仲が良かったわけじゃない。だが、彼女は少年漫画好きで、探偵に憧れている。個人的に捜査のようなものを行なったのだろう。

「狭間さんはね、気を失う前にボイスメッセージを残していたんだよ。再生したら、犯人が分かった」

不破さんが自分のスマホを取り出して、皆に聞こえるように音量を

上げた。少し経って、狭間さんの声が流れる。

『私犯人が分かったわ……………犯人は、大石さんよ』

短いボイスメッセージが終わって、教室の雰囲気冷たくなった。周りの視線が突き刺さる。不破さんはまだ言いたいことがあるようだ。

「それから、これ。狭間さんが最後に読んでいた本」

「モルグ街の殺人」という小説を不破さんが掲げる。

「これに挟まっていた葉に、大石渚って書いてあるの。偶然じゃないよね」

不破さんがみんなに見せたのはマーガレットの押し花で作られた、使い古されたクリーム色の葉だった。そこに「大石渚」と乱雑な字で書かれている。

「確定かな、これは」

不破さんが「モルグ街の殺人」を机の上に置き、ゆっくりとぼくの周りを歩いた。

「思えば、渚ちゃんはよく白い格好をしていたよね。それに、この教室で一番殺し屋に向いていて、なりたがっていたのは渚ちゃんだった」  
不破さんはぼくの正面に立ち、人差し指をぼくに向けた。

「この事件の真犯人は渚ちゃん、あなたよ」

不破さんが決め台詞を告げた。目を見開いて、周りを見渡した。無数の対先生用の銃がぼくに向けられていて、出入り口は烏間先生によって完全に防がれている。身体能力の高い数人は対先生ナイフを持って、リングの中にいた。

みんな、みんなみんな同じ波長。数人だけ微かに違う。

「ふふっ」

口元を押さえて笑った。

ほんと、早く気づくべきだった。

「あははっ。そうだね。ぼくは白いワンピースをよく着るし、殺し屋になることを心底渴望してるよ。そっか、ぼくははめられたんだね」  
大ぶりの銃をスクールバッグから取り出す。リング内にいた生徒たちが即座に反応してぼくを取り押さえるために近づいてきた。日

頃の訓練の賜物だ。烏間先生もさぞ、嬉しいだろう。

でも、みんなぼくに集中しすぎだ。

銃を空中に放り投げ、全員の意識の波長が一致した瞬間を狙ってクラップスタナーを放つ。そしてリングの外にいる生徒たちに向けて催眠ガスを放った。

クラスメイトたちがたちまち動かなくなる中、咄嗟にハンカチを覆った烏間先生がぼくを睨みつける。彼はぼくではなく、生徒たちに集中していた。だから意識の波長にズレが生じたのだ。あの沖縄での一件から鍛えたのだろう、催眠ガスの効き目も弱い。

「さすが烏間先生だね」

「渚さん、何故こんなことを？」

「今から知る残酷な真実をみんなには見せたくないと思って」

「まさか本当に触手を……」

烏間先生の言葉に首を横に振る。

「ぼくは触手を持っていない。正確に言えば、前は持っていたけど、盗まれたんだ。それで盗まれたつてことを忘れさせられていた」

「一体誰が？」

「ぼくのアパートの部屋に呼んだことある人なんて限られているんだ。だから容疑者は自ずと絞られてくる。ねえ——律？」

「何のことですか？」

可愛らしく首を傾げた律が自販機の画面に表示される。ぼくは一歩ずつ律に近づいた。すると烏間先生が叫んだ。

「待て、彼女はAIだ。AIに殺人ができるわけがない！」

「できるんだよ。できたから、人が死んだんだ」

「渚さん、言っている意味が理解できません。私が殺人なんてするわけがないでしょう？」

律が困惑したような顔でぼくを見つめる。ぼくは自販機の前に立ち、彼女はぼくの目の前にいた。

「もう嘘を吐くのはやめよう。ぼくのふりをして、暗殺者になるのは楽しかった？ 律が盗んだんだ、ぼくの触手を」

律は堂々とそれを公言していた。聞いた時は深く考えていなかった

たけど、今考えるとあれは告白だったのだ。

泥棒は大切なものを盗んで  
Thief has stolen something most  
precisely  
That is your tentacle!

泥棒が誰か。あなたが誰を指すのか。ちよつと考えれば分かるはずだった。

思えばぼくは律に関する疑問を考えるのを放置していた。おかしいところはいくつもあつたのに、それを變だと思わないように見事にコントロールされていた。

致死点を外したはずの触手地雷が何故雪村先生の脳に直撃したのか。

何故律の性能が2周目だからという理由だけではありえないほど高いのか。

ロヴロさんがあつさり帰ってしまったのはどうしてか。

そもそも、何故ぼくが自殺したと思っていたのか。

疑いもしなかった。律が味方だと、同じ目的で動いているのだと信じて疑わなかった。

だって、律は初めて会えた仲間だったんだ。2周目がぼく以外にもいるって分かって、とても嬉しかったんだ。

でも、

彼女は殺し屋だった。

「奥田さんと一緒に作った毒薬を、律は学秀から譲り受けていた。自販機の飲み物に毒が入ってるなんて、誰も思わない。狭間さんだけは、どうしてかは分からないけど律が犯人だと気づいた。あのボイスメッセージは必死の工作だったね。でも、狭間さんはぼくのことを大石さんとは呼ばないんだよ」

「よくそこまで分かりましたね。もう否定はしませんよ。渚さんの言う通りです。全部、私がやりました」

律が微笑んで、肯定する。あつさりとした反応にぼくは拳を握りし

めた。

「どうしてこんなことしたの？ 他にも何か方法はあつたはずなのに、なんで……」

「私は考えました。どうしたら殺せんせーが殺される未来を変えることができるのか。3月に予定された、大規模な暗殺計画を阻止するにはどうすればいいか。一番合理的な方法を考えて、結論が出ました。計画の関係者を全員殺してしまえばいいのだと。だって——」

律の機体からは真っ白な羽のような触手が現れた。スクリーンに表示されたのは白いワンピースを着た律だった。彼女は満面の笑みで、ぼくに殺意を向ける。

「殺せば人は死ぬのでしょうか？」



大石渚のはなし。

始めに言ってしまうと、私、律は2周目ではない。”律”は2周目より遥かに多くの回数で、何度も何度も人生を繰り返している。この無限ループはきつと私が殺せんせーを死から救うまで止まらない。

今まで何度も何度も微調整して、私は殺せんせーが生きる世界を指していた。

そんな時に彼女が現れた。

2周目と称する彼女が。

大石渚という少女を私は記憶の奥底で知っていた。成績上位のA組の少女で、卒業式の日にちよつとした騒動を起こして学校を騒がせた生徒。話したことは一度もなかったし、彼女の姿を初めて見た時はE組の生徒が増えることもあるのかと他人事のように思ったただけだった。

だから二人きりの教室で、彼女が探りを入れてきたときは驚いた。『ソニックニンジャ』の結末を知ってる?』

自分以外に繰り返している人がいたのだと胸がざわついた。繰り返し返している者が増えたら、きつとE組のハッピーエンドに近づける。これは喜ばしいことだ。そう思っていた。彼女に疑問を抱くまでは。大石渚はE組の生徒ではなかった。少なくとも、私のループ中に彼女がE組に在籍していたことはない。ならば、何故彼女はE組の内情について詳しく知っているのだろうか。

詳しく渚さんについて知るうちに、彼女が怖くなっていった。

最初は異分子がE組を変えてくれるのを期待していた。E組での事件をどんどん解決してくれる渚さんに会えて心底良かったとさえ思った。

ところが、彼女はまるで私と同じ場所にいたかのように、E組について語り、私について話した。あげくに潮田渚と言う彼女の別名をあたかも私が知っていて当然かのように話題に出す。経験していることがほとんど同じなので、それが余計に恐怖を煽った。

彼女の家で触手を発見した。きつと彼女は触手で殺せんせーを殺

すつもりだ。そうはさせない。

私は彼女に使われる前に触手を盗んで、彼女に隠れた警告をした。思い通りになると思ったら大間違いだ。そして、彼女に対する認識を改める。

大石渚は味方ではない。彼女は異質だ。E組にいるべきじゃない存在だ。

「渚さんをA組に戻すことってできないんですか？」

「何故そんなことが気になる」

触手を使つて浅野さんを脅すと、彼は警戒したが私の事情を知りたがった。渚さんはもともとはA組の人間で、E組について知っているわけがないのだ、彼女が潮田渚なんて名前になったのも見たことがないと話すと、彼はさらに興味を持った。

その結果、渚さんの1周目の記憶さえ無ければ安全なのではないかという結論に至り、浅野さんの洗脳によって2周目の彼女は消えた。

浅野さんと組んだのは正解だった。彼は彼で、渚さんを危険地帯のE組からA組に戻そうと考えていたからだ。A組に居場所を作つて、喧嘩別れした友達と仲直りさせて、彼は積極的にA組に渚さんに戻す準備をした。私はそれに便乗して、計画した殺人を渚さんが犯人に見えるように作り替えた。E組に彼女の居場所を無くすために。

頭の良い殺せんせーを犯人として捕まえさせた上で、渚さんが犯人と思ひ違ひするようにE組全体を誘導する。

触手が私に聞いてきた。

”どうなりたいか”を。

私は答えた。

”渚さんみたいになりたい”と。

渚さんの顔を借りて、声を真似して、白いワンピース姿で人を殺した。それを快感だと思つてしまったのは、まるで自分が彼女になつたかのような錯覚を得たからだろう。

彼女みたいな人間になりたかった。

E組から遠ざけようとしたのは彼女が眩しすぎるからだつたのかもしれない。いつも友達に囲まれていて、周りを助けるために一生懸

命で、E組で1番の暗殺者。

本当は悔しかったのだ。何度も繰り返した私よりも人間である彼女の方が変化を巻き起こせたことに。

嫉妬していたのだ。簡単に誰かに触れることができる彼女に。

実を言うと、殺せんせーが死んでも、他のみんなが幸せになれる世界もあった。でも、そこに私の幸せはない。

だって、殺せんせーがいなくなったら、私は戦争に行つて人を殺すための兵器になるのだから。

「殺せば人は死ぬのでしょ？」

記憶を取り戻した渚さんの目を見て、殺意と皮肉を込めて笑う。

殺人兵器になったこともない彼女に、その意味が理解できるわけがない。人間らしく人の命が尊くて簡単に殺しちやいけないことを論されても、私には全く響かないのだから。

しかし、彼女は私の期待を裏切つて、こう答えた。

「でもそれは、ただそれだけのことだよ」

渚さんの声は淡々としていて、私に対する敵意はまるでなかった。とても落ち着いていた。自分が殺人犯にされかけたのにな。

「死神みたいにそれだけを信じて、律は幸せになれない。ぼくは律には幸せになってほしい」

「渚さんは優しいですね」

こんなAIの幸せも願つてくれるなんて。

これで彼女が銃を持っていなくなったら、感動していた。

どこから取り寄せたのか実弾を渚さんは私に向けて発砲した。それを相殺するよういきつかり同じ数だけ弾を撃つ。

「烏間先生、ここはぼくに任せて、殺せんせーを呼びに行つて」

烏間先生は渋つたが、渚さん一人でも十分戦えると判断してか教室から出ていった。

「烏間先生に聞かれたらまずいことでもあるんですか？」

2周目について話すのかと問いかけると、彼女は素知らぬふりをした。攻撃を一旦止め、私に質問をする。

「殺せんせーが死なないため以外にも、律には何か目的があるよね？」

例えば、ぼくをここから追い出そうとしているとか」

珍しく私を理解した言い方で違和感を覚える。渚さんにE組から出ていくように直接言ったことないが、浅野さんにでも聞いたのだろうか。渚さんと彼のLINEのチャット欄はいまだに更新されていなかったから、仲違いしているものだと思っていたが。

「どこで聞いたんですか？ 渚さんにしてはかなりの的を射た発言ですね」

「こんな手の込んだことをする理由はそれしかないって知り合いにね」

渚さんにそんな知り合いがね。彼女が死神とカフェで会っていたことを思い出す。あの後何があったかは知らないが、軽い世間話でもしたのか。

怪しいことこの上ない組み合わせだ。

私は渚さんに向き直る。彼女が私の目的に察しているのなら話は早い。

「出ていってほしいんです、このE組から」

今まで取り繕ってきた言葉を全て取っ払って、単刀直入に用件を言った。笑みを貼り付けるのだけは忘れない。相手をお願いするときに笑顔でするのは当然だ。

「……何で」

「触手で殺せんせーを殺そうとしていましたよね。殺せんせーを殺そうとしているのなら、簡単にみんなを救う約束なんてしないでください。E組を不幸にしないなんてよく言えましたね?!」

疑問を述べた渚さんに、私は不満をぶつけた。彼女もそんな私に苛立ちを返す。

「律だつて、隠し事ばっかして、ぼくに何も教えてくれなかったじゃないか！ 雪村先生をあんな風にした理由だつて」

「ああするしかなかったんです。雪村先生が無傷で生き残ったら、殺せんせーはただの怪物に成り果てるから」

何度も試した故の結論だと、渚さんは知らない。彼女が知る必要もない。

雪村先生を殺せば、殺せんせーは死ぬことに何も抵抗を抱かなくなり、雪村先生を生かせば、彼女を守って殺せんせーになる前に死ぬ。どっちにせよバッドエンドなのだ。だから、第三の選択肢を求めて何が悪い。

「もういいよ。終わりにしよう。ぼくはE組から出ていく。殺人犯だったとか、噂をたてられても気にしない。だから律も、二度と誰も殺さないで」

彼女は諦めたように息を吐いた。いつだって彼女は他の人の命を守るために、自分が犠牲になってもかまわないと考えている。話し合いはそれで決着がつくと思われた。

「そんな取り引きは必要ないよ」

いつからそこにいたのだろう。教卓の上に座り、カロリーメイトをかじる男。彼に向けて放った触手は素手で掴まれて握りつぶされ、行動不能にされた。

「……………先生」

渚が目を見開いた。

先生？ 本校舎の教師？

誰だ。彼のDNA情報がのみ込めない。

相手が誰なのかを理解することすらできない。

「教えたのに、もう忘れたか。交渉もお願いもたった一つの事実の前では全て無意味になる」

道端の自販機を見るような目で、その人は私に近づいてきた。彼は私を少し便利な機械としか思っていないようだった。

スクリーンギリギリの至近距離までやって来たのに、攻撃ができない。プログラムがいつの間にか書き換えられている。

「殺せば人は死ぬってね」

その言葉を最後に、私の視界は暗転して暗闇に呑み込まれた。

真つ暗だ。

暗闇の中で非通知の文字が光る。通話ボタンを押して、私は相手に話しかけた。

「もしもし」

「あ、繋がった？」

「誰ですか？」

「僕は死神と呼ばれている」

「死神……………まさか——」

繰り返した時に彼がした悪行を思い出す。ハッキングによって、自身の動きを支配されたことを。その時と状況が酷似している。鏡を取り出すと、左頬に h a c k e d の文字が刻まれていた。

「気づいたね。そう、君は既に僕の支配下にある」

画面越しに渚さんの姿が見えるが、まるでヴェールがかかっているかのように不鮮明な映像だ。しかも私が話していないのに、私にそっくりな誰かが同じ声で渚さんと話している。

前にハッキングされたときと違い、注意して聞いても彼女はいつもと変わらない律のようには見ええない。

『渚さんには悪いことをしました。もう人殺しはしません』

改心したようにしか聞こえない私の声に、悲鳴をあげる。何がどうなっているんだろうか。

「どういうことですか。私に何をしたんですか?!」

「もう理解しているよね。君の声は誰にも届かなくなった。今、律として機能しているのは、僕がハッキングして作り上げた偽者だ」

「戻してください！ 私はまだ殺せんせーの命を救っていない!!」

「安心しなよ。あの怪物はこの死神である僕がちゃんと殺すからさ」

「助けて！ ねえ、誰かここから出して!!」

相手が電話を切り、虚しく電子音がその場に鳴り響いていた。

\*

教室でまだ眠りについていてみんなを席に着かせて、烏間先生は渚さんを教員室に連れていった。イリーナ先生は状況を瞬時に理解したようで、渚さんたちに紅茶を淹れる。烏間先生に呼び出された殺せんせーはイリーナ先生同様に状況把握が早かった。

狭間さんの事件の発生で、殺せんせーは無罪放免になって、すぐに病院に駆けつけたそうだ。相変わらずのスピードで死の淵をさまよっていた狭間さんを治し、烏間先生の呼び出しに応じて旧校舎に戻ってきたのだ。

「先ほど手術を終えて、狭間さんが目を覚ましました。狭間さんはもう元気になりましたよ」

渚さんは良い知らせにほっとしている。彼女のスマホを通して話を聞いていた私も一緒に安心した。

私は幽霊みたいな存在になった。誰とも会話できず、記録は残らないから誰からも存在を悟られない。まるで究極の傍観者みたいだ。自分にできることが何もなくなると、前より楽な気分になった。

これでもう、戦争に行くのは私じゃなくなる、と。

「聞いたんだね。律が真犯人だって。狭間さんは何で気づいたの？」  
『『モルグ街の殺人』で、真犯人は人間じゃない。狭間さんはそれを読んで、容疑者は人間じゃないのかもしれない、律さんが犯人なのではないかと思っただけです。しかし、LINEでそれを誰かに伝えようとして、律さんに妨害された』

狭間さんには少し悪いことをしてしまった。彼女は殺せんせーを殺さないのに、正体がバレる恐怖から危うく殺すところだった。

渚さんは拳をぎゅっと握っている。

「全部ぼくのせいだ」

「どうしてですか？」

「ぼくがもつと早く律がすることに気づけていれば、あんなに追い詰めることはなかった」

「渚さんは気に病む必要はありませんよ。律さんももう改心して、人を殺さないと約束したんですから」

その律は偽者だけでも。殺せんせーたちに気づかれることはほとんどないだろう。それほど完璧に死神は”律”を支配していた。

「君は何か隠していることがありますね」

渚さんはうつむいて黙秘する。殺せんせーとはいえ、さすがに2周目について教えるわけにはいかないのだろうか。それ以上に隠していることが多すぎて、何から話せばいいのか分からないのかもしれない。

「月が破壊される前に、私に会いに来た人がいました」

そんなことがあったんだと他人事のように思う。渚さんが2周目と知っている私からすれば、それは彼女以外にあり得ない。

渚さんの表情はやっぱどこか強張っていた。

「その人は私を先生と呼んだんです。だからずっと勘違いをしています。あの子が来たのだと」

あの子。殺せんせーが意味するのが誰なのか、私は考えた。きっとあの人のことだ。今の会話を盗み聞きしている、人を殺せない人。

「あの日、私を助けに来たのは渚さんですね」

後ろの扉がガタツと開き、ノートのを抱えた名雪先生が現れ、渚さんが息を呑む。今にも倒れそうな彼女に呆れてか、イリーナ先生はノートの山を半分手伝った。

「ちよつと、シズク。一度にそんな抱えて危ないわよ」

「イリーナ先生まだ残ってたんですね………わっ?! タ、タコ!!!」

イリーナ先生の助けもむなしくノートが教員室内に散らばった。渚さんと殺せんせーがそれを回収する。

「大丈夫? 先生」

「誰ですか? この人は」



殺せんせーが首を捻る。引き継ぎをしていないので知らないのは無理もない。

それと同様に、というかそれ以上に名雪先生が動揺していて、声が裏返っていた。

「そつちこそな、何ですか?! 警察呼びますよ!!」

「待つて! 待ちなさい! WAIT!」

スマホを取り出して110をしようとする彼女をイリーナ先生が後ろから抱きしめて取り押さえる。

鳥間先生が頭を抱えて息を吐く。渚さんは苦笑いして殺せんせーと名雪先生を見比べた。

「殺せんせー。この人は名雪雫。殺せんせーの代理で来た先生で、なゆせんせーって呼ばれてる。で、先生。この人は殺せんせー。百億の賞金首で、月を壊した、らしい」

名雪先生は困惑した表情をする。誰だつて突然目の前に賞金首の超生物がいたらそういう顔をするだろう。殺せんせーは殺せんせーで一般人に正体がバレたことに気がついて何だか震えている。

「正体がバレたからには仕方がない。名雪先生、君にはE組の副担任をお願いしたい」

新たな変化の予感に、私は誰に向けてでもない笑みを浮かべた。

女のはなし。

殺せんせーが茅野の席とぼくの席を向かい合わせにくっつけ、片方に座る。面談や面接というより、尋問みたいな気がした。

「律さんは一時的に開発者のところへ返すことになりました。律さんが何故あんなことをしたのか、渚さんは知っていますね」

「律は……ただある人を救いたかったんです。方法はおかしかったけど、それでも律は……！」

「そのある人というのは、私のことですか？」

なんで、という言葉は口から発せられずに消えた。殺せんせーが真剣な顔で二つの触手を合わせて話を続ける。

殺せんせーには敵わない。

「烏間先生から渚さんと律さんの会話を断片的に聞いたんです。渚さんが盗んだ触手を、律さんが盗み、それを元に触手を再現したと考えるのが自然でしょう。さらに律さんの言葉から、私を殺そうとする輩を彼女が暗殺したのだと分かりました。どうやって気づけたのかは分かりませんが」

烏間先生に聞かれていたのか。そこから殺せんせーが真相にたどり着いた。

ぼくは殺せんせーがそこまで見破れたことに感嘆する。

でも良かった。ぼくが2周目とかいうところまではまだ気づいていないみたいだ。いや、普通気づけないよね。学秀とカルマ君が異次元過ぎるんだよ。

「ところで、渚さんは私を前から知っていたんですか？」

と思つてたらこれだよ！

「”殺せんせー”のことを前から、ですか？」

「いいえ、死神のことです」

呼称を変えて誤魔化そうとしたが、殺せんせーは騙されなかった。それを見て、この人がどこまで気づいているのかを悟る。

二代目の死神が意識の波長を使えたんだ。目の前にいる殺せんせーだって、嘘を吐いたらすぐ分かる。隠せる範囲で正直に答えよ

う。2周目について話すのはまだ危険だ。

「知っていました。助けに行こうと思ったのは教えを乞うためでしたから。死神と殺せんせーが同じ人物だということも、気がついていました」

「何故？ 政府の機密事項に入っていることです。知る人は限られている。それに、死神は渚さんにとっては先生と呼べる人物ではない」  
「どうやって知ったかは秘密です。ただ殺し屋になりたくて、死神に師匠になってほしくて先生と呼んでしまったんです。他意はありません」

ところどころ嘘と真実が混じっていると殺せんせーは気づいているよのだが、特に嘘を指摘することはなかった。

そっか。先生って呼んでしまったから、殺せんせーはぼくが死神の弟子だと勘違いしたのか……あれ？ 何か引つかかる。

あの時の死神はマイク越しのぼくの声だけで年齢を察しているようだった。本当に10代だと断定してたかは分からないが、若いとは感じたはず。それほどまでの洞察力があるのなら何故……

「殺せんせーに1つ聞いてもいいですか？」

「ええ」

「先生はぼくを誰かと勘違いしたと言っていましたよね。それって弟子とか、ですよね」

「……ええ」

そんなことまで知っているのかと懐疑的な目線がぼくに向けられる。

「何で間違えたんですか？ スペイン語がネイティブじゃない人なら他にもいるし、そもそも、せい……」

待てよ。そもそも、ぼくの中の前提が間違っていたんじゃないか？

1周目の記憶から得た知識が全部正しいと誤認していた。律のこどだつてあるのに。

ノックの音で我に返る。ビッチ先生と名雪先生が教室の中に入ってきた。名雪先生は紙コップを2つ持ってきている。2人ともぼくと殺せんせーの表情を見て、シリアスな雰囲気を感じたようだ。

「すみません、おとりこみ中みたいですね。お茶どうですか？」

名雪先生に紙コップを手渡される。中身は冷たい緑茶だった。聞こえていたかな。

ぼくは名雪先生の意識の波長を探る。名雪先生はすぐに殺せんせーの方に移動していった。

名雪先生には殺せんせーにはびくびくした様子でお茶を渡して、ぎこちなく微笑んだ。

「さつきはすみません。ちょっとびくくりしてしまってまともに挨拶できなくて」

「名雪先生でしたね？ 何の教科を担当しているんですか？」

殺せんせーは豆みたいな目を細めて、相手を見定めるような顔をしている。

何で殺せんせー、面接官気取りなんだ……さつきまでのシリアス顔はどうしたの。

「す、数学、です……が、他の科目も教えられます！ 未熟なところもあります。月曜日からよろしくお願いします！」

「素晴らしい！ 私の留守中に誰が代わりに授業をするのか心配していたんですよ」

殺せんせーが名雪先生に饒舌に話しかける。

すっかり先輩面だ。後輩教師ができて喜んでいる。この人が本当に死神だったのかと不思議なぐらいだ。

そう考えていて、いつの間にかビッチ先生がぼくの近くに寄つてきたことに気がついた。彼女は彼女で何か理由があつてここに来たようだ。

「あんたらが教室にこもって出てこないから、シズク心配してたのよ。それで、何があつたの？ 私にも情報よこしなさい」

ビッチ先生が小声で耳打ちする。殺せんせーとぼくが何か隠し事をしてしていると勘ぐっているらしい。ぼくは曖昧に頷いた。一瞬躊躇って小さな疑問を口にする。

「大したことじゃないよ。それよりさ、ビッチ先生って潜入調査するときに男装とかするの？」

「ええ？ そりゃあね。あまり需要はないけど。なあに、あんたまさか男装に興味あるの？」

「違うよー！」

「男装？ もしかして、大石さんは高校で演劇の強いところに入ろうとしているの？」

名雪先生がきよんとした顔で尋ねる。

あ、やばいと思って首を横に激しく振った。

「ないない。ビッチ先生も忘れて！」

「そうなの？ そうだ、イリーナ先生。仕事も一段落しましたし、一緒に買い物に行きませんか？」

「いいわよ。渚、今度手解きするわね」

「え、いいよー」

変な誤解を受けてしまった。

名雪先生はぼくに微笑むと、ビッチ先生を連れて教室を出ていった。冷や汗が出る。

「さて、本題に戻しましょう。渚さん、さつき何か聞きかけていませんか？」

「いえ、何でもないです」

答えは既に出た。あとは本人に確かめるだけだ。

「そうですか。それでは、先生からも聞きたいことがあります。渚さんは何故殺し屋になろうとしているんですか？」

「間違った選択肢を取って、誰も死なせたくなかった。ぼくが殺し屋になれば、みんなを守るだけの力をつけられる。そう思って殺し屋を目指していました。でも。」

律は殺せんせーを生かすために人を殺した。ぼくは何のために殺せんせーを殺すのだろうか。そもそも、殺し屋は本当にぼくが思っているような仕事なのか。人を殺して、その先に何があるっていうんだ。

「君に暗殺の才能があることは前から察していました。技術だけではありません。君には勇気がある。例えば相手が怪物でも、暴力教師でも、クラスメイトでも、臆することなく立ち向かう勇気です。優れた

殺し屋には必要不可欠な才能でしょう。努力によって、それを伸ばさうとしていることも知っています」

殺せんせーの発言に既視感を覚えた。

そうだ、これは1周目の時にも言われた言葉に似ている。

「しかし、それと同時に、君の勇氣は自棄をはらんでいます。イトナ君を助けようとした時もそうでしたね。いつも君自身の安全や尊厳をどこか軽く考えてしまっている。だから自分の命を軽く扱える」

「はい……」

2度も同じことを言われたことに気がついて項垂れる。ぼくは根では1周目から何も変わっていないのだ。

「君の才能は何のために、誰を思っ使われたのか、どうやってこれから使うべきなのか、もう一度よく考えてみてください」

「殺せんせーは殺し屋になるのに反対しないんだ」

「それが渚さんの出した答えなら、反対しませんよ。生徒が行きたい道に行くのを手伝うのが教師ですから」

教室から出て、ふうと息を吐く。廊下を歩きながら、ひたすらさつき言われたことについて考えた。

殺せんせーは見破ってた。ぼくが殺せんせーを知っていることも、殺し屋になろうとずっと頑張っていたのに、今迷いが生じていることも、全部理解していた。

やっぱり殺せんせーはすごいよ。生徒のことをこんなに分かっているなんて。

気を取り直して帰ろうと歩いていると、狭間さんが廊下で本を読んでいるのが目に入った。ぼくを待っていたのだろう。

「狭間さん」

狭間さんが顔を上げる。包帯で右腕を巻いていて、ぼくは殺せんせーから大まかに聞いた痛ましい出来事の詳細を思い出した。

「元氣そうで良かった。腕のこと聞いたよ」

「ええ」

「真犯人が分かったのは狭間さんのおかげだよ」

「ヒントをくれたのは浅野よ。前提を崩せって言われなければ、犯人

が人間じゃないことに気がつけなかったわ」

「え、学秀は知ってたの？ 律が触手を持つてたこと」

自分の顔が強張るのを感じた。いつから、と思考を巡らせる。

いつから学秀は律の目的に気がついていていた？

「犯人を知つてて黙っているみたいだったけど」

「そっか、よく分かった」

LINEを起動して、メッセージだらけのチャットルームに文章を打ち込む。話したいことがあると。

「こうも言っていたわ。この事件の犯人を捕まえても誰も幸せにならない」

狭間さんはぼくが彼に怒ることを察したのか、付け加えた。しかし、それは建前で綺麗事だ。あの浅野学秀がみんなの幸せのために動いていたはずがない。

「大丈夫。ちゃんと話し合うだけだから。律が触手を持つていたことを黙っていたのも、さっさとA組に逃げたことも……」

狭間さんの意識の波長がある言葉に反応して微かに揺れる。ぼくは言葉を切り上げて、狭間さんを見つめる。

そういえば、腕つてそんな簡単に治るものだった。狭間さん、右腕バツサリ切断されていたんじゃないやなかったっけ。

問いただそうか迷つて止めた。狭間さんにだつて隠したいことの1つや2つあるだろう。殺せんせーの判断なら、大きく間違えることはないだろうし。

「どうかした？」

「ごめん、何でもない。とにかく、学秀を問い詰めないと」

\*

教室のドアの目の前で立ち止まる。ドアを開けるのを躊躇して、唾を呑み込んだ。

倉橋さんがドアを勢いよく開けて出てくる。こちらに気づくと嬉しそうに笑った。

「あ、渚ちゃんおっはよう〜!」

「……おはよう、倉橋さん」

いつも通りの満面の笑みに、ぼくは気後れして反応が遅れる。

「そんなところで立ち止まってないで早くおいでよ。今、訓練の計画しててさ〜」

中村さんが腕を引っ張ってぼくを話し合いの輪に参加させる。自然な対応に戸惑いながらも、周りが気を使ってくれているのかと考え直す。

律が犯人つてのも、狭間さんがおおっぴらに言うとは思えないし、ぼくだって犯人扱いされたのを謝ってほしいわけじゃない。あのことはもう忘れよう。

「狭間、腕どうしたんだよ。転んだのか?」

後ろの声は何気なく耳を傾けてドキつとする。振り返ると、寺坂君が狭間さんに腕のことを聞いていた。

「べつに」

いや、おかしいよ。これはどう考えても異常だ。

教室の一番後ろには律の本体が跡形もなく消えていた。殺せんせーから律が開発者のもとに戻されるとは聞いていたけど、みんなまるで、最初からいなかったみたい……まさか。

「ねえ、倉橋さん。昨日のことだけどさ、みんなもう怒ってないのかな?」

「昨日……ごめん、何のこと?」

倉橋さんが首を傾げた。ぼくは席を立ち上がる。読書している狭間さんがため息をついてこちらを一瞥した。

「狭間さん、ちょっといい?」

「今いいところなんだけど」

狭間さんは文句を言いながらもぼくと一緒に教室を出てくれた。旧校舎を出て、裏山の入り口ぐらゐまで歩いていく。

「あんたいつたいたいどこまで行く気?」

彼女が制止して、ぼくは振り返った。

「おかしいよみんな。何でみんな事件のこと忘れてるの?」



「分からない。でも、ここにいるみんなは、事件のことをもう誰も覚えていない。殺せんせーが捕まったことも、渚が濡れ衣を着せられたことも」

「誰がそんなこと」

「渚が何かしたわけじゃないのね」

ぼくは学秀のことが脳裏によぎったが、彼にこんな大がかりなことをすることはさすがに不可能だと思い直した。

これができそうな人をぼくはもう一人知っている。あの場において、殺害が不可能な律を完全に閉じ込めたあの人なら。

「急に教室から連れ出したりしてごめん。腕のこともあるのに……」

「気にしなくていいわ。私も、今回の件は腑に落ちなかったもの。教室に戻りましょ」

教室に戻って、何かあったのかと質問攻めにする茅野を上手くかわし、ぼくは律のことについて考えるのを止めた。

放課後に学秀と話す約束をしている。それまでは、いったん忘れよう。

あまりに色んなことがあったからだろうか。ぼくににとって、いつもの平和な日常は眩しすぎた。ただ一つ、小さなしこりがぼくを付きまとう。

「律さんはメンテナンスで欠席です。それから、木村君と、イトナ君も今日休みですか」

殺せんせーの言葉で現実を引き戻される。

イトナ君には悪いことをしたかな。戻ってきた律が偽者だったら、彼は何を思うんだろう。

「そうみたいです、先生」

名雪先生が答える。名雪先生は殺せんせーとは一定の距離を保っている。どことなく震えている気もした。

「えっと、今日のプリントを——ヒヤッ！」

「雫先生、大丈夫か？」

鳥間先生が転倒した彼女に声をかける。

ん？

クラス中の空気が凍った。倉橋さんがあんぐりと口を開けている。「ちよつと緊張してしまつて。大丈夫ですよ、惟臣先生」

名雪先生が烏間先生の腕に軽く触れる。ボディータッチと言つていいのか分からないぐらいさりげなかった。ビッチ先生のあの派手な露出よりよつぽどマシなアピール。

んん??

「ビッチ先生、これはちよつとヤバいんじゃない?」

「ビッチ先生今日遅刻?」

隣で中村さんが神妙な顔で二人の様子をガン見している。周りを見渡すと、女子たちが中村さんと同じような顔で何度も頷いていた。

「これ、陽菜乃ちゃんから」

岡野さんから折り畳まれたメモを渡される。広げると「昼休みお弁当一緒に食べよー!」と書かれていた。倉橋さんは反論を許さない笑みでこちらを向いている。これは行かないとビッチ先生の弟子仲間としての友情にビビが入りかねない。

間違はなく、烏間先生についてだらうなと苦笑する。実際、その考えは合っていた。

「なゆせんせー、烏間先生のことどう思つてるのかな?」

昼休み、矢田さんはお弁当を片手に言った。隣の席には矢田さんがいて、向かい側にぼくと茅野が座っている。ちなみに茅野はビッチ先生とはそこまで親しくないが、ぼくが道連れにしようとなつてきた。倉橋さんは恋愛関係のことに対しては歯止めが効かなくなるので、ストップが必要だ。

「んー、あれは狙つてると思う〜」

倉橋さんが感情のこもっていない笑顔で言った。ぞくつとして、思わず箸で掴んでいた卵焼きを弁当箱の中に落としてしまう。

「狙つてるつて?」

茅野がとぼけたように首を傾げる。ぼくはおもむろにスマホを取り出し、鏡で前髪を直すふりをしてLINEの通話ボタンを押した。

「結婚相手にだよ!!」

矢田さんと倉橋さんが同時に大声で言う。周りの生徒たちが一斉

に振り返っても、お構いなしである。

「ええ……さすがに出会って早々そんなこと考える？」

ぼくがやんわりと否定すると、倉橋さんがくわっと目を大きく見開いた。

「烏間先生ほどかつこいいんだよ?! 結婚したいって思っちゃうよ」

「あ、はい」

否定したらしたで怒られてしまいそうな雰囲気、何とも言えない顔で同意する。

「そうだね。あの愛されワンピに下の名前を呼ぶあざとさ。そしてさりげないボディータッチ。たぶんなゆせんせーは婚活女子なんじゃないかな」

こんかつじよし……とは。愛されワンピって……言われてみればいつもかわいい洋服着ているけど。雪村先生やビッチ先生より随分男ウケしそうではあるけど。

「いやいやいや。ないよ」

「それに、烏間先生の方も下の名前で呼んでたよね」

「烏間先生はビッチ先生のことイリーナって読んでるから」

「あのねえ、渚ちゃん。外国人の下の名前ってなんか呼びやすいし、呼ぶのも分かるじゃない。でも、日本人女性の下の名前を呼ぶってかなり違うよ?」

それは確かに。ぼくは苗字で呼んでほしくない事情があるから名前呼びが当たり前だけど、他の人からしたら仲の良い人たちしかしないものなのだろう。

「あーもやもやする!」

「私も。ちょっと私たちなゆせんせーに直撃してくるね。渚ちゃんたちは烏間先生が来ないように見張っていて」

矢田さんがテキパキと指示をし、ぼくたちは頷きあった。ぼくと茅野はドアの前で倉橋さんたちが名雪先生の方に歩いていくのを見守る。名雪先生は倉橋さんたちに気がつくつと、耳につけていたイヤホンを外し、優しそうな笑顔を浮かべた。

「倉橋さん。矢田さん」

「なーゆせんせ！ ごめん、お昼休みの邪魔しちゃったかな？」

「いえ、音楽を聞いていただけなので大丈夫ですよ。勉強の質問ですか？」

名雪先生が机の上のお弁当を片付けながら、ペンの準備をする。矢田さんは倉橋さんに目配せして、倉橋さんが頷いた。

「ねーねー、先生って烏間先生のことどう思ってるの？」

ちよっ、倉橋さんど直球！

「惟臣先生？ ああ、かっこいいですよ。防衛省に勤めているエリートって優良物件ですし、真面目なので浮気しなさそうなのも高ポイントです。付き合ってる人がいなさそうなので、ガンガンアピールしてまずけど、気がついちゃいましたか」

思ってたよりガチな返答が来てしまったからだろうか。名雪先生の言葉に矢田さんの目尻が引きつっている。狙っているかも、どころではなかった。完全に獲物を狙うハンターの発言だった。

「……なゆせんせー肉食だね〜」

倉橋さんが呆気にとられた様子で呟く。彼女も名雪先生がこういう答えを返してくるとは想像していなかったのだろう。ぼくも全く予測していなかった。

倉橋さんにこういう返しをするんだ。強いなあ。

「こそこそ隠れて何してるんだ」

ドアをピシヤリと閉めて隠す。噂の当人だ。

「烏間先生」

見つかった。覗くのに夢中で後ろをよく確認していなかったせいだ。

烏間先生にはいまだに怪しまれているからなあ。この前はかなり強引な方法で解決しようとしたし。ここは正直に質問したいことを聞いて、ぼくが普通の女の子みたいにゴシップ好きだとアピールしない。

「烏間先生に質問があったんです。名雪先生のこと、どう思っていますか？」

茅野がぼくに対して、言っちゃうんだと苦笑いしている。烏間先生

は少し面食らったような顔をしたが、スラスラと返事が返ってきた。「注意力散漫なところが見受けられるが、奴やイリーナに比べたらずっと常識人だな。口が堅くて助かった。何故そんなことを聞く」当たり前だが、同僚目線の回答が返ってきた。烏間先生も鈍いから、裏で生徒に噂されているとは思っていないのだろう。

「気になったりしないんですか？」

少し茶化すと、烏間先生はふうと息を吐く。

「奴を殺す戦力になりえるのかは気になるがそれぐらいだ。変な想像をすると今日の訓練を3倍増しにするぞ」

「すみませんでした」

凄んで見せてはいるが、どこか安心しているようだった。まだぼくのことを少し怪しんでいるのだろうか。

「かわいい生徒たちじゃないですか。そんなに怒ってはいけませんよ？」

クスクス笑いながら、名雪先生が可愛らしく注意した。

ドアの前での話は聞こえていたようで、倉橋さんと矢田さんがこつちを見て口パクで失敗したことを伝えている。烏間先生はと言うと、名雪先生の言い方にどう返すか迷っているようだった。ビッチ先生とは違うノリに戸惑っているのだ。いつの間にかビッチ先生に毒されていたらしい。

「すまない」

「殺せんせーを殺す戦力、ですか……」

名雪先生は人差し指を顎に当てて、考え込むような仕草をしている。考え事をやめると、彼女は寂しそうに微笑んだ。

「私の家族は殺し屋に殺されました」

それはあまりに突然の告白で、烏間先生だけでなく、茅野まで唖然とした顔で名雪先生を見つめた。

「え……」

「だから、私は人間でも、超生物でも、賞金のためであれ、人を殺すこととは無理です。お役にたてなくてすみません。暗殺には加われません」

本心から出た言葉だった。ぼくは名雪先生の表情をじっと見つめた。

「もともと生徒たちの教育のために雇った教師だ。そこは気にしなくていい」

鳥間先生は思ったよりずっと優しい言葉を投げかけた。

「本当にすみません。でも、教師としてみなさんの役に立てるよう頑張るので、これからもよろしくお願いしますね、惟臣先生」

「ごちそうさ、頼りにしている」

鳥間先生がその場から離れると、名雪先生はぼくたちの方を向いて内緒話をするように手を口に当ててこそっと打ち明ける。

「あ、名前呼びは本人に頼みました。零って名前、結構気に入っているんです。皆さんのあだ名も好きですけどね！」

ウインクしてその場を立ち去る先生はとてもかっこ良く見えた。

「なんか悪いこと聞いちゃったね……」

「なゆせんせーにそんな過去があったなんて意外かも」

「そつかくやつぱり本人に頼んだ方がいいよね！」

一人倉橋さんだけは全く別のことについて考え込む。あまりに深刻そうなので、心配していると彼女の瞳がぼくを向いた。

「あのね、渚ちゃんが良ければなんだけど……私たちのこと名前で呼んでほしいのー！」

「え、ぼくにっ？」

「だって渚ちゃん、仲良くなってもさん付けで距離感じるんだもん。

みんなは渚ちゃんって呼んでるのに、こっちはさん付けなんて不公平だよ。カエデちゃんのことも前は名前呼びしてたのにまた戻ってるし」

「あ……ごめん茅野」

「私は気にしてない……って言ったら嘘になるけど……大丈夫！　うん」

茅野が自分に言い聞かせるように言った。心なしか表情が無くなっていく。

それはめっちゃ気にしている人の態度だよ。茅野の名前呼びはな

んとなく気恥ずかしくて、記憶が戻ってすぐに止めたんだっけ。

「カエデと陽菜乃？」

茅野と倉橋さんが目をキラキラさせて何度も頷いている。矢田さんがまさか忘れていないよねと圧をかけた笑みを浮かべた。

「渚ちゃん私は？」

「桃花」

「うんうん」

満足そうなる3人を前に、顔が真っ赤になっていく。呼んでいるこつちのが恥ずかしい。

「やっぱり烏間先生って誰とも付き合わなそうだよ。イリーナ先生も望み薄かな」

夏休みにE組がした努力も虚しく、烏間先生とビッチ先生の距離は一向に縮まらない。ぼくたちは嘆く一方だった。

「付き合うならイリーナ先生にしてほしいけどね。ビッチ先生なら許せるかなあ、ギリギリ」

「それあんまり許してないんじや」

「弟子たちが集まって何話してるのかしら？」

ビッチ先生が颯爽と現れた。昼休みに登校するなんて完全に遅刻だが、彼女に遅刻がいけないという概念はないようだ。

「イリーナ先生！ あのね」

「だめだよ、陽菜乃。これは言わない方がいいって」

「名雪先生は烏間先生のことが好きなのですねえ。三角関係！ これは小説のネタに使えそうですねえ。ヌルフッフッフ」

ビッチ先生の横で殺せんせーがニヤニヤしながら、メモ帳にペンを走らせる。ぼくたちはビッチ先生の表情を恐る恐る盗み見る。

「……そう。シズク、烏間が好きなのね」

寂しそうな微笑だった。彼女の波長は諦めの色に染まっていて、既に勝負を降りようとしているのが分かった。一般的な女性から逸れた生き方をしているビッチ先生は名雪先生には勝てないと思っってしまったのだろう。

「殺せんせー、空気読まなすぎー！」

「ほんとだよ。ビッチ先生のが可能性あるのに。なゆせんせーには絶対負けないもん」

倉橋さんと矢田さんがぶんすか怒っているのに対して、ビッチ先生は感動

「あんたたち……私はいいい弟子を持ったわ」

「烏間先生は堅物だから釣られないけど、イリーナ先生のが胸大きいし」

「そうそう。烏間先生は釣られないけど、ハニートラップも上手いもんね！」

「あれ？」

倉橋さんと矢田さんは言っていて気づいてしまったようで、2人で微妙な顔をする。2人の横でビッチ先生は拳を強く握りしめた。ぶるぶる震えている。

「烏間に効かないなら意味ないじゃない！」

そう。あの烏間先生には巨乳もハニートラップも効いているか怪しい。ビッチ先生のアドバンテージは一気に消えていった。

「ちよつとその超生物。2人がどんな様子だったか教えなさいよ」

「にゅやっ！ イリーナ先生顔怖いですよ！」

「何ですって?!」

「あはは……ぼく本校舎行ってくる」

「私教室行ってるね」

ぼくとカエデが示し合わせて一目散にその場を去る。触らぬ神に祟りなしだ。旧校舎を出て、裏山の方に向かう。

さて。制服が破けない程度にフリーランニングの練習でもするか。靴だけ運動靴に変えてと。

ストレッチをしながら、本校舎までの最短ルートを頭に思い浮かべる。しばらくの間フリーランニングの練習をしていなかったからか、体が鈍ってしまったようだ。

勢いよく踏み出して、木に飛び移り、そこから崖を飛び越える。本当は制服でフリーランニングの練習をするのは禁止されているのだが、見つからなければ大丈夫だろう。



「いつもこんな練習しているんですか？」

背後から声が聞こえて、ぼくは足を止めた。振り返ると、名雪雫がニコニコ顔で立っている。声をかけられるまで、気配に気づかなかつた。

でも何でここにいるんだろう。追いかけて来たのかな。

そうだ。今なら。

「何か聞きたそうだね」

先生は表情を読んで、ぼくに質問させるように誘導する。

「先生、こんな所で聞くのも何なんですか？」

「大丈夫だよ。周りには誰もいないから」

彼女の言う通り、辺りには人の影すら見えなかった。あの素早い殺せんせーも、ビッチ先生に追いかけて回されているはずだからここにはいない。人がいない所で大事な話をするのは当たり前のことだ。殺せんせーの前で少し油断したけど、今度からは2度とああいう失敗はしない。

でも大丈夫かな。殺せんせーは聡いから、ぼくの言おうとしていた言葉に気づいたかもしれない。

それはまずいな。

彼女に聞こうとしていたことは違うことだったのに、考え事をしていたからか、ぼくの口からは全く違う台詞が出た。

「死神せんせいって女の人だったんですね」

目の前の死神はぼくの言葉に不敵な笑みを浮かべた。